石川八朗
今泉準一
鈴木勝忠
波平八郎
古相正美
共編

宝井其角全集

編著篇

勉誠社刊

はしがき

本書は、『宝井其角全集』の名で、其角の作品及びその言動等を知り得る資料を次に記す条件の下で可能な範囲で集めて一書としたものである。

条件の第一は、其角の真蹟と明らかに断定し得る色紙・短冊・懐紙等、また句締のある俳諧点で、個人所蔵等の現存している資料に関して、である。また、真蹟とするには疑義が生じるが、間接的には其角を知り得る資料となり得るものがある。後者を含めて、現存が知られる諸資料で、これらのうち、未公開のものは、他日の公開を期待し、本書には入れていない。

条件の第二は、其角没後の諸文献の中で、其角の作品及びその言動を知り得る資料もきわめて多いが、これらは一定の範囲にとどめて、他は割愛したことである。

条件の第三は、当然のことに、見落とした資料も多いであろう。第一の条件では、編者が承知の上での割愛である。だが、このこと自体が編者に他の知られざる資料の存在を予想させるし第二の条件の場合も同様である。さらに、編者の寡聞のゆえの見落としもあろう。この第三の条件を含めて、他日の補遺に期待したい。

今日まで、この種の書としては、大正十年（一九二一）刊、勝峯晋風編『其角全集』があるが、その後七十余年、その間、斯界の研究進展は、同書の本文校訂の不備を是正し、新出資料を増補した新しい其角資料集の出現を必要とする状況にある、と言ってよいであろう。本書は、この状況の打開・解消の一助となれば、との思いから発

して成ったものである。

本書の公刊によって編者の希望することは、この上述した条件下での一書が、その第一は、まず其角を、ついで其角を中心とした江戸俳諧の実情を知る資料の提供、その二は、これにより其角研究また俳諧史研究の上で、其角に関する部分の資料が一書に集められてあるために、いままで研究者が各自の資料収集によって行われていた労の軽減になるであろうこと、その三として、其角出現以降の江戸時代の諸文芸に見られる其角に関する作品・言動等が本書の索引を通じて、実否・出典等が比較的容易に確かめられること、その四として、其角没後の資料も不十分ながら収録してあるので、江戸時代の其角受容史の概略も多少なりともこれを通じて知り得ること、その五として、本書は研究者を対象として作成されてあるので、上述したように、今後も其角資料は数多く出現することが予想されるが、本書が追加・補訂されて一層正確・完全なものになれば、ということであり、本書公刊によって右の希望達成の一助となれば本書作成の目的も達せられることになろう。

＊

本書は、以上の趣旨・条件の下ですでに述べたように宝井其角の作品およびその言動を知り得る資料を集めて一書としたものである。

本書は、編著篇・年譜篇・資料篇・索引篇の四篇に区分してある。

編著篇は、其角の編著に成る俳諧集の全文を年代順に記載し、巻末にそれぞれの俳諧集の解説を兼ねて、「解題」と題して付載して一書とした。

年譜篇は、其角の閲歴を年代順に記したものであるが、上述したように其角の没後に成った諸書にも、その作品、言動等を知るものが多く、その主要なるものを合わせ記し、また必要と思われる範囲で、随所に注を加えた。

資料篇は、其角の編著以外の、其角の作品・言動等を知り得る諸資料を集めた。資料の典拠となる文献名等はその成立年次に従って、年譜篇に一項として記載し、その年次順に配列した。

索引篇は、以上三篇に載る「発句・付句」「人名」、および「語句・事項」の三項目に分けた。

編著篇・年譜篇・資料篇・索引篇のすべてに最初に「凡例」として、必要事項を記載した。

つぎに、本書成立までの経緯について簡単に述べておきたい。本書は文字通り五人の共編に成る。『編著篇』の第一の仕事は底本の選定にある。これは石川を中心に、今泉・鈴木が協力、底本選定後、「解題」素稿を石川が書き、本文素稿を今泉が作り、初校を五人に配布、底本プリントを基に校正、これを今泉が受け取って、再校正、文字の読み等で意見の異なるものは、本人に連絡、相談の上、時には一つに統一、また意見のわかれるものは凡例に記したように傍に併記した。この今泉の作業は二校後、古相が中心となり、波平が協力という形で進められた。『年譜篇』『資料篇』は今泉を中心に、石川・鈴木の増補を入れ、波平・古相の協力で、素稿を作成した。『編著篇』では底本の選定に多くの時間と労力を必要としたが、これもまた本書の成るまでに多くの時間が経過している。今から数えると、三十年余も前のことになる。今泉・鈴木が中心となり、主として当時はまだ若かった石川もまたその一人であった研究者たちが協力して、『其角年譜草稿』・『稿本其角連句集』（ともに私家版）の二書を作成したことに始まる。その後もこの作業の増補は続けられたが、一方、これらの成果も取り入れ、さらに多くの新資料を加えた石川真弘氏の編に成る『蕉門俳人年譜集』（一九八二、昭和五十七年刊）の中の「宝井其角年譜」が出版された。これによって編者たちの作業も一段の進展を得た。以後、これに五人が知り得た新しい資料をつけ加えて行く作業となった。

最初の予定は、これも『編著篇』と同様に、初校を五人に配布、校正・増補のつもりであったが、初校段階で大

きな資料の見落としに気づき、これを加えた二校が届いたとき、すでに『編著篇』の二校校正終了、それまでに半年ほどの時間がかかり、この間にまた其角の新しい資料の発表があり、これを加えた三校となって五人に配布、校正、増補という形での作業となった。五人の校正・増補等はすべて古相に集められ、波平が協力という形で進められた。

『索引篇』は、古相・波平が作成した。「発句・付句」および「人名」の索引作成中、『編著篇』『年譜篇』『資料篇』の最終稿の再点検および「語句・事項」の索引に必要と思われる項目の選定を石川・今泉・鈴木が行い、これに古相・波平が必要と思われるものをさらに加えて、古相・波平の手によって作成された。

さらにつけ加えて述べておきたいことがある。その一は、できるだけ原典に忠実に現在慣用の文字に翻刻するように努めたが、上述のように文字の読み等に意見のわかれるものが生じる事実が最もよく示しているように最終的には原典そのものを提示して読者に判定していただくのが最善の方法であろう。幸いにして現代は印刷技術が発達して影印本にして発行することが可能である。本書のすべてをということは不可能であるにせよ、『編著篇』だけでも底本選定終了後まずこの影印本を発行、その後本書の発行、となれば編者の精神的負担も軽くなり、読者も不安なく読むことができたと思われる。時間の関係上、このことはできなかったが、将来もし可能であれば、順序は逆になってしまったにせよ、せめて『編著篇』だけでも影印本発行ができれば、と思っている。

その二は、資料篇のいくつかの例外を除けば、底本通りに活字翻刻をし、一般の読者に読み易いように、底本にない句読点・濁点等を編者が付すべきかもしれないが、あえてこれをしなかった。これは編者たちの最初の作業開始の際に問題になったが、句読点・濁点を付載することは本文の読みに関係することで、意見のわかれるところが、文字の読みの場合より、一層多くなるであろうし、前にも書いたように原則としては研究者を対象として作成する

ものであるからできるだけ原典に忠実に、との趣旨からこのようにした。ただ、其角に深い関心を持っておられる一般の読者は、すでに勝峯晋風編『其角全集』他、既刊の其角の作品集を読んでおられる方が多いであろうし、句読点・濁点の付載によって読み易いというより、そのゆえに迷われることも多いであろう。編者のこの点の意図も御賢察いただければ幸いである。

右のような趣旨・条件・経緯の下で、とにかく刊行されることになったが、その間に非常に多くの恩恵を受けている。今日までの研究者の業績が基になっての作成であるから、これにまず感謝しなければならない。とくに上述したように、そもそもの、本書の『年譜篇』『資料篇』の発端となった『其角年譜草稿』『稿本其角連句集』作成に参加して下さった方々には、石川・今泉・鈴木にとつては、感謝とともにいまは懐かしい思い出でもある。このことをも含めて、これらの恩恵に謝することはもちろんのことであるが、本格的に本作業に従事するようになってからもまた多くの方々から直接の恩恵を受けている。

『編著篇』の底本選定に当たって、保坂三郎氏の御蔵書の披見の許可をいただいたことにまず御礼を申さねばならない。このことによって底本選定作業が大きく飛躍した。これは『編著篇』「解題」の書誌の項を見るならばただちにおわかりのことと思う。

ついで、これはすでに公開されてあるものであるが、岡本勝氏の『雑談集』（勉誠社文庫19）を底本とすることに同氏の御快諾をいただいた。深くこれも御礼を申し上げなければならない。

同様のことに、底本とさせていただいた柿衞文庫・天理大学附属図書館綿屋文庫に感謝の意を表させていただく次第である。

『年譜篇』では上述したように、石川真弘氏の御編著に多大の恩恵を受けたが、それだけではなく、直接氏から

種々の御教示を得た。氏の御教示により、現存資料で披見可能のものはすべて原典に当たって再点検、これを典拠に掲載したが、われわれもそうであったように、長年月にわたっての資料収集の間、個人あるいは書肆等の好意により、筆写、これが現在所在不明となるなどのことにより、原典に当たっての確認不可能になっているものもあり、これらは□印にしてそのまま掲載させていただいた。厚く御礼を申し上げねばならない。

『資料篇』でも多くの方から御恩恵を受けている。周知のように、芭蕉関係のものは、文献学研究の上でも高度の進展が見られる。これらの研究成果をそのまま利用させていただいたものも多い。中でも『田舎の句合』・『鶴のあゆみ』・『初懐紙評注』は、『古典俳文学大系』に載る本文を編者井本農一氏・堀信夫氏の御許可を得て、そのままその成果を利用させていただいた。また、復本一郎氏御所蔵の『橋南』の其角関係の部分を原本をプリントして御送付いただいた御親切、中西啓氏の『近世文芸資料と考証』Ⅴに載る「其角伝書「正風二十五条」」の全文掲載の御快諾、雲英末雄氏の『俳家奇人談』・『続俳家奇人談』の原典の御借覧、など、これらにも深く御礼を申し上げなくてはならない。その他、『校本芭蕉全集』・飯田正一氏編『蕉門俳人書簡集』やまた、『連歌俳諧研究』・『俳文藝』・『近世文芸資料と考証』など前にもちょっと触れたように、今日まで研究業績によって本書は成立し得たもので、これらに対してもその一つ一つに御礼を申し上げなければならない。また『編著篇』のところでこれもまたすでに述べたように『資料篇』においても柿衞文庫・天理大学附属図書館綿屋文庫をはじめとして、東京大学図書館洒竹文庫・同竹冷文庫、国文学研究資料館等々、大学図書館・同研究室、各地の公共図書館等に大変御世話になった。このこともまた深い感謝の気持で申し添えなくてはならない。

最後にもう二つの感謝のことばを申し上げねばならない。稿本のままでもよい、できるだけ正確な其角資料集をと考えていたが、一方あるところで区切りをつけて、活字にしておきたい、と考えてもいたとき、偶然にもこのことを知った勉誠社の社長池嶋洋次氏が同社で出版を、との話があり、これは編者の心の負担ともなったが、これが

なかったら、本書のこのような形での成立はなかったであろう。とても採算には合わないであろうこのような書の出版の池嶋氏の快諾に感謝のことばを申し上げなければならないが、合わせて直接の任に当たって下さった加曽利達孝氏にも感謝のことばを申し上げなければならない。あるところで区切りをつけて、活字にと簡単に述べたが、資料の取捨、また其角書簡の真偽に関して編者の意見が分かれたり、さらには新出資料・見落とし資料の加入等で、初校から再校の段階で、削除・加入等、大変御迷惑をかけたばかりでなく、これらのことで決定しかねての遅延に対して、催促ではないが、進行状況上の問い合わせ電話などに感じさせられた氏の御熱意、いずれも本書成立の大きな直接的推進力となった。

もう一つは文部省から「一般学術図書」として「研究成果公開促進費」の名の下での補助金の交付を受けたことである。このことは、いま書いたように、とても採算に合わないであろうこのような図書を出版してくれた勉誠社への経済的支援になるという意味でありがたかつたが、またこれは、本書の出現そのものに価値を文部省当局が認めたという意味で、この作業に従事していた編者の喜びであった。さらには、すでに述べたように、あるところで区切りをつけて活字にしておきたい、しかしこの区切りをつけることが容易なことではない。これが、このことによって決定してしまった。もしこのことがなかったら、新資料の出現等で延々と続けられて相変わらずの作業の続行となっていたかも知れない。右のような意味でも、まことにありがたいことであった、と言わなければならない。

冒頭のところで、三つの条件の下での現段階において可能な範囲で集められた其角資料集である旨のことを述べたが、この三条件は、どんな資料集でも、当然具有している条件で、ことさらに言わなくてもよいことであるかも

知れない。しかし、以上に述べたことで御理解いただけたと思うが、やはりこの三条件をあえて申し述べ、この三条件がさらに軽減されるべく、今後の補訂・増補により、本書が一層完全なものになる土台となれば編者にとって最大の幸せとなる。

平成六年一月七日

編　者

編著篇　目次

凡例

一　本篇は、「はしがき」に記したように、其角の編著に成る俳諧集の全文を成立年代順に記載し、巻末にそれぞれの書の解説を加えて一篇としたものである。

二　改行・空白等は原則として底本通りとした。ただし、改行の意図のないと思われる文章は改行しなかった。

三　改丁は原則として記さなかったが、『五元集』の元・亨の巻のみは、改丁に意味があると思われるため（　）を付して記載した。

四　すべて現在慣行の文字に翻刻して記した。翻刻は次に示す要領に従った。

1　ひらがな・カタカナはすべて現行のものに改めた。ただし「ゐ(ヰ)」・「ゑ(ヱ)」・「を(ヲ)」（格助詞を含めてそれ以外のものも）は、すべてそのままに記した。

またひらがなの意識で書かれてある「ハ」・「ミ」・「ニ」等は、すべて「は」・「み」・「に」等にした。

ひらがなの連帯字「ゟ」・「と」・「ゟ」等は、それぞれ「より」・「こと」・「さま」等に改めた。

2　句読点・濁点はすべて底本に従い、私に改めることはしていない。

3　漢文の送りがなは現行のカタカナにし、また「𪜈」・「〆」・「ヿ」などもそれぞれ「トモ」・「シテ」・「コト」等に改めた。

なお、返り点は底本通りにして、これも私に改めることはしていない。

4　漢字は次に示す原則に従った。

ア　常用漢字表にある漢字は草書体・行書体・楷書体、すべてこれに従った。また常用漢字表にない漢字は現在正字あるいは標準字体とされている楷書体に従った。

イ　現在通用していない正字・旧字、およびいわゆる異体字・俗体字等はアの原則に従って改めた。

例　盗→盗、窻→窓、粮→養、體・躰→体、曙→曙、灵→霊、哥→歌、脉→脈、虵→蛇、霄→宵、迯→逃、耻→恥、穐・穐・烋→秋、裝→装、仇→仇、鞁→鼓、籔→藪、等。

ウ　同訓異字・国字は改めることをしていない。

例　浪・昏・烟・寐・坐・礒・皃・泪・扣・桒・菴・八・巾・艳・艸・薗、等。

エ　固有名詞も、前記ア・イ・ウに従ったが、皷角・穐扇録等はそのままとした。

オ　明らかな誤字は正字に直したが、正字で書かれた誤記または誤記ではないかと思われるものは改めることをせず底本にある通りに記載し傍に（マ）と記し、衍字の場合はその文字を記して（衍）とした。

例　贈る（オクル）（ル、衍）　鍾（鐘）　転（博カ）

また、その他に、字の横に（　）で括って記した文字は以下の通りである。

①本文が誤字で訂正した文字。

②これまで通例で読まれてきた文字。

③本文が判読し難く、このようにも読める文字。

カ　音訓記号の傍線、熟語記号の中線は底本通りに記載した。

キ　おどり字は、漢字の「〻」・「ヽ」は「々」に改め、ひらがな・カタカナは「ゝ」・「ヽ」とし、二字以上の「〱」、及び「野ゝ」等は、そのままとした。

ク　なお、彌・龜・蘆・讃の四字は、それぞれ弥・亀・芦・讃とした。

虚栗（みなしぐり）

みなし栗　上

（書き題簽）

虚栗集

改正

礼者敲（タヽク）レ門（ヲ）しだくらく花明か也　幻吁
賤よ春餅に蔦はふ宿ならん　三峰
初えほしかさりの床やむら鳥　玉尺
先伴に太山おろしや門の松　残詞
春-柴（ン）負（ニ）レ葩（フヲ）木深き宿を山路哉　翠紅
餅ヲ焼て富を知ル日の転士（博カ）哉　麋塒
句ひねたり今年廿五ノ翁　文排
髭隠るやと蘚にかさす藪柑子　杉風
いてや春地なし小袖のかいとりせる　信徳
月は更科もあれ我蓬萊の朝日守　友静
釈迦逃て弥勒進ます国の春　春澄
山松やうらの藪より今朝の春　千之
六尺袴着て塵見帰らし松の門　千春
春ことに松は食くふて年ふるや　卜尺
春得たり人たり殊に男たり　揚水
春ヲ何と凩のごまめ時雨の海老　嵐蘭
餅の室根深を蘭の薫リ哉　嵐竹
海老臥竜餅をうかつに玉あらん　北鈍
屠蘇ふらば傘すてん若時雨　楓興
朝明のはつねの関や竈守　李下
餅の島こまめの白蛇眠りけり　洗口
初礼や富士をかさねて扇狩　枳風
代ヲ様ス銀-池に鴻の觜（ハシ）鈍し　仙化
民の戸や松に餅さく百代（モヽカヘリ）　柳興
初なぎやしらけの島の空セ榧　嗒山
花申せ吉野三味線国-栖鼓　才丸
　烟の中に年の昏けるを
霞むらん火々出見の世の朝渚　似春

天和三年

試筆

鶴さもあれ顔淵生(イキ)て千々の春　其角
身の正月ヲ屈原が酔　嵐雪
花に行秋はさびしき男にて　藤匂

其　二

浦島をあやまるや世の若戎　同
塩鯛は死ヲもつて祝はれ　其角
芹炊(カシ)く盞は夢の器　嵐雪

其　三

今朝春の奥孫もあり彦もあり楫ヲ富(トム)　同
杖こゝろむる梅のかけはし　藤匂
三線の及第(キウタイ)蝶の冠して　其角

とゝはやす女(メ)は声若しなつみ歌　嵐雪
芋室の雪間や寒き下若菜　言籬
玉うとのうつくし苣の早苗の薄緑　杉風
情うるや都は雪のはつよめ菜　勝延(いせ)
何故(カツ)渓辺ノ双白鷺
无(キ)憂(ヘ)頭上(ニモ)亦垂(タルル)糸(ヲ)
髪あらふ鷺芹とかす沢辺哉　其角

小袖着せて俤匂へ梅がつま　同
追鳥や梅枝に息をたすけたる　千春
うくひすのよぶかあやしの薛売　翠紅
鵠日(ツルハ)不(ニシテ)浴(ユアミセ)白(ク)
烏日(ハ)不(ニ)黔(シテクロメ)黒(シ)
川烏白うを浴せすして白し　楓興
漁消てしらぬひの佃魚(ツクタ)白し　全琴
浪ヲ焼かと白魚星の遠津潟　爨塒
雪を染て白うを流せ冬菜川　嵐朝
白魚は朧にて海雲を晴ル、篝哉　翠紅
しら魚の昔汀の鷺の消かへり　心棘
梟(ケウ)朽て釘の角くむ芦へ哉　黄吻
芦のあやしく蝸牛を角のかきほ哉　忘水

在原寺にて

美男村の柳はむかしを泣せけり　皷角
うくひすを魂(タマ)にねむるか嬌(タヲ)柳　芭蕉
仮に風(フ)女裾(ユカタ)かさうか雨柳　杉風
昭君の柳をさんや塘(ツヽミ)かな　才丸
柳ざれてあらしに猫ヲ釣ル夜哉　木因

むらつはめ柳におつる柱（コトヂ）かな　四友

川風に夕日やすかすつはめ網　藤匂

柳にはふかでおのれあらしの夕燕　嵐雪

傘にねくらかさうやぬれ燕　其角

袖つはめ舞たり蓮の小盞　暁雲

声北におもかけのみか白鷺　羊角

行雁や見のこす麦の花盛　在菘

友嘶（イバ）ふ駒の労（ツカレ）やすらん雲雀笛　野笛

女にかはりて

なれも恋猫に伽羅焼てうかれけり　嵐雪

愛あまる猫は傾ｰ婦の媚（コビ）ヲ仮（カル）　才丸

恋守や猫こさしとは箱根山　東順

不生不滅の心を

海棠の鼾ヲ悟れねはん像　其角

茎立ヲ折てさとるに早し涅槃粥　言水

寒食

木食も香炉に烟なき日なり　皷角

寒食の日旅人たばこに飢つらん　藤匂

寒食や竈下に猫の目を怪（アヤ）しむ　キ角

俤か貴ｰ妃のなやめる朧月　四友

春雨偶興

春の餅かひて嵯峨のゝ秋と誰レ　其流

烏賊のほり反（ソレ）て野守の鏡かな　工迪

三陽

醴（アマサケ）に桃ｰ裏の詩人髭白し　其角

薪ヲ匂ふ山吹の粥　李下

栄（エイ）ｰ泉の蛙小判に身をよせて　柳興

其二

けふそ背子（セコ）土圭の舟に花かつら　同

さゝ波うたふ蝶の釣竿　其角

風ｰ心扇つはめやくるふらん　李下

其三

僧の謂シうとは廬山の桃の時　同

蕨は筆を握（ニギ）ルつれ〴〵　柳興

春雨を三とせ敵に囚（トラ）はれて　其角

雛ヲ抱てうたゝね桃に契リけり　其流

宵月の花のかゞりや夜遊雛　藤匂

桃園(ソノ)の猫かひざらせひな車　露章
ひなに恋て胡葱のうら乱しな　松濤
雛若は桃壺の腹にやどりてか　挙白
竜田姫そめけん雛のから錦　子堂
雛丸か夫婦や桃の露不老国　羊角
汐干潟海鹿(ア)の野馬見て行ん　卜尺
汐干くれて蟹か裾引なこり哉　嵐雪
漁夫出て三ケ月ひろふ汐干哉　立志
夕はえや金(インス)をなけく蜆蜑　赤土 以貞
憂(テハ)方ニ知(リ)酒ノ聖ヲ
貧(シテハ)始(テ)覚(ル)銭ノ神ヲ
花にうき世我酒白く食黒し　芭蕉
眠ヲ尽ス陽炎(カゲホシ)の痩　一晶
鶴啼て青鷺夏を隣(トナ)るらん　嵐雪
童子礫を手折ル唐梅　其角
月ヲ濁す汀の蓼ヲ芦刈て　嵐蘭
浪のさゞれにたなご釣影　筆
琵琶洗ふ雨よし朝の時雨よし　一晶
朝にえぼしをふるふ紙衣(キヌ)　芭蕉

浪人の恋するを詒(ナブリ)おほしめす　嵐雪
やぶの一夜に入ルかひぞなき　嵐蘭
散さくら同し宗旨ヲ誓ひける　キ。角
藤は退之か肝(キモ)魂(タマ)ヲ奪(ハフ)　一晶
雷鳥のはつねは觜(ハシ)ヲ鳴ルならん　芭蕉
汐てる海に鰹孕(ミコモ)る　嵐雪
傾城の鏡を捨し神代ヨリ　一晶
羽をりに角ヲかくす風流雄(タハレオ)　其角
化しのゝ棺(ヒツキ)ヲ出て草の月　嵐蘭
破蕉誤(テ)ツヲ詩の上を次ク　嵐雪
朝鮮に西瓜ヲ贈(オクル)(ル、衍)る遙ナリ　芭蕉
つくししらぬひの松浦片撥　一晶
めづら見るあけや〳〵の萱庇　嵐雪
蚤は私(サヽメ)の盞をのむ　嵐蘭
櫛入レぬ影は六十(ムソシ)の荆にて　其角
御所に胡座(アクラ)かく世ヲ夷(ウツイ)也　芭蕉
人の怪異(ケイ)穂長の宵の熨子黒ク　一晶
松田くびなき雪の曙　嵐雪
きたなしや陣中に似せ鼾かく　キ角

山ン野に飢て餅を貪(ムサホ)ル　嵐蘭
盗ミ井の月に伯夷が足あらふ　芭蕉
とくさは武士の憤(イキトヲリ)草　キ角
見くるしき艶書をやくや柴栬　嵐蘭
笑ひさんやに帰ル魂　一晶
暁の寐言を母にさまされて　嵐雪
つゐに発心ならす也けり　芭蕉
花に栖廬山の列(レツ)をはねたらん　其角
柳にすねて瀑布(タキ)ヲ酒呑　嵐蘭

詠懐

花に今頼政か歌を知ル身哉　露沾
我杖に秣(マクサ)かふべし花の山　幻吁(吁)
身は里に麦待花の日数かな　似春
雨花ヲ笑て枳殻の怒ル心あり　麋塒
伽羅は鈍し浴(ヨウ(ママ))堂の花に干魃(カモシ)　露章
花酔鳥故山にねくら忘けり　云笑
にくしとて瑟を筏の峰の花　四友
余所に男薄暮に花をみる男　杉風

あみ笠刀うき世つたふか花見猿　嵐蘭
狂といへ花人か合羽日照傘　千春

吉野蔵王堂にて

片足は花の塵いとひ給ひけり　千之

雨

廬山の夜上野は花の昼ならん　揚水
山はえむ上野東の美人ならん　才丸
落花雨美人の化粧流し也　一束
花は楚地雨のなこりや腐(クサレ)足袋　洗口

七賢の自画に

花と世を竹にそげたる翁かな
軀不レ花(ンハ)死(ニアラ)不レ休(トモ)矣(セ)　樵花
於(ア、)戻花と流るゝかばね哉　嵐蘭
蓑着たる樵(リ)子いつの花の虹
惜レ花(テヲ)不レ払レ地(ハヲ)　露宿
我僕(カヤツコ)落花に朝寐ゆるしけり
代レ樵(ルニ)
彫(ヱリ)レ笛(ヲ)縫(テ)レ蓑(ヲ)花に晴せんうき世哉　其角

小町の像讃

おことこそ風狂乱の姥さくら　宗因
美をにくむ心のさくら若衆哉　文排
就中女に恋そゝのかすさくら哉　藤匂
いはゝ云へく問人に須磨の桜賤　露章
匂ふらんけふ去人と山さくら　枳風
殿は狩ツ妾（メカケ）餅うる桜茶屋　嵐雪
昼の君うつゝと咲リ夢桜　杉風
橙のときはにくしや山さくら　利久
遊人去て昼のさくらを舞（マフ）狐　子堂

目黒松隣堂にて

うき世木をふもとに咲ぬ山桜　其角
梨花さらに柿のはに蝶すだくらん　嵐蘭
海棠やうき世美人の空ねいり　樵花
たんほゝよ口おしの花の和（アヘ）物や　九十
たんほゝや春とはぬ宿の忘れ菊　山店

さんや吟行

詩（カラウタ）を加賀にやはらく蛙かな　楓興
角田川哀は田にしつむ野かな　文排
麦食に野守菴かせ田にし狩　寸鯨

田にしふむ影生憎（アナニク）ややもめ鳥　拾蛍

御局の春興

下仕（シモツカヘ）して夜をおほろけの豆腐召（ス）　雪叢
さすがかりきみがきもやらて夕月夜　四友
菜の花の盛や水司か袖のかはく程　柳興
蝶ちりて菜の花や入あひの鐘　翠紅
小雨けり蕗をしとゝのかくれ傘　露章
あさつきよ香を懐（ナツカ）しみ妹か里　小寺 紫荀
仙家にはわさび摺らんそてつ原　鳳尾
山吹や无言禅師のすて衣　藤匂子
腕（ウテ）を薪の飢の早蕨　其角
子路カ廟（ビヤウ）夕へや秋とかすむらん　同
其きさらきの十六日（イサヨヒ）の文（フン）　匂子
花鮎の鯖のさかりを惜む哉　同
樽伐（キル）なりとひゝく杣川　角
金滅（ヘラ）す我世の外にうかれてや　同
褞袍（ワンボウ）さむく伯母夢にみゆ　匂子
ひだるさは高野と聞しかねの声　同

心-鼠は昼の灯をのむ　角
あさましき文字の賊 衣魚と成　同
小袖をさらす涼店の風　句子
夕闌て宮女の相撲めし給ふ　同
(大)天-盞七ツ星をちかひし　角
月 兮月兮西瓜に剣ヲ曲ケル　同
弓張角豆野に芋ヲ射ル　句子
里かくれおのれ紙子のかゝしにて　同
なしみは離ぬ雪の吉原　角
米の礼暮待文にいはせけり　同
初木からしを餝ルしだ寺　句子
暁の閼伽の若水おとかへて　同
崫も餅はかひけりの春　角
猟師をいさなふ女あとふかく　角
なみたさがしや首なしの池　句子
ぬれ具足芦刈やつに剝れけん　同
婆-鞀にわたる島おろし舟　角
鳥葬にけふある明日の身そつらき　同
寐さめ語りをきらふ上-臈　句子
残る月戸にきぬ〲の歌ヲ書　同
葬の朝粧ひ髪ゆふてやる　角
蜩の虚労すゝしく成にけり　同
雨母親の留主を慰む　句子
烟らせて男の立 茶水くさし　同
入あひ迄を借ス座敷かな　角
蝶-居-士か花の衾に夢ちりて　同
仏にけがす茎立の露　句子

改夏

ほとゝきす正-月は梅の花咲り　芭蕉
待わひて古今夏之部みる夜哉　四友
山彦と啼ク子規夢ヲ切ル斧　素堂
ほとゝきす春朴の葉に隠しや　嵐蘭
忍ひ音や連歌ぬす人子規　翠紅
ほとゝきす敷寐や淀の宝舟　千之
半日の下戸。閑居にたえす子規　千春
錦帳の鶉世を草の戸や郭公　嵐雪

誰か謂し南天の花の時郭公　信徳
枸杞莚幾日干らんほとゝきす　藤匂
身は筏月郭公忘レ竿　杉風
子規芋まだ青(ワカ)き月夜かな　李下
郭公はるかに蜀の新茶哉　才丸
錦その涙に洗ふへし郭公　才滴
ほとゝきす瓜くはぬ里に習ひけん　一蜂
暁の釣瓶やすめよほとゝきす　濁子
冥途には秋や待らん郭公　中村 如菴
夏桃や伏見ときけば郭公　東順
郭公羅紗の毛衣かへしけん　松緑
雨ヲ聞夜月化けらんほとゝきす　勝延
花めてたく柳はかしこ郭公　四友
子規木かくれなりぬうどの杜　調艶
鼻毛刈人にきけとや子規　其流
清く聞ン耳に香焼(タイ)て郭公　芭蕉
点滴(タマミツ)ヲ硯に奇也ほとゝきす　キ角
我句人しらす我ヲ啼(ク)ものは子規　同
姿旦夕て卯花に文ヲよむ女　言水

昼はかり卯花さかぬかきほ哉　才丸
蟾(ヒキ)ヲふんで夜ル卯の花ヲ憎けり　其角

四月十八日即興

偽レル卯花に樽を画(エカ)きけり　千之
鰹をのそむ楼の上の月　其角
この比の裸をにくむ秋の風　同
さゝ立波に鹿梁(シヽロ)もる露　之
蔵庇菊を南に見え晴て　同
葉越はあらぬ蘇鉄一かぶ　角
侘々て笠に詩ヲ着ル朝時雨　之
呉の旅衣酒をかたしく　角
水糒(ホシヒ)西施が影をこぼすらん　之
蘭にふれたる紫の汗　角
寐語の小杉音なく宵過て　之
さみたれ座敷蛙這(ハヒ)来ル　角
住ム人も志賀の古城やよむかし　之
石山の秋ノ月三井の晩鐘　角

尺八に棹さす露の丸木舟　之
　遊子おどりの国ヲ尋ヌル　角
花日々に老は娘の手を引て　之
　松ある隣リ羽かひに行　角
百千鳥轡が仕着せ綺羅（キラ）やかに　同
　雨なかたちて燕（サカモリ）ヲ仮（カ）ル　之
年咄し今宵廬山の夜に似タリ　角
　毛-吹崑-山に名を晒スラン　之
木からしに浪士の市のイ（タヽスマヒ）　角
　回火消の霜さやく松　之
経よはる御（オン）魂屋のきり／＼す　角
　夕へは秋の後鳥羽さびしき　之
秬の葉に涙をあまる夷（ヒナ）衣　角
　まゝ子烏の寐に迷ふ月　之
盗人をとがむる鎗の音ふけて　角
　胴の間寒き波の夜嵐　之
年と日と賤のつま薪（マキ）よみ尽ス　同
　うさきを荷ふ越の山業（ワサ）　角
剣術を虚谷（コタマ）に習ふ時（ヨリ／＼）は　之

有下朋（トモ）自（リ）二遠-方一来（レルコト）上　同
花に糧空嚢（クウノウ）に銭をはたくらん　角
　蛤処-々のやまふきヲ焼　同

　麦刈娘に物いひて

若麦やむぐらのために乱けん　自悦
忘るなよ麦の穂風の初うつら　卜尺
青さしや草餅の穂に出つらん　芭蕉
麦莚なひきていつか賤のつま　藤匂
ゆふかけて青麦白し氷（ヒウ）雨祭　嵐朝
麦にかなし薄に月ヲ見んまての秋　キ角

　贈（ル）二一鉄（ニ）一

亦や鰹命あらば我も魴　素堂
消し雪の河魨を吊（トフラ）ひけり鰹　雷虫
こひしきや蓼をむくらの塩鰹　嵐竹
妻（メ）鰹の卵（カイコ）の中のめぢか哉　其角

　水あり駅にとへは
　　しのはすか池

菖ナル左我その去年の鰣（ハス）やらん　一晶

香ヲ折ルの坐頭や牡(杜)若あやめ　挙白
誰世にか冶郎身投しかきつはた　露沾

重　伍　廿五句

菖把(スガリ)に競-曲中を乗(ル)ならん　挙白
粽ヲしばる鬼の尸(カタシロ)　其角
竜ヲよぶ白雨乞(ヒ)の跡荒て　松濤
御歩(ミアユ)みかろき雲の山橋　白
錦干ス木の間の月のすて冑(ヨロヒ)　角
葛の茵(シトネ)に猿疵ヲ吸(スフ)　濤
露をへて鵂旧都(キウト)に歎きけり　白
漁-笛(テキ)はあれと瑟しらぬ蜑　角
忘れ松娘かうはさ云出て　濤
馴ぬふくさを敷て旅寐し　白
情(コヽロ)ある不破の関屋の小歌哉　角
むかしを江戸にかへす道心　濤
藤柄の鉦木(シモク)をとても重からぬ　白
破蕉老たる化ものゝ寺　角
蟹ひとり月ヲ穿ツの淋しけに　濤
詩人の餌の鱸(ロ)魚ヲ憎シト　白

花ヲ啼美女盞を江に投て　角
なひくか否(イヤ)か柳もどかし　濤
世は蝶と遁心思ひ定めける　白
骨牌(カルタ)ヲ飛鳥川に流しつ　角
三線ヲ十市の里に聞明ス夜ヤ　濤
あらしな裂(サキ)そ夫(ツマ)尋ね笠　白
祖母はせく樵は流石哀あり　角
徳利ヲ殺す是雪の咎　濤
春ヲ盗ム梅は破戒の其一(ツ)　罔両

鈴虫をのほりに付て寐ぬ夜哉　藤匂
菖刈鴉のうき巣や坐雨　樵花
軒ばふく鸛の床草鎌ふかし　云笑
しら雲や富士の峡より江戸幟　長吁
ちりめんを蓑のけしきか菖妻　才紫
世のあやめ見すや菰の髑髏　嵐雪
粽かはん駅(ムマヤ)にとめて鈴のほり　其角
片田のうらのやすさらし
川岸に臼のならひたる

を見て
うき桶や行〳〵て波の晒臼　　自悦
時鳥の二声三声
おとつれけれは　　嵐雪
五。月雨の端居古き平家ヲうなりけり　　藤匂
五月雨けりな小田に鯉とるむら童　　柳興
瀟-湘の夜や夜鰹の五月雨　　露章
覆盆子折レ田歌のかさし五月蓑　　言弓
いちこ折娘いつ山吹の香に馴し
亡母ヲ夢ミル
左月音に我蓑虫や母恋し　　嵐雪
蚤莚音なしの里にくはれけり　　露章
蚊の帳をさゝ波畳む四ツ手哉　　洗口
蚊のことし竹枝のやとり晋の七　　子堂
蚊すまふに番の団亦おかし　　翠紅
夢やつれけり草葉の舎リ蚊遣馬　　藤匂
蚊をやくや褒-姒が閨の私語　　其角
蚊のふるはいとゞ小雨の夕へ哉　　才若
夏の夜はせはしなき秋の旅ね哉　　杉風
葺かへて不破のたひねの紙帳哉　　皷角
和ス古詩
瑟ヲ焼て水鶏ヲ煮ル夜酒淋し　　其角
谷木の鬼なおそれそともし笛　　同
うははみに駢やかはすともし山　　露宿
みな人は蛍を火じやと云れけり　　春澄
草の戸に我は蓼くふほたる哉　　其角
うすものゝ羽織網うつほたる哉　　暁雲
岩巻柏を宿あり顔の蛍哉　　言籬
あさちふや地蔵の闇を問蛍　　皷角
女恥けり蛍をもゆる毛虫かと　　藤匂
真瓜火や蛍にたえて橋涼　　李下
たか告し夕蝙-蝙に涼み風　　子英
うは玉の涼みや髪干女後にて　　才丸
酔テ登ル二二-階一
酒ノ瀑布冷麦の九天ヨリ落ルナラン　　其角
雪の鈍左勝水-無月の鯉　　芭蕉
富の御嶽の
あかつきをさめて

禅定や珠数ヲ薪の雪の床　文排
山茱萸(クミ)のかさしや重きふし下風　嵐雪

田家納涼

芋の葉に命を包むし水哉　キ角
堀かねはかつをに濁すし水哉　長吁
蛛の巣もうき世濁すな山し水　才丸
棚はしや瓜くゞらせて月清水　露章
むら雨の木陰なりせはところてん　拾蛍
椹(クハノミ)や花なき蝶の世すて酒　芭蕉
なてしこの翅を蝶の娘かな　一晶

竹婦はなれて抱よけれ共
こと人やねたまん
涼しくてひとりねんには

汗に朽は風すゝぐへし竹襦半　嵐雪
夕風かむすめとよばん添寐籠　杉風
東路や足踏かすなる夕立の雨　松濤
水枯て蟬ヲ不断の滝の声　幻吁
木さらしや蟬のもぬけの薄衣　残詞
夜の蟬蕣のさく日向(ナタ)かな　鯨足

一晶の宿坊にて

日蓮よ梢に蟬の鳴時は　其角

我身

乞食かな天地ヲ着たる夏衣　同
扇こそ賤かふせ屋の夏礎　羽白
唐扇はすねたり和扇は艶也渋団　皷角
扇団いつれを法師俗の風　嵐朝

破屋なれとも
傘を用ひす

夕顔の雨もりさせぬ荒屋かな　東順
蔵立て夕皃は世にあかれけり　一晶
夕皃はすゝけぬ富士の枝折哉　藤匂
優婆塞が不動白しや夕皃の花　長吁

荷興　十唱

浮葉巻葉此蓮風情過たらん　素堂
鳥うたがふ風蓮露を礫けり
そよかさす蓮雨に魚の児躍
荷たれて母にそふ鴨の枕蚊屋

青蜻(トンボ)花のはちすの胡蝶かな
おのれつほみ已レ画(エカキ)てはちすらん
花芙蓉美女湯あがりて立リけり
荷ヲうつて霰ちる君みすや村雨
蓮世界翠リの不二を沈むらん
或は唐茶ニ酔坐して舟ゆく蓮の梶

一むら薄まれ人を
まねいて

武さし野を我屋也けり涼み笛　翠紅
切麦さらすさら〱の里　才丸
皂莢(サイカシ)に草鞋ヲいたく径(ミチ)アリて　一晶
つはめをつかむ雨の汚(ヨコ)レ子　其角
月出て日の牛遅き夕歩み　罔両
えほしを餝る御所やうの松　紅
鏡刻時の斧取申ける　丸
八十万箕(ミ)の霊(タマ)とあらふる　晶
生姜葉をかさしにさせる市女(メ)笠　角
関守浮ス三五夜の曲　丸

雁の来ルいて楊弓を競(キソ)ふらん　紅
冶郎にくだす盞の論　罔両
金谷ノ泪ヲかたひらにそゝく　晶
荒しや姑蘇(コソ)の風呂台(タイ)に入　角
乱往昔古(ソノカミ)首つるべより上る　丸
主人の瑞を告し初鶏　紅
花の比都へ連歌買にやる　角
桜まだみぬ島原につよし　晶
地女の袂みじかき染の帯　紅
小六に祈る郎(トノゴ)よかれと　丸
御手洗や両国橋の生れぬ世　晶
垂(スイ)樹渡(ル)レ江ヲ松九本あり　角
蒹(ヨシ)焦て番屋は雷に霹(ヒシグ)らん　丸
もるに書ヲ葺(フク)閑窓の夜　罔両
犬わなにかゝるは酔の翁にて　角
壻(ムコラ)等に恥よ名を反(ソラ)す恋　紅
早稲(ワセ)は実か入晩稲は身(ハラム)稲つはり　晶
袖そよ寒しスバル満(ン)時　丸
水飲に起て竈下(ソウカ)に月をふむ　紅

聞しる声の踊うき立　晶
早桶の行に哀はとゝめずて　角
我身をてかけ草のいつ迄　紅
花は世に伊達せぬ山の浅黄陰　丸
心に寸ンの剣（ツルギ）なき盧（イホ）　角
灯前の夜話（ハナシ）酒を奴ニス　晶
あらしに帰る四の罔両
年の輪の半をくゞる名越哉　翠紅

みなしくり　下
（書き題簽）

改秋

初秋の風かたへは白し青西瓜（ワカ）　東順
初風に瓜守か菴もあれにけり　濁子
梶の葉に
小うたかくとて
我や来（キ）ぬひと夜よし原天川　嵐雪
名とりの衣のおもて見よ葛　其角
顔しらぬ契は草のしのぶにて　同
冶郎打かたふける夕露　雪
坐（ソヽロ）月にはぜつる舟の遠恨み　雪
河そひ泪檜木（クレ）つむ声　角
寐を独リ乞食うき巣をゆられけん　雪

しきみ一把を恋の捨草　角
人待や人うれふるや赤椿　雪
蝶女うかれて蛇目さめけり　角
こち〳〵と闔啄(ツヽキトリ)鳥の匂(ニホ)よけに　雪
敵にほれて籠のかひま見　角
いはで思ふ陸(ミチ)の怒(イカル)と聞えしは　雪
色このむ京に初萩の奏(ソウ)　角
野分とふ朝な〳〵の文くばり　雪
家々の月見あねに琴借ル　角
ねたしとて花によせ来る小袖武者　雪
美‐山(ン)の笑ひ茶旗(キ)の風流　角
鸜鵒能(ヨク)帰りをほむる辻霞　同
叶はぬ恋をいのる清水　雪
山城の吉弥むすびに松もこそ　角
菱川やうの吾妻俤　雪
狂歌堂古き枕をおかれける　角
はだへは酒に凋む水仙　雪
蓑を焼てみそれくむ君哀しれ　角
身は孤(ヒトリ)舟女房定めぬ　雪
萱(ワスレ)金かくしうへけん背(キタノネヤ)に　角
松虫またず住あれの宮　雪
露は袖衣‐桁に蔦のかゝる迄　角
蟇‐姫月(サヽメ)にならんとすらん　雪
若衆と私あかしのほとゝきす　同
つれなき枕蚊屋越ヲ切ル　角
紅の脚布哲(ミシロキ)（哲、皙カ）姿むこかりし　雪
五十(イソシ)の内侍恥しらぬかも　同
花の宴に御密夫(マヲトコ)の聞えあり　角
やふ入ル空の雨を懶(モノウ)ク　同

効(フ)二白氏之隣女(ノ)一題(ニ)

二星私(ヒソカニ)憾ムとなりの娘年十五　其角
空彦もねよけん糸と竹との諸(モロ)調　嵐朝
露くだる星の朝寐(ヰ)や角豆原　藤匂
後家恥ぬ嫁‐星に寐衣(ネマキ)かさん事　皷角
世々の阿房こよひの空や汚(ケガ)レ川　揚水
妹寐こいかも窓更て銀‐漢白シ　松濤
夕かも星あひそめぬ色紙妻　雨椿

誰手向して蜻やとる捨つるへ　拾蛍
鼠尾艸や稲妻をやく世の手向　藤匂
おくり火や定家の烟十文字　其角
玉祭ル里や榁刈男香炉たく女　松濤
貧せこか初露寒し葛羽織　露章

臨(ム)二素堂秋(カ)-池一

風秋の荷葉二扇をくゝる也　其角

和(ス)二角蓼(カ)蛍(ノ)句一

あさかほに我は食くふおとこ哉　芭蕉
あさかほの露と身をやく蚓かな　藤匂
朝皃の暁花もる犬の声憎(ニク)し　樵花
あさかほに傘干ていく程そ　暁雲
蕣をなけかん友とうつら好　黄吻
荻の音は変化咄しのとたえ哉　暮角

朝なく\に咲かへて
さかり久しきとある
御歌を感して

あさかほは仙洞様を命かな　其角

破茅

風妖て薄に夜の雨すごし　李下
猫狩やうらみをかへす真葛原　東順
芭蕉の女ねたしそてつに釘打　小山 玄甫
露萩や野中に立る捨美人　其流
萩な刈そ西瓜に枕かす男　其角

身ヲ庭前の
朴の木によせて

渠(カレ)何を人目にうらみ朴そ　嵐蘭

三夕

西行

秋は此法師すかたの夕哉　宗因

定家

舟炙(アブ)るとま屋の秋の夕哉　嵐雪

寂蓮

和歌の骨(コツ)槙たつ山の夕哉　其角
さひしさは秋向ふから来ル我姿　自悦
人は寐て心そ夜ルを秋の昏　麋塒
田-婦子を負(オフ)て螽のうかれ心哉　卜尺
我立リ螽飛野の犬かくれ　杉風

いなことる〳〵いつ袖の時雨たりけん　子英
猫にくはれしを蛬（カウロキ）の妻はすたくらん　其角
三ヶ月や朝㒵の夕へつほむらん　芭蕉

謫居

象潟（キサカタ）の月や流人のたすけ舟　琢菴
月に飢て旅人古郷の詩ヲ腹（アチハフ）　皷角
月ひとり家ー婦が情のちろり哉　杉風
昼の月ゐるさ尋ん三輪の森　東順
月を語レ越路の小者木曾の下女　其角
たらひ迄日比の月の寐衣（ネマキ）哉　四友
牛吼て山路（ンロ）か鼾月高し　柳興
月ヲ都征（セイ）ー人首を酒当（サカテ）ならん　山店
弓力西によはるや老の月　吉田 明治
何配所こゝも罪なき闇の月　池原 玄斎
富士の月戎（エツ）には見せし遠目鏡　疎言
故寺月なし狼客をおくりける　北鯤
月に親く天帝の壻（ムコ）に成たしな　才丸

舟中吟

月見女舟や木の間を押ぬらん　杉風

芋くへば尻にこさふく今宵哉　三峰
さらしなの月は四角にもなかりけり　友吉
芋付て衰鞭（スイヘン）月もやせつらん　云笑
やき米を臼ツク里の桂かな　翠紅
四ツ手舟はぜ買よらん月見川　藤匂
芋を抱て酒に身なけんけふの淵　桐橋
誰カ家の思ー婦ぞ月に諷ふて粉（コナ）引は　雪叢
土ー船ニ諷レ掉（フ）ヲ月はすめ身は濁レとや　楓興
　浮生（フセイ）ははぜを放す盞　其角
興（ケウ）そげて西瓜に着（キ）スル烏ー角巾　柳興
　萩すり団風みたるらん　長吁
蓬生のうづらは蚊屋の中に鳴　角
　鼬のたゝく門ほそめ也　楓
ぬす人を矢に待嵐窓ヲ射（ヰ）る　吁
　下女か鏡にしらぬ俤　柳
泪とも直衣のつまを切ル襴（フクサ）　楓
　むかし雨夜の文枕とく　角
名をかへて縁（ユカリ）が丫鬟（カフロ）長（オトナ）シク　柳

うきを盛の酒‐中‐花の時　吁
発句彫ル桜は枝を痛むらん　角
かへり見霞む落‐城の月　楓
笠軽く鞋に壱分をはきしめて　吁
関もる所佐渡の中山　柳
柴荷ふ妙の僕となりにけり　楓
老母ヲ牛にのせて吟ふ　角
うき雲の犇をたつねて問嵐　柳
乞食の筋をいのる野社　吁
水へたつ傾‐里は垣のひとへにて　角
心を伽羅に染ぬゆふかほ　楓
つれ〳〵の蛍を髭にすだくらん　吁
羇行のなみた下‐官歌よむ　柳
けに杜子美湯‐治山‐中一夜ノ雨　楓
肴なき炉に三線ヲ煮ル　角
朽坊に化物がたり申すなり　柳
夫をためす独リ野の月　吁
穂に出て業平かくす薄‐陰　角
夕へを契る蜻蛉の木偶　楓
進めする錦木供養立なから　吁
地蔵に粧ふ霜の白粉　柳
三七日は乱壊の相を啼ク烏　角
食腥く出る野のはら　楓
旧悪の都は花の色苦し　柳
毛虫は蜂のねくら争ふ　吁

稲磨歌妹乎鶏坶乃羽　秋風
多多幾晨奴良牟加毛

松風の里は籾するしくれ哉　嵐雪

芭蕉廬ノ夜

墨染を鉦鼓に隣る砧かな　其角
亦此里賤か夜寒の火打かな　其流
物数奇の世捨きぬたや葎菴　黄吻
石菖をいつの薄にうつら籠　永原 愚心
うつらふんて艸刈鎌を逃しけん　藤匂
鰌化してそよ飛フ鴫の夕べ哉　瓠落
伝に曰稲負鳥はふくべなり　四友
蓑うち着てますほの胡芋刈男哉　子堂

胡芋干宿よ夕顔の夕へさもあらはあれ　嵐蘭
行くれて山賊すごし案山子影　子英
重陽三句句（コトニ）菊
○風菊ノ盞笠冠止（カセノシナモノアリ　サン　リツノキセン　オリヘカサ）　嵐朝
○有蘭草ノ菊ノ宜止（ニホヒクサ　ソヘカミニ　シト云リ）　芭蕉
○俳門ノ有芳菊ノ止（ウカレヒト　カウハシキタハコ）　嵐雪
賀をつぐの春や引らん小菊原　挙白
籬外の硯菊もあるしや芳しき　翠紅
菊は山路みかんの霜を契りけん　暮角
傾蘭のひとりねゆかし床の菊　枳風
千家の騒人
百菊の余情
菊うりや菊に詩人の質（カタギ）を売ル　其角
松の香は花とふく也さくら茸　同
座敷寺松茸見付たるうれし　信徳
小上戸熟柿の林かくれきや　一蜂
こや汐木賤か柚味噌の夕烟　拾蛍
落椎か雨かましら答えよ木葉菴　蒼席

栗柿は塵壺を秋の行衛かな　仙風
焼栗や居（オサムルカメヲ）蔡月の雨　幻吁
樽虫の身を栗に啼こよひかな　其角
栗のから藻の中のハゼかそへつべし　卜尺
はぜつるや水村山郭酒旗風　嵐雪
傘合羽はぜつり時雨顔なるや　皷角
釣人帰ルあらしをはぜの命哉　露章
はせの地をいかにおしまん仏の日　露宿
こがれきや澪（ミホ）木の枝折はせ小舟　蒼席
さび鮎やいつを栄の蓼の花　長柄 寛満
哀且（カツ）市たつ鮎の暮のさび　杉風
カジカ此夕へ愁人は獼（サル）の声を鉤（釣）ル　其角
遊心寺ノ高雄カ廟
哀しる霜に石ヲ粧（ヨソハ）ふ蔦の裾（ユク）　才丸
榎ふりて蔦を鱗の竜紅ヰ　羊角
緋のふとん綻（ホコロヒ）白し瀑布（タキ）の水　四友
憶老杜ヲ（フ）
髭風ヲ吹て暮秋歎スルハ誰ガ子ゾ　芭蕉
九月尽

ねぬ夜松風身のうき秋を師走哉　其角

上　冬

僧うかれけり松はひとりに里時雨　杉風

手つから
雨のわひ笠をはりて

世にふるもさらに宗祇のやとり哉　芭蕉

しくれするかけ菜を軒の僧都哉　藤匂

夢よりか見はてぬ芝居村時雨　其角

君火燵うき身時雨の小袖かな　枳風

紫の暮山に紅のしくれ哉　子堂

葉柏や風と時雨し数寄屋道　露章

赴ク二泊‐船堂一ニ途中ノ感

波道黒(クラ)し夕日や埋む水小舟　揚水

夕かくすらん虹の仮(カリ)橋つくは山　同

端山木の凩からんかへり茸　其流

冬野見よ刈とはなきに霜の鎌　露章

冬枯の道のしるへや牛の屎　卜尺

十月ノ蟋

きり〳〵す鼠の巣にて鳴終(リ)ヌ　嵐雪

螽枯て寒‐径霜をいだく哉　子堂

氷るらん日陰の胡蝶日なた魚　藤匂

落葉見にたか蹄せし霜馬峰(サクリ)　挙白

落葉をくだくや納豆打ツ寒夜　才丸

霜白し枯野のそばの花月夜　翠紅

夢ヲ吹て肝(キモ)埋む夜の木葉哉　烏巾

枯榎おのか実ならで烏瓜　青扇

茶の花や上戸の弟梅の兄　藤匂

笹窓の更り短(タン)‐檠(ケイ)の下(モト)に釜睡ル　杉風

貧‐山の釜霜に啼声寒し　芭蕉

松風や炉に富士をやく西屋形　其角

真炭刻ル火‐箸を斧の幽か也　同

犬引てとうふ狩得たり里夜興　同

宗于富るならん山里冬のさび馴ず　柳興

世に若く行人(カウ)うとし榾住ひ　露鶴

斧朽て七世の榾に逢りけり　露章

老尼か筬(オサ)の緒やすし夜ルの榾　露宿

雪夜

仏たく夜はさそあらんそば湯哉　幻吁

夜着は重し呉天に雪を見るあらん　芭蕉

花を心地狸(ムシナ)に酔る雪のくれ　麋塒

僕か雪夜犬を枕のはし寐哉　杉風

てんかくに寄ス狂句の法師雪の児　李下

雪ヲ吐て鏡投けり化粧姫　皷角

富峰

駒やむに薬もとめん千重の雪　千之

不二に目鼻混沌(コントン)の王死シテより　皷角

大回り磁石おさめんふしの雪　狩野 空鬼

富士うつす麦田は雪の早苗かな　其角

ふしは富士木綿か原のけしき哉　鳳尾

世はさそな香煎雪にそゝく也　九十

蔀たれて雪を有明と寐過にし　挙白

幽戸推て雪を花壇の艶(ミヤビ)哉　言色

荆(イハラ)折て雪の女の角にせし　紅友

白雪に五位鷺濁るあした哉　蘭山

くたかけや宵寐をいそく雪の下女　利久

雪ヲ織てびろうど白し太山姫　峡水

皂莢(サイカシ)の実は音さひし雪の窓　露宿

雪の奥炭負こぼすたつぎ哉　才滴

会者定離笹にあられや松の雪　ゆき

旅行

城見えて合羽は重し雪の昏　信徳

松原は飛脚ちいさし雪の昏　一晶

雪の薪牛追(オフ)物に暮つらむ　文排

雪の犬箒になくや姨捨山　四友

憶ニ李白ヲ

月ヲ見て東坡は雪に身投けん　才丸

河‐魨に貴‐妃の俤を恋　子堂

遊の代(ヨ)の小歌を琴に閣思君(ワサクレ)て　其角

早苗車を喜雨(キウ)台に引　丸

カルの子に感あり柿の花盛　堂

鰌すくひが濁す日の陰　角

秋風を名残ルか待乳山涼み　丸

膈(カク)人出テ、家ヲ露夕へ也　堂

稲妻のぬき刃に夢の身をやどす　角

魔境の月を睨(ニラミ)かへして　丸

山彦と碁をうつ風の古寺に　堂
茶僧の首烏豆ヲ啼　角
顔淵が麦食愛のひとつにて　丸
蓼も藜も露ふかき庭　堂
住ばすむ紙工ばかり清水かな　角
吉原の郡よしはらの里　丸
花に染ム愚は磨賢はぼつとりと　堂
菫をさして和歌の撰聟　角
永き日も狭布の上下胸あはす　丸
はなわに埋む儒の尸　堂
今哉角天地を樽とのみ破る　角
駢に駕して睡洞に入　丸
葉嵐や狐離レて覚えける　堂
名城松に荒をなす月　角
金堂むかしの夕へさやかにも　丸
伶女すがれて玉虫を舞　堂
とくさ刈なり平山にほれつらん　角
文幣うけよ穂屋の花垣　丸
絶（堪）かねて鳩の肩ぬく卜正に　堂

さつ男の奴たをや若衆　角
誠より時雨もちくなぶんぬきそ　丸
吹雪を見する炭負せ馬　堂
花さかば告よ尾上のふごおろし　角
やすらひ鼓後の葉さくら　丸
春惜ム神すゞしめか気違か　堂
俳諧童友くるふ里　角

魨是破戒殺生
飲酒はもとよりの事

妄語
(魚+氐)を煮てふぐに売世の辛き哉　一晶

偸盗
賊心や河魨に迷ひの代ころも　李下

邪淫
妻ならぬふぐな憎みそ小夜衣　其角
ふぐ干や枯なん葱のうらみ貞　子英
腰ぬけや三とせに成ぬ鉤の魨　野笛
捨られてふくを湯婆の恨み哉　全琴

人何ヲカ土肉(ナマコ)の無為(ヌラリ)ナル貌(カタチ)　揚水
鰤ばかり霙にそばへたる重し　挙白
鴛啼て浅漬氷る丸屋かな　雷虫

夜学ノ感

鴛氷ル夜ャ蜉蝣灯盞に羽を閉て　其角
酒氷ル寒菊よ我一命　樵花

茅舎買レ水(フヲ)

氷苦く偃鼠(エン)か咽(ノト)をうるほせり　芭蕉
蕣にありしまかきの氷柱(ツラヽ)哉　虎吟
閑(ン)春(ル)をぬす人くさし雪の梅　其流
軒の柊梅を探るにおほつかなし　嵐雪
馬屎ヨリ水仙の香は己れかな　藤匂
雪に和して水仙の勇恥しき　四友

師走の月を

冬かれは白髪(シラカ)遊女の閨の月　嵐朝
寒苦鳥孤婦(コフ)かね覚を鳴音哉　李下
ねさせぬ夜身ヲ鳴鳥の寒苦僧　才丸
貧苦鳥明日餅つこうとぞ鳴ケル　其角
入相のかねにしだ刈る命かな　瓢落

鷹反(ソレ)て俄神楽や里の森　云笑
神楽舟澪(ミホ)の灯(アカリ)の御火白くたけ　嵐雪
行年や火燵に髭の白キをやく　柳興
三十日(ミソカ)引芋恨み也雪の駒　角止

一年三百六十日
開レ口(テ)笑(ヲ)無レ三日(コト)

飽(アク)やことし心と臼の轟と　李下
世は白波に大根こぐ舟　其角
月雪を芋のあみ戸や枯つらん　同
かうろきは書ヲよみ明ス声　下
百ヲふる狐と秋を慰めし　同
傾婦(ケイ)を蘭の肆(イチクラ)にうる　角
敵ある泪の色をいはず草　下
然れは天下一番の皃　角
文盲な金持は金ヲ以テ鳴ル　下
にわとり豚はつち養ふ　角
其池を忍はずといふかび屋敷　下
士峰の雲を望む加賀殿　角
杣めして国に千曳の鏡刻(ワリ)　下

名にたつかさし黒木串柿　角
髭あらの花みる男内ゆかし　下
春宵君とはりあひのなき　角
月に鳴ク生憎のうかれ上戸や　下
薄も白くたぶさ刈る鎌　角
朝顔は道歌の種をうへたらん　同
院の後家のあるかなき宿　下
都近き島原小野をおもひ出る　角
仕組をくだす八重のとぢ文　下
墨染に女房ふたりを頼む哉　角
ねみだれかもし蛇と成夢　下
笛による骸骨何をその情　角
風そよ夕へ切籠灯の記　下
酔はらふ冷茶は秋のむかしにて　角
こぬ夜の格子鴫を憐レム　下
名月の前は泪にくもりつゝ　角
金橙径に粕がみを思ふ　下
蘘生姜を世捨ぬやつにたとへけん　同
摺鉢かぶる艸堂の霜　角

寸法師切レの衣のみしかきに　芭蕉
昔を力ム卒都婆大小　下
俤の多門を見せよ花の雲　角
凡夫三百人のはる風　同

酒債尋常往ク処ニ有
人生七十古来稀ナリ

詩あきんど年を貪ル酒債哉　其角
冬湖日暮て駕馬鯉ニ　芭蕉
干鈍き夷に関をゆるすらん　同
三線。人の鬼を泣しむ　角
月は袖かうろき睡る膝のうへに　同
鴫の羽しばる夜深き也　蕉
恥しらぬ僧を笑ふか草薄　同
しぐれ山崎傘を舞　角
笹竹のどてらを藍に染なして　蕉
狩場の雲に若殿を恋　角
一の姫里の庄家に養はれ　蕉

斝名にたつと云題を責(セメ)けり　角
ほとゝきす怨の霊(レウ)と啼かへり　蕉
うき世に泥む寒食の痩　角
沓は花貧重し笠はさん俵(タハラ)　蕉
芭蕉あるじの蝶丁(タヽク)見よ　角
腐(クサ)レたる俳諧犬もくらはすや　蕉
鰥(ホチ)々として寐ぬ夜ねぬ月　角
聟入の近づくまゝに初砧　同
たゝかひやんで葛うらみなし　蕉
嘲(アサケ)リニ黄金ハ鋳ル小紫　角
黒鯛くろしおとく女が乳　蕉
枯藻(モ)髪栄螺の角を巻折らん　角
魔神を使(シ)トス荒海の崎　蕉
鉄の弓取猛(タケ)き世に出よ　角
虎懐(フトコロ)に妊(ヤト)るあかつき　蕉
山寒く四睡の床をふくあらし　角
うづみ火消て指の灯　蕉
下司(ケス)后朝をねたみ月を閉　角
西瓜を綾(アヤ)に包ムあやにく　同
哀いかに宮城野のぼた吹凋(シホ)るらん　蕉
みちのくの夷(エゾ)しらぬ石臼　角
武士の鎧の丸寐まくらかす　蕉
八声の駒の雪を告つゝ　角
詩あきんと花を貪ル酒債哉　同
春湖日暮て駕(ノル)興吟　蕉

栗とよぶ一書其味四あり
李杜か心酒を嘗(ナメ)て寒山か
法粥を啜(スヽ)るこれに仍而其句
見るに遙にして聞に遠し
侘と風雅のその生(ツネ)にあらぬは
西行の山家をたつねて
人の拾はぬ蝕(ムシクヒ)栗也
恋の情つくし得たり昔は
西施かふり袖の顔(カンハセ)黄金鋳(ハル)
小紫上陽人の閨の中
には衣桁に蔦のかゝるまで也

下の品には眉こもり親そひの
娵姑のたけき争ひを
あつかふ寺の児歌舞の若
衆の情をも捨す白氏か歌を
仮名にやつして初心を救ふ
たよりならんとす
其語震動虚実をわかたす
宝の鼎に句を煉て竜の
泉に文字を冶ふ是必他の
たからにあらす汝か宝にして
後の盗人ヲ待

天和三癸亥年仲夏日

芭蕉洞桃青鼓舞書

嚙古人貧交行之詩吐而戯序
翻手作雲覆手雨
紛々俳句何須数
世不見宗鑑貧時交
此道今人棄如土

凩よ世に拾はれぬみなし栗

晋其角撰

延宝三亥歳
林鐘中旬

神田新革屋町　西村半兵衛
京三条通　西村市郎右衛門

蠹(しみ)集(しふ)

蠧集　其角五吟 追加よゝし　全　（題簽）

蠧集序

倉閭蘇鉄林　千春述

百八十句断為五歌仙法崇通活而字避杜撰挙其大意標之篇首止乎其志不要乎雕文而必帰規儆蓋倣白香山諷諭体也

貞享甲子中元日

標首

疾貧人　晋其角
耐閨怨　僧只丸
和社樹　伊信徳
戒僻学　椋虚中
憫亡秦　望千春

視彼蝉貧者に衣をぬく事を　其角
涼みを遷さす水の終日　只丸
四戸の亭末そく竹の片たれて　信徳
かけ菜のそよき賊ヲ誤ル　虚中
霜八たひ月を宿の羽にこほし　千春
燧かすかにあけほのゝ舟　筆
睨に京のおんなの顔はゆく　丸
三十三所に恋しあはゝや　角
物をこそ浮名の杉と世にかれて　中
絵なる櫛笥に飢を拾ひし　徳
伶老て賀にひるかへす袖やなき　角
文章に博士のむすめありける　春
鴾ヲ萩のたはゝに羽せたらん　徳
忍ひ居すかす帳のいなつま　丸
月なき夜尼せの髪を偽りし　春
淫あるきの子を制したる　中
花の香を楽屋饗にあふがれて　丸
傘千を弥生一時　角
日の夕へ眼界におほろなる　中
遊窠散人峰に乗して　徳
さひしさは諷に作る太山寺　角

むかし鹿子の表具俤　春
武蔵野や半場留兵(ヘイ)にこひしけき　徳
狂士をやつす雪の三股(ツマタ)　丸
蛤をよむに五十(イツシ)年をかしましく　春
賤山柴に孝をはこひぬ　中
驢車(ムマグルマ)長吏(リ)泪をきしらせて　丸
牡丹の執(シウ)に身を死(カラ)すらん　角
美男経またや哀の起る月　中
色はたそかれ門院の秋　徳
この比の朝をにくむ灯籠狩　角
仏を留守に世をそしりけん　春
忘れては助太刀うたんとそ思ふ　徳
馬道(メタウ)をつたふ壁人(カケホシ)や誰　丸
花羽ぶく鶴の乳母(メノト)の木隠に　春
聖像祭る礼(イヤ)あらた也　中
行露(ミチノツユ)女(メ)百合の朝ゐきたなし　只丸
たはれは風をゆする夏垣　信徳
牛冷す夜(ル)の川原に月生(ナリ)て　虚中

敗鼓(ハイコ)盃を駆(カリ)きそふらん　千春
邦の酔辛苦(シンク)の樽にあらた也　其角
五楼十台百の階　筆
湖の上(ホトリ)東坡か墓にくれなんとす　徳
霽(シクレ)ばら〳〵として一時　丸
寐を兼るひつとき髪に立うかれ　春
たれ文宿をたゝく曙　中
笹きせて小鰺(アチ)の露の雫なる　丸
風空江に竈(ヘツイ)ある艇　角
うき雲の姿は蓑に袈裟かけて　中
鵯(ヒワ)山からをさみせんによぶ　徳
さらしなは月そ。女の無所(キ)　角
柿搗(ツキ)恋の色にいやしき　春
駒　饗(モテハヤス)　花の梢の秋なるに　徳
川そひ屋敷日を西にさす　丸
倚(ヨル)窓(ニ)　半身水に画をなして　春
しらす非心の我仏とは　中
啞(ア)となりて浮世の事をのこす哉　丸
佞(ネイ)坊ちりて径(コミチ)さかしき　角

歌茶碗よし原焼ともてあそふ　中
虚-労をとふにうれしさを起(タチ)　徳
弱(ヨロ)杖に人きらぬ手のうづきけり　角
黄-楊(ツゲ)とる山の松にさひしく　春
碑(ヒ)ヲ写シ得テ暮-色懐(フトコロ)ニ重かつし　徳
良-夜に銭を断(タツ)て交る　丸
きびはなる弟(オト)を蒲萄に責(セメ)たらん　春
鈴虫かねをつなく片糸　中
あた好み詰(ナフル)もよしやなぶられて　丸
鏡よ貧に痩(ヤセ)ぬ男は　角
流-言(ネナシコト)母は笑にたゝすめる　中
あらしの外を録に見破る　徳
柳-暗花(ク)-明なり十-万戸　角
年あらたまる貞享の市　中

村樗いく世の狐-女をなかたちけん　信徳
右深山みち若柴の月　虚中
水求む鎧に糧(カテ)を負つれて　千春
小-番-匠の雪をくるしく　其角

凩(コカラ)さぬ地を平安と諷ふらん　只丸
東-雀西の枝に雑(マシハ)り　筆
夕雨の悲(サメ)しきに。妾。閨いそきせよ　中
諏-訪の猪鷹(シヽマロ)恋しれは也　徳
赤髪(アカカミ)二(ニ)白(シロ)髪交至(カミマシリオヒタレド)耆　角
御(ミ)-湯-殿まいり綾を襷(タスキ)て　春
庭-蝮(ハミ)を打驚かずとり捨たる　徳
杖に持-経を荷ふ山住　丸
たか世そや我(カ)甲-子を算(カソフ)ルに　春
月は茅はらに氏直の陣　中
能衣-裳秋ふきかへす一嵐　丸
しくるゝ霧にやどる三-門　角
名は凡-夫姿は乞(カタイ)食生(イノチ)は花　中
そゝろ桜の内親王(ヒメミコ)を追フ　徳
しばしたに妻持蝶の悋気して　角
すがくつすぼくいまやうもあらす(菅屦窄時世)　春
閣とざす荷-葉田-田水寒し　徳
烟のみとりたき物を煉ル　丸
えらはれて才春-秋に至ルの日　春

かしこきめくみ千貫ヲ敷　中
遊士と我は和泉の堺なる　丸
月の名に行貞室か琵琶　角
手にほれて文かはしけん萩の宿　中
それか横顔簇とる露　徳
猫ぬすむ幾黄昏を行かへり　角
睡りに沈む将を欺ク　春
賜に相者の時を諂はす　徳
藜に見ゆる加茂の侘垣　丸
朗詠に浮世の耳をたゝすませ　春
婬市のむかし風あはれ也　中
美人虹花一なひき彩霏て　丸
暮山をさらすかけろふの池　角
灯に傍て蚊魔睡を喰けり　虚中
涼雨心を浴してより　千春
浮葉巻葉此蓮風情過たらん　筆 素堂
菊めされ候へ東籬の菊　其角
女一セイあかつきことの袖の月　信徳

岵山沈んて気ヲ秋になす　只丸
槇尾や標桜第十二　春
かすみおろしに母の家あり　中
雪なから塩鱈匂ひ餅かびて　角
馬の子あそふ片日淋しき　徳
湘村の網にひかるゝ郭公　丸
風波ヲ感シテハ義に矛を折　春
樹閑に呵々の笑を見るあらん　中
筆に力の文角觝とる　角
いつれの秋か小扈従禿さふらひたまひ　徳
脈に恋ある深閨の月　丸
玉きはる胎内さがし華凋れ　春
春雨陰百鬼昼行　中
民の息涙耕す野に飢て　角
藪か根ふかく銭瓶ヲ得る　徳
今はむかし住けん僧の愊に　丸
空也の足をおかぬ世間　春
あられ夜や時雨ル雪の霜霙　中
貧交見よと竿に柚ヲかつ　角

白萩の衣を鬘(カツラ)の垢摺て　徳
くるゝキリコに幻を待　丸
沖休む漁家のいさよひ影ぬらん　春
風守(モル)神の御萱(ミ)ふくかに　中
上野(カミツケ)や足利代々の判ふりて　角
田つらに鵠(カウ)の時を恐れす　徳
牽(ヒキ)舟の松原明て日を近ク　丸
鄙に老たる女夫(メヲト)酒のむ　春
物恥ぬ屁(ヘヒリ)の長とさかへけん　中
世を私に勇を家とし　角
名をわかつ十哲花の斐(アヤ)アリて　徳
国芳しき唐門の梅　丸
傾あつて姫瓜をさく刀なし　千春
鏡汗かく一国の影　其角
何事を癡猿(チエン)の境に狂ふらん　只丸
蘂(カツラ)千尺峰に魚釣　信徳
太山鍋梢に月をけふらせて　虚中
狭(サ)霧の莚博奕卜(シメ)たる　筆

そぎ尼の物さひしがる秋の雨　角
文者にたよる泪もとめて　春
白狸柴廬に八百(ヤヲ)の歳へたる　徳
は山かきは木城北の松　丸
関人の閑(ヒマ)なる御代と碁を守リて　春
晴雪夜ルの屐(クツ)をたゝきし　中
庵(イヲ)崎や行とわかれのいさみ舟　丸
たが橋鼓若衆かの秋　角
夕闇の月。犬きらぬたとり也　中
まかきに臼の笠着たる露　徳
花柴の松風。銹リがほならん　角
やよつく〱しうどの香ヲ堀ル　春
誰か知ル盃裏に鮎をくむ思ヒ　徳
絶頂の折(オル)に膝ヲふるはず　丸
竜ヲ医ス風雲時を補ひて　丸
ひかりをゆつる幻の舎利　中
艶つくす内(ウチ)女房のあたなるが　丸
戸灘瀬のおくに文の名ヲ裂(サク)　角
哀ふく凩を炉に夕されて　中

花かすかなる桜かはゆき　徳
月好(ヨキ)に朧の傘(カサ)をわきはさみ　角
妖(ヨウ)狐を覚す岳の片笑　春
侘しらと離館に角(カク)をねとるらん　徳
刑の奴に籠(コ)物(モノ)たうびて　丸
堯矩(ノカネ)不曲(マカラ)舜準直(ノスミナラク)　春
山はその山川はその流　中
己(オノ)か几に窓皎(シラケ)たる東雲や　丸
かさしの燭にさかやきを剃(ソル)　角
就(ツキ)花御(ニ)報及延引候　中
この風百里程に和らく　徳

附尾

句ヲ干て世間の蠹(シミ)を払ひけり　友静
声彼蟬と一ツ樹の蟬　其角
只是這(コレ〳〵)木犀(カツラ)花ちる花散て　春澄
島須(シハ)臾(ラク)に四季生(ノトキナル)　信徳
星登(ミノ)ル斗米三銭也けらし　千春
月夜鼬の淫にほこりて　只丸

廓くらく碪のかすかなる所　虚中
樓檻よりたゝく釜の玉水　千之
雲と住(ム)近臣時にうつもれて　筆
歌の早尊(ハヤリ)を耳にとかむる　静
つく〳〵と男にほるゝ男かな　角
鏡のおくの我に抱付(タキ)　澄
翼ある魂空にはなれ去　徳
雨氤(ホノ)氳(グモリ)四風けはしき　春
山人の毒艸(クスリ)とる日をまれに　丸
毳(ニコケ)の女衽(エリ)を左リて　中
地に礼し天に拱(コマヌク)ならはしや　之
癡は七夕に念仏かすらん　角
大(ヲホ)侍従哀なる軒の月ふりて　静
歩(カチ)分し露の傾城ヲ見に　徳
あやにくや新都に花の觀(ヲモホ)デル　澄
温泉若く醒(サカヤミ(醒))をとく　丸
弥生猶胡鰹(メシカ)をおもふ海近し　春
富士晴けりと駅祝ふらん　之
慈にくたる阿闍梨の衣篠吹て　中

山名赤松茶にまふけたる　静
平生と汁かけ食のかうはしき　角
五帝三皇これ何者ぞ　澄
襁より産の言のあさやかに　徳
猫の気たつて梁を貫　春
起よとの鼓楼に登る暁や　丸
大悟に狂ふ月白シ風清シ　中
初艶時ある美目に疵なして　之
思ひ尽ずよ姑ヲ衛ル秋　角
夏火闥山里なから冷しく　静
一代蔵経くりかへしくる　徳
益気湯丸にし散にして用　澄
御番の公家の夜をつれ〳〵　丸
止々斎花隣雲亭雨洗詩台　春
烏の西に塔かすみけり　之
ひかた舟蜊蜆をふみ捨て　中
若衆蓑きる春の淡雪　静
坂いさめ此先の宿によい女郎　角
連枷うたふ時し松風　澄

寺田与平治重徳
板行

新(しん)山(さん)家(か)

新山家　其角

（題簽）

去年病てことし木賀山の温泉に愈ュ枳風もとより予か志を得われまたかれか性にさはらすさ月はしめの三日我野を出るに春よりも猶おほつかなくあはれふかき曙なりさるにひとりの奴の十はかりなる子をつれたりけるそ風雲のためにはまきるゝ事おほかりかくて道すからは何の事をもいはす文鱗の旅亭にたつねまかりてしはしはやすき事になりぬ一たひ温泉に口すゝきして此山の閑素をとへは

　翁さひ覆盆子尋る山路哉　　文鱗

　雲かとよ麦の穂みえて紙幟　　同

これらの句に先達せられて世波忘れたり

　岩根こす鞋に鱗(ヒレ)あり走鮎　　其角

　いちこ枝をれて水のむ猿に伴(トモナ)はん　　枳風

傍に薬師堂あり朝々暮々(アサナ〳〵ユウヘ〳〵)に此僧を訪て廬山恥かしからぬ笑歟むかし大原の十如院にして雪かきくもる三日のつれ〳〵にたえて古人の前句に祇長基-佐の作をふるはれたり（世に大原三吟ト云）我等三人かくある事温泉ならすしてはまたまれならんなと云て

　其一

しはしとや早苗より見る寺の門(ン)　　其角

しのぶあらそふ鳶尾(シャガ)の下葺(タ)　　文鱗

宗長の名を吐峰の月晴て　　枳風

　其二

涼ミ寐は木の間の星の光哉　　枳風

水札(ケリ)の羽音をぬらす山水　　其角

柴人にことゝふ宗祇何やらん　　文鱗

　其三

菅(スゲ)菖-蒲あはれに今朝の蛍哉　　文鱗

駅(ムマヤ)の蚊遣杉レ菜売ル声　　枳風

桜井か枕を我に旅寝して　　其角

身-口-意の三-業法-報-応の三如来この道に帰すとなれはと医王堂前に奉レ掛（于時貞享二年丑月日）

五月雨は比の字見ゆる日数哉　　文鱗

さみたれや湯の樋外山に煙けり　其角
此山につゝきてわつかの野ありみやき野と申ならはし侍るいかなる故にかとこれにたとるに霧よりみゆる卯の花の曙秋を啼猿かつこうの鳥すへてあはれおほし奇-石怪-松心とまらすしもあらす

奥や滝雲に涼しき谷の声

宗祇ならてはと聞え侍　我芭蕉翁の

山路来て何やらゆかし菫艸

千載集　山里の柴をり〳〵にたつけふり人まれなりとそらにしるかなこれにつけて

菴三蚊遣をしらぬ太山哉　文鱗
蛇住て斧にもれたる樗哉　枳風

いつくにて風をも世をうらみましよしのゝ奥もはなはちりけり山中に客あり此歌をもてなす

名所は海を見すして鰹かな　其角
照射みに念仏の上手誘けり　枳風

月清集　秋の野に妻とふ鹿をきかせはや山賤の身は情なくとも　鎌倉の隠士未琢此山に来て身まかりけるよしをあるしのものかたり侍るに哀ありて其句ひろはんといふに古き短冊を得させたり

木賀入湯の比ある人のもとより九献おくられけるをもてあそひて

所から木香かよけれは酒樽の
底しらぬまてなりにけるかな

浴日をつんてなこりなき宿なれはとく鎌倉にいそく枳風は猶日数なしとて芦の湯にあり其夜藤沢に泊りてあした江の島に詣侍る　所思

墨染に浦の鰹の蜑憎まん　文鱗
黴雨の嵐坐頭一曲聞え給へ　其角

片瀬腰越を通り侍るとて海士にかはりて

篠すがき熨斗を敷寐の五月哉　其角

新長谷寺に詣て

真帆片帆とまり舟　寺は嵐に涼けり　文鱗

漁家にやすらひ酒なとのみてかたはらの壁にものかきちらしたるをみるにも旅のあはれはもよほされけるむかし鴨の長明津の国こやといふ所にてなにわさしたるあまのすまゐそとよみしを人のかたりけれは

しとろなる芦のまねする葉蓼哉　文鱗

蠅なくは一はな折ん夏の菊　其角

鶴か岡を拝し五山そこ〴〵のすからをたつねて先建長寺にいたる或人ノ曰無レハ詩俗ニ了スレ人ノ(ヲカ)と

爰に詩なし我に俗なし夏木立　其角

名を得ぬ鳥の涼しさをなく　文鱗

円覚寺に入開山仏-光禅師を拝するに所から常ならす慈顔うるはしく生(イケ)る人にむかふかことし野鳥肩に馴レ白竜袈裟に現すと伝へしが在世のありさまをうつし倚子(イス)に白き鳩二つとまり袈裟に白竜をきさみそへたり谷虚にして山をのつからこたへ人無心にして物よく感すと沢庵和尚の相-山順礼にかゝせたまひける殊勝におほゆ

法の声空しき竈の崫哉　其角

常盤木の落葉見よとや鐘の銘　文鱗

かたはらに梵千大巓和尚の尊牌を礼し

香-一-炉はちすに銭を包けり　其角

彼和尚のいまそかりける世をおもへは開山より百六十三世となり十三にして業徳の名あめか下に擅(ホシヒマヽ)に一-箇無心の境に遊て詩は盛晩の異風を圧(アツ)し且(ツ)俳諧に自然の妙を伝え予か手を牽て鼓うち舞しめたまふよりそ万たふとき御事を耳にふれ侍る貧は原子也多病杜子にひとしことし貞享二年正月三日いそち七とせにして柴-屋の雪の中に消かくれたまふ御名世に勝れ給へれは葬喪し奉る事眼に富りしかれとも生前一盃の蕎麦湯にはしかしと愚集みなし栗に幻吁とゝめたる御句をしたへは涙いくそはくそや

三日月の命あやなし闇の梅　其角上

花洛に濱川自悦といふあり東行の頃彼和尚にまみえてかりそめなから法のはしくれを得たり予去年京にありてともに寒山か笑をとげぬ和尚の遷化を告たりけるにおもひしのへとて社のむかしの御句をとりかへして

涙花になに黄泉の秣(マクサ)ならん　自悦

草枕月をかさねて露命恙もなく今ほと帰庵に趣き尾陽熱田に足を休る間ある人我に告て円覚寺大巓和尚ことし睦月のはしめ月またほのくらきほと梅のにほひに和して遷化したまふよしこまやかにきこえ侍る旅といひ無常といひかなしさいふかきりなく折節のたよりにまかせ先一輸投机右而已

はせを

梅恋て
卯花拝ムなみたかな

四月五日

其角雅生

けふは文鱗亡父の日なれは道のほとりの草堂に拝をなし
て

樒なから地蔵に蓼を奉る　文鱗

と申てしさりぬわつかなる旅寐といへとも故郷いそかれ
て名に聞所あらましに過ぬ金沢つゐでよけれはとてうち
わかさしに日を負てゆく〳〵東奥の風月には猶こゝろを
やらす我むさしのゝ眼せはからぬ富-峰の奇秀はさらにも
いはす海-岸孤-絶(セツ)黄-金をつむへく覚えたれと草堂に渇を
たすくる茶さへなけれは

一-時心のとまる
へくもあらす

能化堂麦つく僧を気色哉　其角
島〳〵や鵜のゐる岩にやとからん　文鱗

狂雷堂　晋其角述
虚無斎　鳥文鱗校
丁亥郎　川蚊足筆

附尾

李下

昼顔は駒千代か留守をさかり哉　文鱗
なかれにすがる夏の陽炎　其角
舟積(ン)て野-渡に鴉を残(ス)らん　蚊足
笹折葺る雪の炭竈　鱗
月や経る花なき瓶に松さして　足
ことし雛持ッ娘かはゆき　下
(ウ)春の雨揚屋にしめる思ひ也　足
なみたあまたに文の名ちかへ　角
大将も士卒も同し日の命　下
芦か江ふかく埋む肩衝(ツキ)　鱗
津国や和泉の間(アヒ)と淡路島　角
鷺一つらに諸矢手挟(タハサ)み　足
我貧は其代の曾我の影法師　鱗

49 新山家

星にもかさぬ下着色あり　下
月に出て秋も蛙のねさめかほ　足
露はた時雨宮司灯(ヒ)を継(ク)　角
手とり鍋終(ツキ)の乞食とうかれけん　下
身延やいつこ母のねかひに　鱗
二舞一夜麦刈比の宿かして　角
雨の林の枇杷折にゆく　足
引(ケ)や子等無心和尚の土車　鱗
世を見る今の山城の京　下
鍛冶の槌片肌ぬきに烏帽子きて　足
君かりそめに会稽の聟　角
忍草木賀の涌泉(イヅユ)にみたれすは　下
くはれぬ樫をひろふたもとよ　鱗
鹿の音を道(ミチ)の酒屋に聞程そ　角
三人の僧の身を語る月　足
男山表八句をのこしけり　鱗
齢うれしく城に杖つく　下
くれはとり後藤屋敷と云ふれて　足
涼みあらそふひや水のもと　角

観音へ寝に来る鵁(カウ)の哀也　下
笠に太麻(ハラエ)の夜半の霜なき　鱗
これ虚瓢(キヨヒヨン)花のこするゑに身をかけて　角
宗祇宗長柳さくらゐ　足

書林　京堀川通錦小路上ル町　西村市郎右衛門蔵版

続虚栗

(ぞくみなしぐり)

続虚栗

（題簽）

風月の吟たえすしてしかもゝとの趣向にあらすたれか
いふ風とるへく影ひらふへくは道に入へしと此詞いたり
過て心わきかたしある時人来りて今やうの狂句をかたり
出しに風雲の物のかたちあるかことく水月の又のかけを
なすにゝたりあるは上代めきてやすくすなほなるもあれ
とたゝにけしきをのみいひなして情なきをや古人いへる
事あり景の中に情をふくむとから歌にていはゝ穿レ花蛺-
蝶深-深（トシテ）見点（スル）レ水（ニ）蜻-蜓款-款（トシテ）飛　これこてふとかけろ
ふは所を得たれとも老杜は他の国にありてやすからぬ心
と也まことに景の中に情をふくむものかなやまとうたか
くそ有へき又きゝし事あり詩や歌やこゝろの絵なりと　野
-渡無レ人（シテ）船自（ラ）横　月落かゝるあはち島山なとのたくひ成
へし猶心をゐかくものはもろこしの地を縮めよし野をこ
しのしらねにうつして方寸を千々にくたくものなりある
はかたちなき美女を笑はしめいろなき花をにほはしむは
なに時の花有つゐの花あり時の花は一夜妻にたはふるゝ
に同し終の花は我宿の妻となさむの心ならし人みな時の
はなにはうつりやすく終のはなはなをさりに成やすし人
の師たるものも此心わきまへなから他のこのむ所にした
かひて色をよくしことをよくするならん来る人のいへる
はわれも又さる翁のかたりける事あり鳰の浮巣の時にう
き時にしつみて風波にもまれさるかことく内にこゝろさ
しをたつへしとなり余笑ひてこれをうけかふいひつゝくれ
はものさために似たれと屈原楚国をわすれすとかやわれ
わかゝりしころ狂句をこのみて今猶折にふれてわすれぬ
ものゆへそゝろに弁をつゐやす君みすや漆園の書いふも
のはしらすと我しらさるによりいふならし

こゝに其角みなし栗の続をえらひて序あらんこと
をもとむそもみなしくりとはいかにひろひのこせ
る秋やへぬらんのこゝろはへなりとやおふのうら
なしならはなりもならすもいひもこそせめといな
ひつれとこまの瓜のとなりかくなりと猶いひやま

すよつて右のそゝろことを序と成とも何となりとも名つくへしとあたへけれはうなつきてさりぬ

江上隠士素堂書

続虚栗集

春之部

改正

新年の御慶とは申けり八十年　釈任口
誰やらが形に似たりけさの春　芭蕉
めてたさに嫌ひも誉る雑煮哉　自悦
桑さして栄(サカ)行畑や老の春　杉風
年の花富士はつほめるすかたかな　嚢坩
うはそくか隣をきかん四方拝　文鱗
元日や家にゆつりの太刀帯ン　去来
しら梅にかくす名もなし古男　挙白
先〳〵の餝みて行春日かな　沾蓬
蓬萊に児這かゝる目出たさよ　山店
拝む間は花をまたする朝日哉　魚児
鶯や雑煮過たる里つゝき　尚白
おもしろの春有かたき日和哉　千春
物と我みな去年なから初日哉　観水
日の春をさすかに鶴の歩哉　其角
草まくら薺うつ人時とはん　山川
松とりて七種はやすあらし哉　如泥
総角か手に〳〵手籠や薺つみ　野馬

遊大音寺

梅か香や乞食の家ものぞかるゝ　其角
峰の梅松をけ落す詠かな　文鱗
梅の花義経なりし姿かな　曲水

老慵

鯛よりは海苔をは老の売もせて　芭蕉
蕗のとうほうけて人の詠かな　嵐雪
古草や新艸ましり土筆　文鱗
よくみれは薺花さく垣ねかな　芭蕉
春ふれて川辺花さく根芹哉　冬市
路〳〵は束(ツカ)ねてもちる杉菜かな　沾徳

玉ほこの鍬にあれたる杉菜哉　全峰

つゆ〳〵と焼野にはやき蕨かな　由之

春行

昼の鐘箒木きゆる霞哉　仙化

しら〳〵と霞はなるゝ出城哉　沾蓬

白鷺の翅に霞む片帆かな　紋水

村の鶴つくはに見知るかすみ哉　巴風

巻付て筧をつたふかすみかな　野馬

寒食の烟まきれぬかすみかな　青亜

同游とかしまに詣ける比海
の日の波を離出るに武蔵
野の月といつれか
さきにせんといひて

松陰や旭見に行春の海　不卜

海雲よる苫屋に近き朝日哉　峡水

浦おしや鵜の羽に曇る春日影　扇雪

かとりにて

巣のためか幣くはへ行村雀　峡水

板久の一夜

うき名にもあらねは

朧月いたこも捨ぬ情かな　同

中山の塔を見やりて

広き野の塔みよとてや舞ひはり　不卜

宿からん真昼をおろす諸ひはり　琴風

旅行

こゝろよき
し水に
鬢を撫て

のとけしや鸛（コウ）の飛込鬢かゝみ　半残

巣立より笹ふみたゆむ雀かな　舟竹

すゝめ子に肌なつかしき娘哉　三園

雀子やあかり障子の笹の影　其角

結廬在人境

夕日影町半（ナカ）に飛こてふ哉　同

くりかへし麦のうねぬふ小蝶哉　曾良

世につかはるゝ身の
閑ならぬに

肩絹をやすむる蝶のねふり哉　巴風

青柳にいよ〳〵睡るこてふ哉　嵐蘭

行すりに目をつまれたる柳哉　衛門
手をあけて児立習ふ柳かな　魚児
曲れるをまけてまからぬ柳哉　其角
柳には鼓もうたす歌もなし　同

おもはすつはくらに
つらを蹴られたる猫あり

妻もやと燕見かへる野猫かな　魚児
哺を分る孤燕のねくら哉　観水

春晴

海つらの虹をけしたる燕かな　其角

重三

不産女(ウマス)の雛かしつくそ哀なる　嵐雪
雛たてぬ家も女は住れけり　孤屋
小式部か其世を雛の小袖かな　紋水
所〳〵の顔こそかはれ桃の宴　挙白
もとかしや雛に対して小盞　其角

いもうとのもとにて

世忘れに我酒かはん姪か雛　其角

草庵

花の雲鐘は上野か浅草歟　芭蕉
鸛(コウ)の巣もみらるゝ花の葉越哉　同
木の間より花のものいふいんこ哉　風虎

ふるきをしたふ中に
りうたつか小うた見出て

独もゆくふたりも行候花の山　文鱗
いつ〳〵より花には沈む胸の中　挙白
花折レと君御意あらはいかにせん　仙化
さそはれて棋打かけたる花見哉　安重
何事に人走るらん花さかり　由之
花うへていつ庭の痩なをすへき　巴風
朶ふむも花の日影はこそばゆし　魚児

嵯峨の花みけるに

花盛古ルもろこしを尋けり　亡人 萩露

詠唯一心

花に来て人のなきこそ夕なれ　観水
妻にもと幾人おもふ花見哉　破笠
我年の花にはこりぬ小袖かな　蚊足
花を得て人に懐るゝ産子哉　卜千

御霊屋はさそ入あひの花盛　風笛
あらおそや爪(ツマ)あかりなる花の山　嵐雪
花にあかぬ憂世男の憎き哉　去来妹 千子
花見にと母につれたつめくら児　其角

日々酔如泥

花持て市の礫にあつからん　同

春興　露沾

川尽て鱅(カシカ)流るゝさくら哉　露沾
黄精(アマトコロ)ある峡の日の影　キ角
春を問童衣ｰ冠をしらすして　沾徳
壁なき間屋に残る白雪　露荷
月冴て砧の槌のつめたしや　嵐雪
人は風ひくね覚ならまし　虚谷
(ウ)傾城の淋しかる顔あはれ也　角
初秋半恋はてぬ身を　沾
蛬(キリぐス)歯落て小歌ふるへけり　荷
楼おりかぬる暁の雁　徳
鼓うつ田中の月夜悲しくて　谷
侘てはすかる僧の振袖　雪
思ひ得す楊弓くるゝ園深し　沾
三たひ浴みて夏を忘ル、　角
我鞍に蟬のとゝまる道すから　徳
砂吹上る垣の松風　荷
燭とりて花すかしみる須磨の浦　雪
小の弥生の光みしかき　谷
濃墨(ナコキ)に蝶もはかなき羽を染て　角
氷を涌(ワカ)す蓬生の窓　沾
うれしさよ若衆に紙子きせたれは　荷
東に来てもまた恋の奥　徳
常陸なる板久(イタコ)にあそふ友衞　谷
笑に懼(オチ)て沈む江の鮒　雪
松並ふ石の鳥居の陰くらし　沾
凩夜〳〵に寒ン笛を吹　角
葺かけて月見の礒屋荒にけり　徳
御廟の衛士か袂露けし　荷
角切て裾野に放す鹿の声　雪
鉢に食たく篁の陰　谷
(ウ)山おろし笈を並へてふせく覧　角

聞に驚く毒の水音　沾
苫買によする湊は人なくて　荷
雪の正月を休む塩焼　徳
万葉によまれし花の名所よ　谷
霞こめなと又岩城山　雪

日当午

風なくてかけろひ落る桜哉　蚊足
朝滴(シツク)襟につめたきさくら哉　湖風
日さかりやおとなしく見ゆ山桜　文鱗
雨はれて地息ふむらんさくら狩　由之
一すしに芝ふみからすさくら哉　全峰
炭うりもひとへ桜のあるしかな　野水

二荒の山ふみして

あれよ〳〵といふものひとり山桜　枳風
ちるは〳〵酔のさめたる夕さくら　自悦
ふたり〳〵てさくら尋る春辺哉　且藁
筏士の笠うつくしき桜かな　嵐水
禁札の名はかり寺のさくらかな　かしく

石竈(クト)にさくら散しく夕哉　松江
実誠人にもまるゝさくらかな　孤屋
さま〳〵の人にもあかぬ桜かな　野馬
抱付て梢をのぞくさくら哉　魚児

剃髪

西行の水にめしたくさくら哉　荷兮

勢田春望

やまさくら身を泣歌の捨子哉　其角

仁和寺

電のやとり木なりしさくらかな　同

田舎わたらひして名もなき
寺〳〵の花見けるに

誰卒都婆たれたる藤の重からん　枳風

釣台

舟牽ん洲浜の藤の夕日哉　沾蓬
山吹の鮑に餌(エバ)まく端居哉　冬市
山吹をいさむる蝶のその羽哉　濁子
岩つゝし手さし出せは舟早(よカ)シ　羽笠
やはらかに女(メ)松生そふつゝし哉　尚白

あと先に身を木かくれやつゝし売　沾荷
築山を瓿すのみそ岩つゝし　宇斉
咲までは待人もたぬつゝし哉　破笠
木蓮華始め終りや岨のはた　文鱗
恋よらんひしき干たる蜑の門　三園
春もはや山吹しろく苣苦し　素堂

春　朝

蔀あけてくゝたち買ン朝またき　嵐雪

春　昼

午の時おほつかなしや茶摘歌　蚊足

春　夜

たそかれの端居はしむるつゝし哉　其角

艸菴を訪ける比

永き日も囀たらぬひはり哉　芭蕉
原中や物にもつかす鳴雲雀　同

と聞えけるに
次て申侍る

啼〱も風に流るゝひはり哉　孤屋
烏帽子を直す桜一むら　野馬

山を焼有明寒く御簾巻て　其角
光けうとく網に入魚　屋
水鳥や碇のうけの安からぬ　馬
梢活(イキ)たるゆふたちの松　角
禅(ウ)僧の赤裸なる涼みして　屋
李白に募(ツノ)る盞の数　馬
俳諧の誠かたらん草まくら　角
雪の力に竹折ル音　屋
樫原や猪(イノシシ)渡る道まけて　馬
男に見えぬ女かなしき　角
きぬ〱を盗入ルと立さはき　屋
今はたぶさにかゝる髻(モトヽリ)　馬
血の涙石の灯籠の朱をさして　角
奥の枝折を植る槇苗　屋
降〱もる花にあられの音ス也　馬
月夜の雉子のほろ〱と鳴　角
せきだ(名)にて鎌倉ありく弥生山　屋
昨は遠きよしはらの空　角
物くはぬ薬にもなれわすれ艸　馬

手習そます角入てより　屋
親は鬼子は口おしき蓑虫よ　角
折かけはらん月の文月　馬
唐柜の起さぬ家に吹なひき　屋
四手漕入ル水門の中　角
うち残す波の浮洲の雪白し　馬
葉すくなに成際(サカヒ)目の松　屋
珠数引のあたり淋しく寺見えて　角
あき乗物のたて所かる　馬
被(ウカツキ)敷その夜を犬のとかむらん　屋
うきふしさはる藪の切そぎ　角
五月雨塗さす蔵に苫きせて　馬
海の夕も大津さひしき　屋
思ふほと物笑はまし花の隅　角
つくし摘なる麦食の友　馬

続虚栗

夏之部

伏見西岸寺の地蔵に
まうて侍りて

(夜錦集)本尊に油かけた敷ほとゝきす　意朔
蜀魂星に背をする高根哉　暮角
郭公なき〳〵飛そ閙はし　芭蕉
淀舟や犬もこかるゝほとゝきす　其角
杜鵑は腹立声やらん　枳風

妻を供して

旅たちける人に

馬の間妹(アイ)よひかへせほとゝきす　其角
時鳥一声ましる鶴の声　杉風

待乳山三句

舟場迄うつゝ来ぬるよほとゝきす　如泥
夜こそきけ穢多か太鼓子規　其角

ほとゝきす麦搗臼に腰かけて　蚊足

蚊足に

すゝめられて

郭公麦つく臼にこしかけて

たそかれ渡る青鷺の空　キ角

川風や衣干(キヌ)揖(スカイ)にそよくらん　角

樽をつくして皆童なり　蚊足

初秋の潤はわきて月なれや　同

扇の日記(ニキ)を捨る関の戸　角

萩(ウ)のねに所の土を包み行　足

僧と咄して沓静なる　角

瓦工(フキ)おりよといそく入相に　足

神鳴つへき雲を詠て　角

折ふしの狂惑(キチカヒ)つらき命哉　足

島原近き吾草の庵　角

忍啼(キ)ふるきふとんに跡さして　足

前髪惜む月もこよひそ　角

江は露に亭の蠟燭白くなり　足

馬に信(マカ)する瀬田の秋風　角

花盛梟(カケ)ならへたる首を見て　足

勇士の土産此梅を折　角

美(ナ)女の酌日長けれとも暮安し　同

契めてたき奥の絵を書　足

或はしらゝ住吉須磨に遣(ツカハ)され　角

乞食に馴て安き世を知　足

町くたり二声うらぬ茶筅売　角

夜は飛(ヒ)田の狐也けり　足

高灯籠杪の梢に(あか)おりあけて　角

晩レ稲花さく湖の隈(クマ)　足

蜻レ蛉の一かたまりに流るなり　角

隣ならへて機(ハタ)の糊ひく　足

通(リ)なき冬の駅の夕あらし　角

降かゝりたる雪の玉味噌　足

釜(ウ)かりに松の扉をたゝかれて　角

反故そろゆる閑(ヒマ)な偸(ミ)そ　足

顔あまた都の友のなつかしく　同

豆くふ数も人に笑はれ　角

世中の花に駝(セムシ)のよろほひて　同

寺より寺にあそふ春の日　　足

妾在閨　十八句

眉帚(ハキ)の露うつ罌子(ケシ)の匂哉　　巴風
蛍消よと帳の裾とく　　仙化
相とのゐ二つの棋笥に枕して　　キ角
袖口寒く炉に炭を次　　風
旅人の銭よむ音も夕月夜　　化
かちかを生(イケ)ん石鉢の水　　角
隠(ウ)家や杉垣はさむ秋深し　　風
傘持しはし君か名を問　　化
滝見して乱るゝ鬢のあてやかに　　角
山鳥うつすおろの盞　　風
花の跡独行身そいかめしき　　化
熨斗目上下きならしの春　　角
殊更に薄雪かゝる門かさり　　風
いさよ出口のせんじ茶の音　　化
道心にかく志さす恋もしれ　　角
泪別るゝ小仏の関　　風

一鞭に数行牛の月の影　　化
薄とりまく遠山の腰　　角

四月八日母のみまかりけるに

身にとりて衣かへうき卯月哉　　其角

初七夜いねかねたりしに

夢に来る母をかへすか郭公　　同

五七の日追善会

卯花も母なき宿そ冷しき　　芭蕉
香消のこるみしか夜の夢　　キ角
色〳〵の雲を見にけり月澄て　　嵐雪

各悼

卯花に目の腫恥ぬ日数かな　　露沾
蚊のあとをみれは悲しき別哉　　枳風
眉ひらく為に手向よかきつはた　　沾徳
物あれはもの淋しゝや夏木立　　挙白
啼入て音もなしそれは時鳥　　嵐雪
夏草に活たるものはなみた哉　　蚊足
蚊遣にはなさて香たく悔み哉　　去来

生顔や夏草そよき風の音　野馬
芥子の花ともにうつむく泪かな　全峰
ひとへものしほるにやすき袂哉　魚児
　たのみなき夢のみ見けるに
うたゝねのゆめにみへたる鰹かな　其角
　その夢に戯ル
下部等に鰹くはする日や仏　嵐雪
　端午三七日にあへりけれは
我歎かぶとうらやむわらへかな　其角
何古郷こゝも菖のやとりかな　紋水
急き起て菖かそふる日向哉　魚児
姦(カシマ)しや菖さす日の風の音　枳風
幟みぬ妹かり寒き外面かな　彫棠
馬にのる侍清し花菖　仙化
白芥子に引もとさるゝ夕かな　魚児
花芥子や蘇二重の垣の中　沾蓬
　禾村
筍よ竹より奥に犬あらん　其角
笋やかり寝の床の隅よりも　嵐雪

　自詠
髪はえて容顔蒼(アヲ)し五月雨　芭蕉
たま〳〵に三日月拝む五月哉　去来
さみたれや隣にわかる水の径(ミチ)　沾徳
さみたれに我から曇る目鏡哉　巌翁
点滴を闇のつほみか白丁花　巴風
菅笠に娵を見せたる田植かな　吼雲
合羽着て友となるへき田植かな　其角
母の影ふみて田植の女かな　野馬
夕景や枴(ヲウコ)に着する早苗笠　冬市
雨の日の早苗に休む燧かな　由之
　暑き日のやとりを乞て
入相に田歌のひゞく里とはん　観水
ものすごく男はかりの田植哉　不卜
都見ん小桶に鯲はなかつみ　高政
夜をのこす水鶏は老を敲(キ)けり　濁子
続松もむすほゝれ行鵜縄かな　玖也
月は入我等は出る鵜舟哉　風虎
　甲斐山中

山賤のおとがい閉るむくらかな　芭蕉
古寺や僧なまめかす椶櫚の花　三園
　むらきみのもとにて
世をとへは安く茂れる榎かな　自準
　田家
むれ〱て蛍うるさし夏の月　枳風
つかまれてまた放さるゝほたる哉　魚児
かやり火に煠けて逃るほたる哉　渓石
消かねて芦にうたるゝ蛍かな　野馬
君起よ人しつまりて蛍みん　孤屋
暁の衣に残る蚊遣哉　観水
　木津へまかりて
山里の蚊は昼中に喰ひけり　去来
かやり来て雨の道とふ夕かな　黄吻
おちの人添寐そゆかし枕蚊屋　千春妻 綾戸
旅寐して香わろき草の蚊遣哉　去来
夜あらしや吹おとしたる蟬の声　卜千
唖(オシ)蟬の鳴ぬ梢もあはれ也　杉風
洗濯の袖に蟬鳴夕日かな　杜国

　土さへさけててる日にも
蝿追に妹忘れめや瓜作り　其角
かく成ぬ我山里の瓜の味　翠紅
瓜喰に松陰せはき日なた哉　李下
夏の日の入あひつらき雀かな　欺心
なつの日に袂まつほす汐場哉　好柳
　誦銭神論
一文の銭いたゝけや夏の水　蚊足
踏越(コ)えて亦たちもとる清水哉　嵐水
合歓木の睡りてぬるき清水哉　仙化
さゝれ蟹足はひのほる清水哉　芭蕉
　くらまの竹きりにまかりて
　山林のやとりもとめけるに
　市原寺にて
陰になけ小野の小町も蟬の空(カラ)　千春
虫はむと朽木の小町ほされけり　其角
　九折のほりける時
山鳥もけうとき闇の木立かな　千春
侘しらに貝ふく僧よかんこ鳥　其角

隣家に樹をすく人有
その四時先後を愛
する事をしらす

何かいはん六月桐を植る人　同

心法其ノ精コト口耳粗ナリ

蝿を打てともに生死を軽くせん　幻吁

納涼

時分はよし土用初の舟遊山

たが為そ朝起昼寐夕涼　其角

落二得閑ヲ一

世をみれは辻に法きく涼み哉　文鱗

人の子をほめて端シ借るすゝみ哉　李下

橋くゞる櫓音にすゝむ夕かな　冬市

宿二尊院

涼む夜や愛宕にともす火の行衛　観水

更る夜を隣に効ナラふすゝみかな　去来

涼しさや雷遠き夕間昏　冬柏

塩竈やおのか扉のうら涼み　由之

暮またて祭の留守を涼かな　虚谷

奥州黒塚にて

夜錦集 つかの間や鬼こもるとも夕すゝみ　維舟

源義経平家追討の時
上洛に鐙にさわりける石とて
その所を鐙摺の石と申とかや

あふすりの石もふんはれ夕すゝみ　同

逐涼　二句

涼しさや先武蔵野のよばひ星　其角

闇の夜やすゝむ団の音はかり　文鱗

雨後

つゝまれて水ものびたる蓮かな　野馬

蓮うけて師の閼伽包ム清水哉　卜千

見かくれに麻刈笠のくろみかな　全峰

昼顔にことたる蟻の日陰哉　且只

ひるかほの花しほみたるあつさ哉　破笠

ひるかほや猫の糸目になるおもひ　其角

山吹やおしむ胡キ瓜の花の露　濁子

江州にまかりて回郷

干瓢を太刀の緒にして都へは　自悦

つはくらや日陰にすかる角豆垣　鉤(釣カ)雪
一花にふたつ筋あるさゝけ哉　虚谷

草庵の急雨

夕立に家流したる乞食哉　巴風
夕立や鉢巻したるわたし守　仙化
夕立に鶯あつく鳴音かな　其角
夕立や箕(ミ)に干ス糧のしはしたに　僧 宗派
夕立に座敷見らるゝ主哉　沾蓬

午熱

病人(ム)をおもひやらるゝ土用哉　蚊足
鎧着てつかれためさん土用干　去来
うたゝねや揚屋に似たる土用干　其角

或人所持のたんさくに

何もなし我頭陀袋夏祓　沢庵

続虚栗

秋之部

日もくれぬはや舟にのれ男七夕　風虎
天川あらしも蚊屋も明にけり　自悦
星合や瞽女(ゴゼ)も願ひの糸とらん　嵐雪
槿を星にわかぬるわかれかな　槿花
懸針や船引とめん天の川　女 綾戸
大内のかさり拝まん星まつり　女 千子
星合や折にふれつゝ鍋かさん　寿閑

旅思

七夕にかされぬ旅のね巻哉　由之
星合や女の手にて歌は見ん　其角

贈槿花堂

蕣に曲ル念ひの一つかな　露沾
蕣や壁の日影の今すこし　蚊足
蕣は二人なかめてあしき哉　杉風

驚夜雷

ことに晴て彝雷に潔（イサギヨ）し　　其角

寄（ス）二李下一

いなつまを手にとる闇の紙燭哉　　芭蕉

いなつまや案山子のあゆむ川向ヒ　　岩泉

いなつまやおり〳〵藪のひまうれし　　湖風

いなつまに目をとられたる闇路哉　　魚児

遊女ときは身まかりけるを
いたみて久しくあひしれり
ける人に申侍る

露烟此世の外の身うけ哉　　去来

父母の影灯籠ふまぬ光哉　　由之

なき人の数を苧（オ）からに折レけり　　全峰

たか魂の家に粟くふ鼠かな　　文桃

観音堂にて
びんづるに衣
着するを見て

女（メ）餓鬼すら盆会に逢や法の道　　文鱗

盆迄は秋なき門の灯籠哉　　嵐雪

貧

魂やこん祭らぬ宿そ恥しき　　蚊足

対愁

きのふ見し人や隣の玉祭　　其角

たまゝつり門の乞食の親とはん　　同

送り火の山はきのふのともし哉　　観水

鯛つらん浦島か子の生身玉　　苔翠

志賀の花園にて

はなそのは中〳〵踊に顕れたり　　自悦

躍子よあすは畠の艸ぬかん　　去来

盲目も舷（フナハタ）たゝく玉火かな　　春雷

吹よせて江の一隅や水と霧　　苔翠

はぜ釣て千尋もとめぬ小舟哉　　春雷

禅師にまみゆ

おきわかれとむるものなし女郎花　　文鱗

遊女の酒もりけるに

いさや禿待乳のかたの萩からん　　同

女郎花恋より後の花なるか　　景道

下闇もまはゆき比の一葉かな　　冬柏

常陸へまかりて

牽舟のあとに起たる穂芦哉　全峰
花の秋草にくひあく野馬哉　曾良
萩原や一夜はやとせ山の犬　芭蕉

旅宿

木槿垣花見なからに寐入けり　観水

入湯の比

夕萩のつゆに見かへる湯顔哉　紋水

木賀山中

秋よ猶すくなき家を敲ク雨　挙白
鴇トキ啼て雲に露ある山路哉　同
山めくる鰹に秋のしくれ哉　紋水

兄去来に供して
伊勢へ詣ける道すから

初旅のこゝろを

伊勢迄のよき道つれよ今朝の雁　女 千子
柴草の露もちかぬるそたち哉　同
かけろふの雨をよこ切羽風哉　沾荷

聴閑

蓑虫の音を聞に来よ艸コの庵　芭蕉

聞にゆきて

何も音もなし稲うちくふて螽哉　嵐雪
むしのねよ手にとる草の一つかね　沾蓬

聖護院の宮覚寛法親王
みね入有しを
拝み侍りて

峰入は宮もわらちの旅路哉　宗因
かけ出の貝にもてなす新酒哉　其角
早稲酒やほこらにかけし竹の筒　虚谷
さひしさは鳩吹習ふたとり哉　野水
暮の山遠きを鹿のすかた哉　其角
笠とりて富士見る岨のかゞし哉　紋水
秋の野や見かへる小鳥行ク小鳥　虚谷
世中やわたりくらへて四十から　風虎

草庵の月見

名月や池をめくつて夜もすから　芭蕉
雲折〳〵人を休むる月見哉　同

鹿島に詣ける比宿根本寺

寺にねて誠かほなる月見哉　同
名月よ戸明て又も寐ん名残　枳風
月見して蚊の声よはるはしめ哉　李下
舟人と成ても見たしけふの月　観水

月下独酌

月見はや紫式部妻にして　蚊足
月露の萩切ほとく今宵哉　巴風
たれ〳〵も東むくらん月の昏　去来
我人(家カ)とあらそひなくて月見哉　野馬
月見船雲に乗込ム橋のした　孤屋
橋の人月見る是や木曾の猿　破笠

宗鑑か弥三郎のとき
貞室か彦左衛門のむかし
影に対して三人の曲

古袴月に舞フ我を今宵哉　文鱗

嵯峨に小屋作りて
折ふしの休息
仕候なれは

月のこよひ我里人の藁うたん　去来

日比より富士はちいさし今日の月　冬市
月満て欄干うこく今宵哉　由之
盲より唖のかはゆき月見哉　去来
名月や御ミ堂の鼓かねて聞ク　其角

良‐夜ノ雨意

いさよひも心つくしや十四日　同
尋常の三日月見えよ今日の雨　彫棠

月撰ムレ人ヲといふ題を

関守をうけたまはらん風破の月　虚谷
我顔の黒くなるまて月はみん　魚児
商人も見るものとてや舟の月　文鱗
名月や鶴のひあかる土手の陰　且只
名月を寐るなと鳥の乱けり　濁子
物かげをこよひの月の曇り哉　蚊足
中に出て月一筋や宵の雲　似兮
名月は汐になかるゝ小舟哉　吼雲
鉤のうけになかるゝ月見哉　一林
名月やわが名月はいつあらん　如泥

終夜玉しゐつかれける比

秋の夜はなく夢はかり寐覚哉　幻吁
一しきりねられぬ夜の長さ哉　李下

旅なれてまとろむほとになる
宵をおもひねとこそ人も
しりけれといふ心によりて

秋の夜に寝ならふ旅のやとり哉　女 千子
長き夜も旅くたひれにねられけり　去来
寐かゝりて遠く成行砧哉　破笠
旅人に村とことはるきぬた哉　全峰
山里や碪にかはる夫婦して　枳風
子の泣てしはし音やむ砧哉　山川
ふるさとの火燵をおもふ碪かな　蚊足

よしのゝ奥に
一夜あかして

砧うちてわれに聞せよや坊か妻　芭蕉

独　床

ひとり寐て砧を笑ふ鼠かな　西比

秋興　廿四句

面白く物うきものは砧かな　露荷
灯遠き穧(イナツカ)の雨　キ角
榧を簸(ヒ)ル嵐の窓の月澄て　同
竿さしなから睡る筏士　荷
ちらくと霙ふりこむ襟(エリ)寒し　同
かしらを包ム鷹居(タカスヱ)て行　角
山寺の鼎(カナヱ)をならす朝もよひ　荷
松に笠ぬく暮‐露の起臥　角
新敷鳴子をならす瓜作り　荷
車あげたる淀の落水　角
夕闇の道しる馬は支離(カタハ)にて　荷
兵やとふ三‐石の粟　角
先独(リ)花ぬす人をからめ置(キ)　荷
酒買に行草菴の春　角
水ゆるゝ橋の上より網打て　同
游習(ヲヨキ)ひにあそふ鴨の子　荷
夕月に怠(タ)る所‐作をくりうめん　角
たゝぬ戸立る竃の窓　荷
夜寒さに妹か夜着きてあたゝまる　角
召(シ)の車に粧ひする程　荷

御盞（ミ）初め手のなき初桜　角
　四方の連歌は春の大和路　荷
さすなると傘に諷はん朧月　角
　牛あらふへき賤かなはしろ　荷

　重　九

　三十九

若き名のなこりを祝へ菊の花　蚊足

　四　十

年既に菊おもしろく成にけり　同
菊の情春にあかるゝ秋もかな　露沾
御薗生に男なぶらん菊あはせ　巴風
年〱の花の香くやし夜の菊　衛門
籠鳥のゆるすにうとし薗の菊　其角
菊植て我と水くむ朝かな　岩翁
いかて我七百（ナヽヲ）の師走菊に経ん　其角

　艸菴雨

起あかる菊ほのか也水のあと　芭蕉
痩なからわりなき菊のつほみ哉　同
雨重し地に這（ハフ）菊を先折ん　其角

雨数日市はかくあれ菊の花　文鱗

　旅　行

落栗のいがありとても祝かな　観水
落栗に萱ふきかゆる嵐かな　透雲
むら雨に甲斐ある陰や椎の音　岩泉
ふみながらとらぬや椎の九折　三翁
茸分る夕日ふもとの花表哉　観水
童さへ捨し径（タ）のいくち哉　同
杵落て松茸みえぬ匂かな　魚児
松茸や松より奥の鷹の声　孤屋
松茸や一日〱の雨の露　三翁

　京出る日

片腕はみやこに残す紅葉哉　キ角
かつちりて御簾に掃るゝ艳哉　同
谷ひとつ里餉にくもる紅葉哉　冬市

　旅　行

楽書や梢のこりて松の蔦　巴風
我袖の蔦や浮世の村時雨　遊女薄雲
峰の松鱅（カシカ）あらしの夕哉　冬市

秋山　二句

甲斐かねも見直す秋の夕哉　露沾
秋山や駒もゆるかぬ鞍の上　其角

閉レ門覓レ句

秋寒く日土圭くもる扉かな　三園
おのれさく菊鶏頭よ垣の中　舟竹

秋尽

僧の入ル縄のすたれよ秋の昏　不炊
こまりけりうらのとまやの秋のくれ　一鉄

六容　歌仙

（述懐）乞食にもかうはなられぬかゝし哉　破笠
をのれを責る虫に蟷螂　其角
よもきふの砧に憎む音を打て　同
月にはゆるせうき柴の数　笠
此方も年とりかぬる暮の雪　同
心たふれぬ歌のみなし子　角
（恋）人しれす恋する恋の上手さよ　角
別れは見よと床に金おく　笠
名はうき名鎧をかざり馬たてゝ　同
しうとめつらく妹に逢ぬか　角
鍋わりて筑摩の市にうらむらん　同
色酒の世にはふれ婀めく　笠
（旅）川舟に火燵して行波まくら　同
聞捨かたき鳥羽の稲磨　角
秋風や笠に宿かる天か下　同
松を産所にたそかれし月　笠
米買に明は越へき花の雲　同
雪消を出る甲斐の馬工郎　角
（無常）夢の春かるかや堂もよそに見し　同
死出の烏の蠟燭を喰　笠
哀しれ闇の捨子の啼ねいり　同
我もとゝりはきらぬ髪結　角
薤は躍みるらんはかなしと　同
露よりきゆるかけほしの影　笠
（釈教）月澄て僧と隣に咄す声　笠
仏木どりて暁をまつ　角
定めなき美濃の谷組（汲）打納め　同

鐘鋳にあはん猶はつせ山　笠
癩(モノヨシ)のものうき富の世を悟り　同
柴の戸深く維摩聞らん　角
神祇
乞聟に度会(ワタラエ)ゆつる家の風　同
名乗うれしき幣(ヘイ)竇をとる　笠
さ月待加茂の祭の馬からん　同
瘧(ヲコリ)落よと榊いたゝき　角
かつ色を軍の神に花折て　同
春をさかへん大宮司か畑　笠

曾久美那之九梨

ふゆの部

十月十一日餞別会

旅人と我名よはれん初霽　芭蕉
亦さゝん花を宿〳〵にして　由之
鶺鴒(カヤクキ)の心ほと世のたのしきに　其角
糧を分たる山陰の鶴　枳風
かけありく芝生の露の浅緑　文鱗
新(シ)舞台月にまははや　仙化
中の秋画工(ヱカキ)一つれかへるなり　魚児
艫てうしておくる漢舟(カラ)　観水
ウ
神垣や次第にひくき波のひま　全峰
齢とをしれ君か若松　嵐雪
酒のみにさをとめ達の並(ヒ)居て　執筆
卯月の雪を握るつくはね　翁
鰥(ヤマメ)つる袖つくはかり早瀬川　由之
蘿一面にのこる橋杭　其角
道しらぬ里に砧をかりに行　枳風
月にや啼ん泊瀬の籠人(コモリト)　文鱗
葛籠(ツヽラ)とく匂ひも都なつかしく　仙化
おもはぬ事を諷ふ傀儡　全峰
途中(ミチ)にたてる車の簾(ス)を巻て　翁
沖こく舟にめされしは誰(タツ)　由之
花ゆへに名の付(ク)波そめつらしき　嵐雪
別るゝ雁をかへす琴の手　挙白
名
順の峰しはしうき世の外に入　観水

萱のぬけめの雪を焼家　仙化
老の身の縄なふ程にほそりける　由之
君流されし跡の関守　翁
明暮は干潟の松をかそへつゝ　挙白
命をおもへ船に這(ハフ)蟹　キ角
起出て手水つかはん海のはた　嵐雪
しらぬ御(ミ)寺を頼む有明　観水
薅や石ふむ坂の日にしほれ　全峰
小畑さひしき案山子作らん　枳風
艸の戸の馬を酒債(サカテ)におさへられ　翁
つねみる星を妹におしゆる　挙白
薫のしめり面白き夕涼み　仙化
幟かさして氏の天王　其角
御牧野の笛吹習ふ童(ワラヘ)声　全峰
憎くるはしく腰にさす杖　枳風
見くるしと文字の子昴ヲ哢(アサケリ)て　其角
堺の錦蜀をあらへる　嵐雪
隠家や寄虫(カウナ)の友に交リなん　観水
筏に出て海苔すくふ比　翁

谷深き日うらは花の木目のみ　挙白
声したれたる春の山鳥　由之

芭蕉庵主回郷

時そ冬芳野をこめし旅のつと　露沾

烏巾を送る

もろこしのよしのゝ奥の頭巾哉　素堂
留主の中猶痩ぬへし冬の菊　不卜
木からしの吹行うしろすかた哉　嵐雪
鳴千鳥富士を見かへれ塩見坂　杉風
比しもや大井の嵐佐夜の霜　蚊足
橋まては供してふまん今朝の霜　仙化
旅寐さそ紙小二つはなからまし　枳風
朝毎の紙小やおもき霜の松　李下

葉下のすきものをの〱句あり

ぬきん出て送り申さん時雨哉　文鱗
時雨〱に鎰かり置ん艸の庵　挙白
箱根山しくれなき日を願ひけり　由之

蒲団借ス女もあらし旅の宿　露荷
萩枯ぬむつの紙絹みやこまで　沾蓬
宿はつれ霜消る間は朝茶めせ　如泥
冬の日を猶したはるゝほまれ哉　渓石
冬かれを君か首途や花の雲　其角

詩歌文章は
もらし侍る

しくれづく雲にわれたる入日哉　杉風
眠り来る駕籠にもてなす時雨哉　沾蓬
雲よりも先にこほるゝしくれ哉　去来
よくきけは北にかきらぬ時雨哉　蚊足
蛛のゐの破れにとまる朽葉哉　冬市
蟬のからつれて舞行木葉哉　為睦
さま〳〵の木葉集る山路哉　枳風
牛岨に蹄をかくす木葉かな　好柳

深川夜泊

木からしや夜の木魚に吹やみぬ　李下
枳に木からしいたき心かな　巴風
冬枯の人目にあまる瓢かな　同

松苗も枯野に目たつ嵐哉　枳風
萱屋の便なけなり冬木立　琴風
心しる僧とかたらんふゆ木立　卜千

甲斐山中にさまよひ
ける夜宿かりぬへき
かたもなくて

刀さけてあやしき霜の地蔵哉　破笠
はつ霜や衾にこもる鐘の声　野馬
霜下りてせきたに寒きね覚哉　爾中
古寺の霜にいたまぬ檍かな　吼雲
芭蕉いつれ根笹に霜の花盛　素堂

対　客

我店の霜迄見たし月の色　好柳

和好柳子

人をみん冬のはしゐも夕涼み　其角
をのか酒債をのこす鈍売　好柳
塩風に羽かく鳶の松たれて　由之

夜坐　一句

何となく冬夜隣をきかれけり　其角
うつみ火に芋やく人は薫(モノ)ス　同
後朝のうつみ火おこす泪かな　紋水
門さして世間は寒しむつかしゝ　蚊足
炭はさむ音さへ氷る寐耳哉　嵐蘭
灯(ヒ)の影に顔すゝひたる火燵哉　魚児
炉を繞(メク)る命つれなし梢の蟻　似兮
炭竈としらて経よむ法師哉　不炊
茶の花に炭やく家を見によらん　巴風

寒　蝿

憎まれてなからふる人冬の蝿　其角

法華を聞侍りて

沈著世楽無有慧心
つとめよと親もあたらぬ火燵哉　嵐雪
髪おきや門通る子もみられけり　景道

宿僧房

あられなし閼伽の折敷に冬菜かな　其角
駒形に往来なれしや寒念仏　三園
川風やわたし船待寒念仏　湖水
暁のつくはにたつや寒念仏　其角

星ひとつ五位一声のさむさ哉　湖春
敷浪に浮桶かふる千鳥哉　冬柏
水鳥の朝日蹴(ケ)たつるうねり哉　由之
あの男筏に寐るか夕ちとり　山夕
鈴ふるふ鷹に晴見る尾上哉　冬市

十二月九日はつ雪降の
よろこひ

初雪や幸菴(ヒン)に罷有(ル)　芭蕉

対友人

君火をたけよきもの見せむ雪まるけ　同

山荘の夕雪

雪に猶こゝろの雪の小松原　露沾
猿引や市に叫(サケ)はん雪のくれ　沾荷
窓明て間半(マナカ)雪降(ル)夕かな　魚児
黄昏も過る皺雪のたまる音　孤屋

友静亭にて物くふて

比良の雪赤鰯より詠めけり　自悦
をの〳〵は小野へもゆかで雪を見る　文鱗
行烏寝所見たし雪の昏　濁子

うす雪の破風より出る煙かな　　自棄

初雪に目をはじかるゝ篦竹哉　　由之

露沾公にて初雪

はつ雪は盆にもるへき詠哉　　其角

その朝雪見に出て

日比きく鼓も雪のあした哉　　露沾

漸ふたつみつ炉にほこる炭　　露荷

絵絹張(ル)籭の竹を心にて　　其角

狭(メハ)レ居(ヲ)

二すじとけさはまたがん道の雪　　沾徳

ぐれ〳〵とむなしき雪の浮木哉　　安重

辛崎に好(ヨ)過し雪の詠かな　　観水

はかなしや汐の干潟の石の雪　　蚊足

闇の夜や顔先(ツ)雪をしり初る　　魚児

慶運か髑髏や寒き雪の芦　　紋水

夜あらしや衣桁を払ふ窓の雪　　孤舟

初雪の風呂によはるゝ夕かな　　仙化

白川や関に関ある雪のくれ　　東順

草庵

門の雪樒ありやと訪れけり　　其角

雪の日や柴か日比の道近し　　全峰

波のうへに雪あり蜆とる人か　　枳風

門の外傘たゝくみそれ哉　　斧鉞

雪深し科頭(イナムラ)匂ふそのゝ梅　　鉤雪

梅を折に笠もとかしや雪霙　　コ斉

鎌倉の僧ことゝはん冬の梅　　露沾

漫成五倫

君臣有義　　其角

家の子等けふを忘るなとしわすれ

父子有親

鈍汁や憎きよめには猶くれじ

夫婦有別

鉢たゝきめおと出ぬも哀也

長幼有序

袴着は娘の子にもはかまかな

朋友有信

君と我炉に手を返(ス)しかなかれ

我家のとし忘れせんさびえぼし　　沾荷

節　分

豆とりて我も心の鬼うたん　野　馬
市に入てしはし心を師走哉　素　堂
よき夢を風にさまされしはす哉　魚　児
碓に影ふむ月のしはすかな　紋　水
室の津に足袋さす女師走哉　如　泥

子を祝す

羽子板にはま矢を願ふ師走哉　露　沾
歌をよむ身のたうとさよ年のくれ　文　鱗
淋しさは船にあかとるとしの暮　枳　風
行舟やいつれの海に年とらん　孤　屋
年の夜や人に手足の十はかり　去　来

心よき年

恙なく大晦日の寐酒かな　蚊　足
むしりあふ市の笑やとしのくれ　挙　白
おもへはや泣れ笑はれとしのくれ　嵐　雪
年の市線香買に出はやな　芭　蕉

閑

年の一夜王子の狐見にゆかん　素　堂
晦日〳〵や御念の入て大晦日　蚊　足
月雪とのさはりけらしとしの昏　芭　蕉

年々の悔

子をもたはいくつなるへきとしのくれ　其　角

貞享丁卯歳霜月仲三日
日本橋万町　万屋清兵衛彫行

いつを昔(むかし)

いつを昔　誹番匠 其角

（題簽）

定

一誹諧に力なき輩
此集のうちへかたく
入へからさるもの也

月　日　去来校

誹番匠このかたの反故とも
さらえてみたりに書ス

十題百句　後京極殿 慈鎮和尚

天　象

春も来ぬ南の誉ㇾ星の道　露沾
凩に二日の月の吹ちるか　荷兮

旅　行

あか〱と日は難面も秋の風　翁

風声ハ天地ノ語
　なりとあるを

天ㇾ地の咄とぎるゝ時雨かな　湖春
春の雪雨がちに見ゆる哀也　加州 一笑
十月やいつくへ雲のくろみゆく　幽也
武士の聞なくさまんあられ哉　伏見 好春
宵闇や霧のけしきに鳴海潟　其角
残れとも薫リ分たるあらし哉　由之
あの雲は稲妻を待たより哉　翁

二地　儀

残ル雪比良の谷〱おほえけり　膳所 正秀
肌のよき石にねむらん花の山　僧 路通
面白く汐干の舟を捨にけり　八橋
朝桜よし野深しや夕さくら　京 去来

かまくらに
　あそひて

松原やたま〳〵あるが山さくら　枳風
水札(ケリ)鳴て遠近くるゝ流哉　景道
美濃に入て
山陰や身を養はん瓜畠　翁
初下向
富士の山師走ともなきすかた哉　湖春
馬人や川瀬におふの桜麻　全峰
加州にて
わせの香や分入ル右はありそうみ　翁
三居所
朝さくら御門ほのかに明る音　伊勢 柴雫
松かさり伊勢か家買人はたれ　其角
殿つくり慰みにうつ砧哉　加賀 一笑
垣根破るその若竹をかきね哉　素堂
朝ゐする障子のひまや秋の風　巴風
鶏のめおと寒しや雪のくれ　文鱗
十月や草まだ見ゆる庭の隅　尚白
名月を駅(ムマヤ)にみはや酒はやし　全峰
一木つゝとはれぬ馬場の桜哉　春雷

牧(枚)方の宿にして
馬士に貧しきはなしゆきの昏　其角
四草部
つく〳〵しけふ此比の日なた哉　ぜゝ 裸虫
楊子に題ス
いつの時人に落けん白牡丹　平田 李由
けしちりてさゞらけもなき匂哉　大津 千那
川船の苫にはふかぬ菖かな　渓石
おもたかや弓矢たてたる水の花　素堂
河骨や終にひらかぬ花盛　同
嵐雪かゐかきしに
さんのそみけれは
蕣は下手のかくさえ哀也　翁
元服して
前髪も後の花なし年の菊　山川
いらごには戎(ヱビス)こそすめ水仙花　友五
枯芦に氷をのこす夜汐哉　苔翠
五木部
就中やしほのもゆる木芽(メ)哉　露沾

梅に来て各んめの匂かな　路通

旅　思

うつの山折かけてある桜哉　美の 芦夕

其枝かこれかといへはちる椿　李下

水音の野中さひしき柳哉　ぜゝ 珍夕

詠行名主いくたり村樗(アフチ)　大津 正義

柚の花のその中の其匂哉　普船

やとり木や秋にもかれす瓦葺　東順

芭蕉翁の旧艸

しはらくもやさし枯木の夕附日　其角

遊二園城寺一

からひたる三井の二王や冬木立　同

六 鳥　部

子の顔に燕泥(ナツ)む餌はみ哉　山川

菅笠や吹上らるゝ諸ひはり　挙白

重　三

曙やことに桃花の鶏の声　其角

若鳥やあやなきねにもホトヽキス　同

亀の背に漂(タヽヨ)ふ鳰の浮巣哉　粛山

おもたかに鷺の来ぬ日はなかりけり　桜塚 西吟

けうかる我か旅すかた

木兎(ミヽツク)の独わらひや秋の昏　其角

腹のたつ人にみせはや池の鴛　尾陽 野水

子と臥て尾をかられたる雉子哉　山川

冬の日にほしてはぬらす鵜羽哉　友五

七 獣　部

獅子舞を見て

感あり

蝶しるや獅子はけものゝ君也と　其角

猫の恋鼠もとらすあはれ也　琴風

春雨や庭に鼬の子をはこふ　友五

山里の砧やさむく啼狐　是吉

夕立やはなれて牛の門ちかへ　李下

爪髪も旅の姿や駒迎　荷兮

艸　菴

人うとし雉をとかむる犬の声　其角

山さくら猿を放して梢(ママ)がな　同

山家へ申つかはし侍る

常住をふるまひ給へ鹿の声　彫棠

居をうつして

鼠にもやかてなしまん冬籠　其角

八虫　部

蝌(カエル)子も命を游(ヲヨ)ケ二三月　京 観水

我恋は花ちるあとの毛虫哉　う斎

頼みてや竹に生るゝかたつふり　キ角

鳥ゆく蚊はいつくより昏の声　同

艸の葉を落るより飛蛍哉　翁

須臾は淋しからまし蝉の声　枳風

蟷郎(螂)の尋常に死ヌ枯野哉　其角

百とせの後なき人や冬の蠅　伊与 粛山

力なき蝶にかさなる落葉哉　巴風

うつみ火の南をきけや蕃　其角

九神　祇

二見の図を

拝み侍りて

うたかふな潮の花も浦の春　翁

女子の疱瘡しける

きけんとりて

餅の粉や花雪うつる神の笑　其角

暑日の影もいとはぬ祭哉　亀翁

老つゝも早乙女狂ふ御田哉　景道

涼しさや海すこしある戎堂　粛山

野社をつみかくしたる刈穂哉　山川

十月もいなぬや是の山の神　徳元

水札鳴て神杉すこき流哉　尚白

元日は法師目なれぬ神代哉　渓石

遷宮の良材とも拝みて

大工達の久しき顔や神の秋　其角

十釈　教

明星悟心

我目には師走八日の空寒し　杉風

尼の子の尼に成たるねはん哉　彫棠

畳迄古寺やさし軒のんめ　巴風

灌仏によめのくれたる袷かな　景道

禅門の田歌諷はぬ山田哉　千那

同し年の人も有けり玉祭　雲口

寄幻吁長老

老僧の箏をかむなみたかな　其角

寒山の讃

寐る恩に門の雪はく乞食哉　同

遊清水寺

人の世やのとかなる日の寺林　同

布袋の讃

大虚涼し禅師の指のゆく所　同

交題百句

次郎といふをつれて

つまの夜咄に行

感心

我子なら供にはやらし夜の雪　加生つま　とめ

うりたさにつかふて見する団哉　其角奴　是吉

扇とつて九郎か暮の仕舞哉　幽也

寺前の輿もとりあへす

小僧とも庭に出けり罌粟(ケシ)坊主　少年　角上

山陰や清水たる音あはれ也　柴雫奴　二七

尼になりて太秦に

すみけるころ

花をやるさくらや夢のうき世者　かいはらの　捨

松島行脚の餞別

月花を両の袂の色香哉　露沾

蛙のからに身を入る声　翁

辞世

もえやすく又消やすき蛍哉　去来妹　千子

秋の昏肥たるおとこ通りけり　尚白奴　与三

艸臥のやまん二日そ花のはる　仙化奴　吼雲

二魚部

鮎の子や何をふくれて流レ行　八橋

行水やそのあとつかむ柳鮠(ハエ)　遠水

湖舟はなんけに

さけたうへて

貫之の鮎のすしくふ別レ哉　其角

水むすふ影飛こゆるうぐゐ哉　普船

花の雨鯛に塩するゆふへ哉　仙化

ひく汐につれておかしき海鼠哉　莫陵

若竹の葉にあたらしき鱸哉　百里

入相の船の残るやはぜ鱠　友五
鰹売いかなる人を酔すらん　翁
左遷に鯖備へける文月哉　粛山

三　旅

越人を供して
木曾の月見し比
俤や姨ひとり泣月の友　翁
いさよひもまだ更科の郡哉　同
夜過山　沖津にて
鈴虫や松明さきへ荷はせて　其角
高灯籠消て迷はん泊舟　柴雫
日にやけて古き袷も似合けり　湖水
夏艸の我長かくす情かな　路通
さらしなには翁の
句のみ吟了して
霧はれて梯は目も塞かれす　尾陽 越人
馬の陰おりても寒き野原哉　珍夕
行ぬけて家珍しやさくら麻　加賀 一笑
伏見西運寺興行
はつゆきに人ものほるかふしみ船　其角

四　恋

朝さくら寐髪にかゝる匂かな　山川
朝さくらうつくし過てすさましや　雨等
青柳に妻もたぬ人のてふり哉　卜女
かつしかの真間にて
早乙女に足あらはするうれしさよ　其角
扇折子に恥しきけはひかな　尚白
かくせとの文かあやしや扇折　枳風
旅人に早乙女くるふ尻目かな　う斎
一まはり待人おそき躍かな　尚白
星合や殿の御入の鈴の音　氷花
すゝ払の夜は猶白しよめの顔　釈 行舟

五　述　懐

翁に供して高野に
まふてけるころ
散花にたぶさ恥けり奥の院　杜国
二星や独法師は寝もあかず　路通
此月に無芸を恥ん友もかな　露沾
あそふ事三十迄そ夜半の秋　八橋

古足袋の四十に足をふみ込ぬ　嵐雪

とにかくにもてあつかふは
こゝろ也けりと　光俊

山陵(カラ)の壱歩をまはす師走哉　其角

つぎはきて弥寒し厚衾　尚白

あつふすま夏の酒債(サカテ)と諷ひけり　千那

火桶抱てをとかい臍(ホソ)をかくしける　路通

番匠の中七字を
かれこれとして

かた炭の崩れ哉身のなる行衛　湖春

六 寒　暑

梅探る手は霜やけも薫しゝ　山川

凩やめおとしてつる窓の菰　比竹

雪は来でから風きほふ空凄(スコ)し　曾良

かふり着てあたまもしれしあつ衾　野水

親心子のふすかたやあつふすま　坂本 露意

暑き日も樅(モミ)の木間の夕日かな　素堂

水飯にかはかぬ瓜のしつく哉　其角

なくさみも扇くらふる斗也　杉風

扇折いかに持たる汗ぬくひ　千那

年はまだ晩田の稲のあつさ哉　渓石

七 賞　心　東坡文集

春の夜の人家に語るしはす哉　美濃 荊口

大福は年と友なるあそひ哉　枳風

弥生三日枕負子(ヲフ)のすかた哉　尚白

居並ひて土に画をなす涼哉　三翁

船かけて水茶たてたる夕へかな　巴風

欄の琵琶に撥なし蟬の声　菫風

名月や山も思はす海も見す　去来

はぜ釣を笑はぬものは鷗かな　由之

初雪や人よりさきに物云ん　淀 三ケ

雪の中に兎の皮の髭作れ　翁

山中子共と
あそひてと有

八 酒

いさ汲ん年の酒屋のうはだまり　其角

その花にあるきなからや小盞　同

花に風かろくきてふけ酒の泡　嵐雪

酒うけて枝ゆすらするさくら哉　八橋

清賓の地をしめて
観瀾亭と名付らる

忘れては猟師に酒を涼み哉　彫棠

草庵薄酒の興
友五に対す

かたつふり酒の肴に這(ハ、)せけり　其角

名月や居酒のまんと頬(ホウ)かふり　同

荷兮か奴何となく
たんさくほしかれは

艳にはたか教えける酒のかん　同

酒やよき雪ふみたてし門の前　苔翠

大年やあすのむ樽の口あけん　峡水

十月廿日
九　嵯峨遊吟

さか山やみやこは酒の夷講　其角

ひろさは
池のつら雲の氷るやあたこ山　去来

のゝみや
木からしに入相の鐘をすゝしめよ　加生

清滝や渋柿さはす我ㇾ意　角

臨川寺
凩の地迄落さぬしくれかな　来

草は皆女いしけぬさかの町　生

野の宮のやぶし(衍カ)陰に
わひしき槌の音しけるを

鍬鍛冶に隠士尋ねん畑の霜　其角

大井里
冬枯の木間のそかん売屋敷　去来

かへりに
みやこ路や初夜に過たる艳狩　加生

同
縫かゝる紙子にいはん嵯峨の冬　角

加生のつまのぬはれけるなり

十
湖上吟　十月二日膳所
水楼にて

帆かけふねあれやかた田の冬けしき　同

此月の時雨を見せよにほの海　曲(ゼ、)水

昼中やしくれ似合ぬ鳰のうみ　素葉

千那に供して父の古郷
堅田の寺へとふらひけるとて

婆に逢にかゝる命や勢田の霜　其角

湖を屋根から見せんむらしくれ　尚白

よき日和(ニワ)に月のけしきや村千鳥　角

蜑のかるかぶ菜おかしやみるめなき　同

霜月下の七日

尚白亭　酔支枕

闇にとて雪待得たる小舟哉　尚白
橋下(ウラ)寒きともし火の筋　加生
茶師の蔵梢〳〵にかさなりて　其角

次

ゆきの日や船頭とのの顔の色　同
高根のあらし紗(イサヽ)かたまる　白
つゝれふむ石に踵(キビス)の洗はれて　生

亦

ひとつ松この所より浦の雪　生
鴨こす峰を入かたの月　角
鈴の声片原町に馬次て　白

続みなしくりの撰ひに
もれ侍りしに首尾年ありて
此集の人足にくはゝり侍る

鴨啼や弓矢を捨て十余年　去来
刃(ハ)ほそらぬ霜の小刀　嵐雪
はら〳〵と栗やく柴の円居して　其角
影くるはする竜骨車の月　来
きり〳〵す螽も游く山水に　雪
盞付(ケ)て鶴はなちやる　角
うれしくも顔見あはする簾の間　来
また手枕を入かへて寝る
旅衣まてとも馬の出かたき
留守おほかりし里の麦刈
誰か子そ幟立置雨の中
平家の陣を笑ふ浦人
船かけてとまり〳〵の玉祭　角
畠の中にすめる月影　雪
いきて世に取後れたる老相撲　角
元(モト)よし原のなさけ語らん　雪
花鳥に夫婦出たつ花さかり　角
若餅つくと家子に告こす　雪
荒神に絵馬かけたる年の棚　同
うつばりかくす関札の数　角
よめ娘見分る恋のいちはやき　雪

小原黒木そ身をふすべける　角
味噌さます草のさむしろ敷忍ひ　雪
雪あそひせん寺の入あひ　角
八景の月と雁とを見尽して　来
越のきぬたのいとあはれ也
狩倉にもよほされたる秋の空
贈（ヲクリ（リ衍））りものには酒そたうとき
今こんと云しはかりに床とりて　雪
火燵を蹴（ケ）出す思ひあまりか　角
手形かく恋の限（リ）と成にけり　同
にくまれつゝも宮仕へする　来
顔なをし賑（ニキ）はふ方のめてたきに　同
長（タケ）をくらへてむすふ水引　雪
花のもとに各当座つかまつり　角
柳にうかむ絃管の舟　雪
　去来十四句
　嵐雪十一句
　其角十一句

両吟おもひたちける人のいと
まなくてやみにけれは心さし
ゆるしかたくて独酌の
　　興になしぬ
下臥につかみ分はや糸桜　巴風
　犬もこてふも一日の友　其角
橋造る小屋のかまへの長閑にて　同
　藪のこなたへ廻（（めカ））る駕籠かき　風
菊は黄に只しかりたる月の色　同
　鼻かうだ手を亦秋の水　角
小坊主に名を案すれはきり〳〵す
火打あつめて紙子うれしく
いざ嵯峨へさうり一足もらひける
何を目あてに此比の禅
なくさみに喧嘩をするか渡し守
杜秤（チキ）にかゝりて重き身をしる
衰えも関寺ゆるす年なれや
安養-界（（迄カ））を鼾なるらむ
板畳階（ハシ）子の下のすゝしきに

蚊やり火たてゝ姑いぶせき
泣程にからき花さくたうからし
月の露なる白黒の胡麻
吹からに一遍どをり秋の颪
物すさましき峰入の供
漸と米とゝのゆるくれの鐘
又たべ酔て痳忙(ホレ)たる顔
ほとゝきす点せがまるゝ片心
鑓もたせたる今のまろうと
粧はすに娘か常をみせにけり
うつり香せむる袖の蛇
恵心仏法の力を頼む哉
道なる屍(カハネ)ありかたやそも
こえこしの越の白山山いくつ
物あきなふも水からの声

　或お寺にねう比丘とてこしの
ぬけたるおはしけり住持の
深くいとをしみ申されしに

　　五の徳をかんす
能睡　あたゝかな所嗅(カキ)出す眠哉
能忘(クル)　おもへ春七年養(カフ)た夜の雨
能捕　鶉かと鼠の味を問てまし
能狂　かけろふと頻(シキリ)にくるふ心哉
能耽(サカル)　髭のあるめおと珍し花心

舎利講拝み侍りしに
　十如是の心をおもひよせて
　この心に叶へきを拾ひ出侍る
相　稲妻や思ふもいふもまきるゝも　其角
性　朝桜つとめぬとても仏哉　由之
体　鬼灯のからをみつゝや蝉のから　キ角
力　すべらすに筏さす見よ雪の水　同
作　秋の田やはかり尽して稗(ヒエ)二俵　尚白
因　弓になる笋は別のそたち哉　去来
縁　山臥の鳩ふく方に入にけり　粛山
果　二子山二子ひろはん栗のから　其角
報　去年の蔓に朝顔かゝるかきね哉　素堂

本末究竟等

うたゝねにはかなき炭のくつれ哉　戦竹

内秘菩薩行

夕立にふみなかへしそ渡舟　千那

同講の心を
心の月をあらはして
鷲の御山の跡を尋ん

新月やいつを昔の男山　其角

鉢たゝき聞にとて翁の
やとり申されしにはちたゝき
まいらさりけれは

箒こせまねてもみせん鉢扣　去来

明てまいりたれは

長嘯の墓もめくるかはち敲　翁

そのふるき瓢(箪)みせよ鉢たゝき　去来

世中はこれより寒しはちたゝき　尚白

こと〳〵くね覚はやらし鉢扣　其角

艸庵の蕉子を
うへ分たれは
秋風を得たるに

星合の影やはせをの先戦(ソヨ)き　普船
節(フシ)〳〵紋(アヤ)に御簾のはつ月　其角
十二三あらそふ雁の数見えて　李下
起ては倒(タフ)れ下戸をうつ雪　船
川沖や舟に出ぬ日の風の音　角
こゝらは魚の油とる家　下
蛇のおそろしけなき八重葎　船
いつしか野らに我猫の墓　角
中〳〵に幼(ヲサナ)事せむ春の雨　下
花もかすみもシテ柱より　船
影向(エウカウ)の松のひまなき若緑　角
かなしけれとも子を捨る歌　下
殊更にけはひ出たる薄被(カツキ)　船
狐だまして物おもふ体　角
駒とめていつもの酒屋面白し　下
山〳〵晴よ比良の浮雲　船
鎧着て月みたる袖の朝朗　角

胸の秋すむ其身僧正　下
露霜やげにあかゝねの大仏　船
穴井の渦(ウツ)を覗く葉藥(カツラ)　角
とかくして女を肩に負て行　下
贄(ニヱ)にかはれてのこし置文　船
一筋に東とたのむ日の光　角
船輪にみえて鰹くひたつ　下
浦風にくろむ柏檀(イブキ)の夏木立　船
坐禅の影(エイ)をうつすから絹　角
仮枕南無と狂ふてかろき世に　下
足を空なる浅草の市　船
宜しきは唯秋ノ月暮ノ雪　角
あるしも君にかなふ献立　下
注連の内比丘山伏もゆるす也　船
物かたりしてゆめを円(アハ)する　角
家の紋縁の調度に恥しく　下
さも思ひしよ憎き鄙ふり　船
年寄はなくさめやすき花の陰　角
片枝は棚にもるゝ白藤　下

両吟すゝめられて

角なうて男也けり鹿の友　渓石
さくらあきなふ岡の卜垣(シメ)　其角
白つゝしはつれぬ雪の散消て　同
しはし帆おろせ島の岩組　石
水や空取はなれたる月の影　同
四の鈴ふく檜(ノキ)の秋風　角
蔦紅葉魔所にも遊ふ我意　角
木葉こほれて何たきし釜　石
犀(サイ)川の渡りもよほす莚張(リ)　同
上戸は得たる酒の盛やう　角
髪は児法師と老そ見くるしき　同
ゆめにもかよふ物の怪(ケ)の汗　石
帳も簾(ス)も只仮葺(カリフキ)の恥かくし　同
鏡の田鶴か和歌の夕月　角
雲霧の二百町(ハテナシ)坂にさしかゝり　同
とほしき鉢のあら籾を噛　石
能キ馬を花に引せて口惜き　角

何山吹に地下の歌よみ　同
汲よせていと冴かへる六の水　石
美人なれとも寐顔まみえす　同
三世たのむ信者といはれ名に立て　角
かいらぎさした年も悔らん　同
糸花や心も染ぬ水あふひ　石
すかせば笑ふ枕蚊屋とれ　同
生身玉かたい座敷にかしこまり　角
感状わたす月のかゝやき　同
村薄鴻の瀬ふみにうち入て　石
漕行舟を安房の檀方　同
あれ〳〵と竜（タツ）の尾まとふ雲早み　角
幟の音のいさむ増綱（マシ）　石
郭公五壇長屋の幾茂り　石
合羽そろひて足かろき雨　角
ありかたき太太打てかへる也　同
あさけは過ぬ鯛の焼物　石
花主もお酌に立て花を折　同
こてふに似たり眠るくせもの　角

渓石十八句
其角十八句

申習ひに　女　秋色
蜆とり早苗にならぶ女哉
初露に風さへしめる扇哉　同
ひとり居やしかみ火鉢も夜半の伽　同

其角撰集して誹番匠と名つく是に予か跋を乞予おもふにその名たること誠に故有史記の滑稽は俳諧也と註せしを基にて貫之の古今集に誹の字となせり是を造作の初として世々此道の好士匠をめくらしてより既教誡の規矩備はれり近くは山崎の宗鑑いせの守武飛騨竹田の高名をふるひしに又花崎の翁といふ人有けり誹諧に妙なる人にてかの宗鑑か犬つくはに根次して淀河油糟と名付世に道をたてひろけて歌林に材を求め詩海に桴（イカタ）をうかめし程に心詞削るに新しく磨くに光有すへて今我やまとの国に道の工と名を得たるものあまたあるは皆その弟子孫弟子かつは彦弟子にて其かね正しく直なりけらしさるを中比守

武か千句のあら削なる風にならつて一句木に竹をつきて物数寄とするたくひありけるを今めかしきに目うつりて悦ふ人多くものせしかは此道かたへは破損に及ひしなり是大匠の斧をとれは必足きるもの〻たくひ成へししかはあれと今の代の人もとより安くして以(テ)たのしむ人の心をたねとし侍れは終に作り出せる詞も正しく成て亦正風体の骨髄あらはれて侍るならしなと筆にまかせてかく所に

其角云今予か俳番匠は其道といひ風体といふ沙汰にあらす一句は詞を以て作りたつるに其同し詞のあらぬ姿にかはる所これ番匠たるもの〻器量のいたす所にあらすやよりて五字を宗(ウツハリ)とし七字を桷(タルキ)として人々にあらんにこれか上を作り添下をつき合(セ)中を切くはせなとをの〳〵其はたらき有て一句となす手ぎは彼欂櫨(ハクロ)侏(シュ)儒その宜きを得て宮「室なるに似たりされは此集にをのかさま〳〵の細工を顕はし今もみそなはし後の世にも伝はれとて撰しといへは予曰善哉古人の心に通す基俊朝臣歌をよまんと思は〻此道を深くすへし詮する所詞によりて其心を作るへしいは〻よき詞もなくわろき詞もなし只つ〻けからにて善悪は有へき也との給へり為家卿は歌の姿のこと詞たしかに云下しきよけなるは姿のよき也同風情なれとわろくつ〻けつれはあはれよかりぬへき材木をあたら事とありしとかや是歌はんさうならすや匠氏の功に比して俳諧を道ひくこと韓氏か学をすすめ管子か道をとくまことにためしなきにあらすといひて止ぬ

誹諧堂湖春書

元禄三歳南星和日
寺町二条上ル町
井筒屋庄兵衛板

花摘（はなつみ）

花摘　上局従四月八日

（題簽）

花つみ

元禄三年の事にや母の寺に
詣まかりしに四年過つる春秋も
悲しひをもよほすかた多かり
けれは思ひを是によせて
心さしを手向侍りしより彼
祇公の一とせの日次を発句つ
かうまつれりし海山の情雲
水のあはれをも転法輪讃仏
乗の道に入とのみおもひなし
給ひけんいさ我心朝夕の人の
すくなき折〳〵聊ものに
かきつく一夏百句にみちたれは
花摘と名付侍る也その日其
夜の見聞の句々結縁となして
予か句の下にこれをとりなし
つゝ見ん人々のにきはひと成ぬ
高位高徳師弟親疎をわかつ
事なきは日記なれは也

一灯礼　其角述

八日　　上行寺

灌仏や墓にむかへる独言
　帰寺にとふらひける
　　　三吟に

身にとらはあな卯花や母の寺　　彫棠
むら雨や驪山を名にしふかみ艸　　角
　僧釣雪かかたりけるに

九日

此里に后ますへし桐の花　　羽黒　露丸

十日

　宗竹のもとへはかたより
　　文まいりたり送りもの
　やさしかりけれはぬしに
　　かはりて申侍る

十一日　生(イキ)の松いかに忘れん汗拭(ヌクヒ)　角

明かたに啼すてし
一声を聞て

郭公中入までの芭蕉哉　同

三月十一日より万日の念仏
えかうすゝめけるに
くんしゆ一向のこゝろを
とりて

山吹の色より外の廻向哉　清水寺 行舟

非情を悟る春の松風　僧 幽水

ゆくも来(ク)も二ツにかきる蝶見えて

十二日　東叡山院

僧正の青きひとへや若楓　角

十三日　けしの花朝精進の凋れかな　同

十四日　浅草川遙游

富士行や網代に火なき夜(ヨル)の小屋　角

十五日　雨

紙合羽かろしやうき世夏(ケ)念仏　同

十六日　丹羽左京のかうのとのゝ
ゆゝしかりける参勤を

黒牡丹ねるやねりその大鳥毛　同

十七日　ある人の愛子に
ねたり申されて

郭公幟そめよとすゝめけり　同

つゝじの名を

底白に紅粉はきのこすつゝじ哉　女 秋色

山桜実をもてはやす鳥もなし　彫棠

十八日　雨

白露を石菖に持ッ値(アタイ)かな　角

十九日　自愧

夜あるきを母寐さりけるくゐな哉　同

自棄

下帯や蚊屋取出ス朝より　土田 玄素

辞世

夢なれや花は昨日けふの風　由良 正春

廿　日　身にからむ単(ヒトヘ)羽織もうき世哉　角

廿一日　射(ル)者中(ハリ)奕(スル)者勝(ハッ)

蠅打よ何れにあたる点心(テン)　同

広庭にゆたかにひらく牡丹哉　尼 智月
妻恋は人やとがめん寺の猫　同
蕣や盛久しき種おろし　女 さの

廿二日　仏骨表

しばらくは蠅を打けりかんたいし　角

廿三日　申の日とて

蚊屋まいりたり

夜早ねん紙帳に風を入る音　同

伊勢より

もたれたるみやけに
かゝれたり

我妻の汗に成たるもめんかな　久居 柴雫
物かける扇は見たし渡舟　揚水
縄さばく心も常かうかひふね　全峰

閑居　うちつけにおもひや
いつとふるさとの忍ふ
草にてすれる也けり

敦忠のうたにや

我やとは何をしのふの摺燧（ヒウチ）　卜宅

山焼て峰の松見る曇哉　伊賀 魚口
心よくあられやくゞる冬木立　同
桃の花折でやはなす犬の声　同 野狐
曇る日を詠る梅の盛哉　同 知津

廿四日　宗長の句をとりて

橘の一ツ二ツは蚊もせゝれ　角

花すきける人の一ふさを
うつはに入て送られしに

牡丹芳水につゝめる匂哉　僧 蓝芰

廿五日　奉納

から衣御影（ミ）やかけて杜若　角
一時も今この卯月価なし　由水

艸庵昼臥

蚊屋は此庵のうちの菴かな　琴風

包丁か牛何とさく

きうくつに鰹をたゝむ主かな　百里
傾城や傾城を見る夕涼　同

廿六日　会盟

交のさめて亦よし夏料理　角

廿七日
短夜や朝日待間の納屋(ナヤ)の声　同
膳所へゆく人に
獺(カハウソ)の祭見て来よ瀬田のおく　翁
廿八日
ある人の別墅にて
内川や鳰のうき巣に鳴蛙　角
此日閑に飽(アキ)て翁行脚の
折ふし羽黒山於本坊興
行の歌仙をひらく
元禄二年六月にや
有難や雪をめくらす風の音　翁
住ほと人のむすふ夏草　露丸
川舟の綱(ツナ)に蛍を引立て　曾良
鵜の飛あとに見ゆる三日月　釣雪
澄水に天をうかへる秋の昏　珠妙
北も南もきぬた打けり　梨水
眠ては昼の陰(カケリ)に笠ぬきて　釣雪
百里の旅を木曾の牛追　翁
山つくす心に城の記を書ん　露丸
斧持すくむ神木の森　曾良
歌よみの跡したひ行家なくて　釣雪
豆うたぬ夜は何と啼ク鬼　露丸
古御所を寺になしたる檜はた葺　翁
糸に立枝にさまゝゝの萩　梨水
月見よと引起されて恥かしき　曾良
髪あふがする羅(ウスモノ)の露　翁
まつはるゝ犬のかざしに花折て　露丸
的場の末に咲る山吹　釣雪
春(ナ)を経し七ツの年の力石　翁
汲ていたゝく醒か井の水　露丸
足引のこしかた迄もひねり蓑　円入
敵の門に二夜ねにけり　そら
かき消る夢は野中の地蔵にて　露丸
妻こひするか山犬の声　翁
うす雪は橡(トチ)の枯葉の上寒く　梨水
湯の香にくもる旭淋しき　露丸
鼯(ムサヽヒ)の音を狩宿に矢をはきて　釣雪
篠(スヽ)かけしほる夜すからの法　円入

月山の嵐の風そ骨にしむ　曾良
鍛冶か火のこす電の影　梨水
ちるかひの梧に見付しこゝろふと　露丸
鳴子おとろく片藪の窓　釣雪
盗につれそふ妹か身を泣て　翁
祈も尽ぬ関〳〵の神　曾良
盃の肴に流す花の波　会覚
幕うちあくる燕の舞　梨水

湯殿
語られぬゆどのにぬるゝ袂哉　翁

月山
雲の峰いくつ崩れて月の山　同

同し山行
鶯の声賤しさよ夏の雪　観修坊 釣雪

廿九日
うすものの風情日に張ル団哉　角

五月朔日　壬二集
さみたれとさ月きぬれは
名をかへていかに
ひまなき雨と候へは
さみたれの名も心せよ節句前　角
鶯よ独ばみなるほとゝきす　彫棠
松原に勢の揃はぬ蛍かな　渓石
うつくしきかほかく雉の
け爪かなと申たれは
蛇くふときけはおそろし雉の声　翁
鶏のおかしかるらん雉のひな　去来
雉の尾もやさしくさはる菫哉　女 秋色

鼠説
卯月十八日の
文の中に聞ゆ
洛下 落柿舎去来稿

鼠〳〵暮ニ出テ朝カクル家ニ居テ人ヲ恐ル、ハ足ノウラニ疵持ケラシ山椒ノ眼小豆ノ鼻歯ハ糸ヲ付テ小袖ヲ縫ヘク耳ハ木葉ノ芽ニ似タリ地黄ヲ喰ヘハ毛白ク大棗ヲ噛ハ口毒アリ尾ヲ切テ錐ノ鞘ト為ハナシテン背腹ノ色ニ目出テ薄モ濃クモ染出セリ被カフリタル姿ノ若ナルハ娵入ノ絵虚言ナラン筆ノ用ニ髭ヲ抜

ル丶ハ老テノ後ノ悔(クヒ)カ顔(カンハセ)ノ烏魯(ウロ)ツキタルハ昼(ヒル)鼠ナレ
ハ成ヘシ
つく〳〵御身か徒を思へは油を呑事世の酒にひとし
けれ共終に酔ふりを見せす粟を尽し器(キ)を破るは殊更
にくるしからし貧僧の笋につくそ猶憐(アハレ)なる恥かしき
文を散しておとこ女の中をも妨(サマタ)げあやしき巣を作り
て源平の乱と成ぬ何を諂(ヘツラヒ(ヒ衍))ひてか佞人の例(タメシ)に引れいか
に諫(イサメ)てか書を焼世の宰相となしけん神仏の貴も尿(シト)かゝ
り糞に汚(ケカ)れ給ふ地獄おとしの苦み曾(カツ)て知らさるにや
月日の鼠と聞ゆるそわやくもののかしらならん
ツク〳〵御身カ貴ヲ思ヘハ牛ハ形(ナリ)フトク虎ハ心猛(タケ)ケ
レト下坐ニ立リ百敷ノ賢キモ甲子ヲ迎ヘテ年ノ号(ナ)ヲ
改玉フ春立カヘル遊ニ子日ノ御賀アリ子祭ト申スイ
ツノ時ヨリハヤリケン漢(カラ)ノ倭(ヤマト)ノ歌ニモ洩(モ)レス海原や
藻塩ノ陰ニ住(ム)海鼠秋風の尾花が末に鳴うつら我朝ノ
人ハ野鼠トツタヱ侍ル麝香(シャカウ)鼠ハシラヌヒノ筑紫ヨリ
外ニユカズ天井鼠ハ雷ヲ鳴リトコノ乙若ヲ七郎トハ
申シ新左衛門ト名乗ハ月代剃(ソリ)テノ事ナルヘシ大(ヲホ)子等
子々(コネ)等廿日鼠月々十二ノ子ヲ産颯(ウムザザン)々ザノ扇骨バカリ。

誰カ家ニ取尽シ得ンモシ白鼠参(マイリ)テ福ノ神ノ使センモ
シレス
つく〳〵御身が危を思へは嶮(ケハ)しき城を頼て籠るとも
鼬をふせく謀(ハカリコト)なからん鳶を見て瘻(セクヽマリ)小烏(カラス)にくれんと
て中空にうちあけられいとあさましき姿そや番木(マチン)を
甜(ナメ)吹矢に当ルともいたはる者はあらしかし吹鼠ぬれ
鼠黐(トリモチ)にまつはり或は鈴を頸(クビ)にかけ辛うしてふるさと
にかへるとも父母にさへ見捨られん西寺の老ねすみ
おんもつんづすそつんづ法師に申さん師に申せ友達
迄にはやされてつらよごし成へし空(ソラ)死して仕合と東
坡か袋逃(ニゲ)たれと生捕(イケトラ)れてなましいに張湯か文を聞我
さえ悲しきを狐狸(コリ)の命とらんとて焼鼠と成たるいと
浅ましき姿そや桁走(ケタハシリ)障子のほりて早業(ワザ)得たりとも思
はす升(マス)にかゝりて長き別れと成ぬその妻といひ子と
いひいかはかりの思ひをかすらん
御身カ隠レ里何レノホトリソ武蔵ニ鼠穴大比叡ノ禿倉(ホコラ)
ナルカナドカ帰ラサル頼毫ガ勢モ本意トゲカタシ猫
ヲハムノ譬モ不善ナラハ成得(エ)シ彼ヲソロシキ睡士(スイシ)ト
世ニ相住センハ面白カラヌ浮世ゾ

面扶持(ツラ)をへつるか粟の鼠共
いつをむかしのねうびく
つく〳〵承りて法師はらに
申つたへたれは相(ミル)レ鼠おしえ
ありかたく侍るほとに一夏
百句のけちゑんにとて
此集にかき次侍るなり

二日
かふと取出すをみて
もの丶ふの幟甲や庫(クラ)の内　角

三日
信濃へまいらる丶人
暇乞せらる餞に
梁(ウツハリ)の蠅を送らん馬の上　同

四日
午の年午の月むまの日
午の時うけに入
競馬埒(ラチ)に入身のいさみ哉　同

同しく
有卦に入笑の皺ぞ酒による　百里
雨ふりて人の

来たりける日書次
元日や珍重すへき梅の花　素見
小蝦(エビ)喰(ク)(マヽ)て正月するかかいつふり　近江 角上
春風やけに遷宮の明る朝　枳風
名のつかぬ所かはゆし山さくら　湖春
羽にうけて幾重の雲を啼ひはり　盲人 渭橋
花に来て袷羽織のさかりかな　暁雲
松風にうれしき花の高み哉　巴風
木下に汁も膾も桜かな　翁

東叡山行
大仏うしろに花の盛哉　僧 路通
一昨(ヲトヽヒ)はあの山越ツ花盛り　去来
みとり子や此比歩む夏衣　大津 尚白

心喪
鳴すゆけ親なき門ぞほと丶きす　幽也
草の戸に念仏の内もかやりかな　三翁
雇人(ヤトヒト)のあいさつうたふ田うへ哉　加賀 一笑
初瓜と妹にいはせん親独　巴風
御調より我子に一ツまくは瓜　文鱗

秋風に巻葉折るゝ芭蕉哉　加生
供御の瀬を流レ渡リの蛍哉　珍夕
嶠(キハ)もなき向ひ近江の菖かな　尚白
畑打音やあらしのさくら麻　翁
たか笛そ竹にはしまる秋の声　由之
八尾御門主
六条は葬遅(ヲソ)き所かな　風喬
うなひ等か鬼灯ふくや猿の㒵　沾荷

甲陽軍鑑をよむ

あらそばの信濃の武士はまふしかな　去来

いせの国中村
といふ所にて

秋の風伊勢の墓原猶すこし　翁
あそこ爰心ならすや宿の月　枳風

九月朔日発足

菊の日と月見いつくの泊(トマリ)せん　同
ぬしは誰レ木綿(ワタ)なだるゝ秋の雨　尚白　五日

雨後

芋ひけやあとに月すむたまり水　山川
たうとさに皆をしあひぬ御遷宮　翁

ならにて

雪かなしいつ大仏の瓦葺　同
水鳥のくゞるやいづこ浮所　揚水
物くさき身に恥かしや庭の霜　全峰
いささらは雪見にころぶ所迄　翁
雪の夜やとりわけ佐野の薪買ん　僧 宗派

去来にて

鉢たゝきたゝきおさめの夜を聞ん　僧 路通
雪の今朝柚子見付たる梢かな　几鵬

十三日と心得て

名はかりは旦那也けり年の昏　桃固
師走さえ一条殿の衣配(クハリ)　野径
何に此師走の市にゆくからす　翁

右四十句誹番匠之墨糟也
仍テ駈ニ入競馬之埒ニ畢

花あやめ幟もかほるあらしかな　角
樗佩(オヒ)てわざとめかしや芝肴　嵐雪
年古き人の咄や印地打　渓石

六日

梳る甲の髭の齢かな　柴雫

止波浦にて

地引すと蜑のまに〳〵暮の潮　角

杜若足もとにあり馬峰　渓石

左右左に横雲わたるのほり哉　百里

五月雨に降参するか紙幟　是吉

けふはけに淀にも見へず真菰舟　山川

七日

酔て忘る

宵の蚊も枕をわたる八声かな　角

土のけて古葉を染る竹若し　巴山

折を得て古着ぬぐらん蟬のふり　同

蚊屋釣て寐肌や見する蚊のおもひ　同

八日

得正観音像

手に蓮膠にしまぬ匂ひ哉　角

名は仏只身のための夏花哉　重則

枝柿や俤ふるし初いちご　同

九日

雨

燕もかはく色なし五月雨　角

てり曇る空はつれなき鵤哉　沾荷

葬におもてうらなき隣かな　同

好物

入歯して心安しや瓜畑　三翁

贈芦屋

うつり香や虫干もせじ単物　かしく

山菅のゆひめおかしや粽籠　同

茂る木の中にかはゆし桐の花　同

ぬすみてもころばして行西瓜かな　少年亀翁

雛立てその名しらるゝ女哉　同

いさむ気や童につるゝ里神楽　同

十日

三蔵といひけるかたいのもの
つゞれたる袋より俳諧の歌仙
取出して点願はしき
よしを申てしさりぬ其
巻の前書にこゝにいや
しき土の車の林の陰に
身をかなしめる有と書り
いかなるものゝなれるはて

にか有けんかの巻の奥書
に申つかはしける
あまさかる非人貴し麻蓬　角
梅か香や乞食の家もと聞え
つるにほひ有けるにやかゝる
功徳をうけ給て
名木を乞食に習ふ桜かな　山川
炭焼は中〳〵恥ぬ都かな　崔雨
旅人に鮓(スシ)ほめらるゝ屑(クツ)屋哉　横几
その実とる為も忘れぬけしの花　春魚
一しきり庇はかりのあられ哉　松翁
ねころべは咄スに遠き火燵哉　同

十一日

絶レ景ヲ
五月雨や富士の煙の其後は　角
しべはかり散残ても桜かな　沾荷
あの蟬やもぬけと成て落所　沾荷
おそろしき角になつきし鹿子哉　妓童 棚雪

回郷の比おもひ立て
大和めぐりせしに

春日　和らくや杉の林も日の光　かしく
在原寺　青柳も我肩過ぬ水鏡
大五輪寺　墨染に独ことたる茶摘哉
多武峰　朝清〆花におこたるひしりかな
芽(メ)出しより竜田は外の楓哉

十二日

さみだれにやがて吉野を出ぬべし　角

十三日

岩翁亭題レ送蟹
みじか夜や隣へはこふ蟹の足　同
御座摺て吹風かろし蚊屋の足　岩泉
野草には長(タケ)のすぐるゝ葵哉　同
ならひても先だつ船や初鰹　同
目覚るは筝ぬすむ木玉かな　遠水

十四日

枇杷の葉やとれば角なき蝸牛　角
形よりすけなき枇杷の広葉哉　岩翁
女さへひとへ肩ぬく春野かな　同
言種も小籠の内ぞ初茄子　妓童 松嵐

十五日

紅粉買や朝見し花を夕日影　角

軒の菖二十若くは飛つかん　淀三ケ

仁和寺にて

門ン迄はあとすさり也花もとり　同

十六日

しなひたる法師の

梅干けるをみて

梅いくつ閼伽の折敷に玉霰　角

十五日芦屋か餞

蛍なら夜道教ん我思　かしく

同しく住家

かたつくるとて

蚊の声も今朝よはるへし明長屋　同

十七日

いらこの杜国例ならてうせ

けるよしを越人より申きこえ

ける翁にもむつましくて

鷹ひとつ見つけてうれしと

迄にたつね逢ける昔を

おもひあはれみて

羽ぬけ鳥鳴音はかりそいらこ崎　角

十八日

少年を舟に供して

不死の肴をとゝのへたる

此舟に老たるはなし夕涼　同

十九日

日待酔しらけてみな

逃ちりたるあとにひとり

灯をかゝけたる

有かたさよ

いつの間にお行ひとりそ夏の月　同

廿日

あはれ成哉や

親の子をおもふ

涼しい瞰寐て髣剃(ツムリソ)ル夢心　角

廿一日

市の仮屋のいふせきに

沓作り藁打宵の蚊遣哉　同

旅人や暁がたの蚊の行衛　沾荷

蚊遣火や結(ムスヒ)分たる縄簾　百里

みしか夜や憎さもにくし鼠狩　氷花

おしげなく雪の庭ふむ座頭哉　妓童梨水

廿二日

夜読書

蚊を打や枕にしたる本の重(カサ)　角

廿三日　露沾のきみ

　　能興行

日にやけて酒呑けるぞ清水鬼　同

廿四日　旅立人をあはれみて

舞坂や闇のさ月のめくら馬　同

廿五日　茂叔讃

傘(カサ)に蝶蓮(ハス)の立葉に蛙かな　同

廿六日　山田昌悦亭にて

汗濃(コ)さよ衣の背(セ)ぬひのゆがみなり　同

　　夜舟興

苫すゞし橋より覗(ノゾ)く茶の匂ひ　巴山

　　父の寐くるしきを

夏衣いつかほそらん老の腹　同

廿七日　入湯の人

　　木賀をかたりしに

蟬の声ましらもあつき梢哉　角

木曾川の材(キ)に待得たり五月雨　山川

廿八日　井にかみあらふ

　　賤の女はおもひも

かけぬつや也けり

顔あげよ清水を流す髪の長(タケ)　角

廿九日　舟興

更(フク)る程四手のいなの光哉　同

　　一「夏半」尽

夏に摘(ゲ)て片枝葉のなき樒かな　山川

華つみ　下局旦七月十九日　（題簽）

華摘

六月朔日

一灯礼　其角述

白雪に黒き若衆や富士詣

有がたや家に冷水氷餅　渓石

遊濟海寺

あるものか鴨といふ舟の人の汗　沾徳

二日

所見

蔵か家か星か川辺の涼哉　角

奪(バイ)あふて踏ころされし蛍哉　己百

中間の手に握らるゝ蛍かな　曲(ぜゝ)水

藻や魂なかす川すゞみ　柴雫

夏ひとへ冬は恨んゆかた哉　万四

三日

巴風亭

水うてや蝉も雀もぬるゝ程　角

打水や蚊の声わかる竹の隈　巴風

三か月に涼みたらざる端居哉　渓石

うす〳〵と底に丸みや三日の月　己百

此秋の行脚は

いつくにかと問れしに

白川の風にふかれにゆく蛍　同

四日

遊女小むらさきをかゝせて

讃このまれしに

藻の花や絵に書わけてさそふ水　角

涼しくも海を染たる入日かな　金鳳

髪ほすに草のゆるかぬ涼哉　鉄蕉

白雨は天狗笑の梢かな　鉄蕉

西行も目は二ツ也ふじの雪　幽也

五日

祇公日次の題を

とりあはせて

河簀(ス)垣徳利もひたす流哉　角

夏山や菴を見かけて二曲り　曲水

おもふ事たまつて居るか蟇　同

石山にて

六日　男なら一夜寝て見ん春の山　　近江女 とよ

祇園どのゝかり屋
しつらふを

杉の葉も青(アヲ)水無月のお旅哉　　角

七日　京なつかしく
祇園会かたり出て

鉾にのる人のきほひも都哉　　同

風暑し茶の殼(カラ)くさき縫枕　　卜宅

鵰(クマタカ)もかはゆき鳥屋の暑サ哉　　柴雫

八日　母の日や又泣出すまくは瓜　　角

花つみの中へ

その母に逆縁なから蟬の声　　僧 己百

憶レ子ヲ

梨の花しばるも己(ヲノ)が実(ミ)の為そ　　妓童 梨水

二月やまだ柿の木はその通り　　越人

九日　翁よりの文に都の涼み過て又
どち風になりともまかせて

などゝ聞へけるをとゞめて

丈山の渡らぬあとを涼み哉　　角

日の陰や葉にのる瓜の二レ面　　巴山

我ものとよき島着たり木平売　　同

妻も有子もある家の暑サ哉　　氷花

夕涼み似合ぬ僧の丸はたか　　竹井

毛を替て青葉ともなし池の鴛　　かしく

十日　曲水の旅宿に訪て
湖水をおもひ出しに

漣やあふみ表をたかむしろ　　角

ぜゝ草菴を
人〳〵とひけるに

あられせば網代の氷魚を煮て出さん　　翁

法華本門の心を

雨露は有漏の恵ぞもとの花の雨　　車輪下 非人

麻よもきといふ句を結縁
に申つかはしたれは我母の
追善とて此句を送りける
也翁当歳旦に　こもを着て

誰人います花の春と聞え
しも未来記なるへし

十一日 水の粉に風の垣なる扇かな　角

十二日 夕薬師すゞしき風の誓かな　同

十三日 拝天王之御旅所
里の子の宿宮(ヨミヤ)にいさむ鼓哉　同

十四日 蒲の穂や蟹を雇(ヤトヒ)て折もせん　同
引汐に動かぬ舟の暑(サ)かな　百里
堀かねの名は昼顔の雫哉　妙延寺 道可

十五日 娵入せし時の枕か土用干　角

十六日 怖(ヲソロシキ)夢を見て
切ラレたる夢は誠か蚤の跡　同
衣食住の三ツは何れか
かろんじ侍らん然共草衣
茅舎は安」身ヲのみ食誤ッ

て天命を断と
いへるにや　山川

酸 残る歯も梅売る老か泪かな
苦 藪根掘ルうき世の味や蕗の薹(タウ)
甘 井の底の蛇を忘るべし蔓(ツル)いちご
辛 百(モヽ)草に蓼の実(ミ)ばへは著(イチジルシ)
鹹 散(リ)かひて桜まじるや須磨の塩

十七日 灸すへて夕立雲のあゆみ哉　角
嫘寡
竈の巣や干ス〳〵ぬるゝ妹か文　達曙
ぬれ石に猫の昼寐の暑(サ)哉　寒蟬

十八日 抱(タキ)籠や妾(メカケ)かゝえてきのふけふ　角
次の夜は結句不拍子の躍かな　三井 笑種
京にいなか
犬蓼の柳原こそ五条なれ　舟竹
蠅をうつその手枕の眠かな　己百
伊勢の国にて狐の

人につきて云出ける句

仁あれは春も若やぐ木目哉

此狐つき日比の田夫にてぞ
有ける狐いにて後は無筆
なりしと也其筆跡正
しう狐にて侍れば歌に
あやしくたえなるためしに
もと書付侍る

元禄元年七月の事にや

十九日

月出て座頭かたふく涼み哉　角

紗の切レに蛍つゝまん鳥部山　筍深

何云て声のかれたるすゝみ舟　枳風

廿日

夕皃や白き鶏垣根より　角

路通つるがへおもひ立ける
餞別に

剃(ソリ)立のつむり哀や秋の風　曲水

難波江にて

廿一日

床しさはいくつ角出ス浜の芦　路通

市中の光陰はこと
さらにいそかはしきを

秋鳴スさゝら太鼓や夏神楽　角

仏めきて心おかるゝ蓮かな　女秋色

廿二日

閔(アハレム)レ農ヲ

焼鎌(ヤケカマ)を背に暑し田艸取　角

廿三日

煙雨村

夕立や洗ひ分ヶたる土の色　角

ゆふ立や炊く煙をつれて行　百里

魚の降白雨すゞし町屋川　遠水

廿四日

廿五日

廿六日

誰どのゝ後室にや
寺まふでの有さまを

紅に団のふさのにほひかな　角

不レ奪ニ百姓ノ膏腴ヲとは
文選のことば也

百姓のしぼる油や一夜酒　角

木戸番をあはれむ
蟬をきけ一日啼て夜の露　同
蚊の声を悪(ニクム)も時の信哉　由之
炭釜に蚊の声こもる夕かな　童次
つまねとも勧(スヽメ)て通る榕哉　賤水

廿七日
常袴とらせられけり夏の亭　仙化

豊年
ぬか味噌に年を語らん瓜茄子　角
白雨の空さへ晴る黄菊哉　友五

廿八日
雨中吟
夕立に独活(ウド)の葉広き匂哉　角

廿九日
かまくらの浜出を
海松ふさや貝とる出刃(デハ)を蜑(アマ)にかる　同

晦日
夏祓御師の宿札たつねけり　同
物〱よ花火おそれぬ涼み舟　三井 笑種
木の下の菴ものうし夏の月　莫陵
七夕の重ねてめすやかり衣　松風
心非心是

よしあしをいはて誉よき若葉哉　定良
可然松原にて
のる人も其駕籠かきも涼哉　鋤立
水音も暮に淋しや崩れ簗　防風

七月朔日
父の煩はしきを心もと
なくまもりゐたるに
いなみかたき会によびたて
られて此句を申出たれは
一折過る程に心よしと
いふを告たり妙感のあまり
に其一順をあらはし侍る
秋といふ風は身にしむ薬哉　角
替てよく澄内井戸の月　定良
燕の巣を立日より稲刈て　幽也
相撲習ひにくるゝ岡越　松風
顔つきのよきはまれなる渡守　渓石
右左ある礒の足跡　角

二日
草庵に水つきて

住わひける僧を問て

手拭の筐よりもる一葉哉　角

秋来ても色きのふ也桶の百合　亀翁

寐かゝるも心拍子のおどり哉　遠水

そのかぎり夕日を挑(イト)むつゞし哉(マヽ)　且水

兀山もことさらぞよき岩つゝじ　全峰

卯花に乳母なつかしき垣根哉　長崎 白藤軒

三日

市隅

西側に灯籠なかれやみかの月　角

離妻(カ)之明

はつあらし兎の毛並ほそりけり　筍深

不(ネカハ)レ蘄(ヤシナハレンコトヲ)レ畜ニ乎樊(ハン)中(ニ)一

庭籠よりきゞす追出ス心哉　筍深

読(ム)ニ大ー智度論(ヲ)一

深サしれ水のよとみの白蓮花　同

一念

艸の露こほれぬうちぞ千々の月　同

四日

五日

六日

もろこしにもひかこと

せしためし侍れは

星あひや物たばひける胸の中　角

秋風楽を所望して

七日

七ー夕や暮露よび入て笛をきく　同

時ならぬ水かけ草や星の聟　素見

名のたゝぬ夫婦世に有天の川　仙化

蝙蝠の虱おとすなほし祭　曲水

星あひや露は一ツの葱畑　里東

ゆふかつら星合の浜にかけて有　青女

星合や人のかしたる衣幾ツ　渓石

当年も予か竈ふすべ

ける身のねがはしかるへき

事やあるとせめたれは言下に

何〳〵を七色あげん星祭　是吉

八日

三遷のおしへに慣ひて

七つになりける姪を寺へ

のほせたれは一月ありて

七夕に歌奉りけるを

いとをしみて

文月や産るゝ文字も母の恩　　角

題二張氏隠居一

金銀花気をしる夜の倂子哉　　少年 匏瓜

夕顔や半開し八ツの鐘　　同

ふじ垢離や女の上の物笑　　訓女

石山幻住菴は芭蕉翁かりに
徜徉せし所也ひと日仏
餉をまいらすとて

いつたきて蕗の葉盛の御仏餉そも　　里東

幻住菴山上

木啄の柱をつゝく住居かな　　曲水

山下にて

物種よ小松にましるけしの花　　曲水

蟬の音に争ふ雨やザンザ降　　全峰

鵜もつかれ鵜飼も眠る夜明哉　　氷花

舞の手の扇にあまる暑サ哉　　石皷

自画讃

いざ書て暑サ忘れんふじの雪　　亀足

若木より清水に馴るゝ柳哉　　セヽ千破

九日

生霊酒のさがらぬ祖父かな　　角

人の子にいよ〱親し秋の昏　　水戸山口 半夢

十日

海辺暁雲

稲妻や朝暾したる空に又　　角

十一日

花はかたみに入葉は枌に
荷ひ分てその労にかはらん
といふ誠切なるあらそひを

親も子も清き心や蓮売　　同

星合の夕へ淋しや比丘尼御所　　揚水

朝皃や命とらるゝ土竜　　童次

十二日

美女美男灯籠にてらす迷哉　　角

負ぬるを咄にはせぬ相撲かな　　遠水

十三日

南部の其詞たつね来りて
野田の玉川には西行上人
の堀井ありと語しに

濁る井を名になかたりそ秋の雨　　角

熊（クマ）蜂の花の露吸情かな　棚雪

落葉はく賤は色なき手業哉　同

出羽の国山寺といふ所にて

山寺や人這かゝる蔦かつら　仙化

十四日

分郊原

みそ萩や分限に見ゆる髑（サレカウベ）　角

草村に飯吹とるや秋の風　琴風

秋風や肉さへつかぬ髑　渓石

北露の虫のそれ〳〵の穴　角

玉川を我聖霊の手向哉　童次

玉まつりかたよせて釣る紙帳哉　琴風

門並や箱挑灯は盆の中　渓石

秋風に俤見えぬ玉まつり　裴淵

たんさくかゝせらるゝ

十五日

迷惑さを

葛の葉の赤い色紙を恨哉　角

荀子其（ハ）辞富而麗（シ）

白妙に夜の牡丹の風軽し　揚水

孟子之文直（ハ）而（ニシテ）顕（ル）

白雲やちらり〳〵と山桜　同

楊子之語簡（ハ）而（ニシテ）奥（フカシ）

木からしに軒の瓦も哀也　同

十六日

陀羅尼品

銀を罪の秤や墓参　角

卅三年の回愁

其時は螽おさへし墓の前　仙化

亡親之日

孝養施餓鬼　百里

地獄　落鮎や火振暇（ヒマ）なき水の色

餓鬼　子を捨る長者の門や高灯籠

畜生　馬士も倒れ臥野ゝ末の露

修羅　辻〳〵に切ちらしたる西瓜哉

人道　受かたき身を悦べや生身魂

天道　稲妻のわづかに笑ふ契かな

声聞　秋風や梢はなれぬ蝉の空

縁覚　蓮の実や風にものらすとゝまらす

菩薩　躍子は母のかざれる菩薩哉

仏

十七日　髭かちなる男の椎つみたるは
　　にげなかるへし　　角
西瓜くふ奴の髭の流れけり　　探泉
輪ふえて菊にみしかしませの竹　　東順
算木餅を文字にかさぬる灯籠哉　　同
昼寝して夜をあてことの鵜飼かな

十八日
つぼみとも見えす露あり庭の萩　　角
頼朝もせはしき回リ灯籠かな　　里東
すまひとて力くらぶる童哉　　小僧 文松
牢人の肩とがりけり秋の暮　　近江 そめ
老僧をまては涼しや辻せかき　　戦竹
いろはをもかゝぬは我と猿はかり　　東順
夏の日や濁りし水も時の味　　亀翁
はま衢友くるはしや犬のつら　　半夢
寺〳〵の掃除はひとり柳哉　　同
誰ためそ茎立ふとる明屋敷　　野径
散花の銭箱守る雀かな　　同

賤か身も名乗を恥ぬ相撲哉　　岩翁
　番組　　粛山
三番三　さもこそは頤ゆるめ華の酒
高砂　松の葉やはかで目出度門の雪
頼政　いさきよく末摘れたる茶木哉
東北　東屋の母屋に経よむ時雨かな
紅葉狩　切込て太刀に火を見ん岩の霜
三輪　泊瀬女を夜な〳〵送る蚊遣哉
三井寺　くるふ程狂ふて後夜の月み哉
老松　松梅や夫婦通夜する神の庭

十九日　満百
有明の月に成けり母の影　　角
我も又もらひ泣せん秋の蟬　　筍深
蟬の声諸虫手向の千部哉　　東順
　追加　四日五日のおこたりに
　　つきて申侍る
七月廿一日コ斎三回忌なれは

智海師をともなひて墓誌

浅草誓願寺念仏堂

三人の声に答よ秋の声　角

同しく

三とせはや灯籠一ツもなかりけり　枳風

市中閑居

蕣やよし見む人は竹格子　角

閑興六歌仙

ゆく水や何にとゝまる海苔の味　其角
籾の芽立の堀江棚橋　渓石
人返しをのらか国の長閑にて　琴風
検(校)狭成の此比の皃　角
さす月も輝く四間の青畳　石
蜈をすつる扇露けき　風
数珠や独鈷念し居たるに秋の雨　角
長女使の御返事待　石
かくし題おもふ方にも読まさん　風
借銭乞は酒にやはらく　角
たゞ世には竜田の禰宜のしぐれ降　石
又その枝に冬の甘柿　風
狐着哀に狂ふ月の影　角
頓写の琵琶の折からの秋　石
駕の番におかるゝ霧の中　風
其血したふ一筋の芝　角
我は来て金拾ひたる花の陰　石
二日の夜に成し雛町　風
髭鶏の田舎相撲をもよほして　角
土器添る檜破子の数　石
御墓への道こしらへて悲しまれ　風
妹そねむあねや貧しき　角
垢離場より導者告くる人の縁　石
風に吹れてかるい疱瘡　風
老楽の本卦かへりを祝ふらん　角
いで其比とうたふ勝修羅　石
礒の月何(勧)観進に来る船そ　風
秋の渦まく上﨟の衣　角
よむ内に泣るゝ文は天津雁　石

まつは心にゆるす勘当　風
老功をあさむく程に軍して　角
霜の八霜にいたむ尻窊(ハス)　石
冬の偈(ケ)の灯の花しら〳〵と　風
せはき莚をうつす熨斗(ノシ)餅　角
すり針や近江の海を見おろして　石
着やふる迄は木曾の麻衣　風

四月晦日
石山幻住菴をかたり出て
郭公背中見てやる麓かな　曲水
体なき山をつゝむ夏草　其角
狩人のさくり(馬峰)にかけて飛声(トフ)に　同
急にから味をしほる冷食　水
月よしと隔をとりし相借屋　同
年は此秋大嘗会也　角
鴨ましる鳥羽田に雁のはみ入て　水
子の臼とりに母の餅つく　角
鑓持の草臥たるそ哀なる　水
七ツ撞(ツキ)出す菩提所のかね　角
おもふ事二ツのけたる其跡は　水
花の都も田舎也けり　角
町汁につれたちゆくや桜鯛　水
舅の紋と見ゆるきさらき　角
春風の馬より下る番代(リ)　水
いかなる用にいそく燕　角
まれ人に酒買(フ)ふりをかくしける　水
さてよい月とほめて居る也　角
長(ナ)き夜に芸しぶりたる咳(セキ)はらひ　同
薬をはこぶ簾中の秋　水
此恋は兄か合点を待斗　角
立る額(ヒタイ)のはえぬ気の毒　水
居士号に衣は染て袖の色　角
六浦の辺の曙の空　水
くめやくめ海より樽をひろひ上(ケ)　角
其日の祭具足かす也　水
何者のひりちらしたる道の屎　角
のほり〳〵て富士の白雪　水

月影も鼻の先にや成ぬらん　角
弦の別れに落る竜胆　水
振袖の羽織捨たる露の上　水
ほれた子細を関の明神　角
景清か道の早さは夢もしれ　同
前巾着に小判へし折　水
分別にわたるか花の八重一重　同
扇をもたば蝶の心よ　角

翁に供して辛崎へ
まいりけるに千那亭に
休らひける即興

艸取のはれに染なす柿苧哉　珍夕

昼顔の憎き様なる旅の
日数そいとくるし別後を
問はいまた必しも秋香
一夜におとろへずと我翁
のいつれか今朝に残る菊

とにあらんかはかりならす忘れ
かたき事のみぞ多かる　其角

筆をさす御笠やかろき下涼　粛山
蟬にまかする声の乏しさ　彫棠
いたく酔ほと只顔に月を見て　角
重なる霧に罟を着て臥　山
行末は鍛冶かきぬたにいぶかしく　同
また裁なから榎直をする　棠
盗人と吾名よはれん里の馬　同
聞うる甲斐もあらぬ法談　角
傘やなとあらそふ程に村時雨　同
紋見知たる君か提灯　山
水もらふ姿を跡に思ひ出し　同
早歌よまぬ心きたなさ　棠
死さまは人なつかしき泪にて　同
くま〳〵さかす尼の針箱　角
袖に来て物語せよ雀の子　同
肴手折て瓶にさす花　山
万歳に身は下る共春の月

若殿原に小弓まいらん　同
ナ二人してかたみかはりの頬(ホウ)かぶり　棠
梶とる足の憎き河舟　同
金箱に包まれなから霜寒し　角
東寺の塔も成就して猶(ナヲ)　同
双六の石と簺との三十余(リ)　山
孝ある嫁にたのむ古郷　同
横川まて文の音する菜(サイ)の物　棠
出家になして珍しく寐ん　同
うき目やむ洗薬もなみた也　角
つゝみ分たる椿早梅　同
山里の春を過さぬ京の礼　山
母てふ筋(スジ)をまねく初蝶　同
乗物をつらせなからや花の雲　棠
遠侍に問ん艸の名　同
はし鷹の口すゝぐなる溜(リ)水　角
氷によとむ蝮(ウハハミ)のから　山
今(傘カ)切レとことはる道に行暮て　角
空おそろしや白き食米　棠

呈餞

安房の海奉りけり汗拭　彫棠

首途

名月の海見て思へ西の海　粛山
畳紙におしむ夜こそみしか夜　棠

六月十一日

笑ふなよ水の粉くれて車僧　ト宅
夕立けふる風の勢ひ　キ角
野路の月走(リ)こぐらに息(イキ)切レて　柴雫
袿(ツマトル)袋せはき平茸　宅
茅薄牛見へぬ程引すらせ　角
何うろたえし雪の関守　雫
遠余所に窓つき上るひとよきり　宅
爪(ツメ)十分にひたす盞　角
貧ゆへに祐乗か猿はさけふらん　雫
変化(ヘングヱ)とりに参る牢人　宅

夜の雨焼食二ツにぎらせて　角
泣てしまふたあとはねられす　雫
下紐の結ひ目高き忘レ草　宅
小便赤き秋のあら海　角
朝霧に千鳥釣らんとさはく也　雫
名月日よし酒むかへ人　宅
かくや姫かへせと空に花ふりて　角
桃にあやしくこぼれたる堂　雫
蜂(ナ)の巣はうるさきものゝ工み也　宅
一ッ時責の御馬出さる　角
酔顔をまぎらかしたる作り髭　雫
ぬるでかさしに折漆班(ウルシマケ)　宅
宮川にすべるやうなる月の影　角
稲妻よりもきいた剃刀(カミソリ)　雫
四ツ五ツ若う成たる玉手箱　宅
人に買せてあそふ傾城　角
色外に肴あらそふ古郡　雫
柄(ツカ)うちたゝく扇そよ風　宅
斎の料ゆゝしき門にさし入て　角
人くひ犬か吼ぬこの犬　雫
灯(ヒ)をよせて夫をさらす頬(ツラ)の皮　宅
うき恋語る所〳〵の高札　角
又けふもきのふの群(ムレ)の花盛　雫
遠巣島巣に小鮎くはせて　宅
甲斐歌やさやかにうたふ春の月　角
神さびかすむ総(ソウ)一の宮　雫

七月十三日

橘上吟

をのかきほひ夜更てうすし花火船　且水
しめる羽織を裾にまく露　浮萍
夕月に湯手のへちまの漂ひて　亀翁

七月十九日　半時

投られて坊主也けり辻相撲　其角
秋も涼しう畳台敷　遠水
湯次(ツキ)にて廻ス新酒も物侘て　岩翁

下手に焼火は曇る月影　角
艸の戸を氷柱に閉て轜(キシ)る音　水
市を囲ふて銭うらぬ町　翁
我方に古き仏を守(モリ)申　角
家子仕はぬもたのもしき妻　水
白き手に流す背(セナカ)をかこつらん　翁
盲(メクラ)哀に見ゆる前髪　角
こよひ又月にはもやふ船の数　水
水施餓鬼ある松の片浜　翁
鰹切る小礒にむれて秋の風　角
賃おしからず三里乗る馬　水
我年にあはねと娘ぬすみ出し　翁
恋にかならす恋の友達　角
王城に付てまはれる八重の花　水
稲荷の茶屋もあかぬ春の日　翁
うなひより乳母か慰む毬(テマリ)にて　角
風には高く飛ぬ初蝶　水
暖簾を巻上なから座敷掃　翁
きかぬ薬をのむおもひ草　角
目くはせに亦こまらする菊の酒　水
月に美僧のもとの名を問　翁
此度は長崎迄の浦伝ひ　角
鯛も鱸も汐分る瀬戸　水
精進の椀は禁する村の賤　翁
一芸得たる人を感応　角
をのつから気の痳入ぬる雪の声　水
麦の種さへもらふ安キ世　翁
あはら屋の狸の穴をふさかせて　角
残らす変(カヘ)せ十の鳥の子　水
雨気つく日には団炭もかたまらし　翁
物うりゆるす寺の門前　角
花の時汲あふ井戸は坂の下　翁
はしめて蠢(ウコ)くやとり木の虫　水

偶　興

秋風や我と板戸の開ク音　岩翁
送火に経しらぬ身は念仏哉　亀翁
蕣はぬすむ間もなき盛哉　遠水

宗祇の夜寒

おもひやりて

亦一重菰敷までの夜寒かな　仙化
月はあれより鹿の来る筋　キ角
しもとゆふ手近き梨を所望して　百里
武士に成たる旅のふるまひ　化
秤さへ関の東とかはる也　角
いくらの豸(ケモノ)冬にたつ市　里
むさ〳〵とくるしき斎(トキ)をくらひける　化
たしなむ墨を惜む史(モノカキ)　角
うちつけにくとく男を恥しめて　里
青屋か泪爪(ツメ)に藍しむ　化
いつとけて井の輪の氷柱つらかりし　角
驚しはし足屐(アシタ)ふんぬく　里
十分の盛を見せん花の朝　化
焼筆あてゝ霞む山〳〵　角
釘かくし建立したる人も有リ　里

能の太夫に眤(ナシミ)かさなる　化
旅すかた直に揚屋の月を見て　角
肌〳〵をさする秋風　里
新(ナ)しい鰹なりしかうす紅葉　化
水は潮にわかる駒形　角
村肝(キモ)の喧嘩は時のはやりにて　里
黒いわつはのくし〳〵と泣　化
あふよしも割た茶碗をつくかこと　角
片手打なる恋のあつかひ　里
つく〳〵と我おもふ事を屯(ダマリ)者　化
夜の火桶に髭こがしたり　角
月雪も丸太の切レを枕にて　里
針立習ふ末のいとなみ　化
片かなに聖の文字を紲(シハリ)つけ　角
年輩(バイ)よくて奉行かうむる　里
地祭の竹の嵐も常ならす　化
鞠をわたして沓しつか也　角
十坊のさしたる門は鈴(レイ)の声　里
松の林を鶏の床　化

楽せんとおもひし旅の花散て　角
笑ふにこそや山はさなから　里

元禄庚午歳上秋下旬　宝井其角　撰

江府書林西村唄風行版

花摘集　山田筍深跋

孝者徳之基也儒家有孝経仏氏有恩重矣母子之有親也懐老牛舐犢之愛沈断猿叫子之恩猶羔有跪乳烏有反哺況亦於人乎于茲武陵晋其角元禄万年之三。四月仏生日遇母公之諱日偶詣石廟嘆戚頻起泣血横斜捻香摘英挑一灯詠一唫以供聖善之追福積日渉月向莫換百葉也今幸慣摩耶報恩之結縁集一夏百吟名曰花摘也記其傍者皆是助余哀者也嗚呼角子寄思風月游心滑稽花中囀鸝唇楓林敲鹿腸遠追祇公之薫業近汲芭翁之支流矣闔国許之成世之棟梁噫夫叔子有堕涙之碑其角有花摘之集和漢雖易地其機亦一也予閲其集感其情而採毫於東武之旅寓

たれか家

たれか家

（題簽）

彼鹿を追て霊山
の会に弓を投し
人はみつから千
仏の一数といへり
今誰か家といふ馬
蹄は駿馬の鞭影
をみて走るにひとし
四人只頬あふのみ

第一

馬蹄今秋を誘はゝ誰か家　　挙白
海の嶠（キハ）なく日にむかふ稲　　才磨

名月を岡の水木も待とりて　　嵐雪
杖にかけ行賤の席（シキモノ）　　其角
けふことに雪舟（ソリ）さし習ふ北の子等　　丸
竹の烟のわかる里村　　白
麦に買フ肴は何か朝もよひ　　角
山の祝ひに小柴投やる　　雪
榛名（ウハルナ）なる大夫の御師に一夜ねて　　白
あんどんとれは雨しきる空　　丸
毛を被（カヅ）ル己か友とや鳴狐　　雪
僧に嗅（カヽ）する茄子てんかく　　角
此女けはひ忘れぬ昔草　　丸
紙もくろめと染る手の風　　白
今は恋腹にあてたる渋（サビ）刀　　角
負（ヒ）物なしてやらん遊君　　雪
酒の鬼ひとり〳〵に名乗出　　白
かゝる有馬をたつ宵の秋　　丸
富士見すはふしの月見にあくかれん　　雪
我寺建（タテ）て鹿はさひしき　　角
種（ツ）物上手に作る花の年　　丸

五幾七道の春の行かひ　白
二長閑なる空聾(ツンホウ)に身をなして　角
代のゆるかせにわかる訟(ウツタヘ)　雪
落あへど辛サは同し海の汐　白
鵆(イヨメ)かもめの宵と暁　丸
石焼の鮎に飽(アカ)する山のおく　雪
木茅(カヤ)の間は皆仏達　角
うら盆は哀に着たる片袴　丸
月は町屋の右の家(ヤ)妻に　白
米篩(フル)ふ人目に恋の恥やなき　丸
思ひ古(ル)筆摺曲(ケ)し墨　雪
あふ期迄力を付る艸枕　白
見るおそろしき青池の底　丸
鉄炮の玉堀に行夏木立　雪
甲斐の根方は雪の装束　角
二ウ山里の砧搗栗声ませて　丸
むれ〳〵道者秋の朝風　白
茶(ヲトコメシ)花むすめに見せて聟にせん　角
酒はやし売ルうきわれもかう　雪

月影の満る莚に賽(サイ)うちて　白
嵐も風も陰(ヲン)-陽のうへ　丸
御祝に撰もらさるゝ伊勢の貝　雪
鰯のかしら住吉の神　角
大浜の猟雄(アラオ)か舟を打おろし　丸
みつから果はしらぬ朝比奈　白
寿アル松こそ縄になはれけれ　角
髙野のうへの小田原の花　雪
夜(ル)めくるいたかの袖に春の霜　白
睦月みそかの忌(イマ)ヒする家　丸
三蔵よりもまだ若味噌の口明て　雪
とく人むすふ帯の後(ウシロ)目　角
祈(リ)する祭の中をおされ出　丸
やゝ鼎(マガリ)して水給はりし　白
和(ナヨ)竹の雀折とる和やかに　角
雪の布袋をはやし事する　雪
さりに〳〵さりに寒きに尻あぶり　白
心ひとつをたてし浪人　丸
遅き櫓に白雨くらむわたし舟　雪

茂りみしはや石原の椎　角
門の犬赤(アカ)は白よりゆたかにて　丸
明かた愧る厨子(ツシ)の古ル君　白
新子共つゐたち比の月の顔　角
愛敬あれと荒神の御造(ミキ)　雪
三ウ　十人の塩くみ又(マツタ)まくさ刈　白
菖の前に狭(ケフ)の麻買　丸
流とて酒田の柄杓名もおかし　雪
東頭ましり色少(ワカ)キ時　角
執筆する禿のそばの散杷　丸
天狗さひしく物かくすらん　白
左遷の昼は座敷にかへり居て　角
壁虎(ハイトリクモ)に蝿をとらする　雪
下闇にごろ引ありく川柳　白
日をくれゆけは鴻崎の月　丸
身に入て自我喝よむ声惆(コヽロホソ)　雪
小田の秋しれ食こぼす人　角
蝶花にありたきまゝも四の恩　白
九十九なれや久方の春　丸

名　小山伏新(アラ)山臥の霧霞　角
ほくちがらたく火かとこそみれ　雪
哀聞餌(ヱ)乞の鷹の夜の声　丸
尾花尻籠(シツコ)に霜や置らん　白
秋風の竜田につゝく郡山　角
素波(スッハ)に出て朝かへる月　雪
船頭もひとつにをとるをとり船　白
向ひ川縁(ヘリ)通る大名　丸
郷中の嫁(ヨメリ)ふるゝは狢にて　雪
おもひまさると啼とのゐ猿　角
いやまたし遅(マテハ)椎の木むらしくれ　丸
峠は雲につゝむ権現　白
寂莫のわらち作りに宿かりて　角
ふわ〳〵くへとくたかけの鳴　雪
脇(ウ)指をさしてわかれの小盞　白
つらしとしらば来(コ)まいものとて　丸
わりなくも乳探(チヽサク)らする関の婆(バヽ)　雪
寐なれぬうつゝ妖(ハケ)ものゝ影　角
降はれて星澄わたる雪兀(ヲコシ)　丸

たか来てつくそいなのめのかね　白
花ヲ得テ山也石ヲ得テ流也　角
つゝしの槳(コンツ)まれに吸へく　雪

第二

艸の葉を遊ひありけよ露の玉　嵐雪
人も定まる月の真夜半　挙白
やらん〳〵戸渡る声に雁立て　其角
松風いさむ討(ウテ)の行-列　才麿
見に出る唐の頭の朝日影　白
古き代をしる塗籠(コメ)の書(フミ)　雪
曇なき鏡匠(ツクリ)の受領にて　丸
一の棧敷のかゝる田楽　角
篝(ウ)たく牛の御前の森の中　雪
瀬々のめなだ(胡鯉)も浮てきぬらん　白
ゆり入てゆるかぬ国の橋柱　角
濃茶をのそむ水の水上　丸
伊勢使素袍を竹に狭ませて　白

具足開にまいりあはゞや　雪
大判の名も珍しや金衣鳥　丸
花の弥生の初瀬の観音　角
貫之の心もしらす人はいさ　雪
一ツには時二には体　白
水鳥の酒の摂待立とまり　角
相撲中間に祈る自己(シコ)仏　丸
望月や真田に似たる若衆ふり　白
城の御門を前渡リ来る　雪
浮(ニ)鴨の頭からげの水櫛そ　丸
筋斗(トンボカヘリ)を胡(キタ)のたはふれ　角
手や足や樹を放レたる風の音　雪
笑へは晴るゝ雷の評　白
相伴も給事もそこに夕間昏　角
医者に問るゝけふの腹持　丸
我ならて乱の笛を誰吹ん　白
堺の家は家に成けり　雪
有時はありたけに散ル桜平魚(タイ)　丸
春のいろはにほをかけし舟　角

朝霞夜さり〳〵のにゐ枕　雪
相見し懺ー悔涕(ナキ)そ居にける　白
月させと壁に明たる穴う世や　角
言語(モノイヒ)とむる毒(マシモノ)の露　丸
ウ身に瘡の秋風たちていと暑し　白
紫のれんゆかりのこせる　雪
蓬生に鼠の鈴の古ル衾　丸
あられふり敷弥陀の盛リ物　角
配ー当のとかり声するとか〳〵し　雪
満ッ汐浪に概(クサヒ)ぬく舟　白
神鳩や白ゆふ鷺の飛ちりて　角
千歳丁(タウ)と棟上の槌　丸
洛中の人静なる午の時　白
うき世哉とて甜瓜(マクハ)うり候　雪
夏月夜元(モト)の旦那へ見舞はや　丸
亦こと男灯けす虫　角
井戸端にふみあらはるゝ花衣　雪
せめて彼岸は立よ死跡　白
三早追ヒにまとろみやらぬ春の夢　角

我歌の坐を人によまれじ　丸
下女か桶片心にはゆかしくて　白
はゝき木こけは泪ほろ〳〵　雪
散〳〵に名をもらしたる袋蜘　丸
人は住なく瓦つくろふ　角
桃梨は隣のための宝にて　雪
数にもならぬ八朔の鞠　白
徘廻(タチワタル)四条の附(ツキ)も冷しく　角
新諸白のかはる後家の代　丸
晨明や昼もまみえし窮霊(イキスタマ)　白
一ー期添ふか獺のたはれお　雪
なげの情佞白佞黒(タラシガタラシ)にたらされて　丸
花子を語るきぬ〳〵の袖　角
三ウ上下に行義正しきお兄弟　雪
香をもる手もなき涙哉　白
寐すからも白氏文集を読セたり　角
年にさかしき室の小童　丸
酢や塩や池の蓴菜(ヌナハ)を取そへて　白
衆集(オヘラヒ)帰る岸の姫松　雪

利神(キヽ)やはれたる海の舟休め　丸
光やはらく日の陽炎(マリシテン)　角
のんとりと古き駿河の町続(キ)　雪
花の前なる糸桜やな　白
黒髪は衣より長く畳(タヽナハレ)　角
夜ひとりおるに山におれ月　丸
秋はつる蚊の母鳥のちゝと鳴　白
つゆしふらすは蓑虫は雑　雪
名 宮城野に宮のなきこそ畑(ハタケ)なれ　丸
かく捨し身を馳走御無用　角
忘れすに取伝えたる弓咄　雪
駕‐輿‐丁先に松ともす道　白
爰淀のわたりと申せ郭公　角
一‐夏をありく其空‐仮‐坊　丸
女房共食しかけよや八ツ日影　白
うきは紛れぬ細工貧乏　雪
住残るよしやよし野のかけ作り　丸
名さへ数寄ある千野与四郎　角
つら〳〵とみれともあかず椿餅(ツハイ)　雪

わすれんと思ふ灸のあつさよ　白
君か手の痒(カユ)き所へ月の雲　角
空寝を起すちわの長き夜　丸
紙(ウ)入(レ)の文ともよめり天つ雁　雪
吭(フヱ)かく哀みよや道芝　白
関東の人の心の底清水　角
口こはき世をわたる馬‐買(ヒ)　丸
ころひても蓑はよこれぬ雪の上　白
余所のくゞりを敲(タヽ)くうどん屋　雪
花もしが是当人(イテソヨ)を産の綱　丸
長き契をせん寿万歳　角

第三

雹のこほれや残る初尾花　李下
風ぞよ秋に沐雨夕立　其角
ひとりてに引板(ヒタ)の水音ひたふりて　才麿
木綿(ワタ)ほすうへにあかる鶏　嵐雪
青空をつく夜になそへ昼寐せん　挙白

薬を篩(フル)ふおとこ淋しき　湖水
川添の窓は四角に向ひあひ　青井
手船にきゆる浪の泡雪　渭橋
ウ
我せこはいつち行けん真梶泣　普船
万葉集に恋の人々　白燕
一(ト)_宮に十二の臣下祝ひとめ(こカ)　氷花
西を頭に当浦の鯨(セヒ)　李下
雲鳥の小岳大岳跡晴て　其角
往_来を止ル法の鐘引　才丸
伶(サヽヒト)のさゝら簫(フキモノ)音も妙に　嵐雪
顔見しはかりあはで明る夜　挙白
秋風に暇の状を書ちらし　湖水
聖霊棚にそむく世中　青井
色々の傘さしつれてかけをとり　渭橋
月は濁すな四ツ橋の音　普船
樽結(ユヒ)か花のとぶさの弥生山　白燕
亀胝(ヒヽアカヽリ)のいたむ春風　氷花
二
茎(クキ)漬の石の重さよ冴かへり　李下
階子なをして闇はあやなし　キ角

愚なる己は猫のたぐり綱(イカリ)(錨)　才丸
波に流れて墨削る釜　嵐雪
後鬼か家とへは前鬼か隣也　挙白
枝もめあふて燃る松柏　湖水
山井の井筒に切し玉かしは　青井
いづく定むる遊行上人　渭橋
雪を見て笑もことし二ツ子よ　普船
乞丐(モノモラヒ)にも匂ふ初梅　白燕
餝してほの〴〵狭き間(アイ)の町　氷花
三日の日になる講釈の寄(リ)　李下
小(コ)名月長月をしももてあそふ　其角
娵(ヨメ)にはきせし菊の綿(アキシベ)　才丸
二ウ
あさはなに張箱はらで置扇　嵐雪
などてかたみに頬(ツラ)をくはされ　挙白
遅けれは入レしと立る片折戸　湖水
拝みつけたる姥か分ン舎-利　青井
海魂(アヤカシ)もおしやる浪の車船　渭橋
雑煮してうる上ミ下の関　普船
腥に侍達は小とのはら　白燕

うら葉の柳聟の紋所(トコ)　氷花
但馬屋とうき名にうたふ門はあれ　李下
米の廻しの秋豊也　キ角
半天の二百十日も入あひも　才丸
津軽の海の猶予(イサヨヒ)の色　嵐雪
心中をいはしや胸に花楓　挙白
紙のかさある折かへし文　湖水
三　夕灯(トモシ)女ー孀の足音うれしくて　青井
袂に盗む節分の豆　渭橋
道直に庄屋の無理も免置(ユルシ)　普船
八の戸(ヘ)九の戸(ヘ)紅の花摘　白燕
大男涼みの棒をつかひけり　氷花
梵天たてし澪のしからみ　李下
一さんに驟(ハタセ)のり込(ム)　波の岩　キ角
桜の渦をすくふ落合　才丸
線香の結ひそめたよ春の庵　嵐雪
雉鳴かたに樵やる弟子　挙白
人日に首くゝる身は有侘て　湖水
松とるあとの月は汚れず　青井

繁昌を都かはりそ面白き　渭橋
茶碗にやかん住江の土　普船
三ウ　此石は我も目馴し山の雲　白燕
行脚わかれてゆきあひの森　氷花
浪風も大隅薩摩治りける　李下
人質かへす命うたかた　キ角
沈着那蘇(ツクヤス)も陡斯(テウス)もころぶ也　才丸
歩(カチ)くるしけに恥る腹帯　嵐雪
世なをしと殊に聞ユル夫(ツマ)の声　挙白
醤油かきに起し曙　湖水
帷子を干忘れたる青檜垣　青井
護摩堂出ぬ匹如身(スルスミ)の袖　渭橋
うとまれし三の病に存命(ナカラフ)ル　普船
みなと川にて皆の評判　白燕
漕つるゝ花に月夜の女舟　氷花
春も泪の流れかんぢやう　李下
名　雨晴るつはくらつはめ所得て　キ角
通る綱手に早苗打あふ　才丸
昼途飯(トバ)をたべよと人の招くらん　嵐雪

衣は包む俗とみましや　挙白
うは玉の名残は口を吸はかり　湖水
寐ぬを思ひに片あぐる床　青井
腹立やさのみは鳴そ川衛　渭橋
関迄遠く鐚(ビタ)つかひ切　普船
神(カノ)岡の艸刈等に身をかへて　白燕
貞-任せめにきみか来まさん　氷花
其分相心得候へと触流ス　李下
ウラ一順になる花の時　キ角
月の宿あかすうらゝにうらゝ共　才丸
ほうかぶりしてざゝんさの春　嵐雪
ウ
幣(ミテクラ)に鉈(ナタ)持添て山深み　挙白
疫(エヤミ)男のはしり出行　湖水
朝起の門は涼しく掃除(シ)て　青井
枇杷楊梅の駅(ムマヤ)〳〵に　渭橋
信濃路を水漬くふて通(リ)ける　普船
伯父のくれたる刀一-本　白燕
玄関より書院を高く見はらして　氷花
画(エ)絹にむかふ曙の山　執筆

京寺町二条上ル丁
井筒や庄兵衛板

雑(ざふ)談(たん)集(しふ)

雑談集　巻首

（題簽）

雑談集

一伏見にて一夜誹諧もよほされけるにかたはらより芭蕉翁の名句いつれにてや侍ると尋出られけり折ふしの機嫌にては大津尚白亭にて

　辛崎の松は花より朧にて

と申されけるこそ一句の首尾言外の意味あふみの人もいまた見のこしたる成へし其けしきこゝにもきら〳〵とうつろひ侍るにやと申たれは又かたはらより中古の頑作(ケンサク)にふけりて是非の境に本意をおほはれし人さし出て其句誠に誹諧の骨髄得たれとも慥なる切字なしすべて名人の格的にはさやうの姿をも発句とゆるし申にやと不審(シン)しける　答へに哉とまりの発句にてとまりの第三を嫌へるによりてしらるべきかおほろ哉と申句なるへきを句に句なしとてかくは云下し申されたる成へし朧にてと居(スヘ)られて哉よりも猶徹(テツシ)たるひゞきの侍る是。句中の句他に的当なかるへしと此論を再ヒ翁に申述侍れは一句の問答に於ては然るへし但シ予か方寸の上に分別なしいはゝ　さゝ波やまのゝ入江に駒とめてひらの高根のはなをみる哉　只眼前なるはと申されけり

一支那弥三郎入道宗鑑は生涯(シヤウカイ)をかろんして隠徳高く山崎の桑(クハ)の門しかも車馬の喧(カマビスキ)なしひとひ近衛殿　宇治へ逍遙(セウヨウ)の比去法師しれるもの也と尋入せ給ひけるに痩(ヤセ)労(ツカレ)たる老法師ひとり庭草取なとしてそのほとの池のたゝえに水かゝみみけるさまを

　宗鑑かすかたをみよやがきつはた

と仰下されたれは則

　のまんとすれは夏の沢水

とつかうまつりける当意興ありけるにや元政上人の隠(イン)逸(イツ)伝には宗鑑か伝も入らるへきを此ワキ凡俗(ホンソク)にかへりたる本心ありとてのぞかれ侍ると也一句一生の徳を無(ナミ)しけるはあさましき有様なれと昼-寝(チウシン)のせめにおもひ合せてはいかにそも思ヒゆるすへき事とも也後は山崎の草菴はそのまゝ古沓(クツ)と法衣をのこしてさらに行ク所をしら

す俗にやはた山の天狗に成て廿余年の後も月のあかき夜なと八幡山崎のあたりをさまよひける人に逢てもものいふことなし涼(シラケ)しまなこ角(カド)ありて人をあやしとのみ見かはしたるをおそれてそれかともとかめす正に見たりしといふ人まれ〳〵多し

一貞享乙丑年九月十四日の暁の夢に鶴岡へまうて侍るとおほえてその身ひら包首にかけ菅笠手に持て段かづらの下道ならびの松を見あけ行まゝ沖のかたしきりに時雨来てはやく拝殿(ハイデン)に走(ハシリ)つきたれは社人立さはきて蔀(シトミ)さしおろすその蔀はむさう屏風といふものを畳みたるやうに有けるがはら〳〵とさしおろすその陰によりて雨しのきたるさまを社人見とかめてとく出よとせめなから時にとりてのけしき一句つかうまつらはゆるし侍らめとつぶやくあはれ爰にてこそとゆめそゞろに面白く海みやらるゝ松の葉末に由井の浜風吹わたり波と空とのわかるゝやうにおもひなして

松原のすきまを見する時雨哉　　と

申出たれは社人しばめる顔にて吟し返し当意よろしく神もさこそはとうなつきぬとおほえて夢さめたり明れは十五日の朝深川の八幡宮に詣て侍る次て芭蕉菴をとひてありし夢に申し侍りと語けれは現(ウツヽ)にはかゝる口きよき姿は及ましきをと申されたり魂の遊(アソ)ふ所まことに虚霊不昧(キヨレイフマイ)なる事を知ル

一荷兮集あら野に辞世とあり

散花を南無阿弥陀仏と夕へ哉　　守武

彼集のあやまりか神職(シヨク)の辞世として何ぞ此境をにらむへきや只嗚呼(アヽ)と歎美(タンビ)してうちおとろきたる落花か

一先年上京の時挨拶に

目をしやれよ花しほれたる庭なと　　季吟

なんどいふよみくせを通音(ツウイン)の句也

一五十匀百匀とわかるゝ事北野梵灯より始ム

一西岸寺任口上人のたんさく二牧(枚カ)

草ほう〳〵刈ぬも荷ふ花野哉

蓼醋とも青海原をみるめ哉

伏見にて乞取侍るその朝京へ出るとて稲荷山にてふところさがしたれば道すからに落したるをあはやとて駕籠かく男はしりかへらせけるに誰人のひろひてか左の方の藪根垣にはさみてあり海にひろへるかひありけり

とかさねて袖に包けるかの短尺の畳紙の上に男山正八幡大菩薩と仇書せしをおそろしと思ひて内を見すしてやぶね垣にははさみて捨つらん只神名のかろ〳〵しからぬにや旅すへき人は心得ぬへし

一さみたれにかくれぬものや勢田のはし　　翁

此はしの名大かたの名所にかよひて矢矧のはしとも申へきにや長橋の天にかゝる勢多一橋にかきるへからすと難ぜしよし京大津より聞え侍るに去来か

湖の水まさりけりさ月雨　　と

云へるまことに湖鏡一面にくもりて水接天とみえぬ八景を亡せし折から此一橋を見付たる時と云所といひ一句に得たる景物のうこかさる場をいかて及ぬへきや文章のみものにあづからすと云へる瞽者のたくひ成へし

一翁北国行脚のころさらしなの三句を書とめいつれかと申されしに

俤や姨ひとり泣月の友　　と

いふ句を可然に定たりと申ければ誠しか也一句人目にはたゝず侍れとも其夜の月の天心にいたる所人のしる事少なりと悦ひ申されけりされは友吉か

さらしなの月は四角にもなかりけり

といふ句は武さし野ゝ月須磨あかし絵島にかけても影同しさみたれにかくれぬ橋いかてふみたがふへきや

一かりそめの旅に立出ても先おもひ合らる川風寒み千鳥なく也此歌炎暑にも寒しとは俊成卿の雑談也

出女や一疋なけは蟬の声　　自悦

一あすは桃のけじめに人心うつろひ安からんも覚つかなしと上野の桜みにまかりしに門主例ならす聞えさせ給へは山の気色いと閑なるに花もうれふるにやと心うこかす霞の底もしめやかに鳥の声定ざりし日比にかはる事いたづらになせそと亦とかむる人をも心づかひせしかは興なくかへりぬへきに成て風雲の私にひかれ大師の御座清水の糸さくらなと只おほかたに詠けるに彼さくらの木に添て舞台の右の方に鐘かけたり片枝はさなから鐘をまくはかりにほころびたれは

鐘かけてしかも盛のさくら哉　　角

入相と聞えしほとに門主薨御のよしをふれて鳴物とゞめさせ給へは悲き哉やかゝる日かゝる時ありてかくは

世をさとしめ給ふことよと仏身非情草木にいたる迄
さでのみこそは侍りけれと愁眉沙汰する事をおもひて

其弥生その二日そや山さくら　角

一其去年にかはりて山のにぎはひ又更也

小坊主や松にかくれて山さくら　角
香煎ふる素湯に桜の一重かな　普船
くもる日は一日花に照れけり　挙白
さそはれて花に嬉しゝ親の供　浮萍
物見よりさくら投こめ遊山幕　亀翁
花の雨小袖惜うてかへるかや　氷花

一嵐蘭か母は田中宗夫と云し人の孫にてかの宗夫の武功
をよく知て語り申されけり和州誉田の田夫にてはしめ
中間より後松倉豊後守の家老となり侍るされば子孫に
伝えて語りけるに士は畳の上にてむまれ田の畦にて死
へしとこれを家訓として心さしをかゝず懐旧

死は爰秕穂に出る小田の霜　嵐蘭

一加州金沢の一笑はことに誹諧にふけりし者也翁行脚の
程お宿申さんとて遠く心さしをはこびけるに年有て重
労の床にうち臥けれは命のきはもおもひとりたるに父
の十三回にあたりて歌仙の誹諧を十三巻孝養にとて思
ひ立けるを人々とゞめて息もさだまらす此願のみちぬ
へき程には其身いかゝあらんなど気づかひけるに死スと
も悔なかるへしとて五歌仙出来ぬれは早筆とるもかな
はす成にけるを呼に成ても猶やます八巻ことなく満
足してこれを我肌にかけてこそさらに思ひ残せること
なしと悦ひの眉重くふさかりて

心から雪うつくしや西の雲　一笑

臨終正念と聞えけり翌年の秋翁も越の白根をはるかに
へてノ松か家に其余哀をとふらひ申されけるよし

塚もうごけ我泣声は秋の風　翁
常住の蓮もありやあきの風　何処
我はかり啼せて秋の石仏　乙州
月すゝきもし魂あらは此あたり　牧童
つれ啼に我は泣すや蝉のから　雲口

一正木堂鳥跡はむかし遊女あまた持て栄へけりかゝるい
となみあるへきことにもおもはずとて所を去けれとも
なましゐに高尊の席をたゝれ遊人もしゐて交をゆるさ
すなりにけれは後するがの国にしれる人とひ行けれど

もたのもしからすものしけれは有わづらへる世中をとかくもてあつかへる心にや成けん凩の森なるかたはらの池に身を投(ナゲ)侍るそのほとりに茶酌にたんさくを付て

　とめこかし茶酌の雫雪の跡　　鳥　跡

今は十とせにも成ぬへし心さしをとげたる一句のさまいやしき人果(ニンクハ)には生れなからたふとき道に身をまかせけるも讃仏乗(サンフツシヤウ)の因なるへし

一山川といふ通ー称(セウ)七年に及ぬれともいまだ顔たに見合せぬに志(シ)他なく予か一癖(クセ)をうつしけれは尋常の反故も捨すはしりがき物しけり彼花つみといふ集はやとひて清書なさしむ又仮初に思ひよりし句ともいかゞなと問かはせは古詩古歌の縁に叶へるも筆まめに引出ける其力を強(シイ)て此集にはげめかしといへは勤めて閑(カ)ならすそれかやとより我宿迄も心遙(ハル)かにこそと折ふしの文緒(ショ)はたえすかしくといへる同しく志(シ)あり

　凩よいつたゝけとも君か門　　山　川
　火燵へぐすと起臥の楽　　角
　傘をかりて返さぬ雪はれて　　渓　石
　在所も近く薺うつ也　　山　川
　傀儡の肩にかけたるおほろ月　　かしく
　馬にのせては狐うらゝく　　同

一鏡を形見といへる重高の歌にや装束つくろひて鏡の間にむかへるに

　親に似ぬ姿なからもこてふ哉　　宝生 沾　蓬

一家を売たるふち瀬にとは盛衰(セイスイ)の至誠(シシヤウ)をよまれたり負物(オヒ)いたく成ぬれは風雅也とても人ゆるさすされば白炭と聞えし忠知か

　霜月やあるはなき身の影法師　と

辞世して腹切けるいかにせまりたる浮世には成けん哀也かの沾木をさへ忠知か子也といへは人も憐(アハレ)み見かはしけり五十年来の誹諧の正風をしれるもの独也

　元日や何にたとへん朝ほらけ　　忠　知
　双六な世のさいたんやあふ目出た　　なと

聞もうとましき堀句する世には何にたとへんと思ひ定めし死活(クハツ)の境(サカイ)未来記也

　歳旦を我も〳〵といたしけり　　春　澄
　皆人は蛍を火しやといはれけり　　同

と自暴自棄(ジホウジキ)の見(ケン)におちて云へき句も放散(ハウサン)し人の句も心

にいらで朽廃れにけるはいかに松のはのちり正木のかつらなとたとへ置れし聖作にそむける誹諧の罪人これら成へし今はその春澄ともいはず成けりかくいへは名利の境に落侍れともたゝともか名のとゝまるにつけても誹諧の信をこたるへからす

一閑見月　更る夜の人をしつめてみる月におもふくまなる松風のこゑ

名月や畳の上に松の影　角

難問花影乗月上欄干此句に思ひ合する時は畳の上の松影春秋分明ならず夏の夜の涼しき体にもかよふへきか　答テ春の月なるゆへ花欄干に上ルとは云り

おほろとは松の黒さに月夜かな　角

光広卿はるの月の嵐に霞まぬ心をよませ給ひてかうもよみごとはよめとも春月の本意は朧〳〵とかすみたる体かよき也と仰られけり

於大津義仲菴

三井寺の門たゝかはやけふの月　翁

其夜を思ひ合侍るにも名月に対して月をみるおもひ出もなく我〳〵の口質に切字を入て参会を紛らかし侍るも本意なし

名月や草のいほりのあたま数　路通

空舟の河よりあまる月見哉　仙化

月の船けふいさ出合へ雁の声　亀翁

海は雲野中にひくしけふの月　普船

名月に足のうらみる平沙哉　未陌

けふの月縁に出たる執筆哉　遠水

一智者仁者の山水の楽も心のうつるところにとゝまれる也是は〳〵と斗花の芳野山と云て

先の月みよし野の花やふしの雪　貞室

いさのほれ嵯峨の鮎くひに都鳥　同

富士角田川此二句をたしなみ琵巴(琶)を負枕をかゝえて身を風雲につかはれしも実深し一生かきちらしたる短尺を買とりて末期の煙とせしも風雅身とともに終るならんかし

高山麋塒所持のかけものに

借銭の淵はうつまぬ氷かな　貞室

少年にはみすましき事共也

極月廿七日

いかなる折ふしにか有けんいと興あり

一鉄炮と云名のおかしけれは句作に成かたくて能(キ)前句にも付分すして案するに太(大)巓和尚の百題詩に　人間辜負(フス)悲猿境　辛苦(シンク)管(クハン)中多少(テン)涙と作られたり是は伊豆の山にて猟師の猿をみつけて鉄炮を取上たるに哀猿(アイエン)断腸(タンチャウ)の声を出して叫(サケ)ひたるを即興の詩なるよし仰られけり辛苦管といへは則鉄炮ときこゆるにや誹諧にてはかゝる自由には手のとゞくへからす思はれ侍る也又かしは餅と云名の面白からねば是を十七字にゆるめてはいかにとて初懐紙

　餅作るならの広葉をうち合せ　と

これほとには句作ぬれとも鉄炮と云てよき句作には及ましくやされば句ほと作(リ)よくて捌(サハケ)にくきものはなし定家卿のうす花桜なと云るためしもありかたくこそ侍れ

一いせの蜑の貝とるにはをのか子を舟にのせておとこにこがせて出る也さてかつきに入て程へぬればその子の乳を乞(コフ)て泣(ク)声の底に聞ゆるにやがてうかみてから息(イキ)をも吹あへす舷(フナハタ)に手をかけて乳房(フサ)さし入てはごくみける此有様まことに仁心の発動(ハットウ)せる所なれとも一句に云とることのかたき也と翁の雑談を承りけれは露沾公にて

　うき艸をつかねて枕さためけり　と云に

　蜑の子なれは舟に乳をのむ　と付たれとも三才図(ツ)彙(イ)の絵なとみるやうにてさのみ一句の感賞にも及はす成にけり付句は殊更時の宜しきをうかゝひぬへし翁尾張にて

　宮守か油さげ行小夜更てと云句を付合せられけれは熱田の宮のいまだ造営(サウエイ)なかりし年にて人々の心も神さびたる折ふしにかなひて皆誹諧の眼(マナコ)を付かへしは冬の日といふ五歌仙にてひゞらき侍り

伊勢にまふてける年遷宮(センクウ)の良材とも拝みて

　大工達の久しき顔や神の秋　角

次のとし宮うつしに

　たふとさに皆押あひぬ御遷宮　翁

一誹諧に新古のさかい分かたしいはゞ情(シャウ)のうすき句はをのつから見あきもし聞ふるさるゝにや又情の厚(アツ)き句は詞も心も古けれとも作者の誠より思ひ合ぬるゆへ時に新しく不易(エキ)の功あらはれ侍る高位の人の取あへす思ひ出給へる句少年少女遊女禅門などの折にふれたる事云

出しは心と心とのむかひあへる故等類ある句も聞ゆる
され侍りなましゐに点者て候といはるゝ心うしと嵐雪
か身を恨しもことはり也人にはくずの松原とよはるゝ
名さえうれしとよまれし誠にゆかし

　なんにも早楊梅の実むかし口　梅翁
四十はや朝顔の葉のいそかしや　嵐蘭
年寄もまきれぬものやとしの暮　東順
　戒在色といふ所をよみ覚えて
錦木や色のをはりの老男　是吉
力なや麻刈あとのあきの風　越人
陰惜き師走の菊の齢かな　露沾
老の身の涼み所や蚊屋のそば　岩翁
紙子着てくゝり頭巾も三十哉　角

一去比品かはる恋といふ句に
　百夜か中に雪の少将　と云句
を付て忍の字の心をふかく取たるよと自讃申けるに猿
蓑の歌仙に品かはりたる恋をしてといふ句に
　うき世のはては皆小町也　と翁の
句聞えけれは此句の鈷やう作の外をはなれて日々の変
にかけ時の間の人情にうつりてしかも翁の衰病につか
はれし境界にかなへる所誠をろそかならす少将と云る
句は予か血気に合ぬれは句のふりもさかしく聞え侍る
にや此口癖いかに愈しぬへき

一発句と付句との分別はきはめて物数寄有へし
　鼻紙を扇につかふ女かな　信徳
是は盃ほしかぬるかなど云句に付句也もと付合の道具
なるを珍しとおもへるは未練なるへし
　河舟やみよしかくるゝ芦のはな　亀翁
これは水辺に付合の句なるを一句に優ありとて発句に
なをせし也芦間かくれに乗越す舟工夫に落すして響た
しか也趣向にかゝはる人はすへて発句成かたし風景を
しる人思ひ出多し此比信徳か文に此方なとは例の発句
下手にて一句もえ申さすと卑下なからに
　名月よ今宵生るゝ子もあらん　徳
いさよひの空や人の世中といへる観念か是は今年就中
腸先断と白氏の年を悲しみける心にもかなひて信徳
か老の誠なるへし

一寐られぬ夜思ひ出せし句を書とめて朝に成て吟し返し

てみれは句のふりも聊かはりて心もたがひあるやうに覚へぬるは陰気陽気の間(ヘタテ)か句の浮沈(ウキシツミ)おほつかなし荘子に陽の字を喜(ヨロコフ)陰の字を怒(イカル)と訓(クン)せしも一気のはこび成へし

夜　九たひ起ても月の七ッ哉　翁
　　ほとゝきす我や鼠にひかれけん　角

旦　起〳〵の心うこかしかきつはた　仙化
　　七くさやあとにうかるゝ朝烏　角

昼　鳩吹や太山は暗き昼下り　粛山
　　白雨の日にすかさるゝくもりかな　揚水

暮　やり羽子に長(オトナ)はかりの日暮哉　亀翁
　　日は没(イレ)とくれぬは梅の木曲(フリ)哉　柏舟

物おもへとは誰をしへけんとよまれし夕へ〳〵の思(ヒ)せめて哀ふかし起て今朝また何事をいとなまんとよみし朝烏心の動静(トウシャウ)にかけて句ごとの起点(キテン)をはたらきぬへし
此比の当座に

小男鹿やほそき声より此流レ　角

と申ける折ふし百里か旅より帰りしに木曾路の秋を語けるにも畳のうへにては面白からぬけしきを云出けり梯(カケハシ)の水音今も耳に残りて覚えぬるといはれて世につなかるゝ事を歎(ナケ)きぬすべて景に合せては情負(シャウマク)るゆへ情をこらして扨景を尋ぬるか此道の手成へし富士を見ては発句のちいさく成ぬるは心の及ばさるゆへ也

一発句付句ともに句の主に成事得かたき也万歳扇に名をはるやうにて作者の名句(ナ)ことにあれとも一体を立されは其名しかと定かたし只持扇のやうに名を張付ずして慥成句の主といはれん様に心得へしすべてありてい成句にて秀逸なるは妙を得し上手也

大かたの月をもめてし七十二　西岸寺 任口

手かはり成句作にて主に成んと工みたらば伊丹の歳旦帳みるやうにてをのつから興さめぬへし

うくひすや竹の枯葉をふみ落し　荷兮

一竹に鶯を取合せてと案たらば古歌連歌まぎらはしく成て発句には云とられましくやまだ初春の藪のそよきを鶯かとも気を付たる所わつかに作意有それも又気色をさがし出て爰に是を求めて新しなどゝおもはゝ己レ合点したりと人の聞しるましき句成へし定家卿の歌は聞得る事稀也なと申すは恐れ多し

一自性といふ題にて

　安心の僧もかなしや秋のくれ　　枳風

或僧難して云安心の上に悲みなしかなしめ秋のくれといはゝ可叶と。おもふに。やは休め字にてたゝ悲しと云る句なれは物我(モツカ)のへたてなく天地一己の自性を云ル句也花紅葉月雪ならはまのあたり成姿の心にふれて下知すべき句の体ありお僧の心と誹諧の見いさゝかたかひある事なからも迷悟(メイコ)の理は申に及ましくや僧閉口

一なには人福の神を祈りて七人か句を奉ル中に大黒殿をいさめ申せと樽ひとつ送られたり

　年神に樽の口ぬく小槌かな　　角

一む月三日の暁巴山か夢に衆鼠(シウソ)懐(フトコロ)に入と語る

　引つれて松をくはゆる鼠かな　　同

此比落穂の題にて当座句合　沾徳判

　艸枕畳のうへもおちほ哉　　亀翁

　庭鳥の卵(カイ)うみすてし落穂哉　　角

鶏を家鳩となをして持に成ぬ予おもふに題に合せて穿(セン)義すれは家鳩よく叶へり一句の体を云時は鶏といへる句がら宜き也句からと趣向との狂へる所は予か未練にや岨のたつ木にゐる鳩鳴たつ沢の鴫いつれも全体の形容うこく事なし

　真向なる木兎(ミヽツク)見えぬ山路かな　　子英

　茶の花に画眉(ホシロ)一つを詠め哉　　イセ柴雫

　鵙なくやはつかあからむ柚の頭　　尾州野水

一露と云題は案しては成ましき也秋の句の付合にはかろ〱敷思寄侍れ共心を付てはそれも成かたしかの紀行(キカウ)の中に

　朝露や指(ユビ)にはさまるうつの山　　粛山

これらは自然に云おほせたる成へし又

　しらつゆや無分別なる置所　　梅翁

と観念のうへにかけてはいろへかたし

　石菖の露も枯葉や水の霜　　角

　雫とは似て似ぬものや草の露　　幸水

さま〱に作り分たる菊の中に飼れて

　白鶏(トリ)の碁石に成ぬ菊の露　　角

露と云字もあそはね共体(タイ)には成ましき也

一今や誹諧の正風おこなはれて心の上に功をかさね何事も一句に云とらずと云事なし然れとも是をこれぞと手

に取て覚へたる人はなくて只句作をあやかり行形(イキカタ)をまねそれかこれかと紛(ラ)はしきばかり成聞とり法問也それいかにと云に古風のまつたゞ中に生れて今は六十にもあまりし人の昔風は申けれとも今風はゑ申されずと卑下せらるゝにて知へし其昔風といへる時の正章重頼立圃宗因一句とてもあだなる句はなし時代蒔絵(マキエ)の堅地にて尤秘蔵せらる又昔とて下地麁相(ソサウ)に念の入ざるは兀(ハゲ)やすく破(ワレ)やすし今何の用にたゝず当時の作者此心を得て随分念を入て工案(コウアン)せよ千歳の後も至宝(シホウ)也時の用にたてんとて趣向をぬすみてにをは人にうち任せさし合ははなひ艸にて見合(セ)点に長をさへとらばと思ふはいと兀やすき事也金銀にて彩(イロト)りたる筆を以て心の色を分ち侍る覚束なし方寸の器(ウツハ)もの手置(キ)大事なるそかし

岩翁父子かねて大山榎島へまふてぬへき心さし有ともなふ人も大かたの秋の気色にもよほされて雁の友つはくらの親子をのか一つれ行かへるこそ道の賑ひいと興ありなんしばしのるすもいかに寂しさを侘ぬへきやと寐ずうかれたる旅支度にはら〳〵とたつ鳥の声鈴森にて夜明にけり日数はつかに六日なれとも数寄ものとものの風景にひかれて歩(カチ)もはだしも馬にのるも心〳〵の吟行也

品川

気晴けり品川海の霧の月　キ翁

入舟も出船も寐るか秋の海　且水

品川も連(レ)にめつらし雁の声　其角

河崎

初茸やまはらにつなく宿続(キ)　且水

駕籠早し痩を取得に秋の道　尺艸

程谷

ほとかやの夕日や渡るからす瓜　亀翁

戸塚

稲塚のとつかにつゝく田守哉　其角

藤沢

宿とりて東をとふや暮の月　同

遊行寺

秋のくれ鳥に宿かす林哉　キ翁

有難や常世の栬相蓮華　尺艸

田村川

道近し二渡シある秋の水　岩翁
追落す鮎のよとみや石の音　横几
市　宮
駕籠かきも道をよけたる落穂哉　キ翁
立枯の箒や秋の夕まくれ　岩翁
伊勢原
晩稲田の縄はるかたや本通り　遠水
横雲やはなれ〳〵の蕎麦畑　キ角
御向松
色かへぬ御むかひ松の日影哉　岩翁
柿売やおむかひ松の下やとり　亀翁
生栗を握りつめたる山路哉　其角
大　山
鹿やせて餅くふ犬の毛並哉　遠水
腰押やかゝる岩根の下もみち　キ角
石　蔵　山蔵玉石千歳潤門邊鈴川一帯流
石くらや霧より下る僧の形　亀翁
呑ミ水も手水も秋の沢辺哉　且水
手にさけし茶瓶やさめて苔の露　キ角

露しくれ川しつか也寺の腰　遠水
二間茶屋にて
花はかり取も旅路や木槿垣　亀翁
白馬の尾髪吹とるすゝき哉　キ角
えのしま
相撲とるあとに波こす砂場哉　亀翁
礒による月を濁すな砂鰌　末陌
七里浜
新酒くむ小屋しとろ也砂の上　亀翁
由井浜
名月や海迄つゝく段葛　岩翁
朝霧に一の華表や波の音　キ角
雪の下やとりにて
良寒し風呂を焼する里の蛩　亀翁
砧うつ宿の庭子や茶の給仕　キ角
二里の場に咄や多き秋の雨　岩翁
旅の秋何れも聞や鐘の声　横几
鶴岡　奉納
其幹ミキや銀杏かはらぬ千枝の秋　亀翁

茸狩に鎌倉山の日次哉　尺　艸
松　岡
比丘尼所の殊勝そ増る秋の雨　キ　翁
けしき定めぬ小家にて
賤の子よ柘榴こほるゝ膝の上　岩　翁
離山みかへる程
行道も刈田の跡の千割哉　同
稲塚に高汐ちかき河原哉　横　几
月次臨時会文通見聞記之
正月やしまつのならぬ台所　枳　風
海はたや歩みもゆるき春かすみ　岩　翁
あさつきもそたつに清き白根かな　同
楽人やいつまてのこす春の礼　遠　水
摘よりもえるにひまとる根芹哉　亀　翁
亦みるや一重の後のんめのはな　荷　兮
梅か香にせめては割む莨菪哉　如　春
身ふるひに雪間の雉のみとり哉　轍　士
白魚や漁翁か歯にはあひなから　東　順
青海苔やうしほにさらす礒馴松　尺　艸

したるへき姿ともなし指柳　春　水
出かはりに通り名付る女かな　岩　翁
鶯や藪に捨たるあつ氷　鉄　枝
うくひすや弁の啞(トモリ)をせかせける　曲(ゼヽ)　水
うくひすに罷出たよ蟇　其　角
賤の子の手きは束(タハ)ぬる蕨かな　キ　翁
木面は風ふくかたの柳かな　遠　水
かけろふや障子かけろふ金屏風　普　船
尋　花　二句
植木屋の亭主るす也花いまた　其　角
よき犬や此植木屋の花守り　揚　水
程〳〵や苗代艸にあたる風　仙　化
一朝に一露たけや麦の色　(さの)春　水
星出て明日の花見のきほひ哉　横　几
山さくら行つく迄の匂ひかな　仙　化
たか山そちいさき門に山さくら　枳　風
若犬や花くひちきる糸さくら　尺　艸
心得ぬ花見のつらや相撲とり　嵐　蘭
遅きものゝ中にゆるしつ遅桜　山　川

紙屑や所〳〵におそさくら　（いせ）柴雫
車にて花見を見はや東山　キ角
手習の師を車座や花の児　嵐雪
我目にはあつたら山の桜哉　（いせ）翠袖
出かはりの間やあそふ華の時　浮萍

なつの部

いつしりて袷にかはる人の成　露沾
身をなでゝ軽さそおもふ衣かへ　且水
不断着は無紋もよしや衣更　キ翁
引さけて思へは重しころもかへ　横几
此雨はどこからふるそほとゝきす　（イセ）翠袖
桜花こけるから也ほとゝきす　仙化
六阿弥陀かけて鳴らむ時鳥　キ角
上り場を若葉次第や角田川　キ翁
青麦の奥そ昼なる鶏の声　沾徳
青梅やをのか空（ウツホ）に落るまて　岩泉
五月雨は鳥のなかぬ夜明哉　普船
さみたれや是にも外（ソト）を通る人　キ角
さみたれにむすひ分けり縄簾　キ翁

洒落堂頽‐破

五月雨や色紙へぎたる壁の跡　翁

箱根峠をてりにてられて

其人は廿貫目のあつさ哉　柴雫
くるゝより二心なし涼み床　露沾
此松にかへす風あり庭涼み　キ角
半日は朝寐にしらぬ暑さ哉　（いせ）蓬仙
白雨やその黒かりし駒のつや　普船
ゆふたちの日に透さるゝ曇哉　揚水
帷子の相身やおもふ女むき　岩翁
我舟とすゝむさま也渡シ守　かしく
猶遅し祭もとりの牛の足　幽也
番付をうるも祭のきほひ哉　キ角
たはねては無下に葉のなき角豆哉　亀翁
沢潟や道付替し雨あかり　野童
石垢に猶くひ入や淵の鮎　去来

秋部

橋となる烏はいつれ夕からす　キ角
星合にふるき硯の目利哉　是吉
内井戸の水にあひけり秋鰹　普船
いなつまや閨の鏡に物かけん　氷花
霊棚のすゝけぬ色に蓮かな　かしく
蕣や人に凋るゝ盆まつり　其由
鬼灯やうつくしき子の口の中　三州 青楓
唐秬の声の中なる小松哉　浮萍
馬道も下リて引する花野かな　探泉
砧うつ相手にわろし左利　さの 幸水
蟷螂のほむらは胸の赤み哉　京 史邦
はつ雁やうしろに雲の筑波山　青楓
名月や誰吹起す森の鳩　ぜ、珍碩
名月や草もゆるかぬ虫の声　巴山
駒むかへ逢坂よりは行義(儀)なり　ぜ、正秀

木曾路より

なこやに出て

めつらしや山を離れて里の秋　百里
そのさまは後田(ウシロ)もらぬ案山子哉　全峰
落穂とるはらけて今の白髪哉　楽宇

貝つくしの

題さくりて

赤貝にとらるな庭のきりぐす　揚水
渋柿にすへりて染し袂哉　いセ 兎株
茸狩やつなける馬の長はつな　全峰
はつ茸のうらより朽る日陰かな　沾蓬

愛子

しら菊の四(ツ)身に直す小袖哉　渓石
さはらすに置てふえけり庭のきく　幽宵
気をつけて見る程秋の夕かな　僧 松下
鼠壁いよくねふし秋の暮　普船
染出(シ)を人にはみせぬ紅葉哉　九十
飼鳩やよそへもゆかす秋の昏　いせ 水刀
うら枯の中にさら也茄子から　さの 一山
鉢の木を後にするや後の月　仙化
はらゝ子を千々にくたくや後の月　キ角

冬の部

時雨もつ雲の間にあへ酒のかん　轍士
　と未来の句文通せらる折ふし
時雨くる酔やのこりて村時雨　キ角
　と過去の心をつふやきて一巻の
　首尾とゝのひけるにかの文開合セて
　爰浪花津とへたゝりしにかよふ
　こゝろのをかしといひけり
此社相鎰ほしやむらしくれ　翠袖
一時雨かねてや家の中くゞり　探泉
小夜しくれ隣へはいる傘の音　嵐蘭
冬こもりいさりて事のすみぬへし　彫棠
冬川や筏のすはる草の原　キ角
鴨飛は一筋長きしつく哉　氷花
とり分て殿の威を見る鷹野哉　亀翁
川筋の遠くも曲る枯野かな　岩泉
凩に偃ぬ日の秣(マクサ)かな　三翁
鍋のすみ洗ひかけたり村時雨　三州 蘭風

　翁義仲菴を出て東行
凩や襟にかけたる珠数の音　ぜゝ 牝玄
葛の葉のおもて也けりけさの霜　翁
霜の気を鼻に引こむ夜明哉　さの 春水
思ふ中脇顔したる火燵哉　同 一澄
噺して火燵に寐入(ル)童かな　岩翁
はつれたる頭巾やさます夜の夢　如春
目はかりを気まゝ頭巾の浮世哉　キ角
朝夕の座具にもしたる頭巾哉　遠水
炭焼のひとりそあらん釜の際(キハ)　キ角
袴着や子の草履とる親心　子堂
つまあれは猶あはれ也冬の蝶　同
人顔や霜月比の富士の山　其由
　竹日の画
竹青く日赤し雪に墨のくま　素堂
　笠(ハ)重(シ)呉天雪
我雪とおもへはかろし笠の上　其角
　千鳥はなれて沖中の釣　枳風
乙州東行の文に

わさとさへ見に行旅を不二の雪　智月（母）
雪か今朝炭の起らぬその内は　詞山
真顔なる神楽男の神楽哉　柴雫
しれた年をこそくられけり年の友　野径（ゼヽ）
けふも早節季候かへる夕日かな　孚先
　世中をいとふまてこそかたからめ
小傾城行てなぶらん年の暮　其角

元禄辛未歳内立春日筆納狂而堂灯下

雑談集　巻尾　（題僉）

雑談集

諷は俳諧の源氏なりとこれを一向の格意として凡百番のうちにて目にたつ詞耳近き雲に起ふす頭巾もありかやうに言を工みにし自句他句のわきまへもなくものせしかばいつその程に自他ともにめつらしからす所為て十とせあまり此かた誰となくいひやみけるを風体のうつりかはるにまかせて只おほかたに思ひくれける折ふし江口の里にて
やとれとは御身いか成人時雨　梅翁
と云句を承りて其実を捨さる所肌骨に入て侍れともふたゝひ取附へき詞もなかつし所に大津にて
雪の日や船頭とのの顔の色　其角
　と申ける次の年の春
花の陰うたひに似たる旅寐哉　芭蕉

と聞えけり然らは章なくと誹諧の諷はれぬへきことを
と思ひ立て

憶芭蕉翁

月華や洛陽の寺社残なく　其角
弥生半とみゆる装束　渓石
鳥の巣も次韻の興にほころひて　揚水
こしらへやうに蟹の味ひ　普船
上田はあらくうへても苗のつや　仙化
末に幾瀬の水の宗川　角
あとに成先へかたまる雲の脚　石
飆の筋をおつる傘　水
玉敷の御堂は瓦下地なり　船
鳥に出る三条の音　化
糸竪にからげてあまる菊の長　角
髭籠の外をくふて見る柿　石
小坊主の芸の数なき月の友　水
町衆もよほす祭礼の闔　船
うちひらく酒屋の庭に涼むらん　化
鳥ゐさせしと斩種を干ス　角
むらしくれ十夜のうちを案しけり　石
甲斐くゝ敷そ旅て子を産　水
拝領の香をいたつらに薫捨て　船
昼時分なる恋の着物　化
草ふかき乞食の玄関人まれに　角
苔の下まて改めし墓　石
よし野山仏法僧の今年啼　水
膚の百首に春の夜の月　船
御迎ひの船ともいつか巳の祓　化
なと竜神の朝東風は吹　角
楊貴妃の顔をつゝめる山かつら　石
瘭疽いたがる下女か泪は　水
足入て洗ふも白き餅の米　船
しわくゝ寒く雪に成雨　化
亭夫婦やとりし跡はがんがりと　角
馬やかましく馬船ふむ音　石
麻ふせてこの山水の静なる　水
おくは枝折の僧正か谷　船
目の玉の出るはかりに貝ふきて　化

空死したる狐飛らん　角
朝またき局(ツボネ)の丸をうちこぼし　石
にくまれ口を姥か名にたつ　水
かはらけにかそへ分たる切芥(モクサ(文))　船
五ツか四ツかほとゝきす鍾　化
かつぎも顔もむかし女房　角
御神輿(ゴシンヨ)に衆徒の鎧を輝(カヽヤ)かし　石
逢みてそ二度びつくりの殺しぶり　水
涌口(ワキ)とめてかゆる湯の膚(キラ)　船
いそかしく蕎麦うつ所化の襷(タスキ)かけ　化
色つく秋をしらぬ紫蘇(シソ)の実(ミ)　角
蔀(シタミ)する北の家(ヤ)陰のつゆしくれ　石
身を壁銭(ヒラクモ)に忍ふ夜の月　水
斬(キル)なとは花に言葉の情也　船
酔てほゆるか梅の下臥　化
春の水三十川の安き瀬に　角
必(ス)くもる庚申の宵　石
俗名を崇(アカ)むる神も所から　水
碑(ヒ)になをしたる鳥羽の恋塚　船

しけ地ふむひつちましりの芹の花　化
野にうかれては鼠とる犬　角
釣さして鰻(ウナギ)はひ出る苞の内　石
板子はづして酒ひやす舟　水
日盛はいとゝ雪踏(セキタ)のそりかへる　船
組天井の天人の数　化
銅蓮(トウレン)の水に翡翠(ヒスイ)の影下(リ)て　角
木の葉の莚柚べし干らん　石
夕月に茶入をせゝる鼻膩(アブラ)　水
古き精麸(シャウフ)を持し表具屋　船
一面に御所の畳の敷替り　化
襟(エリ)から膝にかゝる盞　角
世間気に白髪つぶりを結立て　石
同し文(ン)かく伊勢の祐筆　水
我〳〵か盆にのせたる旅籠銭　船
しつかに漕ケや夕汐のふね　化
一二三寐は景のよい時目をあきて　角
花のさかりに通る小娘　石
卿(キミ)名つく法師なまめく藤の暮　水

道祖の神のみゆる陽炎　船
鳳輦をさゝいで渡る大和川　化
次なる武者の年を問るゝ　角
名月に彼朗詠のふし所　石
尾花につれて招かれし鶴　水
霧はれて富士のなだれの右左　船
土佐か歌仙もうつもるゝ壁　化
仏にて禅としれたる庵の体　角
寐られぬまゝに食を尋ぬる　石
手療治に心一ッをわつらひて　水
たれにもらへる紅の目ぬくひ　船
唇て鼻紙とるは遊女めく　化
おもひ分たる梨の切口　角
当一日の位牌くり出す月の朝　石
萱の鼓楼の苔に聞えて　水
辛崎へ今すこし也よるの雨　船
心をつむとてきえし挑灯　化
出あへと千人切をよばふらん　角
しらけてのくも仮初の恋　石

薄疱のかくれぬ程に打粧ひ　水
清少納言枕さひしき　船
時人の雑談集も花こゝろ　化
白き反故はおしむ凧の尾　角
老か手に春はゆるまる数珠の糸　石
くさめをはやす元朝の声　水
大汁の鳥をうち込煮出籠　船
宿もざゝめく本陣の幕　化

七月朔日於観瀾亭

呈餞

かけて待伊与簾もかろし桐の秋　其角
つはるをみれは文月の瓜　彫棠
衣うつ身をうたゝねにぬくもりて　粛山

二

目にのこる桐の葉分のなこり哉　同
たなはたづめに君か宿とり　角
上中と酒とゝのふる月待て　棠

三

桐の葉は東に成ぬ三日の月　棠
　高く語るも追分の秋　山
すまふだに古き男は馳走して　角
　蘭につきたる鼠やさしき　角
まろうとに瓶はかさりし花の時　棠
　僧もつとむる涅槃会の拝　角
小住居に又建直す春の菴　同
　連歌所の定まりし国　棠
杖竹も光るはかりに突古す　角
　石切たてゝ門の雨落　棠
今少奥もあらはや清見寺　角
　弟子絵とみゆる松の拙さ　棠
粧るほと身代しるゝ人の風　角
　揚屋をかへてもどる暁　棠
新しい草履はかるき恋の闇　角
　狐の風呂に入かたの月　棠
加茂川に今朝は流るゝ瓜茄子　角
　誰か足ふきて小草臥ス色　棠
縁とりをおさゆる石の初あらし　棠
　本堂にてはひくき念仏　角
尼公と同しさまなる女房達　棠
　箸も手つかず物おもふころ　同

　六月晦日のゆふへ観瀾亭の名残とひかはして一夜吟

桐のはや土用の中も今幾日　彫棠
　簾を空におほふ夕立　其角
入川に通らぬ舟の棹はりて　同
　橋越たまふ君のありさま　棠
照月に灯立て出むかひ　同
　腹を冷さぬ一二三寐の秋　角
捨かてに腰よはく成団にて　棠
　目張をしたる二階いぶせき　角
あふ夜半は袋に入て参けり　棠
　つれなき鐘は指もほとかす　角
端舟を薬もらひに引をろし　棠
　立て形よき幣の神風　角
番匠の装束とりし酒の時　棠
　四方の秋見に蒐上る山　角
歯のたゝぬ書をよむ程の窓の月　棠

散（ル）迄と夜-気にあたりし花盛　角
必ス雨によふことり啼　同

一彼寺をみれは虫はらふとて紫黒（シコク）の衣かけ渡したり晋子か句おもひ合侍りて
虫ほしやせめて奥ある清見寺　粛山
何か手向んと旅の不足をおもひて
七夕や願ひもたらぬ小袖曽我　山
茶店によりて升の隅（スミ）より一息にのむを
秋の蚊や血にふくれたる酔こゝろ　同
残暑をさくる馬上の人その様平懐（クハイ）也
秋の日や笠に着せたるひとへ物　同
桑名にてゆかり尋て　彫棠
いざゝらは肴所のいきみたま　山
駕籠かきやどこの相撲の取後（ヲクレ）　山
神崎近き程にさらしの里もしらみわたり
川舟をとめて江口の踊かな　山
目さめてみれは須磨明石をはしる
あれがそか須磨の小家の木槿（ムクケ）垣　同
寐たうちに国のかはるや舟の月　同
暁の霧立こめて雲井の雁かすかなれは
ぬらすなよ浜野に落る雁の文　棠
古郷のゆかしさはさそと聞に
猶よかれおもふ人ある国の稲　山
夜日とこかれて廿一日
櫓拍子や沖はそはへて波のつゆ　山
宿の梢の近つくまゝに
桐の木は妹かかそえし落葉哉　同
見舞てやなくてほこえし宿（ヤト）の萩　同
これは彫棠をともなはれける道艸也みる所おもふ所をのつからにして作りものならぬをとり所とし雑談のつゐでとし侍り此外にも所々の句侍れとも等閑（ナヲサリ）にもらしつ七月十五日例の信徳関むかへしぬ路通もあり合せてかれこれ赤（セキ）-心の交をあらはし申されけると也
生（イキ）てあふ人や旅路の玉まつり　粛山
おせあらたなる涼風の宿　信徳
居所の山もわするゝ月ふけて　路通

別れし時はほそき鹿のね　彫棠
一時雨傘の後（ウシロ）のはるか也　徳
捨たる舟のいつ橋に成　山
米俵力ほとある片手わざ　棠
声は女に似つこらしさよ　通
灯火はをのれと消し恋ころも　山
よ所にしゆんたる踊ゆかしき　徳
湖の端（ハタ）それほとの秋の風　通
駒むかへ来てつなく壁際　棠
利（キ、）酒に猶面白き月の夜や　徳
問かへさるゝ見しりごし也　山
乗物のうしろの窓のちいさくて　棠
さはる心に成しいとゆふ　通
あの虹の立はしめみん花の山　山
風ののとかに送る関ふね　徳
夜も早鳥にみだれて人々かへると有関舟といふ句に
入海をそこら浮たるみやこ鳥　角
と付侍るは是他郷（タキャウ）にあれとも面合するに似タリ

うつふいて走れはぬれすかたしくれ　粛山
鴨のみたれに鷹落る池　其角
北に臥ス枯野の松の朝日影　彫棠
屋根葺（フキ）かけてあたらしき宿|　山
あと先に今宵の泊リ二かしら　角
鯉のごみ吐月のうたかた　棠
浮（ウ）霧をとふさにこぼす川鳥　同
もみちにかはく絹張リの紅（モミ）　角
うち明て留守になしたる相局　山
とはれて猫の尾をふとくする　棠
白雪に大きな笠をかぶりきて　角
うたひのやうになりし浄瑠璃　山
政（マ）所のかたい畳にかしこまり　棠
賭（カケ）に勝たる当年の月　角
関迄は鞍をやすむる駒むかへ　山
宗匠達をわたらへの秋　棠
珍敷道具出シたり華の宿　角
茝（チサ）の畑を地子の侘こと　山
名
春日影いざりなからに蝿うちて　棠

紙子の古さいとまとらせん　角
よぶ時は門の乞食もみえぬなり　山
此坂ひとつ車をせさあ　棠
今や旅高観音に湖を見て　角
きのふの髪のそゝけたる風　山
きぬ〳〵の夜着に負てそ倒ける　棠
たゞも楊枝をもちし傾城　角
酒宴にさかなのなきも比興なる　山
迷惑なから馬になる袖　棠
養を孝とはいはし月の道　角
きのこに毒のありとこそきけ　山
ゆるされてさかやきしたる良寒し　棠
ぬかぬ刀はよごれてもさす　角
折節は鐘をもつくか寺若衆　山
わさと素顔の花の道中　棠
梅柳いつれの木屋か枝折垣　角
小弓もたせし射手の有様　山

一葉出而一葉巴故為芭

一葉巴而一葉焦故為蕉　遠水
やふれても露の葉数のはせを哉　岩翁
木槿の外も垣の間引菜　其角
朝の魚都は月に用ゆらん　水
長みにしるゝ一順の箱　翁
冬は猶絹上下の似合しき　角
番によりそふ柱定まる　水
神鳴のならさる年はしゐして　翁
行水の後くるにゆふ髪　角
寐せし子の何に襲てすゝり泣　水
勝手近さに屏風ふすぼる　翁
さま〳〵に割みて見よき栗蘁　角
なげ入にする四五文か菊　水
月影に板本尊をおかむ也　翁
あすの草鞋をすげて置旅　角
懸とりの大脇差も犬おどし　水
まろめし雪にくぼむ指跡　翁
卓散に花うへらるゝ奥の庭　角
鼠の道をふさくつはくら

世のなみに寺の男も出かはりて　水
親子くらすも百姓とよぶ　翁
心よき詞に駕籠を次でやる　角
馬くふゆへに芝肥る原　水
薬たゝく石さえ滑を撰みぬる　翁
ころぶも恥にならぬ雪ふり　角
忍ふこひ身につまされて肝いらん　水
袴たゝむもくるふこしもと　翁
秋迄と年玉扇のけておく　角
いく春人のほむる医者がら　水
朧なる月に座頭を送らする　翁
花も柳もわかる宗論　角
刹竿の旌にしらるゝけふの風　水
山鳩いとゝくもる日の声　翁
ゐさら川蕪の枯葉をかき流し　角
煤はくおんな近おとる顔　水
犬箱はさひしき床の物なれや　翁
楊枝をさして持ふるす文　角

八月十八日

雨中唫　仙化

川つらに楫こふ声の夜寒哉　化
月しろみえてこぼれやむ雨　其角
銚子とる花も紅葉もなかりけり　普船
ひゝきをのこす棟上の槌　化
初雪を師走に成てふらせばや　角
まことは年の免シ乗物　船
人からをゑらみて頼む乳付ケ親　化
殊に日比の七夜信心　角
文体はあひ見て後のうらみ也　船
それかと声の菴の立聞　化
鶏の簇はづれて飛あかり　角
渋柿つくに柿の前垂　船
秋のくれ王子へいそく五香とり　化
神田祭に出す兄弟　角
月にしる利屋鞘師の頭つき　船
所帯もへたる裏門の番　化

いさけふは麦飯くひに初茄子　角
邂逅(タマサカ)山は八幡よりこそ　船
草枕御坊の色にしられたり　化
命の恩にとまる盗人　角
きぬ〳〵やどう寐忘れて朝日影　船
あまりおもひに酒はかり吐(ク)　化
消る身の三味線ひくも我(ガ)に成て　角
いくたり顔をはらす懸乞　船
闇の夜は炉次のせはきに咳(セキ)払(ヒ)　化
子は杖になる老の小便　角
ひとり猶万部の升に入かはり　船
五つ過よりくもる松風　化
名月の竹を定むるむら雀　角
かいづもはぜも大汐の時　船
貫(ムキ)なから幾秋つみし蠣のから　化
萱かおもしに置碇(イカリ)綱　角
烏にもちいさき猫はすくみけり　船
きらづの煙気(イゲ)のさめぬ朝霜　化
初華にふまれて氷る道の雪　角
柳にしまる疣(イホ)ゆひの垣　船

一丁卯のとし芭蕉菴の月みんとて舟催して参りたれは

名月や池をめぐつて夜もすから　翁

すゝめて船にさそひ出しに清影をあらそふ客の舟大橋に折(ワカ)れてさはきけれは淋しき方に漕廻して各句作をうかゝひけるに仙化か従者舳(ズザトモ)のかたに酒あたゝめて有なから

名月は汐になかるゝ小舟哉　吼雲

翁をはしめ我〳〵もかつ感シかつ恥て九ッを聞て帰りにけり羽化登仙(ウクハシテトウセンス)の二字仙化に有とて雲に吼(ホエ)けんの心をとり連衆みな半四郎とは云さりけりその後も秀句多し

日待法楽　燭寸　巌翁亭

賑かにまかきの菊の朝日哉　亀翁
広き出会は幾宵の月　且水
帆柱の入津につとふ秋晴て　岩翁
とまり雀の声も渦(ウツ)まく　其角
庭堺なみよく見えし薄木立　横几

幕きる時は楽屋定(シツ)まる　未陌
羽織着て年のさかしき後紐(ウシロ)　探泉
　京扇とて風ならす音　芭風
ウ
傾城の通るに恥る町女房　尺草
　おとすかもしを包む鼻紙　岩泉
祈ぬる神の御垣の引(キ)掃除　遠水
　木陰へ抱(タイ)てはこぶ腰掛　亀翁
物わかぬ賤とて瓜の丸かぶり　且水
　根継(ツキ)をしたる寺の外繋(トツナキ)　岩翁
所から六浦の牛に汐を汲(ム)　キ角
　隣あるきにつたふ稲塚　横几
明松は消てふり出す秋の雨　未陌
　声のほそきは若き木兎　探泉
手とり鍋洗ひて返す今朝の月　芭風
　局の草履ぬき揃へけり　尺艸
切透(スカ)す障子を花につくろひて　岩泉
　をのれも飛か虻の小心　遠水
二
山-雀の尾に流れたる春日影　亀翁
　菴半分は池へ建(タテ)出す　且水
竹の根の朽てはいとゝ雨ざれし　岩翁
　車おとある道の貝がら　岩泉
子をもてと幼(ナ)名をよふ妻ならし　探泉
　目を忍ひてもためる糸屑　芭風
物かけは手にあふ筆を結覚え　横几
　我痩たりと師兄(スヒン)笑へる　遠水
風呂敷の同し模様(モヤウ)は紛れよき　亀翁
　睨(ニラミ)走(リ)もそろふ柄鮫　探泉
付添も其若殿の年位　且水
　土堤(テ)へあかつて拍鏑流馬(ハヤスヤフサメ)　其角
名月の一夜はすませ濁川　尺艸
　かつちる艶かはる葉の形(ナリ)　未陌
二ウ
籠ぎりに相合て取秋茄子　芭風
　女使はこはぬ物申　岩翁
簗楯(イタテ)にかゝる浴衣(ユカタ)やおもはゆき　キ角
　火鉢の蚊やり家の隈(クマ)〳〵　キ翁
紙縁(ヘリ)の畳は塵のたまらさる　尺艸
　椿は重き柱-杖也けり　且水
人跡にのればいたはる渡し守　未陌

蜜柑ひとつを捜(サカ)す懐　其角
綿核(サネ)の綿にのこるも秋寒き　岩泉
　月は屛風にかくす身の悪(シカ)　尺艸
指(ユビ)入て酒の間する鄙びたり　芒風
　輪の多ければ砕けぬる米　探泉
此宿の脇本陣の花さかり　遠水
　蹴合に強き黒鶏(トリ)の声　横几
三
春風に衣(キヌ)張むすふ杭(クヰ)ゆりて　岩翁
　鹿料(シヽロ)のり込ム堀の入汐　其角
包丁にうすらひかゝる小半台　キ翁
　人足しけき顔見セの朝　芒風
何代の出入屋敷を贔負する　尺艸
　国の判書(ハカキ)は外に専なし　岩泉
豊年も粒はちいさき岡穂にて　遠水
　月見る感は寺へ来る鹿　且水
水と湯とわかれて流る山の秋　未陌
　おもふほとにはへらぬ竹杖　岩翁
帯(オフ)はれし子にいたゝかす神の幣　横几
　鏡の餅にのこる莚目　探泉

ふる雪に茶臼のたまりはつか也　キ角
　今度の住持人愛のよき　芒風
橋つめに小屋むすひたる絵馬書　尺艸
　湖(ウミ)を見はらす二階瞬(マハユキ)　岩泉
竹釘を壁に打ても刀かけ　岩翁
　わりなくいそく状の触次　横几
奥口と花の栄耀(エヨウ)をよしの山　且水
　雉の光をみやる岡越　キ翁
さほ姫の曝をたくる雲なれや　探泉
　浦の夷に上る三穂塩　遠水
糸尻のなきもおかしき坊主椀　未陌
　なれも火燵に因(チナ)む老犬　キ角
世間を君にだかれて義は重き　岩泉
　左右さもあれ掛物の丈(タケ)　芒風
酔まきれほむる月夜の郭公　遠水
　四条の榎道覆ふ也　未陌
名
振袖はすこし粧へる恋のあや　横几
　胸(ムナ)紐付る仮(カリ)の文筥　キ翁
初(ウヰ)の子は下〳〵迄もきほひ有　尺艸

白げて足のみゆる爼(マナイタ)　岩翁
蓬生に若葉延たる茗荷筍(タケ)　芒風
　藜(アカサ)を直(ナヲ)く作る東堂　横几
ゐさら井は崩(クエ)ても水の澄返り　遠水
　人のひかへて渡る板橋　且水
まいら簀(ス)に商ひ斗ル魚の数　未陌
　初茸の名もかはる青初(アヲハチ)　探泉
笠寺に十八日の月を見る　キ角
　露も際(キハ)づく新銭の塔　岩泉
地の内を畠に仕たる割(ワリ)余し　且水
　道よりつゝく高の輪の山　キ翁
落(ウ)ちりし木屑はどこの殿作り　探泉
　湯屋の休みをしらす友達　芒風
日待よりけふ其儘の神まふて　岩翁
　果報のつくを老の身の幸(サチ)　未陌
明立も庫(クラ)の裏白土厚き　横几
　雫にしるゝ墨塗の戸樋　遠水
両かわの花を見通す大鳥居　尺艸
　道者いさむる春の昆布売　松翁

一或師の云利休の茶の湯にあひて事を好むともからその折ふしの道具ともを是は古シ是は新シなとゝ目をはりてほめあひけれは利休散々不興にて新(シン)古の目利(キヽ)はあき人にこそあれ道を好むともからはたとへ欠(カケ)摺鉢なりとも時によろしく茶の湯に用ゆると用ひられさるとのさかひを弁(ワキ)まへて物数寄をほむへき也とありしとかや誹諧もさのことし句は道具也点はあき人也誹諧過ての点なれば其席にまじはりて是は長是は丸珍重などゝ点にあてゝ目利せらるへきは本意成ましくや打越の六かしき所か席のしぶりたる時に時に宜しく付流したらはたとへ無点の句也とも是用也点者の心をかねて句ことにあらぬ工みをめくらし人の前句をばひあひなどせんは無下に口惜きはたらき也用無用の境(サカイ)新古の分別心さしを高く守らば自然の風流あらはれて幽玄の一句もいかで思はづしぬへきやされば此茶巾折目のまゝの茶巾なれは作を用ひさるも時のよろしきにやあらん

薄氷折目のまゝの茶巾哉　普船
　ことさら今朝は耳そつめたき　其角

立ツ年の頭をそれは酒付ケて　同
包み銭やる湯屋の三方　船
庭程の梅にもほむる月の影　船
ちいさき鏝(コテ)をやとふ丸窓　角
ふるべたる色紙の泥のかはるらむ　船
亀屋の夜着も人の代昌(サカリ)　角
身にも似ぬ女なりけり能太夫　船
あさづま舟に幾日逗留　角
潮煮(ウシホニ)も辛く成たる鯛の味　船
年玉なくて礼のこりけん　角
柄(ツカ)糸に手垢(アカ)もいとふ春なれや　船
北野の絵馬花見かてらに　角
御供の人なとかめそ口なぶり　船
いとゝしはすの市鳥啼　角
月雪に近江のうみの悠(ナンドリ)と　船
旅をはなれて仕たる第三　角
ナ此比は文かく事のむつかしき　同
二日すかねはうとむ髪の香　船
安持仏くやうじ給ふはちす花　角

常住ム所桐のから紙　船
目病ミとも門に立たる朝日影　角
子にしぼらるゝ痩(ヤセ)犬の乳　船
山の井の心をしれや旅の汁　角
顔の白きにふくめんの跡　船
振袖を刀のそりに打かけて　角
是をくすりとおもふ盞　船
波の月波戸(ハト)の泊(トマリ)もしらみ行　角
葭(ヨシ)と鳥井の穂に出る哉　船
稲刈て初尾にかくる岡の松　同
家とていくつ武蔵野ゝ国府　角
市人の肩に棒置クふところ手　同
南風なる横雲の海　船
咲花のほとろ〳〵に塩煙　同
また色さめぬ鶏冠(トサカ)青のり　角

火鉢の記

一片手打落したる煎鳥(イリ)鍋を幸の物哉とて

　忠度と灰にかゝれし火鉢哉　　角

名もたゝのりと云へし代々の鼎(カナエ)の徳はさらなりわれ鍋にとぢ蓋(フタ)ぞ我に似合しき宝なれとて撫(ナテ)さすれは箕山のひさごよりも猶かろくて殊にかしかましき罪なしいよ〳〵捨へきものにあらす

　　是についして

　炭とりに鏡のぬけし手樽哉　　同

一鬼女の面は般若(ハンニャ)あたち女とて古来より角あるおもて也黒塚の能の位におもひ合侍れは全く一念の鬼女と云にはあらすたゝ罔両(モウ)のたくひ成へしとて源助に申てあたらしく角なき面をうたせけるは時にとりての工夫ならんやと申されしにいふはまことかといへる兼盛のうたも思ひやりたる也と雑談して両吟の物数寄になしぬ

黒塚の誠こもれり雪女　其角
蹴あげ目にたつ白革(カハ)の足袋　沾蓬
暖かに京は羽織を長く着て　同
絵にかく鍔(ツバ)に障子霞める　角
山一ツ皆つゝし也夕月夜　同
小米桜はしほらしく散(ル)　蓬
(ウ)鉦のねもけふめつらしや夏念仏　角
夫(オット)起してあきなひにやる　蓬
出す迄は独物思ふ上総舟　角
引るゝ猿の山を見まはす　蓬
息(イキ)次に小宮の立し曲り坂　角
雨寒き夜の畳挑(ミ)灯　蓬
古君のやりてに成ておそろしき　角
戒名しらで祭る恋人　蓬
鯛の鳴あたりにて日をくらし　角
鯰(ナマツ)に濁す水の月影　蓬
六条の塩屋詠ん花くもり　角
煎餅(センベ)簀(ス)に干ス雪の春草　蓬
数〳〵を釘にかけたる紙鳶(イカノホリ)　蓬
冶郎の絵馬其紋にしる　角
振袖の駕籠よりあまる摺ちがひ　蓬
いかなる経を尺八にふく　角
松風は夢のさめたる片相手　蓬
壱貫あれば都迄行　角

子を訶(シカ)る人は昔の生(ムマ)レにて　　蓬
ひろき座敷に恋のかくれ家　　角
文車やくひ物もある土用干　　蓬
心に酒を女禁制　　角
澄月のうらやましげにかゝり人　　蓬
秋の調(シラベ)の革(カハ)を炮(ハウ)する　　角
小便所(ウ)習ふも遠しきり〳〵す　　同
みえぬ隈(クマ)をも忍ふ明盲(アキシリ)　　蓬
其像にためて置たる爪(ツメ)白髪　　角
小反(ソリ)の太刀の霜にみかける　　同
覚範(カクハン)か菴の跡も花の奥　　蓬
春のひかりも日中の鐘　　同

節　分

打ツ豆も戸のある方の響哉　　亀翁
豆をうつ声のうちなる笑かな　　其角

元禄辛未歳内立春日於狂而堂灯下書
芭蕉翁回国帰菴時宜相応故被校合畢

粛山跋

むかし隆国大納言平等院の南泉坊にこもり居て往来の人を集めむかし物語りさせて大なる双紙に書れたり其後それかれ軽口のもの語とてとり伝へたるは世をうみ人の上をそしりはては神仏の道すらなきかことくにいひけたれ給ふあはれそふふし〳〵に涙なかし興有筋をかまへて笑わせなとするは一朝のあだこと二度手にとるへくもなし此雑談はいにしへの好士今の世の人の誹諧における一口の噺ゆへつきたるをひろひて編集となしぬかの操(トッテ)ニ有レ時之具一託(ヲツク)ニ於無レ窮之間一ニといへるあらましの空なれは物にも書とめぬ際は世のすゑにかたりも伝へさらめとたよりあるくま〳〵聞え古さゝらむ国〳〵まて尋いて伝へて聞たゞちに聞みつから申つることも猶はゞからぬは雑談なれはなるへし風雅の挑(イトミ)いとまなき身にしかくも草かく思ひよれる心さし師徳をあけて教誡を備へたれはまた風雅のなさけならすや

萩（はぎ）の露（つゆ）

萩の露　其角

（題簽）

みつのとのとり仲秋の月此月はまつ夜いさよひとゆび折してひとよは深川の芭蕉庵にかはらぬちなみをあつめ一夜は露沾公の芳苑(ハウエン)にとり〲ひかりを分て年〲歳々たのしみめつること夜あかし也されはこれかれに引さそはれて船河野山さま〲として幾重の心をかさねつらんそもとゝまる句々集ことにめいぼくをあらはしぬ哀ことしこそといひあへる秋の初めより老父いたく悩(ナヤミ)つきてけふしらす明日またたよりなし一家合信のおもひわか身ひとつにせまりて万事たゝゆめうつゝ成なくさめ也医術薬力ともにつきてねふれるやうにかのむかへをこそまてと此世におもひ残せるさま露なしこゝにいもうとの医王善逝(セイ)へいのり申ける願旨(シ)あり此ついてに

萩のつゆはまくり貝に薬哉　　其角

といふ句をかいて父のふしける蚊屋の中にはりて目さまし草にと慰めける此日より不可思議の感応ありて一滴(テキ)のくすりをうけ得てしばしたもてるやうにおほえけるいさゝかの食事も十か一つは胸膈(キャウカク)にかよひてながらへて憂命ともに三五の月を枕上にてらしぬかの薬を窃(ヌスン)で人間を出(ツ)といひし詩のたよりげにけだものゝ雲に吼(ホエ)けん一家ともによろこひの声うるほひぬまたいもうとにかはりてなぐさむる弟あり物の哀をしれとてぞ信濃なる片田舎につかはしてうき世のうさをならはせけるに三とせ過て此秋朽たる老のたよりを案し毛ぶかきむまに沓しめていさゝかの家づとしてきたるものいひもさらにかど〱しう成ぬるそ世のあはれには馴つらんとやさしうおかしかりき文月の初より葉月のはしめ迄看(カン)病むつましく枕のちりを掃(ハラヒ)けるが聊の古郷なから信濃のたより人かさなりいざとすゝむる名残事もあまりわりなく聞えけるに病父待期(タイゴ)のさかつきを取て愛別の情欲なを後の世のまよひなれば我息のかよはん所を厭離(エンリ)せよとおもひ切たる暇乞是受持法華の正眼なるへし

其座

空や秋蚊屋をあくれは七多羅樹　　キ角
月にかゝやく五色の雲　　東順
と病(ヤム)手ふるへてとゝのへけるに此息のかよはんうちにと
すゝむる筆の数々に七十三歳の老医みづから何の薬をか
たのまんやと杜子美がもとむる所をも求めす
死症には千くさの露の験(ケン)もなし　　東順
かくいさぎよき明らめなれは死生在レ命富貴ねかひなし良ー
夜千金の期也こゝに一樽をかまへて逸興(イツケウ)に月見してたの
しむ声を聞んにはと朽父(キウフ)のぞめるにまかせて親ー知後ー帯
の友をまねき対ー酌の句々をのつから即興となりぬされば
かたはらに老木をかまへてはつれなき秋の光を歎きはゝ
木々の七とせさきに榎の陰の露ときえしもさらぬ俤おも
ひ出てはなくさめかねしこゝろ也
信濃にも老か子はありけふの月　　其角
とかく書つゝけて病ー床をうかゝひ侍るに返し
子と姨とたがかへて見んけふの月　　東順
くまなき月の前にみたりに書す

百里に糧を裹(ツヽ)み
十里に三ー喰すと云り
されは父病て
遠く遊はれす
をの〳〵賀に燕ーす

名月は十歩に銭を握(ニギリ)けり　　其角
形(ナリ)も羽織もげに秋の暮　　仙化
俳諧の色紙を萱か軒に見て　　嵐雪
なれてとまりに帰る蜻蜓　　神叔
その暑ー石に残(サリ)し河原市　　介我
黒茶をなかす染殿の水　　枳風
庭嗜(スキ)の幾度かはるたゝすまゐ　　桃隣
犬に齅(カヽ)れて狢退(ノク)穴　　幸隣
杣(ウ)が臥足をあらそふ焼火影　　鉄松
絵を見る迄の浄瑠璃の本　　芝莚
息次に倚(カタヨ)る駕籠をゆり直し　　素イ
降らずに雲の通る白雨　　平砂

手の筋を問(フ)人しはし入かはり　可聞
米ざしさいてよし原へ行　万巻
門立の浮世は盆の十三日　東潮
つなける糸に蜩の啼　キ角
瓢蕈(簞)の毳(ムクケ)のうちは葉かくれて　神叔
小倉堤を吹れ行月　桃隣
温飩踏 諸肌脱キの袒(アラハ)なり　仙化
お乳かとり持ッ文の賄(マイナ)ひ　介我
髪ゆはぬ虫歯もつらし花曇　万巻
鶯逃て猫ぎらひなる　素ゞ

二

江はぬるむ四方屋鋪の蔵造リ　平砂
雲こそかはれ富士は探幽　其角
暁の影を乗せたる白杜(牡)丹　介我
金を費(ツイエ)て通る関の戸　仙化
見渡せは壹岐はかり也対馬沖　桃隣
紅塗(ヘンヌリ)掛て中臣を読(ム)　神叔
大酒は粧ひし顔に未練かな　介我
鼻息にちる空焼の灰　万巻
有松の手拭ひとつ貰(モラヒ)けり　神叔
おなし睨(ニラミ)にすはる狛(コマイヌ)　素ゞ
いつ人に赤子の匂ひおもふらん　其角
踏たるあとを長袴熨(ノス)　介我
棟-梁の槌をかさしに朝日影　平砂
料理をさきへ廻す宿坊　仙化

二ウ

爰にこそ熊の住なすいそのかみ　桃隣
へし折枝の辛(カラキ)肉桂　万巻
さては夢座敷なくなる草枕　其角
貴人の前を恥ぬ恋人　平砂
双六に春を仇なる勢声(キホヒ)　素ゞ
気の煩はぬ三月の花　桃隣
梯(カケハシ)の下に明るし木曾つゝし　仙化
狩の笹矢は射捨なりけり　神叔
苧紡(オヘソ)まく窓の灯霜寒て　平砂
只仏-名を盲(メクラ)禅門　其角
島にても諷を作る世の鏡(カタミ)　介我
海を忘るゝ海士の宴(サカモリ)　素ゞ
羽衣の巌を祝へ月の雲　万巻
老父の笑を此萩の露　仙化

病家の伽とて

四吟

仙化 介我 其角 神叔

蕣の井の輪組也醤油樽　仙化
　三年目には萩垣の虫　介我
月露に紐幾かはり笠経(フリ)て　其角
　手本ひとつを酒に書する　神叔
やるといふ桜は欲に折にけり　我
　夕日に当る籠のてりうそ　化
買(カフ)針を袖にさしたる春の風　叔
　からき忘八の折檻(セッカン)を見る　角
倒(コロフ)戸に蚊遺火もゆるおもひ哉　化
　後(ウシロ)を撫(ナツ)る帯の仕習ひ　我
此先(サキ)はしらぬ在郷よ隅田川　角
　荷ふ魚馬(マクロ)を烏啼也　叔
札売の寒げに並ふ床の上　化
　鉢扣さへ用心の連(ツレ)　我
主(ヌシ)なくて大(オホ)振袖の伊勢参リ　角
　ゆふべはなるゝ人やりの鳥　叔
捨るとてすてぬは酔ぞ花の陰　我
　かすめる月や縮緬に雨　化
鰐口の音羽の滝は長閑也　叔
　白鶏頭の冬かれの山　角
門守の顔からさきへ年よりて　化
　寐てもとる子を母のうけとる　我
貧サのあれが虱といはれけり　角
　醒(サム)る日なくてしかも煩ふ　叔
六月の暑さにおもふ能衣裳　我
　いつれの代より家老有(ル)寺　化
下母(アカ、)おり物なつかしき粧にて　叔
　あかれし人の指(ユビ)をくひ切　角
けしからぬ朝三絃に残る月　化
　煎薬腹につよき菊の香　我
秋ふかし高野を下る屐(ケタ)の音　角
　鼠ねぐらの鳥をうかゝふ　叔
橋の火の光は河へ流れたり　我
　後前(アトサキ)呼バル八ッ立の声　化
蟬丸は目明(キ)也けり花の色　叔

老の気折や庭の若草　角

八月十日

かさねて三吟

蕣や詮なき花の中にあり　神叔
台に菌(キノコ)の生る水鉢　其角
反(ソリ)かへる沙魚(ハセ)は餌畚(エフゴ)を形(ナリ)にして　介我
帆先(サキ)廻れば背(セナカ)照る月　叔
腹あしく田舎座頭と見えにけり　角
雨には下(ヲロ)す店の半蔀　我
何年か売ずにすたる石の塔　叔
埋れ井よりもたちし蚊柱　角
夫(ツマ)なくて生(キ)平はもとの男紋　我
細工にほれて忍ばしき人　叔
奥からのかよひ道也違(チカ)ひ棚　角
経の達者はみな法華宗　我
俎(マナイタ)にむかひあひたる料理方　叔
此海はかり芝海老は飛(ト)ブ　角
小腕にもまかする船や風の跡　我
串柿買(フ)て村の案内　叔
月夜には覆面はづす花の外　角
余寒をいとふ女鍼(ハリ)立　我
昔見し世の風袋(フウタイ)や左リ前　叔
糠(コヌカ)をねぶる犬はやせたり　角
涼しさは足掻(アカキ)の水に牛濡(ヌレ)て　我
印の笹のかるゝ若竹　叔
曝(サラシ)ども昼食くふや槙(マキ)の島　角
親子してかく駕籠を憫(アハレム)　我
燃残(モエサシ)も閑所を見する遠(トヲ)明リ　叔
鷹の目澄(ン)で星残る月　角
西衆のかたいすがたや革袴　我
俵かづきてのほる大船　叔
放人(サスラヒド)先ッ蛇(クチナハ)にこまりけり　角
その類逃て罟(アミ)に入ル鳥　我
仮屋形千部過れば麦畑　叔
京順礼のつるゝ腰もと　角
ゆかしさは煉リ茶の色を湯にたてゝ　我

花の時分に一日の隙　叔
二百文非人にたらぬ春の道　角
　棒筆そめて霞ム言種　我

　八月十八日
　病父心よしと聞えけるに
　とみのいとまたまはりて
　浅艸寺に詣ける誘引の
　人々泉陵院に立よりて
　　月見しけれは即興

寺の月蒲萄膾は葉にもらん　其角
　柞柏の菜(ナ)畠へちる　固丈
朝霧に虎越(モカリ)のきぬを染かけて　孤屋
　もやひことはる川口の番　利牛
鷹の名を鷹商(アキント)にならひけり　丈
　化粧をしたる封つきの鮫(サメ)　角
若旦那彷(ホウ)ない顔のしたはれて　牛
　乞食のかへる恋の一道　屋

寐ずに汲ム水みな月の夜もすから　角
　先とりあへす酒に白瓜　丈
抜事の恥しく成さび刀　屋
　宝といふて名をば呼ぬ子　牛
いぶすなと勝手を覗(ノソ)く亭主ぶり　丈
　此段ことに仇(アタシ)野のつゆ　角
日がくれて大津を出る膳所の月　牛
　さ湯一はいにうそ寒キ風　屋
花の陰婆(バヾ)の居やうは小町也　角
　均(ナラシ)てかすむ春の塩浜　丈
宮作故殿(リコトノ)を爰に祝ひ月　屋
　武者絵の屏風人を員(カソユ)る　牛
蠟燭の心をはさむも上手下手　丈
　ねぢて袂に傾城の紙　角
十ながら古き卵(タマコ)は化おもひ　牛
　伏屋に似たる藪の雪隠　屋
牧(マキ)原の霜の中より虹立て　角
　口紅(ヘニ)すごき石仏の顔　丈
唖(ヲシ)の恋泪こほしてみせにけり　屋

孝な娘と人のしのべる　　牛
皆歌よ四季の田業の賤か月　　丈
秋の名残の爰か杖レ突(ツキ)　　角
焼置はいつか木葉にからび鮎　　牛
隠者に売ルは酒屋やさしき　　屋
はふれつゝ物申乞へば犬吼て　　角
江戸の花見の夜帰る也　　丈
桐島はいきうつしなる竜田越　　屋
射場の鎮守は片陰の春　　牛

良夜吟　引付

残暑

夏かけて名月あつきすゝみ哉　　芭蕉
名月や俗も拱(コマヌ)く橋の上　　岩翁
よそに聞月見の夜レ弓静也　　遠水
うるはしき声よ若手の月見船　　亀翁

憶二晋子ノ病父ヲ一

父か目を閉(フサ)かぬ中よけふの月　　彫棠
月落てこよひの名也馬莧艸(スベリヒユ)　　沾圃
名月や立よる人に松の透(スキ)　　松吟
月みつと和泉式部もうらみ哉　　秋色

小萩のつゆのいたはりもむつましく
聞えけるこまうといひし人の
むかしにおもひちは(あ)せて

秋の蚊やしかもはらはで老の伽　　同
名月や綻ぬひし下女かひま　　探泉
曲舞は五十已上の月見哉　　堤亭
名月や桜は伐(キレ)と気もつかす　　拙候
城鳩の影やむらかるけふの月　　山蜂
こよひ猶月は満美(マンヒ)の女見ん　　子珊
客も来すさすかねもせぬ月見哉　　需笑
名月や童はうつゝ夜半過　　一習
名月やとねりも酔て帰(リ)ぬる　　至暁
みか月と成へきものをけふの月　　青山

近きころ住家かはりて

住なれぬ宿の月見や五ツ過　　巨山
名月や栗鼠(リス)の尾さばく蒲萄棚　　可明

月のけふ手に待得たり薬酒　桂花
旅人も時をちかゆる月み哉　酉花
名月や男すまゐの苫屋形　吼雲
名月や畠の中の青畳　白之
名月や一昨日つくる酒の味　是吉
夷島も月の最中や人のさま　水谷
酒論もこよひそ許す月の徳　節水
殊に寝ぬ油しぼりの月見哉　和水
我月見猶子か跡や老の秋　林也
名月に咄ひかゆる一座かな　雨夕
漸と石船かりて月見哉　夏林
名月や師とする坊の昔節　鹿山
名月や置所なき枕筥　池石
名月や宿にくらすも口おしき　楓橋
夜半過は樽に水さす月見哉　冬鶯
名月に鷺もすゝまぬ渚かな　鉄松
名月に蚕の業なき昼寐哉　正春
けふの月聖も宿をよばぬ也　残鳥
名月や尾上の兎みゆるほと　千崎

名月や煙はひ行水の上　嵐雪
名月や焼火に竹を設ける　仙化
風雅あらは真の月見誰と誰　枳風
髪梳の寐姿かたしけふの月　万巻
名月や雪みんための庭の松　桃隣
新月や声けたゝまし岡の鵙　素イ
名月やたら〱下のはだか山　東潮
明烏月見いつくの人通り　可聞
名月のはしゐに猫のかゝはゆし　芝筵
名月や惜き襖のたてあはせ　平砂
名月に後生の鉦も打やめよ　幸隣
名月やかさす扇の骨はかり　う斉

千くさの露といへる句を短尺に
かきて年ころの形見に給はりぬ

七十の毒やのかるゝけふの月　神叔

万葉に　磯のさき〱こきはつる
ふねのひとつところに

名月や蜣わくやうに船つどひ　介我
箍ゆひのてらるゝ門やけふの月　固丈

蛤を手して剝ムキけりけふの月　　利牛

名月や隠者の門に魚の腸　　孤屋

枯尾華（かれをばな）

枯尾華　上

（題簽）

芭蕉翁終焉記

はなやかなる春はかしら重くまなこ濁りて心うし泉石冷々たる納涼の地はことに湿気をうけて夜もねられす朝むつけたり秋はたゝかなしひを添る腸をつかむはかり也ともかくもならてや雪のかれ尾花と無常閉関の折〳〵はとふらふ人も便なく立帰て今年就中老衰なりと歎あへり抑此翁孤独貧窮にして徳業にとめること無量なり二千余人の門葉辺遠ひとつに合信する因と縁との不可思議いかにとも勘破しかたし天和三年の冬深川の草庵急火にかこまれ潮にひたり笘をかつきて煙のうちに生のひけん是そ玉の緒のはかなき初め也爰に猶如火宅の変を悟り無所住の心を発して其次の年夏の半に甲斐か根にくらして富士の雪のみつれなけれはとそれより三更月下入無我といひけん昔の跡に立帰りおはしけれは人々うれしくて焼原の旧艸に庵をむすひしはしも心とゝまる詠にもとて一かふの芭蕉を植たり雨中吟芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉と侘られしに堪閑の友しけくかよひてをのつから芭蕉翁とよふことになむ成ぬその比円覚寺大巓和尚と申か易にくはしくおはしけるによりてうかゝひ侍るに或時翁か本卦のやうみんとて年月時日を古暦に合せて筮考せられけるに萃といふ卦にあたる也是は一もとの薄の風に吹れ雨にしほれてうき事の数々しけく成ぬれとも命つれなくからうして世にあるさまに譬たりされはあつまるとよみてその身は潜ならんとすれともかなたこなたより事つとひて心さしをやすんする事なしとかや信に聖典の瑞を感しけるさのことく艸庵に入来る人々の道をしたへるあまりとにもかくにも慰むれは所得たる哉橋あり舟有林アリ塔アリ花の雲鐘は上野か浅草かと眼前の奇景も捨かたくをの〳〵かせめておもふもむつましく侍れと古郷に聊忍はるゝ事ありとて貞享初のとしの秋知利をともなひ大和路やよし野の奥も心のこさす露とく〳〵こゝろみにうき世すゝかはや

是より人の見ふれたる茶の羽織ひの木笠になんいかめしき音やあられと風狂してこなたかなたのしるへ多く鄙の長路をいたはる人々名を乞句を忍ふこと安からす聞えしかは隠れかねたる身を竹斎に似たる哉と凩の吟行に猶々徳化して正風の師と仰き侍る也近在隣郷より馬をはせて来りむかふるもせんかたなし心をのどめてと思ふ一日もなかりけれは心気いつしかに衰減して病雁のかた田におりて旅ね哉とくるしみけん其年より大津膳所の人々いたはり深く幻住菴（猿蓑に記あり）義仲寺ゆく所至る処の風景を心の物にして遊へること年あり元来混本寺仏頂和尚に嗣法してひとり開禅の法師といはれ一気鉄鋳生いきほひなりけれとも老身くつほるゝまゝに句毎のからひたる姿までも自然に山家集の骨髄を得られたる有かたくやされはこそ此道の杜子美也ともてはやして貧交人に厚く喫茶の会盟に於ては宗鑑か洒落も教のひとかたに成て自由体放狂体世挙て口うつしせしも現力也凡篤実のちなみ風雅の妙花に匂ひ月にかゝやき柳に流れ雪にひるかへる須磨明石の夜泊淡路島の明ほの杖を引はてしもなくきさかたに能因木曾路に兼好二見に西行高野に寂蓮越路の縁は

宗祇宗長白川に兼載の草庵いつれも〳〵故人なから芭蕉翁についてまほろしにみえいさや〳〵とさそはれけん行衛の空もたのもしくや（奥のほそ道といふ記あり）十余年かうち杖と笠とをはなさす十日とも止まる所にては又こそ我胸の中を道祖神のさはかし給ふ也と語られしなり住つかぬ旅の心や置火燵是は慈鎮和尚のたひの世にまた旅寐してくさ枕ゆめの中にもゆめをみる哉とよませ給ひしに思ひ合せて侍る也遊子か一生を旅にくらしてはつと聞得し生涯をかろんし四たひむすひつる深川の庵を又立出るとて鶯や笋藪に老を鳴人も泣るゝわかれなりしが心待するかた〳〵とにかくかしかましとてふたゝひ伊賀の古郷に庵をかまへ（三か月の記有）爰にてしはしの閑素をうかゝひ給ふに心あらん人にみせはやと津の国なる人にまねかれて爰にも冬籠する便ありとて思ひ立給ふも道祖神のすゝめ成へし九月廿五日膳所の曲翠子よりいたはり迎られし返事に此道を行人なしに秋の昏と聞えけるも終のしをりをしられたる也伊賀山の嵐紙帳にしめり有ふれし菌の塊積にさはる也と覚えしかと苦しけなれは例の薬といふより水あたりして長月晦の夜より床にたふれ泄痢度しけくて物いふ力も

なく手足氷リぬれはあはやとてあつまる人々の中にも去来
京より馳くるに膳所より正秀大津より木節乙州丈艸平田
の李由つき添て支考惟然と共にかゝる歎きをつふやき侍
るもとよりも心神の散乱なかりけれは不浄をはゝかりて
人々近くも招かれす折々の詞につかへ侍りけるたゝ壁を
へたてゝ命運を祈る声の耳に入けるにや心弱きゆめのさ
めたるはとて

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

また枯野を廻るゆめ心ともせはやと申されしか是さえ妄
執なから風雅の上に死ん身の道を切に思ふ也と悔まれし
八日の夜の吟也各はかなく覚えて

賀会祈禱の句

落つきやから手水して神集め　木節
凩の空見なをすや鶴の声　去来
足かろに竹の林やみそさゝい　惟然
初雪にやかて手引ん佐太の宮　正秀
神のるす頼み力や松のかせ　之道
居上ていさみつきけり鷹の皃　伽香
起さるゝ声も嬉しき湯婆哉　支考
水仙や使につれて床離れ　呑舟
峠こす鴨のさなりや諸きほひ　丈艸
日にまして見ます顔也霜の菊　乙州

是そ生前の笑納め也木節か薬を死迄もとたのみ申されけ
るも実也人々にかゝる汚レを恥給へは坐臥のたすけとな
るもの呑舟と舎羅也これは之道か貧しくて有なから切に
心さしをはこへるにめてゝ彼か門人ならは他ならすとて
めして介抱の便とし給ふそもかれらも縁にふれて師につ
かふまつるとは悦ひなからも今はのきはのたすけとなれ
は心よはきもことはりにや各かはからひに麻の衣の垢つ
きたるを恨みてよききぬに脱かはし夜の衣の薄けれはと
て錦繍のめてたきをとゝのへたるそ門葉のものともか面
目なり九日十日はことにくるしけ成に其角和泉の府淡の
輪といふわたりへまいりたるたよりを乙州に尋られける
になつかしと思ひ出られたるにこそとてやかて文したゝ
めてむかひ参りし道たかひぬ予は岩翁亀翁ひとつ船にふ
けるの浦心よく詠めて堺にとまり十一日の夕へ大坂に着
て何心なくおきなの行衛覚束なしとはかりに尋けれはか

くなやみおはすといふに胸さはきとくかけつけて病床に
うかゝひよりいはんかたなき懐をのへ力なき声の詞をか
はしたり是年ころの深志に通して住吉の神の引立給ふに
やと歓喜すわかのうらにても祈つる事はかく有へしとも
思ひよらす蟻通の明神の物とかめなきも有かたく覚侍る
にいとゝ泪せきあけてうつくまり居るを去来支考かかた
はらにまねくゆへに退いて妄昧の心をやすめけり膝をゆ
るめて病顔をみるにいよ〳〵たのみなくて知死期も定め
なくしくるゝに

吹井より鶴を招かん時雨かな　晋子

と祈誓してなくさめ申けり先頼む椎の木もありと聞えし
幻住菴はうき世に遠し木曽殿と塚をならへてと有したは
ふれも後のかたり句に成ぬるそ其きさらきの望月の比と
願へるにたかはす常にはかなき句とものあるを前表と思
へは今さらに臨終の聞えもなしとしられ侍り露しるしな
き薬をあたゝむるに伽のものとも寝もやらて灰書に

うつくまる薬の下の寒さ哉　丈艸

病中のあまりすゝるや冬こもり　去来

引張てふとんそ寒き笑ひ声　惟然

しかられて次の間へ出る寒さ哉　支考

おもひ寄夜伽もしたし冬こもり　正秀

鬮とりて菜飯たかする夜伽哉　木節

皆子也みのむし寒く鳴尽す　乙州

十二日の申の刻はかりに死顔うるはしく睡れるを期とし
て物打かけ夜ひそかに長櫃に入てあき人の用意のやうに
こしらへ川舟にかきのせ去来乙州丈艸支考惟然正秀木節
呑舟寿貞か子次郎兵衛予ともに十人笘もる雫袖寒き旅ねこ
そあれたひねこそあれとためしなき奇縁をつふやき坐禅
称名ひとり〳〵に年ころ日比のたのもしき詞むつましき
教をかたみにして誹諧の光をうしなひつるに思ひしのへ
る人の名のみ慕へる昔語りを今さらにしつ東南西北に招
かれてつゐの栖を定めさる身のもしや奥松島越の白山し
らぬはてしにてかくもあらは聞て驚くはかりの歎ならん
に一夜もそひてかはねの風をいとふこと本意也此期にあ
はぬ門人の思いくはくそやと鳥にさめ鐘をかそへて伏見
につくふしみより義仲寺にうつして葬礼義信を尽し京大
坂大津膳所の連衆披官従者迄も此翁の情を慕へるにこそ

まねかさるに馳来るもの三百余人也浄衣その外智月と乙州か妻ぬひたてゝ着せまいらす則義仲寺の直愚上人をみちひきにして門前の少引入たる所にかたのことく木曾塚の右にならへて土かいおさめたりをのつからふりたる柳もありかねての墓のちきりならんとそのまゝに卵塔をまねひあら垣をしめ冬枯のはせをを植て名のかたみとす常に風景をこのめる癖ありけにも所はなから山田上山をかまへてさゝ波も寺前によせ漕出る舟も観念の跡をのこし樵路の鹿田家の雁遺骨を湖上の月にてらすことかりそめならぬ翁なり人々七日か程こもりてかくまてに追善の興行幸ヒにあへるは予也けりと人々のなけきを合感して愚かに終焉の記を残し侍る也程もはるけき風のつてに我翁をしのはん輩は是をもて回向のたよりとすへし

於粟津義仲寺牌位下　晋子書

元禄七年十月十八日　於義仲寺

追善之誹諧

なきからを笠に隠すや枯尾花　晋　子

温石さめて皆氷る声　支　考

行灯の外よりしらむ海山に　丈　艸

やとはぬ馬士の縁に来て居る　惟　然

つみ捨し市の古木の長短　木　節

洗ふたやうな夕立の顔　李　由

森の名をほのめかしたる月の影　之　道

野かけの茶の湯鶉待也　去　来

水ウの霧田中の舟をすべり行　曲　翠

旅から旅へ片便宜して　正　秀

暖簾にさし出ぬ眉の物思ひ　臥　高

風のくすりを惣〳〵かのむ　泥　足

こがすなと斎の豆腐を世話にする　乙　州

木戸迄人を添るあやつり　芝　柏

葺わたす菖蒲に匂ふ天気合　昌　房

車の供ははだし也けり　探　芝

澄月の横に流れぬよこた川　胡　故

負〳〵下て雁安堵する　牡　玄

菴の客寒いめに逢秋の雨　游　刀

ぬす人ふたり相談の声　蘇　葉

世の花に集の発句の惜まるゝ　智　月

多羅の芽立をとりて育つる　呑舟

二

此春も折〳〵みゆる筑紫僧　土芳

打出したる刀荷作る　卓袋

四十迄前髪置も郷ならひ　霊椿

苦になる娘たれしのふらん　野童

一夜とて末つむ花を寐せにけり　素羈

祭の留守に残したる酒　万里

河風の思の外に吹しめり　誐々

藪にあまりて雀よる家　這萃

塩売のことつかりぬる油筒　許六

月の明りにかけしまふ絹　回鳧

秋も此彼岸過せは草臥て　荒雀

くされた込(ミ)に立し鶏頭　楚江

小屏風の内より筆を取乱し　野明

四ツになる迄起さねは寝る　風国

二ウ

ねんころに草鞋すけてくるゝ也　木枝

女人堂にて泣もことはり　晋子

ひたるさも侍気にはおもしろく　角上

ふるか〳〵と雪またれけり　之道

あれ是と逢夜の小袖目利して　去来

椀そろへたる蔵のくらがり　土芳

呑かゝるきせる明よとせかまるゝ　臥高

ふとんを巻て出す乗物　芝柏

弟子にとて狩人の子をまいらする　尚白

月さしかゝる門の井の垢離　昌房

軒の露莚敷たるかたたかへ　丹野

野分の朝しまりなき空　丈艸

花にとて手廻し早き旅道具　惟然

煮た粥くはぬ春の引馬　霊椿

三

小機嫌につはめ近よる塀の上　正秀

洗濯に出る川へりの石　回鳧

日によりて柴の直段もちかふ也　朴吹

袋の猫のもらはれて鳴　角上

里迄はやとひ人遠き峰の寺　泥足

聞やみやこに爪(瓜)刻む音　尚白

七ツからのれとも出さぬ舟手形　卓袋

二季はらひにて国〳〵の掛　芝柏

内に居る弟むす子のかしこけに　探芝

うしろ山迄刈寄る萱　游刀
此牛を三歩にうれは月見して　楚江
すまふの地取かねて名を付　魚光
社さえ五郎十郎立ならひ　晋子
所からとて代官を殿　風国
三ウ
打鎰に水上帳を引かけて　支考
乳母と隣へ送る啼児(ムシ)　正秀
獅子舞の拍子ぬけする昼下(リ)　丈艸
雨気の雲に瓦やく也　昌房
在所から医師の普請を取持て　臥高
片町出かす畠新田　之道
鳥さしの仕合わろき昏の空　去来
木像かとて倚子をゆるかす　泥足
三重かさねむかつく斗匂はせて　尚白
座敷のもやうかふる名月　卓袋
漣や我ものにして秋の天　角上
経よむうちもしのふ聖霊　牡玄
かろ〳〵と花見る人に負れ来て　土芳
村よりおろす伊勢講の種　芝柏

名
暖になれは小鮓のなれ加減　這萃
軍はなしを祖父が手の物　臥高
淵は瀬に薩埵の上を通る也　晋子
朝日にむきて念珠押もむ　正秀
幾人の着汚(シ)つらん夜着寒し　支考
わすれて替ぬ大小の額　魚光
味噌つきは沙弥に力をあらせはや　楚江
かな聾の何か可笑き　游刀
ばら〳〵と恨之助をとりさかし　風国
顔赤うするみりん酒の酔　之道
白鳥の鎗を葛屋に持せかけ　探芝
三河なまりは天下一番　去来
飯しゐに内義も出るけふの月　尚白
功者に機をみてもらふ秋　回鳧
ウ
うそ寒き堺格子の窓明り　芝柏
文庫をおろす独山伏　土芳
浮雲も晴て五月の日の長さ　惟然
海へも近き武庫川の水　丈艸
寮にゐる外より鎖をかけさせて　牡玄

思はぬ状の奥に戒名　支考
青天にちりうく花のかうはしく　去来
巣に生たちて千里鶯　正秀

右四十三人満座興行大津膳所
京嵯峨摂津伊賀之連衆也各
感シテ二愁眉一ヲ而不レ求二巧言一ヲ也

傷シテ二亡師ノ終焉一ヲ作レル句　初七日迄

忘れ得ぬ空も十夜の泪かな　京 去来
啼うちの狂気をさませ浜鵆　僧 李由
無跡や鼠も寒きともちから　大津 木節
つゐに行宗祇も寸白夜の霜　同 乙州
いふ事も泪に成や塚の霜　膳所 昌房
暁の墓もゆるくや千鳥数奇　僧 丈艸
一たひの医師ものとはん帰花　彦根 許六
凩よやみたる跡の舟よはひ　同 汶村
墓もとり十方なき世のしくれ哉　ゼゝ 探芝

拝席に溜るなみたや朝の霜　大津 楚江
かさね着の老の姿や苔の霜　堅田 成秀
木曾柿や木葉かつきし塚の上　大つ 誐々
日影さす塚にしくれや湖水迄　同 露玉
月雪に長き休みや笈の脚　僧 千那
しけ絹に紙子取あふ御影哉　大つ 尚白

一とせ翁の踏分られし奥羽塞をめくりて
人々よりの呈書をことつかり道すからをも
かたりてとおもひわたりたるに古人に成給ふ
遺懐のあまりむなしき塚をうこかして泣

きさかたを問す語や草の霜　京 轍士
はせをはの寒しと答ふ声もなし　僧 角上
渋張の笠かけてみん墓の霜　京 野童
一夜来て泣友にせん鵙の床　同 風国
耳にある声のはつれや夕時雨　伊賀 土芳
悲しさも云ちらしたる時雨哉　同 卓袋
我真似を泣か小春の雉の声　大坂 之道
石たてゝ墓も落つく霜夜哉　同 芝柏
鹿のねも入て悲しき野山哉　僧 支考

入月や日比の数奇の朝朗　京　春澄

十六日晋子を幻住菴にともなひて
翁のかくれ所といへる椎の木をみせて
いますことくに俤をしたへる愁吟

木からしや何を力にふく事そ　曲翠
腰折て木葉をつかむ別れ哉　正秀
うろ〳〵とひさまつきたる木葉哉　臥高
ねぢてみる別の岩よ冬木立　泥足
見送りし庵の姿や袖の霜　霊椿
まほろしも住ぬ嵐の木葉哉　晋子
取つかん便もかなし枯柳　嵯峨　野明
線香の煙覆ふや枯芭蕉　同　荒雀
初めての千鳥も啼や礒の塚　大坂　呑舟
冬芭蕉衣にさけて泪かな　ぜ、　魚光
立かねて袖もしる（マヽ）や墓の前　同　回皃
悔まれて夜着かふりけり冬こもり　同　游刀
霜消て此道広し西の山　同　朴吹
木曾寺のゆめになしたる時雨哉　大つ　木枝
今朝独泪をこほす火鉢哉　ぜ、　這萃
さゝ波の時雨を聞か土の窓　大津　土竜
ちり際はもろき桜の紅葉哉　ぜ、　遅望
むかし人といひて見廻る塚の霜　同　伴左
待うけて泪みあはす時雨哉　かや女

二七日廟参之悼句所々文通

雪はれて徳の光やかゝみ山　岩翁
小野炭やあとに匂ひの残りけり　尺草
冬の日や師に奉公の間もなくて　大坂　如柿
今ははや悲しさかるゝ柳哉　ぜ、　牡玄
間違ふてあはぬ命や村時雨　同　吾我
松の霜見ぬ世の形やひの木笠　同　松泉
此かた見行来にみせん丸頭巾　同　朔巫
菊榼暁起の馳走かな　堅田　猪睡
朝日うけて霜もまはゆし塚の前　同　重氏
打こけて指ぬき氷る泪かな　女　素韲
なくさめし琴も名残や冬の月　女　万里
花鳥よせがまれ尽す冬木立　桑門　惟然
花桶の鳴音悲し夜半の霜　女　可南
冬の月襟にうけたる泪哉　ぜ、　微房

手をつけは霜も湯と成泪哉　同　麻三
木兎の目にも涙のしくれ哉　同　砂上
力なく墓にかけよる時雨哉　同　蚤鳥
冬柳かれて名はかり残りけり　向震軒
枝折て鳥の歎きや竹の霜　さが　来几
国郷へつたへてけふのしくれ哉　小倉　閑夕
幻にみるは枯野の榃哉　さが　為有
力なき獅のあがきや冬牡丹　彦根　木導
朝霜や夜着にちゝみしそれもみす　みの　如行
主もなき時雨の庵に讃はかり
　くらつほに小坊（主）のるやと
　聞えし作意俤になん　堅田　小作
大根引あとはうつまぬ名残哉　京　夏木

三七日伊賀連衆追悼句

時雨ゝやおくへもゆかす筆なやみ　藤堂　玄虎
鶯の子鳴にくゝる榃かな　山岸　車来
聞て泣声もとゝかぬ枯野哉　浅井　風睦
寒菊やすゝく仏の膳の端　山田　雪芝
夢みたか啼て飛ゆく浮ね鴨　杉野　配力

六畳に見残されたり冬の月　岡本　苔蘇
塵塚や泪の紙に霜の華　神部や　祐甫
火燵から床のかけ絵を泪かな　京や　一鷺
なき跡や時雨てたつる古障子　佐治　洞木
手向には何をかれたる菊畠　西沢　魚日
俤や足もさゝれぬ置火燵　明覚寺　尾頭
冬桃のなき人しらぬ歎かな　山岸　陽和
山茶花の散煩はぬうき世哉　木や　我峰
借（シ）着つる夜半もありけり丸頭巾　大坂や　万乎
かろき身の果や木葉の吹とまり　猿雖
芭蕉〱枯葉に袖のしくれ哉　小川　風麦
紙衣の小しぼに浮むなみた哉　植田　示蜂
一生を旅の仕舞の時雨かな　井つゝや　為酔
茶のからの霜や泪のその一ツ　浜　式之
何事もなみたに成ぬ冬の菴　中尾　槐市
菊かれて側に小松も凋れけり　小童　長年
たよりなや風もかく迄枯柳　津子　荻子
枯草に顔入て鳴男鹿かな　原田　乍木
笠を泣時雨なつかし北南　井つゝや　望翠

そのまゝに降を手向るしくれ哉　宇多都
聞とりて鳥も嘆くか山寒し　大久保 仙　杖
歎く手の香もふるふや水仙花　松本 氷　固
水鳥の遠きわかれや湖の果　内神 九　節

なにわへの飛脚粟津よりかへりて
亡師の遺書まいれり

夢なれや活たる文字の村衜　山岸 半　残
手向せん茶の木花咲袖の下　西島 百　歳
限あるうはさはかりや散紅葉　満　水
はら〳〵と泪かれ野の薄かな　来川 鳥　栗

四七日をかけて普音文通之句

猿みのゝ袖のしくれや行嵐　伊セ 路　艸
夢のあとたか畳みしそ夜着ふとん　同　団　友
待〳〵ておもはぬ文に時雨哉　同　空　芽
便なう霜にきえ行月夜哉　同　宗　比
みて泣や蓑笠の像に雪霰　同　斗　従
玉しゐを世に分置て木葉哉　同　芦　本
語り合てともに悲しき霜夜哉　いセ 抜　不
せめてその笠みて行んあられ笠　同　盧　牧

耳の底に水鶏鳴也冬の雨　尾州 露　川
枝川や一羽はなれて鳴千鳥　同　素　覧
霜にちりて光身にしむ牡丹哉　同　左　次
手つからに木葉はく也塚の脇　冬　鶯
明て啼冬の日影やかし座敷　大坂 伽　香
鵜飼見し川辺も氷る泪哉　みの 低　耳
文台に去ぬ影也古頭巾　伊与 黄　山

上ノ終

枯尾華 下

(題簽)

嵐雪拝

十月廿二日夜興行　　嵐雪

十月をゆめかとはかりさくら花　　嵐雪
しくれの中に一筋の香　　氷花
鎰の手の二間は五畳〳〵にて　　百里
立居は見ゆる沖の船頭　　神叔
有明のはつかに白き山の裾　　東潮
真鶸さそひて豆まはし鳴　　浮生
蜀黍の実をはそがれて畑中　　卜宅
木舞あらはに手て土をぬる　　舟竹
新川にまた名もつかぬ橋のうへ　　桐雨
雨のふる見て照〳〵といふ　　月下
存在に物をおしゆる田植とも　　風洗
膳にばらりと明る干鰕　　楸下
約束の茶の湯延してさひしかり　　咸宇
赤い菊より黄な菊を嗅　　牧人
上気して吹れに出る秋の風　　当歌
客とならへて床をとる月　　銀鉤

十月廿五日共桃隣出武江而暨

義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱

いつの冬か凩のうしろむきそめ葛のはのおもてみし秋より春にわたり杖にさめ笠に眠り小蓑に病つゐの浮世をなにはになして枯野にあそふと聞え給ひし一句を今さらのうつゝになしぬ其角はさる契ありてや生前のたいめ後の事迄とりおさめつかへけり遠き境の人はいまたしり及さすや江都に心さしを尽せるたれかれところ〳〵に席をかまへて追善興行のくさ〳〵袖に袂にひろひかさねて往に歩みを忘れ富士もみす大井もしらぬ寒そらかけて霜月七日のゆふつくよの程に義仲寺の冢上にひさまつく空華散し水月うちこほす時心鏡一塵をひかされは万象よくうつる此師この道におゐてみつからを利し他を利して終に其神不竭今も見給へ今も聞給へとて

此下にかくねむるらん雪仏

ちる花も翁について廻るらん　東潮
　山吹もらふ顔そわすれね　嵐雪妻
春雨に咄のやうな恋をして　浮生
　気相のわろき時は文見る　百里
只あそふ四十の内の楽坊主　氷花
　水亭(クレ)いとて夏冬もなし　嵐雪
くたひれて勝手の鼾聞えけり　神叔
　位牌の前の火影静まる　東潮
真実に蕎麦切打て送る也　百里
　城の近くに旅こもりする　神叔
傘の外にまきるゝ傘はなき　嵐雪
　夜半(ナカ)夜あるき母の気遣(ヒ)　氷花
あたゝかに風呂吹煮(ユル)　冬の月　東潮
　先度の雪に師走落つく　百里
来春を今から工む大工寄セ　神叔
　中山道は加賀て持けり　嵐雪
一升を米の価のとうからし　百里
　さる代もありと語る老　氷花
此たひはまいりあはつの墓の花　専迹
　無常の鐘のかすむさゝ波　縁子

　満座追善各焼香

なき人の詠めも四季の終哉　百里
見おさめの顔はいつ比雪の比　氷花

　悔前非

身をつめる悲しさをしれ冬の月　神叔
芳しき人の香もあれ塚の雪　浮生
凩の外にあそふや墓の月　舟竹
尋行てかれ野の草の根に語レ　咸宇
俤や二度三度よむ月時雨　専迹
かれ芦や名をかき寄る潮頭　東潮
時雨にもさめぬ別れや夢咄シ　素イ

　芭蕉翁みまかりぬるに跡をたに
　とてたひたつ人にことつて侍ける

秋風にたへてしはしは残りしも
　霜の芭蕉のあはれ世中　安適

十月廿二日興行

故人も多く旅にはつと逆旅　桃隣
過客のことはりをおもひよせて　子珊
俤やなにはを霜のふみおさめ　杉風
淡くかけろふ冬の日の影　岱水
一面に起ふす小松風やみて　曾良
よごれし馬を引出す也　序志
名月は夕飯早く過しけり　太大
どこやら軽き秋の帷子　亀水
皀莢に枝を分たる鵙の声　孤屋
細工に入ル古桶の底　子祐
心よき今の住持を憎みたて　利牛
三里かうちは景の塩浜　白之
此寒さあられか雪のふる疊　蚊足
木綿の重み手にのせて見る　李里
背戸伝ヒ来ては常〱長咄　野坡
折角とれは蜩のから　太洛
やす〱と平泉より木曾の月　八桑
丈幅せはき布の薄綿　桃川

真白な陰は流るゝ岸の花　利合
俵のうへに燕あつまる　野々
そろ〱と子をあゆませて春の空　支梁
昼にさかりて葺のこす屋根　湖松
酒道具干ならへたる笠置川　桐奚
風呂敷といて鉦鼓取出す　嵐戎
鳴ぬ間人をうかゝふほとゝきす　石菊
家のふるきを小利口に住ム　ちり
丁寧に又桃灯て送らるゝ　嵐竹
風なき雪の柳地につく　此筋
樋の口に苦鮒はかりかたまりて　素竜
臼に手杵のせはしなき音　千川
あかまへていふ程香る月の宿　楚舟
行脚かへりに更る秋風　角蕉
よは〱と葉はかり多き菊の露　杏村
流れに添て雨あかる也　川鷗
居間なから六畳敷に炉を構ヘ　濁子
髭に白髪のほのかなる年
見開ヶはをのつからなる花微笑

香をむすんて朝かすみたつ　滄波

歌仙満座普音之吟

うらむへき便もなしや神無月　杉風
枯芝や声も力もなきあらし　八桑
是非わかぬ枯野に草の種もなし　子珊
見るやうに頭巾をかけん庵の松　太大
声たてぬ歎きや霜のきり〳〵す　湖松
菊かれて匂を惜む居士衣哉　子祐
山茶花を塚の頼みに植もせん　太洛
うき便望絶たり霜はしら　序志
茶の花は匂ひ手向んはかり也　亀水
見送りも夢に成けり今朝の霜　李里
骨肉にこたゆるけふのしくれ哉　楚舟
霜消て蓬を庵のちなみ哉　風弦
悲しひを包みかねたる木葉哉　桃川
寺の花直にたむけん冬牡丹　野々
はかなしや火燵咄も苔の下　愚好
初雪を思ひよらすの手向哉　用陽

かたみ哉粟津かはらの枯柳　杏村
その骸もかくやは雪の水仙花　石人
むせふとも芦の枯葉の燃しさり　曾良
ならへたる縄床さひし冬籠　滄波
袖時雨南無あみた仏趣向哉　角蕉

義仲寺へ送る悼

氷るらん足もぬらさて渡川　法眼季吟
告て来て死顔ゆかし冬の山　露沾
花紅葉夢と小春に成にけり　山夕
錫杖にふみたかはさる木葉哉　直方
泣〻〳〵と目に吹当る木のは哉　琴風
紅葉ちり榕は青し塚の前　濁子
手向たる水もや朝氷面鏡　壺蛙
時雨ふる白い卒都婆よ夕嵐　山蓬
野さらしの句や十余年々の霜　涼葉
小莚や火にはなれたる身の凍へ　大舟
行人の徳や十夜の道ひろき　左柳
絵をみるや袖の雫の初氷　此筋
立されは心に消る塚の霜　千川

力艸引切られたるなみた哉　淵泉
雪や霜尋ねん笠の有所　支老
枯蔦の哀や残る壁の系（ツリ）　卜子
寒菊の咲後れたる名残哉　遊糸
哀しれ菊は戸口にかれて居る　其井
こや形見菴の炉蓋に指の跡　海動
何のかの便りの風や枯薄　蓬山
五十二年ゆめ一時のしくれ哉　ちり
頭陀袋重きも袖のしくれ哉　虚谷
その塚はさそな枯野の土の色　艶子
心澄て頬に凝つく泪かな　馬莧
凩の声に檜原もむせひけり　素竜

十月廿三日追善

亦たそやあゝ此道の木葉掻　湖春
一羽さひしき霜の朝鳥　素竜
碇綱綰（ワカ）なる月に浪ゆりて　露沾
野分の音のかはる兀（ハゲ）山　萍水
秋中に残らすつけし蔵の壁　桃隣
青苧（ソ）の長を引上にけり　岱水
内かたは物やはらかな人つかひ　野坡
ほろ〳〵雨の末は四五町　孤屋
その形に紙て巻たる百合の花　利牛
竈（クド）の火けして庵たて寄（セ）　杉風
雲水の身はいつちをか死所　素堂
帆をもつ舟は畳也けり　筆
山陰にもらひあつめし竹植て　利合
盆を待すに急な法体　野坡
膳‐所の月片隅もなく照渡り　岱水
二年つゝいてあたゝかな秋　桃隣
花紅葉老かゝまりて押灸　杉風
酒といはれて少やはらく　利牛
聞かは見はお下屋敷の奥座敷　孤屋
立くつれたる雨の蚊柱　岱水
成あいにありけは旅も苦にならす　桃隣
子共の勢のたらぬ柿園　利合
長々の籾借り返す力得て　野坡
露霜ふかき大名の寺　杉風
約束の皆ちかふたる後の月　利牛

財布てぬくふ泪わりなき　孤屋
のし餅の上にかさぬる配り餅　岱水
旦那か出れは賑やかになる　桃隣
山〳〵を信濃の者に語らせて　杉風
本の通りに鼠算用　野坡
高い木の並ひし下か猶涼し　孤屋
小あけをかけてゆらぬ駕籠かき　利牛
二三人伊勢上るりの物もらひ　野坡
節句の礼におそなはり来る　岱水
袖に今師の好(スカ)れたる花の枝　桃隣
雲優美なる春の夕昏　利合

十月廿三日
晋子亭にて興行

今はくも雪のはせをの光哉　仙化
かへらぬ水に寐て並ふ鴨　是吉
冬の月黒き衣類は影鈍(トミ)て　介我
拭ひのこせる階のくま　柴雫
(注)一もとの柏檀(イフキ)廻れは二十足　湖月
昼の鼠の穴をわするゝ　神叔
その向も世々の隣の日をうけて　揚水
力もよはく鉦しめる音　枳風
供人を近く召るゝ駕籠の内　由之
雀の枝を鷺のあらそふ　全峰
日に添て宮木の屑は泥に朽　沾徳
むかしもこゝか橋本の宿　李下
合羽なき馬より歎く雨曇　神叔
小僧になりていさみつく顔　揚水
扇から湯銭さし出す月の昏　柴雫
側のたはこの匂ひ望まれ　仙化
花の雲行徳迄と舟よばひ　揚水
ちいさき松のかすむ洲の入　李下
青(ナ)貝の卓もふるひて春の色　湖月
日光椀に似あふ芳飯　柴雫
かしこまる事を忘れし年の程　介我
手紙のおくは名やら判やら　神叔
唐物と見すえし茶入袋して　枳風
あらき踵(キビス)に羽二重の裾　湖月

墓のごと雪を並へて惜みけり　介我
馬を土戸にはさむ口取　沾徳
かねことの所〳〵を聞はつり　仙化
生キたる身をそ恋の入レ物　揚水
午ゴの月に烏帽子の影の直ヲ也　李下
二行に持て並ふ虫籠　全峰
声もなく朝の鹿の小草喰ム　神叔
つかみて鍋にはかり込ム米　由之
肩-癖の外に跡なきうしろ見よ　仙化
はしりなからに牛除ヨクる声　介我
常にえむ連衆拈-花の花に寄　沾徳
垣せぬ桃を人の敬まひ　湖月

深草のおきな宗祇居士を讃して
いはすや友トモニ風月ヲ家ニスニ旅-泊ヲと
芭蕉翁のおもむきに似たり

旅の旅つゐに宗祇の時雨哉　素堂
落葉見し人や落葉の底の人　沾徳
炉開になき人来ませ影ほうし　枳風

凩におもひ泣かせよ猿の面　介我
月雪の近江の土や三世の縁　専吟
檜笠いつれ冬野の面かくれ　湖月
凩のなにはや夢のさめところ　柴雫
初しくれ笠より外のかたみなし　薯子
かみな月根さしは残るはせを哉　拙候
帰花菊をむかしの翁かな　闇指
力艸とりはなしたり朝嵐　山蜂
果は霜夢に逢にし芭蕉哉　寒玉
十徳の袖はなみたの氷かな　女 秋色
霜ふかき菴ぬしなきうつゝ哉　和水
句の神や此十月の世のくやみ　芝莚
さゝんくはや難波へ向てつかみさし　一雀
驚きて霜の蜜柑を手向哉　是吉
残る名の手向にむせぶしくれ哉　林也
雪の夜をおもひ忍ふや名付親　李下
窓の雪はらひ果たる払子哉　亀翁
青石の陰もあはれや木葉搔　横几
終の野に捨すましけり霜の杖　景桃

又も来ぬ跡に立けり霜柱　萍水
ちからなや膝をかゝえて冬籠　野坡
竹の絵を掛て悲しき時雨哉　孤屋
油火の消て悔むや冬籠　利牛
すかりつく枝も枯たる柳哉　疎雨
泣籠る冬や今年の廻り合　岱水
深川にとりわけ鳴や友千鳥　石菊
目のさきにまたちら／＼と木葉哉　利合

義仲寺に参り亡師の塚のもとに
旧来を語らんとすそも隠逸の志に
つかへ一たひは笈のたすけともなりぬ
今更に遠里を隔てかく所の苔の下
にむなしき名のみ聞へけるを

月雪に仮の菴や七所　桃隣

十一月十二日初月忌
丸山量阿弥亭　興行

泣中に寒菊ひとり耐(コタ)へたり　嵐雪

向上体を雪の明ほの　桃隣
渋(ヒ)壁のひる間を遅く扇かせて　岩翁
車にはこふ藪の畳(カサ)ナリ　晋子
簾売声に告たるほとゝきす　亀翁
かし傘としれて大文字　横几
名月に持参の一種おもひ付ケ　尺艸
折かへすほと広き桐の葉　松翁
白(ウ)粉の鏡にかゝる秋の霜　去来
火燵ふとんの引たらぬ中　正秀
長谷越の山にあいたる昨日けふ　曲翠
椢の木の間の海をたまさか　筆
吹たをす屏風を膝に押直し　轍士
鼓かゝへし大かゝりなり　心圭
のまぬかと盃みする人遠し　暮四
岸をすらせて舟や行らん　巨海
蜻蜓の衣紋つくろふやとりやう　荷兮
湯あかりの身の冷かに成　野童
弓はりのひかゆる雲を窺はれ　風国
山家の所帯気散しな事　集加

獅子の座にみつる心や花の陰　晋子
　杖に用なき我老の春　重勝
二 うらゝ成和｜爾や堅田の浦伝ひ　遅望
　塩辛桶になれし鉤(ツリハリ)　轍士
雨の日は大工もあそびたがる也　桃隣
　さてはちんばと見ゆる後(ロ)目　嵐雪
のり物は音羽の滝の下に置(ク)　横几
　あたゝめさせよその薬鍋　荷兮
かけ乞の金をかへすも至極成　去来
　上座の聟を覗く透合(ヒ)　尺艸
風の香もいとゝ扇のきしる音　嵐雪
　水もすみたる飛弾曲(ワケ)の目｜　岩翁
かしこまる受戒の児の白素絹(ソケン)　轍士
　能はしめよと使かさなる　晋子
あた腹の起り出たる夜の月　集加
　檽｜子明れは朝かほの蔓　桃隣
二ウ 秋風や看｜坊様のまゝならぬ　巨海
　衣桁の小袖落る音する　風国
生かはる歯をゆるかして物おもひ　晋子
　たのまぬ神はほめも詈(シカ)りも　尺艸
長旅に持あぐみたるつるべ鮓　暮四
　一日鍬をふり上る数　心圭
たしろかぬ松を都に見直して　桃隣
　夜の寐覚やぬす人もなし　岩翁
よごれても禿(ダヒ)(ママ)たる柱杖哀也　横几
　たねや乞れて残す鶏頭　巨海
牛祭昼からしての女子客　尺艸
　身なけて酔のさむる月影　遅望
折ためて荷ひなからにちらす花　轍士
　年越すます坂の櫛挽　荷兮
三 肥肉なものは春からじゆつながり　集加
　梵天寒く立し川小屋　暮四
灯も闇を添て光るらん　嵐雪
　不思儀(議)に娵をちそうせらるゝ　去来
白粥のさむる間しはし思ひ侘　岩翁
　書そこなひももろふ短尺　晋子
三里四里機嫌まかせの旅の空　野童
　焼なから干すぬれ木也けり　轍士

此あたり此家はかりこけら葺　風国
　をのか法華を独たうとき　集加
湖を籞(イケス)にみたる山の景　尺艸
　夢といふ字を夢の世の額　嵐雪
宵の月脚半もとかす膳待て　桃隣
　どこともなしに蜜柑焦るゝ　巨海
三ウ　かし鳥の樫はくはずに梅もとき　暮四
　こしもとか尻たゝく飼猿　岩翁
おもはゆき秉(ツキ)蠟燭の立かねて　轍士
　遊行の前にならぶ十念　集加
産るゝや声もたしかに男の子　晋子
　とりちらしたる朝夕の酒　風国
節季候の年ほとありて拍子ぬけ　横几
　憐み四方に施薬合する　尺艸
形よりこびたる佐渡の人心　桃隣
　薄の中に得たる蓍(メトハキ)　暮四
鬼か手に明さして置月の洞　心圭
　うは着に君をかこふ露霜　嵐雪
恋せすも花に若やく老だうな　荷兮
　うら門付る垣の山吹　去来
ナ　米かすもかまはて通る蜆舟　集加
　地蔵を建し夢の浮橋　晋子
笋の制札うすき冬枯て　岩翁
　ようはづれすに寐たる木枕　轍士
天井をけはなして置座敷鞠　尺艸
　みな刈込や里の夏物　荷兮
秋の蚊のばら〱出し八(ツ)下(リ)　横几
　あつさは残る馬の腹掛　心圭
銭形の竹つるしたる軒の月　嵐雪
　きるもの着よと母のせわやく　野童
打れたる瘤は付属の証拠なり　岩翁
　さなから風を薄墨の竹　風国
手分して赤飯くはる大井殿　集加
　おかしくあたる百姓の弓　晋子
ウ　日の色に心さたまる鐘楼守　轍士
　行脚の笠に袋して置　尺艸
河風にわろき諷をはりあけて　心圭
　新大橋の富士もよく成　去来

なつかしや切干下す尾張宿　荷兮
むしろに書た賤の手質（カタキ）　重勝
外しらぬ琴を悲しむ花の前　桃隣
艸芳しき信の交り　横几

此一帖者於落柿舎書校合決
寺町二条上町　井つゝや　重勝判

追加

於義仲寺六七日

花鳥にせかまれ尽す冬木立　樵然
薬の紙の霜にしほるゝ　正秀
隅〳〵に火鉢の炭をかた寄せて　臥高
明日の天気を亭主請とる　探芝
月影に綿抱へこむ柿ふくろ　昌房
かしらにつれて揃ふむしの音　游刀
茸狩りはこそり〳〵と道かへて　丈艸
庄屋の触にたのむ代判　執筆
角鍔は今にかゝさぬ家中風　胡故
なまり詞に国の名物　直愚上人
もや柴てひつしと構ふ雪さくみ　尼智月
老ぬるねこの痩はてゝなく　惟然
恵心仏守て出たつ秋の旅　正秀
前に当たは鹿児島の月　臥高
朝霧に絵の具の箱の蓋あけて　昌房
茶を情出してはこふ弟　游刀
とつくりと花に夕日の入すまし　丈艸
つゝしの株にひかる山とり　胡故
鍬打に隣つれ立はるの風　直愚上人
芝居太鼓の拍子ぬけする　魚光
むつかしき思案を無理に書破り　探芝
物見あつめてはいる寐ところ　微房
塀うらに波のよせくる家つたひ　川支
若衆の髪に気を付てやる　丈艸
照月を海老名の陣に参る也　乙州

秋の小草にましる隈さゝ　曲翠
うれしかる階子の下のにこり酒　臥高
砂鉢の鮹は双六のかけ　蘇葉
相合の鑓を持せる道奉行　牝玄
奇麗にはるゝ雨の卯の花　関阿
立ならふ蛤ふみのものおもひ　胡故
きのふの事を三味線にひく　惟然
いり口のめつたに多き門徒てら　這萃
なしまぬうちはつなく庭鳥　朴吹
こつそりと散て仕廻し花の跡　曲翠
むく／＼あくる芝のかけろふ　昌房

歌仙満座訃音之吟

肩うちし手こゝろに泣こたつ哉　美濃大垣 竹戸
此悔[イ]や臍の緒切てけさの霜　荆口
冬の蝶存[シ]きられぬわかれかな　斜嶺
寒牡丹榕に添るなけき哉　文鳥
燭消て闇に成けり冬こもり　怒風
蓑むしも木に離れたる落葉哉　残香

あら土の墓もはかなや霜はしら　胡風
草鞋の跡なつかしや勢田の霜　黄逸
冬こもり飯にうへたるたふとさよ　朱迪
文あけて氷る涙や人の透　里東
泣入て加減の違ふ寒さかな　野径
雪霙いつをなみたのとめところ　蘇葉
蓮の葉の枯れて甲斐なき泪哉　支幽
請る手に俤見へよ墓の霜　竹官
木からしに便りも遠き手むけ哉　裾道
切石をなてゝ泣けり今朝の雪　尼 教清
十方なき泪や枯るゝ柳かけ　柯山
月代をそらても寒し塚の前　及肩
今朝ははや霜や置そふ頭陀袋　鳩枝

霜月十六日芭蕉翁三十五日
於義仲寺興行

墓近く蓮の香を持ツ氷かな　桃隣
たてゝはあくる冬の柴の戸　智月
跡先に寐に来る鳩の待つれて　正秀
四句目より略之

寺町二条上ル丁
井筒屋庄兵衛板

（注）底本は、この句の前に次ページ上段十八行目より下段十六行目までの一丁が乱丁逆綴になっている。

句兄弟(くきょうだい)

句兄弟　上

（題簽）

句兄弟序

点ハ転ナリ転ハ反なりと註セしによりて案スルに句こと
の類作新古混雑してひとりこと〳〵くには諳(ソラン)しかたし然
るを一句のはしりにて聞なし作者深厚の吟慮を放狂し
て一点の付墨をあやまる事自他の悔旦暮にありされはむ
かし今の高芳の秀逸なる句品三十九人を手あひにしてお
かしくつくりやはらけおほやけの歌のさま才ある詩の式
にまかせて私に反転の一体をたてゝ物めかしく註解を加
へ侍る也此後俳諧の転換その流俗に随ひ侍らは一向壁に
馬なる句体なりとも聊の逃道を工夫して等類の難をのか
れぬへし尤古式のゆるしのことくに貴人少人女子辺鄙の
作に於ては切字ひとつの違にして当座の逸興ならしめん
は祝鮀か佞なかるへし此道の譬喩方便なれは諸作一智也
諸句兄弟也とちなめるまゝ遠慮なく書の名とし侍る

元禄七甲戌稔寿星初五　　晋其角

一番

兄　　貞室

これは〳〵とはかり花のよし野山

弟　　晋子

これは〳〵とはかりちるも桜かな

花満山の景を上五字に云とりて芳野山と決定したる所
作者の自然ノ地を得たるにこそ誹諧の須弥山なるへし花
のよし野と云に対句してちるもさくらといへる和句也
是は〳〵とはかりの云下しを反転せしもの也
難云吉野山一句の本体として上五字七字まては只あり
の詞なるへしちるもと桜のうへにうつしたる本意逃句
なるへし　答云句は其興を聞得へき也景情のはなるゝ
といふ事雑談集に論せることく也近くいはゝ先年

明星やさくら定めぬ山かつらと云し句当座にはさのみ興感せさりしを芭蕉翁吉野山にあそへる時山中の美景にけをされ古き歌ともの信を感せし叙(ツイテ)明星の山かつらに明残るけしき此句のうらやましく覚えたるよし文通に申されける是をみつからの面目になしておもふ時は満山の花にかよひぬへき一句の含はたしか也尤花の前後を云時は聊も句心あやまるへからす沈佺期か句を盗む癖とは等類をのかるゝ違有

二番

兄　　拾穂軒

地主からは木の間の花の都かな

弟

京中へ地主のさくらや飛胡蝶

老師名高き句也反転して市中の蝶を清水の落花と見なしたる也木の間と云字にたてふさがりて侍るを漸こてふに成て花の間を飛出たるやうに覚ゆ先後の句立たしか也飛花の蝶に似たる蛺蝶飛来過レ墻去ヲ却テ疑フ春色ノ在ニ隣(リト)家ニ作例多く聞ゆれとも予京の一字を心かけたれは尤難有まし

三番

兄　　素堂

又是より青葉一見となりけり

弟

亦是より木屋一見のつゝし哉

遊子行ク残月ニとかや花におほれし人の春の名残を惜みけん心をうたひける也予か句うたひにたよらずして青葉一見といふ花のかへるさをとゝめしゆへ全く等類ならすとなりけりとは素堂か平生口癖なれは是を格には取かたしつゝしと云題にて夏にうつらふ花の名残も有へし此句意味はかはる事なし下五字の云かへにて強弱の体をわかつもの也

四番

兄　　粛山

祐成か袖引のはせむら千鳥

弟

むらちとり其夜は寒し虎か許(モト)

袖引のはせとは一衣洗濯の時なるへしさすかに高名の士なりけれは破(タル)縕袍を着て狐貉に恥さる勇を思ひ合たるにや村千鳥その友としてかの志をしのはれし一句に感解ありよりて其夜は虎かもとにしほたれし袖を引のはしつらんとおもひよりて冬の夜の川風寒みのうたにて追反せし也是は各句合意の体也兄の句に寒しといふ字のふくみて聞え侍れはこなたの句弟なるへし

五番

兄　　信徳

雨の日や門提て行かきつはた

弟

簾まけ雨に提来る杜若

杜若雨潤の一体時節いさきよく云立たれとも難していはゝ雪中の梅花をかさし闇夜につゝしを折(ル)流俗の句中にはらまれて一句の外に作うすしされは向上の句に於ては題と定めすして其心明らかなるたくひ多かる中に杜若景物の一品なれは異花よりも興を取ぬへくや雨の杜若とおもひ寄たらんは句作のこなしにて手ぎは有へき所也老功の作者を譏(ソシ)りていふにはあらす門さけてゆくと見送りし花の我宿に入来る心に反工して花の雫もそのまゝに色をも香をも厭(ヒ)けるさまをすたれまけと下知したるなり往と来との二字にして力をわかちたると判談せん人本意なかるへし問答の句なるゆへつのりて枳棘の愚意を申侍る

六番

兄　　曲水

三絃やよし野ゝ山をさ月雨

弟

三味線や寝衣(ネマキ)にくるむ五月雨

さみたれの長閑にくらすとも読けるにきのふもけふも降こめて同し空なるもとかしさよ殊に引習と聞ゆるか同ししらへのほち〳〵と軒の玉水にかよひたらは物うからましと思ひよせたる也それを寝巻にといふに品かはりて閨怨の音にかよはせ侍るゆへとへかし人の五月雨の比と思ひなして何となく淋しき程をつくつくと思

ふ心もこもり侍り倦(ウム)と忍(フ)とのたかひ決せり

七番

兄

禅寺の華に心や浮蔵主

弟

客数奇や心を花にうき蔵主

ざれ句にたてし詞なから古来は下へしたしむ五字を今
さら只ありに云流したれは花見る庭の乱舞をよせたり
毛吹時代の老僧なと当座所望ならは花やかに耳立たら
ん句よりは得興の専をとるへき也

八番

兄　露沾

陰惜き師走の菊の齢かな

弟

秋にあへ師走の菊も麦畠

中七字珍重(モテハヤ)すへし歳の昏の惜まるゝ詠より分て霜雪の
凋むに後るゝ対をいはゝはつかに萌出し麦の秋後の菊
をよそになしけん姿と句とたゝちに立リ愛菊の情かは
らすして光陰を惜むと待とにわかれたる也

九番

兄　岩翁

達磨忌や朝日に僧の影法師

弟

達磨忌や自剃にさぐる水鏡

論(スルコト)ニ俳句(ヲ)如(シ)レ論(カ)レ禅(ヲ)日の影と水影差別なし空房独
了(ケツ)の似て似ぬ影二句一物なし

十番

兄

干瓜や汐のひかたの捨小舟

弟

ほし瓜やうつふけてほす蜑小船

此舟は古来棹頭の秀作にしてとにかくに云なすほと
等類の難非のかれかたく覚え侍れとも干潟の舟と詠た
る縁にすかりておもふにうつふけて干たるもまゝあり

兄の句をたてゝともにならへし舟の形容汐と云一字の
はたらきも反転せりみる人も弟ㇾ弟ヲとして懐ヒㇾ古ヲ吊フㇾ古
本意をとるへし

十一番

兄　　杉風

屋形舟上野ゝ桜散にけり

弟

屋形舟花見ぬ女中出にけり

暮春の至ㇾ情とまらぬは桜はかりを色に出てと云しによ
りて風光いたつらにうつり行人のあらましなるへし浅
艸上野と向対して渭ㇾ北春ㇾ天ノ樹江東日暮ノ雲といふ句
をかりて花見ぬ女中ちりなん後に(そカ)悔しからましとおも
ひやれは此舟にうつしてくれ行春をなくさめけん山水
逍ㇾ遙の人興ㇾ趣句外にあり

十二番

兄　　杜国

馬はぬれ牛は夕日の北しくれ

弟

柴はぬれて牛はさなから時雨哉

此二句はからびを云とりし迄にて類案多く聞え侍れと
も馬とく進み牛緩ク歩みて斜陽のこれりと見し風景と柴
のしつくのおもく成て牛はさなから時雨をしらせたる
あゆみそとけしきつき侍る也句の面にて兄弟たしか成
へし

十三番

兄　　神叔

うつみ火に土器ふせし匂かな

弟

埋火やかはらけかけていちりやき

兄(カミ)は炉辺の閑を添て侘ねの友をもてなしたる冬こもり
のありさま言外弟(ツイ)ていへるいぢり焼いりものしてと書
けん古人の興を今の俗言に取なして匂哉といふ句のに
ほひをわかちぬ柴火三盃のたのしみうらやむ所に品か
はれり冬夜即事の反転也

十四番

兄　　　　古梵
この村のあはう隙なき鳴子哉
弟
あはうとは鹿もみるらんなるこ曳

窮ㇾ民をあはれむ田家の体殊さらに下ㇾ愚のうつらさる心を用ひてひまなきなるこの音きくに哀ふかし秋はてしよりとふ人もなしと悲しまれけん憫ㇾ農の至ㇾ誠なれは予そのかなしひを起して鳥獣にさえ性を一ツにうつしけるものそと憐みたる也列子に鷗ノ心をしると書たる事実をとり一句の先後をわかちぬへし

十五番
兄　　　　許六
人先に医師の袷や衣更
弟
法体も島の下着や衣かえ

二句ともに目たつへきものに思ひよせたる也自句節小袖なとゝも云るへくやと勘弁せしかとも発句のつりあひ衣かへといはては花なし法体と医師とのはれかましさは一意なれとも興ことにかはりあるゆへわさと一ㇾ列にたてたり

十六番
兄　　　　去来
浅茅生やまくり手下すむしの声
弟
まくり手に松虫さかす浅茅哉

野辺までも尋て聞し虫のねの
　あさちか庭にうらめしきかな　寂蓮
近く虫のねを聞て秋情をそふる心を一句の上に云流してまくり手したる人凋ㇾ颯の気にこたへたる体遠近わかてり折にふれたるけしきなからも各句各意なるへし

十七番
兄　　　　介我
海棠のはなは満たり夜の月
弟
海棠の花のうつゝやおほろ月

睡れると云字を満ると云字に通はして満月のたらぬ事なき春興なり然共一句のこは〳〵しき所あれは自句にとかめて優艶に句のふりを分たり趣向もふりも一ツなれともみちたる夜のと云る所をうつゝや朧と返して吟する時は霞や煙花や雪と立のびたる境に分別すへし先達のはつかなる詞に吟心をいたましめ給ふも会精さのことくや

十八番

兄　立圃

花ひとつたもとにすかる童かな

弟

花ひとつ袂に御乳の手出し哉

至愛の心より作者の功をあらはし一ツたもといふ詞のやすらかなる所又なき妙句なれは都鄙にわたりて句意曇なしされは当時云かけの発句を珍賞せすしていたつらに古版の書に埋もれ侍るを予歎美して古人の深察を再転せりお乳の人の手出しはまた物いはぬ童なれは袂にすかる童子とは年をわかちて類句の難を逃れぬへしたかうなをにきりもちて雫もよゝと喰ぬらしぬと書けんあと塵見つけたるうなひのさまに思ひやりせは成長をうらやむお乳の心もはかりしらせましや同惜（クム）少年春千載不易の句を手本にして転換すなれは評品つまひらか也

十九番

兄　亀翁

寝た人を跡から起す衾かな

弟

酒くさき蒲団剝（ハキ）けり霜の声

冬解百日を二百句に両吟せし時夜々対酌の即興也酎（耐カ）寒のこゝろわかち侍るゆへあるしと客と旨趣かはり侍る

廿番

兄　赤右衛門妻

啼にさへ笑はゝいかにほとゝきす

弟

さもこそは木兎笑へほとゝきす

人情を仮て笑へといへる作意女の質なり此句はをのがね待宵の名高き程にひゝきて人口にあるゆへさらに類作の聞えもなく一人一句にとゝまり侍るはうらやましく覚なから心のとゝきかねしに近曾豁穴といふ所に止宿してさ月やみのおほつかなきに鵜鳥の鳴を聞ぬねられすして

ぬえなくや此暁のほとゝきす

と云て明かたに鳴つる梢を見に出たれは朝しめり肌にとをりて霧雨ほのくらき樫の木のうらにみゝつくのとまりて日影をにくむさま成を色〳〵の鳥の笑ひ寄に時鳥のましりて飛ちりけるをおかしく思はれて笑はゝいかにと云るをふとおもひ出侍りてかたの一ツにもと取合たり蜀の魂といへは誠にすごく啼血とつくりしことはりにそむけて郭公笑ふといへるは私なるへきかされと和歌の道のたすけとして鶯の花ふみちらす細脛をたてゝかの妻に笑へるを見しと答しを興也たけたかき大長刀にかけてともよめりけれは是等は雑体の一ツに句に対して兄弟の論には及まし

廿一番

兄　彫棠

つたなさや牛といはれて相撲取

弟

上手ほと名も優美也すまひ取

句の裏へかけたりこれも句すまふの一手なるへし牛といふ字にかけて上手も立ならふへくや

廿二番

兄　宗因

人さらにけにや六月ほとゝきす

弟

蕣に鳴や六月ほとゝきす

杜甫に一字血脈の格あり尤意味ある字より句をたてゝその字詩中をめくるゆへに名付たる也その格よりして一句血脈の格をたて人さらにといふ懐感の老衰を古声に指あてたる也あさかほのはかなき折にふれて卯花橘の香めつらしき初声のいつしかに聞ふるされて老とな

りぬるを取合て老‐愁の深思をとふらひぬれは新古の差別なく一向に俳諧の血脈体と申へくや
若き事なしといふ一意の句中をめくりぬるにて聞なすへし
はかなき音を一意にたてゝ血脈流連すへくや

廿三番
兄　東順
夏しらぬ雪やしろりと不二の山
弟
雪に入月やしろりとふしの山

亡父三十年前の句也風俗うつらされとも古徳をしたふ心よりしてあなかち句論に及はす死‐期迄もすきけん道反故より見出せしまゝ此書のかたみにかき入て俤の山にむかへる心地し侍る竹とりの翁は子をなけきて薬(クスリ)をやく予は親にわかれて薬箱より此句の出すへしとはしらさりしに思ひの外の追善也

廿四番
兄　仙化
つくつくと画図の兎や冬の月
弟
つくつくと壁のうさきや冬籠

ことはらすして決‐断せり冬こもりはいひ過たれと画図の兎を壁と云字にへたてたれは閑居のたよりも宜しくて対句す又兎の鼻や冬こもりと云たらはうつくまりたる人のさまにも成へけれともかけり過たる作意ゆへ本意をうしなふ興をとらんとて曲‐流に落る句の出くるものなれは作者よくよく沈吟すへし

廿五番
兄　僧路通
大仏うしろに花の盛かな
弟
大仏膝うつむらむ花の雪

東叡山の遊吟也池を左に見て致景詞なき所を後と心付たる花の莚の敷場宜しくや山守のちりしく花を暫時もためす掃あつめたるに梢の外にちりくるぞ入相のひゝ

きも名残多かるへしと前後にたてり

廿六番

兄　蟻道

弥兵衛とはしれと哀や鉢敲

弟

伊勢島を似せぬそ誠鉢たゝき

一とせ都にて冬夜を咄し明しつるに暁と聞えし瓢箪の
音からひて面白く諷ひけるを酒の肴にもと口つきける
当座に去来か

箒こせまねてもみせん鉢たゝき

と即興しけるそのゝち此句聞え侍る也しれと哀やと云
とりしこそねぬ暁の思ひふかし自句寒夜行の信を起
してかれが一派の音声のみにて物に似よらすむかしめ
きたれは今めきたる句作りに心うつりすなと俳諧のひ
さごを鳴ラして邪路をしめし句を求る人の感を分たり

廿七番

兄　越人

ちる時の心安さよ罌子の花

弟

ちり際は風もたのますけしの花

尋常の詞によりて中七字に風俗を立たるは荷兮越人等
か好む所の手癖也是は別ル僧ニといふ前書有ゆへ一句の
たより手くせなからも面白し風もたのますといへは花
のもろきすかた自然ならんか云かへて兄を難スルには
あらす此花の念なくちりぬるをうらやむと見る所のあ
まりもろく覚ゆるとのわかち也

廿八番

兄　玄札

泥坊の中を出るや蓮葉者

弟

泥坊の影さへ水の蓮かな

はすはもの蓮葉笠をかつきたる姿のみくるしく目立た
るより云るか古来より蓮の字をかけり淤泥の濁れる中
に花こそはそますと力を入て一句の詮を云立たり古代
の作者は句のおもてをかさらす近代は句のふりをたし

なむかはりあれと心の取やうは一ツなれは泥坊といふ
五文字の今とても用らるへきにこそ古人の息を捨へか
らすまた竜田山にかけて白波の紅葉を折しなとゝ云ん
方には口づきやすし平懐体は尤道の麁抹に聞え侍れ
はいはれましき物を自由に句作せんと工案はけむへし
泥坊や花の陰にてふまれたり
当時の句肌はかくあらまほし

廿九番
兄　　　　　　　　　　女 秋色
舟梁の露はもろねのなみた哉
弟
船はりを枕の露や閨の外

牛島といふわたりに捨人ありそのかたを問て日くれて
帰る時ちいさき舟にのる川くまのさひしきに月すみの
ほり水の面もくもりなきにおほつかなくこかれ行まゝ
しはしもまとろみてといふに船頭の枕にとおしへぬる
かたによりて打臥たれはうきふねのかたしく袖をおも
ひやる心地しつるを云る也それを閨の外と云かへぬる
はひとりは臥シ独はふさで枕のつゆもさしむかひたる泪
そかしとこたへし也返しとある歌の筋なるへし

三十番
兄　　　　　　　　　　春澄
草刈や牛より落ておみなへし
弟
牛にのる娵御（ヨメコ）落すな女郎花

遍昭の馬を引かえてさか野の草の名にたてしも京流布
の一作なから女と云字の所着はなれすや新古に論を立
ていはゝなにとなく京田舎の体になして花の名はかり
そめによせぬれは落るといふ字もかこつけなるへし是
等は俳諧の推原（スモトラ）也

三十一番
兄　　　　　　　　　　来山
早乙女やよこれぬものは声はかり
弟
さをとめや汚れぬ顔は朝はかり

兄　うくひすは田舎のたにのすなれとも
　たみたる声はなかぬなりけり
弟　今朝たにも夜をこめてとれ芹川や
　竹田の早苗ふしたちにけり

三十二番

兄　　　　　　　　　　柴雫

傘持は大根ねらふ子日哉

弟

傘持はつくはひ馴し菜摘哉

屏風の絵をよまれし姿にも春の野の子日の体は興うるはしく聞えぬるに傘持たる丁（ヨホロ）のさまは今更俳諧より気付ておかしくおもひ合たるもの哉と是を都近き卜（シメ）野になして大根蕪も所得たりねらふといふ字にて面白く立のひ侍る

若菜つむ大宮人のかりころも
　ひもゆふくれの色やみゆらん

君か野遊の酒たうべけるにつくはひ馴ていと興あり下部のさかなには大根なと宜し

三十三番

兄　　　　　　　　　　尺艸

須磨の山句に力なしかんこ鳥

弟

すまの山うしろに何を諫鼓鳥

都難波の春秋を遊ひて須磨明石へも吟ひける日記より見出し侍る也無（レ）伴独（シテ）相（リ）求伐（レハ）木丁々の幽景をそなへてさらにかすかなる鳥の声其所に遊ふに似たり浦と云へきを山といへる其場ならすしては得かたき字也これらの字心をつけは発句の馴熟はしらるへき也心所（レ）不（レ）尽（ニシテ）有（ルヲ）余趣とすとは申せとも句にさへ力なしと及かたき風情を起し浦よりは半道はかりも行つらんうしろに何をとゝかめたれは耳に聞目にうつすの境自然をしるへし

三十四番

兄　　　　　　　　　　西鶴

鯛は花は見ぬ里もありけふの月

弟

鯛は花は江戸に生れてけふの月

花なき里に心よりて二千里の外の心にかよひ一句の首尾殊ニ類なし中七字力をかえて啓栄(栄啓)期か楽に寄たりされは難波江に生れて住よしのくまなき月をめで前の魚のあさらけきを釣せて写ㇾ景ヲ嘆ㇾ時ヲのおもひ感ㇾ今ヲ懐ㇾ古ヲ

末〳〵二年浮世の月を見過たり　鶴

と云置けん折にふれては顔なつかし今は故人の心に成ぬ

三十五番

兄　宇白

ほとゝきす一番鶏のうたひけり

弟

それよりして夜明烏や蜀魂

短夜の程なきを恨みてなく一声に明るしのゝめといふ帯にすがりし也此形(カタ)は郭公の手をはなれねとも題一色の賞物なれは縦(タテ)横をわかち侍るには俳諧より案し入事は得かたし折ふしの物にふれたる心はかりもやさしきかたに見ゆるすへくや

郭公啼〳〵飛そいそかはし　蕉

若鳥やあやなき音にも時鳥　角

此体は俳諧よりおもひ入たる也もし是等の格法を得道せん人は縦横と混雑したりとも句法にそむくへからす縦(タテ)は　花〳〵時鳥〳〵月〳〵雪〳〵柳〳〵桜の折にふれて詩歌連俳ともに通用の本題也　横は万歳〳〵やふ入の春めく事より初めて火燵〳〵餅つき〳〵煤払〳〵鬼うつ豆の数〳〵なる俳諧題をさしていふなれは　縦の題には古詩古歌の本意をとり連歌の式例を守りて文章の力をかり私の詞なく一句の風流を専一にすへし横の題にては洒落にもいかにも我思ふ事を自由に云とるへしひとつ〳〵には論しかたし縦ぞと心得て本歌を作なくとり時鳥の発句せしなどゝあて仕舞なる案しやうは無念也句意に縦横を教んためはづかにおもひよりたる迄也みつから人の師にならんとにはあらす古人を師として鏡に向ふ

三十六番

兄　　望一

風まつはきのふをきりの一葉哉

弟

井の柳きのふを桐の一葉哉

風一声の秋にかよひてきのふを限といへる空の色目にみぬ望一か作意にて驚かし侍るにそのあたりの柳までもさそひてちれる風の力は昨日とけふのかはりあり中七字の云かけを結句幽玄におもひて取合たる五文字也こゝに連俳をわかちていはゝ

風まちしきのふの桐の一葉哉

といはゝ正に連歌也自句其心を杆格して句面にかゝはらす

井の柳きのふは桐の一は哉

とすれは句の筋もまからねとをの字を目あてにして兄弟の句立を分たり一字の妙は趣の微を含ムもの也とかや灯火の影をとるがことしてにはの取やうすべて同し

三十七番

兄　　僧吟市

丸合羽はらはぬ雪や不二の山

弟

青漆を雪の裾野や丸合羽

古代に丸合羽雪打はらふ袖もなしといふ形によりて中七字にはたらき見えたり手をつめたる句形なれとも続腰の格ともいふへくや

三十八番

兄　　轍士

風かほれはしりの下の石畳

弟

冷酒やはしりの下の石たゝみ

一句の涼味をたつぬるに人皆苦炎熱我愛夏日長薫風自南来殿閣生微涼東坡を百世の師として云る也空にあふき地にはらはひ半時も絶かたき炎暑のさまさなからに思ひ合てともに起臥せし事迄なつかしく覚るにとひかはせし入集の願も頼もしく甕を撫て辛吟をなくさむる返書に及ひぬ蓼も根なから青柚もあり

小室をはなれぬ俳観の人石上に詩を題して緑苔を
払ふといふたのしみをわすれす

三十九番

兄　　　　　　　　　　晋子

声かれて猿の歯白し岑の月

弟　　　　　　　　　　芭蕉

塩鯛の歯茎も寒し魚の店

是こそ冬の月といふへきに山猿叫シテ山月落と作りなせ
る物すごき巴峡の猿によせて岑の月とは申たるなり
沾ホス衣ヲ声と作りし詩の余情ともいふへくや此句感心の
よしにて塩鯛の歯のむき出たるも冷しくやおもひよせ
られけん衰零の形にたとへなして老の果年のくれとも
置れぬへき五文字を魚の店と置れたるに活語の妙をし
れり其幽深玄遠に達せる所余はなそらへてしるへし此
句は猿の歯と申せしに合せられたるにはあらす只かた
はらに侍る人海士の歯の白きはいかに猫の歯の冷しく
てなとゝ似て似ぬ思ひよりの発句には成ましき事とも
に作意をかすめ侍るゆへ予か句先にして師の句弟と分ケ
其換骨をさとし侍る師説もさのことく聞え侍るゆへ自
評を用ひすして句法をのぶこの後反転して猫の歯白し
蚤の歯いやしなとゝ侍るとも発句の一体備へたらん人
には等類の難ゆめ〳〵あるへからす一句の骨を得て甘
き味を好ます意味風雅ともに皆をのれか煉磨なれは発
句一ツのぬしにならん人は尤兄弟のわかちをしるへし

句兄弟　中

（題簽）

句兄弟

章なくて誹諧のうたはれぬへきと物数奇せし雑談集によりて此一局をみたし作意より句を自由せまほしき望也されは諷の詞のみにかきらす古詩古歌経釈ともに縁になるへきつゝきをたやすく云とる事その句の功なるへしたとへは一丁の鼓につゝみより諷をはなれうたひより鼓によらすして自然に合意することくに文句にかゝはらすして一句にたつこと本意なるへくや

謡物　三十六番

飛蛍我も休むは苦しいか　粛山
かだみて魚は夜川涼しき　晋子
酒債すむ旦暮月もはや入て　彫棠
秋の花みな切溜の桶　山
淋しくも人や見るらん刀持　晋
後るゝ徒士はかつく袖笠　棠
掛造リ所は志賀の浦なれや　山
鐘も只鳴レ老の称ｰ名　晋
夜ルの人見はや此野に隠れ住　棠
うき時しもに恋のやめしほ　山
山の神妻戸をキリ丶とをし開ク　晋
立くる音や屋根の鶏　棠
煤掃に笠も薪もかたつけて　山
打身に酒をこれ薬也と　晋
佐屋廻リふりさけみれはいせの海　棠
四ツの鼓は月のおほろ夜　山
花の床三ｰ宝加持の行ひに　晋
父大臣も節の案内　棠
名うち見には恐ろしけれと角螺サヽイ　山
捨る身までも有馬への日記　晋
詫コト触かふりたる烏帽子引かつき　棠

野くれ山くれ夢の世中　山
子規わか十声も一声そ　晋
その母や子に公事の若やく　棠
数珠切て三悪道はのかるへし　山
酔て廬山の雪の明ほの　晋
さす袖も手忘れ多き舞の杖　棠
ふり分髪も肩の縫あげ　山
月の宿さらはと云て客僧は　晋
木数寄も無用紅葉より萩　棠
北野ての拗なくさみは大祭　山
心つかひそたのもしき伯母　晋
木賊の身をたゝおもへ所化の時　棠
花によるへの魚上る舟　山
やふ入の別れこそあれ待しはし　晋
あこき〳〵と春の酒盛　棠

癸酉八月廿九日の昼亡父
葬送の場にて崩心の悲を
懐きて四生の起別をしる
晋子

一鍬に蟬も木葉も脱哉
今そふ母も片袖の露
世の砧笑ふてうつや宵ならん
逃すましたる有明の酒
銭金と思はぬ気より涌出て
礼者の踏皮にかゝる雪汁
乗初もきたなく見ゆる駄賃馬
大名持の畑の若草
幾世ふる樫の木立の雑司谷
茶碗かよくは清水ならまし
山家では遊行も医師をなされけり
今産ム体に見えし猿の子
暁の声嵐まて古戦場
石地にふれは雪程な霜
草鎌に麩をこしらゆる谷の水
鮎の問屋の井関して置
きほひ来る神輿洗の人に人
露ふく風や公家の編笠
七夕に楊枝をかると云そめて

仕似せぬ恋をたそかれの月
花の後万日まいりすみた川
海苔を力に蕎麦切を噛
目から死耳から死てくれの春
国を覚えぬ傾城もあり
此鏡はらひもの也たか思ひ
世をそむくには邪魔な脇差
立込て僧房多き中に小柴垣
何に追れて井へ落る鶏
物すこきとのゐ所の男ぎれ
なみたに汚す平仲か顔
あつさりと書たる文はなまめかし
四度の仕着せ恨みてや着ル
鄙人を舅で候といひかねて
斎のうへにはみくるしき酔
風呂箒うしろにさして月を待
紋のある蚊もいつまての秋
芋の根にちいさき蛇の巻付て
殺生石のけふるむら雨

当分の関と見えたり菰ひさし
旅寐さためぬ麦飯を買フ
あさましき命の人や百の上
こゝは僧都の足すりの浜
秋かけて鯵の干物に鳥驚シ
牛のほこりをたゝく夕月
淋しさや二所権現の藪の色
むしろ着セ置餅つきの臼
仏壇は所化に任する花の時
二本榎かすむ入あひ
はらからうからのかれえぬ老見幼見朋友のことゝひ
かはしぬる哀愁のあまり紛らかしなんと申捨たる也
四十こゝのかに当ぬる日五十匂にみちたれは是を誦
経の後追善に備へ侍る也尤真行の体と申へし

芭蕉稿

東順伝

老人東順は榎氏にしてその祖父江州堅田の農士竹氏と称ス
榎氏といふものは晋子か母かたによるものならしことし
七十歳ふたとせの秋の月を病る枕のうへに詠めて花鳥の

情露を悲しめる思ひ限りの床のほとりまて神みたれす終にさらしなの句をかたみとして大乗妙典のうてなに隠る若かりし時医を学んて常の産とし本多何某のかうより俸銭を得て釜「魚甑「塵の愁すくなしされとも世路をいとひて名聞の衣をやぶり杖を折て業を捨ッ既に六十年のはしめなり市店を山居にかへて楽むところ筆をはなたす机をさらぬ事十とせあまり其筆のすさみ車にこほるゝかことし湖上に生れて東野に終りをとる是必大隠朝市の人なるへし

入月の跡は机の四「隅哉　晋子

行草体　三十四句

悲悲鳴

ちんばひく蝦にそふる涙かな

並はぬ鸛の猶のとか也

春荷とはとの旅人かいひつらむ

おなし肴を汁と焼物

乞食めと世間をしかるけふの月

ゆかたにかくす蕣のはな

気につれて小便濁る秋の昏

廿日か来るそ家主の顔

我恋は人の内儀をほめそやし

湯豆腐の湯のさめてつれなき

草枕冬の痳やうを習ひけり

伏見の医師の労〱として

幾昔たらぬ風「土「記のなつかしき

芋まて作る城中の畑

引度に引板と一度に叫ふ猿

温泉入の通る山間の月

花の宿ひよつと調市を拘へたり

薹にたちたるからし菜の味

春の日を十里はありく髻こき

一歩か薪にせはき艸庵

年のくれ手桶に餅を入て置

孫はひはずに息災な祖母

東国は一夜泊リもなさけあり

松のはなしを有明の月

吹出シは鹿もうたかふ笛の声

いとひやゝかに銀陶(カナイロ)の酒
病中を乳母の尼に逢たかり
琴の下樋に何を入けん
在所てもよそに聞なす泊瀬の鐘
市女かとゝは出茶屋也けり
水たまる車の跡に牛の沓
圦(ニウ)を突れて鼬飛付ク
花を見て鳥居に面を打ぬらん
傘ふりて畳む春雨

五月廿八日

浅茅か原にあそひて
晴間うれしく
露をみるに

ゆふたちや蝨ちいさき艸の原　晋子
松の間をぬけて涼しき　柴雫
荷の後(アト)にひとりつゝ負ふ遠干潟　介我
二ツあはせて蚫たばぬる　晋
寄付に刀の多き月の宿　雫

夜長さによふ旅の舞〳〵　我
けふの菊手本ほしかる娘の子　晋
包みをとけは饅頭の餡　雫
野につれて狐仏事を乞請し　我
和田恩智等か知行なりけん　晋
炭売のさしたる釖(ナタ)は剣にて　雫
毛をむしるにそ活(イキ)カヘル雉　我
今朝も籠(コ)に百か若菜はつまさりし　晋
別れてはいる花の海道　雫
薬箱初にもたせて恥かしき　我
見せ女房にたてし唐紙　晋
袖の月十年あとのもやう也　雫
片器に鰯を紅葉を折　我
此比の鶉聞せて茶の湯せん　晋
店衆の尼のまめにはたらく　雫
我かたへ泣(イ)て帰りし小船頭　我
藪より水のわかる島貫　晋
黄鷹の鳥にあまりて松に行　雫
頭巾燃して酔さますらん　我

結願の鉦うちならし明渡る　晋
　車をぬいて唧(ヲロ)す材木　雫
白無垢の裾をまくらぬ下谷道　我
　占ひかせばや神子の宿札　晋
結構な五器に単(ヒトエ)をかけて置　雫
　おほとあふらのしめる吹雨(フリ)　我
ウ
勾当の畳かそゆるさぐり足　晋
　匕はふるへて薬味こほさす　我
ものくふて酒のむ腹は飛鳥川　雫
　世間の景になりし我山　晋
針鉄(カネ)に花を殺すは花ならす　我
　あれを馳走に月の鶯　雫

六月八日饗燕

嘴数に早瀬と見ゆる鵜かけ哉　闇指
　散〱に居て遠ク灯を置　晋子
糸桜邪魔に成まてそよくらん　山蜂
　蝶のゆくゑを酔て押ユル　指

暮の月厩の額のおほろ也　晋
　御膳水とて外に汲せす　蜂
ウ
川の気をはなれて悲し佐夜の山　指
　あられの音の豆に聞ゆる　晋
日のさせは蠅の入来る冬座敷　蜂
　親の我子にはやさるゝ顔　指
行水をうめよ〱と水にして　晋
　碁会の勝を書付て置　蜂
一節を加賀商人の声おかし　指
　やりての下戸や宵の間の月　晋
面瘡(クサ)の秋にもなれはうらめしき　蜂
　すまふの刀帯てたはぬる　指
浜焼の目を所望する花の庭　晋
　費な日なりきさらきの雨　蜂
名
春からは通ひ手習さそはれん　指
　明るを待し半井の門　蜂
孝行を乞食の中にしられたり　晋
　小鯵を砂に斗る塩時　指
送られて送リ見かへす下涼み　蜂

四月の腹といはぬつれなさ　晋
煤掃やかもしをさかす袖の間　指
小屏風たつる樽の鑿口　蜂
町せはく階子をかけて踊見ル　晋
髻ほしたる月白の雲　指
梨蒲萄跡のきたなき水肴　蜂
扇の下へまはる蚰蜒　晋
爰うてやかしこさすれと老の骨　指
仮屋のつまる白山の温泉　蜂
静なる猪の鼾のやさしくて　晋
脱て間にあふ蓑の松明　指
大枝は花盗人もあくみけり　蜂
巣にからまりて落る鳶の子　晋

壬申十二月廿日即興

打よりて花入探れんめつはき　芭蕉
降こむまゝのはつ雪の宿　彫棠
目にたゝぬつまり肴を引かへて　晋子

羽織のよさに行を繕ふ　黄山
夕月の道ふさけ也かんな屑　桃隣
出代過て秋そせはしき　銀杏
网に成るきぬはひかゆる槌の音　棠
肩てやしなふ駕篙かきか親　晋
足もとに菜種は臥て芥の花　杏
茶を煮て廻す泊瀬の学寮　蕉
下張の反故見えすくまくらして　山
つめたい猫の身をひそめ来ル　隣
むつかしや襟にさし込娵の皃　棠
硯法度とこひやせかるゝ　晋
夜の雨窓のかたにてなくさまん　蕉
三寸の残をしたむ唇　隣
ま一ッと嘘をはやす朝の月　晋
らんときくとに遠サカル疫　棠
愚なる和尚も友を秋の庵　杏
高みに水を揚る箱戸樋　山
山鳥のわかるゝ比はしつか也　蕉
ねふりかゝる敷合歓の下闇　晋

かけむかひ機へる床のいとまなし　山
思はぬ舟に昼の汐待　杏
気色まで曹洞宗の寒かりに　隣
焦す畳にいたく手を焼　棠
見ぬふりの主人に恋をしられけり　晋
すかた半分かくす傘　蕉
珍らしき星は皎けてよるの月　棠
渡はしめの声ひくき雁　山
松茸を近江路からは沢山に　晋
そくさいな子は下〱に有　杏
老たるは御簾より外にかしこまり　蕉
花の名にくしとこか揚貴妃　棠
付さしを中てばはるゝ桃の色　山
こてふの影の跨く三絃　隣

六月廿四日興行
結ニ廬ヲ河-辺ニ
舟人の裸に笠や雲の峰　専吟
柳をさして川を飛蝉　晋子

百草の屑や花野にほこるらん　沾徳
柄を大事に月の夜すから　吟
躍子の肩をそろへて教えけり　晋
金具は土をてらす浜縁　徳
物いはぬ手代もならふ家の風　吟
匂を明る二の汁の蓋　晋
冬枯も圻(ワカ)ラぬ愛宕青松寺　徳
星おもしろき闇の霤(クモイキ)　吟
着せらるゝきぬの襟かぐ別れ哉　晋
見て投かへす用の切紙　徳
打こしに肴をはさむ川簀垣　吟
神は相模にこほ〱と鳴ル　晋
下に取馬のみならす我老て　徳
しやむろを外へ夜着の畳目　吟
食のなき志賀の山越月も雪　晋
春日をかする芝の水影　徳
雉ねらふ箭先の楯(タテ)に鳴烏　晋
鞍箱ひとつ見込わひしき　吟
近つきは乳母はかりなる傀-儡-師　徳

将棋にくらす夏の拝殿　晋
焼ヶた木の垣の便に茂りそひ　吟
荷を上られて鼠出る舟　徳
僧は皆耳を寒かる山下風　晋
粉河の鞴(タヽラ)霜けふる也　吟
慢かちに卵の目利笑ふらん　徳
酔へは力のつよき傾城　晋
あひみんと階子拭(フク)也月の影　吟
消てきりこの出来はえもなし　徳
帷子にやゝとこらゆる秋の暮　吟
来る餞(ハナムケ)もみな同しもの　徳
初鰹壱両まては買(フ)気也　晋
世にはかくるゝ木置場の家　吟
あのやうな女に成て花の陰　徳
山吹折て三人の恋　晋

三子草菴をとはれける日
おもはぬ雨に枕とり出て
湖月

雨の脚日半(ハシタ)なれや夏座敷
手桶の蓋に一枚の荷　素イ
最椿(イサハヤ)に八重の木槿をうつろひて　紫紅
秋よりしめる京昆布の色　晋子
籾摺も早乙女ならし月の庭　イ
棹(ツルヘ)の石の落る霜の夜　月
此銭を捨た心かおそろしき　晋
焼ヶ山越へは身をし白雲　紅
印籠の薬はけしく涌かへり　月
押たまるにも恋のある顔　イ
一時は揚屋の勝手しつまりて　紅
股立とるに紙をくひさく　晋
中橋といひし別れを鈴の森　イ
霧の匂ひや茶にはいる酒　月
秋の夜も枕はつれて人を踏　晋
鴫の目くらき岡の月影　紅
鯉残る甕の跡の花柳　イ
芝生はすみれ小坊主の沓　月
(名)春雨や渡り碁石のうるはしき　紅

下着をとへは百両の脱(カラ)　晋
半切の文の長さを飛ンてよむ　月
たま〳〵醒て誤ッた面(ツラ)　イ
さあ〳〵と追待舟の乗いそき　紅
一向宗の南无阿弥陀仏　晋
借素袍我におかしき姿にて　イ
諸役御免の樗さく門　月
切レ鍛冶と明に聞ゆる郭公　晋
様子をみれは妻帯の衆徒　紅
十八がすまふに色をふくむ也　月
木曾木つかゆる月の川音　イ
百姓の泣ごといはぬ年の秋　晋
お行次第の人の世中　紅

雨はれたれは宿いそきして
再会ともいはす卅二句
にして退座

七月廿五日
於深川栄寿院

つくり木の糸をゆるすや秋の風　嵐雪
雨におはれて野から来る虫　神叔
初鮭やかねて荷前ノ(サキ)の宿ならん　介我
月に舟あり船頭はなし　晋子
忘れ水捨て蘇鉄の塩を出す　叔
辷つたあとを又すべる也　雪
どこやらか墨そめならぬ眤(マナコサシ)　晋
盞かへてはづす場をしる　我
つく〳〵と女中はかりもさりけなし　雪
遺精おとろく暁のゆめ　叔
巻蕈の拳(コブシ)さたまる闇の音　我
隣は男猫此方は妻　晋
はる風に明衣は氷る袖の角(カト)　叔
縁づく後家のこゝに青柳　雪
花の友聖天町やしのふらん　晋
浄瑠璃よくて幕を通さす　我
月雪に寸切(サン)リはやす寮住居　雪
団栗かれて遊山絶たり　叔

二三俵引抜蕎麦のたのもしき　我
　馬に聞れて逃ル盗人　晋
大音の川幅こゆる向ふ風　叔
　一小屋焚(タイ)て仕まふ杣方　雪
此景をようは見たてゝ深山寺　晋
　めのと用意の骨をとり出す　我
しとやかさ手さはりからが綸子にて　雪
　柴垣うつも老の酔狂　叔
そつくりと為替(カハセ)とゝのふ大晦日　我
　とめはをしらぬこひもする哉　晋
恥しや湯女に泣れてあはれ也　叔
　狂詩の体か捨人の月　雪
露の音瓢箪(簞)の屐(ケタ)からびたり　晋
　田に寐た鹿はぬれてうつくし　我
心敬の夜話しら〳〵と明にけり　雪
　赤葉の芹に寒さ覚ゆる　叔
下市のとまり蹴立る花盛　我
　駒の祈禱の鈴の春風　晋

八月一日とみのまふけ
　ことして即事廿二句

初鮭は隠居も客といはれけり　寒玉
　猿戸明れは夕庭の菊　桂花
四ツ迄と月に手船を呼よせて　紫紅
　鵜のとまり木をかけに算ユル　秋色
笹の葉の眠かるやうに雨深し　晋子
　功者な碁ほと咄なき友　玉
手をあてゝ外から見たる酒の間　花
　猶裁(タチ)にくし日うつりの紅(モミ)　晋
四十より髪のつやなき玉櫛笥　色
　まきらはしきは爵と恋やみ　紅
こり〳〵と氷柱(ツラヽ)は舌に消にけり　晋
　冬偈をとへはあたゝかな体　花
舟積を状にしらする油樽　玉
　尾張も伊勢も十分の作　晋
山柿の門にあそはんけふの月　色
　霧にきはつく一対の無垢　玉

折花をかはくたはこに包み添　花
四条で買た此春の杖　色
彼岸中ふるは泪かふられたり　晋
娵に笑のたえぬ宴(サヽコト)　紅
米搗の古郷遠くこひもなし　色
渋紙ふまん文をほしかる　花

句兄弟　下

(題簽)

随縁紀行

甲戌仲秋

木母寺に歌の会ありけふの月　晋子

三春の花一夜の月風光うつりゆけとも友かはらすことしは石山寺に詣て湖水を見んいや嵯峨の法輪にとまりて広沢をなと〻とり〳〵心定めかね遠きおもひをつくして出たつ日をいそきけるに思の外の風雨に旅行をさえられて今さらに身をやるかたなく人々一夜の逍遥をうらやみ侍るなり

九月六日とかくして江戸をたつ誹連これかれ送り申され候縮柳の吟あり

首途をみよ千秋の秋のかせ　岩翁

幾人の送りていさむ初紅葉　亀翁
　六郷のわたりにて
草まくら稲干縄のしつく哉　横几
　箱根峠にて
杉の上に馬そみえ來る村艶　晋子
　秋の空尾上の杉をはなれたりといふ吟こゝにも
　かなふへし
三島にて旅行の重陽を
門酒や馬屋のわきの菊を折　晋子
朝影や駕籠て礼するきくの酒　岩翁
きく酒や畠の中の小家まて　尺草
間鍋に所のきくや旅屋形　亀翁
　原回頭
朝霧や空飛フ夢を富士下風　晋子
富士は常雪半面や秋の色　キ翁
　富士川渡航
不尽や笠赤蜻蜓のわたる空　横几
　清見
あかつきの塩やき遠し荻の色　岩翁

ほと鳴の渡るも淋しきよみかた　尺草
　しつはた
紙子屋に冬はと問し山路哉　尺艸
　うつの山
袖にたく香炉や消ん蔦の道　キ翁
小手袖の襦半うつ也つたの宿　横几
御所柿をしらて過けりうつの山　尺艸
うらかれや馬も餅くふうつの山　晋子
　佐夜中山
草鞋に椎はさまりて後れけり　尺艸
赤松はことにつれなし山の色　キ翁
道役に紅葉はく也小夜の山　晋子
　十二日かけ河より秋葉山へ入
　　森ヨリ三くら　犬居　秋葉
袖すりや息杖てきる松の蔦　松翁
あさけしき鹿追ふ小屋に煙哉　キ翁
蛛の巣に呉柿かゝる山路かな　尺艸
合羽着て鹿にすかるや秋葉道　晋子
四十八瀬といふは名のみ也わたらはかそへてといふ

に八十余瀬也

瀬の数やあの谷此谷の露時雨　尺艸

せきれいや垢離場へ下る岩伝　横几

秋葉禅定下山の時

木々の露いとへ御影の上包み　キ翁

かし鳥に杖を投たるふもと哉　晋子

雲名川より天竜へ下るに

山風や露打はらふうんな川　岩翁

水鏡渦巻かたやむら紅葉　横几

大ィニ切所といふまことに山高シテ鳥不レ巣クハ水清魚不レ住

しかのねや耳にもいらぬ七ツ釜　松翁

二俣川　椎河脇の御社ハ尤切所也

打櫂に鱸はねたり淵の色　晋子

淵や瀬やつら打波に凄立　キ翁

かじま　舟にうつくまりて

我笠や膝にきせたる露時雨　尺草

十三夜　浜松にて

内玄関家老の客や十三夜　キ翁

のちの月魚屋尋ねん宿はつれ　松翁

十三夜出馬の鈴やなみの音　岩翁

後の月味方か原を一目かな　尺艸

いつれも古郷をかたるに

後の月松やさなから江戸の庭　晋子

熱田奉幣

芭蕉翁甲子の記行には社大ィに破れ築地はたふれ草むらにかくるかしこに縄をはりて小社の跡をしるし爰に石をすへてその神と名乗ルよもきしのふ心のまゝに生たるそ目出たきよりも心とまりてとかゝれたり興廃時あり甲戌の今は造栄あらたに又めてたし

更〳〵と禰宜の軒や杉の月　晋子

鳥のねやあつたにいさむ今朝の月　キ翁

宮守か前帯おかし後夜の月　岩翁

津島牛頭天王

縁の稲弥五郎とのを守りかな　キ翁

十六日　くはなにて

此魚はけふの御斎(サイ)かいせのうみ　横几

大魚のこして流るゝ穂芦哉　尺艸
身にしむや蛤うりの朝の酒　キ翁

津の泊を出

伊勢道や往来の恩賤か秋　松翁
世の秋や女の旅も伊せこゝろ　キ翁
いせ路哉秋の日しらぬ気を童　尺艸

雲津川にて

花すゝき祭主の輿を送リけり　晋子

外宮　近く拝まれ給へは

日は晴て古殿は霧の鏡哉　同
新蘗の畚清めたり御白石　岩翁
わたらへの秋や穂をつむ子等館　尺艸
昬の色うそ寒し宮からす　亀翁
能(キ)時や御供いたゝくことし米　松翁

内宮　浮屠の属にたくへて心へたちたる五十鈴川より遙かに拝ス

身の秋や赤子もまいる神路山　晋子
また参る露の枝折や杉の札　横几

廿日　於福井藤兵衛大夫御師家

御神楽　謹上再拝

神の秋七十若しいもと神子　岩翁
四手の露油気はなしみこの髪　亀翁
秋ふかしみこの足とり鶴の声　尺艸
榊葉の露にかゝるや山廻り　横几
烏帽子ふる秋の調や小手つゝみ　松翁
太々や小判ならへて菊の花　晋子

廿一日　二見　朝熊

幾秋をへん汐垢離は歯の薬　岩翁
ひやゝかに汐こす道や石と岩　キ翁
岩の上に神風寒し花薄　晋子
汐こりや蜑の身を干す芋畠　横几
秋風や波を浴(アビ)たる一拝み　松翁
蜑の子に游(ヲヨキ)まけたり霧の海　尺屮

御師の家子あないにつく

浜荻に足ふみこまん酔心　岩翁
紅葉して朝熊の柘と云れけり　晋子
奥しれぬ坂の便や落葉の色　キ翁
風(サ)切に紅葉つむ也あさま山　横几

宮河の上に酒送リせらる

色かえぬ松に柳のわたし哉　岩翁

　此花を肴にめてゝと云れて

根を石に是は河原の野菊哉　亀翁

重箱に花なき時の野菊哉　晋子

角(ト)石を拾ひのこせし野菊哉　尺艸

　廿三日伊勢ヨリ長谷路へ出ぬ田丸ヨリ檜ノ牧迄重山嶮
　岨ヲ越ス風景時としてうつりかはる尤奇絶の地也

山畑の芋ほるあとに伏猪哉　晋子

渋柿のいつ迄枝の住ゐかな　キ翁

焼栗や灰吹たつる山下風　尺艸

こなし屋に子共等寒し稲莚　横几

かけわたす小屋別也新たはこ　キ翁

霜はれて糠やく畑のけふり哉　岩翁

川芎の香に流るゝや谷の水　晋子

一ツをはあくらかゝするかゝし哉　キ翁

　莫レ嗔(イカルコト)　野-店無ニ肴-核(コトヲ)　薄-酒堪レ沽(テウルニ)
　豆-莢肥(タリ)　と周南峰か句ヲ感す

足あぶる亭主にきけは新酒哉　晋子

馬夫の手に火を抓みけり秋の霜　尺艸

山つゝき日の出の虹や引板の綱　亀翁

　初瀬　三輪　在原寺

艶みる公家の子達そはつせ山　晋子

二もとの杉や根はかり葛の色　キ翁

はせ籠リ夜の錦やわかし酒　横几

此紅葉書残しけり長谷の絵図　尺艸

　大和柿とて主よりもてなす

泊瀬めに柿のしふさを忍ひけり　晋子

紅葉から初瀬の下(モ)やそはの花　松翁

　時にふれて興多し

(注)案内は女なりけり三輪の月　岩翁

むらしくれ三輪の近道尋けり　晋子

下馬札をみわの印や杉の月　松翁

秋の日の残るも深し三わの栄(ハエ)　尺草

神深き鳥居の袖や苔の色　キ翁

かたはかり月や井筒の松丸太　横几

僧ワキのしつかに向ふ薄哉　晋子

　春日四所の宮人達夜毎にとのゐして戌の刻を限りと

し侍る也

今幾日秋の夜詰を春日山　晋子
日は山に数千の灯籠秋の色　岩翁
御供所に猿も菓を運ひけり　キ翁
心して陰ふむ道や御縄棟　横几

伊勢太神宮へ向ふ所と申すを

拝み石道やをのれとしの薄　キ翁
木の根巻竹や小鹿の角の除（ヨケ）　松翁

二月堂に七日断食の行者あり

屏風引廻して無（シ）二人声

日の目みぬ紙帳もてらす艳かな　晋子

光明皇后の大ゆや釜

虫のねや茅たにからす風呂の釜　キ翁
大仏の御肌の霜や日のめくり　尺草

廿八日南都を出るに

行秋を十三鐘にわかれけり　岩翁

当麻寺奥院にとまりて

小夜しくれ人を身にする山居哉　晋子

当院に霊宝什物さまぐ〳〵有中にも小松殿法然上人へ

まいらせられし松陰の硯あり箱の上に馬蹄と書て野

馬を画けり硯の形かひつめに似たるゆへ成へし

松陰の硯に息（イキ）をしくれ哉　晋子
二上やしきみからげし薦の露　キ翁

多武峰

下（リ）坂も秋を峠の木葉哉　同
長月や楔（クサビ）とめたる水車　尺艸

増賀聖の古跡にて

づぶぬれに捨ぬ身をさえしくれ哉　横几

廿九日よしのゝ山ふみす白雲岑に重（リ）煙雨谷をうつん

て山賎の家所々にちいさく西に木を伐（ル）音東にひゝき

院〳〵のかねの声心の底にこたふ寒雲繡磐石といふ

句におもひよせて

高取の城の寒さよよしの山　晋子
日さかりやせめても冬のよしの山　キ翁
冬かれや梢〳〵を日くれまて　横几
太山路や苔さえ白き冬桜　岩翁
分水はよし野の奥に時雨哉　尺艸

世尊寺　こよひたれすゝふく風と

よまれたる所といふに
月ならはなとおもひやられ
頼政の月見所や九月尽　晋子
西河のたきにて
三尺の身をにじかうのしくれ哉　同
冬かれや何を目当に滝廻り　キ翁
十月二日　高野山上世を忘たる閑也
小六月高野の池やうす氷　岩翁
あきんとの独ね寒し高野山　尺艸
院々を着たりぬいたり旅頭巾　亀翁
つねにもまいりうとき所也
冬そ猶楽書うすき女人堂　同
廿年此山ふみや紙子うり　横几
卯塔の鳥居やけにも神無月　晋子
学文路の宿にて
戸をたてゝ楮うつ声霜夜哉　尺艸
紀の川　いく瀬もあり三か月のなかるゝを
たつか弓矢をつく船やみかの月　晋子
船頭の顔もさためぬ時雨哉　キ翁

和歌のうら　吹上
座敷迄千鳥の雫礒屋哉　岩翁
伽羅岩にしめりを添て幾霽　横几
浦の波紀三井寺より時雨けり　尺艸
かいつふりつれてすけなし片男波　キ翁
玉津島にまいりて
御留守居に申置也わかのうら　晋子
帰望
和歌はみつふけゐの月を夜道哉　同
粟島奉納
拝殿の雛をあらすなはま衛　キ翁
一対の鴛そより来る浦の波　横几
ふけゐのうらに出たれは大網引馬夫駕籠のもの従者
ましりに走リつきて力を添てとよみけるに
魨ひとつとらへかねたる網引哉　晋子
あまの子共の魚ぬすむを
ふところに小鯛つめたし網子の声　亀翁
網よせて鱧に落葉をはませけり　松翁
網形にふけゐの浦や礒時雨　横几

かたよるも寒しふけゐの鷺の声　岩翁

網を見て僧何とたつ礒衙　尺艸

住吉奉納

昆布うりの手を拭松の落葉哉　岩翁

乙女子の火鉢を廻る神楽哉　亀翁

木からしや絵馬にみゆる帆かけ舟　横几

相殿や水すむ影を冬木形(ナリ)　尺艸

芦の葉を手より流すや冬の海　晋子

十月十一日芭蕉翁難波に逗留
のよし聞えければ人々にもれて彼
旅宅に尋まいるゆへ吟行半(ハ)に止む

此一帖者亀翁旅泊之日記也
初而有遠遊之志故重父子之
信合朋友之親共祝願神社
等敬礼仏閣而名境勝概所
往所至之幽懐頗不巧言京洛
歓遊之間冬夜対酌之暇令
校合吟了則号随縁記行而
以負句兄弟集後　晋子

句兄弟追考六格

○健句

誰肩に牡丹の旅や初しくれ　曲翠

朔日は猶あはれ也鉢たゝき　柴雫

五月雨石部の山は兀にけり　枳風

下〳〵のふるひつきけり春の雨　薯子

地ひゝきや浅漬出す壁隣　機一

髭ほとに心はよもやすまひ取　山蜂

一ッ町幾声よはるはつ鰹　黄山

ゐのしゝの牙にもげたる茄かな　さか農夫 為有

寐て涼めさそな川辺の人通(リ)　思濵

傘かして跡から打や雪礫　弥子

精進はわれひとり也山さくら　巴水

西ひかし六條との杜(牡)丹哉　許六

初鰐や沖の釣場は二百尋　闇指

此句夏也越の海より献る也

淋しさやゐろりの足の只も居す　山蜂
名月やたかふところに釣の糸　杜若
墨染の水しらけたり五月雨　野梅
ほとゝきす大津の車闇にさえ　介我
後より円居てみえぬ火鉢かな　岸口
雨雲のいきれて通る夕へ哉　拙候
うくひすや頭もうたぬ檜垣　釈 専吟
あつらへて琵琶の来る日と初雪と　山子
鳶の巣にひるまぬ藤や木の間より　桃隣
飛迄の姿みせぬやせみの声　嵐水
薄雪に塵を出たる若菜哉　素イ
除(ノケ)ものに成ても嬉し盆しらす　朝三
あきんとの手に渡りけり二番瓜　湖月

閏月を

さみたれに両(フタ)月ぬるゝ青田哉　芳山
蘂くふか匂をすくか花に鳥　介我
夕立やさもなき人の肱まくり　専吟
さめて蝶乞食に下戸はなかりけり　芝莚
寒菊の内をうかゝふ雉子哉　湖風

惣門や鑓たてかけし山さくら　琴風

○新句

たなはたの忍ひなからも光かな　老尼 松吟
あふ夜半や皃もみぬまに火とり虫　翠袖
あまたれに袖もあやめの匂哉　秋色
朝鍛冶もまて祇園会のはやしもの　思演
木を立て木にうつる間そ郭公　安之
垣ひとへあなたは紅花の雨夜哉　皤羅
七度の花のはしめや早稲の花　尼 智月
道はたに蚕(マユ)ほす薫(カサ)のあつさ哉　許六
みのる迄嗅てもゆかめそはの花　紫紅
水色のうつり涼しやことし竹　路草
鶯のんめに来てなけ小野の宿　轍士
かれ枝やひとり時雨ゝてりましこ　彫棠
掛物や紙燭とほして夜の蝿　梅蘂

たひたつ日

高砂とうたふていさや衣単(ヒトエモノ)　拙候

須磨にて

御所と成ル汀はこゝか郭公　野梅

此次は次はとおもふ玉火哉　神叔
舟着に小松うへたりけさの春　一雀
帯程に川も流れて汐干哉　沾徳
寒声やあかぬ別れを隣より　薯子
たか顔も気に限はなしけふの月　桂花
灯のしまらぬ色や窓の雪　氷花
かさゝきの橋は誠か鵜縄舟　百里
鳥の毛を間もなくむしる寒さ哉　柳玉
ちる花や尚〳〵書も明日迄と　東水
蓮の香や田は仕付たる水の後　沾徳
うくひすのりゝしさ見する楚哉　神叔
晋子は月のなかはに旅の
さかりと聞えけれは申送りぬ
名月や桑名は二里も遠くなれ　闇指
幻住庵のかへりに
石山を樽の仕舞やにこり酒　曲翠
あふ人に押やられけり置火燵　百里
ほとゝきす鮎は鱠の和加減　粛山
水仙や一夜を安房の舟便　専吟

○清句

雨蛙芭蕉にのりてそよきけり　晋子
やふ入の扇や花の三重かさね　嶓羅
ますかゝみうつるや紅粉の筆初　此君
交を紫蘇のそめたる小梅哉　秋色
達磨忌にたま〳〵菊の籬哉　梅蘗
灌仏やつゝし並ふる井戸の屋根　曲翠
早乙女や子のなくかたへ植てゆく　棄捨
おもふ事紺にそめたる躍かな　尚白
肩衣にいかなる花を藤袴　山川
いたゝくや音羽の滝のうす氷　湖月
檜香や木曾の堺の冬こもり　許六
縮から何にうつらん夏ころも　含棘
夕かほや賤か湯とのは石瓦　角上
飛石の間やほたんの花に影　介我
泥つかぬ落葉なりけり袖のうへ　沾徳
空と竹色をくらへん星祀り　酉花
笋やかゝりの竹の数もうし　氷花

○偉句

幟にてしらはや医師の紋所　行露
歌塚を尋ねてとほすほたる哉　銀杏
早乙女の手てせくものよ川の支　彫棠

鈴鹿山

肩裙に壱歩か銭や山桜　穹風
せはる子も親の顔見よ年の昏　思演
ほしあひや独つふれし夜の酒　木奴
新酒のしるしも青き月見哉　酉花
人心いはらさしたり瓜畑　闇指
星あひや離別の中を侘てみん　山蜂
行灯に炉をふさきたる住ゐ哉　薯子
身を恥よくねるとあれは女郎花　秋色
いつ迄もけふの気になれ更衣　思演
一たはね蛭の血ぬくふ早苗かな　弥子
幾とせもかはらぬものや皺の髪　松吟
鮓切レや世話も暑さも此夕へ　蔦雫
葉の下に落たもあらん真桑瓜　夕秋
山寺は山椒くさき火燵哉　角上
人近き樗の花や村のもの　介我

はつ雪や波に伊吹の風外(ハツ)レ　千那
追たてゝ囀らせけり夕ひはり　翠袖
ゆふかほのはゝせ所にこまりけり　堤亭
駒牽の木曽や出らんみかの月　去来

膳所望

鯉鮒も青葉につくか城の陰　正秀

○麗句

文もなく口上もなし粽五把　嵐雪
我宿の娵の顔見るつはめ哉　弥子
彼岸にてひかん桜のちりにけり　彫棠
里をとり火打袋をかさり哉　安之
散花や根へよせてをけなからへは　晨鍾
暁を引板屋にかはる妻もかな　秋色
蓼貰ふ使にやりてつませけり　黄山
引汐や千鳥かたまる舟の跡　皤羅
山さくら小野へ帰るか若模様　野風
なてしこに櫂の雫や笠の内　拙候
植あまる早苗に藺田の黒み哉　一雀
春の野や木瓜は莚の敷合セ　沾徳

茶の花や老は二重に立隠レ　彫棠
石川や簗うつ時の薄濁り　桃隣
涼み床咄の末そ恋に成　紫紅
白魚や文にかゝるゝ佃島　拙候
薄氷や星のこほるゝたまり水　素彳
石竹の種やうるほふけふの月　野風
彛は人まかせなり蔓くはり　山川
網引の鷺を蚤かと秋の雨　一雀
ゆする木を放すや猿に蔦かつら　彫棠
跡に来て身すほに入ぬ辻踊　思演
名月に得たりや柿の刻はさみ　角上
詠入我顔かゆし白牡丹　柳玉
蓮の香や衣裳にふるゝたくひには　虎笒
寐た家の灯籠哀に月夜哉　未陌
富士のねに鰹あからて道者かな　松吟
鰹もあかれ沖の雲といひし句に
次ていへるなり
日比しる門を行衛か夏念仏　介我
病中吟
長髪やまみえくるしき魂迎　山川
青木立海一はいや鈴の森　拙候
海苔房やかそへる魚の中に有　野梅
名月や客の顔見る西瓜うり　一江
川越や蚤にわかるゝ横田川　彫棠
涼み所我にまかせぬ子守哉　野風
角巻て牛のきほひやあやめ草　一境
かつく日を襟にかけたる団かな　思演
姫瓜や物おもひなき粧ひ顔　節水
あちさゐや三島を通る山つゝき　野梅
羈中
蚊屋ありと声をはねたる女哉　拙候
舟綱に先小屋つなく野分哉　盧牧
みるうちに畔道ふさく刈穂哉　杉風
豪句
六月や峰に雲置あらし山　芭蕉
むらしくれ千川の鮎の命かな　湖夕
卯の花に芦毛の馬の夜明かな　許六
山鳥の尾に見かくすや夜るの霜　曲翠

ふかみとりうつほかくるゝ柳かな　野梅
すゝしさは笋鮓のにほひ哉　湖風
　母の墓にまふてゝ
我影やそれかと覗く荷の水　秋色
初夜後夜の鐘つきや見し別れ霜　松吟
一筋の乳の毛や命夕すゝみ　湖風
明ほのや井筒の雪に袖のあと　其詞
蚊屋越に蘭の伽する匂かな　口遊
ひるかほや暑い盛も花の役　含蕀
三十の前のおとこや鰹舟　轍士
気をとるは先ひとへ也山さくら　寒玉
わたし舟船賃ほとは涼みけり　白盆
寝所の水はなれうし旅の霜　彫棠
老人の膝のうすさや端涼み　神叔
門過る声を逃すなはつ鰹　泥足
ふくろうの目やこそはゆき三かの月　専吟
氷る迄水すみかへるあらしかな　介我
貝からを風のふくらん冬木立　彫棠
応〳〵といへと敲くや雪の門　去来

人をの〳〵得たる所有あるひは雲を凌き水にのそみあるひは眼前に遊ひ幽妙を探る志(シ)の等しからさるを句の上にて是を見るにあらぬ工(ミ)なるものは足下にはしる玉を拾はすして山を穿ち海に入る又其中にひろはむとおもふものは安く目に見えす猶求めんとのみ俯して拾ひたる人に行(キ)当るかことし是に原詩本歌の要を見せて背を敲ひていはゝ彷彿(トシテ)二千声(ニ)一一度飛(フ)といふを彷彿(シテ)二千声(ニ)一一葉飛といひ霊徹か林下何曾見(ン)二一人(ヲ)一といへるに王右丞か尋(テ)幽(ヲ)得(タリ)二此地(ヲ)一誰有(ン)二一人(ヲ)一曾句中の閑居おなし場にして心の変おもふへし又さよ更るまゝに汀やこほるらむ遠さかり行志賀の浦舟とよめるに志賀のうらや遠さかり行波間より氷て出る有明の月と家隆卿のよめるも皆是全体詞を外に求めすして風体たくひなき物歟又在原友于は時雨には立田の山も染にけりから紅に木の葉くゝれはと読り是は叔父業平の歌とおなし事にてその曲なしかゝる境を分へき事句の従横顚倒自得のうへならては得

かたき物成へし思ふに其筋かはれ共友ゆきは中將の猶子晉子は三十九人の連枝也兄をもとかす句をむさほらす道の一理成事を見て遊ふは手から也とほめて沾德記

京寺町二条上ル町
井筒屋庄兵衛板

(注) 底本、この句の前に次ページ上段十一行目より同ページ下段七行目までが乱丁逆綴になっている。

末若葉

末若葉　鳶

（題簽）

歌仙了解弁

花影上欄干　新月色　廻雪

日〳〵愚判を加ふる巻ことに五字を向上の句とし三字を奇工に標し二字を抜群の句と沙汰し侍る也今十歌仙の門人は一筋に予か方寸を察する徒なりけれは雁字一屯の点心を見せて一〳〵に句評をせんも今めかししかりとていつれも〳〵面白しなとめでおくもなけやりなれはその主づかれたる句ともに見安を定め作者の励ミあらしめんと巻末に趣をたて侍る也句は張良か胸中の兵のことし日夜にわき出るものなれは一句〳〵の新古は見ん人も思ひゆるさるへしさしあひ輪廻まゝありそれも其一句の死活を考へ合て見ゆるし有へし新式にも専ラ用捨の字を分たり無言抄にも貴人少人の句は面などかはりてさしあひなとすこし近き事ありとも書事也句遠なる人には指合ありとも少聞得ぬ句也ともうけとるへしと是一‐塵無‐望の沙門人我を忘れ給へる教誡なりさし合くりと云れんより作者哉といはれまほしある人点意おもしろくや有けん

戯賦一絶呈几右　　　心水道人稿

愛スカ君滑稽一‐時ノ豪雁字帯テレ霞ヲ入ル彩‐毫ニ想ヒ見梅‐花門‐裏ノ月不レ知誰トカ与ニ定ン二推‐敲ヲ一

應和ノ句　　　其角

たゝく時よき月見たりんめの門

歌の点は八分とかや詩に圏批楚満の四点有、圏也一句一字の感也批は圏をこすもの也一点の如くに長う引也句の章を褒美す楚は長点也たとへは三五夜中新月色一字も屑なき句を楚スハエのことく立のひたる姿にたとへたり満は七言四句満足せるを以て廿八字こと〳〵く一、を点して義を分たり俗に四点八点と云はその判談の詞に為持と同し事なりたとへは圏一、の文字にて詩の章面白く成ゆへに批

点を倍シ批の章に楚の位を倍‐階してをのつから満テリと褒美したる一詩ノ八点にむかふ心を以テもの事にけちめなきことを四点八点をとらぬといふ也と此事梵千長老に承りて誹諧に倍点を用ユル事をはしめ侍るそれよりして家々の点‐形物数奇かはる〳〵に風流をつくされたりことしより花影上欄干の字新月色の字回雪の二字に改め侍るも此道雪‐月‐花の三を専らにかゝやかすわさなれは也雁字は雲上に翔カケる句のひゝきに応するものか屯字はその屯タムロをとる也尤句に群をなすの赴のみ也十歌仙に於ては二字已上の評義これ其勝劣を論せさるの旨也

晋子述

宝井

第一

彫棠

帆柱や若葉上ノリ越ス谷の棚
山を見立る楊梅の旬
大名に八百屋か付て下るらん
袴を陰に寝たる月影
蜘の居ぬ糸は袋に秋の風
たはこを笘に茨渡す松
生実ヲユミから淋しい道を輪とり来て
水摺ほとに狐尾を曳
小盥の蘇枋にそまる長局
ふるはといふてはしる初雪
かも川に鳶は吹れてむら衛
額けうとく鬘とる跡
腰伸ノサぬ二階の梁ハリの物思ひ
神麴作る夏の夜の月
ぐる〳〵と箕を着た猫の後アトしさり
いふるもしらす棺に付蟻
泊リ螺カイ花の衾にまとゐして
震動ひとつくもる春風
鯛釣の鱶フカにまかるゝ朧舟
長崎の子に我そ老ぬる
松の戸を連歌といへは引出され

雑煮の先へ匂ふ寒菊
灯(ヒ)うつりに上気もみゆる娵の声
御殿山からかけ廻る夢
帆は白く洲崎〳〵は草の汁
座頭か嗅て亭主とらゆる
郭公白うすやうの声の中
文珠の顔の錦帳をもる
冷しや廿六夜の山かつら
粥焼起す秋霧の駒
野を通る祭の先は稲むしろ
青い若衆かやかて墨染
追風に御所ならはしの身の用意
しぐろうみゆる長谷越の連
碓に餅も踏する花の宿
切石洗ふ水の山吹

五字考
かも川　　山かつら
三字考
袴を陰に　　おほろ舟
しらうすやう
二字考
おゆみから　神麹
長崎の子　　祭の先

第　二

柴雫

藁苞に凋れて来ぬる若葉哉
虻もちつたよ芍薬の培(コエ)
毛のはゑし桶のひめ糊うち明て
鯷のぬたに鎗持か泣
足漕のとゝろき渡る橋の月
だらい音頭に又くつれたり
あの面(ツラ)て何のうたれう敵討
壱歩二ツに銀か七粒
用のある文はからけて鶍箱
若衆いふりとなぶる小納戸
さあ〳〵と見落(シ)さする歩三兵
尻もかしらも扣く蚊もだへ

振廻のほき〳〵酔に辻咄
蘭に鶏（鵜）はまけぬ打もの
陸奥殿の御師はかゝやく月の朝
青い俵は匂ふ餅米
四十余の初産これぞ帰花
綿に成たるむかし六法
目の玉を入て羅漢のいき〳〵と
茶ても汗かく最早たべまい
涼み舟障子もゆるぐ高鼾
棒か所望かそこな鼻屎
月の昏天井繰の箭の勢ヒ
秋草刈ルも札て入る口
霧絶ぬ形（ナリ）をたとへて海鼠山
徳利の上にのする盞
一さかり気の違ふ程行たくて
うらみつらみに欠八百
かゝる時集はねられし人は誰ソ
杉の葺目も伊勢か庵室
雪の日は鵤（イカルカ）の声松むしり
病おほえぬ老といふめり
布引を柱隠にさらすらん
紙屋（カイ）川流の鉦しつか也
けふも又温飩のはいる花の門
春の雀のひとり狂言

了解

五字考　一句

らんに鶏

三字考　四句

かたき打　一盛り　昔六法

杉のふきめ

二字考　五句

ひしこぬた　するめ箱　歩三兵

あくひ八百　柱かくし

第三　凋ムに後ル、といへり　拙爻

柏木を猿か餅なるわかは哉
多くも涌（カ）す如露の孑孑

蔵造リ念の入程おもくれて
さしに咄の声しこる也
薄紙をへきとるやうに月の雲
川材奪あふころの初汐
渋柿を座頭のくふて面白さ
狐のやうな傾城のはて
銭やらぬ敨の音は物おもひ
隙かこうして発る煩らひ
魨汁の垣に成たる夕月夜
倒んてこれを厄はらひ也
鎗持の五十三次暗にやる
風の薬を釜へうちこむ
足音にかるう住持の出向ひ
正平形を窓の切張
一日は不孝になりて花盛
そつた雪踏の直る春雨
巣の中を攫〳〵のそく蜂の留守
縁もあたりと似たる弓答へ
脇とめて痒さもこまる若粧ヒ
枕いたゝく先夢の礼
重代の切刃をはつす藤九郎
雪もあらしもこつとりと止
子祭に二股大根たつね来て
たて足す家をからくんて見る
養子闔盆に丸けてさし出し
御香の宮の宜禰か有明
ゆさぶつて頂へ落る銀杏の実
赤とんはうのすます水影
辻番の飛ンておりたる放れ馬
上戸をゑつて酒かひにやる
六十の賀より額をとりやみぬ
遠山鳥や華のしんかり
懐て襦半引ぬくあたゝかさ
石町からの鐘かすん也

了解

五字考　二句

ふく汁の垣　花さかり

三字考　三句

傾城のはて　厄はらひ

夢の礼

二字考　五句

月の雲　蜂のるす　わかけはひ

藤九郎　六十の賀

第四　　闇指

鶏の坊主にしたる若葉哉
内から窓を破る夏の日
俎の上に筧の流れ来て
あるき習ひの子は心世話
垂撥も屏風にかゝる宵の月
急になつけて鷹の装束
山に酔黄蕈（イクチ）は今かさかり也
刀をやめて寺の木作リ
短くと軽衫（サン）好むさうぶ革
絵の間を限に仕まふ唐紙
ほつ〳〵と丸薬嚙も物思ひ
二の湯の藤をさそふ雪空
達摩忌は昼から月を拝みけり
上荷をはねて舟は助かる
招かれてさし出の礒の酒迎ひ
髭も呼つてならふ行列
木のやうに帯しほりたる花の雨
恋の階子は門の青柳
盛（ナ）遠か浮世のてふを夢にして
肴くはすによく肥る顔
飛彈越は昆（ヒノメ）も見えぬ谷住居
訴訟袴をあはて着に着る
手枕をいつの間にやら木枕に
前歯て封をいそく文箱
餅つかぬ気から破れてとしの昏
切ラレたまゝに笠きせて置
馬船の殊にすくなき小越川
砂に垣する風下の家
有明の明る日かけて三の山
鼻をつかむもしれぬ朝霧

柴売のさいふに椎をいたゝきて
見込を一と作る組町
くれの鐘姥お袋もそろはるゝ
橋から落す蠟燭の心
挿ミ箱明て分たる華の枝
いそかぬ春も切の猩々

了　解

五字考　一句
帯しほりたる雨
三字考　三句
発句　寛の流
盛遠かゆめ
二字考　六句
寺の木つくり　二の湯のふし
そせう袴　餅つかぬとし
きられたまゝ　らうそくの心

第五　　我常

事さめて憎きぬるてのわかは哉
はな橘に年の青さし
蚊を逃ス我手なからも打れけり
弥三か馬みた近付の顔
大雨の乞食に成ツてくれの月
蒜くふ口に西瓜臭かる
江戸の秋蔦のは入も吃とする
尋まふてゝ天倫の禅
雪の朝きのふはとまる舟ノ鷺
酔ては人にあぶなからるゝ
大かたは推のちかはぬ役者釜
伊豆もさかみもこそる腰掛
信連か小枝見知もあはれ也
もより聞出す寺社の短尺
各別な角豆奈良茶を艸の庵
膝にねる子を又母の膝
絵莚を達摩にかふる花の中

朧月夜にすへる部屋〳〵
春(ナ)の夢ゑほうし曲　紐(ミ)はづし
小紋をかへてかくす地の悪(サカ)
いしけ者夏は冶郎に剃さけん
何商人ぞ朝寐する店
たてあふてのむともなれは汁の椀
氷のうへの柄杓にも雪
竃祓ひ錦のはれを御末限(キリ)
米の守に筆はつに取
ともすれは鯛にかけあふ赤鰯
鹿(シヽ)料つんて鼻こはな牛
宿の月葭(ヨシ)の髄(スイ)から天を見ル
躍レ〳〵と索麺の世話
霧雨にぬれた片身か風班(ホロシ)
鮓にかさなる木おろしの舟
若(ニャク)な主しらぬ色からそゝのかし
りんきにしめる台所もと
菅笠の袋を作る夜の華
山吹紙の年にかはらぬ

了解
　五字考　一句
のふつらか小えた
　三字考　三句
はなたちはな　舟の鷺　絵莚
　二字考　六句
弥三か馬　やくしや釜　汁ノ椀
赤いはし　宿の月　夜の花

第六

波麦

八重若葉笑仏もうそ暗し
背に杖を握ル花けし
古道具五厘〳〵とせり上て
何をくふたか苦い顔也
入ほがな分別かりて月の昏
稲なら十束つゐこいて来ル
かけ出や少の痛ミ押こなし
さてもくすへる居風呂の下

貧乏の付て廻るとりんきして
装束からにみめもかくるゝ
鎗もなし妙法院の使者ならん
矢倉の窓をひらく極熱
よき折に鉋一鉢もらひけり
桔梗かるかや此比の友
月の雲四五里影そふ会津山
比叡にそのまゝ秋は淋しき
目のあいた者をつれたき花の庵
ほそい所をぬける鶯
牛(ナ)にさえ二方荒神のとかにて
鍋のゐかけの能髭を持
木隠は麻布との也鐘の声
おく歯にしみてこほす冷水
きよろ〳〵と楽屋を通る女共
すしな咄かみつからの恋
かゝる文足でも書とさみされて
食どめしてもめらぬ卑僕(ワッハシ)
いかめしき関の畳の縁とらす

野駒を駈(ル)と手(ン)手(ン)に棒
しはし世を逃彈正と申けり
氷をすつる高藪の月
寐る段に成てねぬのが一風情
おぬし酔せてみたき思そ
又候哉やらゐを廻る花の山
道は蛙に何首烏うる声
此寺も常楽の会をなすとかや
子方をかへす春の夕暮

了　解

五字考　一句
楽屋の女とも
三字考　三句
鉋一鉢　野駒　逃彈正
二字考　四句
かけ出　鍋の鑄かけ　花の山
何首烏

第七

蟹に這人は唐絵のわかは哉
いなさ涼しき猟師町あり
小目代武士にくらすもゆゝしくて
羽織にかけはむかしびらうと
木槵子を好（スキ）に合せて秋の月
柿の烏のはやされて立
鶉鳴飛脚の女房先〳〵に
誰中宿そこゝの火縄屋
麦飯に御経よめと承る
どうやらすれは狐也けり
月寒し田上山の塚の風
巴か残す天冠の石
苗引の独見えぬをよふこ鳥
花表のやうに瀬々の橋杭
五文取奥座敷にも一かまへ
炬をもらひに十能さし出す
つりつけて人を遣（ツカ）ふも花の時

紫
紅

丸に三日のやふ入か雨（フル）
年玉の薬の中に苦いやつ
吹醒さるゝ駒形の風
股立に毛のない足の三里紙
大栗程なわる銀の色
河原床魚屋に刺身作らせて
ちよつと女に成し手拭
ねめあふて枕引とる蛙腰
昼から先を草庵の隙
水垢に込藁腐る藤はかま
房にのまれて切籠小さき
月の色見かはす指もうるはしく
古いか命寐ならしの衣
傾城のもとへかよへと馬くれて
木幡のせきは瓜の最中
水音に付て流るゝ太拍子
灌頂うちに老の遠道
都から乞食て下る花の空
論所の山はやかぬ也けり

五字考
傾城のもと
三字考
小目代　花さかり
二字考
天冠の岩　苗引　手拭
枕引　太拍子

第八

木かくれて瘢(ナマツ)をうつる若葉哉
ほとけたやうにひねた笋
風迄は南〱と座をとりて
悍(カン)かめつたか五から寐る
蔵前へ米をつませてけふの月
謠を直に躍りおかしき
傘をわめいてかふる秋の空
似たてうちんを両国に待ッ
石舟に毛氈敷て夕気色

蘭関

吐逆しつめて背さすらせ
角たてゝ帽子のならふ土の上
けはしき雲は富士の八流
月雪に矢賛(コア)の残るかたは猿
ふいごの脇へ下す汁鍋
かへた駕籠是は重たい女哉
はつかし舞の水に事かく
一夕は花て〱といひ延て
梅の心の易の考へ
煮凍(ニコヽリ)のくはれぬ比や風の音
母への恩に灸おろす皃
有数に八丈島は小切レ迄
また忘れたか三ツ立売
忍ふ身や明ぬくゝりをヱイやつと
さあつめれとてふりかはる横(ヨギ)
此鉢に茶蘭うつして餝(リ)立(テ)
肥満なからも昏ことの月
取親の乞食のさはる生身玉
役者の笠をのそく四(ツ)橋

村時雨銭か落たとよはりかけ
押かけなから献立も出す
誉られて泣さうにする新参(イマ)
法問僧や訥(トモリ)なれとも
丸山にまかふ豆腐の町見えて
連(レ)はいそくに長い雪隠
兄弟は芸を仕のきに花盛
柚のめを投てたのむ大間(アヒ)

了　解

五字考　一句

かへた駕籠

三字考　三句

第三　　ふいご

にこゝり

二字考　四句

ワキ　　一夕は花　　八丈島

ふりかはる夜着

第九

山　蜂

あの上はあるかれさうなわかは哉
吹出されたる昼の蝙蝠
いしたゝみ石の栓(クサヒ)のくつろきて
鳥毛を幕につゝむ村雨
夕月に吸物一ツ仕かへたり
つるへにうけてかしか鳴する
つたかつら後むく間に杖を巻
雪隠洗ふ僧のたふとき
誰なれは供乗物も対の眉
さかしく猿の銭を吐出ス
脚(ハヽキ)瘡ゐろりに立てあふりけり
霜ふり落す嵯峨の弓竹
冬こもり二ッとりには秋の昏
よ所の持仏へ参る傾城
切艾本に見せたるふともとひ
鎗　頤(ヲトカイ)にさはる盞
月花に不足もなくて懐手

小てふに成ッて溝を飛越
出(ナ)替や馬買やうに髭を見ル
大師の鬮をはさむ傘
子の行水に顔をいやかる
人参もそろ〳〵減て好ミ言
軽井沢例の御宿か這(ハフ)て出ル
しのふかたへはしはがれた咳
憂事の胸にとまれは見上皺
宇佐の月夜の廻廊は武士
芋かしら田舎合子にもり付て
逃てすまふへ交るぬす人
響さへ庭の礎はもめんもの
錠前迄はのそく鏡屋
楊弓を座頭も射よと引立て
初ほとゝきす笑甘(ムマ)かる
逆剝(モゲ)の手を出し兼る折敷綿
湯尾の札を孫ともの数
関守かくどう見送ル花疊
青い涎は杉菜くふ牛

了　解

五字考　一句

出かはりや

三字考　五句

発　句　僧のたふとき　見上皺

うさの月夜　関守

二字考　四句

はゞきかさ　弓竹　切もくさ

ぬす人

第十

一十竹

寄生のいらぬ所に若葉哉
藤よりくらくからむ蓴菜
川舟をもちれ袴に引よせて
脇師の声は分に聞ゆる
みかの月玄猪もてうと過る也
見事草履てつたはるゝ雨
榎からつくり上たる太鼓幕

けかち畠に此ころの家
のそみなら先借分に鞍鐙
獅子髪ゆふて出る基佐
さし当る病もなうて楽湯治
仕廻に飯をあゆる摺鉢
魂祭ぎうか所は平屋にて
にくまれ口を秋の夜の月
ひがいすな河津なれとも投にけり
江戸まていさよ松坂の馬士
よしさらは乞食袋を花の陰
何に蛙の高い音骨
燕のおもて摺行羅漢橋
羲之を習ふて手を粉にする
取持た客におまする冬杜丹(牡)
伽羅屋の娵と聞て死程
又今宵夜話亭にうかれ鳥
新場の鰹たちまちになし
篠鞘の漆もひぬにさしてみる
浅黄無垢とは出いて桑染
笑止也男盛りの二俵半
身延こもりの暁の月
松茸や殊に油のやうな酒
蘭に露もつ風呂の休息
苦手にはさしもの蛇もぐつしやりと
ひろふた紙を干す崩垣
一肩に笊醬漉をよろほひて
読物満テリ僧帰る見ゆ
花に寄犬のくさめのもとかしく
今朝さつはりと茶蓋を巻

了　解

五字考　一句

羲之を習ふて

三字考　四句

くらあぶみ　河津なれとも

伽羅屋　　　おとこさかり

二字考　四句

発句　太鼓幕　にか手

花による犬

うら若葉　魚

（題簽）

詠三首倭歌

砂人

春月
月みるも手こそたゆけれ
老か身はまつま霞を
をしのこふとて

帰雁
たかもとらすわなにもいらす
のかれきて人にくはれぬ
かりかへる也

恋枕
いく夜をかふる綿ほうし

うちかけてたえぬなけきの
木まくらをする

独吟十歌仙ののちにうらわかは十巻かりもよほして
先師二十歌仙の跡を追ヒより〳〵聞えたる発句とも何
となくつゝりてめつらしからぬ酒醒ゆるさしめ給へ
としか申侍る
元禄十丁丑稔招涼偶居書　晋其角

うら若葉　下

左
七種や明ぬに聟の枕もと　其角
屐かひにやる松過の雪　介我
中
春風に段ののしめのふくらみて　堤亭
七艸や餝を崩すおとこ迄　同
一間にあまる八巾の骨組　其角
中指の鼓にたらぬ百千鳥　介我
右
七艸にとゝろく声や猫の妻　同

飛鳥井二楽軒御筆蹟也愚案世に狂歌といひておかし
きふしともをもてはやし文字つゝきの時にかなへる
をもてあそひて只狂歌〳〵といへるいぶかしき事也
此狂とさしたる一字謙退の詞也それいかにといふに
詠三首の筆意いさゝかも狂の字の旨趣なくもとより
骨肉をそなへたるあらましなれは俗に誹諧を座興か
ましく云なし神仏の道を犯して五倫をそむけたるな
とゝ世に紛たる比丘なと戒律の数にしてなしりあへ
るも胸せばく又は勝たりまけたりといどみて本心を
うしなふともからの上をはゝからず下をあなとるは
殊更僻事なるへし歌は則誹諧也はいかいもとより歌
也その不可思儀をいはゝ三教の文言仮名双紙とても
ことのはしなる事を心ある人は得られたり心なき人
は点をせめて己れ勝たれはよしと思ひて師範をしら
すされは年々此道に労して物我の集をあめる事予も
人に恥かしといへともうらみ悔ある門人淡薄のいき
とほりをやすんせよといふに各か心を推て若葉合の

海苔の匂をかへすあぶり籠　堤亭
押絵かく人はのとかに詠ゐて　其角
古田の何某は戦場のらうかはしき
にたに茶酌もかなと蘿を撰む
予も一曲にふけりて
太平の春をうたへり
門餝いつれ尺八竹も哉　行露
祝三夫婦
松竹や鼎にたてる殿作　彫棠
蓬萊の海老十徳にかけて見ん　岩翁
花の春障子明たる座敷哉　専吟
せちふ
年の豆誰かいとりの摺衣　行露
豆うつや殿の手にふる普代升　夜錦
七くさや拍子とる子の握リ箸　湖月
俎の薺のうへに雪も哉　林也
なゝくさを笑かへすや壁隣　我常
浮橋の下につなくや宝舟　青山

閑窓
戸さゝぬやんめ咲家の筋向　粛山
くれ椽に足音高しよるの梅　梅橋
行もとり同し人みる垣の梅　波麦
従弟煮や不好(スキ)なからも春の雨　一十竹
水や影苗代馬のかた手綱　兎谷
たねおろし俵に渡す小橋哉　キ角
浪人か明店を聞柳かな　堤亭
心ては切たい朶を柳哉　波麦
青柳や独のり行鹿島舟　秋航
自得
蝶を噛て子猫を舐る心哉　其角
沾徳松島観遊の時
栒杞の芽に枝のつく迄待にけり　千調
寝かへりはおしま也けり春の月　沾徳
もゝちとり都は別の日和哉　尚白
一しきり鵆も高しつくは山　露栢
旭影島田寐よいかむらひはり　岩翁
年ころといひ鄙ひたる声迄も

初茸の盆とみえたり蘼うり　其角
うくひすや餅に屎する縁の上　翁
鶯や曇にさえぬ庭せゝり　紫紅
鸊や十日過ても同しんめ　其角
米春の息に落たる椿哉　湖帆

上巳

あさつきの香深しけふの奥座敷　昌川
みし人や汐干に魚の寄所　専吟
着かさりて足を洗はぬ汐干哉　介我
遠かたにけふの汐干や田植腰　其角
曲水や筧まかする宿ならは　波麦
朝朗貝のむき身や桃の色

門主御座の山々いつくはあれと
うき世の中に世の外也　東順
酒うらぬ山かたふとし花盛　弥子
山さくら衆徒に上戸はたれ〳〵そ　紫紅
段々に寒い所のさくら哉

順礼よし野にて
参りにはつほみし花の帰には

わしかりけりな桶とちの花
桶とちの花いふへしに上野哉　行露
饅頭て人をたつねよ山桜　其角
匂から爰て場をとれ花の陰　梅橋
傘に桜をたゝむさむさ哉　闇指
鮟鞘のしまるかけふの桜狩　兎谷
花にねて身をつまゝるゝこてふ哉　粛山
つり鐘も肩のほこりや花盛　専吟
片荷つるさ湯を捨たり花の陰　万巻
松島や寺ある島は山さくら　沾徳
子をかせと隣からして花み哉　蘭関

岩城へ赴とき
桜川我も曲尺(シャクミ)の水かゝみ　露沾
花ちりて煮梅も時の匂哉　女 此友
万日の人のちりはや遅桜　其角
やふ入の云分らしや珠数の長　幽之
やふいりや菜畠通る梅屋敷　堤亭
藪入や牛合点して大原迄　其角
蕗のとうとものみやつこ心せよ　専吟

しら魚もとれぬ瓦の煙哉　蘭関
ふとんなき春の火燵や筒井筒　需笑
出かはりや夫をみれは丁五十　万巻
出かはりにつし王丸のつゝら哉　粛山
　沾徳か岩城に逗留して
　　はなむけの句なきを恨ムルに
松島や島かすむとも此序　其角
　処さたむへきものにはあらねと
　十符の菅とて垣ゆひ廻したるに
菅の芽の垣より外や三ふの分　沾徳
　志賀なら金竜寺の花はその
　庄園より折て奉る中にも
　山吹のはしめを井出とのより
　奉らるかしこき代々のためし
　なり当　御家の例には
　かの氏人の祝したてまつる
　　けふにあひて
御袷にみつきも加茂のかさし哉　行露

　絵の間は雪に明る卯花　桃隣
琴を抱ク力は乳母とふたりして　其角
一等トロに袷になるや黒木うり　其角
　　順礼のとき
笈弦に卯花さむしはつせ山　去来
行先について廻るかかんこ鳥　拙爻
かくれ家を馬に齅るゝ麦鶉　波麦
あかり場に屐ハキモノ見えぬ田植哉　一雀
　　熊野にて
のほる日や雲かと拝む花卯木　専吟
鶯よ気つかぬ程に聞しらけ　山蜂
ほしあひや歌を吟して蚊屋に入　同
　音(晋カ)子忘句の癖あり
酒のんて発句流るゝ清水哉　盲人 梅遊
　むかしたに昔といひしうつの山
　　越てそ忍ふつたの下みち
五月雨や四沓とりてうつの山　闇指
　　二川のすく
麦時は松に火縄や夜の鹿　同

研たての小刀添て青柚哉　翠袖
古寺無人迹
狸とも鼓ころはす涼み哉　柴雫
二月吉日とて是橘か
剃髪入医門を賀す
はつむまに狐のそりし頭哉　翁
浄土経のあらましにも狸-奴白狐
放ツ二後光ヲ一と候へはまことのひかり
かゝやかして人にもばかされな
人をも妖すなと巫医の心をせめられし也
題観心寺　河州
楠の鎧ぬかれし牡丹哉　其角
此家にこれはと思ふ杜（牡）丹哉　専吟
介我亭盃盤
二盃目はうすき花柚の匂哉　岩翁
人のもとへはしめてまかりて
餇の我をも捨す千団子　其雫
四宮の禰宜も出らるゝ御祓哉　許六
ある御方よりあさかほかきたる扇
にさんのそまれ侍りて
舜草や扇の骨を垣根哉　其角
と書て奉りけるにかさねて
また軍絵かいたるあふきに
さんのそませ給ふ再はとも
申かねて
涼風や与一をまねく女なし　同
独楽園のこゝろを
庭廻り木立はくらし赤裸　一雀
躍るとも此手拍子や年の市　闇指
落栗に兎の飛ぬけしき哉　望水
山畑はおく霜早き木綿哉　老尼 松吟
稲むしろ近江国のひろさ哉　浪化
重九
盃の菊のとまりや爪の上　専吟
垣代（カイシロ）や持て廻れるけふの菊　紫紅
夕虹や紅葉の橋のかゝる迄　一江
小土器に味噌のすこし付たるを
求めぬるも折から興ふかし今宵

の月はつかにひつみたるこそ心
ひとつにみつるものから
後の月部屋住の身の有難や　行露
白雲に鳥の遠さよ数は雁　其角
松吟尼の庭にさか野の土を堀
うつして薄小松なとそのまゝに
もてなす中にしめち初茸有
行すして都の土や茸狩　同
榎島に拝み寐入や夏木立　望水
柿のとう寺は鎌倉ふりにけり　山夕
河音や餅屋も夜半時鳥　波麦
いかにせんふれは雷郭公　春澄
子規はつねのかたや苗二葉　望水
下ケ髪やつかんて出る鵙　其雫
白川やけんとんさめて時鳥　堤亭
子もふます枕もふます郭公　其角
画テレ竹ヲ自讃
ふらすとも竹植る日は蓑と笠　翁
鬼のやうなる桃隣みちのくにへ
下るとて道祖神にとかめられし
かは異例以の外にて何かしの
もとに介抱せられ漸にいきのび
心よはき文とも送られしに力を
添侍るとて
弁慶も食養性や瓜畠　其角
水口や萓の橋あり牡(杜)若　其雫
門口にころふ石あり五月雨　堤亭
拙爻入湯のころるすをとひて
白雨やもりをとむれは鼠の子
と申出たれは弟して
白雨やもりさす人の落た顔　闇指
ゆふたちやしはらく門の桑畠　幽之
ゆふたちに游き出たりところてん　許六
青空や東すゝしき一曇　堤亭
暁は弓に臥たる暑かな　彫棠
石餅の跡からじゝむ暑哉　闇指
問津那須へ赴く餞に
松原に田舎祭や昼休み　其角

先師かまくらは生て出けんと
聞えし折にふれたるにや
鰹荷の跡は巳日の道者哉　同
小利口にうつてつけたり鰹うり　堤亭
さみたれや麦藁馬の捨所　一江
粛山子のもとめ画は探雪なり
琴(ト)笙(ト)太鼓(ト)讃のそまれしに
散花や鳥もおとろく琴の塵　翁
みてひとつあそはして
山の鳥をも驚かし給へ

左
青海や太鼓ゆるまる春の声　素堂

右
けしからぬ桐の一葉や笙の声　其角

直方興行
うちつけに新茶のむ気や老同士　岩翁
業平の轆轤首かと行蛍　自悦
卯花や烏のやうに鉢開　巳応

堤亭興行
まないたに小判投けり夷講　其角
涼しさにあるいてみれは暑哉　専吟
むすくと毛氈かゆし夕涼　巳応

重九　今年小園を
うへて
けふの菊奴僕(ツブネ)と成し手入哉　粛山
子規汐にうく間や君か崎　紫紅

客至　市遠(シテ)無(シ)兼味と　杜甫
醤油くむ小屋の境や蓼の花　其角

或人大なるふくへを二ツに引
わつて盃とし外は地さびのまゝ
内は朱にぬつて鰐口にむら衢を
かゝせて発句を蒔絵にと望侍る
清水影李白か面にかふりけり　同

かたち目鼻なきめんのやう也
軽(ンス)富貴(ヲ)
出嫌をしかりたてたる涼哉　紫紅
蠓に寐息のたけのみゆる哉　酊止
鷹数寄や問つこたへつ独言　同

大根の大根にふるしくれ哉　尚白

　稚子待レ門ニ

故郷は娘の成やわか楓　許六

　製ス二白礬ヲ一とて

明礬のふは〳〵に成火燵哉　是橘

　北-枳南-橘のたとへのことく父か
　医なれは術を習ひ予か誹
　諧をいへは此句をつぶやく三
　遷のかしこきためしにはあらて
　ならはんより馴たるもやさし

河豚汁に又本艸の咄哉　其角

　この時長庵か名を是橘と
　あらため侍りけるに

鮟鱇の腹をうかゝふ神(コヽロ)哉　紫紅

　史記華陀伝至ル下於刳レ腸剖レ臆刮レ骨
　続ノレ節之神奇上ニ云々

　旅泊

菅笠のしめ跡見せん夏の月　露柏

さくら川今流たりくりの花　秋航

夏山や雲出る山かつくは也　同

橋に来て尻を吹るゝ涼かな　我常

大船や櫓にとりつけは時鳥　可朴

鼻紙のしはを延すやけふの月　一境

　病後遇中秋月

名月の酒も吸けり蚊の命　粛山

干瓢につけの小櫛や指の股　専吟

子か瓜やうたゝ添寐の其後は　行露

　韓退之捨酒の吟あり

酒放(ホカ)す舟をうらやむ涼哉　其角

初雁や物のいひたき夜の雨　松吟

見た跡を唐土人の月夜哉　西鶴

　舟中歌舞

橋すゝみ娘ひとりを食の蠅　堤亭

とぼ〳〵と牛を屏風に野分哉　横几

酌をとる袖はつかしの蛍哉　幽穴

むつかしく帷子着たる我身哉　風喬

江北路

篠懸をたか野に捨て猿蓏　浪化
寒菊やとても達磨の前に咲　我常
堀川て弁当盗む躍かな　蘭関
艸の戸や一段さかれ郭公　湖帆
青んめの枝をしなふやさ月雨　一境
枯野へに痩あらはなる狐哉　可朴
天水を力に見たる花火哉　湖東
　野航恰得二三ｰ人
鴨小鴨我も廻らん舟の中　我常
　あひしれる女の
　　塔沢に入て文こしたるに
山笹の粽やせめて湯なくさみ　其角
切口に池の水もつあやめ哉　介我
　みのに入て
住かへよ人見の松の蟬の声　去来
いけて見て台に干けりききくの花　一境
　こかね原過るに
夏艸に真揃ひゆく野駒哉　秋航
於岩城善昌寺七間半四面之砂ノ物有
　見物奇興之手練甚以感之
うくひすや副の柳も堂の外　秋航
仙人も滝落すへし砂に花　同
　賞蘭
御帰と蘭に手をつく坊主哉　同
　雨後　丙子のとし
かさゝきや石をおもりの橋も有　其角
身にしむと妻や云出て天の川　沾徳
明日来うと手提灯より銀河　秋航
眼霞に露そこほるゝ天川　我常
星合や勝手て咄す客ひとり　薯子
燕のぬれてもゆかす天川　山蜂
　狙苦炎熱
瓜むいて猿にくはする木陰哉　其角
　仏さへこの世間はくるしきに
　しらてやけふはむまれ出けん
麦飯や母にたかせて仏生会　同
　光広卿御集見侍るに
　百年まてきれけんとて小刀を

人につかはすとて
いかはかり金をきたひて小刀の
たもてる人のとしは百まて
折ふし一江より土産といひて
まなはしを送らる返状に
鰹哉先祖箸を袖てふく　其角
香炉峰の才をあさむくにや
笄を虫籠の釘や玉簾　幽之
酒酔はまことに恐るへし
研師は朝夕に刃をあつかへ
とも己れをあやまたす
ひつかりといなつま一ツ後から　一十竹
夕すゝみ浜をあかれは杜有　望水
小ふとりな娵子の年や花薄　行露
丙子のとしむ月の末つかたに素見
紫紅をともなひ浅茅かはらの
出山寺にあそひ侍りて菜をつみ
苣をかき蕗のとうなとさかし出て
鸝柳の吟をたのしむ夕つかた寺の
うしろなる畠へ出たれはいと覚束
なきんめのほするゐにかゝりてから
びたるもの有よりてみれは蛙の六
分はかりなるが足手は糸のやうにて
腮つらぬいてかゝれり是こそ正しう
鵙の草茎也尤袖中抄の説に
つゆたかはすやかて折とりて肴に
みせんうめの花とたはむれしに
素見たうとく拝みて井出の
蛙の干たるや長柄のはしの削「屑は
伝えて承るのみ也しかしなから是
風流第一の宝とせんとしきりに乞フ
心さし深厚なれは得さすとて
興句を添て証文とす
草茎をつゝむ葉もなき雪間哉　其角
口閉病を治すとかや
呃(シャクリ)には藤さく門を思ひ出よ　行露
飛石を腹ほとぬらす蛙哉　秋航
鶯に拙(キタナ)まけせぬかはつかな　桑露

人も来て永き日をしる虻の声　星泉
後から耳を引るゝ蚊やり哉　山蜂
早乙女の手拭かふる蛙かな　東水
七夕やならへもゆかて木平うり　一雀
七夕や我も子なくて江戸の留主　酭止
此家の蚊の出所や牡若（杜）　彫花
枝折戸は雪か明たり干菜寺　一十竹

　湖月庵にあそふ
春屋の讃すくれたり玉芙蓉　岩翁
　蹲ル二君辺一ニ
杉高く陰を尋ぬる月み哉　我常
気遣な雲吹ちらす涼かな　楚舟

　舟中に布袋をかきて袋
　に添たる杖の楫に
　似たる　扇のさんに
月みるも杖につなける小舟哉　其角

　歌はわか国のたらにとかや
ほと〳〵にをのか陀羅尼やせみの声　露柏
懐ク子さへ池のそかする花菖　秋色

二月の月夜に植ん菊の苗　粛山
碓や春田の水のゐせきより　銀杏
諸和（ナギ）や岡の辺遠き花くもり　野風
鯛網や人の心の弥生山　彫棠
仇心蛙片鼻もたれけり　志良

　義仲寺に馬をとゝめて
五月雨や只さへしめる旅心　黄山
馬人のすべつたあとやかんこ鳥　翠袖

　まつしま一見の時むかし
　忍はるゝとはいかめしけれと
橘や笆か島はいり口　桃隣

　悼亡婦
油しむ鏡をてらせ夏の月　木奴

　閨　怨
心あて別に成けり夏住居　同

　病　後
痳くるしき檜のかざの火燵哉　落霞
毒断の数に入けり衣かへ　尺艸
商陸の葉はふとりけりさ月雨　嵐蘭

別恋

冷る手を煩（ホメ）く迄とる別れ哉　志良
草刈や鼻かむ桔梗女郎花　木奴
水鼻にくさめ也けり菊艳　其角
かやり火や畳にとまる蚊は幾ツ　彫棠
よしあしに稲の名たつる弥六哉　尺艸
板橋の夜明は瓜のさかり哉　穹風
白雨や小島ははるゝほかけ舟　柳糸
組〳〵や網代に并ふ田植笠　黄山
その藪を直に筏やもかり船　衡山
古城や堀にちいさきも刈舟　薯子

越のなるか川をわたりて
杜父魚（カクフツ）やあられに落て腹鼓　拙爻
星合や女扈従の白出立　口遊
花鞠の心あらはや星祭　専吟
ほしあひや人の心を爪はしき　其角
阿部川の引水早し天川　介我
出る笘の舟も延して天川　翠袖
やふ入や帷子透て判の跡　一江

武江に信因の師あり
月の風ことにそなたの薄哉　問津

棚経に廻れる僧門外にて衣の
中より銭をおとされたりかの
授記品に
不覚内衣裏　有無価宝珠と
とかせ給ふとよひかへして
衣なる銭ともいさや玉祭　其角

新盆
こは千種胸に茂て玉祭　我常

十六日のあした
霊棚もこき行舟の朝朗　東順
秋の声佐夜の中山候な　尚白
大名を相手にしたる真雁哉　許六

松島より立かへりて
新蕎麦や鬼ともくまん病上り　桃隣
舜艸やふめは閾の片あかり　薯子
蕣や産後とみゆる面かはり　翠袖

題暮蕣　各二字三字

あさかほや莟かそへて昏の水　幽之
舜や没日に花を一抉　一雀
舜の落て歩くや昏の虫　鵬花
朝顔の小町なりける夕哉　拙爻
槿やかはほりたゝくすろ帚　一江
朝皃や油を借リに垣間より　山蜂
あさかほや垣の後は昏の花　丁分
舜の手を待ツ蔓やくれの竹　紫紅
陰ッては又朝顔に立居哉　我常
朝皃や凋みつほみも同し昏　是橘
あさかほに毛臑洗へは宿ネ鳥哉　虚谷
吉原の朝顔はかり昏てよし　岩翁
朝鮮のあさかほ三日入日也　秋航
蕣やくれに吐出す磨砂　丹子
槿に蛛包まれし斜陽哉　蜂腰
朝顔に花なき年の夕へ哉　其角

当句さしあてゝ誹言なしと聞ゆれ共
としの夕へ哉といへるに秋といふおも
かけなしみな月のはしめなと
葉さへしほれてくるしけにみえ
侍るをいたみて風なつかしき秋の
色をはかるにや夏の句にとり侍リぬ
観音のいらかみやりつ花の雲　翁
かねは上野か浅艸かと聞えし
前の年の春吟也尤病起の眺望成
へし一聯二句の格也句ヲ呼テ句とす

悼嵐蘭詞

金-革をしきねにしてあへてたゆまさるは士の志也文質
片ならさるをもて君子のいさをしとす松倉嵐蘭は義を
骨にし実を膈にし老荘を魂にかけて風雅を肺-肝の間に
あそはしむ予因む事十とせ余九とせにや此三とせはか
り宦を辞して岩洞に先賢の跡をしたふといへとも老母
を荷ひ稚子をほだしとしていまた世波を出すされども
栄-辱の境に居らす日〳〵風雲に座してことし仲秋中の
三日由井金沢の波の枕に月をそふとて鎌倉に杖を引そ
のかへるさより心ちなやましうして終息たえぬ廿七日
の夜の事にや七十年の母に先立七才の子に思をのこす

いまたをしむへきよはひの五十年にたらすおほやけのためには腹押切ても悔ましき器のはかなき秋風に吹しほれて草のたもとのいかに露けくも口惜うもあるへきと今はの時の心さへしられて悲しきに母の恨みはらからの歎したしきかぎりは伝へ聞てひとへに親属の別れに同しことしむ月の末はかりに稚子か手を取予か草庵に来りてかれに号得さすへきよしを乞かの王戎五才の眼さしうるはしけれは戎の一字を欠て嵐戎と名つくその悦へる色今目のあたりをさらす生ける時むつましからぬをだになくてそ人はとしのはるゝ習ひ増て父のことく子のことく手の如く足の如く年比なれむつひたる俤の愁の袂にむすほゝれて枕もうきぬへき斗也筆を取ておもひを述んとすれは才つたなくいはむとすれは胸ふさかりて只おしまつきにかゝりてゆふへの雲にむかふのみ

秋風に折てかなしき桑の杖　　芭蕉

　初七墓にまふてゝ

みしやその七日は墓のみかの月　　同

　長月三日なりけれは也

此悼の詞は翁存生に病心をなやましかく書つゝりけれともとて懐中し来給ひて追善興行の事とも迄相談に及し時予か机のはしに残されたる也今年玉まつる夕へに亡人の反故とも引さがしたれは折ふし見あたりて侍るゆへに遺文感情をうこかしことさらの追善と思ひて此集に加へ侍る也

　嵐戎か孤愁をあはれむ

芋の子もはせをの秋を力哉　　其角

　七月十二日於翁之牌前捻香拝書之

十月十二日　深河長慶寺

　芭蕉翁移墓回愁之吟

時雨ゝやこゝも船路を墓まいり　　其角

　鳶も寒けに日の没の鐘　　専吟

薪わる長屋の坂の見越れて　　沾徳

　ひとりはどれかしれぬ客也　　堤亭

緒をかくすさいふも重し夜の月　　吟

　牛よりつよく車押露　　角

細長い柿を戸板へはり出して　亭
　寺をのぞくは皆湯入也　徳
行舟や同し所に漕で居る　紫紅
　水のむやうにかゆる吸物　亭
抱く琴の竜池をあてる片小鬢　角
　さはり心もちりめんの襀（ヨギ）　吟
何鳥の屎とも見えす涼床　徳
　上田の中に秕（カレホ）さひしき　紅
夕月にやつと待する送り駕籠　亭
　霧にしつまる惟高の跡　角
笋が是はめつらし花盛　吟
　百目の綿かきぬさらきにて　徳
啌（ナ）〳〵と障子の音や春日影　紅
　鋏（ハサミ）をかして会釈する顔　亭
御三木ぞと寄（ツ）ていたゝく中なれや　角
　発ツた時はそばて煩らふ　吟
馬さしの心も木曾の難所也　徳
　灰に成たる焼飯の皮　彫棠
寒空やどこの紺屋もうけとらす　亭
　橋板たゝむ加茂の川縁（ヘリ）　角
松山の赤い所は道ならん　吟
　石の火入に煙る鋸屑（オガ）　亭
呼られて泥坊すくむ暮の月　角
　倒れた蔵は虫の原也　介我
壁越に一ツのまぬか花薄　亭
　似合しき名のほしき尺八　山川
医師に成坊主に化て四十迄　我
　執筆の膳と替る文台　紅
笠そ杖そ俤にして花の雲　棠
　金に声を付るうくひす　我

文台の記

氷花所持

貞享甲子の年にや河村瑞軒といふものにおほやけの仰下りて難波古江の埋れたるを堀て舟路の自由ならしめよとの恵みあまねき御触について都鄙芻（蕘）蕘のものとも膏沢の歩にさゝれてまいりあつまるほとになんなく山をつきたて淵瀬さらなる川筋となれりされはかの名橋のあとは今は渡りに成て封境をしる人稀也こゝにいに

しへをあふきて今の物好(スキ)しけるともからこゝらあたりにこそ其古杭は有らんなとゝて覚束なき幸を得まほしく奈裏までもとうちたつる鍬の力に任せて此埋木を掘出たり往古称美の風雅のかたみにして殊に類ひなき板目なりけれは朽にしまゝに削なして朽せぬ名物とはなしぬいはゝ山の井を硯にくませ浜荻を筆の軸に切よせてみちのくに紙のあつこえたるをかさねたらましかは人丸の神もその左にゐまし赤人の神も一座の句所をあらそひ給ふまし誠に有かたき宝ならすやよりて当時の達人をして結構に文詞をかさり和歌連誹の讃巻〳〵みちぬ予も其数にくはゝりぬへき由故実はいはすともさとしけれは今の事実をあらはしてかゝる時代に生れあふ人畳の上にしてたやすく此重器を拝みぬる悦ひを述ぬその信うたかふ事なかれとしかいふのみ

晋子書

もる月はむかしの橋の朽目哉

寄山客

しくるゝや太山の堂のから木立　翠袖

艫も舳も消炭斗鵜川哉　水刀

船頭よあれは鳴也なべた越　岩翁

鈍汁の跡は白川夜舟哉　波麦

炉開やまだ形ある雹灰　夜錦

藤棚や寺のうち迄滝けふり　柴雫

きゝやうをは提て行也榕売　太泥

瓜番は三年さきの家来哉　薯子

あせ道や鷺に習ふて稲の花　翠袖

瘭疽程爰をうたるゝ砧哉　蘭関

かはかうや竹田へ帰る雪のくれ　其角

須磨淡路一舟に聞衡哉　川子

恋せすは無眠からん灯籠番　桃雫

灯籠はひくし祇園の表門　岩翁

乞ためて乞食ふくるゝ盆供哉　翅輪

棚経や小僧は親を持なから　問津

情(ヲ)寄-托(ス)帰燕(ニ)

きり〳〵す燕の巣の土ほこり　彫棠

蟬鳴や安房迄見やる橋の上　東流

川狩や蓼かなくりし跡も有　竹巷

良夜に琵琶を興して爰も潯-陽の客とおもひなす酒を

そへ灯をとをめて深更いやましにむら雨の心をはらしさゝめことの耳をそはたつめる感ありかの十三よりしてまなひ得てし曹保は秘曲もさそな人を泣しむと聞えつるすさひもことはりにこそといふにその座閑かなる聞人哉と声をひそむる者はすくなうて長う成レと枕をなけ出すかく無風情の人一芸ありやといへは

十五から酒を呑出てけふの月　其角
一条の戻り馬也けふの月　秋航
上下て馬上も流石月見哉　幽之
雨にしてかうはぬれぬそけふの月　拙爻
袋井を出はなれにけりけふの月　彫棠
名月や小海老はなして手水鉢　我常
名月や揃はぬ雲に空の風　専吟
名月や虫かかふつて鶏のこゑ　虚谷
名月や折と出ちかふ庭奉行　沾徳
武蔵野の月のはしりや須磨明石　如流
　鞍をやすめたれとひとり
月みんかたにあくかれて
　厩に見まひ侍りて
名月や蚊屋にこほるゝ馬の面　行露
　草のいほりをたれかたつねんと
　こたへ侍りしをめてゝくさの庵〳〵
　とよはれしも折にふれたる也
名月やかゝやくまゝに袖几帳　其角
築出した海の面の月み哉　雲洞
年〳〵の船の名よせを月み哉　梅橋
名月や八日の影を三番三　一江
常の気て青野か原の月み哉　一雀
寐る人を蝿てせめたしけふの月　needs_check
竿さして肥リやみゆる水の月　可朴
名月や影はまはゆき膳の上　巴山
餅にして銀箔をくふけふの月　一十竹
名月や座敷へ出たる土大根　蘭関
花娵も里へやりけりけふの月　洲荻
月にさへ家ははなれぬ女かな　秋色
名月は庭一はいの小松哉　松吟
五六人並ふ出村の月み哉　利合

小西瓜や蔓引立てけふの月　支梁
赤ヶ色消て最中や月の隈　巨宇
　いせに住ける庭のさくらを江戸へ
　うつし侍るに二月十二日舟出
　して三月晦日青葉にて着船
　したるをうらみて
竜神も花見なりけん舟ノ上　口遊
糸一ツ船にかゝりし柳かな　機一
　若き人々にまねかれて
名月や我老楽の門さゝす　東順
うそ〳〵と嗅て廻るや菌狩　山蜂
倒なさくらはいつの山崩レ　柴雫
桜より桜にうつす目もと哉　波麦
　草庵吟
うくひすや南の枝に東向　専吟
鶯や藪のはえ込橋の下　弥子
　病中の消息
鶯よ舌を煩らふ我は酒　柴雫
浮魚の底に寒さを春の月　翠袖

俎の御前に涼し夏肴　曲翠
夕立に橋新しきにほひ哉　水刀
　君か代のなからのはしもつくる也
じか〳〵と欄干暑し公儀橋　堤亭
いそのかみ清水也けり手前橋　其角
　橋守ものとはんといふによせたる也
番町のおほへにくさやかんこ鳥　柴雫
初鰹台に潮のひかり哉　太泥
むら雨や床柱にもせみの声　波麦
　黒谷にまいりて拝什物
蓮生は歌はよまぬを虫払ひ　其角
　宇津宮弥三郎頼綱出家して実信坊
　蓮生と号す詠歌集ことにあり是を
　熊谷入道と云あやまるもの也
わつか成蚤にせきたる男哉　薯子
客殿は人きれもなし大切籠　翠袖
この石の根はいつく迄苔清水　水刀
松茸や笠一はいに丸火鉢　柴雫
制札も倒れたりけり冬の蓮　薯子

甘柿や隠居へ見廻ふ縁伝ひ　　弥子

はつゆき三句

初雪やうらは間遠に藤の棚　　専吟

はつ雪や上下かへす途中より　　沾徳

初雪や雀の扶持の小土器　　其角

落葉の句合に

比叡下風護摩にあはする落は哉　　景帘

落柿舎へつかはす文のかへりに

放すかと問るゝ家や冬籠　　去来

行露公あたみへたゝせ給ふに
餞の句奉るへきよし承りて
観遊の御駕籠にみそなはし侍る

脇息にあの花折レと山路哉　　其角

あたみより御相湯のよしにて

吟味仕つめた馬士は鶯　　行露
志賀之助男盛の春立て　　角

贈晋渉川先生書

去来問師の風雅見及ふところみなし栗よりこのかたしはく〱変して門人其流に浴せんことを願へり我是を古翁に聞り句に千歳不易一時流行の両端あり不易をしる人は流行にうつらすといふ事なし一時に秀たるものは口質の時にあへるのみにて他日の流行にいたりては一歩もあゆむ事あたはす退ておもふに師は蕉門の高弟也翁の吟跡にひとしからさること諸生のまよひ同門の恨少からすと　翁の曰凡天下に師たるものは先己れか形位を定めされは人趣くに所なし晋か句体の予と等からさる故にして人をすゝましめたり又我老吟を甘なふ人々は雲煙の風に変して跡なからん事を悦へる狂客なりともに風雅の神をしらは晋か風興をとる事可也　来曰翁の言かへすへからす然りといへとも誹諧はあたらしみを以て命とす水雪のいさきよきも止ツてうこかさる時は汚穢をなせり今日の諸生の為に流行をとゝめて古格を改めすんは晋子を剣の菜刀なりとせん翁の曰晋今わかならはしを得すといふとも行末そこはくの風流を吐出さんことを鏡影たり去来曰さる事有たゝ是を待に年月あらん事を歎くのみとつふやき退ぬ翁なくなり給ひてむなしく四とせの春秋をつめり今先生と東西雲裏の

恨みをいたくといへともいまた我松柏霜後のよはひをことふけり幸にうらわかはの時に逢ぬるをおもてとして古翁の言を起しぬ先生これを案下にさみする事なかれ

丁丑仲夏初二

落柿舎嵯峨去来稿

三上吟（さんじょうぎん）

三上吟

（書き題簽）

歌吹海に在てといひし夜の雨も粟津によする浪の音に力を添ておもひやりぬ然れとも誹言なけれは草の陰にはことはりかましく秋に堪たる落葉をしのひて牌前の塵をはらふのみ也其日これかれをあつむるにあるは侍宦のさはり有旅に住なし病にふし心ンにつかはるゝやからはわたくしならす時移り人かはりて亡人の十指におらるゝ事いつをむかしをよむに廿人也花摘をよんでことに多し文集の酬和をしたへるためし驚神のはしと成て爰に一鉢をほとこさんとすこの巻中に僧あり此僧の風狂を精進物になしてうき世の味をしらせかほに嵐雪もケ様。かやうのすかたと成て候と一しほにとむらひ候へは冬の日のならひとて灯のもとに七吟をみたしぬ

三上吟　懐旧のことは

先師道上の吟は馬夫ともか覚えて都鄙にわたり枕上の吟は所々の草庵に残りて門葉のかたみとたしなめりことさらに厠上の唫とかやは和漢風藻の人々の得たる一癖と聞え侍るにや故翁ある御方にて会なかはに席を立て長雪隠に居られけるを幾度もめし出ける時やゝへて手洗口そゝき笑ふて云く人間五十年といへり我二十五年をは後架になからへたる也と元より心事の安楽止静の観念にいたりて風骨の吟身を脱肉せられけんこの詞厠上の活法ならすや老かさなり杖朽てさらぬ俤のみ今は義仲寺の柿の葉に埋もれ侍り其塚の上に笠をかけたる事をおもひ出て

七とせとしらすやひとり小夜しくれ

芭蕉翁の塚は粟津の
晴嵐を名とし侍るゆへ
今七景の題を探りて
思二往事一ことはりを述

よ所に名たつる

からさきのまつ

しくるゝやありし厠の一松　其角
零余の音のほろ〳〵と霜　東潮
餡（アン）ふくむ児から先へかけ出して　朝叟
矢倉をあくむ鶺令の影　沾洲
待月にこれらか機の荷口也　序令
わさひおろしのありく新蕎（ママ）　白獅
屐の音徒然な顔をほとく覧　新真
卯の刻からや名は辰の市　角
うつり香に薬袋の一二三　潮
剃時はつす大名の髭　叟
川音の背にひゞく夏木立　洲
狐ちらはふあやつりの跡　令
錫杖をふりさけみれは冴（ル）月　獅
日臼を鳴す庭をうらやむ　真
来（ル）衆を残さぬ花の生（ケ）からし　潮
京は久三をおしなへて春　角
蝶々の笠にねて行橋の上　令
びんぼな琴て雨乞をせん　叟
一夜妻又逢事も紺屋形　洲
鯨に添て塩しみた文　真
こほれたる布苔（フノリ）を渡る泪川　角
木の丸殿て御浪人とは　獅
阿蘭陀か心を猿になくさまん　叟
蚊やりをくゝる蚊は饑けめ　潮
そくゐ程残て匂ふまこも艸　真
風待やうに黄檗の幢　令
起（リ）めの疝気おさへて須磨明石　洲
何にならうか本阿弥の札　獅
見し月のなら茶くふたる人そ憂　叟
思草とも一鎌に刈　潮
秋風にさし乳もれつゝ垣の間　獅
慮外を帳に付られにけり　角
昼の色に見えたる箱根山　真
てぐすの波は人にまかるゝ　令
枝の華昔掟の家厚し　洲
箭とりの帯は藤の綾房　執筆

先きく三井の
　入あひのかね

凩や地金て光る鐘の胝　朝叟
耳をそろゆる雪の臭　沾洲
行からにさ湯の絶たる辻もなし　序令
匍すれはたつくり〳〵子也　白獅
月あかき豕の目いかにうかるらん　新真
衛府の火箸に堀起す菊　キ角
松茸の旬か則暦かな　東潮
放下の筋を女にて継　令
野袴に舞を所望の袖の色　獅
暗リ峠よい物はなし　叟
力にて親(チカ)付に成ル大力　角
池のゆるきは沢潟の泡　潮
人魂の都へおつる星月夜　洲
烏の露の十徳へちる　真
軒下に粉糠俵を秋のくれ　令
一剃刀て月代の難　獅

蒟蒻を多勢か中へ花盛　角
能東坊とはやすきさらき　洲
鼓屋は霞かくれをなとやらん　叟
煎薬鍋のころふ昼夜着　獅
十娘(シャウ)の付紙ならて心なし　潮
五畿内を見てさらぬ移香　真
一昏は鬼門の鐘て仕廻けり　令
重(テウ)か半かに朽し斧の柄　角
船守の凍えてかよふ松戸川　洲
疵もつかすに帰参した犬　真
長瓢乾(カレ)もやらぬに物書て　潮
月傾きぬもめんふり袖　叟
後朝は鶏の水を櫛にかる　真
むかしの影を山の井の尼　洲
つれ〳〵て樗を一目見たりけり　潮
金からうしに梁(ヤネ)の艸とる　叟
門閉て宗旨をさばく払子破(ワレ)　令
七ツの年の古郷はいさ　角
花心歌てやめたる狸狩　獅

酒をかけしや石の陽炎

比良嶺雪暮江寒

山陰のくされ屏風や雪の宿
水鳥さはく子共等か関
蛸塚にたれはしかみを植つらん
うぢかはとしてつゐに鑿研
さ月待御壺触たる里の月
声もきほひも鶺に成比
爪紅も墨の尖にのこるらし
腹見て帰る婆の行末
宝引と百万遍と飛鳥川
亀を封する初花の池
片道は石灰の降春の雨
ちんばにたてる公家の大小
夕昏の蚊幮(ヤ)にのりたる伊駒山
鯰の声は笠の下より
ゆら〳〵と杠秤(チキ)のたはこのかけ居(リ)
女房の成は鴻門の軒

執筆

白　獅
新　真
キ　角
東　潮
朝　叟
沾　洲
序　令
潮
角
真
獅
叟
洲
令
潮
獅

悪夢を秡に出はや月の舟　叟
尾花て打は鼻を請太刀　洲
秋ことを六郎君へ遠からす　潮
手向てわらふ盛物の裏　角
顔見(セ)(節カ)も滝井時代のなつかしき　令
筋をしめるは仇ないさかひ　叟
思はすも男波に消ぬ小提灯　真
運上を見て雲に行鶴　令
家捜の先一番に山の菴　洲
菜飯の羹は奇楠(キャラ)に匂ひて　獅
友鼬すかし扇に詠やる　真
まだ供人の鍔口か鳴　潮
さす月も筏に淀む瀑椻　角
翡翠の屎のかゝる我影　叟
吉左右の恋を待也菊を伽　令
和泉式部か孫を持比　獅
山科の捨傘は薬とり　洲
脂(ヤニ)の香を好猩々はなし　真
ちる花は濡身に付ん雫せよ　角

いつ春之下にうつる草案　執筆

石山やにほのうみてる
月かけはあかしも
すまも外ならぬかは

冴行や月に呑るゝ歌机　序令
あら物すこの木葉にも針　白獅
柴刈か猿に小蓑をもどされて　新真
たれ鞘走る谷の脇差　其角
金持た心かまへも四十年　東潮
うす彩色に夜を味ふ　朝叟
転寝に国をとはるゝ清見寺　沾洲
己か虫歯につらきいり酒　真
綿嚙のやえにつもれは指に巻　令
土圭の欲は刻をよむらん　潮
摩耶近し親の日とても参られす　角
空鉄炮を玉篠に待　真
水無月は口も吸へき青簀垣　叟
かねし心は手拭を撰　令

かんな序も物くふやうにいかはこそ　潮
狗の日に来る小白かはゆき　角
細脚に灸ぬ所を月と花　獅
椿の杖にあたら其朶　洲
此石に江戸を見せはや春の風　叟
小僧か髪を一日の泣　令
拍子木に力か入てかしは散　真
むこくしたみし火の酒の跡　獅
神主の母はかならす法の月　洲
段〳〵追に蔦の石竜(カナヘビ)　潮
浜木綿にすへて三里は磨砂　角
太夫に逢て華清宮問(フ)　洲
目の塩に山椒味噌の夕時雨　叟
こむらかへりに何をぬかつく　獅
山鳥は犬追物にはつれけり　令
千間の茶におつる此滝　真
点滴(トハシリ)の筋目なれはや二人扶持　洲
昼間かよふをしらぬ高保　角
一概に文つかみ込たもと口　潮

先吸物と帽子うつむく
たが花と笑ふてやるも八軒屋
初汗かいて長閑さをしる

勢多

夕陽人影与橋長

空の香や頭巾にしめる香の橋
提灯の威は玄猪也けり
ひく／＼と鶏の栄（ウツハリ）曲るらん
しらすや爰は連歌看板
三日の月此出をつゝけ十五日
稽古の中は西瓜ねて居ル
道すから梵論に向ふて轡虫
いさ慰まん訥（トモ）にむね打
埋火の額の跡とおほしくて
軒の鰯をぬすむ酒盛
大字書キ病後の腰をためしけり
天狗のあたり蝉の遠近
一袋京都の揚枝くろむ迄

獅
叟
執筆
新真
其角
東潮
朝叟
沾洲
序令
白獅
洲
朝
角
令
叟
真

延喜の御衣はわれ／＼か秋　獅
新藁に粒納豆をひろふ也　叟
筑波の月の赤土に入　真
物やるも馬工郎か手の其花に　令
北頭にそけふの光明　潮
百里ゆく春は蠟燭鰹ふし　角
古筆に疵の娘かたつく　洲
空腹のはし折おろす恋の門　獅
浅香のかつみ水鍋に入　潮
風下は田歌のころふ時もあり　令
銀を座頭か斎の面目　叟
酌子栗それものこらぬ人心　角
ふとしく建ん御材キ寄の月　獅
切紙て羽織をせかむかけ踊　洲
うとんの釜に大黒の汗　真
朝またき朔日からの悋気也　獅
との小学も前髪の陰　潮
上下て塵壺の鼠あつかはん　真
一むら雨を休むやね葺　角

子心をすかすも曾我の紋尽　叟
新鈴買ていさや催馬楽　令
余花にさえ松は六位のみとり也　洲
池をまかする取置の亭　執筆

鴻雁幾行更不孤
晩風帯月落東湖

夕霜や堅田へかよふあふら筒　沾洲
虎の夫婦か家しらぬ猫　序令
蜀黍の裂目に色を染出して　白獅
銀杏を待風さはく也　新真
月すめは肩にのる子を声て漕　其角
喰こほすのみ馬は年よる　東潮
遺愛寺に瓶をすえ置筆洒　朝叟
農人ともか願ふ一雨　獅
治れる代にはいたゝく足のうら　角
景天草の糸のはりあひ　潮
桶を見て飛騨をうらやむ心哉　令

ねるほとねても典薬頭　叟
鞠二ツ巻縮緬の手さはりに　洲
女蔵人かも逃て入月　角
媒か成さうな物囮雁　獅
定家かつらは野囃子に有　真
花にせん此棒組も下戸ならは　叟
破魔矢に指た草履三足　獅
鶯のあとに十念さつかりて　洲
歯にあてなをす小田原の水　令
此悠に鍛冶の鉢巻はかり也　潮
狼ゆへに密夫も来す　角
蚤ならは忍の浦とうたはれん　真
とにかくこぢて部屋の讃談　叟
連雀を師走の市のみやけ物　令
唐土へむく山の発煩（イシヒヤ）　潮
眩暈に心つくしの日の盛　真
懸目安にて月か照ル〳〵　洲
ちる柳継母所しとけなき　叟
水口籠裏のよはる葛のは　令

三の山いらたか珠数をそろ盤に　角
いひかけに逢顔のけうとき　獅
ほち〳〵と柄杓の水の畳迄　潮
夜るは休むか蟻の東西　洲
きつしくに居(ル)も花の車僧　真
尤つけて世をわたる春　執筆

やはせにかへる船は今
東潮
つゝけとや枯木にさはる帆の光
石蕗の葉けふる松明の落　朝叟
西南かはかぬチヤンの夕はえに　沾洲
辻人形の耳はあらまし　序令
小盗を扇てしばるけふの月　白獅
はたかり草の腰を折風　新真
行尊の鬢ばさけたる茅の色　其角
灯心引の手に津吐(ツハキ)　潮
干ぬうちは画絹の籰(ワク)を打違　叟
雲居に休む棟上の人　令

むら鳥のいつくふれ行飆　獅
三室くつれて入札に成　角
丸蕪の出(シ)によいとは今そ知(ル)　潮
妾の疣は月をめいわく　叟
忍ふ夜の先肩かいて花火見ん　洲
目出たい寺の傘につゆ　真
大かたは末に成たるところてん　令
蚓の知恵はぬれ道へ引　獅
広敷にいつ迄草の木工左衛門　角
御消息にも見ゆる不機嫌　洲
野の宮は独按摩をうちつけに　叟
罪なき配所精進の時　真
鵑人をはつたる賽の筒　獅
ちよツちよとぬくふ衣の染物(シミ)　潮
人参に旅の装束なされける　角
万石とりの門は笙の音　洲
詩工(リ)は虹をつかんて爰にねん　叟
月待波のまなはしを刻　真
彝の軸もつた我をふれもせす　獅

紫苑にかさる少年の母衣　令
盃もはいたる沓を馬上より　角
天晴鷹といふ鳥も鳥　潮
涼しさは光るなげしに滝の音　洲
本尊のために紙子風呂敷　真
ころふ絵を起す所か花の雪　令
小春に似たる春は正しき　執筆

右七局昼夜従未之上刻至
丑之上刻満尾

懐旧詞引

うつみ火やいつ燃しさる檜箸　行露
なつのし水のいくむすひ
ともかけたり

埋火や氷室になるゝ爪(瓜)の数　弁外

遊海晏寺

ちるもみち掃ぬ心や僧も鹿　周東
達摩忌やかりほの上の包み金　闇指
かねの声無常頭に落葉哉　専仰

飯台や五器も汚さす納豆汁　山蜂
暮寒し刃鉄吹出す市の声　江蓑
机出せさらに三余の雪の富士　領斉
摺鉢を四の鼓の寒さかな　兀峰
鵙の尾やいつふり切て霜構へ　白桜
思羽の紺青さむし御前池　仙鶴
泥亀のふらぬ目をみる落葉哉　雪花
関寺にたか寐起なるつはの花　梅女
川越に談義聞ゐる枯野哉　沾徳
しくるゝや笘より覗く灯籠堂　楓子
沢蟹の鋏〻も赤し今朝の霜　琴風
から鮭のはたへ也けり鉢敲　口遊
冬枯やなにはの芦も曲りなり　高尼 日寿
瞬の昼をは何と神無月　我常
さゝん花の蜂や其麟(麒)も老にけり　心水
酒買に陸にあかれは玄猪哉　魚千
水仙に兎うかゝふ霜夜哉　景帘
湯豆腐や粟津の雪のまくり切　紫紅
旧菴にしらぬ僧あり初しくれ　百里

凩やさし木なりしも森の声　暁松
松笠のひとり立たりうす氷　全阿
筆頭（サキ）にはぬる木葉や三上山　栢十
しみ〳〵と子は肌へつくみそれ哉　秋色
みそ萩の種はこぼれて枯野哉　昌川

　石の苔をあらひ塔婆をたて
　短袖に香華をとりて

回り来る空や小春の旅日和　桃隣
孀なる蚤もあるらんさよ鴴　友雅
梟や暁起の炭ふくへ　凍雲
さはしるや一枚障子冬杜（牡）丹　青峨
蝉丸と凩対の隣あり　太岱
白波の畳むに遅し初木葉　懐山
立舞や里へ鴴のはねつるへ　素海
山水に後れて得たり枯茸　雪川
初霜や油をしこくむら雀　由之
椋ちるや城の稲荷の小豆飯　橘叟
凩やしらりと星の目を出す　後凋
落葉見ん人もほつ〳〵切通　涓泉

鳥の屎またかたまらぬ落葉哉　竹船
炭釜や峰にとたえし雪の僧　石泉
埋火も心もとなく待夜哉　香山
海越に田地をぬらすしくれ哉　里東
つかもなき所へさすや冬日影　野径
北殿や落葉かうへを島つたひ　潘川
きら〳〵と比良は月夜の時雨哉　微房
身は楽に時雨て通る野馬哉　棧香
蕪粥をさます堅田のあらし哉　立朝
投た猫訴訟顔なる衾哉　入松
飯鐘にうつろひやすし比叡の霜　向漁
水仙や氷る拳を菴まて　里扇
口真似の荆也ける枯野哉　皆可
凩に南かしらやうかぬ顔　月圃
その人はもし渡唐もや初霽　回川
松風に自己のはたへを火燵哉　是橘

　かれ尾花のあらましにて
　門人をしのひ侍り

次郎兵衛は何あきなひを夷講　横几

禅堂を覗く音せぬ落葉哉　千琳

故翁きさかたに遠遊の年あり
渟海のはてしなきおもひを
晋子にかたり侍るとて

象潟や竜の尾わかる村霽　其雫
そのゝちや雪三尺は茶一服　紫塵
蓑虫の下に何着て時雨哉　秋航
七尺やかたへしくるゝ金柱　露柏
新発意の後の父母也帰花　甫盛
凩よ吹のこされて檜笠　素林
橋守よ松はかれたか雪くもり　釣月

折腰

冬借の五斗俵出たりませの菊　亀毛
一休の魂のるかおち葉舟　予象
霜も雪もけさの茶にしれ水車　我助

しら露もこほさぬ萩のうねり哉
とからひたる有ましをゑさんして
たうひける七とせ先のいき皃を
見ぬ世の友におもひなして

画心のしはめるさまや比巴(枇杷)の花　専吟
しこる碁や何れ置手の霜柱　適三
水仙の若葉の露や宇佐美笘　西花
あけ火燵よこ折ふすやさよの山　一雀
十月や紅葉をしほる鳥の音　撃水
松の鷺氷のうへをうらみ哉　虎竿
けふはかり至楽をよむも時雨哉　指馬
待人の陽やあつめて冬牡丹　千調
草も木もにらみ付たり冬の月　玉陽
常灯の待乳山からしくれ哉　毎閑
杜若ありや研屋の冬かまへ　兂月
焼味噌は鳥の空音の霜夜哉　大町
凩や栄螺吹込板ひさし　東鑃
初雪や鱠に盛て二子山　檀泉
霜時雨それも昔や坐興菴　嵐雪

懐旧七唫後序

境中人毎為物所転。而不能自立焉。夏見紅衣則覚熱。冬見碧衣則覚寒。流注顚倒。

全堕五里霧中矣。境外人如泥之珠。如砂之金。入垢穢地而現清浄相。不必厭垢穢。不必着清浄。卓然常遊于諸法之外也。在昔欧陽公煉文字。戯説三上功夫。掲厠上為其一。顧文章者呼吸宇宙清気。而雪橋之馬風窓之床固其所也。安得踞穢土之厠。以助雅興哉。然其与道上枕上並称。鼎立為三奇者。豈非吾所謂入垢穢現清浄之道耶。且夫人世満前種種幻相孰非垢穢。金璧如瓦。衣帯如械。宦門如阿鼻城。魚市肉山如尸陀林。濃蛾靚粧如革嚢血。雖曰青山白水。究竟亦蟻蛭蹄涔耳。然則娑婆界中是一大厠上也。吾人生於斯。老於斯。病於斯。死於斯。則舎之将安往乎。要在于得清浄心。以入遊戯三昧而已。復何区区問三上之清穢哉。芭蕉翁曾以巵言鳴。及晩薙染為僧。芒鞋竹杖率以羇旅為宅。蓋其心悦嚮所謂境外人而慕焉者也。一日与諸客会如厠煉句。譚余及此。当時以為一場閑話。未知其味。東都晋子出于其門。而青於藍者。翁没七年于茲矣。庚辰冬十月十二日。値其忌辰。乃集同社六人。作懐旧七吟。因論先師厠上功夫。以晃其首。晋子帯妻児。売塩米。使酒啖肉。毎往来軟紅街中。其作新奇壮麗。不以先師枯澹為範。蓋能得翁之心。而不践翁之跡者。是又非世俗境中人也。否則豈能窺其玄以論厠上之妙哉。噫学此道者。苟不知其心。而同其跡。徒以厠為腹稿一術。則其不与李赤遺臭者幾希矣。不知使紫姑神聞斯言。則亦拊掌称善哉乎否。

亀毛居士戯書于

柳浪舎

焦尾琴

焦尾琴　風
（題簽）

焦尾琴

貞享甲子の春二月仲旬に上京せしより日記といふもの有元禄戊寅の冬にいたる迄は一日怠らす袋にからけ箱につみ破れかはこにあまりしを同師走十日のあした池魚のわさはひに及て一‐塵なく失ひ侍り幸哉ひゆほんの火宅を悟り人をやふれりやとの悲しみにかなひて一朝一夕の悔なき事にたはふれぬそれよりは瓿醬をおほひ諫艸をやき捨たる先‐進の志のみ忍はれ侍るにのかれ出し焼野の草もいやほこりて小屋の住ゐの侘しかるも物たらすしも昔おもふなる春雨しめり桃桜なと折〳〵の送リものと成ぬるそかし旧友のかたみといはれたるもおかし権‐貴のもとめに逢たてまつりていなみかたき畳紙なとも今さらおろそかになしぬる事はた先師亡父の愛にめでなくさめ艸とせし巻々半は泉路にかへりたる追作の詞見し山渡りし海馬駕輿のねんりをぬすみ歩路の杖にむすひたる艸〳〵神社仏閣の信情ひとつとして鏡を尋るに似たりや〻思出る事のみを忘れぬ影と書つけしかは小双紙と成ぬ草根よりの風情なれは此集の名も心つかさりしに蔡邕か竈よりやけたる桐をとり出てあらたに一張の琴をつくりしに焦たる所をのつから竜尾の景に成ぬるを名つけて世に焦尾琴と伝え侍るおもむきを彼名琴にならはゝ人もあはれと清怨にたえてかへつて称美琴なるへくや元禄辛巳のとし雁かへる比是に題す

晋其角

焼のこる琴に恨みの柳哉

尾‐焦匪ニ栞テ恥スノ手‐裡ニ灑ク松‐風ヲ
鶯‐語有リ余‐曲 幽‐花夕照ノ中

午寂題

焦尾琴

黄鳥之篇

うくひすやはしと足との都鳥　行露
　うら〳〵にねせて猫に黛　其角
此人にさくらも汗や流すらん　白桜
　あまりの事よ水でそは切　毎閑
けふの月囲へはつす高鼾　角
　呼ぬによるは尋常な鹿　桜
たしなみの芋俵かとしゐかもと　露
　さむかる顔は生キた見レ得　閑
つみ交に藻魚かさこやかなかしら　桜
　唾はとんて窓のはな紙　露
干わたす具足の中に真ッ裸　角
　生姜酢はかり何やらの鉢　桜
貰ふても大きな枕苦に成て　閑
　座頭も鳴に見えし看経　角
竹垣やかゝしの骨にぬかれたり　露
　井をひまにして澄す月影　閑
雨(アマ)犬か棒をひかゆる花の袖　角
　芝の菫に放す阿蘭陀　露
弥生山越て何をか猿の菓子　閑
　有王今は無束奉公　角
ちりめんに波の参るを恋衣　露
　みよりも馴て手を〆る鷹　桜
我に成て内へはいらぬ佐野の雪　角
　岩ものつけに賽を打込ム　露
朝なきは舟こきよせて夏念仏　閑
　雷のやく梵木さひしき　桜
十万坪口てこそいへ峰の松　角
　乗リに引せて駒のふんどし　露
横を着て是は五郎か冬の月　閑
　医師の長居は下手に極る　角
花にさは豆腐の恩をおもへたゝ　露
　くり矢に雉子は七里遣排　閑
八巾きれてかけ込者の付届ケ　角

赤いもの着てわたる宇治橋　露
夕へ気をまた候酒にたかむしろ　桜
鈴廊下より内は息つむ　閑

鶯よいて物みせん杉鋏ミ　其角
うくひすになしみかゝるや大和越　秋航
鶯のあくひをうつす宿直哉　合志
うくひすや横雲引て照かまへ　十丈
鸝に杖あたゝまる山路かな　紫紅

梅花之篇

四十の賀会し給ふ傍に
宴遊侍坐しけれは
御秘蔵に墨をすらせて梅見哉　其角
すゝめ子を鳴琵琶の飯粒　里東
蛤を吹革にかけて春もなし　潘川
寐てあふのけは空へつく舟　残香
くれの月釣荷の絹の十文字　野径
夜は索綯刈上の小屋　角

松の枝うたれて鹿もまいらぬよ　東
桟敷峠は幕になる雪　川
樽味噌に大脇差もからけたり　径
憎い上戸のおとかいを割　香
五月雨に身を嗅はかり時鳥　角
こんにやくあたまあぐむこり須磨　東
寝こかしを明日かへる迄ゆめいふな　川
つめられて死ぬあとか三か月　径
能登殿の心は野分山下風　東
馬を茶臼にまはす秋霧　角
見わたせは花も紅葉も鮫の皮　径
水あたりして枕ともかな　川
四畳台是はつかへぬ夏気色　角
片むら雨に無レ竹ヲ泣　東
茜さすあこうの出目を引上て　川
足軽からもけふの地颯　径
沼津絵の腰はやふれて古ル御堂　東
あの石とつて歯のぬけた庭　角
茸狩に得て牛屎をつかむ也　径

三井の獄屋の人しれぬ月　川
侍の直売もならす衣うつ　角
短気な犬の引綱をかむ　東
蒲生塚へ二里程廻る大井川　川
愈た跡から腕になま疵　径
すゝしさや中衆に馴て升枕　角
つけ山椒にちよくを盃　川
行灯の一間やきはみねの雲　東
冠もにほふ勧修寺の鶏　径
はら〱と花は田中に五六反　川
風あたゝかに襟まはり吹　東

〇羅浮の夢を
おもひ出て
鎗持かんめに鼾やかほよ鳥　露江

寄梅祝
年号も千代は覚えてけふの梅　海屋

梅年久
我まゝな姿にむめの年を経ぬ　紫香

尋梅花
おもひきや尻やけ猿の梅見とは　梅橋

隔年見梅
さても梅見ぬ年あれは和田か酒　沾鯩

梅満庭
うたて梅迦陵頻伽も宿からん　秋航
継合の礼の人数やむめの宵　心水
番船や見事な葱梅の枝　幾石
竪石やむめ見る燭の置所　泉石
むめかゝや木履のぬけぬ畠中　野径
東なる若党部屋かむめの花　潘川
風少からむ匂ひや鉢の梅　甫盛
袖にうつる若衆の影や梅の月　尼日寿

芭蕉庵の沙弥艸庵のかけ物
なけれはとのそみ侍るに
串柿に梅をかきて送るとて
せめてもの貧乏柿にんめの華　其角

堂上燕
老僧の手炉をはなれしつはめ哉　合志

花に炊(カシ)かは瓢箪(簞)の麦　其角
家原は猶なかす目にかけろひて　重巽
鞠より早く門へ飛出る　機一
袖の月背中箒する藪虱　角
猫あしらひに撫る駒曳　志
殿守の鑷子とり置鶉棚　一
扇の風も茶臼しふとき　巽
逢夜はの叱に腰をおされけり　志
泥て一しほ白無垢の児　一
四宮の勧進能は中たえて　巽
世になき宿も弓を心杈首(サス)　角
きのふ見ぬ襦半也けり駕籠の者　志
夕たつ原はなてし子に蟬　一
はみちらす狐の飯も御祓川　角
根つけのやうにすてし観音　志
照月に局ひとりは寒気つく　巽
骨をたてたる咽は雁かね　角
葛のはのうらて仕てやる手綱引　志
杖も箒も見えぬ中堂　巽

忍はすの亀に舞たる几巾　一
請状ひまは歌の行かひ　角
蒜喰の大ふり袖よ月の雨　志
よはいお酌は陸からもせく　巽
岩橋の鼻紙袋明られて　一
うき世の伯父に成としの暮　角
生鯛か心にくさる艸の庵　巽
木履をふさく石壇の鶴　志
日さかりの雲より落る桐の花　一
漆つかひに半虚労なり　巽
秤目のたらぬ丫丁(ワテウ)かこすの隙　志
千畳敷にまけぬ直垂　一
皿茶碗おさめ所は天竜寺　巽
丁子の泥をさます山眉　志
花に折孔雀の玉のあさやかに　一
汐干まつらんうら島か孫　角

引燕

むら雨やつはめ羽をこく棹の先　秋航

琴の手の巣にこたへたる乙鳥哉　枕舟
山のはにつはめをかへす入日哉　キ角
竹植てあれ燕のすりはらひ　幾石
大仏の手にすくはるゝつはめ哉　秋田 谷羊
十六て男もたぬはつはめ哉　楓子
小田かへす鍬も琴柱や残る雁　其角
まてや雁晴て周防のねりけ灘　楓子

花桜之篇

鳥ㇾ啼花ㇾ落テ人何ニカ在

渓一つさくらはかりか雉の声　露江
黒鹿毛や花も夕日に一走り　闌幽
盗まれた馬を見に出ん山桜　云暮
国馬士に何そやりたし初さくら　一雀

斜日ノ落花人散シテ後

人たえてせかすにちりし桜哉　行露

御朱印三石の土産ありて

鍬鎌の律師はつかし山桜　楓子
うつくしい顔に化粧や花曇り　進歩
花くもり汐先にほふわかめ哉　新真

古歌にいはくとよみかはして

前髪はちりもはしめす山桜　楓子
雨粒やされにいひなす花曇　暮園
出る杭や椀せきとめし花の波　大町

立君をあはれむ

幽霊に出たつもすこし夜の花　楓子
ざれありく主よ下人よ花衣　其角
牛の尾に髪はねちけて姥桜　堤亭
花あれは蔵のひまもる袖の月　紫紅

当地にて惣右衛門ともいへは

夜桜に左右かと人の行かへり　昌川
むら化粧花にあかくか台所　口遊

矮屋に屈伸して妻奴の膝をくるしめ津の国のこやとも侘たるに象潟の蜑のとま屋になして心ゆかしめよとや高園の桜ともをみかさに折て送給はりけるを有かたく詠侍りて

傀儡のつゝみうつなる花見哉　其角

御馬給はりてむかへられ侍る行程
　霞か関をこえ侍りて
白雲や花に成行顔は嵯峨　同
　右は袁中郎か面上有ニ西湖といふ
　句によせたり其日高亭の吟
さくらかり夜鷹の口をのかれたり　行露
雲を出す山に捨たり花のくも　同
頬白の鈴ふるかたよ初さくら　闇指
夜にまけて昼のくもりや初桜　市中
星ちるや鶏もいくたひはつ桜　重巽
ねちむけは岩につかへて山桜　楓子
水遣や桜流るゝ二三日　秋航
曲水におちくる淀の椿かな　灌木
　ぬかれてありく春風の笠　幾石
うくひすを三間鎗に追出して　玉芙
　賤妻かかいた下馬の人立　其角
長綿の台にかくれて暮の月　野人
　白萩いとふ翠簾の四這　木

盛こほす鱠刺身の小鷹狩　石
　唾て墨をする石の角　芙
捨人の肘にかけたる幣袋　角
　蟬にくらへて増な生纚(キセン)シ　石
座をかへて袖と召るゝ時鳥　木
　かたう封してあまの橋立　角
後へ成沓箱持は蜑小ふね　芙
　火播にすくふ塀の雪山　人
飯の湯も薬に匂ふあはれ也　石
　やたらにくふて花に酔馬　芙
はゝ木々は大門口のおほろ月　木
　乳みせぬかと雛さかすらん　人
撫つけに後むかする長廊下　芙
　夏も間して松尾の三木　石
小蠅(サハヘ)なす世間なみとて下り腹　角
　かつく袖なき一尺の振　芙
汐先の足は二王になるみかた　人
　乱るゝ髪にわれと悪口　木
寐すの番唐紙ぬけて返事する　芙

戸樋のあまりか布引の雨　人
くま笹のひよこをさかす母の声　石
皿のわれたに亭主しつまる　角
有明に牛若見えぬ本陣宿　木
とこへとまるか萩の焼さし　芙
輦に紅を葺せてもみち狩　人
たかれて死はかいとりのうち　石
忍はぬに犬のほゆるはいたみ入　木
篝にうねをてらす野の川　芙
弓取の花に押来る鈴鹿山　角
うつさはこれを埋忠か雉　木

関宿ノ旧寺

かすかいに古枝もすてす大桜　楓子
溜(メ)を樋守のひらく春雨　其角
うち霞鶴に野駒のかけ込て　琴風
荷ふて行もしらぬ艸伏　子
中栄螺小さゝい分る門の月　角

手をくむ躍井筒也けり　風
紅葉に竹禄なをす車路　子
刀にからむ篠掛の霜　角
つよい酒そろ〳〵引に鶏の声　風
裸に咄す千両の負(ヒ)　子
女房に鎖をおろすも名に立ね　角
瓜田の花にしのふ黄昏　風
時しらぬ富士は三島の蓋(フタ)に成　子
鯨か吼て汐くもる月　角
僧ひとり博奕の中にあへて置　風
しつくも水の濁る目薬　子
花盛壮(ワカ)いはれは詩も浮ん　角
三里はほたん雪のあと葺　風
岩くゝる締(サンセウ)魚も春の水　子
うては鼓にひゝく空ホ木　角
夕涼み寺より畳かつかせて　風
ちんばの妖かみゆる腰元　子
片糸を根緒によらせて云よらん　角
はつに勝手へ通る神鳴　風

そよさらに破乱の椶櫚の瘡あたま　子
役者に鎰をわたす日‐没　角
雪くもりけふは大工も爪を吹　風
はつて啼ぬは鬼子なるらん　子
雪隠に猿か戸をさす月は山　角
八重に稲つむ先‐方の家　風
世の秋や甘い辛いもかみ分る　子
むかしに成ぬ吉首座（キソン）十七　子
音羽とは切ツていたゝく桶の音　角
吐たい時は傘も杖　同
足軽のかたう逃さぬ花のくれ　風
階子あかりにひはり渦まく　同

一筆令啓上候とまねかれけるに

初さくら天狗のかいた文見せん　其角
管簾肩からはいるさくら哉　景帘
簔はきつ吸物またて初桜　心水
さくら木や鐘を嗅来て犬の声　露柏
そりかへる人や桜や花の滝　拙爻

松明に鯉持そえて山さくら　左琴
迷ひ子の一膳ひえてさくら哉　新真
一むれに夕への寺へさくら風呂　三弄
ちる比は駒のけあけも桜哉　幽穴

君か光に花もさかへんと
老のくりことを聞て

たんさくに八十八をさくらかな　苔浅

三月廿日含秀亭の花に
専吟を供して山ふみの
御供しける当座に

御近習や花のこなたにかたを波　其角
山さくら人をのそくや松のひま　専吟

目黒の西南に山庄あり別‐有と号す
天地の人間にあらさるにこそ緑雲の
軒ばを深く閉て修‐竹こまやかに
聴‐澗の流に盃をひたし学‐長の窓は
蛍雪にかゝやき四方に四の景を備ふ
巷（タ）に花をふみ富士額（ヒタイ）におほへは
昏に東海を望んて吟舌に甘露

を得たり主人宜雨公けふもくらしつと
引たて給ひけるに酔倒して
二すしの道は角豆か山さくら　其角
勝概三十二の景色をのへ侍る也
ちる花や狐の穴をみほつくし　宜雨
散花やせきだの客に棒を出す　虚谷
猪のひるね処や花の友　叉雪
お内儀にしかられて居よ花に樽　亀毛
花守にゐらるゝかほや髭のはて　落霞
（級）
釼照や岱のさくらの町屋迄　虎竽
宋景濂か賞レ桜ヲ日本盛ニ於唐ニモ
如レ被ニ牡丹兼ニ海棠一
評判をさくらにつらし牡丹限　行露
門をかまへて柳門のちりをはらひ
隣つからのうくひすを聞折ふし
御用よぶ丁児かへすな花の鳥　キ角
花盛ふくへふみわる人も有　同
山中吟
嫁馬や関をこゆれは花盛　楓子

山家
鸛の巣に嵐の外のさくら哉　翁

牡丹之篇

牡丹どもみな唇やわかれ霜　含曲
山陵の巣に寂をます山　其角
やふ入の天の羽衣まれにきて　周東
のはす拍子にとまる画莚　銀杏
手本米袂からもるくれの月　角
うす氷ほとけふるしら菊　曲
槇たつや開山堂は鳥のこゑ　杏
土岐のかた見か掛盤の紋　東
こひ衣おり〳〵きねは畳み皺　曲
四判を待て中宿は宇治　角
五月雨や水しやと申すうつの山　東
幾日ゆられて舟の諸白　杏
きさみ昆布称経櫃に哀也　角
何首烏の虫の蔓に淋しき　曲
けしからぬ野分の朝の革頭巾　杏

月はますみに止波の高砂　東
身をひとつ花に降るゝ滝見台　曲
ひさく押ゆる蟹のかけろふ　角
場乗の鞭に成けり百千鳥　東
道後木綿のそめは遠州　杏
室鞆は去年の歌を今やうに　角
手を引あふてころふ薄雪　曲
燭台を配りそこなふ爰は闇　杏
髭むしらるゝ角助は鬼　東
長刀てまくりたてたる橋すゝみ　曲
晴間をまつか傘の蝿　角
松茸の歯朶にかくるゝ元枝折　東
粉河の鍛冶屋有明の声　杏
秋もなしあはれ昔の冶郎顔　角
又気をかゆる中立て酒　曲
高砂の松葉を樽にかき入て　杏
うつゝか夢か湯迄輦　東
仇人を夜着にへさへて土竜　曲
扇にはさむ碁笥の煎豆　角
木へゐさり乳へもとるも花心　東
柳に箒も砂水の跡　杏

牡丹引

老僧や如意も落さす白牡丹　其雫
唐物屋あとにほめたかふかみ草　兎谷
さりなから雪をよきつゝ白牡丹　重巽
うち見から小声に成てほたん哉　幽竹
子の代に成て栄えしほたん哉　合志
きよつとする顔はかり也人牡丹　秋航
いにしへのならのみやこの牡丹持　其角
年々にかはるほたんやたはこ入　沾洲
雨雲のしはらくさます牡丹哉　白獅
明日喰ん物さへなくにほたん哉　楓子
ほたん見や掃部の咳の明はなれ　朝叟
　朝の花ふさを
東雲のほたんも雲のはつれ哉　露柏
諸侯より先へ目見えそふかみ艸　楓子
　夕の房を

入相は上を鳴行ほたんかな　琴風
うかれ女や異見に凋む夕牡丹　其角
筑前紅を送りける人に
しらぬ火の鏡にうつる牡たん哉　同
露江公の御園に芳￣誉を見侍りて
きりしまの山かけに盃をとる折ふし
そり橋に下人のうたゝねしたるを起して
おほたんや供につれたる秦舞陽　専吟
紅と白とを竹筒にさして二面に
見かはしぬるを源平なといへは
双牡丹かくて見￣目かかく鼻か　行露
灌仏の香楠にふすほるほたん哉　魚千
衣かへ躍らは屏風越ぬへし　琴風
袷哉おやまつかひの品さため　景帘
馬場乗の母衣に吹るゝ袷哉　専仰
篠鞘にこそくられけり衣かへ　行露
爼板に鍋やすえ出て衣更　沾洲
寄甘己
白禿のなをるはかりそころもかへ　其角

芍薬もねすりの紅としほれけり　紫紅
酔さめは枕にしたき青葉哉　青川
諫少年
若葉から身をかへり見よ明日檜　楓子
此かほり降う南や桐の花　子葉
屐はいてあなはら〳〵や郭公　沾徳
韋駄天の雲のあゆみや時鳥　午寂
尼寺や男の声もほとゝきす　楓子
すゝか山猪にあふ気を鵑　重巽
時鳥窓は小雨て茶の葉ゑり　里東
小鼓の車になるや鵑　苔浅
夕くれの班女しつめよ時鳥　我常
曲￣終テ無シ二人声の題を
暁の反吐ヘトはとなりか子規　其角
又万葉をとりて
一声は醤の骨かほとゝきす　楓子
時鳥地震に似たり縁の人　専吟
山畑をうねりてそ行鵑　虎笭
時鳥初瀬の榑橋足駄かけ　其裔

ふんぬいて風引夜半そ鵑　琴風
時鳥夜も江戸なるかまと哉　十流
子規四十といひしよそし哉　潘川
辻番て若衆とめたり時鳥　行露
鵑小野にともなへ立眩（クラ）み　堤亭
夜這ほし鳴つる方や郭公　キ角

猿江といふ水村にて

くらふ山材場の日陰やほとゝきす　同
足もとに馬の屛や麦の宿　鵬花
つみて来る袂をかへす新茶哉　考逸
あちさいや鵜の目かへしの山一ツ　梅扇

小坂越にて

大名の巻てくたるや青葉山　其雫

六万部寺にて

立よらは山帰来のめ木葉闇　楓子
水札おろす畠境やうすけふり　行露
篠かけに花をむすへる葵哉　口遊

重五

鎗持かつめに出たるちまき哉　竜尺
物さして粽を切やお乳交　玉芙
楊弓に鼻油ひく粽かな　露柏
清貫もわら屋の軒の菖哉　甫盛
卯花やいつれの御所の加茂詣　其角
うの花や傾城町へ背戸つたひ　虎笭

祝二産（ス）育一（ヲ）

さりけなき針事うれし若楓　同
たかうなの皮に臍の緒包みけり　キ角
青梅や乳母か手つまの玉かくし　幽穴
三ッ七ツ標（ヲチ）て梅あり双林寺　三弄
青梅やそれよりもれし塗屐　入松
梅漬の番してゐるか犬張子　竜尺
擂鯛の間はこれ也島卯木　玉芙
みづ〳〵と四月の山や朝ほらけ　竹平

同しうらみなる人とうらなく

ふるさとをかこちて

みしか夜に同し手筋や旅の夢　青宵
雑魚にゆるうちにとて見ん牡（杜）若　虎笭
足あとの蜘手にあるや牡（杜）若　沾徳

唐犬の耳のゆかりやかきつはた　自悦
人足は井せきにかゝれかきつはた　楓子
水漬に泪こほすやかきつはた　其角
花あやめさかりは今そ三ケ一　闌幽
くさる迄縄にたすかるあやめ哉　灌木
五月雨に舟よふかたや土堤の暮　其雫
すろの葉や鳴とも見えす五月雨　更互
鶯や音を啼こんてあやめ艸　円水

呈餞露江公

はゝ木々や人馬へたつる五月雨　キ角
まはゆさは鮎の藻に入あふき哉　幽竹
烏とふ紺のあふきのあつさ哉　キ角
水といふ物きれい也心ふと　毎閑
昼かほや堀かねの井に甲鉢　爻雀
ひる顔や窓のひつみは烏帽子折　大町
麻村や家をへたつる水車　キ角
業平に成てひるねや麻の中　楓子
牛しかる声もくるしき田うへ哉　三州 膏車
ぬれ髪を吹れに門の青田哉　汀鴉
菅笠のほそ脛よりそ田植歌　専吟
順礼か棒を入けりさなへ打　琴風

つくは海道にて

田植時たか根の雪や鳶からす　楓子
汁鍋に笠のしつくやさなへ取　其角
鴨の子や古根は氷る芦の中　周東
葭きりも小野とはいはし葭の中　行露

未来の花をつまは酒をたちて
病をさけよと有し母をこひて

灸にて侘言申す夏断哉　子葉
朝露や関屋漕ぬく舟茄子　専吟
とかくして一ツとめけり花茄子　琴風
吐ぬ鵜のほむらにもゆる篝哉　其角
夜も明は此鵜飼をそ猿廻し　専吟
むら雨の木賊にとをるあつさ哉　キ角
涼み哉大川はたはまゝ子立　琴風
水無川猿も落来る涼み哉　立朝
勘当の月夜に成しすゝみ哉　キ角

涼不来

廬生との夢かとはかり雲の峰　行露
香薷散犬かねふつて雲のみね　其角

新涼侵」衣ヲ

風高し逃て居かはる中二階　水石
検校の仏たをれやすゝみ床　重巽
舟へ飛判官とのゝすゝみ哉　幾石
水垢の横に投たるすゝみ哉　潘川

山本道鬼古墓

涼しさや思まふけて法師武者　楓子
行灯て海をとりまく涼みかな　秋航
ぬす人の寐所すゝし鈴鹿山　一雀
錫杖も水竿になるや涼み舟　拙爻
川簀垣牛の子とりの筏かな　楓子
舷を玉子てたゝくすゝみ哉　其角

小金の原打過るに

艸いきれ駕籠に云つく野駒哉　露江
建こんた家や谷風端すゝみ　行露
空色は水てゐなからあつさ哉　同
亭主はと問は岩ねのし水哉　適山

夏草にくんろく焼て涼かな　愚口
涼風や筧に添て七まかり　専吟
壁ぬりの鏝のうこきや雲の岑　闇指
いき〳〵と草も沈むや雲の峰　更互
涼まはや人目おもはて梁(ヤネ)のうへ　心水
目も涼し甍の鸛のかへる空　楓子
指くひし鼠も出たり此蚊やり　鈍子
香需散すたるやもらふ料理人　竜尺
なてし子に額おさゆる昼寐哉　専仰
午時は実盛になる祭かな　玉芙
夏艸に軒は榑木を小山哉　楓子

大雨大風空水をうかつ日

吹降の合羽にそよく御祓哉　キ角
川風や茅人形の立およき　景帘

槇の島にて

うらやまし豆腐とりまく御祓川　琴風

焦尾琴　雅

（題簽）

焦尾琴

名月之篇并行のことは

午寂高兄名月の歌つくり給ふを予に興対していはく凡行歌のたくひは唐人才士もつまひらかならすとかや此国の長歌もいかにうたひ侍る事とも其品わかちかたき事なから今やうの朗詠ともてなす旨趣をいてやとておもひつゝけ侍る也

白拍子静か朗詠は俊恵法師の作りてうたはしめ給ふとかや自筆の一軸を百余章とりそろへてつたへ持たる人有自庵隆達坊か一筆自作の証歌は室君の手箱にのこりけるを宗勲入道ひとよ切に吹合せて今も世にしけれ松山の風情をうたふとかや烏がなけはもいのとや家々酔賞のこよひとて只一ふしをうめき出はおもふくまなく心晴て老の恨みを忘れ若き情をふかめあひて物おしうつるなかたちならすや

逍遥院殿御家集に寄小歌述懐

　おもふことなけふし声にうたふ也
　　めてたや松の下にむれゐて

と聞え侍るそ御土器も数めくりて有明の月ふけぬと物のはえある御ありさま也昔早歌うたふもの〻題に

　もろともに月にうたはんけにやさば
　　今はたたれもさそおほえぬる

けにや娑婆とうたふはかなさをなと忘れめや人我年月いたつらにしも兎臥かくさめておもふさまなる身のうへの悔しみあした夕に胸をなでゝ亦三盃の影をのそむぞくゐの八千。猶百千成へし扨も玉敷のかゝやく砌。閣々堂塔の海山島輪松杉荊棘の霜露をわけ艸の莚の尻いたきも三五の月にうたふには三弄か笛をよせさらめや彼四の二物語と申す風謡もやごとなき筆のすさみとかやことにけやけき物なりそれにつきて十二物語といへるも有リ遊君の名ともをかそへたてゝいと艶声をかすりあけ仇めきたるむかし歌とかや人うつりて風情すたれたり予童謡歌舞の

いにしへを思ふに明暦年中の双紙に登リ八島下リ八島といふはやりかなる事とも十二段に分たる有六字南無右衛門正本と奥書し侍るこそ数奇ものゝ名にふれたる雅なるへけれ家風にふける四座のみならす幸若の遺流平家の絃曲尺八鼓弓の手術(ナラシ)鐘磬商宮(シャキリ)律の口真似にもれて洒白の風流に伴ふ人三味線こそは秦の阮咸か工みて摘(ツミ)そめたるものなれ笆笊こそ聖徳太子の翫賞なるを今もするすみの一派に吹すさみて音色も時にあへる国風をうたへはをのつから哀不傷の気を感し楽不婬のことはりをもれすしも独明ほのゝ雲に吟笑スといふ心を

人音や月見とあかす伏見艸

あさつま船に鼓を入て月を見侍る女の水干に扇かさしたる絵に

おもふ事なげふしはたれ月見船

独座独酌の時五竹の菊にそふて書す

十三夜　加茂政平

暮の秋ことにさやけき月影は
十夜にあまりてみよと成けり

此夜の月聖廟の詩をはしめとかや和歌には忠度の百首にて見及ひしを今来は名残の月とさし田舎人芋名月栗名月とならはしていへは誹諧題には後の名月と立たるを後の月見といへは文字あまりしたりとて誰人か後の月と沓冠に定め侍るは私ならぬ姿也その五文字のみにまとはれてみつからたしなめる工みにしもあらねは物かたりよむついてに石のうへにはしりかゝる水はせうかうし栗の大きさにてとありしこと葉のいきほひいさ清く九天の月に仰かれけるにおもひよりて

白玉に芋をませはや滝の月　角

をのつから十三夜の対影をひゝかし侍るにや

己卯のとし良夜野分して大雨
洪水夜に入て人家を破る

雷に梶はなひきそ月見舟　同

快晴を吟する事題の本意なれは
山庄に宴友をもとむる折ふし

名月や又吸物に鳴子曳　行露

名月や松にかゝりて丹波栗　魚千

含秀亭に侍りて

富士に入日を空蝉やけふの月　其角
名月や人もうかれて放れ猿　楓子
名月や近くうつさは扇の絵　堤亭
月千里こよひ虎屋か通ひ箱　景帘
物干を楓の橋やけふの月　秋色
名月やまからぬ道のはま庇　昌川
名月や安房の御崎を戻子障子　秋航
名月や海へ吐出す塵あくた　其雫

長安の夜遊寄晋子

鐘ひとつ買てかけたりけふの月　周東
名月や人のかつらのはなし声　機一
門番に和布をくはせはやけふの月　問津
ぬす人のねたり起たりけふの月　中川
すがり迄織部くすべてけふの月　秋航
名月や星なき方のむら烏　十三才 重宵
名月や花鳥かゝやく御書所　専仰
名月や鐙流るゝ琵琶法師　闇指
名月や化すに躍る稲荷山　山蜂

けふの月小隅〳〵をまくら狩　暮園
名月や雪かく程は骨おらす　一雀
此月にとりあけ婆は誰捨ん　入松
白十糸（シュス）をとりちらしたる月ミ哉　大町
込ム馬をけ出す鐙や月の琴　附鳳

惜月

入月や聖天町を見かけてそ　其雫
名月や河原院へ蚊やり艸　専吟

橋上月双吟

猿這にわれとらんとや水の月　キ角
大名も橋の月見はかちよりそ　琴風
名月や渚にかゝる毛見の馬　虎笒

長安の花を洞庭の月にうつされし
周東の吟をうけて三兄弟にちなむ

かけて猶鐘はさえたり後の月　専仰
八橋に枕くはるや十三夜　周東
後の月指くひはたそ松か岡　秋色
水塚に子はやすかたよ後の月　行露

一休会裏になき物
まな正月しも茶わむ
をしきたゝみくものいゑ
せにこめ得法悲の衣
つとめ放参経陀羅尼
はやるものなに〳〵
猿楽田楽のうたひもの
尺八こきりこはふかふし
傾城若俗のさふたむ
さよ〳〵さ夜ふけかたのよ
しかのひところ
一此小歌は天下老僧の活作也佐竹
御家の珍奇にて疎かなる饗には
掛られすとかやその一声をこゝに
移して焦尾桐のしらへをそふ
一曲の早歌もまた艶なり
この一ふしいかなる御きけんにや
ふけかたを誰か御意得てしかの声　其角
松と月とにわかる月代　其雫

ほのめかす尾花高萱汐どけて　虎笒
上手な駕籠に筆歩む也　檀泉
烏帽子から巣立の鳩を揮(ヒ)出す　紫紅
猿頭巾にて梅も腰つけ　角
雪隠を借あくねたる痩若菜　雫
けぬき合に我こひの袖　紅
吸口はどこへ紛れて片おもひ　泉
人か碇か舳てどんぶり　笒
熊坂か長刀とてもぬすみ物　角
師走の月に方丈も澄　雫
保呂波山手のうらかへす宵の雲　笒
波ならなくに馬の背枕　泉
さらの身を板取はなす二挺立　角
しのふにあまる緇(スヽシ)さんこ珠　笒
花屑に折敷畳もたゝみかは　紅
宵の管絃は雛のかまほこ　泉
行雁に礫くはする供の中　雫
関の戸さしも御直たふとき　角
あの枕心を見んとなかれ足　泉

うしろ帯ても根か女也　等
聞たかと二夜へたてゝ郭公　雫
　あたまに恥よ老の癆痎　紅
雪もよしさらはと罩(コテ)に茶を引て　等
　乍恐とよむは訴状か　角
山の辺の毬(イカ)をかぶつて松のうれ　紅
　明ぬさきにとのほる鷹待　雫
くる〱と顔を廻して月の笠　泉
　五人か楯にならふ土堤口　紅
時の間と驟(ハタセ)て水を見て参ル　等
　火打袋に賽そかなしき　角
搗たてを十と覚えて廿四五　紅
　白丁とつてもとの商人　泉
天守台ふりさけみれは花の雲　雫
　笛をやすめてひはりすむ声　筆

無動寺にあそひて

念仏かむ鹿をつれ也簀子橋　三弄

槿花之篇

朝顔やちいさく咲て秋の色　弁外
　鹿の背にたつ鶉おり〱　其角
琵琶を煮てさますも独月ならん　虎等
　紅葉にふれてかすりめな衣　外
河原瀬や跨(マタキ)〱と石のおと　角
　しゐてもらひし猟利(き、)の筌　等
宮守の仮屋ふきさす足そろへ　外
　傘にたゝんてとはぬ蝙(ママ)　角
鬢の塵とつたか恋のはしめ也　等
　錦木ひろふ門も正月　外
箕(ミ)の輪へは棚橋いくつ柳陰　角
　猿の虚労も花に慰め　等
経机かたつけて置沓の数　外
　釜に泪を流す山城　角
桁梁(カウハリ)も折るはかりに雪か降　等
　鰹けつりて暁の汁　外
いさよひに初心な灸句ふらん　角

ちもり二間の揚屋秋也　等
おもひ逢鼻折鯛にきくの花　同
あらめとみゆる蜑の洗濁　角
鞍壺の鼾にまけぬ蠅の声　外
泄痢（サハラ）といふか松の下ふし　等
楼門の莚とらるゝ惣きよめ　角
目安作りかしのふ北山　外
炭竃のぐるりに哀牛の息　等
根笹の蟹に霰ふる音　角
さし貫のくゝりほとけはさゝれ石　外
鼓とめして工藤一臈　等
うかれめにたはこなき世か月の雲　角
指にかたみのきり〳〵す疵　外
駿河なる手拭かけに是は蔦　等
八十の賀に八十の客　角
唐紙のあや見えそめて四下（ツリ）　外
爪こかす迄せゝる薫　同
硯から煮しめへうつる花の蝶　角
山吹しほる滝の地ひゝき　等

槿や水にもならすはつれ雪　山蜂
舜や筆匂ひなき松花堂　沾徳
舜や吹たをされて花に砂　堤亭
槿やところ〳〵に蜑のうけ　専吟
朝皃はかきねとくんて枯にけり　紫紅
あさ顔に煙らぬ窓や素浪人　云暮
朝皃に立かへれとや水の物　其角
朝かほも押せは久しき形見哉　行露
うは玉のぬかこに角やかたつふり　専吟
鶏頭や匂もなくて花さかり　闇指
鶏頭は所作の革籠か葛西舟　泉石
捨鞭やほこりもさむる蓼の花　堤亭
盞に砂をかむ也たての花　琴風
花もうし佐野の渡の蓼屋敷　其角
白玉の尾花引也ぬれきつね　楓子

野宿秋興唫

人も見はあなしら〳〵し老狐　其角
松虫に狐を見れは友もなし

関まてゆかぬ蕎麦のさかも木　楓子
朝の月五里ある沼は鳰てりて　子
皇居へはこふ畳なるへし　角
文匣から朽木の肴ふるひ出　子
一寸の蚊の斧にむかへる　角
発明を劫にたつるは片目也　子
青女房の間(アイ)をいたゝく　角
此千鳥尻はしおれと冬の夜に　角
牛もみえぬは手たれなる笛　子
あい口を樽にかけて夕すゝみ　同
どこに居(ヲ)るともいはぬ逗留　角
肝胆は虫はむ橋をもくろみて　子
猯(マミ)ふとりなる顔は出山　角
酢み噌とは折にふれたる興渠(クレノヲモ)　子
華のしつくに薄塩の蝶　角
春の月御室は白い夜着ふとん　同
質(サマ)けゝらなき甲斐の徳本　子
猿着(ツキ)の三さけびしたる泪也　角
しぶとく見ゆる傾城の陣　子
うき時は二貫目かるく成にけり　同
むぐらはしらす馬「氈にも寐る　同
鵜差(サシ)と是を名付てさ月やみ　角
屁をふるはするゑほしひたゝれ　同
年へては三笠の山をよみわかれ　子
御恩の門へいさいきみたま　角
団栗とおほしめされよ老の母　子
舟は出て行松風の人　角
難儀をも日記につけて土佐辺路　子
名のらて過る笹の血脈　角
駿足も痔には任せぬ鞍の上　同
飯くひ経の外はあか恥　子
薩摩潟一両もては長者也　角
さゝめの蓑の肩は水鳥　同
社人達かさしそ多き花の苗　子
ふらても八十八夜なりけり　子

菊の篇

筏士の禿になるやきくの花　秋航

鷺の小股をくゝる鶺鴒　其角
朝霧の伸は柱により添て　専吟
　酒かひたいに残る有明　波麦
新竹を撫て通るや袖の声　紫紅
　背負た箱をたゝく市連　堤亭
ねた形を雪にみせたる鹿は小野　航
　水の給仕の小きさみに出ル　吟
茶俵を鐘は撞楼へ引上て　角
　あやか夫の年を聞たき　麦
手覆の具足ふるひによるへなき　吟
　猫に手をとる前栽の蟾　紅
此道も樽か明たり花の外　亭
　五十年来梅若の墓　角
川烏二階座敷の世に成て　麦
　まゝ子にたてる中に瓜鉢　航
結柴に臥てさされた薄月夜　紅
　罠(ワナ)のにほひは蘭の草むら　亭
唐桕やこれ柱杖にも払子にも　角
　すへるひやうしに爼板を抱　航

鎌髭の矢なみつくろふ二ツ指　吟
　問は乞食よ糟壁の雪　麦
喧嘩して帯を尋ぬる朝朗　亭
　脈か躍つてより人はよる　紅
さかなくも屐(アシタ)をかれは郭公　航
　うとん桶ある門は錦木　吟
手を添てみせた斗か十二灯　麦
　鎗流したる早舟の月　亭
切筆を拾ひあつめて花薄　紅
　海老かとはさむ膳の蜱　角
田舎間に足をのはせはむねは富士　吟
　かりた鏡はとれも南天　航
暮の花仁王の腹をたゝくらん　角
　切こはめしに谷のうくひす　亭
春のゆめ千畳敷にひとりねて　紅
　ふりむく顔を的にかすむ日　麦

　野分の朝わつはの花をいたはりて　行露
風のきく能登殿の矢を笆哉

児小性や碁盤ふまへてませの菊　心水
きく好(スキ)の心はいかに九月蚊屋　山蜂
菊畑や里はしまりの生薬屋　沾洲
けふのきく小僧てしるやさらさ好　キ角
くみかさね品玉とるやきくの露　尼日寿
十字(ツシ)菊のしまつて左右へ乱けり　紫紅

紅葉の篇

あるかれは病目かゝへて紅葉狩　景帘
　駕籠より袖のぬれぬ川霧　其角
招いても片便宜なる有明に　心水
　下垂の鷺もむら紫銅也　帘
すゝしやと盥(タラヒ)の中に傘さして　角
　入身のくさめ鼻を突るゝ　水
講堂の大工はらひか鐘の声　角
　たらぬ荷縄をもらふ産前　帘
猿猴にあつい温飩をもらせはや　水
　けふも隠居へとられやすかた　角
人しれす痩を縫こむ近江島　帘
　我なてし子よ塵の落髪　水
狂破(アハレ)喰草鞋を椽に捨て行　角
　やゝと海鼠をつかむ臼鳶　帘
のり物に足柄見する橋のうへ　水
　箙かなくは帯に花させ　角
泥坊にけさう詞やおほろ月　帘
　後段になりて彼蛙聞　水
借銭をおもひ出す哉車僧　角
　屁(ヒリ)おほせたり簀子吹風　帘
雪なから御挟箱にたゝみ込　水
　目黒の伏猪大根て追ふ　角
尺八を聞て頭をふる火吹竹　帘
　本虚労とは見えぬ夏足袋　水
夕なきに早緒かきれて助ヶ舟　角
　烏に跳(ヲト)る衣手の酔　帘
傀儡に籾をおしまぬ親の闇　水
　金か醤(ヒシホ)か嗅て見る秋　角
目は明て月にみたるゝねこと云ヒ　水
　客にもふれす小君分なり　帘

つれなさは握こぶしの堅いうち　　角
舟のさらはや後は蚊の声　　水
海鼠腸も御崎まもれは啜（リ）かね　　帘
御辺よはりは戦国の事　　角
極らぬ嵐やはなの連歌切レ　　水
傾城はなしひなの三絃　　帘

さめ馬を絞りにそめしもみち哉　　苔浅

玉芙公戸越の山庄にて

谷へつけ鹿のまたきの紅葉狩　　其角
下紅葉荏（ヱ）の実をはたく匂かな　　同

竜田川のさんにわたらはにしきとおもひよりて

仲人のまたく瀬もあれ紅葉川　　行露
棚田行水の柏や下もみち　　角枝
老武者に心つかひやもみち狩　　亡父 東順
紅葉見や村の用意はわらさうり　　琴風

画南天紅葉　三幅対

なんてんやをのかみほとの山の奥　　其角
南天の実をつゝめとや雁の声　　露江
南天や秋をかまゆる小倉山　　合志

岩城僧か窟にて

鹿道は綴（テツレ）かやくに蕈狩　　其角
初茸や白洲目見への御狩山　　専吟
茸狩や山のあなたに虚労病　　露柏
松茸をうらも嗅るゝませの菊　　波麦
松茸のゆふへをまたぬ匂かな　　楓子
松茸や松葉をかふる蓋　　キ角
よこ雲や猪は尾上へ菌かり　　大町
松の葉にその火先たけ薄醬油　　山蜂

遊越路

目にあてゝ足羽おろしや花紅葉　　一雀
きくいたゝきは松の小虱　　其角
柱巾（フク）わたくし雨に月出て　　蜂町
京の篋（シンシ）は楊弓に成　　角
たれかある帯の栓（クサヒ）に九寸五分　　雀
四目（ナカテ）点は舟のゝり合
乞食とも鱠作るか蓼の中
克己復礼惣供の笠

十念に内乱もたつて嘶えたり　町
天水桶を鳶のせつちん　蜂
江戸の図は銭にかくれて愛宕山　角
早縄よるは沖津しら波　雀
たまされて行水したるみたれ髪　蜂
三升樽と蚊屋てむつ言　角
土用子の鱠をせゝる月の影　雀
若殿成をはやす蚤か世　町
梅桜松とならへてかけ火鉢　角
寺の門てはうかぬ節季候　蜂
人の意味関をこゆれは聾也　町
梨子うち鞘も奉公の兀　雀
見せ馬にかくいた癖をけふたがり　蜂
早い後段に猶羽ぬけ鳥　町
夕顔にいろ〳〵うつる闇の眉　雀
かたい心をひけと鉄槌(カナ)　蜂
借金を梓にかけてなみた也　町
豆腐の脈のきるゝ仏名　角
ねられねは鼠の尿(ハリ)に笠を著(ル)　蜂
琴にさはるか八張の弓　雀
小納戸の鎰預りは風の宮　町
三か月もれて雲丹(ウニ)か輝く　角
塩竈にせなかをくべて露時雨　雀
萩に円座は鹿の待ふせ　町
かゝり口皆緋威の女中なり　角
よしや奈落へしつむ三線　雀
行灯に飛こむ花も夏の虫　蜂
岩から足をおろす藤棚　角

うら枯やそれたけ寒き忍ふ山　毎閑
うらかれや鮭とくみあふ畠中　焉子
細長き蔦路やしとる笈の物　白桜
因果屋はいかなる筋か蔦の門　谷羊
蔦の根や癬になりてぬれ仏　丸月
末枯やとうふはかりに門の桶　青峨

途行吟

山城へ井出の駕籠かるしくれ哉　翁
初時雨雲のはなれや鹿か谷　粛山

木地挽か病者な顔や北しくれ　合志

遊金閣寺

八畳の楠の板間をもるしくれ　其角

酒にして二階かあがくしくれ哉　秋航

傘て犬と仕あひやんら時雨　雌口

蚕の子や松を逆手に礒しくれ　重巽

鵜やとふさに沈むかへり花　穹風

なてし子や枯野につねの立姿　闌月

大腰にかゝし投出すかれ野哉　琴風

せめ馬の暗にくはゆる落葉哉　山蜂

凩や声のたつ夜はむらからす　心水

食堂に狐の会も枯野かな　大町

木からしに膏薬のはす木陰哉　焉子

山舘

門ひとつひろひもの也落葉掻　行露

新宅賀興

口切に茶て色つけん柱哉　竜尺

同

水仙や鉋つゐての小島台　其角

炉開や鼻をならへて雨を聞　子葉

炉ひらきや咳てうつむく顔の紅　附鳳

寐所や火鬮しかけて四十雀　闇指

網代から氷魚待うちや灰せゝり　唄言

和巾哉蕎麦湯なからも小夜時雨　倚窓

なつかしや火鬮の友の番代り　里東

人の飴をたひけるに

醍醐味の飴にこたつをはなれけり　日寿

我も火宅を出にける哉

宮薬屋はてしなけれは矢倉売　其角

ねかへりをきけは隣も楮服（カミコ）哉　云暮

居住居や後夜の紙子の己形　景帘

馬とりに手綱わたして頭巾哉　竜尺

此肴よう求めけりゑひす講　含曲

呉竹の牢人赤しゑひす講　景帘

隣には糊を摺也ゑひす講　云暮

人妻は大根はかりをふくと汁　其角

何某の家にて御流頂戴の
ことふきありしに

紅葉の下部もあらん玄猪かな　同
たれ〳〵そ玄猪の夜の下緒白　行露
白玉はゐの子にあへる椿かな　粛山
　社頭霜
輿添のおとなやかゝむ松の霜　露柏
うつきりと霜夜の月の梢かな　淡水子
鶏のふむにおとあり霜はしら　円水
君よけて片身痺るゝ霜夜哉　風杏
更行や蚶に千鳥のかさね足　白獅
室君は手にもとるへし小夜衛　合志
妹か手は鼠の足かさよ千とり　其角
降出しは玉水よりや村千鳥　沾洲
汐を引牛のすくむや村千鳥　苔浅
よるさえや盆山の出る礒衛　行露
鴛のわかれも見たり朝あらし　里圃
　揚屋の外辺に鴨をむしりて
　つゝらの通ひ道なかりけるを
鴨の毛や鴛の衾の道ふさけ　其角
寒声や南大門の水の月　同

寒声に行ぬ橋迄阿漕哉　行露
寒念仏みれは出入の大工也　大町
玉川や氷こけ行よはひほし　千調
空舟やとちらつかすのうす氷　昌川
田から吹風の寒さや夕神楽　竜尺
　艸庵の炉辺に
　　閑遊の吟当題
　風炉吹大根
不呂吹や逢より外のやむ薬　専吟
千手井を風ろ吹に汲よしも哉　午寂
風ろ吹や是を景図の押領使　景帘
ふろ吹や此あつまりは涅槃已後　甫盛
風呂吹や大仏とのも棚さかし　楓子
風呂吹の片輪車は箸にこそ　堤亭
ふろふきや湯立の釜のわき加減　一雀
牧狩や風ろ吹したる釜のあと　昌川
風ろ吹やね覚の床のわすれ水　紫紅
風ろふきや其夜のゆめは喜見城　琴風
日の本のふろ吹といへ比叡山　其角

風ろ吹にさすか狐も坊主哉　朝叟
ふろふきや金剛杖を箸にせん　大町
ふろ吹を高安なりし名こり哉　序令
鶴の毛や風ろ吹にちる窓の中　闇指
風ろ吹や童子か角をたゝみ切　波麦
よもきふに松の雪のみあたゝかに
見ゆ　あさかほに雪をまろはし
てわらはへのふくつけたるといふに
ふくつけてあたゝかさうに松の雪　日寿
楠の銅壺の四′間に一′間とかや誠に
官城ならては及なき事なるに
万客の朱唇をうるほせは
初雪や湯のみ所の大銅壺　其角
されは九尺に二間の住所にて
うさのみまさる世をしらねは
窓銭のうき世を咄す雪見哉　同
松風や腨にしらゆき馬のうへ　白桜
老嫗に詩をとひし事実
老歌者に年をくやみけん情
ともにあはれむにたえたり
雪の夜や隣の狸歌を聞　行露

山庄吟

蓑をきた給人もあり庭の雪　同
滝幅や氷の中にゐさり松　其角
山鳥のおろと氷るや滝の松　専吟
海鼠畳のひゝきより待小雪哉　角枝
待雪や御車道の掃除きは　可候
茶の会に犬の心やけさのゆき　玉芙
初ゆきや兎の耳のあたゝまり　応三
今朝の雪折戸の算や松のひま　心水
はつ雪やちろりをのせて硯箱　兎谷
身節鳴ル老のねさめや雪の竹　虎笒
はつ雪や鳥の羽たゝく竹の弓　専仰
牛島渡航弁野行
雪乗やわたりも見えす大井川　弁外
柴うりの跡から押や雪の原　同
元すみた川牛田といふ所に

風月のすまゐを尋ねて
半衿（エリ）の洲崎もありや雪の松　其角

所思
初ゆきにふづくり文や大江山　秋航

傾房に雪を見て
香箱にもてなす
淡雪にけし人形もつもれかし　麁麦
小車の御息所やゆきまろけ　専吟
初雪や木の間をくゝる路次の者　景帘
はつ雪や居間の簾につくは山　口遊
はつ雪やしらまぬ庭に鳥のあと　含曲
初雪や拍子木さゆる北の窓　青峨
影ほしも雪も身にそふ夕哉　江蓑
空堀や鳥もねつかぬ雪おろし　琴風
傘をちやせんかたけや雪の暮　専吟

いろはの御物を
分られしに
此雪にいの字の奇楠や牛香炉　三弄
柿鳩や雪にうつさはしぶき色　其雫

棄字ノ吟　松楓子

塵しつかなる雪のあした門はくものゝうたふを聞はすてゝある〳〵ある人の申されしはなンと心のまゝにうめきあへり瓠もすてす世もすてす身をみなし子とおほゆるにや中比草山の元政土山のむま屋を過る日ちとくはん〳〵といひて墨の袂にすかりたるを似ニ狐（タリ）鳴ニとたはむれしより独鷃鵡の唇をとちて旅の夕の止観に至りぬ今の幼尼のうかれことも
また廻雪の吟友ならすや

捨〳〵てあるはいつくへゆきの友　楓子
武蔵野やすてゝある物富士斗　其雫
綿弓やゆきの反橋すてゝある　山蜂
すてゝある身請も近し雪の袖　堤亭
おもはめや捨て行（アル）かはゆきの宿　其角
雪打や川に脇差すててある　一雀
ゆきの夜やよみ捨てある三体詩　波麦
馬市や雪のあみ笠すてゝある　朝叟
忍ふ夜の雪に女房のすてゝある　午寂

すてゝある人のこゝろや雪の石　　景帘
脱すてゝあるは衣の裾のゆき　　紫紅
初雪や疝気に庭か捨てある　　新真
のりすてゝあるは誰鞍雪の門　　心水
塩尻に雪と豆査（キラス）か捨てある　　白柳
雪の戸や酒かふ銭かすてゝある　　闇指
木津川や雪の布杭すてゝあル　　序令
象潟の名やすてゝある人の雪　　硯水

庚申吟

年長シテ毎ニ労推ス二甲子ヲ一夜寒シテ初テ共ニ守ル二庚-申ヲ一と唐の許渾か詩句を見いてゝ此夜の更行を事ともせす三子ねふりをまもりあへはうばそくか行ナふ声に伝教大師帰朝の後台-山の鎮守とあかめ給ひて世に七猿の和歌をしめしまします事なとおもひ出ぬ後鳥羽院庚申の百首後水尾院の御会もたひ〱とかや

庚申の雨といふ題にて

此降を人か延さる花見哉　　其角

花よりおもふ志賀の山辺なりけれは吹雪をいとふ

灯のもとにいざ三吟と呑かはして明かたに惜ムレ年ヲの名残を叙ぬ　　其雫

児くらへ山やおさめのかのえ申　　雫
たき物がへに浅黄水仙　　紫紅
墨箱はおもひの外の柚平（ヘシ）にて　　其角
要（カナメ）を噛はいかにさひしき　　雫
月にとれまやのあまりの古ゆかた　　紅
赤子の踉しら玉に露　　角
痩菊をさゝいの空にあなめ〱　　雫
楫のおれたを火掻也けり　　紅
教経と波に聞ゆるしかり声　　角
もりきり飯をかこむ傾城　　雫
雲のはに梁（ヤネ）へ法度かものおもひ　　紅
捕リ手か破る鴻-門の楯　　角
鷲部屋のぐるりはさいの河原にて　　雫
二-反三-畝（セ）を隠田の月　　紅
相撲神裸になりて拝まはや　　角
髭の野分に耳を山陰　　雫
めつかいも花を尋ねてくり矢河　　紅

千犬逃て春の滝音　角
床入に守りをとれは鐘おほろ　雫
対馬へかこつ人参の橋　角
登蓮か下駄の前歯に雨はれて　紅
鰌の汁に四畳半とは　雫
夕されは親仁へとふく神楽笛　角
あたらふるびの山を足軽　紅
孔明の刀かけ也鹿の角　雫
馬すてかねて秋の夜の月　角
皆尾花中の地蔵の明芝居　紅
蘇鉄に釘や姥の斧　雫
玉あられ秤をしらぬ君にさえ　角
四ツ手にくんて熊と頬摺　紅
此蛍いつの沓にてありしよな　雫
頭巾とらする通円か像　角
殿の名は雷好(スキ)とひゝく也　紅
八十八て三番三ふむ　雫
笈の花羽黒道者におしむ哉　角
塩を持せてわらひ折山　紅

偶興　三嘯

朔日やおと子尋ぬる家の中

行露

母に逢師走か来たそ山法師

焦尾琴　頌

（題簽）

焦 尾 琴

早船の記

一日琴風亭にあそんて二‐挺こく船の時となく行かへるを見るにまことに観念のたよりなきにしもあらす古人の意‐気をかすめては徒らに楊墨かともからに落安楽の果に乗しては閑かに長明か方丈をうらやむ人生の限(リ)あるをや心をし志に屈せるものゝくるしみ也爰に南。大橋をへて上(ミ)まつち山のふもと今戸の橋にこき入る一‐瞬の間に万里の思ひをめくらし箭よりもとく翅よりもかろくいさみある声を帆にあけて数十艘こきつれたるに遠かたも有笹の葉を打ちらしたるに似たりとかや誠に似たり船ことに火縄くゆらして後(アト)さき見ゆるこそいみしけれ

其引

川上は柳かむめか百千とり　其角

河上は人音さめてほたる哉　百里

大橋や火燵はなれて二心　江虆

一屋敷軸の物也むめ柳　午寂

ゆすりあふ鳥のめおとの柳哉　甫盛

初花や人看板のわたし舟　朝叟

澪杭や月は岡より次第高　楓子

白魚や明ほのゝ火はたうからし　白獅

蛙鳴唐土はしらす二挺立　新真

凡桃源もはかり得へし洛外の加茂桂こそ長安の渭‐水涇‐風をさなからにして奇絶漫々の観賞なるにこゝもまた江南の春の空の梢にはやはか立のひたらん詠そかし寺の数八十八十にかの多少の楼‐台は雨の後に雪の明ほのに詩歌の淵‐流をのつから家〳〵に満てこのもかのもの御影の山仰くにいや高く雲に倦(ウメル)鳥岫を出るいなつまに見かはし芙蓉峰‐頭に入はてぬ日の晴〳〵と扇にもれてかゝはゆく何の虹といひし橋のあらたにかゝりて浪にふすも瑞‐代の現竜なるへけれ

其引

無山の富士に並ふや秋の昏　其角

富士書の酔さますらん秋の海　口遊

天川角のる人やかいつふり　楓子

一刷毛は横へきれたり天の川　山蜂

ふらすこやきせ綿をとく川簀垣　朝叟

橋上に鮓をひらくや笹の露　新真

岡の目は網にとらるゝ寒さ哉　同

船頭の襦半（襦袢）也けり施餓鬼旗　竹苞

釣の糸しやくるもしれぬしくれ哉　其雫

水門の内をよはせんところてん　序令

島やりに小鴨なかるゝ夕哉　百里

末口はせみの鯨によるへ哉　西花

大橋の下のほたるや飛蛍　文士

堤つたひの人の交加（ユキカヒ）ゆゝしき馬上あり田かへす馬ありこれかれにつけてあはれなるかたは捨人の住なす也けり放散の風月にとさせるあり松はをのつから竹をしだりて風に吹れたる夕くれさへいとなつかし石原の椎のしけしとたに人目まれなる境には小家そむき〳〵たてこめていさら川すしを漫（ミタ）したる皆この流に入

其引　所の産を寄て

行水や何にとゝまる海苔の味　其角

朝皃の下紐ひちて蜆とり　午寂

雨雲や簀に干海苔の片明り　文士

幕洗ふ川辺の比や郭公　序令

椎の木に衣たゝむや村時雨　同

浮鳥の親仁組也余情川　景帘

すまふ取ゆかしき顔や松浦潟　同

建坪の願ひにみせつ小萩はら　白獅

幸清か霧のまかきや昔松　其角

鯉の義は山吹の瀬やしらぬ分　同

さなきたに鯉も浮出て十三夜　秋航

雷の撥のうはさや花八手　百里

夕月や女中に薄き川屋敷　同

村雨や川をへたてゝつく〳〵し　甫盛

後からくらう成けり土筆　堤亭

揚麩には祐天もなし昏の鴫　朝叟

夕顔に哀をかけよ売名号　其角

河上に音楽あり

笙の肱是も帆に張夏木立　午寂
お手かけの菫屋敷は栄螺哉　同
　こまかたに舟をよせて
此碑ては江を哀(カナシ)まぬ蛍哉　其角
若手共もぬけの舟や更る月　楓子
長汀に心を流しやれは名にしあふ鳥の跡は林くろめて鐘しつかに聞えわたり独木為レ梁(ハシト)と嘯ける俤にしもあへりされは閑素を友としてゆかしき木陰とも門まふけたり道をそゝろに歩(ミ)なせは折にふれたる花鳥のなさけに車をむかへ鞍を送る
寮坊主のまねは淋し時鳥　其角
下闇や牛の御前を腹へらし　百里
二の足はうらめしき哉涼ミ風呂　楓子
うらの戸は若衆かトて花火哉　序令
さし汐も四ッ下(リ)也猿の舟　朝叟
涼風や通ひ小姓のかもめ立　景帘
水小屋の夕立是や夜討曾我　午寂
およくらん四十の腹の下ふくれ　朝叟
是や皆雨を聞人下すゝみ　其角

鰹にはせつなき水や下むせひ　百里
早稲酒や稲荷よひ出す姥かもと　其角
　遊弘福寺
木犀や六尺四人唐めかず　同
木兎の布袋にむくや法の月　朝叟
唐僧の実生(ハヘ)なふるか鮨うり　午寂
夏陰や蘇鉄は僧の後ロつめ　新真
唐音を舟へうつして踊哉　紫紅
円顱緇(ロシ)レ染のもとめて至る所なるに昔今なる風情ともは老の物事つくしはてゝ恥しむへき影をうつし此川波に若やぎぬるも恵みの末を汲なれは也賈島か句に独(リ)過(ク)潭レ底ノ影と此句三年に得しとかや身を木のもとに休み居れは筏の上に小萩みたれ芦のうは葉もおとなきに寺々の鐘の声菴〱の念仏玉むかへする火の影に瓦屋のけふりなひきあへ爰では誰(レ)しも夕へかほ也芦の丸屋の秋風とつぶやく
一とせ都人にあなひして
　其引
烏帽子きた船頭はなし都鳥　其角
青柳や世間むきなる風に迄　朝叟

念仏の人にもまるゝ柳哉　波麦
松原や対の袷て天乙女　立朝
土とりの手水てかゝる西瓜哉　堤亭
味噌樽を遠かた人や花薄　百里
迷子の洲先にたつや片鶉(鶉)　序令
宿下のこゝも露けし妓王村　午寂
平舟は祭かへりのにほひ哉　新真
宿にして杜氏もかよふ鴫哉　朝叟
水影や罾(ヨツテ)にかゝるほとゝきす　波麦

先年月見もよほしけるに

木母寺に歌の会ありけふの月　其角
業平の休息所にも御祓哉　波麦
灯をあふく薄や波の音　大町

浅茅原吟行付田家

頬すりやおもはぬ人に虫屋迄　其角
露の間や浅茅か原へ客草履　同
立病のかゝみか池や蛙さえ　景帘
ぬれて来る乞食のつてや片鶉(鶉)　新真
初雪や実のある庵はいかはかり　朝叟

芋虫を化生退治やあさちはら　紫紅
簟瓦灯火入は露もよし　一邑
春雨のとうふに馬のけあけ哉　堤亭
玉鉾や団炭を通る草の庵　新真
雪の戸や雉か先こす茶のみ橋　序令
追分や足袋て塚つく雪の昏　芄月
耕作の屏風の端や梅柳　紫紅
玉水や矮鶏の匂ひも藁衾　白獅

総泉寺

大寺の田ほとにつかふ牛も有　序令
沢瀉や千住の片輪見知こし　朝叟
浅ちはら蜆にはかるこてふ哉　新真
刈麦や巴か臼のとりまはし　午寂
化野や焼玉黍(モロコシ)の骨はかり　其角
うす墨に氷れる筋や紙洗ひ　西花
臼の目を女も切かさよきぬた　序令
たか為の腥鍋そをみなへし　紫紅

帰掉吟

鬢を焼枕つれなし星の露　其角

洲先へと鞠からさそふ暑さ哉　朝叟
冬枯や馬もあからぬ亦打山　新真
追出しを千秋楽に花火哉　附鳳
女房はてうちん持や芦の霜　昌川
早舟と親にはたまれ千鳥聞　甫盛
もぬけたる蟬のやとりやもとり舟　波麦
棹の手に頬の蚊をはる葎かな　午寂
引汐の氷をゆめのたとり哉　紫紅
かはせみに折かけ竈の友寐哉　西花
砂りを摺舟底うすし霜の声　堤亭
さゝかにの筑波鳴出て里いそき　其角
式部をも思はぬ波のふとん哉　新真
幸便の頭巾をしはし浪の上　午寂
水鶏とは飛鳥川なる酒屋哉　波麦
漕つけて岸の左はかつをかな　紫紅
有明や待夜なからの君と伯父　其角

舟中月といふを

棹の間もふけ行よとの河ふねは
月のひかりのさしやそふらん　亡父東順

折にふれつゝ所得しおもひ有　三弄
醉狂したる三五七言

三橋ノ流三汜マタノ　洲浅草指シ潮ノ　暮深川出塩ノ　秋尾花
波寄ル更行月帰　去来ラウイサ兮這コノ船頭

風雅をこのむ一手には淡きたのしみ有魚鳥の愛によらすして自然の友をまねくには二三子の膝をのべやすしかの方丈のしつらひも一時の閑をとる中立とかや琴琵巴（琶）をのれたしなまねともさらに此川辺に出て逍遥の客に任すへし十六の丁児テッチも心世迫ハなりなん水茶屋の見にくき女によらすさはらすもてなされて薄々の酒に帰去存分也雪ならは此二挺にのりて山陰の戴逵を問ん事を舟中に主人ふたり下人独なととりのせて蒲団引かふり頭巾に肥かくしたるかもし沈みたらは麁相な李白亦醒たらは今の屈原也かの四大種の苦シみのみ恐れて分別の栖をしむるともそれ幾とせならす一己無心にして此舟にのるへし煩悩に漂泊してのり得人はあらしと一瞬の櫓をおさへて生路を勘破ス

晋子酔書

晋子一瞬行成而後たはふれに五十句を寄す句こと
に船中の形容をそなへて風物の楽器それ〳〵の
翫賞を求侍る事生涯のたらさるなき風情なれは方
丈をうらやむへからすと五人一等の酔言東方の白
なんとするに硯を仕まへり

粕買に駒求てや流レ沙魚 朝　叟
そき楊枝には一ふしの荻 其　角
暁の地紙ふくるゝ月影に 東　潮
宿鴉は袖のしからみ 新　真
梭の音吹こす方に顔出して 序　令
茶碗ほかした人をあなとる 叟
一対の男にならふ半晒 角
用心傘に口上かそふ 潮
ゆりこほす竜眼肉も琴の前 真
出家にしゐる脇差は無理 令
行灯を岡から見れは友鵜飼 潮
これは出されぬ浦島か飯 角
働は妾にかさす桐おちて 令
昼夜の損と秋のすて文 叟
よい月と本町の声揃ふ也 真
一様一手になれは波のよるみゆ 潮
小坊主を挾箱から傀儡師 角
袖の重荷の簺をうなつく 令
白雨も茶つけて仕まふ世中に 叟
猶怨霊は孫太郎なり 真
褌の口切はけふ花のゝち 角
らうそく入に独活も十挺 潮
蜆とり狐の踊るあたり迄 叟
由良戸の命法印の鼻 令
晨朝の星にふすほる釣薬鑵 真
蚊のたくひ也人もこの比 角
品玉の跡は安居の風に乗 令
摺鉢落てうかむ瀬もあれ 叟
脇息におさへて在さへ枕箱 潮
あはぬ甕て湯立はしまる 真
夕月夜供を減されて七騎落 角
薪秤をつるうら枯の雁 令
菊の露鮓の元結のいつとけて 叟

此雪隠にやくそくの縄　真
つき流す氷の扉五六牧(校)　潮
鴛にくらふる嫂(アニヨメ)の櫛　令
身へかゝる橋の玉水心まて　角
おもたか鞘は誰殿と見る　叟
薄へりに若菜と土の初けしき　潮
家徳利のつめは橙　角
子に策(フダ)は大念仏にこりはてゝ　真
水を鏡に髭ぬいて来る　叟
霍乱の座頭に櫂の雫して　令
囃子の空の鳶すくみ行　潮
頭巾きた禿かそえる人たまゐ　叟
力かこたん崖落の笹　真
浮世絵に軍は見たり春は花　令
水一かすみ制札の鷺　角
融公(キミ)二日三日の月は蝶　潮
ほしてとらるゝ天人の海苔　真

序　松下杖人

文薗のかたよらさる風はむさし野にあまねく千古の詞源は末派細流をわかてり犂牛の其角集を鳴して焦尾琴と号す焼桐の朴目(モク)こまやかにから木の良材おりにふれてえんにおかしく侍る五色のいとの一筋をねり出しかの君のおもひのつなにひかれてなれよ何とて恋の品にはもれけるそとねこを証歌にのせられしもつくし琴の一曲てうしをかへてくみたてられしたくみの色咲をふくむ誠に今やうの誹猫の化物なりなん子猫の昔姿今のすかたをわかちかねて逸物の筋をうしなふのらねこの色をうつして日なたを好む眼をひらき赤手巾のふるきをそゝき新しきを仕たてゝましはりの袖をみかき花影桂陰林泉窓雪のたのしみこれをすてゝ何をとらんやと覚ゆ

古麻恋句合

初　恋

切戸から尾骨見そめて玉かつら　秋　航
足跡をつまこふ猫や雪の中　其　角

忍ゝ

山鳥の尾こそ火をけせ長局　三弄

ひとりね

独ふすそが〳〵しさよ三年猫　弁外

おもひ

下くゝる水に思ひや梨の舌　楓子

うらみ

くすのはの恨之助や男猫　周東

見かはすゝ

あくかれて琴柱たをすや雲ゐ猫　宜藤

変恋

松山と袖こすねこのにらみ哉　虎笒

待ゝ

夕やみやかもしと見せて仕かけ猫　馬黒

梅かえや鼻あたゝまる塀の笠　堤亭

恥ゝ

面ぶせもおつほねねこの額白　朝叟

老ゝ

玉藻とや名のらて出る古老猫　紫紅

己か背をみつわくむ也かしけ猫　秋色

幼ゝ

箒木の百目なき子にわかれ哉　其角

寄枕ゝ

新参りあかぬ別れの屎仕かな　酉花

俤や糸目にたてるまくら神　其雫

よれ枕ねこの爪にもこひ衣　秋航

寄鏡ゝ

うつゝなや四ッ乳に成します鏡　専仰

寄簾ゝ

舟猫やをのか口すふ水かゝみ　利合

玉たれの手影ゆかしや坊主猫　楓子

寄薫ゝ

おもかけや咽もならさす瓦猫　十流

寄占ゝ

爪とくやおもひあまりて畳占　適三

灰うらに問るゝねこや七不思儀(議)　残杏

経年ゝ

いつ君に鼻はしかれて猫の年　銀杏

迷ゝ
ふり揚る刀(ナタ)はあた也主寮猫　馬黒
寄絵ゝ
皃彩(エト)る猫の尻目や絵具皿　川支
待暮ゝ
うき思濃茶時分のむつけ猫　野径
契来世ゝ
身の皮を同し思ひか海老尾　硯水
白地ゝ
覗よる湯殿のねこやさよ衣　酉花
余愛ゝ
恋やせを撫とも尽し腹の蚤　朝叟
女房達洗へる猫や華清宮　午寂
神祇ゝ
青柳や尾に付らるゝ三輪の注連　甫盛
寄橋ゝ
嚙ふせて階子を佐野の別哉　山蜂
尋ゝ
若艸にかくるゝつまや二疋迄　問津

絶ゝ
朝露やわかれをいかむ薪(マキ)一把　沾洲
祈ゝ
うかりける人を初瀬かやとひ猫　波麦
憎ゝ
祈られてワキ師にらむや般若猫　新真
仇ゝ
八巾の尾にあれたる猫はつなきけり　倚窓
寄寺ゝ
柏木の柳もそれかあかり猫　其角
古寺や赤手拭は虎御前　波麦
述懐ゝ
寐もやらて浪人猫の日陰哉　入松
墨染と思ひはてけり烏ねこ　紫紅
寄月ゝ
白玉か問来るねこを朧月　毎閑
寄日ゝ
思ひのみ日にむく腹は布袋猫　序令
後朝ゝ

昼
あつ灰をかへる朝のふとん哉　百里
夜ゝ
昼はねて衛士と並ふや火傷猫（ヤケト）　心水
煮こゝりや猫の白波夜半に行　午寂
思他ゝ
春の夜をいつか帰りてよこれ猫　堤亭
たか猫そ棚から落す鍋の数　沾徳
恋病
飯くへは君か方へと訴訟ねこ　其角
こよひもや風ろ屋へ通ふ疝気猫　大町
被棄ゝ
蜥（トカケ）くふ食傷つらしやつれねこ　昌川
寄床ゝ
西行のおもひすてゝや銀座猫　白獅
寄垣ゝ
塗桶をふす猪に成て春の夢　口遊
寄関ゝ
魚串を嗅て忍ふや笹くろめ　紫紅
寄石ゝ
包まれて髭は折ルとも恋の関　朝叟
寄海ゝ
石臼やわれて中より猫の情　露柏
不定ゝ
うき恋やたひかさなれは簀巻猫　角枝
疑ゝ
ありなから浮草猫や御縁づく　午寂
腰もとの二人静はいつれ猫　同
寄琴ゝ
花の夢胡蝶に似たり辰之助　其角
寄鞠ゝ
花の夜や猫の管絃は琴の役　野径
寄窓ゝ
蹴らるゝやゑもん流しの猫の曲　里東
寄几帳ゝ
深窓の頬をねふるや秘蔵猫　闇指
寄屛風ゝ
手几帳は三毛とさためぬ恋路哉　適三

掻破る屛風かたしや妻の影　　揚葉

寄帯ゝ
男猫とて七巻半や君か帯　　甫盛

遠別ゝ
鵜から身を島ねこのおもひ哉　　川支

寄池ゝ
うかれ来ていつ窖へ身投ねこ　　其雫

忘ゝ
またゝひや魃(ツハリ)なからの忘艸　　紫紅

貴キゝ
ぬれ衣や綸子をかふる位猫　　朝叟

被レ軽一賤ゝ
己か毛の蓬なるをや恋の賤　　其雫

触(テ)レ物催(ス)ゝ
陽炎にそはて身も世も団炭猫　　堤亭

隔(テ、)聞レ他(ヲ)ゝ
桟子へは及はぬ恋か座頭ねこ　　朝叟

近隣ゝ
京町のねこ通ひけり揚屋町　　其角

寄塚ゝ
恋塚と猫にきせけん横(ヨキ)ふとん　　幾石

乱ゝ
恋よるやとりなりもめて竜田猫　　甫盛

衰ゝ
乞食ねこみめをすてゝや物狂　　新真

頼ゝ
立猫や居猫の中のつかへねこ　　東潮

進ゝ
君や来し面(ツラ)はうつゝの出合ねこ　　春船

寄風俗ゝ
立すかた今も祇園の娘猫　　白獅

忍切ゝ
忍ふ夜を水鉄炮や光ねこ　　潘川

人伝ゝ
蒲公や明た袋へよめりねこ　　波麦

寄雪ゝ
姥かよぶ伏見常盤かやとり猫　　紫紅

寄雲ゝ

逢ぬ夜は高間の雲か頭痛猫　朝叟

寄松ゝ

爪がきや松に見かはすまろかたけ　序令

寄竹ゝ

埋られたをのか泪やまたら竹　其角

寄烟ゝ

胸にたく尻尾の灸や浅間山　午寂

錦木のもえて虎毛の煙哉　乍之

名立ゝ

首玉に我名や立しやみの声　秋航

大梁に名は立君か夕けさう　到李

艶粧ゝ

くらへこし猿は前髪帽子猫　新真

久契ゝ

菜箸をくはへて猫の連理哉　午寂

失寵ゝ

子をくふは恋のむくひか因果猫　全阿

不馴ゝ

馬下リになくねはつかし田舎ねこ　千琳

増ゝ

君か裾定家かつらや二歳猫　酉花

寄舞妓ゝ

恋種の猫の狂言明にけり　堤亭

旅行ゝ

のりかけにそゝろうけとや猫の嫁　琴風

舟路ゝ

いつの代に通ひ来ぬらん唐の種　景帘

寄蚕ゝ

海士ならて君かふすへや竈猫　弁外

求媒ゝ

吉日をゑらめるねこや桜さめ　暁白

まれにあふ

かい巻に君をねさせて三苻に猫　周東

寄雨ゝ

春雨や瓦灯も細き留守居猫　堤亭

寄声ゝ

焼物や泪にこもる蔵の猫　里東

人にこせうのこをふりかけられて

耳ふつてくさめもあへすなくね哉　其角

座禅のそはにひさまつきて

おもひ切レねらふ夜半の眼にて　朝叟

遊禅林

うたゝねをゆり若猫や廿日艸　三弄

潜上猫若ねこにかたりて曰

秋来鼠輩欺ニ猫死一窺レ翁翻レ盆攪ニ夜眠一聞道狸
奴将ニ数子一買レ魚穿レ柳聘ニ銜蟬一

山谷カ猫ヲ乞フ詩也猫死テ大勢ノ鼠ドモ秋ノ夜スガラアレマハルホドニ山谷ヲモアナヅリテ盆皿鉢ヲ打カヘシテ姦シクテネラレヌト也サレバ猫ヲモラヒテ畜ントナリ此比キケバ家ノ後園ニ狸共子ヲイクツモ産ケルホドニ猫カ居ルトシラバ一類ナレバ悦ビテ魚ヲ買テ柳ノ枝ニサシ貫ネテ人ノ如クニ礼聘シテ祝義ヲ述ヌヘシト也銜蟬トハ猫ノ異名也

花山院の御製にも

敷島のやまとにはあらぬから猫を
きみかためにと求め出たる　と

誹諧にてちそうせらるゝ証句には

猫の妻竃の崩れより通ひけり　翁

天水やたかひに影を猫のつま　卜尺

おもふ事いはて只にやん己か恋　一鉄

猫の妻夫婦といかみ給ひけり　卜宅

はゝかりなくそ申ける

詩仙の小序　三弄

陶韋か蘭桂の幽美なるは峰嶂の高きに及はす李王の変化は天狗厄神も恐れぬへし大暦已後のくせもの元祐年中の男だて拳を握りはりあひしは世の末のわさとやこれ彼をとりあつめて雪にすゝき時雨に染し綺字繡言を切きさみて閑窓に三汁十菜をもてなすより腹うちふくれ酔たふれて呼へとも起す枕のくれなゐも凩に破れて窓のあたりのこそめくは梅か君かいふかし

陶淵明　酒漉て亦は熨斗を雪の朝　午寂

杜子美　髭ひねりたふ葱のこま刻　其角

李太白　身か番と不上船罷出て　同

岑参　南蛮鍔に星のちる影　寂

王　維　西ノ方まぐろなからん関の月　同
山　谷　箕（マメカラ）をかむ馬は雷　角
陳后山　紅葉とて人は絵を行海晏寺　同
東　坡　百にちる也さゝ波の顔　寂
司空曙　歌声に黄金用ひつくしけり　寂
許　渾　こよひ世間の甲子そかし　角
梅聖兪　性わるを袋に入て猿ぐゝし　寂
韋応物　所化か起つて亡（ナキ）命児　角
張　籍　つゆしくれ乗あひ十九人の中　同
趙　嘏　二階の笛に片身出す月　寂
李群玉　樗蒲乙は一間にしきるきり〳〵す　同
皮日休　鍬から洗へ花種（ウエ）た泥　角
宋之問　老のはるかならす人の下にこそ　同
白玉蟾　鳳巾に加勢かつえの雲水　寂
蘇　邁　高名輪へからすをのせて牛の鞍　寂
温庭筠　橋の豆査（キラス）は仲間の霜　角
李　渉　湯もとりの門前独看（リル）松（ヲ）　同
黄知命　足を喰るゝこれは黒石　寂
杜　牧　按摩とり貴人頭上もはりまはす　同

陸亀蒙　座禅の影を正うつし也　角
邵康節　手のきれぬ傾城きれと棘にて　同
花蕊夫人　かるたに一箇（ヒトリ）男なるなし　寂
尼妙静　邯鄲の道をあやまる伏見駕籠　同
王　建　のこる蛍は小指ても撲（ウツ）　同
周　賀　此雨に灰をうるほす芋かしら　角
王元之　強（シヰ）て狂歌をつくる夕月　同
盧　同　鳴川は鹿とねむるも相対に　寂
孟東野　羽二重島は密々にぬふ　角
賈　島　かれ〳〵の干鯛をさして是故郷　寂
韓退之　長屋かはりに棄る短檠　角
白居易　東（アナタ）の船供は西（コナタへ）花をよふ　寂
謝霊運　お影てあそふ春艸の夢　角

右詩人の一句をとるゆへに名を題ス

後　叙

涬水之跡（ニタ、）止竃井而已
存（セリ）矣嚮（サキニ）晋子之巣罹（カヽッテ）災（ニ）

而止妻児奴婢及鶏犬
無恙而已塩米衣巾茶
酒之具皆為烏有而莫
一存焉漆園叟所謂無
何有郷焉者於晋子有
斯言嘗知晋子之窓有
一箇古綿嚢也其嚢
耶江山風月可以納之
野馬塵埃可以括之
天地之間髣髴乎耳
目之物莫不敢尽矣
晋子平生之工夫総在
于此嚢中而已於是乎
晋子太息謂家婦曰
噫此嚢亦為烏有雖
曰塩米衣巾我処于微
官則不饑不寒茶酒之
具亦不足惜焉幾惜於
消折我平生之工夫家
婦乃起席曰叔々已而
今也不可奈之何探得
其嚢中物略存于胸次
者以之為幸耶不聞
蔡邕之爨桐以得妙
音耶晋子莞爾去而
後経過同游之家得
巾笥反古之中者什
二三於是乎杖于花蹊
船于晩涼車于楓林驢
于雪天而固得己之志矣
且夫伐木丁々黄鳥嚶々
為晋子求友之声也
鳴蛙之鼓吹為晋子和
曲也終能続其音之絶
而此書已成矣以蔡邕
之桐同其名者其可也

午寂散人書于
胡盧室

雲水友

日本橋万町
万屋清兵衛版

類柑子（るいかうじ）

類柑子　文集上

（題簽）

類柑文集上

あけほの

探幽か能レ事その世にきこえけれは或時　女院の御所へめし曙の気色を書て奉らしめよとありされはおもひかけさる風情をいかに筆にはこらし侍るへきや彼野渡無レ人舟自横ときこえし無声の詩はむなしき船に鷺をのせて及第したり亦一片の雲といふ画の題にその心を得て金殿のうへに白雲をたなひかせたりけんためしいにしへの奇術なりとかや伝えたるに我国人の名折なれはと思ひあはするに後冷泉院天喜四年閏三月に画工の桜を感し給ふて新成桜花の題を献らしめたりし例も此曙の時にあへる手きはをいかにも書まさりせんとのみ睡ー醒現夢の精神をこらして工夫せしかは其妙をのつから筆頭にあらはれてもとより丹青の彩りをからすおほつかなくうす墨を引はえてやかて　院中にみそなはし奉る家の面目を法印にとゝめたりし其比花のもと貞室か風情あまねく都鄙にうつしもてはやし侍りけれは堂上の若公家北面の武士つらなる雑掌まてもすいたるどちはかしらつとへて当時の宗匠としとものみやつこいとまあれやといひふらしほのめかしけるいつとなく叡慮に聞えたてまつりしことありてさすかに一体を得たりと御感のあまりにかの明ほのの御かけものを下し給はりぬ門人等此ことをむへことふける賀会の時

明ほのゝゐいりよかしこし春の山　　貞室

亦ためしなき事にこそ和漢其例をひとしくおもひなさるゝにやこゝに曙のこと葉をつゝり侍る

含秀亭花中吟　五句　　冠里

無風花　ひかぬ時鎹はきれて山さくら

未開花　ひまの駒十日手前を桜貫

満花　太腟の烏も曇れ花の時

落花　はゝ木ゝの蟻とはにくし桜塚

山中閑寂人跡稀ナリ

音羽から音あるものや花の帯

王維画山水之賦　遠人无目　亦曰丈山尺樹寸馬豆人と
あるを雨中の花
　此雨に花見ぬ人や家の豆　　　　　　　　晋　子
山庄　高き樹は雲に画をかく霞哉　　　　三　嘯
　貝にてかいをむき侍るを
あさり貝むかしの剣うらさひぬ
蠣むきや我には見えぬ水鏡
藤潟や塩瀬によするふくさ貝
鉄槌にわれから羸螺のからみ哉
子安貝二見のうらを産湯哉
へなたりやかつきあけしは水の栗
　無腸公子
芦の穂や蟹をやとひて折もせん
あな寒し隠家いそけ霜のかに
　右手左手の興を得て
浮舟のすゝしき中へかにの甲
　海島曲浦長汀の吟
あつみ山吹浦かけて夕すゝみ　　　　　　翁
汐こしや鶴脛ぬれて海涼し
あら海や佐渡によこたふ天川
早稲の香や分入道はありそ海
　明石のとまり
蛸壺やはかなき夢を夏の月
　此さかひはひわたるほとゝいへは
かたつふり角ふり分よ須磨明石
　五月十日雷雨ゝ永代島の小家に
　やとりて晴間を待に
明石より神鳴はれて鮓の蓋　　　　　　　晋　子

ちからくさ

故翁のおくのほそ道見侍るに
尾花沢にて清風を尋ぬかれは富るものから志いやしか
らす都にも折々通ひてさすかに旅の情をもしりたれは
長途のいたはりさまくもてなし侍る
涼しさを我宿にしてねまる也　　　　　　翁
挙白集二はしめて吾妻にいきける道の記
五日小田原といふ所の宿に泊る明れは玉たれの小瓶に
酒すこし入て粽めくもの御前にとてさしいづあるしの

男にやあらんけふはめてたきせちに候一盃けしめされ候へかしとあいたちなくいふも顔まほられぬへししとけなき事うち語りて今しはしねまり申べいをそれかしか旦那のえらまからんとて立ぬるかれかふるまひにつけて　下略

道の記の一体民「語漸くかはるなといへるにつけてとみに東国のだみたる詞を一句にして風流を発（ヲコ）されたるこそよき力艸成へけれ箱根山にて

山路来て何やらゆかしすみれ艸

同記に匡房のぬしはこね山薄紫のつほすみれとよまれしは二入みしほといはんれう也とはかり知て侍りしをすへてこゝもとにある皆かの色なるはおかし昔の人はかう万にいたらぬくまなかりしか

○是其力艸也深う思ひとるへき事也

同記に浅くさのくはんをんとて国ゆすりてもてなす仏おはす口にまかせて

いかなれや野へにかりかふあさくさの
　くはんをむまのはみのこしつる

土堤の馬くはんを無下に菜摘哉　晋子

そのころ今の吉原はなくて彼記にもれたり朝つまわたり江口なとよせたる古きすさみともよ所ならす万葉しうには朱雀の柳とあり飛こえの柳といふなる所からあみ笠かりて伝ひゆけは

たひらこは西の禿に習ひけり　晋子

これらも力艸よりほりあてたる也亦

心とめふみみし人のなき玉や
　おもへはあかぬしみと成けん

紙魚と成それか灯籠の置字哉　冠里

十三夜

紙雛のうすき姿に砧月　同

南楼月下に寒き衣をうつとよせて野分の巻ひなのとのはいかゝおはすらんとゝひ給へは人々笑ひてとあるにその夜をきぬた月とこそ

瓜の一花

河野松波老人（宗対州公茶道也）一物三用の器をもてあそへり則長嘯翁のめて給へる記あり時鳥まだ聞はえする比かの鉢たゝき所望して見んと芭蕉翁高山何かし言水等これかれ訪らひ

侍りけるにもとよりして風月の窓灯雨の扉に修竹わかや
かに茂りて老をやしなふあらまし成に折から風炉の蟹眼
にわきたつ程也とて半日のあしらひいと興あり床のうち
に無絃の琵琶を居（スエ）てふるき長瓢のわれたるに花零（ヲチ）より雫
発々（ホチ）と落て誰となく後（ウシ）ロをおびやかしたるしめりやるかた
なし主の涼を味はふる心にくさをうかゝひ居たるに瓜の
花をもて此瓢にいけられたり花よりもれ蔓より露をむす
へるに水はたあふれて扇を忘る廬岳の雨を聞心地したり
撥面のうるほへる風情をいはゝ戸難瀬の滝に尾を曳けん
亀のけしきしたり水声玉ちるはかり此一花に夏を流して
老人の茗話忘れかたし月よくさし入時鳥まちかう飛ちか
ふほとの窓ならは花をせぬを本意とす也今は郭公すがり
てあるに久しう取出ぬふくへのけしからすもりて閑席を
犯すまゝに花はいけたりとて一句つゝのそまれ侍りこれ
らの風興今は二昔になん

瓜の花雫いかなる忘れ艸　翁
花瓜や絃をかしたる琵巴（琶）の上　言水
此花に誰あやまつて瓜持参　晋子

幻住菴にこもれるころ
夕へにも朝にもつかす瓜の花　翁

はしめてめされたる御かたにて
見ぬかたの御園の瓜の汗ふかん　秋色

下鳥羽桂川にあそへる時
瓜守やかつらの簾たえしより　晋子

糺の霊泉にひたりて
岩飛や味なさうなる瓜一つ　堤亭
瓜の皮水も蜘手に流れけり　晋子
順礼は瓜につくなり一夜ふし　大町
牧（枚）方や瓜といふ声玉くしけ　推車

西瓜は蛮国の種にして中華に賞翫うすかりしかと卅年来
のはやりものにして今は和歌所へもめしあけらるへかり
しを女房達のきらはせらるゝかたもあるにや題には出さ
れ侍らす

ゆめひらき

西行法師よの中のわつらはしきに心とゝめす折にあひた
る名高き人々をよ所になして筑紫のかた修行し給ひけり
かの山家集せんす抄に委しそれにはもれて泪の雫と名付

たる定家卿の筆事有六十の末に明静居士と成たまひみやこの乱をさけて住吉のほとりに御休所をとゝめ須磨明石の月にね覚およほし給ひけんよすかならし其比西行のたひのやとり長門国とよら明神の社司加田の重貞といへるものにあはれまれおはしけるか此比ふと陸奥に下り給ひぬと聞え侍りしか行衛しられさりしを重貞おほつかなく思ひくらせる長月のあかつきの夢に住吉の御神枕上にたゝせたまひて

　しる人にわかれしよりは松かせも
　　はらはすなりぬ庭の月影

重貞此神詠に恐れ奉りてとく墨吉に詣て明静居士に法楽の和歌をすゝめ申けるに西行の心さしにかはりて十首和歌奉納奉幣のこと葉をそへ給へるもの也けり是末の代に連誹ともに夢想開の会を興行せらるゝの例とにや

北の窓

わか栖ム北隣に芦荻しけくおひて笹阿(クロ)めなる地あり茅場町といふ名にふれて昔は海辺なりしを今は栄行家作りして山王権現の御旅所とさため薬師ほとけたち給ふに堂のかみはかりたゞほのかに絵にかけると見ゆ空地は水をためて池めかし深草引人しなけれは蓼の花穂に立のびなもみ箒木色つきわたる雨風につけても虫の声聞まさり大かたの空もうつゝなるに待にかならす出る月哉とことはりし窓ふたかたに明めり北にうたた寐して炎「夏わつらはしからす竹の簀子に這出て蛍をかそふるもはしたなし娘の四ツはかりなるあふなくふとはしりてとらんとすあやまちすへしさはをりぬものよ手とりてなと母そすかすめり南の隅なる所に灯の袋をかゝけて鵜舟と名つく

　石灯籠蚊屋にきえ行うふね哉　　晋子

垣根ゆひ廻したる古菰に夕皃の花より見しか瓠にて南風ふけば北になひき西風吹は東にとひとりごちつぶやきけん男あらまほし朝々の勤行すみやかに聞えて鰐口打たゝく秋の声目さましき折から鍬負(ヒ)拐(オフコ)かつきたる男等四五人入来りて草刈つかねたり隣つからのうつろひ前栽かまへんとて溝堀はらふにや例の八月十五夜には罌粟(ケシ)のたねまくわさなん冬菜の畑うちならすにやあらんと見れは尾花鶏頭菊女郎花所せくまてあるも堀捨たる無下に風景を殺せり家蔵造るかとおもへはさも均(ナラ)さすあたらしき杭古

くゐぜともとり〳〵ませて網代打たるやうにものしけり夕霧のたえまおもしろく秋のけはひをかへてあらはれわたるなといふ

あしろへと契りし人のまたこぬは
いつくによりて日をくらすらん　道因法し

日をくらしつゝ明れはれいの男等機車みつ輪もて来りてくゐせのかたはらにしつらひけり文七といふ者もとゆいこく所に成ぬる也やうかはりて虫のねもたえ小艸の花ものこらねはあら〳〵しき野分の行衛雨はれて邵生か瓜諸葛か菜畑をむなしくすといへとも是その主のはからひなりけれは北殿にしはぶくを鼻ひる迄にいひそしぬ元結こく音ひるは日くらしに聞ましへて又ことさらの心ちしたり山姥の廻り来ぬ所にこそ五百機たつるにはあらてくる〳〵と巻とりたる車のたえまには百舌の尾ふりの声したり顔なる虻蜂なとの羽音にもかよひてけしからすさらに松風の吹たゆめるしおりもあり唐人鳳巾の雲に吼て春色をもよほすひゝきも有おのこらの形勢は農夫にことならす破れめなる笠蓮にかたふけ袖なき物きつゝわらんづはいて淀の河瀬の舟引あゆみしたり夜々はやすめて来す雨の日も来すむなしき車のみあるそ与惣右か門にたれを待やらとうたひ出らる

時鳥まつやらよとの水くるま　宗因

一日に十里の行かひはたやすかるへし機たつる道いつしかほの白く鵲の三筋わたせるやうにて朝日にも猶消やらす花橘のかほらさりせはといひけん雪にも降はさて小笹の色にかこちぬへしもとひこく雫のたゝなはりてさる風情には成ぬるなり車にめくる男ともしはしも立休らふ事なく夕陽に背を晒し砂石に足心をいたむといへとも心の苦しまさる所をうらやまれたり上つかたの事いさしらねは田家山林海辺の境談ひとりをのれをはゞからすかたこと多し浄瑠璃説経の所々を覚えて語るもあり辻読の平家太平記籠耳ならす咄あへばつとめて楽しむ場をもしれるにや思ふ事なく世を忘れたらんものゝふるまひ也玉といへる物鞠はかりの大さしたるを千筋八重〳〵に引はえてひと夜寐す。とて夜もすから露にうたせて朝〳〵にこきさらすげに笹蟹のたくみにしてゆきいくたひといふ数をしられす車の前に光陰のうつりかはるを歎かすして夕へをのそむ事猶人生のはかなきにせめて東に流れ去とすん

菴主此文章にめてゝ玄白妙丹ともに似合しき戒名なりわか父母に名つけてといへりし顔気時にあへり

河東の萩遊ひ

秋萩のこれに鳴らんけいこ笛　暁松
萩深しとうふとよふは卒都の浜　楓子
白萩や水涌あかるいさら井に　専吟
萩に来て筑麻の人か五本松　秋色
波奢ちるや水に這子の玉襷　琴風
箱戸樋や千枝にわかるゝ萩の花　志賀
大名を泣せて見はや萩の供　寒玉
はきか花立よる袖やおほろ染　日寿

自画讃

白露もこほさぬ萩のうねり哉　翁
百里野の萩よりうれし椢（ヘキ）のうへ　秋航
出し袖にたれかこほれて真萩原　宜藤
乱そふ萩の車や茶碗書　大町

東北日光海道はやせたる菊はかり処々に垣根まはらなる畠のへり咲みたれてこれより宮城野まてのすさみもなきに年に四たひの御行輿を拝み奉ることつたなき詞にははゝかりあり前駈びゝしく笠持二人中童子は乗かけにめされたる六人左右の御副侍かそへも尽さす次に上童子四人馬上に曲篠したり後師四人の坊官長刀持せらる御道の行列に対してはあまり見苦しき人足とも仕丁にましはり馬峰（リ）けあけ走リめくるそうたてなまめきたてるはなきゝやうりんとうなとあらは鞍のうへにまいらせたくや

萩もかな菩薩にて見し上わらは
花にさは野越の萩のあらひ馬　弁外
能因の襷ほとくやしほれ萩　竹意
馬工郎は一字引ぬやはきの道　角吁
むら萩に女むすひは誰かもとひ　昌貢
萩の賎から弁当にひるねかかな　常役
萩くふて尾花芦毛のいさみ哉　入松

いなつかの灯

刈田にならふ賎か菴の膝を容るにやすけなるを科頭箕踞（ニス）長‐松下とうちうめかるそのかたちひとり書をよんてねんりいたる時蓋うちかふせたるものにこそ三行の窓もるひかりいとあかうもあらす遠う流るゝやうにうつろへはむ

すひ熨斗なとのさきにてさばけたるやうに洞口の虹の山の端にちりたる心地して眼裏ほからかに気を伸しむ一星の烟をはこふ穴目より北斗をさそふ影をもらして閨中の銀河とこしなへに明らか也是かならす貧閑幽居の大器にして身にしたかへる物也かれに肩おちせぬ物三あり黒楽のかけたる茶じみてまたら也玄黄自然なりけれは我馬とよぶ水籠に藤の手さしたる炭とり世にもあれどとりあへす日高川と名付てもてなしたり水かへつて火にそふうつはものそかしまろひかへりたる形は彼落たる鐘に似たるもおかし破魔弓の矢筒とゝろはげたるを火吹とし画けるまゝの名を松鶴とよふこれかれ取揃へぬ具とも衾上の塵枕の垢づけるかたはらにましへて乱したれは夜いたく更ぬるにつけてものすごきに百鬼夜行のそれ〳〵に名乗出る心地して独笑す金銀の気をむさほるにたえてつく〳〵とまたゝきしうちまもれは油ねふる狐軒端を飛こえ飯を盗む猫戸棚を明てたかひに目と目を見合たるに雪踏引犬入来れば力なくかへる尾ざしまてもかゝはゆく心ゐまれて麋鹿の友を愛せるに聊かはらす鼠のよめりことおどろ〳〵しう人に似たり憎かりし蚊さへ老ぬるよさす力なきに蚤こそばゆく盞をとつて光をませはありつる化物とも四方へちつてかうろきの声ひとり悄然たり深夜をなくさむる数々かそへもつくされす砧かりかね千鳥松風舟のほう〳〵と押来る声納屋の魚よぶ暁まてに紅閨の私語白屋のひとりねに対して楓橋のおもひをのべ萩(荻)浦のかなしみをそふるなかたち也清夜の吟をあつむるに秋興八アリ

晋　子

名月や御堂の鼓かねてきく
水汲のあかつき起やすまふ触
中の間にねぬ子幾人小夜きぬた
人音や月見とあかす伏見艸
酒かいに行か雨夜の雁ひとつ
蝙蝠や柱をねぢたる一時雨
滋楽城の火洞にあらは霜の声
子子等には猫もかまはす夜寒哉

夜もすからおもふことのうつゝは夢となりてさめて盗(ネ)汗をさますには金炉満堂のたきものものぞみたへたり安慰して此油煙にふすほりかへる顔色さなから松陰にうつくまるひしりの影に似たり心も心戒に似よかしと形影罔両のあらそひに咽をかはかし水瓶をたつねて碩鼠の腹ふく

れたる事をつゝりぬ

其引　景帘

念に見よすひつの下は天のはら　其尾

雪灯の紙あたらしや郭公　其裔

二の膳のそれを心やまはり炭　檀泉

寝所へ訴訟て行や雪の梅　翁

口切に堺の庭そなつかしき　晋子

口切やはかまのひだに線蘿蔔

貴賓をまねかるゝ御約束

三年の鳴リとかや其鳴リ世上にかくれもなし韓退之いまた此鳴をきかす

炉開や汝をよふは金の事　晋子

頭巾までふくささはきに挾ミけり　其幄

松の塵

文月十三日上行寺の墓にまふてゝかへるさにいさらごの坂をくたり泉岳寺の門さしのそかれたるに名高き人々の新盆にあへるとおもふより子葉春帆竹平等か俤まのあたり来りむかへるやうに覚えてそゝろに心頭にかゝれは花水とりてとおもへど墓所参詣をゆるさす草の丈ケおひかくしてかすくならひたるもそれとたに見えねは心にこめたる事を手向草になして亡魂聖霊ゆゝしき修羅道のくるしみを忘れよとたはふれ侍り

凡人間のあたなることを観すれは我々か腹の中に屎と慾との外の物なし五輪五体は人の体何にへたてのあるへきやと彼傀儡にうたひけん公卿大夫士庶人土民百姓工商乃至三界万霊等この屎慾をおほはんとて冠を正し太刀はき上下ミを着て馬にめす法衣法服の其品まちくも也といへとも生前の蝸名蝿利なりたらちねに借銭乞はなかりけり

人間生路のいとなみ一朝一夕を貪る事ことはり也いきてなき人何のこたへかあるへきそれに一口の棚経よんで家々をありくは何事やらんとあやし是かのなき玉のために奏者取次とおもへは墓をならふる面く其名暗からす地獄にても馳走せらるへしとこそ

かへらすにかのなき玉の夕へかな　晋子

徹書記か生キてかへりしよりも死をいさきよくせし兵

ふるさとに思ひのこす事露なかるへし

亡父東順七十二の影をうつして讃を乞侍りしに其像露たかはさるを

　絵に書つ木にきさみたる仏見よ

　　をのかすかたにいつれかはれる

慶運法師骸骨のゑのさんに

生死をはなれんとおもふ心は何者そたゝ心の源をかへり見るへしもし明らむることを得は曠-劫の無明たちまちに消滅し本来の面目すなはち現前せんとかいて

かへし見よをのか心は何ものそ

　色を見声を聞につけても

予此画讃摸写せんとおもふに名工の心を尽せるものから筆に及はすしていさゝか案するに童の時の遊戯をおもひ出られて松の葉して人を作り松の葉の弓同し鎗長刀のそれそと見ゆるをとりもたせて左右にわけ息をふきかけて争はするに人間の動静起臥をのつからにして勝負決然たりこれは無心の松葉なから人の息してはたらかすれは有心有情のものと見るに折ふし庭の松風吹落て松のはの兵(モノ)さん〳〵に打たふれて忽に風前の塵となるを浦風也けり

高松の朝あらしとそうたひ侍る

亦この比憎むといへる一字題を得て彼欧陽公のことはを逐

　蝿の子の兄に舜なきにくさ哉　　晋子

父かたくなに母ひすかしとかや兄に玉虫のひかりも哉松虫鈴むしの声もあらましかは百余帖の虫つくしにものせられぬへしとたはふれたり

　寺前述懐

　馬老ぬ灯籠使の道しるへ　　同

なからふる人冬の蝿と見しか日くらしの夕へにあさましきたとり也

猿引

由良八郎左衛門正春といへる人歌連誹にほゝゑまるゝや生-涯の癖とし身にそふ病とし給ふに世の人深くおもひしみて侍りけり亡父東順師としてむつましかりけり寛文年中九十の賀せすして身まかり給ひぬとかや氏性浮田家の外戚といひ伝えたり住所はもとよりとゝろける薫屋にて軒は葉うる家にむかへり門は鮑魚のいきれたるに鼻をお

ほふあたりにして下司女なともなく手みつから炊きうちくらひていとけうかる交りなりしかと朝市と雲山とをあらそはすして心さしの高きをしたふもの多かり或時吉川維足此師こゝにありと聞てとむらひ来りわか身よるかたも定り侍らねは常うとかりし事ともを悔て全く弟の道を忘れ申にはあらすとうやまひけるにうちゑみなから幸を得ルに人われ純熟あり神仏すら衆生縁をもてすと恨ミをのこし給はす今も歌は好れ侍るやと尋られ侍りしに此ころ世に張ハル事の候ひて日本橋をわたり候に猿曳の人にまとはれてむつかしけなるを見侍りしに

かしこさのをのか心につなかれて
うきをましらのねをのみそなく

となん申て過候也といへるに正春にかめる顔にてかしらいたや賢き人のいかて世の中につなかれてうきめ見んや癡猿把ル月とこそたとへたり人は己れか愚につなかれ侍るものそとあさんかれしに維足一言なく顔に汗して恥入覚えたりいかゝ御なをしをかうむらんといふに

愚さのをのかこゝろにつなかれて　と

いひたらは歌なるへし猿智慧猿かしこしなといふは俗言也とて

いろはをもかゝぬや我と山の猿　正春

此当座は歌の了簡にも似す口惜き姿也さしも風変の新古はわかれすや誹諧はことさら一句一体のものにこそ

元日や狙にきせたる狙の面　翁
七猿の仲間に踊る師走かな　冠里
意の馬心の猿ともにさはかしき事也
母猿を階子にしてや岑の花　大町
身の代を狙にとらるゝ桜哉　一雀
百灯に猿もぬかつく木葉哉　竹意
つかみつくやたけ心や厩の猿　午寂
元日や夫婦の中に猿の膝　百里
たはふれに夏冬をわかつ
物着せてさるのすねたる暑哉　朝叟
後むく猿のあやまるさむさかな　序令
僧寒しといふ題に
木食の江湖也けり木葉猿　寸楚

朝タに三盃暮に四盃とさためしに夜分は其数を破りて心のまゝにくるへる猿あり郊外に踊り橋上をわたる猿町の

里はなれなる庚申塚に休みて断腸の吟雪の中にこゝへたり　其句五

欄干や柳の曲をつたふ猿　　晋子

蝶飛や狙をよひ込原屋敷

猿の寄る酒屋きはめて桜哉

かなしとや見猿のためにまんしゆさけ

腸を塩にさけふや雪の猿

哀猿の声さえたてぬ成けり昔四谷の宿次に猟人の市をたて猪かのしゝ羚羊狐貉兎のたくひをとりさかして商へる中に猿を塩漬にしていくつも〳〵引上てそのさま魚鳥をあつかへるやう也李徳逢か申陽洞に入て都をかたむけ猿ともを殺したる物語は絵そらことに見侍りしかくあさましき形成へしとはしらさりけり羊をもて牛にかへんとのことはりもさるること

歌の島幷恋の丸

観世小縷よりしていかにも文字をむすふ盲人ありもとより字形を手ｰ練して日月山川雨風艸木たてよこの点画たかふ事なく竹は竹鳥は鳥馬は馬と見ゆる蒼頡のむねをわきまへその物とさとししらせたる玉しゐは目明らか成人の書画の筆術にもまされりそのかみ大師高野の山を切ひらかせ給ひて堂塔院々を建給ふに此道のたくみ等文字をしらす印合すへきことはりもなしとていろはの四十八字を教へ給ひしより末代の人の助けにもなれり予その六八の字員を案るに八卦六合にわたりて三才の形容此かな文字にもるゝことなし盲人そのかたちをむすふいへとも鴉ｰ鷺の黒ｰ白をたゝさす梅花雪ｰ鶴のうらみあるをや一心の寄附する所口にいふを句なりとしらはよます書ずの神代をあふき奉るへき事なりあなにえやとの詞はいかにして歌なりとは教へ給ひけん我国の風俗を習ひ得たらはむすへる文字の心もをのつからほとけぬへしといふよりして誹番匠いつを昔と名付たる編集北村湖春にこと葉をそへさせ句の首中を分て付習はせ侍りしも今は二昔の事也けり近来の冠付は教へかた先褒美の盞よりも起りて専人の本心をくるはせ放財ものにしたり泯江はしめは觴をうかめしに後は汚濁の腐才に流て舟につむほとの諸道具椀家具絹布夜着ふとんのたくひ源氏ものかたりの箱入春曙抄つれ〳〵の諸抄すへて人のほしけなるものを書あらはし一

番二番三四十番まてそれ〳〵の句主に配分せしほとに福引の水をのまぬものそとかろ〳〵しう心得て十才の男女丁児小憎まて他につけてもらいなから物をとらぬやからは下手也とのゝしりよききぬ得たれは此点者よくものしれる也とほめわたる端々町々手寄よき所に看板をかけならへ夜に灯を挑て郡(群)集したり風雅の狐狸なれは弶をのかれて産業となる事和光同塵のことはり魔仏一如の見ゆるし成へししかれとも古代に思ひしのはるゝ俤もあり今川の了俊源貞世いつく島まふての記に

鞆の浦つゝく海辺に歌の島といふ所ありんかし此所を領しける人和歌の道にすけける心ふかきあまりにおりたつ田子いりぬる海士までも歌をよませて興しけるよりやかて此所を歌の島といふ歌の島のこなたに恋の丸といふ里一村侍るいかなる人の物思ふとて名のりにし侍りつらんといとおかしく侍り

夢とてもいもやは見ゆるたひ衣
ひもたにとかぬこひのまろねを

長者よりくたるならはしことなりけれは歌の島恋の丸の名たゝるにつけても世の人のやさしき道に心あらは誹諧の津と申へくやいたつらに邪慾の道に引入る事神仏の御しめしを汚すわさ也けりつら〳〵彼天狗ともの飛行するやうを見侍るにいつくの杉の上にすむともしられすして蝙蝠の出るころに必しも行ちかへりその中の大団羽を以て座したる首領とかや最上源三と一二の賽をあらそへる者也をのか住山〳〵雪なれは十月の比より師走をへて二月のするまては民家にましはり人間の胸裏を乱漫し正法観念の席を妨け一万三千の句形を招くといへとも白雲に花のうつろへはあらしとともにちりうせたり

里居の弁

やふいりを春のものとてや上下の人の心そゝろに成て二たひ盆後の悦ひを待むかへたり或古宗匠の判談に

やふ入　植物に二句去　養父入　人倫也

入の字は字去と沙汰せりこれらは文字の上を信用して其理くらしたとへは家々の奴婢童僕丁児等まて年に一度の暇をもゆるさす家風に例つてかたくつゝしみつとめ侍る事は宗盛卿のゆやに御いとまを給はらぬを手本とすへし今の代は人の品ことの掟も改りて春と秋二たひ父母はら

からうからやから類縁にめてあひ花月艶容の気伸をし命の洗濁なとことふきあふ事ちまたにうたふ時にして諸家その禁門をゆるめ里へ下るをやふりといへる也

女御ヲにようご　寐ネルヲねいる　破リやふいりと心得へし例しれるおもと人三日五日なとゝ日数を定めていとま申出るなれは御やふりおゆるしなといへるもしとけなし雲上の詞はあまれるもよしたらぬもめてたし下司の詞はかならす文字あまりしたりとこそ

季吟老人の雑談に職人尽歌合に白粉しろいものうりと有御の字をそへ物の字を下略しておしろい也

遠里小野　をりの　うりうの

雲林院　うぢゐ　不動堂　ふどんど

郷談なとにいひかけたる句はおかしき筋也とて

今はお里へおりう野の露　季吟

里居の句引

子をぬるはやふいりさせし摩耶夫人　冠里

いもうとにいひやる

やふいりや見にくい銀を父の為　晋子

やふいりや浅草かけて芝の海　琴風

小町こそあのやふいりの肘袋　反梅

やふいりに松の嵐や前うしろ　昌貢

やふいりや今の御主は百官名　山蜂

藪入やわつかに見ゆる雪の艸　日寿

やふいりの破らぬ関の東哉　午寂

やふ入の屐ほしけ也魚の店　百里

紅梅や御はしたの名も四阿と　格枝

やふいりや入相の鐘の声ことに　大町

彼御経の海山にみちぬるを一日一夜に演説し給ふは仏なれはこそ

やふいりやつもる思ひを涅槃径(経)　専吟

やふいりに梅さかり也めつた町　白桜

初花や五菜男のより来つゝ　立朝

彼岸会に里へ下はや杖と足　百猿

やふいりや島の袷を朱買臣　毎閑

やふいりや梅あるかたは西の台　宇問

引幕ややふいりわたる天川　焉子

藪入かやふいりに道おしへけり　百之

千夜を一夜

御所の香やつれて二夜は梅の宿　同
乙女子のおほろ月夜や二日隙　唄言
やふいりや御鬮かたりを夫婦連　朴芝
やふいりに犬をつけたりしのふ山　雪花
やふいりの勘状さかす袋かな　凍雲
葛城の片山仁兵衛里居かな　入松
やふいりやおつとの心家徳利　堤亭
　辰之助か猫は焦尾琴のしらへに
躍り沢之丞か帽子は菊宴の
紫に匂ひて二度のやふいりを
　かさらすといふ事なし
尼寺やそらぬを木瓜の垣間より　毎閑
ほしあひや慶光院の徳に入　立朝
秋色にむかしかたらん雨夜哉　其雫
　此句は秋の雨夜にやと申たれは春
雨のふりくらしたるつれ〳〵とかや
やふいりのあやかしはたれ車引　艽月
星合を中の七日の里ゐかな　功悠
やふいりの狹(挟)箱より西瓜哉　野径

うらわかはには藪入とかいて破字の弁まへもなく正月は
かりの人のぞろめく事に思ひなしけれは一ツはあたるう
らや算なと句作して恋の心得たりしにまつとしきかはか
へりこんと三日のひまを申かはしけれとも里の名残おし
みなるに一日の虚病をかまゆるも哀也通ふ心の人もあら
はことに偽こともいと憎からすと御ゆるしもありけめ
　やふいりやそれは因幡の是は星　晋子
千載集に一条院の御時皇后宮に清少納言はしめて侍りけ
る比三月はかりに二三日まかり出侍けるにかの宮よりつ
かはされて侍りける　皇后宮定子
　いかにして過にしかたをすくしけん
　　くらしわつらふきのふけふかな
宰相の女房わたくしにはけふしも千とせの心ちするを暁
だにとくとあり御かへし
　雲の上もくらしかねける春の日を
　　ところからともなかめつるかな
里居なから内裏に侍る同意也とすかし申したる歌也いつ
れの奥かたにもあるへき事也

ひなひく鳥

さちは姉いもうとを三輪と名つくあねめは日寿の尼名の親に成ておひさきの幸（サチ）あれとことふきものし給へり三わはことしふたつに成ぬあねよりは物しつかにむまれつきたるをいみしとかしつく穏母つれて出ることに小比丘尼のあと先うたひめてゝ道ゆきふりしたり朝待かぬる蚊屋のくもてに窓もる光かゝはゆく春のすゝめの雛をひく声おかしう塒おりたる矮鶏のつまよぶにをのかそらねもなし灯は有なからしやうしほがらかにして陽にむかへるわらはへの兆（キサシ）をふくめり丸に尿やる声さえねむたけ成に外（ト）の辺にいそく啼声しきりて歩み出んとするけしきはかく〳〵しからすきのふは十あしといひつゝ六あし七足はかりはこひぬといふにけふは薬師御堂の石壇をりたち給ふ心にやまふでくる人にも目かよひ給へりしなといふにうちゑまるいつしか左のかた稲荷の社なるみつかきにとりつき立て手はなち御手洗の水まさぐりて袖ひちたれと神の御心はけかしたまはすやあなかしこ祈ものするけしき也けり

あゝたつた独たつたることし哉　　貞　徳

井上河州公の御吟に

　はえはたてたては歩めと思ふにそ

　　我身につもる老をわするゝ

老人のよはひめてたきにあやかれかし此比は真砂のうへにまみれなからをのつから立ゐもとかしからて千里の浜八百日行道しるへせんとてあんよ〳〵とはやしもていさなはれ行社頭の梢花あればうつといへり月あれはのとゆひさすに猶舌利（ト）なれかしこゝにちい〳〵ちや〳〵うるものあり色鳥に染たる餅を小串にさして妖艶にふれそゝのかすをほしげにて手さしのべたりとれはかいやりすつ心のまゝにもてなせはこてふの花にうつろひかけろふの水をわたるよりもやさし家を出てあそふ所二町にたらすといへともいき来ることに穏母かはかりことをもてすかしありく百里の行程に海山をかけぬはかりの心なりかし乳房くはへて寐てくるは鞍上の夢にや駕籠のうちのうつゝにや老幼のさかひをわきまへすして浪の立居も真如たかはす

閑居の子共松風にねる　　晋　子

真はねてゐて縁(緑)子の月　冠里

あした夕へに心得たる寐顔つく〳〵とうちまもれはほゝわらふ時ありうぶすなのすかしたまふ也と凡ッ煩悩のきつなとはおもへと田舎世界のゑびす等あまの子の賤しきまても宝とめてたり舐〆牛哀猿のなさけ夜の鶴梁のつはめ焼野の雉のひなまてもつはさの床をはなれぬにこそ人とむまれぬれはそれほとの小ざうり糸わらち綾にさしたる足袋もありしころ頭巾のおかしけなるに涎をつゝみものし雨ふらねとも傘さし座敷にて下屐はき習ふ何れ心に任せさらんよろつ人生の化育をしれり月と日は過〆客天地は逆〆旅也といへる詞にすかりて子等のどちくるふを見つゝ酔て二ツ子の道艸をつゝりぬ機にあへる時みさかなに何よけん手うち〳〵あはゝ

二ツ子をうしろへ引や大団羽　大町
広蓋を車大路やあかり雛　適山
花さかり薫を出す也老莱子　其脛
乳のみ子に意味を付てや十三夜　沾洲
子の尿や柳力にわらひかほ　掃尾
初雪や心もしらす肩くるま　素英
あたらしう子を思はゝや花の春　丹野母
ゆひ揃ふ迄を木芽やうなゐ髪　唄言
鳳巾の尾やえのころかつく表馬場　洞滴
柿木にあそふ子共や蟹と猿　白雪
釣台にのる子いつこへとしの昏　紫紅
初午やあたりの乳母は夕月夜　沾徳
秘蔵さや医師にたかせて紙鳶　百猿

桐火桶に抑貫之か万葉の歌にはこれらそまことある歌といへるに

日くれたり今かへりなん子なくらん　翁
その子のはゝもわれをまつらむ
子に飽ゝと申す人には花もなし　序令
迷ひ子や一膳ひえてさくら花　晋子
折とても花の間のせがれかな
孫ともの蚕やしなふ日向かな　同
袴着や子は決唇ても三郎兵衛　青流
楓子みたりめの女子を祝して
蟹屎にうつろふ花のいもとかな　晋子

はしとり初たる日

百舌鳴や赤子の頬を吸ときに　同

産衣に夜の目もあはぬ若葉かな　倫女

三輪女祝ひ侍りて

鶴亀の合器も御斎のしつく哉　沾洲

みやことりの序

僧専吟

なにはあたりのうつせあはひをうかむ瀬と名つけて奇物となせしは身をすてゝこそのたはれことより出て遠き境にもしる人すくなからすこゝに扇徳と云人その俤をしたひて一ツの器に盞をしつらひ硯懐紙やうのものを添て風騒の人々に句を乞これをさかなになして酒の興をあらしめんとす箱の中の貝なれは二見のうらなとゝもよふへかりしを都鳥とはもしむさしの国の名物京には見なれすとにやそれにしてはふたつともにたよりうすしたゝ水鳥とのこゝろなるへし

花と見てのまるゝ水やみやことり　専吟

盃開‐眼の後亭主なれは一はい仕り候

宮古鳥先尉とのゝ扇かな　扇徳

京大坂諸国の水鳥此牒面にのらんとて日夜参会しける人々一句一盃はもちろん三盃一句五盃一句と老若男女着到に付たて侍れはあらたに酒‐徳の頌を見る事いかならん玉たれの内へもはゝからすして此後序をもとめ侍りしに

元禄水馬の年都鳥あつまに下れる詞　晋子

こゝに小判ありぬすめは首がなし捨れはたはけといはる

仏をつくれは善人とよはれ書物をかへは智者となる分別の外に三斗入リ満願寺のから口をとゝのへて月花をもてなすこそ誠にこそよけれこそよけれのおのこ成へけれ其男の秘蔵し侍るものなれはすゝむる功徳ともにむかしの其角になりてやう〳〵半盞をかたんけ侍るとて

炭うりは炭こそ斗れ都鳥

此主源左衛門なれは雪には鉢の木を切くべて扇の徳を御舞候へ

着到の句々しとけなきまゝに略之

此比袖のうらといふ盞の発句を勧進したりいかならん旅客にや其貝いまた手にとらねと源左衛門か貝よりもやさしくて袂より出たるならんと

白きくを貝の身にせん袖のうら
賢レ賢かへかたきものか
口紅粉や世をかるかやの浮桜　　来示

浦あそひ

元禄十五年長月十六日のあさなきに釣好ク人にさそはれ海晏寺のもみちに心をそめて品川のいそわたりせし事有折からうなゐらか蠣あさりとるわさのうちはるみてうらかなしく芦辺の鷺のかたし立たるも友ほしけ成にかはらける小舟の間より雀ひとつおりてはたちおりてはたちいさこをはなるゝかとみれは荻のうは葉をこえ兼たりとひあかりしやうしといふらん似ぬ鳥を犬公かよふもあはれ也と冠里公の御句かたり出て気色をこゝにおもひあひたるに左にはあらて蛤の貝に足をはさまれて翅にまかせぬ也けり従者とく見て舟より飛てたゝよふ雀をとらへて貝をは小刀にて押わりつはさに息吹かけて放ちやりぬ足いたけ成さまにふらめきなからからきめしたる声ちうくとよふ角なうして穿つといひし礒屋のかたにかくれたり貝ひろふ子等は舌切雀なとはやすめり月令ニ季秋鴻雁来賓ス爵入テ二大水ニ一為ルレ蛤ト　註爵ハ為レ蛤飛物化シテ為ルニ潜物ト一也云々まことに盛陰に応する形とかや見えたり今の有さまけにかなへり飛物の気ひそまりて穂末の粟芥の虫に心をかけす砂中の蛤をさへ喰なすにや為の字を成解する心に見は月令ノ文義もいとおかしからめと私の見を加へ侍りされと西国あたりにてはすゝめの蛤に生を変たるを見しといふ人もあり是其時理自然なるへし我見しは水はしりにて鼠の赤貝にはさまれしこそ時候は忘れ侍れとも鼠化して鴽と成といふよりもおかしきもの也生命をあらそふ物これらにかきるへからすいつれ論するに益なし石の蛤二かはの貝干気貝のうきたるこれらは捨ていかにも砂なき大蛤をゐらせ松笠につみましへあふきたてたる風の音をのつから松風颯々たるに酔す(か脱カ)へらんにこそ

続みなし栗
懸出の貝にもてなす新酒かな　　晋子

此句にて船頭も一盃せよといふに新の一字に鼻はちかれて心地よしと頭ふるとりあへす押へことして酔言していはく上代のさかもり貝をもて賞翫せらるゝこと頼朝との御浜出に土肥の実平か御もてなしにと舞する也亦横山の

聟引出に太郎螺次郎螺とてある貝の実に伊豆相摸の領を入て三盃つゝはほさせたりとかや今もかけ出の同行とも郷侍の家に入て斎の料乞たるに時にとつての早稲(ワサ)作り中酌なんとも り流すに貝の腹八分に見て心よくほし礼貝吹て通るもあり盞はありあふものにこそ酒はたしなくてならぬもの也と酒惜みすなれと雀の命ひろへるにめてゝ生前の一樽を天目にてかたふけ侍るはいと心ほそくや

蛤もこゝすみよしや酒惜み　朝叟

ますほの小貝ひろはんと

種の島に舟のり出たり法花寺に

あかりて酒のむ　翁

浪の間や小貝にましる萩の塵

みるくひや末つむ花に貝合　一雀

黒海苔は跡へおよくや帆立貝　谷羊

ほら貝の筒音を開くあつさ哉　専仰

寄蝦(ヤトカリ)の夜寒さこそとつめた貝　堤亭

所から菊や小春の海津物　青流

蛺を撥とや月のいつくしま　百里

いたら貝われても末に台所　竹意

串貝に師走の風のはつみ哉　其道

赤貝の新山守やおほろ月　功悠

今切の片荷に氷る蚫かな　里東

蛺や小進ものゝ大屋敷　暁白

蛤の番は丁児に霞みけり　掃尾

あすの夜の月にはまけし板屋貝　己郷

雲丹貝の上着也けり黒小袖　大町

ほらかいの跡に竿さす尾花哉　貞佐

日本紀のゆへあり

獣とる真珠もあらん汐干潟　谷羊

遷宮おかまんとてみのゝ国立出るに

船にのる所まて送ける人に

蛤のふた見へわかれ行秋そ　翁

貝　十五　晋子

貝(ハイ)つるや白洲の末の流れ松

行春や猪口をおしまの忘れ貝

海松ふさや浪のかけたるほらのかい

かけろふや小礒の貝も吹たてす

すたれ貝雪の高浜みし人か

汐干なり尋ねて参れ次郎貝

　元日に真珠喰あてたる人扇に
句を望めり其年出身の幸あり
夜光る梅のつほみや貝の玉
石ひとつ清き渚やむき蜆
われからとすゝめは雀からす貝
　文月をかねて刺鯖を猟領し
世の人の祝ひくさとすと
鯖切のかくてもへけり大赦まて
　いはしは性柔弱にしてもろし潮を
はなれて忽に死す鰯俗字なり
よはしと訓すおむらとはいかに
小いはしや一口茄子藤の門
　白菅の宿過侍るに中鰺〳〵と
うるをみれは大小のその中と
見えたるもおかし商人の誠に
その中をとるものにこそ
世中をしらすかしこし小鰺うり
　歳の暮

鰤荷ふ中間殿にかくれけり　晋子
　うち出の浜にて
十六夜や海老煎程の宵の闇　翁
鯰さえあふのけに寐る暑さ哉　野径
御茶壺て白川とても鰹かな　檀泉
小海老よる空や小春の水の文　潘川
鮟鱇やしころは切て高笑ひ　甘己
小安（鮟）鱇道具揃はぬうき世哉　入松
山いくつ七ッ目鏡にいはし雲　来示
布施いはし行基の鯖のちかひ哉　同
西陣や二月中旬丹後鰤　自悦
袷から鯛の背切や椽の前　景帘
苦汐に鯛も浮木や秋の海　大町
初空や鯑魳（イルカ）の優に風わたる　枳風
釣の沙魚挟箱よりあかりけり　来示
年の緒の文箱にそふやお紫　松雅
いはしまて春の光や金ねふり　芄月
本目の春を名のるや尺のきす　雪花
加賀蓑を鱒にきせたる山路哉　和重

初魨や医師の方より遣ひ物　其幄
かんてらに片身かゝやく真黒哉　潤花
海鼠畳は咽通る間の手きは哉　止水
たゝまるゝ身はいくしなの海鼠哉　灯竹

所思

蛸を釣赤穂のうら人師走哉　朝叟
石鰈やかるた伏せたる遠干潟　琴風

漁家に遊へる時　十一句　晋子

親にらむ屧魚（ヒラメ）を踏ん汐干かな
小ゆるきの名は昔にて渦（ウツ）輪哉
夕汐や客の間にあふ中ふくら
蓮葉の赤鱏（エ）も枯るあつさ哉
ほの〳〵と朝飯匂ふ根釣かな
さちほこに笹をかまする鱸哉
足袋売やたひかさなれは学（マナ）鰹
馬船とわかるかつをや競馬組

てりかつを付リ河豚

松魚（カツヲ）本字とすへしとそ堅魚延喜式いはゝ文史の賞翫とし貴人の上珍と成もの也牡丹の紅その切目を正し杜鵑の涙に錦手をそめたりさつまかた沖の小島に物ありと松江の浦の鱸を二にし往吉の御前なる鯛の後段に成事時を得て誉（レ）あるもの也初の字に一朝を争ひ夜の字に百金をかろんしてまだねぬ人の橋上にたゝすみあかすまゝに一片の風帆をのそんて早走リを待て公門に入時鬼の首とる心地したり南溟東海の魚竜一番鰹と名のらせ其威を犯せるものなし渦輪横輪古瀬小鰹の一属目鹿真黒の兵とも駿豆相武の浦〳〵に魚陣をなし餅氏筋鰹霜降（リ）秋堅魚浜切岡付の族一味同心して火あて雉子焼あら煮うしほ煮の手をつくすといへとも昔は下部のみもてはやしぬと書れて台のうへの献上をゆるされす一疋不調法ものにいはるゝ事今さら浦島の子か悔（ミ）にして恨み中打に徹しはらもにせまり血合にくるしむと躍くるふを見ていさめていはく河豚は西施乳と比せらる其意味を忘れて性つねに怒れり世人皆酔（ナリ）のこと葉をかうむる事なかれと盃をとりて

かまくらは活て出けんはつ堅魚　翁
堅魚うりいか成人を酔（ハ）すらん　同

此句人をいさむこよひ其いけるもの
楊貴妃の夜はいきたる松魚哉　角
夜かれせぬ君か閨へと堅魚哉　青流

白兎公

冠里公の御園にうさきを畜(カヒ)たまへり中に妻兎はなくて子を生(ナ)す有けりこれかの月にむかひてをのれか影を孕めるもの也されはこそいとかよはくて青艸菜「芹の露をもてなされ冬は炉辺にちかより臥て枯葉さゝの実なとを味はふ其かたち白蓮のつほめるをたなこゝろにのせたらん大さしたり扈従して御側へめしけるに樊中を出たりし心より人におそれて飛さはくまゝに左へこえ右へせくゞまりて文台へをとり上り硯の中へ足を入てとびまはりけれは雪の白玉を墨にこかしたらんやうにてあやなく汚れたるにやるかたなく御気色をなんそこなはる近習をの〳〵手を握りたるに予放言していはく硯にあふれ墨にそむことかのものゝ性天然筆にむまれつきたる也と申たれは御笑ことに成ぬ臘月の末つかたに兎の子いつゝ生れたるに
年をとる兎にいはへいらぬ豆　角
三方に綿をのせて雪の富士なといふ当時の興をもよほされしに
つみわたに兎の耳をひきたてよ　同

長柄の文台の記

貞享甲子の年にや河村瑞軒といふものにおほやけの仰せことくたりて難波古江の埋れたるを堀て船路の自由ならしめよとの恵みあまねき御ふれに付て都鄙蒭蕘のものとも膏沢の歩にさゝれてまいりあつまるほとになんなく山をつきたて淵瀬さらなる川筋となれりされはかの名橋のあとは今はわたりに成てその封境をしる人まれなりこゝにいにしへをあふきて今の物数奇しけるともからもこゝらあたりにこそ其古杭はあらんなとておほつかなき世の幸を得まほしく奈裏までもとうちたつる人の力に任せてこの埋れ木を堀出たり往古称美のかたみにしてことにたくひなき板目なりけれは朽にしまゝにけつりなして朽せぬ名物とはなしぬいはゝ山の井をすゝりにくませ浜荻を筆の軸にきらせてみちのくに紙のあつこへたるにかさねたらましかは人麻呂の神も其左にゐまし赤人の神も一

座の句所をあらそひ給ふまし誠にありかたき宝ならすやよりて当時の人をして結構に文詞をかさり和歌連誹の讃まち〳〵みちぬを予もその数にくはゝりぬへきよし故実はいはすともさとしけれは今の事実をあらはしてかゝる時代にむまれあふ人畳の上にしてたやすく此重奇を拝みぬるよろこひをのへぬ其信うたかふ事なかれとしかいふのみ

もる月もむかしの橋の朽目哉　　晋　子

大原木のことは

初瀬難波の市女笠柿の前垂ほのめかしていつれ昔をわすれす織殿染とのの水仕かのこゆひ牙婆めの被すきかけ白くたちわたりて都大路のなかめ也河内女のきはたとるつま袋に娵そしりといふ縄手を行こそさかしらいひて名はたちけん越路の女は糸機のわさもせて奉書鳥の子すき出すうすきちきりはむすはさりしをとよまれてなるか川の瀬枕にをのか妻をや定むらめおほよそ鳥のざれありく名はたち君のいたつらにひとりねしたる河原こそ川風寒しさる淵瀬を朝ことにわたりて暮ことにをのか一つれ引連たる牛のひつめにそふて八瀬の山家にとまりける夜そ雪かき分しあともとはれて祇法師の三吟せし古意をうらやみ事たらぬ侘寐に友をしのへは飯には石をかみあて茶に蘂しべを吐出して一夜明しぬ誠に此山里の侘を求めて閑放の風月を興しぬ祭の子等に花折そへてやさしからせけん賤とないひそ女院の侍士より今も俗夫におちすして柴うるにも背むかひてあしらへはよしある賤とこそ見ゆめれ

やふいりや牛合点して大原まて　　晋　子
一とろに袷になるやくろ木売
おはら木や紅葉てたゝく鹿の尻
炭うりやおほろの清水鼻を見る

荒神口にて一とよみとよむ声殊にけうとし中にも釈迦よ〳〵とよふを聞て名のおかしけれは

さかとよふ頭も雪のくろ木かな

雪山の法の薪をつみけん身のこらしめも入相のかねにふとおとろかれたり

水戸黄門の君山庄に黒木茶屋うつし給へり酒簾夕陽にひるかへり木葉かくさらへかたはらに捨てしは〳〵斧のひゝ

きを窺かふにたゝならぬけしきのみ風騒のいたりをおもふもはゝかり有

絵の中に居るや山家の雪気色　去来

冬こもり温飽にしてはひとたきにさももへやすき大原木のあかしもはてす入かたの月に顔さし出て醒てねかぬる灯のもとに大原木をうたひてやみぬ

後附

かも河の鴨を鉄輪に雪見哉　晋子

うす雪や大の字かるゝ山の草

きねかさき

方四寸の円形にして其色紫赤なり栴檀の木膚よりも猶こまやかに蹄のうらのことく中くほ也厚サ五分はかり

夕顔や一臼のこす花の宿　晋子

抑此杵の頭は少長か宅普請の時に大工との一鋸にとたのみ切たるくせものなるを推車やかて拾ひとりて一句を蒔絵にし茶所の柱にかけて日々の労を忘れんとす然れは休の一字に心あるにそ閑を得たりつら〳〵角蔵か労を見るに一日の休みなく百銭をまふけて黒飯を押いたゝひて行なふ体盤中ノ飧粒々辛苦の吟尤重しこゝに京大坂の座より千金を積て少長をまねくといへとも三の富心にまかせたれは今年も艸庵の月にかこつけて暮ぬ其労方寸の胸中にあれは成へし坂田山下かこゝに老たる多門嵐等か名はかり聞えたるにも身をやすうせん事を願へるもの也錦繍に汗したりとも裸なる場は臼前に同し六祖のひとり信濃の国より再来して推車に杵をゆつるもの角蔵

杵のえ

心水艸

金のあふきに牡丹紙子のたはこ入に菊の句とはよのつねあるへき事也おもはさりききねの先に夕かほの句を見んとはかゝるくたれるさまのものなからやことなき御手にもふれけんこと優にめてたきたくひならすやさるをおかしきおもむきからもしは隠婆羅鬼童子か腕の小口切といふものあらましかはいかなる句をか得られんとひとりたなこゝろをたゝいてその杵の柄はいつか朽んとゐつほに入

大名も夕顔なくは杵の沙汰　心水

挽切て杵にわかやく涼みかな　推車

夕かほやまたき灯さぬ局口　秋航
ゆふかほに山伏見れは暑くろし　専吟
夕皃や須磨に咲ともこけら葺　昌貢
蟷螂の夕顔へ来て我なりと　幸輪
夕皃や沓かへ宿のまくらにも　大町
夕顔や氷室屋敷は火もたかす　一雀
夕顔や不破の関屋はおとし穴　文竿
夕皃や竹馬かゝる椎のふし　沾洲
ゆふかほに昔踊や上つかた　竹意

祖師の自画賛

ひるかほに米つき涼むあはれ也　翁
昼顔や穴のいはれを居酒呑　青峨

あかつき傘

剡渓の雪に徘待(タチ)乳山の時雨に徊(メグ)りて心ありけなるを妻なく子なかりし時の楽とせしかは閨中の力としたる間(カン)さましこそ胸いたかりし其吟三

暁の反吐はとなりかほとゝきす
夜こそきけ穢多か大鼓郭公

ほとゝきす暁傘を買せけり

傘うりの暁はかり来るものかは月夜の魚うりは本陣につく心地したり物の哀れもこゝにしらすはとおもふに其裔か関所の額に暁笠の二字をまふけて時鳥のはつ声をまたれ来示か筆を躍らせたる物傘うる時と名つけたり西鶴か口拍子をからす朝湖か虚(ホ)舟よりもかろき事ともなる中に△孝ある人の子△禿の親の手形すますに文語一ツ〳〵よみ聞ふるにわろひれす判して金のかた一目娘のかた一目見やりたる年月のたのみ哀にも△かまれて来る猫△九月みそか十月ついたちの比客前も拵へぬ料理場の下にかうろきすたくこゑ
△二階へあかる音はたえてわさとならぬ灯のかけに箸削る△ことにしはふき頭痛くなやめとくすりの遠慮したるをんな
見せ男をまことにあしらひたる憎くて哀也△凩の夜駕籠誰を待てか△妙喜堂の末枯△角前髪に似たる月影に心ほそけに残る客の中杉つかひへらしたる文もかゝれす
荒たる家の分散とは見えて庇まはらに天水もかはらき破れめの障子の弓所〳〵落ていとあらうはあらぬ風の吹あ

てたる
これはいつもあるかたなから鎌倉へいきたりしつれ〳〵
冷飯といふ名もうき世に侘しかりける時思ひつゝけたる
也とかや
　勘当の月夜に成しすゝみかな
いつこよからんありかばやとそゝろかましきも一ねさめ
なりけんと書て来示に送り侍り今はお小督に恥といへは
　子もふます枕もふます郭公　　　　　　　　角
　子規人を馳走にねぬ夜かな
女郎屋客屋といはるゝもの仮にも無常を観すへからすと
いさめしに寐過しぬ
　ほとゝきすたゝ有明の狐おち
　告口は中の町なりほとゝきす　　　　　　大町
　時鳥くまかへをよふ寒さかな　　　　　　其幄

寐て見るさくら

洛の涼及は有馬氏にしてゐなかにもしられなからいてそ
よ人を忘れ己れを忘れたるもの也けり貞享の比
天脈を診み奉るへきめしをかうむりけるに其時碁にうち
ほれてまいらさりし罪にて山科に追放たれたりしかと明
医肩をならふる者なけれはやかて都にかへし入られてそ
の名いよ〳〵高し日比に好（スケ）ば百貫にて茶碗を求め撫子と
よぶめり季吟師北野よりのかへるさに涼及か家に休みけ
るに薄茶をもてなし侍るつゐで彼百貫の茶器を見はやと
望まれしにたゝ今薄茶まいられしか夫（ソ）なりといらへけり
老眼よりは心闇くてあからさまに所望して手を取たりと
申されしか年比の春大きなる桜の盛なるをこきて根は菰
に包めるまゝにて縁の側にうち倒して置りうつしうへん
とての花なるをかく無下にせらるゝはいかにそやといふ
者ありしに起て見る花はいつくにも植てある也寐て見ん
ために伏木のまゝにして打こかしたりと答へぬるに自性
の愛に溺れさることをしれり茶碗を塊とし百貫を沙石と
し麗花を塵芥と見て一日の生路を安慰し心を孩提の童の
ことくに楽しめり誹諧興行すれともぬしは一句もせす人
の句を聞て味はへたりせめて一句はあれかしといへは脇
よりあけ句まて一句〳〵に付て見侍れとも面白き句もな
し無用の句を云出さんはきかぬ薬をもるに同しとて満座
まて連衆をはやしたて侍るいと興ありけり喜撰法師の心

はえをしれる方寸にや山月の暁雲に映する一体今さらなつかし知音の心を

花に鐘けふも暮ぬと聞者哉　涼及
八重山吹は京へ出ぬ人　其角
朧月鵜匠の家にすしかひて　湖春
鼠を熬レはたれも甘かる　及
裸身に大わきさしの草枕　角
樗の雲よ暑うなる端　春

三吟のむかしに成ぬれはあとなし

改元の祥吟

ことし三月正当三十日　御城に於て革命改歴の御よろこひ申あり出仕各午の上刻

宝永の袷にかはれ米の霜　冠里

宝祚惟永輝光日新ナリ 杜子美句是此熟字を以て山呼万歳をことふかせ給へりとかや此日八十八夜にあたりけれは星と霜とにむすひて花の色にそめし袂をおほけなく世の民くさにおほひ曇らぬ日影四方にあまねき御めくみとなん仰き奉り給へる御句筋なれは三月尽の題に沙汰し奉りぬ

改元の詔本朝文粋慶の保胤のこと葉にいはく唐堯の馭民いまた年号あらす漢武の撫俗はしめて建元の号ありそれよりの例休祥災変によりて開元革暦のためしを引天元六年を改めて永観元年の大赦天か下徳政の化育にほこると云々

今案ニ藤経嗣卿北山行幸記ニ文武天皇より年号なとも定まりたる事に成て後は醍醐の御門こそ三十三年まて御位にありしか此時にこそ格式なといふ事をも定られたれは誠に聖徳のいたりは延喜のいにしへも応永のけふも同しかるへしと書せ給へり北山殿は鹿苑院准三公義満公也行幸は応永十五年三月八日也

去年の冬震火溺亡世界国土のくるしみを西の海へさらりと流してあらたまのとし甲申の卯月始めの日あらたに浴ミし新タに衣かへたらん人の心のあらたなるも日ニ新ナリといへる句の心はえならん此御句にこと葉をそへ奉るにつけて天下泰平の　奉幣の使に逐つかん事を祈侍る

とした気て伊勢迄たれか衣更　晋子

類柑子　文集　中　（題簽）

類柑文集中

御玄猪

細川家の茶道京都の御内縁につきてのほりし比　近衛左大臣基熙公御茶にめして御手つから御菓子を下し給へリ碁石形して色々に染たる餅也偖仰せ下さるゝやうは此餅はきのふ御玄猪なりし宸宴供拝のあまり也いたゝきおさむへきにこそされは王道の興廃として今は国栖腹赤の奏十月朔日氷魚といふ魚を公卿に給はるなとの旧例その名のみ也爰に丹波ののせの郡久路の庄より御玄猪餅の名也備へ奉る事内蔵寮(サ)より是を行ふ也昔をしのふへき御心はえとかやありかたきことに感し入奉り涙をつゝむ袖のつとにし餅をはやかて懐中仕りぬ御茶の具すへてかはる事なし御掛物極の一字の墨蹟也是は道風の大極殿をとゝのへたりし下書にて代々伝はり来れるを大と殿との其中をとり用ひさせ給ひて尤御重賞の珍奇のよしかやうのたくひあまた御宝蔵にありとかや凡家にはおつましき物也俊成卿の古今全部も御書棚に拝覧したり

三の蓮

江州田中村に田中勘左衛門といへる農夫はちすを好て千もと四色の霊蘗をあつめ池をふかめ砌をたゝし島輪をめくる小船にうかんて心の水濁りなく独楽の閑さらにうき世の交をもとめすあやしき人の名にふれたり一とせの夏さま〳〵に咲くるへる事ありけり愛蓮の詞いまたしらねともすける心より名付たるおかしくて書とめたりし

一茎に七輪の花を　天子の蓮

一茎に三りんの花を武士の蓮

一茎一輪はつね也とて百姓の蓮とよふ其名国あまねく聞えもれて諸人此花を拝みに来ること天人の影迎ほさつも天降ます心地してありかたきためしにいひはやらしむへ一郷に栄へたるもの也七徳は天子の瑞也三徳は武士の鑑一蓮は勘左衛門か菩提のたねなりと念仏三昧の心さし

浅からす汚泥にそます邪触の胸を洗へるに鬼神この霊蘖の異香を惜めり

謡の説

羽衣　実盛　ゆや　うたふ　そとは小町　熊坂　祝言と手の揃ひたるを見侍りし昔より諷あやまれる所文字の巨｢釈を云人ありいさゝか愚意を加へてしかられ侍り

△その名も月のいろ人は

三五夜中のそらにまた

月のみや人也宮と色と行草のやつしを写しあやまる成へし月の宮古に入たまふとうたへる本義もあり

△をのれは日本一の功のものと

くんてうすよとて

功の者と組打すよとて力者をあざ笑へる詞也打テウの声にまきれて今さらくんでうつと書たるをくんでうづよとうたへる也くんでうつといふ説はわろし

△こゑも旅雁のよこたはる

北斗の星のくもりなき

北斗ノ星前ニ旅雁横フ　経角堂は輪蔵なり北辰を柱にして廻る也弘｢誓真｢如海の文により城南淀河の運送回｢船の為に常灯明をかゝ(か脱カ)やす其光北にあたりて

△くもりなき経角堂はこれとかや

金森宗和上洛の比清水に詣給ひてこの灯籠の倒れて苔に埋れしを寺僧に所望し吾妻の奇物として今に芝の御屋敷に居られたり

△うたふやすかたのとりく

烏頭善知鳥ともに不審の字也東奥の商人船にて松前へ渡る人のいへるは蝦夷近き村里島々の猟師とも呼子鳥の笛なとの類鳩吹手合なとのやうに品く声を似せて鳥を打をさしてうたふくとよふ也打追の心成へしそれをはやし立る列士のものをやすかたと云也うたふは親やすかたは子にて列士狩に出るゑひす共笠にかくれ蓑にふす有さまやすからぬと作りかけたり卒土の浜東夷をさす也鳥類さえ親子の愛情はふかく血の涙にさけひて命を惜むに夷狄の其心なき因果を説て殺生を戒しめたり

△一夜ふた夜三夜四夜七夜八夜九夜

此夜は一与二与三与四与すへて助字なり五六の残りたるを分別して榻の端かき百とつめたる数を合せたり

一ョ二ョ三ョ四ョ　是を四と立て
七ョ　四七廿八　八ョ四八卅二　九ョ四九卅六　都合
百の数なり軒の玉水とく〳〵と指折たる也
あらしやうやひかんとて
心よはくも引けるか
嵯峨本の仮名の洒落なるゆへに
あゝゝやうや嗚呼危うや引んと書たるを写したかへて
筆肉をうしなひたる文句と見えたり章句のさしまとへる
にはあらす遊楽回雪たるうねめ十悪八邪のまよひの雲入
声去声にて諷ひ流す所うたひ消す所句断リ字義にかゝは
らすして面白く謡ひなす人感応なるへし
国栖のうはやたまへは姥聞たまへとの文句也聞やのやつ
しを読誤れる也
万句　半面美(人脱カ)印
足跡かはく飛石の露
盛久の長居はたれか気をつけて
梟のかけ声をきく鼓山
御輿はとうに覗く芦売
泥亀焼に松茸の甲
山田守僧都の身こそ寸莎に成レ
双六の筒から直に手を握リ
玉藻か智恵も犬きらひ也
万句　五字印
界隈の寺は幾つそ大砂場
切レをよく見る伯了か親

家々の名所

物に倦る時は身の隠家をなとおもふもはゞかりなから岩
ほの中とても遁るましき世中也けれは心の行処をかぞへ
て鷺鷗の友をさそふに五十にて四谷を見たりといへる嵐
雪か怠りこと奥羽へかよふ商人の松島雄島をしらぬ族塵
につき玉をひろふ心まち〳〵也けりいざとて誘ひ出れは
先弁当の事を問てかりにも行処をいはすひたすら富る者
の後にさかりてうか〳〵しく日を送るも有良基公の御記
にも遁世を表(アラ)はして心を漫り名聞名利に紛るゝ者は頼政
か射侍りけん鵼のことし猫にもあらす蛇にもあらす狂乱
物狂の至極也とかゝせ給へるに我もその鵼なるへしこゝ
に国の数六十六部の法華経納めたる僧あり名ある野山の

末に心の露をかけて俤を忘れす一日燕-語しけるは御当地の栄えたくへて物なし東叡山中堂は日の本に一ツの影をうつし給へる霊場なれは花のかほり鳥の声まても日枝よりも猶ほころばしう心地よけなり日光には荘厳圧(ヲサ)れたれと池は広沢よりうつくし遠-樹高-閣風景湧いでたらんやう也浅艸川隅田川たえす名に流れたれと加茂桂よりは賤しくて肩おちしたり山並(ミ)もあらはと願はし目黒は物ふり山坂おもしろけれとはてしなくて水遠し嵯峨に似て淋しからぬ風情なり曹司谷は樫の木立も昔なから寺もよし三光なとつね見ぬ鳥のから声伏猪の床もめつらしくはあれど鶉鳴ふか艸山に墨染の寺元政なと聞ふるひしり住けん跡忍はれたり遙劣れるもの也王子は漲-落一片の水に曲水のたはふれもすなる舟にて行かへるよしわれもかうなど茂る菊をあきなへる人の閑居には茶園も所々にて花園もうつろふ比成に宇治の柴舟のしはし目を流すへき島山もなし興聖寺平等院につけても詞をのこすはかり也護国寺御堂新たにして縁樹陰を重(サ)ぬ町並きら〳〵しかけ作(リ)吉野に似て一目千本の雪の明ほのも思ひやらるゝにや爰も流れなくて口おし筏さす人にあたら桜のちりかゝれかし深川の洲崎は東南に圻(サケ)て安房上総の山々を風帆につみ上たり池上の塔に増上寺の茂みを列(ツラ)ねて海原を彩とりたる形容杜詩韓文をあざめりかの住吉をうつし奉る佃島もむかへとも岸の姫松のすくなきにそり橋のたゆみおかしからず須磨の蜑の汐やく煙ほのめかして公家達のたゝすませ給ふ御けしきおさ〳〵似もよらす宰府はあかめ奉る名のみして染川の色に合羽ほしわたし思河のよるへに芥を埋む都府楼観音寺唐絵といはんに四ツ目の鐘の裸なる報恩寺の甍の白-地なるぞ町絵の屏風立らんやぅ也木立ぅすく梅紅葉せす三月の末の藤にすかりて回廊に莚をまふくるはかり野には心もとまらすと一ツ〳〵に疵物にしたり無疵の名作は快霽の富士にこそ三千世界をからげたりといへるに我もまけしとて天(アメ)に孕める地なれは三蔵法師の渡りしはて迄も見るに聞に心の止り目を驚かす蓬萊の山とこそは承りぬしかしなから世に劣らしと勝-概の奇-絶をつくされたる分限の殿つくりのうち表はいらかにし茅(カヤ)にして遠石両工の物数奇をふるはせ給ふ庭山細川とのゝ国石土佐殿の良-材島津とのゝ蘇鉄家々領分名木をあつめ異禽霊獣をかひはなちて霊-台霊-沼の楽み鼓-吹の声外へ

もれす仙台のとのゝ秣刈加賀殿の掃除の者大路にせはまりてかそへも尽さす縁をもとめてかの山を見るに三日糧をつゝむに見残すかたのみ也千丈の滝の白玉落しかけて辛崎の松に禿倉祝はれたる所松島塩釜なる姿霞かくれの寺蚶満珠寺をこゝに寄たり香爐峰の雪とこしなへに白い鷲を千羽かはれたる汀廬山の雨を灯籠一ツにてもてなす処杉ばかりの端山をは老曾の森と見はやしぬ白鶴丹頂の毛こほして百梅に飛かはしたる砌竹林の虎をつなける窟もあり是はむかし虎の生皮をうへて珊瑚の瞳を入たり金の爪をといでうづくまるかたはらには孔雀のひな字(カヘ)したるか芭蕉のかけに啼あり桜五百本紅葉五百本左右に錦の春秋をあらそふ馬場あり樗の雲にそひへたる陰に埒ゆひたてゝある所犬追物し給へるあとゝかやくちなしの炉次はこまやかに木幡の山に心つけら(れ脱カ)たる物也かし桐島の千入なる染井の山立水臥水の清き流れ昼夜をすてすこれかの島好み給ふ公也けり南天の冬庭あられふりしけり木賊はかりの庭月のみかゝれ出るにめてたり知行とる菊作(リ)吹上にたてり杜(牡)丹の媒と成(リ)蘭の奴となのるもの京よりめしぬ鵐(矮)鶏の扶持とる辻番积(コト)しれる犬飼玉川の蛍をあつめ野火とめの虫ゑらみ根合艸合折しりかほに玉箒真砂をならしぬ貝敷る道雨にされて月と霜との光をかすめ瓦を畳める所露しけく苔ふかうして昔を忍ふ乱草を払つて蛙楽を愛する隠居舟さし習ふ女中まて湖水にうかふ粧ひを餝れり大井の逍遙志賀の山ふみしつ日も夜をふかめては松明して尾上に行通ふ楼閣雲の底につらなり轟‐鳴谷に答ふ牛を愛して紅(キ)の手綱を引はえ羊を興しては明道の巾(カフリモノ)をまねぶ居士衣に錫を鳴して白兎の玉を躍らしめ黄鸝の柱(コトヂ)をゆるめたり名鷹に猟をもよほし奇犬に山家を守らせたり八重葎をのつから鄙の住居をやつし春耕し秋おさむる業五十三次の覊‐糧をまふけ駅路の鈴の音たえす山‐関にねさめする男竹の編戸にまろうとを名のらせかきつはたさきみたれたる沢辺には飯をほとはし柴の箸とり揃へて椎の葉の情に耽り菓樹心のまゝにもぎとり瓜‐田に沓をゆるして起ふし己かまゝ也車馬かまひすから(し脱カ)ぬこそ柳のしたれたる所からにして笠に杖に清水をむすふよすがならし此清水御茶に献せられてより世人水屋敷といへり心越禅師の記道栄玄竜がたしなめる額今めかしきにもあらす隠元高泉の清莚にうそふける跡顕川に手あらひし人養老

にわかやける形もよ所ならすや蹄をひたし脛をしろめて塘に登れは洞庭西湖に生れたらんやう也から人のうたふを扇にうつし拳といふ酒のみかはして蘇-門の鸞鳳をまねくに林学士に硯を設ことし季吟に花のもとの和らきを求めたり琴琵琶の検校法師凩のしらへをかはせは尺八一節切の名たゝる沙門高欄ゆするはかりに吹ならして山の鹿必す来たり笑はるゝ梟かなしまるゝ猿のみさけひて憎まるゝ蠅なくきたまる(な脱カ)ゝ虱なしこゝに長安一日の花を見つくして馬蹄に胡蝶しつか也つくはやまのあまねきおほんめくみの陰武門の大家にたてこめたる名所見ぬ唐土になとや心ゆかん三-都の賦にも聞えわたらす御僧の納め給ふ御経にも説のこされて候へし所望ならは何方へなりとも御供申候はん

北の窓　一章下

塗垂のうしろに一株高し　嵐雪
名月や柳の枝をそらへ吹　百里
莢(サヤ)のほころひ豆そ飛行　晋子
お腹とる尼に砧をとめられて

正宗しやとて甜(ナメ)ておさむる　雪
シパ〳〵と便ゆかしき中益田　里
足半はねて袖はらふ雪　子
水漉(ウ)にたまる蚿(マツテ)も八重葎　雪
琴の師匠を待ぬ夕くれ　里
とめよかし両国橋て流るゝを　子
さすかに銭はとらぬ人-跡　雪
から臼に力車のわれら迄　里
鶏頭二本駕籠にさし物　子
紺屋とは人も存知の名角力　雪
沈香もたかす居待立待　里
せゝる手の乳房あらそふ蝸牛　子
紗の金さえもふるされし衣　雪
近比は横に大原の花さかり　里
先孝をとふ人のおやぶり　子
蛸引に手きはさえきる巴也　里
千住へ下る乗掛もある　雪
物狂ひ亭主早〳〵名のらめや　子
ふるき衾の柏から〳〵　里

あたまから烟ののほる墨衣　雪
はま名の橋やつらき橋本　子
風に蕎麦きのふの花はもろ〳〵と　里
舌うちをして何うらむ虫　雪
月と見て鼻紙袋ねちふくさ　子
乳母とよひ出す渠(キャツ)か塩梅　里
穴蔵の上の朝ゐもいとはれて　雪
股をこえしか命中山　子
鼻堕て顔の住居の淋しさよ　雪
洗ひ河原に二番鶏かな　里
引粥に氷をのこす鉢扣　子
瘤のそたつに老そしらるゝ　雪
番町の朱子とはやして花ひとり　子
四ツの日影にしろむ山吹　里

北窓後園　二

業平の暗にしられし西瓜哉　潘川
薄は月のありになるまで　里東
御用木一本乗を初汐に　堤亭

ものいはねともすこき頬切　野径
盞はつゐにすはらぬ膝の上　暁白
下モ四「五間はやふれしやうし　晋子
着(ウ)るも〳〵北条殿の紋なれや　東
画に落涙は朝鮮の者　川
くれなゐの心のこりて爪に虹　径
うはの空なる恋は木夾子(ハサミ)　白
鶏の鶉鳴かもひとりかも　亭
鳰てる月に大般若粥　子
足の毛を人むしれとも関はなし　川
稲葉か末に寐衣(マキ)ほすアレ　東
近年は終の送りの酒停止　亭
せなかへ書て放す盗人　径
腹切のしかも笑ふて山は花　子
九の戸(ヘ)からしも遙(カ)春風　川
かへる雁俊乗坊のきびすとも　東
是ても集歟笑止千万　亭
いはて山一ツとりたい御客なり　径
額ぬかせて夢のうきはし　子

回船の腹へよせたる蜑小舟　川
　斎のかへりにあかぬ柴の戸　亭
此空の碁盤の目もり定なき　子
　命にかゝる五郎兵の露　径
紅葉狩鬼も煮入をかたつけて　東
　川見分の水上は月　川
此馬に曲をのらはや普施戻　亭
　阿難迦葉へ銀子いさゝか　子
藪の色薄茶の稽古風そよく　川
　柿かたひらは人に嗅れて　径
川音も吼わたる也加茂の犬　東
　内に寝ぬ夜は花の松かせ　亭
つく〳〵と春の詠も鍔尽し　子
　気風をしるもかへり新参　白

萩遊ひ　三章下

三田山庄にて

日盛を御傘と申せ萩に汗　晋子
　鱸の車はしる板の間　功悠

雁の影面のうこきに肩入て　青流
　筏の馳走のほる十六夜　入松
子の袖も交〳〵卵尋ねけり　貞佐
　氷柱〳〵と踏折もうし　常役
牛蒐の莚をあふつ朝嵐　悠
　三木まいらせて橋に染ミ物　佐
耳聃の後はいたむと忍ひかね　松
　女中をひとり殿様にする　悠
山村か稲荷の社夜るならて　子
　硯来るまてそらに五六句　流
松前に白乾のかひなかりけり　佐
　御小進ても八十の賀は　子
仲人のまたもうしろの山下風　松
　捨ぬ世間をすてゝ江戸町　役
花生の墨打はねる月のくま　流
　中の料理はきたの藤並　佐
かやのみこぱつぱと物を春昏ぬ　子
　しつむ漆の千代の兀ヶ口　悠
つれ〳〵と唐茶干たる帙のうへ　役

製法糞（コエ）に壇のたゝすみ　流
昼ねして夢をはゝかる畳さし　松
鹿の近いは用心もなし　役
月の年（事カ）須磨は浮世の台所　子
乾のかたへ躍るやめきは　佐
籠ともに拾はるゝ子はおほつかな　松
鉦の緒とつて音なしの滝　役
胡麻塩に白きはかりを杜若　悠
しなへの相手馬場へかたまる　流
住所もとめかねたる二隠居　松
木具にたま〳〵室のゑり物　佐
角頭巾へたつる雲の身をかへて　流
大内山の瘵せ石も華　悠
初寅や主人のための申事　子
うとんを干ものとかなる哉　役

樗の灯　四章下

待友対酌

氷凝（コヽル）間を推も敲もしつ手巻　格枝
聖人ひとり霜に小便　晋子
野狐の尾の尾（ヲサマリ）を苦労して　風葉
小昼の箸は土堤にさゝるゝ　艶士
百茎に笠はあらしの仰（ノケ）右衛門　虎竽
城は六うつ鶮の行かた　枝
待月に障子ゆはへる鉋屑　子
箱をひらける菊の切紙　葉
相（ウ）応に鈴木院は栖あらせ　士
卯塔道のついたさかやき　竽
手に入し算盤ぞなら松も友　枝
かたしく袖の跡は罏の町　士
附子也と下され次第いひよらん　子
冠者におろして光ある殿　葉
鉄肌や月も氷の火打鎌　竽
閼伽の仕切に水舟の着　士
まれに来る人に験気を慮（ハカ）らせて　葉
親の枕をわらふうつし絵　子
新畳是も苧に成袖の雨　竽
納屋のそろひにうつゝかの面（ツラ）　枝

漸十の家老を花につきたてゝ　士
　あぶない岡をつなく若芝　葉
二
飴引の高根の深雪ねはる也　子
　櫛をかさぬも小屋の者から　等
ほつたては蜘手かく縄待ほうけ　枝
　金柑ぬすむ指はまほろし　子
押売の祇園守に松の月　士
　けんくはに付て廻る重勝　葉
駅長か会式の酒のたまり水　等
　足駄はかする柱よもきふ　枝
調布のこれは穂待とさらすらん　子
　地震このかた見えぬ詫（コト）ふれ　士
白川の歯に衣きせぬ門の婆　等
　入子算より京中の竈　葉
うつかりを多勢か中へかさり索（ナハ）　枝
　何を見たやら夢は蒟蒻　等
観（ウ）音へ印籠投ん船ゆすり　葉
　たかるゝ柴もおもかけは夏　士
白鳥にねぬあかつきの山下風　子
　これにも月の木形切くむ　枝
孕み稲帯にはさむも色に出て　等
　一口のるも鬼の相談　子
喰分を杣山人の黙阿弥に　士
　たか子の太刀をかへす石尊　枝
宵廻り伏屋にをふる名のうさも　葉
　兵部卿とはうたかたの粕　士
目にたちて八日の籃の雪にあふ　枝
　心の杉も簑（笠）にたしなむ　等
一札につんほ商人花のかけ　葉
　鯉見てくらす外（ト）郭の藤　子

　　　科頭に背けて
　　　　閑中の閑をしる
竹の屁を折ふし聞や五月闇　晋子
　花たちはなに一重口よふ　百里
表具屋の珠数さら〳〵に遣得て　朝叟
　野こゝろの時鶏に嗅るゝ　新真
潘（シロミツ）に染る艸葉の元結杭　嵐雪

帆をよむ橋やよく〳〵の隙　堤亭
さし樽の角文字たつる十三夜　甫盛
枕俵は床の間につむ　全阿
禿から仕衣(キ)せとる子は蒲の中　真
くもれは泪明日か大大　子
今捨てふむにつたなき蜊から　里
からす三羽の跡は歴〳〵　盛
野鼠の頤さむし森の色　亭
二日酔にもしら河の関　叟
乙女子か傘たゝむ身は晴て　阿
今ぞ情も質屋からしる　雪
開闢によい夢つふす寅の鉦　真
髪はきのふの中小性かな　里
一袋絵の具をといて雪の山　盛
たか盃(そカ)に先約の先　子
月花もしらし鞨鼓の出来て来て　雪
東海道にねり雲雀とは　亭
雪消て疝気たしかに物申ス　里
田舎かのかぬ手拭の脱体　真

たべつけぬなんひん餅を忍ふらん　叟
長汀はてのしれぬ小便　雪
藤棚の卯月になれは竈干ス　子
黄蘗を乳にむごいたらちめ　盛
屋形舟三日つゝけて楽配所　真
土蔵も人も老の兀(ケ)口　阿
行ぬけてもとりぬけたる柴屋町　里
弥六仕まへはよ所の通路　亭
月よたゝ覚束なくも牛玉買　雪
文治の秋の判官を泣　叟
猿にても人につかへは一かゝり　盛
かゝみを磨て足を戴く　子
抹香を臭うおほえし我昔　亭
餅の丸みを握リ出すつや　雪
あそはれぬ鳥の林は昼休　真
くどく側にて前髪を切　叟
君か手の相伴を待道成寺　里
颪に波たつ青天の蟬　盛
旗白を病人と見て鯛は花　叟

亭主の胴をつく〳〵し哉　子

松の塵　六章下

万世のさえつり鸜唇を転し
黄舌をひるかへす
うくひすにこの芥子酢は涙かな　晋子
ちる約束や名残ある梅　応三
船頭のけんくはは霞むまてにして　沾徳
物書捨しあみ笠のうら　歨斎
隼の祭見る間や峰の月　周東
無地には染ぬ千丈の蔦　貞佐
ことゝへは畠のぬしも神の秋　三
とまり〳〵て狂言を出す　子

此句につけて物語あり伏見に浅野稲荷とて代々の鎮守あり子葉東行の時祈願のために参詣せしに神垣の後に時ならぬ菌生出たり是に納受の力を得て奉納の三句を扉に書

神垣や幸茸は人の笠　子葉
海山かけて秋の物成
かはらぬそ月の桂の男気に

これらの事おかしきなき世語也
台の瓜こひせぬかたへころ〳〵と　斎
御前の肩を越ておもふや　洲
密法の徳にあらすや此肥り　佐
山小屋を出て光る印籠　徳
鳴千鳥夜衣は一間ほころはし　洲
鍾はちかうに親類の月　堤亭
霊棚へ足踏を鳴す鑰の音　徳
まる馬出しに成し踊手　斎
いつのころ袴やめての花意　三
桶に野老は古郷の市　佐
はつ午にのれんの狐目たつ也　子
座頭さひしくわかる追分　亭
鉄床を今おろしてや大鰆　洲
翠簾をふたへに残念な顔　三
夕顔の病人ふへて宿せはし　子
茶苑の太鼓泰平を打　徳
鶍丸の尻をからけて忘れ水　佐
三里をすへぬ是そ上臈　子

首とつて首にかひある氷頭鱠　徳
　目黒のおち穂参詣の袖　斎
あの鳥に心はとまる松の月　亭
　神と君との外に足下豆　洲
金の珠数三尺縄にかけまくも　子
　氷雨一とをり蕗の漉破　徳
信濃者京にましりて夢そかし　三
　つるへの音も腹へとく〳〵　洲
案内のその手はくはぬ花の雪　佐
　和尚のいきり彼岸也けり　亭
　　君臣の塩梅をしれる人はたれ
　　　子葉　春帆　竹平也
なき跡もなを塩梅の芽独活哉　沾徳
ちる花はみな男にてなみた也　宜雨
あしたには朽ても花や名とり川　紆角
うとんけの名も横雲の柳かな　止倭
灸するゑてちるへき時のさくら哉　仙芝
終に引汐に角なし梅の露　沾葉
曾我とのゝ宮もわら屋も彼岸哉　朝叟

身の関を越て手をうつさくら哉　杏林
その骨の名は空にあるひはり哉　貞佐
枝葉まて名残の霜のひかり哉　沾洲
　　岡野九十郎放水はしめて東へ下
　　八はしの処を問て
四季咲は牛もくはすやかきつはた
　といへりとかや人々其橋の句を
　題して追善とす
八橋に墓をめくるや春の草　周東
松寒き旅人のゆめやかきつはた　午寂
ぬしやたれ素鎗のつほみ杜若　春船
八橋や帷子ぬいて又太郎　専吟
塀のりの八橋匂ふ沢辺かな　灌木
かきつはたあやめも其夜月明り　昌貢
捨文も江戸のゆかりやかきつはた　菜花
　　父病死みつから元服すと聞て
八はしの花そむかしの金右衛門　楓子
かほよ花一株つゝのみさほ哉　琴風
かきつはたさそな煮込ム力足　角吁

井戸二ツ八橋の名は春の霜　入松
をもたかの鎗を引也かきつはた　晋子
　未二月四日
　　春帆最期
寒鳥の身はむしらるゝ行衛哉
　子葉末期
梅てのむ茶屋も有へし死出の山
三月四日　追善　沾徳会
其覚踏たるあとも雪の花
羽の調子にて目に角か入　午寂
　丸太をのせて出る款冬
踏潰す家をつはめの笑ふらん　晋子
　雨のうはさも脇差にあり
やりて衆は魔仏一如に挟マれて　沾徳
　広袖の雪見かへりに宿も哉
恐ッ〳〵なから馬に煎餅　横几
　何の遠慮に塩やかぬ海士
琵（琶）巴のねも身よりの鷹の一夜にて　凍雲
　あたふたと行当たる女郎花

しつかにくへはまんちうに音　角吁
　松風さむしてんかくに寄
荷は先へまことの立か明後日　堵岩
　憎まれ鶏の結句勝鬨
仁右衛門か人を置日を稽古にて　晋子
　君なき壁にのこる献立　沾徳
　満座一炷香拝

朝三章下之三吟

待乳山あかつき越て夕こえて　昌貢
　いほ崎の家居にかへるを
ましこ引霜よりけふの行衛哉　晋子
同し枯葉に杉の実の色　琴風
山川万里法（論）倫味噌て問　貢
差図板爰には痺きらされて　子
入月や榾につれたる腹の音　風
　鳥驚かしてんぽふる也
葛ウの葉の伯父公キの撫しうらわかみ　貢
されは都の衿エリの世中　子

千手堂一万両のそば杖に　風
　鯸より武士に成すまいたり　貢
湯左衛門に谷のひゞきを馴て聞　子
　他にすらせて寿見る墨　風
檜小檜嵐と霜にやしなはれ　貢
　月にはえある翠簾の僧正　子
みそさゞいをのか翅を灰均し　風
　余所の無常に古着かはうと　貢
瘦たうてつはなもくはぬ花盛　子
　これそ雨夜の冶郎双六　風
捕ものゝ名にこそたてれ呼子鳥　貢
　麸のあつらへは南禅寺より　風
兎にかくに子方の親は闇なれや　子
　ゆるかぬ艸に脇さしの汗　貢
卜(シメ)た材の尋ねにいつかあつからん　風
　とをつあふみは君ともか国　子
手の筋のそれさへ匂ふ心和(ナキ)　貢
　蘇鉄やわふる老の埋火　風
蓋(カサ)飯の穂に出にけり紫蘇醬　子
　盇にぬるゝ木津の枝道　貢
舟下(ソコ)に願主いくたりくれの月　風
　かれは薪にひろふ鉋(カナ)屑　子
気ちかひのざんない所ほころひて　貢
　人も臥目に懸河の臥座　風
台なからつき戻されて羽抜鳥　子
　みな皺-面にお皮切なり　貢
花はこの加賀に伝はる五本骨　風
　雪間をわけてちやツと吸物　子

三の蓮　八章下

　しのはすの池亭　晋子
寐てかとへはちすにさそふ朝朗　甫盛
　髭籠にあふはあふひなりけり　百里
木玉より木挽にいさみわたらせて　堤亭
　牛はうしろに行水の邪魔　沾洲
栽物のない搦手は月寒し　里
　河豚の遠慮に窓のうなつき　子
待空(ウ)は足の大指をつかむらん　子

うつす目色に御番衆か飛　盛
信心のけしき変して釣狐リ　亭
　鯲もけにや文王の園　洲
ふかみ草一年分の付とゝけ　里
　暁の箭は天か下なる　子
さゝ波や餅は持屋に落る月　盛
　柿を祈つて剛力か汗　亭
内儀やら何やらしれぬ初あらし　里
　鏡そつらき藍-蠟の髭　子
花ふさを押小路物にほはせて　洲
　候へく候や竹に椒皮カラ　盛
涅槃像なきつる方を詠れは　亭
　金子を首にうつの山越　子
元服にけなき年のほとゝきす　里
　さゝやく人は橋て北むく　洲
灯の喜見城なり蔵座敷　盛
　箸をかくして居へわたす膳　亭
駈リ狂ふ八人天狗天津風　里
　雁来紅を君かこはかる　洲

(二)
一本まて扇ひろふて月を持　子
　ほとをりさめぬ鳴を則　盛
藪山に希-有な病を請取て　亭
　過しかねたる口に入相　洲
風そふる縮はわたく成にけり　里
　融をうたへ水戸の塩竈　子
スパ〱と甜からせたる星か火か　盛
　寺家から通す花の古道　亭
山〱の檜椹木いかのほり　洲
　墨流しなる水のかへる子　筆

歌の島　九章下

恋　一折　旅　一折

友寐して鍼-立寒し恋の丸　秋色
　歯湩クロもらひに霜の袖笠　晋子
よ所にのみ早打みれは轟て　専吟
　かそふる雁に爪のない指　色
月のうちの葛籠男はくもる也　子
　伏屋のうさは酒臭い菊　吟

うら問に落てくやしき私語　色
　御三-所なから同し産月　子
折からと四条を画て絵帷子　吟
　水の出はなを長と不和成　色
はつかしや此かちよりの草履取　子
　筑摩の祭世にはぬり笠　吟
をしたては薗生の竹のすうはりと　色
　天の河瀬に化物の首尾　子
涎さえ枕にぬるゝ月の色　吟
　たれに抱せんすまふにもうし　色
ちり迷ふ花に静も半合点　子
　白い歯見せよ猫も狂言　吟
春めくや馬に嗅する菓子袋　子
　かゝみ山から楊枝めせ〳〵　色
不住の身兵衛の時を語出し　吟
　漕はなれては蚊をしらぬ舟　子
居風呂を軒の艫に覗かれて　色
　しのふのみたれ仙台の絵符　吟
残月に小遣ひ弐百文わたす　子

　波はよせてもうらのない足袋　色
近道へすゝめ申せは楫まくら　吟
　九仏の日記を十仏の〆　子
松盆に逗留中をもしほくさ　色
　たま〳〵あふは玉味噌に小菜　吟
夕鳥ひしりの弟子を一つなき　子
　あの山見さい江戸にない山　色
大義して御本陣まて花に折　吟
　請浦近しいさ桜鯛　子
うくひすに心の駒の朝はしり　色
　上下の者のおほろ〳〵と　吟
歌の島先松魚より光さし　掃尾
　芍薬ほたん岩に口紅粉　万橋
水雲に合掌戸樋の糸もれて　馬黒
　たうからしさへ千金を積　晋子
月の鵙お小間使をよびからし　橋
　畠に篦は浩-然の露　尾
野々宮に万度の家もはやる也　子

風のたよりを茶屋へ早速　黒
卅日なる髪の袋をふりさはき　尾
この米虫は何の因縁　橋
艫板によめぬ坊主をぬすみ乗セ　黒
ぬくとさゝぬそわれからの鞘　子
お見立に二百疋つゝけさの月　橋
すゝき折敷浜焼の伝　尾
熊本は露もかゝやく冠木門　園非
すはるこのりに段切を踏　寸楚
舟出して花の小鳴の手拍とも　黒
梅ほころひて前帯も癖　橋
春は此竜虎に立て泊らんせ　尾
三輪の奉行のまたしらぬ道　子
ひかなれは草履上手の土めくら　楚
達磨の背瓦灯干サるゝ　黒
さび竹を泥から出して雪の朝　橋
錦帳にふす鶴も新参　尾
石山の鑰はおほろに鐘の声　子
ふりたる烏帽子本性て舞　橋
足弱にあへらるゝ身は思ひ艸　黒
ふたり打手を秋と答フる　非
宵の月四方あかりの張簾　尾
いさゝか家賃乞食なからも　楚
一宮に十五ケ村は腹鼓　橋
海松からほとく尺長ケの貝　非
たれあらん天の橋立奥平　黒
夕日にかさす袖も日三里　尾
幼少な隠元禅師花ころも　子
匂ひにはまる艸の焼餅　黒

家々の名所　章下

富士長篇　枕草紙古本ニ海は鳴沢の海と有八海のその所也季吟抄にはのせられす愚案此草紙にすへて此山の事なし書写鳴海の海の誤にや

鳴沢や幾双(ナン)の奇の衣かへ　其齋
鸛蒼鷺も狩のざゝめき　晋子
風になひくもらひ欠をあの面に　来示

筆て心剪(キル)夜半の友閑　其幄
近松も松原遠く月は見す　格枝
　砂惜みなる菊の吹上　孚兒
竹(ウ)とりの翁さひたる稲庇　子
　大行あひやそれか初恋　斎
忍はしき御綿帽子時雨ふる　幄
　とけて流れて三階の酒　示
呑(ミ)料の煙をきさむ三穂かゝり　兒
　鷹と茄子を浮橋に待　子
来(コイ)ヨとや打れてねたむ太鼓共　示
　月夜の反吐は終の罰　幄
をとり迄筑波に勝しお酌取　斎
　朝鮮人のこゝろある鴫　枝
雪は花赤人の手にふるはかり　子
　おもひにもゆる胸は三ツユリ　斎
安部川をわたらは錦床道具　枝
　百畳石も鹿子半分　子
目の下に雨はふり来ぬ捨舎り　示
　蚊やりに鉋す扇あみ笠　枝

粟(ゾツ)とする水は六月十五日　幄
　岩本院の亭に上段　兒
神奈川のあなおそろしの物語　斎
　はくりやうを待松に褌　示
時しらぬ梁の摺鉢雲を衣(キ)て　兒
　ノ(ヘ)に見ヽ(ホ)に見ん有明の雁　子
汐見坂北の柑子に牛の舌　枝
　野分せしより名も二見晴　幄
入あひにお明(キ)〳〵と持や田子　示
　もとひの袈裟も百日の閼伽　斎
斗なき雪を湯にして酒の代　子
　瓦坊主もむかしから今に　幄
堯孝のこよひ裾野を花の宿　枝
　四方の腰は白妙のんめ　兒

継目の御礼としてなみ〳〵の下官
　羽塞を出時の宜しきに逢奉り
此説をとく古郷へしらせはやと
　いそく心の駒ゑらみせしに晋子

門送リの盃をとりて所望
わかこふる南部二歳や後の月　其雫
一穂たしかに五百粒つゝ　晋子
木犀は肩うつ槌にふるはれて　沾洲
瀬をふみ分の鰰(ハタく)の穴　紫紅
橋ト虹ト卍に組ンで晴わたり　子
二車にて茂庵松の葉　雫
鼻も目も藤倉山の睡虎岩　紅
蒐落ものゝ至極風藻　洲
小普請の鬼に待るゝその夜はゝ　雫
指とゆびとのみとの交(マクハヒ)　子
早追の褒美して行走リ書　洲
帷幕のうちにたはこ始マル　紅
雁鹿に五色の餅をうろ〱と　雫
今の遊行は誹諧を月　子
松明の影に聟かの秋の水　洲
否(イ)や出なこひは沖の石舟　雫
花に棚熊の拱(コマヌキ)見てしかな　紅
檜原の辛夷諸白を吸　甘己

臥セ紅粉の色ほころひて春日影　子
狐つかひも門前の物　洲
化さうな枕なからも嗅ばけに　雫
つなかぬ舟やりん気仕習へ　紅
台にたつものゝ哀や八代賀丸　子
梟に袈裟や御隠居の顔　雫
伊勢か鞍三途にかゝるつゝら折　洲
竜の尾ぶりはもみ上た錐　子
鉄炮に釣瓶かけふる夕あられ　雫
宿にゐたとはいつれ十月　紅
一葉つゝ兎の弓にはらふらし　洲
猿かみたれをきさむ松茸　雫
八十島のもくめを撫る玉の露　紅
藻蒲団に泣蚤のみとり子　雫
手力雄大飯くひを守り給ふ　洲
この御出頭千手観音　雫
錫引の光を花と人の影　子
つゐ通りにも苑のこゝろ見　紅

糟壁のすく迄と引付らる
檀泉と道くさして　晋子
爰にのむ座敷しつらへ網代守
鶉や松を一もと蔦かつら　檀泉
菊の間をから弁当に昼ね哉　沾洲
小車にいつくとまりのお鶴様　紫紅
檀泉か庖丁しけるに
雁遠し先これ迄は江戸肴　其雫
一葦のよる所秋天万里千帆
漕もとす事かたし
初鶴のしつくや櫂に強風(コハチ)舟　雫
二日の月か肭肚臍の耳　紅
穴門のおくは酒もり艳して　同
一とせ巡領に供せられて
象潟の岩を削るや袖の露　泉
蜻蜓や日にてりわかる島衛　紅

里居り　十二章下

木葉に詩文なと書て流したり

おもふ人の末にてとりて見は
里なつかしき事をしれと也　竹意
御溝葉に恐れなからや忍ふ艸
七百足をねらふ数さし　晋子
素建から月にはさはる角家にて　艶士
くもらぬ暖簾声なうて呼　幸輪
茶色鳩胷と申せは都也　専吟
子のものしりか椰子ほしかる　意
床の間に熨斗は置れて公いまた　子
目影にわたす蜘のふるまひ　士
ほの〳〵と腹にたまらぬ明石潟　輪
段子あつめは拾得にこそ　吟
ぬれた目につられ〳〵て我は雪　意
ねねはならぬかお袋の側　子
かもしそと揃へあけたる蕗の皮　吟
夕汐見えて神楽触来る　士
流矢の身にはこたへて馬の尻　子
つれなし蕎麦やいけぬ線蘿匐　意
つれ〳〵と初茸程に雨の足　輪

風呂の手合へ月の金札　吟
秋なれは諸行無常も太-鼓-楼　士
　後のあしたは綾のおすへり　輪
大毒の反魂香を花の雲　子
　十八町を游く曲水　意
鈴子して禁野かた野の乱拍子　吟
　いほりの茶臼されはさる者　士
よび生て御膝にかゝる五ツ衣　意
　すゝり団子も泣(ク)概也　輪
浅ましき鼻は奉書の作りつけ　士
　重頼の名はきえぬ送火　子
鼓(ナリ)物もさすか岩城の月の友　輪
　ちれはそさそふ萩の染革　吟
兎の子靫に入て参りたり　子
　むかしなからの五智の仮葺　意
壺笠て遊女こさめれたひ衣　士
　沈のまくらを神鳴に出す　吟
気霽ては船をお留守に岡の風　意
　猫かと光る宮守か婆　輪

一撫に天の羽袖を五合升　吟
　大鋸(キリ)しらぬ巻向の山　士
入札の若衆さん〳〵冬かれて　輪
　鵜に吐せたる文か物いふ　子
白無垢は二-襟かえてゆめはかり　士
　竈(クト)を流せはやかで其まゝ　意
雉の尾の枝を漕也花のうへ　輪
　たうにたつ菜を袖に摺るゝ　子

篇外

三弄翁の食鑑に鯸(コウ)-鮧(イ)布久と訓す古は布久閉(ヘ)とかや云り腹脹して怒り波の上にたゝよふ形をふくへとはさしたる成へし三平二満にしてけうとき口もとしたるを虎御前とはいかに西施-乳と比して雪の夜の衾をあたゝむるこそ楊家の独にも劣らしとて詩人は鯸文人は鰹とたて分りて九夏三冬の親炙近来の上達

　医師の口からはいはぬ事也
茶の湯にはまたとらぬ也瓢汁　晋子
鉄炮のそれとひゝくや鯸汁　同

了喜菴の会饗冬枯の榎榛の木の　子
嵐のひまに暁笠亭の若者を集め　洲
夕闇の灯火遠うしてすがゝき引も　松
きらす聞ゆ例の謀叛なとすゝむるは　泉
閑居不善の色敵よと晋子に塞(セカ)れ　子
一方の連衆は手樽にふせきぬ亭坊の　佐
腹立は醒てあとなくや　檀泉
鯇汁や米買なとか仮まくら　沾洲
鐘は木末にあられ一片　晋子
有明の舟に車をかきのせて　丈松
たつぬる人に丁と玉むし　貞佐
髪ゆひの帯にほとけて初尾花　泉
切戸はらつて西は田のあせ　松
一(ウ)すしに仏の鼻とくさめして　子
おもひもよしや吐血三代　泉
熊坂と在五中将いへはえに　佐
大根はにへす煮る榛(ハン)の木　洲
穴倉へ梓のおとの水くらき　指雀
籠てかそへる若狭何束

鎗持にふるなくとほとゝきす　子
物にくるふもたはこ入也　洲
渡れはやうそ八百の安の川　松
名とりの老女殿へ盞　泉
ちると入ル後のあけほの匂けり　子
段のつゝしへ着到は済　佐
頭巾とるゐぐいて晴る春の山　泉
おもひの外に見えし定小屋　松
投足に雨ふらはふれかき鱠　佐
穢多か崎をもれし土鑵子　洲
是やかの美濃様よしの着心に　子
階子にたつは両の手の君　佐
俤はけふりにくもる屯(タカ)リ喰　松
大三挺に芦の香を引　其幄
昨今にのこることのはなかりけり　泉
杵もひゝきもしぶくとこそ　松
舌かゝぬ心わるさよ残る月　幄
悠-然として花にべカコウ　洲
鉤の魚蓋(フタ)をたゝいていふならく　佐

門ておほえる六郎左衛門　泉
御曼陀羅かゝれとてしも二百両　子
駕籠のいやかる生れそこなひ　幄
矢倉には憎い面あり四方の花　洲
つはめにてふに勝手はたらく　松

了喜庵に酔吟

先(ツ)皮をみやこの我に河豚汁　丈松
後の月汐さい鯸も契あり　五出
初鯸や身従の医師の遣ひ物　其幄

柿之絵　一休和尚自讃

冠里公の奇品として晋子古(ル)筆を嘲て六種の一ツをまねたり中〱似るへくもなし予其気質の稟(タル)ひとしからさる事をしる今年ことに病僧と成て見たてから渋し　東潮

うちまけて笑へや〱柿俵
また撫になる秋は山人　晋子
有明の鐘つき賃を催して　青峨
鰯のよりに舟もはしまる　双魚
蒟蒻のうす紫に火のほめき　太岱
むかふたまゝの詩に辛い顔　潮
瘰(ウ)瀝の笠にぬふてふ梅の花　子
いひもはたさす蝶の口もと　峨
春を世に辻やすらひの枕うり　魚
遠見もありて城の塗きは　岱
千歳に膳のすへ手のかけ廻る　潮
五間つゝきに西日時雨る　峨
鼻紙はもらひつかひの木綿坊　岱
うかぬ軍と詠めくらしつ　子
海山の心にのれは刷毛をゆふ　魚
宜禰かならひに負はるゝ巫　潮
貝焼に月雪花とすゝりあひ　岱
奈良をつとめてやまぬ清涕(ミツハナ)　峨
小表具の春の夕へを干てみれは　子
女中もさする岡の帆柱　魚
水増は宮古の雲のうき名かや　潮
ねらひの著(ツキ)に成し合歓の木　岱

蛸なんと腹たつそれに任せたり　峨

大御秘蔵の利(キヽ)腕を取　潮

達磨寺に思ひ朽たる雨やとり　魚

ふいご祭の素袍尤　子

水仙の膠付(ケ)なるあさ氷　岱

一くたりても訴状聞える　峨

江戸者の伊勢の灯月白し　魚

(注)かはる淵瀬を色越への秋　子

桐惜みわか庵なれは切惜み　潮

豆をくはうとかゝる味噌搗　岱

拍子木に左右をやつてくれはとり　峨

蒔絵の浦の節句淋しき　魚

名将の座栄(ハエ)各別花の笑　子

中にぶらりのなと夢の春　筆

金杉のはしにうち出の浜

大津馬松本の牛も休めり

皿鉢に駒の蹴あけや心太　晋子

漁父にまいつた沢潟の風　貞佐

仮張の延喜天暦苔むして　仙鶴

凡手に入長-安の矮鶏　沾洲

尿瓶の月推参の場もなかりけり　横几

上蠟かけは蜀黍の真　子

竜(ウ)田姫背を鏝て撫て行　佐

羊をたゝく皺皮の牢　鶴

みほつくし口中腫す火吹竹　洲

ひろひ買して走る岡持　几

迷ひ子と泊(リ)定めぬ酒の酔　子

飛鳥井紅をたれ様の墓　洲

のけ物に金の封切まくす原　几

枕法度に名はたゝぬ月　佐

秋風や目にはさやかに骨攣痛(ウツキ)　鶴

原田次郎か袖は世の露　子

花に来て物-相飯も百人一首　洲

お湯-桶まては遠くかけろふ　几

講中か巳ノ巳を夕はらへ　子

通-辞をそこへ放す滄海　鶴

内々の傀儡女をよふ木綿夜着　佐
けふも瘧ふと夢そ悲しき　洲
瓢まて数にはもれぬ司めし　几
鯲にむかふ水の蟷螂　子
大空を天竺といふ月見して　鶴
また引負の扇一本　佐
掃キ庭に織流したる篩絹　洲
よし山婆へ雪車の餞別　几
鯸の血をしごくはかりに相枕　佐
(挟)狭み素袍はいつのきぬ〲　鶴
屛風好キ物おもふころは立こめて　子
股のしこりをいはね濃つゝし　佐
留守居役朋遠方に花さかり　几
俵にした箭の春惜むへし　洲
塩鶴の縄をほとけは干潟にて　佐
千とせの坂は分別の坂　子

漢家謫居の人は竹を画て世の中のうきふしを忘れ馬を画てこゝろの散乱をしつめしを雁のつてしてわか国に渡せる物千金にもかへすとかや沢菴の自画に月や流人のたすけ舟とありしをきさかたにて得たる名物也絵合の一かたにしてそれにくらふるもの何ならんと島〲うら〲の日記昔今の一風流をさかす中にあかつきの雲にかくれ行舟のあとなき波になからふる者あり島むろて茶を申すこそ時雨哉と侘たる句今さらの袖の時雨とはかりに捨ことつてをしたり

新月の島絵ゆかしき便かな　楓子
昼の白髪は篠のまた生　晋子
浮雲の鷹に埰せゝられて　岩翁
名のある団子玉たれへ入　暁白
他屋敷へ櫓なしの舟か着次第　大町
なふられものに松はさま〲　専吟
初雪のさかな求めに鉢かつき　猶即
切灯台はこゝも四ツ限　堤亭
ウ
つれ衆へは筆むつかしく法の声　昌貢
占にも見えす水の評判　琴風
深山木の末はもつとも御縁つく　紫紅

内藤宿は江戸を古郷　反梅
世中を庄八か目にたしか也　晋子
　二枚ある歯の年寒き松　楓子
仏とは大髄よりもつつ立て　止水
　たはこかやむとすてに昇進　其雫
腰をうつ子ほとの宝あるへきか　専吟
　かるい狐はつねに菊守　大町
紅梁の菰をとかれて秋の月　暁松
　きぬたにかけて配り上下　岩翁
花にこそ士農工商さくや姫　其雫
　水から揚る山吹は分　紫紅
雷も呑たいそらにうゐ〳〵し　琴風
　何を画けるふんとしの蚤　昌貢
順礼の土蔵に泊る暗閑と　堤亭
　河原といへは吸物を嗅　止水
逆剃も夜の錦とつふやきて　岩翁
　女もつかふおとこ人形　晋子
りうたんのたへまにしほる大指の血　反梅
　地蔵を挺(テコ)に白樫の色　暁松

豆蟹の塩辛逃て月の跡　紫紅
　どこそのはつれ仕り人　琴風
忍ふにはちよつと稲荷を手伝せ　止水
　擲にかゝる袖のしからみ　楓子
箱根路を四尺階子の行ちかひ　晋子
　田中の鷺のすほむ傘　専吟
ニウ
をのか世を尾ひれもふらす氷鮎　昌貢
　伝受つゝみを看経の隙　大町
栄燿さに持あまりたる腹の張　専吟
　しやうしの骨に京辺の畑　猶即
掉鹿の撫られに来る朝機嫌　琴風
　身ひろい形てきぬ〳〵の露　岩翁
剝栗に頬を冷せは月うれし　堤亭
　鮫洲(サミス)よろしき楓橋にこそ　止水
よそ目には笛也けりな小脇差　紫紅
　こゝの輪乗の中に葱冬　暁松
放参のひたるい顔を日なた向　大町
　陸地へ賽を藤岡の市　昌貢
大釜の入あひをしる花の荒　晋子

弥生と見ゆる引出の夜着　楓子
三 那智黒もまツ此ことく蜆川　専吟
人は何とも若衆同道　猶即
夢はかり母袋へはいりし雨舎り　堤亭
尾のある丸太牛房はえ也　琴風
吐ヶといふ主のゆるしも山下風　暁松
踏た男は物取てなき　岩翁
功者なる鶏見まふ笘屋かた　止水
切籠のふさをしほる蠣剝　晋子
宵の月産てくやしき娘とは　楓子
相談の場をしめぬかうろき　専吟
此側はみな鶴重のなるみかた　大町
千里を行も機おりの足　昌貢
百年の人を御扶助の雪の中　猶即
奉行とあるは広い制札　岩翁
三ウ うちかへて伊豆の小山の花しきみ　楓子
雨の鵜籠に獺かつく　晋子
うす〳〵と見ゆる盲は罪ならん　止水
五人か待に三疋は来る　反梅

神無月袖にふりゆく眉鑷子　猶即
菩提のみちをうたひ本より　昌貢
冷酒かうき世の友と鳴戸繰(クリ)　大町
腫物苦にせぬ目前の鬼　専吟
三方の底うちかへす蚊やり草　琴風
和尚の便宜また長もなし　暁松
から鮭に結ふの町屋おもひ出す　岩翁
舝丸かくしまてあられふる月　猶即
咲花をかねて手に入作の鞍　止水
むめのしつくは三寸の相伴　堤亭
名 うくひすに聟の中入ほのめかし　大町
鞘印籠にゆらく玉の緒　琴風
行列も杖つき坂はをのつから　昌貢
口拍子にはのらぬ其阿他阿　楓子
晒ほすこしらへ雲にほとゝきす　専吟
どなたか残す大鯉の首　暁松
六尺のまかり申せは咳気して　琴風
羽織に襷かけて石摺　昌貢
我宿の灯よ所の竹にあり　堤亭

ひと夜二夜は乞食の乳　晋子
嚢から中花へ出て峰の月　楓子
丁を隙日と雁のおとつれ　猶即
角町のわり下水から秋よたゝ　岩翁
あたまはつれて紙を尋ぬる　止水
奉幣使何もまいらす朝朗　暁松
帆にはねかへる三尺の海老　堤亭
つれ〳〵の爪をためたる古櫛笥　琴風
かたわれうつす鎗の間の富士　大町
屁合に膝たてなをすはかり也　晋子
二六対なる北向の笹　楓子
花鳥の改元触て三笠山　昌貢
旅客もましる曲水の体　甘己

右巻々文類の大意をわけて引合せ精稿すへきを風光に犯されしかは寒暑心煩らはしくて雑篇一冊に略し侍り掌舒読考の後各其わたくしをゆるさるへきもの也

昔紙の巻物なりしを宗祇法師長門の国にて尋出侍りてつら〳〵よみ侍るになみたのしつくかはく時なしとありし文義を感通せられしにやそのまゝに外題にかきて別に詞書をそへられたり定家卿の御書に宗祇の外題と代をかへなから名物を揃へたるもたくひなかるへし

元禄十五年壬午
。聖廟八百年御忌。西行上人五百年忌
。宗祇法師二百年忌。貞徳翁五十年

霜月十五日懐旧の心をのへ侍る
帯解も花たちはなの昔哉　晋子

かの長頭丸のすかたにて昇殿ありし昔をいへる句也夢想を祝し侍る会盟の事につけて才士文人筆を置さることし其名高き人の年忌に廻り合するも風俗おとろへす飛梅のかろ〳〵敷云出へきにあらすと
松梅やあかむる年も八百所　晋子

亀井戸千句奉納発句略之

荒木田守武独吟誹諧千句之奥書

右誹諧はそのかみ独吟千句立願ありけれとうち紛れ亦は成かたく過しけるも空おそろしく如何はせんの余りに御鬮

を取へきに一ならはもとより二ならは誹諧の有増事にて哀二おりよと念しけれは二おりぬ有難さ限りなく大かた千句は三日なれは是はわつかに二日にもたらさらんと思ひの外になか引夜はね覚かちに催し庚申には二百韻にて五日につゝりぬ其折ふしにや有けん周桂かたへ此道の式目いまた見す都にはいかゝと大かた尋しかは式目は予こそ定むへけれ定まる所を用へきのざれたる返事下り合せさらは此度はかり心にまかせんと所に云ならはせる俗言私ひれたる心詞一句彷彿うつゝなき事のみなれとあまたの中なれはうすくこく打任せけり扨はいかいとてみたりにし笑はせんとはかりはいかゝ花実を備へ風流にしてしかも句正しくさておかしくあらんやうにと世々の好士のをしへなり此千句はそれをもとちめすとく満したき一念はかりに春秋二句結ひたる所も有ぬへしされとも正風雅人の耳にも入ましきに聊も聞えんはははからさる幸ならんや其上粉骨妙句なきにしもあらす又さしあひも時代によるへきにやしゐてなをさんも執心いかゝなり然れは誹諧何にてもなき跡なしことゝ好まさる方の言種なれと何か又世中云ならんや本連歌に露かはるへからす大事也本連歌兼載このみにて心ものひ他念なきとて長座には必す催し庭鳥啼かうつほになると夢を見せ聟入に一橋をわたり宗碩は文かよはしの自讃に入相のかねを腰にさし宗鑑より度〳〵発句なと下し侍り近くは宗牧一二座忘れかたくこゝらをたよりにて思ひよる事侍る也追加五十韻おほけれと祇公三島にて千句二折を思ひ出る物ならしさて古来まれなる独吟千句成就松の葉の正木のかつら目出度や侍らん

これは勢州山田の住反朱子かもとに右の真蹟あるを涼兎(菟)斎をして聊たかはす写し得たるまゝ也

類柑子　追悼　下（題簽）

立篇分篇得美名而勇怯之品級進退之点褒
判然破竹歎玉是又可謂諧体之新奇吟
房之希珍者然非与甲申暮春下浣百之叙

待宵　上冊

一合　左右二字

一百の餌臼に拝め治鶏坊　冠里

忠臣に箒のいらぬ羽音かな　掉孤

五徳の冠者羽団扇をもつて開いて東西〳〵むかし
玄宗皇帝乙の酉のとし三月三日に誕生ありしゆへ
唐土のとりをあつめ給ひて七艸の薺生たつよりや
よひの餅草までに馳走奔走有やかて桃園に塒つく
りして治鶏坊と名つけ五百人の童子に守らせらる
日本の鳥もその代のためしを引今日の節会を初め
て忠臣の朝を告閨門の夜を司さとる一日の計は
鶏鳴に有と伝えたり今度の行事某仰せうけ給はり
て花鳥の心をやはらけ列る翅七十番の勝負を記ス

類柑文集下

闘鶏之戯玩尚矣季郈之芥羽金距之後唐皇盛於
此在于伝賦韓聯杜律之彙則是戯玩于騒壇
者而共載籍之所見歴々焉我朝雖未聞其
権輿堂上以及里閈為佳節桃園之戯玩也
又已旧而前記之所録可以見其概也今茲弥
生之初公筵潊芳之余取題於此延彼晋子
襍以従輩而恢鼓俳觜或有七歩而吐五
六調或有十歩而発二三曲間有執一者
以夜既闌意始倦而各歇搏啄多寡混合積壱
百有卌奇而公裁居其半至於遣詞名字之競
変態則所謂五百児之羽儀森々屯其中是
所以追於佳節之典故據於桃園之賀趣而
戯玩之趁雅致者敷逮使再煩晋子而後偶

凡例

一五字は一日長安ノ花の花やかなる御遊にもとつきてこれを用ゆ
一三字は戴ノ冠ノ文捕ノ距武の二ツの徳をあらはして字面を改む
一二字は越鶏の雪に散乱して鶴ノ鷺鷥ノ毛のあらそひに批す当時𠂆形の点を用ゆへけれとも甲乙の昔のやうに立かへりて禿尖の力を合セ侍り
一生変(フ)りの仮名を正し所ノ生の実名をことはり一手〳〵の名をひろひて珍ノ禽怪ノ鳥の品を定む申ても諸国の大寄なれはあまりに晴かましくて目くれ心もみたれ旦(タツ)ノ夕鶏(カレ)のうか〳〵しきことはも有ぬへし　亦〳〵申事の御座候待宵の手三十五合をのかねの手世五合とす小侍従のきみ少将の尼いつれもほまれある方人なれは則二巻の題号として物加和の蔵人筆とり也

二合

御簾まて撮(ツマミ)なをすや花冠り　百之

戴冠文とす

左折歌にやはらく啄(ツキ)目かな　里

捕距武トス

左の座に着らるゝ事大臣の鳥也爪距(ソウコ)神ノ爽ことにすくれたり字義花冠トサカ朱冠サカとよみ分んとの心なり是を文とす左折武門源平の威儀たり右の座につけられて羽翼をかいつくろふ事しかり是を勇とす猶歌に和らくとおほめかし聞え候は文武兼備して大平の時を唱ふ成へし

三合

広庭に風の輝(テリ)尾の進み哉　雪花

乙字とす

叡感もいさすゝなみや志賀の種　里

五字トス

風波ともに揮(ハウツ)て花にうち出の浜輪を廻りにほのてり尾に尾花なひかせたる手合其争ひ君子の鳥にして上下の貴賤あれよ是よとましろきもせす行事心ある者にてさくらの一枝を折て右へかさしぬそれより志賀之助に上こすものなし

四合

炭喰の声たにたゝぬねらひ哉　晋子

乙字とす

十月をかねてなき身と弥生丸　里

二字トス

予譲か昔を追てけしからぬ餌はみ也其魂此鳥に化して讎を報へるにこそ蜀-魂のためしにならへるか血に啼にはあらす相手を血に鳴せたる兵也丸は男の通リ称(ナ)関のこなたの名将鎗下の声晩世にひゝきて其ノ月其レノ日と時をたかへすして信あり

五合

湛増か汗をしつめし羽風かな　何虹

乙字とす

爪距(ツマヨロヒ)脱て米屋へかへりしな　里

同

只白旗につけとの御詫宜ありしかとも猶うたかひをなしまいらせて権現の御前にて赤白の勝負せしに赤キは一羽もかたすとかや其中に搗屋出の上白と名乗て七羽の中の大力別当もこれにほれたり

六合

弱鳥(ヨロ)やこゝは承仕かもらひ退　里

乙字

□(黄)茋餌けふの手からに宥しけり　習魚

同

遍照寺のけしかる法師つと罷出て左を抱へて遮へたるに衣におそれて唯はかたぬと見えたり日比諸鳥を飼なつけて恐ろしき罪つくりけるを大雁共の筆の跡たしかなりけれは只今貫はれたりとも行末心もとなし黄茋餌立られ盲と成て後鳥骨|鶏丸と製法せらるゝ事ゆめしらすして婦人虚弱の力と成事これ誰か力そや只今の手柄こそ命冥加なれ

七合

砂渦やつよきに水を一蜆　里

五字

毛衣に腹黒き名を雪めけり　晋子

乙字

俵の末孫朕太郎と名乗て立臼に上リ砂水にむれ入むら鳥の羽音先陣比類なし右は名さえつたなくて人にもしられす骨迄鳥武者とはかり後ロ指さゝれし

に鶴の毛衣をかりて会稽山に徘徊せしかは忽ち其恥を雪めたり此後薬-剤の陣に進むへからす

八合

扮られて毛足は松のみとりかな　白桜
遠く蒔ケ梅の下はむ鳥の米　里

左右乙字

志賀の関脇唐崎ひとつ松たくひなし此春は今一しほの色まさりけり扨此ノ方には風ふけは梅の下はむ庭鳥の上毛に花そちりかゝりける昇殿かさなりて御階に近く賞翫せられたる鳥宦源の仲正の扶持すまふと候へは
松と梅との中よくあれかし春や昔

扶持をやる鳥かしらせけり今朝の春　露沾

九合

此首尾を狐はめなて御前負ヶ　里

二字

喰抜の羽実-検や路次のもと　志水

屯

さん〳〵の首尾昔男の名も汚れたりくひぬき羽羽箒の手本と成てうつくしき手きはなからやりつるせなの恨みを得たる所心にかゝる負成へし無下の瑕-瑾にもあらすと鳥に力を付てもらひにしたり

十合

名乗せん三枚朱冠をみつの山　里

二字とす

めつた勝闘鶏野の筋と召れけり　習魚

乙字

饗切左右へこきあけ大前髪つかみたてたる有様三まいさかの見参と也三番うつて三の山と名乗角あるものゝ角牙あるものゝ牙見事〳〵爰に闘鶏野のあら手を入たりつけの小櫛もさゝす来にけりとなん津国のつけ野は昔黒主鹿をゆめ見しより夢野と名付古意たゝ闘鶏といふ事に取合たり一作小錐目に見ゆ

十一合

胯くらへ薩摩におゐて扇かな　百猿

左右乙字

入首へ胡椒頭巾の羽風さそ　里

小膀く〻りの手者汝は一人の膀夫とほめたり破れかふれの時に破‐楚の大‐元帥と記されたるそれか弟子也爪立より内朠へうつて扇長ヶの大兵琉球の後‐胤薩摩守我有といふは隠岐の小島の荒者也頭撚リの上手つつと入所をはねかへしたり花〳〵しき胡椒軍かな

十二合

裁つけの足に覚悟や錐‐嚢　辰下

乙字とす

取放し佐野にはいくつ合せ牒　里

捕距武トス

たちつけの体田舎行事とみえたり芦と足とのせりあひ六かしき手を云ほときぬ右も又入くみたる手也佐野領舟橋より出て牒面に合せその数極まり侍るにいつくへか取逃したりと申すそも鳥は無シ亦取離しとの両用を今あらたにとり放したるはうせもの〻沙汰にして吟味すへき事なから歌の心も改まりて珍しと仰せありて御褒美ことに一扇をたひぬ

十三合

音をはかる東マ合や羽衣の曲　里

柳か瀬をつかみ合せし鳴尾かな　右此

左右二字

吾妻合の曲流音をはかるとの手寄ひるかへす羽風に目さまし事彼玄宗のたはふれには以てまいつた合せものなり両岸の柳のみとり東のかた屋西の片屋遅速同しからす其羽其尾ともに風流陣

十四合左二字

刻ッて入くるみ花冠も箕手哉　晋子

距ル筋の子は子也けり小蟹　雪花

山からの廻すひねりを得手物箕手にか〻る砂はらひたまるへからすとてしやつに翕ハムかふものなしもてあつかへる手心にこそ其せがれ鵰‐雛の奇をあらはし汐干の小貝をわる拳にのせて鵙のことし花冠はさらに唐干の米ほと

十五合

角もしや三年爪の弱くるま　唄言

屯

とりむすふ植毛の爪や要石　　焉子

乙字

爪にいの字をかけて進み出たるに力定らすして膝車とみえたり年の功猶〳〵執行すへしかなめ石四結を取てちつとも動かす神の力のあらん程はと荒言尤

十六合

支毛なく漆ぬりけん惣まくり　　雪花

乙字とす

油符を鯛合せとそ恵比須抱　　里

半面美人印

大黒屋の塗桶といへは大津に隠なしかれは投ると口を明ゆへ也大坂に濡髪いつれも支毛(サシ)なき若鳥也為家卿の歌に紅のをのか身に似ぬうるしの木ぬるとしくれに何かはくらん　觜太(ハシフト)をあさむくへし節会に召れけるより桃九郎と改めたり油生(フ)の将軍三郎との烏帽子桜の陰に釣竿の旗さしあけ給へるにはゝかりなく推参して鯛の一はねにはねたをされぬ此そり天下一

十七合

大鋸(キリ)の血は豕鹿よ戸板楯　　毎閑

左右二字

須田町は菜虫はかりや古戦場　　里

たくろくの野古戦場を賦して市間に戸を負ヒ巷に菜屑を掃其代の窮‐鳥は寒‐夜の鼎に煮られ今の世の闘‐鶏は温‐光の莚に肥たりむへ持とす

十八合

からたちの嵐はやかて距(ケツメ)かな　　里

二字とす

琉球の獅子に油や染ほたん　　立朝

乙字

帰国の御土産として高麗の来‐鶏のたね十つゝ十をかさねしより村里に時を報して御調の道たえす其中にも牛といはるゝは唐獅子也羽毛を膏(アフラ)かためにして黒牡丹とも申へしこれ敵の鉄‐觜をすべらかにし剛‐啄の力をうばはんとの計こと専こゝろを尽しけれともからたちのあらしにけをされ侍り

十九合

左右捕距武とす

まくり距(ケ)や同し枕に十三羽　素琴
手塚めにつるむ所を二けつめ　里
形容觜術飛鳥のかけりの手をくたかれたりかの小男といへは今さら名のらすとも一の筆に記す右は雌雄の中よきかたらひをへたてられし無念は今にありと聞ゆ鳥も心をうこかして物に感する所時にとつてのりん気距(ケ)せしに大事に成てはけしきたゝかひ也けりさてこそ紅葉葉を分つゝ行はと竜田山の錦羽をひるかへして名は末代に有明の一番鶏と記せり

廿合 左右二字

負 関(ケトキ)に逆(カ) 櫓たてんと切戸引　欣以
風流を勝(テ) 大振羽の黄(カシハ)彩(ツマ)雌　里
箭筈の景関か鬢先をあらそふ一二のかけ二番鶏と評定し侍り二字ヲ云
勝浦の目出度名より桜間か陣も距(ケ)ちらされぬそのゝち十八九斗なる女房の大ふり羽をひるかへして陸(クガ)の与一を招きしよそほひ此扇を射たりし事舟はたをたゝいてほめもの也

廿一合

鬘毛や兀ものゝしる雲の鬢　洞滴
乙字とす
目包(ミ)のいしれもかくや羽音笠　里
二字とす
今日そわかせこ花かつらせよとたしなみ出たる中に朱冠兀(サカハゲ)したる老すまふの雲の鬢とは仰山也くれぬともはや鳥屋出しの箸鷹を一よりいかゝ合せさるへき小侍従此目包(ミ)もすゝとき雄なれは心のはやり出をしつめんとの事にや笠を敲いて羽おとをかり陣中にきほはせ侍る一ッの計(コト)也

廿二合

尾を栽ル掌(テノヒラ)心かへせ初合せ　里
五字
進む気の鑷子に〆マる板尾也　朴芝
乙字
二神の昔あなうれしと人につたへ給ひしより鶺鴒霊鳥也と重‐称せらる雄々雌々いまた交合比翼のわかちもなし漸く長して鳴尾さしたる比尾に尾をう

へてたはふれをなす其さま男色にふけるにひとし程なく血気壮ンに骨肉たくましく成て初生合機の心さしを忘るゝ事掌をかへすかことく也同ク少年の春を惜める思ひ深察すへし名は十六とかや初手合に板尾の毛抜合なる進退節にあたれりといへとも進ム気若気なれは也

廿三合

羽さけひやかれも出たつ菖蒲革　里

五字とす　右二字

水白も紅の鹿子のくるひかな　言志

先年

白鶏の碁石に成ぬ菊のつゆ　晋子

此ゑらみ抜群なれは碁石をは御ゆるし有偖黒毛に白のさしものは珍しき武者也をのれか冑へるさまさうふ革に似たり今よりして八幡黒と名乗て勝負すへしとの下知に付侍りぬ水白は味方の交リ毛なから紅くゝる色みえたり右に付へしと引分たり羽叫遠鳴リして面にむかふものなし

廿四合

六宮の簺にあつかる毛色哉　右此

地下の寄蚓の糧を包みけり　百之

左二字　右乙字

鸜鵒局中に飛入て双六の道を崩したるためし開元の遺事也寵愛一身にありと六宮にならふ鳥なき美毛一六のあらそひに気を呑み目を瞪ミハツて転コロヒあひかさなりあひ飛揚反動心を砕きもみ簺の手つめと見ゆ田舎はにふのかた屋に於て骨なき蚓力なき蛙歩食雑漏を喰つて羽虫にやつれ毛生ハヘ見苦敷牛房鶏目引鼻引笑ひ草也けん花のあたりの梟とこそ

廿五合

目啄キを当に仕かへせ権五郎　里

揮(補)距武とす

景清かくろふしや此壮ワカけつめ　唄言

乙字とす　当は正当三月三日と聞ゆ其箭三日三夜もつて廻りしはくりことなから厨川のつはもの鳥の海と名にあふ大鳥に合せて高名したり何某も平家の家鶏清とて翅を双へし兵老の鶯の泪にくれて昔忘れぬ手柄咄此春ことにくやしからめ

廿六合　左乙字

分られて桜をつゝくあまり哉　　幽調

右屯

捕へ役われは雉とそ二けあひ　　里

行事風呂屋の北風はけしき手合を分て曰ク左近の陣に鶯を鳴し羽を揮て撫られたる近衛とのゝ糸桜これ也橘のかけふむ道にかくれかねて尻こみせし雉とは見えたく〳〵の詞に臆して今一番ともいとみかたしけにやすかたの鳥のやすからす覚へけれはとらへ役了簡すへき事也とそ

廿七合

炭桶へあへて物なし団炭朱冠　　笹分

鵇利(き)の弓手へまはる地すり哉　　雪花

左乙字　右二字トス

たどんといふも一名にして神事法楽勧進の手取元来在郷すまひなり地摺は敵をうはそりにかまへて息次の功者也けれはしはしもこらへす尻しさりして物なく炭部屋へ逃たりしはし扇いて一枚の札物

廿八合

伽昆(毘)旦の爪に荆軻か事もしれ　　百之

乙字とす

バアカとて初め笑ひし鳥は物　　里

五字感長

天上の麒麟人中の鳳凰といふは俊傑の高才をさす也カビタンめとうたはるゝ俚侶のたはふれ尤哉爪に荆軻か力ラをふくんで敵陣にむかふといへともつゐに本意をとけすして八ッ割にさかれ南蛮料理もうれうとなりぬバアカ文字なし馬鹿と聞ゆるひゝきも也けれはしめ笑はれしもことわり哉距爪は御簾の鉤手に似て上へついて反たり起舞(チヒ)不調法にて力なげに見えしに唐角力の手とり我国の鳥はものかは此鳥は逸物也とて欄干ゆるぐはかりどつといはる

廿九合

宵啼や名をも雲井に二日月　　里

戴冠文とす　右屯

尾をつゝく虎や栖らん東天光　　毎閑

すこし目にかけたる月の一声は雲の外の雁雨の中

の鵃を射たりし高名をしたひて明日の心かけと聞えたり本歌とりても双ひなき上時鳥にもまさりたりとて感せられし

いまた明さるに勢をもよほすははやり雄也虎を養なふのうれへを用心して高声目さましく聞えたれとも右は膝をつき左の袖にすかり侍り

三十合

食に汁冠者か世話也領（ヱリ）にくだ　　里

二字とす

古塒の奈良にけやけし装束毛　　白桜

乙字トス

鼻とりすまふには太郎くはしやを投てしたりかほ也鳥飼人も是に思合てちつとも油断なくや　字彙翁字ノ註ニ翁ハ鳥ノ頸毛ナリ亦領字ノ註に本ハ翁ノ字也後ニ頁ヲ加フとみえたりはつきりとして鳥のヱリモトとよむへし此国にてくだをかけたるは神代よりのさうそくいつにすくれて花やかならめ古塒の毛ふるびたる出立はえなかるへし広中へはいかゝ大衆ともの平家をおとろかしたる八声ならの葉の古事宜しき結ひ合せなれともゑりにくたかけの手とり無双也

卅一合　左右乙字

毛車の力なき身や籠屯（タマ）ゐ　　里

御鼠負や艾かもとの鶏の毒　　卆月

毛車の前後にはつとよりて物の手もなく喰ふせ籠たまゐしけるを車論ひと名付たり是は待宵方の上臈の手より出されたる忍ひ音の鳥也時めく御方には恨のこるへし亦身にそへて思しめさるゝ羽利是大切のおすまふなれはよもきかもとへのつかひさることそかし左右勝負なし

三十二合

切（リ）声や背を三ツ伏セのいきり物　　洞滴

左右二字

しやくり出せ手々中矮鶏をさねかつら　　里

三（ツ）伏のわつは手々中の玉かつらともいふへき利口の手合針-穴兎毫の争ひ精神をこらしむ是等座敷すまふの随一とす三ツ指をあくれは七尺の屏風に躍り片手にのすれは四面の楚歌に舞とも申すへし手々

中或鳥の曰手々打といふ説もあり面白ししやくり出たる手を打返すとならは小腕の勝負にしてチヤホ共のはしかき筋にや狂作さもあるへき事也

三十三合　左右乙字

啄かれて十日坊主や桃かくれ　里

老鳥のけふ若やきぬ固本丹　晋子

朝鮮国に沙門あり形ちんまりとして小さかしきを人皆鶏僧と云リ吾妻にも鶤(トウマ)三左衛門か歌南京吉兵衛か踊の風流も其形似たる故也今此十日坊時にあへるもの也けりかたへの老とり資朝卿にたうとくおもはれ侍る嘲り忍ひかたしされはとて世の思ひ出に辻とりしてあそはんとて伏見木幡の痩鳥閑居竹林のねほれ鳥時しらす巣守子の親昼好キ猫悪(キラ)ひ迄呼揃へて其日の遊興を催しけり仙源の水に若やき白頭を彼薬に染て楽み窮りなし

卅四合　左文右武共ニ三字

大玉子源平香のわれもかな　里

義の端(ハシ)の崩る思ひを鶩より　習魚

酒ヲ般若湯鶏ヲ鑽篱菜(サンリサイ)といひかへては出家のかくし喰するを東坡居士慥に見とかめし也長薯は鰻をとり子は鰌鉄砲は河純照手もしらぬ唐名也大玉子とは近来の異名にしてまことは親仁也香の策(フタ)相印としわれからの相詞にて源平みたれ鳥に成ぬされはひよこふまるれとも母鳥かへり見す是を義とす親しめらるれともひよ子のしらぬこそ哀なれ既に夕陽西に成ぬあるひはうつはりへ投上ケ或は蔵の内へ仕まはれて犬道鼠の穴をふせき後日の軍をまつとかや此番はむへ持とすへし

三十五合

南無八符尾筒を守れ花も今　里

勝足をひたさは関の清水かな　晋子

源氏十羽を出せは平家も十羽を出し

源氏三十五をすぐれて

こなたも卅五羽を合せけり

晋子終焉記

李白鯨に乗て汗漫の風にあそひしは酔中に水中の月をと

つて豪放の気を残すものなりいまや晋子三年の病根なを誹情に富て新をあらはし奇をはき頤をとき人口に膾炙する句々みなしる所也ことし二月三十日はからすももとの泉にかへる倦情よる事なく夢のうちのゆめのことしまさに誹灯の光をうしなふ余多年莫逆のちなみをなすこの月廿三日宝晋斎に膝をいたき両吟もよほしけるに

春暖閑炉に坐の吟とて

鶯の暁寒しきり〳〵す　其角

筧の野老髭むすふ儘　同

若草に普請の御誂哉やらん　青流

浅黄しらへの匂ひかくれて　同

月も経ぬひかり拵へはつかしき　角

風のかけたる留の番よふ　流

雁の道大草臥に立やらて　角

泪さま〳〵剃はそつたか　流

こりすまのまた水にあふ九条島　角

一席亥の刻に晋子ねふたきけしきにてわかれぬこれぞ生前おさめの吟なりいま思ひあはすれは春興にかなしひかな秋の気を感し末の句に竜渓禅師の九条島の水難に身まかりたまひし水中の天の一句古今符節の愁をつなく屋梁落月のひかりさらに石友の契りを思ひ出してこゝにしるすものなり

青流

追悼之句聯

不分次第如左

はせを翁は普化の師晋子は臨済の怨子三十年来八面にから竿をならして他のつらを出せるなし末期に及て半句を吐すさらに遺跡を止メさるは若夫それもししらす大悲院へ斎喰に行歟

嵐雪

中陰廻向

普化去リぬ匂ひ残りて花の雲

亡跡

菜の花や坊か灰まく果はみな　〃

三七日

鶯や弓にとまりて法の声　〃

墓参

山ふきの実を穴堀の鍬ひとつ　〃

斎をまふく

榓売あなうの花の食を見る　丶
川骨や撥に凋る夜半楽　丶
経の偈は連歌ときゝぬほとゝきす　丶
　かの除夜の鳴門のさはかしさもほと
なく世は春なれやと紅裏四天王の吟
　今さら思ひ出て
泪かな左の耳はよふことり　露沾
ない事の袖に残るや朧月　古洲
行空にこれも其角か雁字かな　竹苞
世の中をされ絵さつとの桜かな　沾徳
初花の的はかけたり都から　桃隣
たんほゝや終に丿馬(ヘチマ)の皮さえも　神叔
陽炎や香土器の土あそひ　周竹
のそむ時帰らぬ影や花の株　立永
　この坊かの琴花印の下樋に
かくれけるや
琴とれは起ふし柳三たひ迄　格枝
梅さくらちれはそ人もよふこ鳥　秋航
俳諧の力おとしや鹿の角　枳風

　風流をたてぬきの飛花を惜む
今もいま錦繡の人よふこ鳥　千山
花曇りかはらけすへて伽羅一炷　朝叟
花見るや槐安国のさきの国　序令
風体のまほろしもかないかのほり　専吟
　孤芳を探る
おしいかな梅をおもへは一指頭　百里
その鹿の角落こほす泪かな　仙化
砕けたり黄鶴楼も蟶の殻　白雲
苗代に口漱しをゆく水に　済通
かうはしき骨や新茶の雲の色　巴人
春雨に綱か噂のなみたかな　我常
花鳥にこいよと呼もうつゝ哉　千泉
蕨にもおる雫あり昔沙汰　同波
　あるきなからといふも夢になりて
ちる花ももとの雫や小盃　千江
鶯を中の主や仮もかり　甫盛
あさつきを洗はてそ行日は三十日　新真
文かきの夢は破れて土筆　為桂

いつ帰る空の名残をいかのほり　功悠
花鳥の泣尽しては眠かな　受松
花の吟扇の端もさかしけり　石雲
かへる雁雲のいつくに片便宜　芝筵
珠数をもみさて居眠るや梨の花　仙芝
雨なみた君かためなり千里鶯　指馬

茶に耽りて師にたかふをうらむ
今はなし咲来る花も無念なり　渭北

別ル二于東武一別ヨリ後其角不ルコト二相見一三年今載三月
青流之寄テ二汗簡一而伝フ二角カ亡ヲ一生テ別モ猶怏々死テ別モ
復タ如レ何嗚呼角独歩ノ誹名在リ惜テ三其ノ有二レ器不一レ展
斎志以テ没ス欝ヲ二々郊原一傷レ此ニ

草の芽を何ニそ採らすや鹿の門　大坂 才麿
さても世を鶯にのる花の塵　ゝ甘泉
春雨や匪の中から虚栗　ゝ臥麿
雪霜の翅かはくやかへる雁　ゝ風麿
滝壺を飛さる鯉そ花のひれ　ゝ花睡
其文字は風にも折られす花の角　ゝ三惟

田舎にまかり晋子身まかり給ふも
しらすして三月末つかた江府に
帰り升堂のしたしみにたへす
股引て立かなしむや遅さくら　貞佐
なを夢の二月卅日を死時分　昌貢
雛留の透をちりゆく菫かな　菜花
その時よやつこ豆腐も春の夢　在長
帰る雁うき世の関を何となく　文竿
申まい酒の異見を花の霊　寒玉
なき人の筆にとならは夕雲雀　到李
その角を落して鹿も哀なり　常和
山は鐘海は燃つゝ雁の跡　羽光
石印やさらに名を彫る花櫁（樒）　兎株
寂光に居形にゐるそ桃の花　是橘
しほれ草松しやと人をたまされす　岑柳
水くきにもち摺迄を土筆かな　省示
きれ紙鳶のをはりみたれぬ法の雨　志鉄
アサのないよみやうつらん春の夢　嵐水
七尺は蛙も墓のこなたかな　其斎

年ころ菜つみ水くみたるかしつきも

なく師恩をいたく
ちからなき薄刃の脂や蕗蕨　来爾
此所に年久しく住馴ぬれはとゝま
らぬ水に鎧の渡守も袖をひたし
竿の力なからに
頼まれぬ島の引かな二月尽　白桜
隈刷毛の春もむかしの雨戸かな　毎閑
挑灯や山吹きえてわたり川　右此
留主遣ふ寐姿もなし花の闇　立朝
青柳や沙汰と違しほつき折　百猿
鹿の角に鎰を見せたる別かな　焉子
泪の手漸くはなす田螺かな　欣以
曾子の羊棗もあり
いへはえに水梅干を春の土　百之
蘇井ならて手切や花の掛蔓　習魚
みつくきの梅は開と口や夢　志水
晋子か琴に物かくはしめと一とせの春
興してより風雅のうるはしきいくはくそや
ことに限ある悲しき春にあへるを
初さくら哀に遅し琴の鉆　亢月
際付の躑躅をはつす袂かな　雪花
蛤の鍔も名のみや汐干山　洞滴
空家のもぬけ燕や袖の雨　向漁
その人の夢路も花の明りかな　女辰下
土の黄な蝶に手向や花の露　ゝ笹分
明日田鶴のあすも春なし袖の月　ゝ籠口
迷ひ子の泣手に余るさくら哉　鳥道
月か花かけふは朧の塚の水　掃尾
一寐入してから哀れ春の雨　里東
また浪花の状をひらく
記念そと聞や東風ふく松の音　大坂北方
涅槃から十五日めにキ角也　ゝ岸紫
忘れかたみに嬰子を残し其あた
り思ひやられて
おもかけの似たもやあると雛の中　ゝ文十
この後はたれを相手そ蕗の薹　ゝ車庸
白桃のいつを昔とおもひしに　ゝ芙雀
諸白に苦みつきけり江戸さくら　ゝ雷記

聞事か泪になりてはるの雨　新宮 嵐　水

金鉄の囲をなしても遁るゝに所なきは
さたまらぬ世さらにいふへくもあらす
只その人をしたふ物から武江に於ては
晋其角それ程ならぬ年より道に生
つき高名を残しことしの花に先たち
ぬるよし惜むへし〳〵誹因の浅からぬ
を知て稲津氏のもとへせめてに
申つかはしける

霞けり消けり富士の片相手　大坂 来　山

清新俊逸にあらすは死とも休せす
といふその心のすちをひくはこの人
にあらすしてたそや

他の耳を驚かす句も花の音　青　流

霜の鶴土に蒲団もかけられすと
子を悲しみし人もともに流水むなし

親も子も同しふとんや別れ霜　秋　色

晋子か名は新羅を過侍るに近き
比の判にあまた渉川としるすいま
思ひあはするにわたり川とよめり
畢竟広漠野の牛を愛して廊菴
か同鞭をやすめん因縁なるへし

無何有の裙とる胡蝶わたり川　沾　洲

宝永元甲申文月十八日のあしたをしるす
我菴も勢田の時雨の刷毛序
是はいつしかの御句奉るを切字なを覚つかなくや其韻要
をさとし古歌に例ある事とも引出したらは御ゆめ心にも
かなひ侍るへしとや(也カ)一つの解作を出して御不審をいらへ
奉ることむかしの夢説にせよこはえとかしと隠言して先
不測玄妙の姿にたとへていはく

我庵とは侘しき家ゐ
すめはかくうさのみまさる世をしらて
あれたる庭につもるはつ雪
せたの時雨とは
露時雨もる山とをく過きつゝ
夕日のわたる瀬田の長はし

この国の瀟湘西湖を心裏にそなへ給へる精工いはんかた

なし刷毛序せよかつはけつゐてにやあらんと自問自答の
さかひ有心無為の転輪精神画得無声の風景をたゝへて夢
のうきはしとたへせす睡中現然たる御句の劫々石山の石
の心にこり水うみの水相に歓喜して菅神無準両聖の交感
ことさらに自現示の誓ひをこのあけほのにしらる
右瑞想円のこと葉侍座の時御返答申上たるを愚意
尤はゝかる所なしとてかさねて草稿を仰かうむり
けれはつたなき筆を揮ひ侍る耳
晋其角

一朝の夢解たりしぬしもはやく夢中の
客となつて風輪に清香を起し
水相に月をゆりすへ枕の下の有明
も自由を弁し自在を述かの夢裏
の雑談をとゝめて
したひて一句を投す
百韻
冠里
花の雨胸は板間を裂夜かな
秋色
梅黒しとて母を召るゝ

蚕には言葉おろさす懇に　嵐雪
真はついと通るすく道　枳風
冷汁はさつはりとして雲もなし　岩翁
かうかまえたる筆匂ふ也　青流
行月にこの松傘をさしかけて　千山
平沙に並ふ鳥は足軽　大町
釈迦頭鑷二寸は秋の肌　山蜂
いさとそやせし拝領の樽　一雀
河骨の花繕ひに腮上て　朝叟
伽羅の後に灰汁の音聞　序令
旅衣おもひ初しかわすれたり　百里
妙なうき名てこそはあんなれ　白雲
俎板に土は残りて雪の暮　風葉
是なくんはと三上の吟　我常
取あへす手向になして草いちこ　周竹
涼しき水に浮し鱗　仙化
なつかしう蟬の余りに笛有て　立永
けふは静も御奉書に逢　立朝
明月は寐ぬ合点にて夢もなし　桃隣

酔をふかるゝ軒の露霜　指馬
雲の端や藜の杖に草鞋かけ　沾洲
仰（仏カ）につなく昼中の馬　済通
川筋の音になり行髻こき　菜花
塗笠を着て霰よろしき　塞玉
紅顔も臼井峠の吹をろし　文竿
鍔の鳴日はまつも待うき　到李
春の雪好ナ所へふりにけり　仙芝
五山いつれも大釜に蝶　甫盛
借銀を二月に延す雲無心　兎株
骨屋か撫て通る関札　同波
全体はとれから出て皿の汗　沾徳
名のなき蔓御前に懸　執筆
左へは神代の月の飛レ鳥道　青流
壱分をなめて戻す身の秋　嵐雪

二ウ

むら萩に今も大万三ツ瓶子　済通
四角ナ人に北州を見る　立永
橋の宵袋さけたる三輪の曲(クセ)　序令
てれめんていこ鰡(ヲホコ)ともなる　沾洲
通にてとるてふいまは時鳥　白雲
すへらぬやうに石臼をふむ　周竹
鼻紙のとにかくにまた一雫　枳風
博奕の異見束帯て来る　沾徳
まかなくに夫婦ぶつ〳〵何を種　秋色
秋も名残の饗水へ蝿　風葉
連雀の紫そめに下るらん　甫盛
伊丹の土蔵月の駒引　仙芝
真那箸にかけてそ思ふ花の波　周竹
雛のひとりはとり残しなり　百里

三

出替りに言葉の市は申の口　立朝
寐ぬに明たる腹の塩梅　桃隣
けふも又盧山の連衆アサをぎむ　指馬
膳所の新茶に千木の逼迫　文竿
鯉はねて綻ひきらす一あらし　同波
けさも干かぬる壁に脈あり　沾徳
饅頭の田舎へとゝく日は十日　寒玉
なむあみ右衛門世間かしこき　青流
大筆も借れて竜の勢ひそ　到李

思ふ方へと投る鵤-鵇-班　指馬
塵ほとも伊達はましらぬ葵の日　桃隣
　真田を結ふ指に入月　序令
淋しいをめつらしからせ給ふ秋　立永
　霧ほの〳〵と居風呂の経　立朝
三ウ
面白ひ如来の宿を寺といふ　白雲
　車道なき鶴の滞留　風葉
配当て一代なれと日に向ふ　嵐雪
　印判ほとに蕪は煤けて　仙化
いへはえに内乱(ナイラ)の礼も蟻通　沾洲
　百合の光に手拭をとる　周竹
肩衣を着替置たる松の枝　枳風
　九軒の首尾は念に念入ル　桃隣
金耳の落てはいとゝ片思ひ　沾徳
　月をも汲は井戸替の櫛　済通
ほた餅はたゝ二いろに露そ置　秋色
　手摺をすへる角力見えたり　格枝
洛外に花を持たか病なり　桃隣
　つほ菫にてかれか高名　寒玉

名
塩竃のどちら霞や夕日影　秋航
　酢和の濁り山はこさらぬ　貞佐
前垂にまだ鳥虫の額つき　青流
　革蒲団には引舟の座ス　沾洲
兄の成二寸延なはひたち帯　仙芝
　ふんどしをせぬ時代かしこき　秋色
針見せに座頭のゐるはいつからそ　済通
　むすほゝれてもかける芝海老　寒玉
一面に鼾かく間をたち別れ　文竿
　合羽は縛る物とたはれて　沾徳
八町はよるもさはるも油筒　貞佐
　太鼓のかしら芥子に打込　到李
白繻子の狐の顔に月そ照ル　格枝
　祇園の南嵯峨の北秋　同波
ウ
蛸売に蛸好家の露散て　沾徳
　門弟共のやう植ぬ楢　文竿
山姥はとかく跲跛と思はるゝ　秋色
　鼻かみ捨て滝も汚れす　青流
雪の日の妙なる文字は五升樽　貞佐

浄るりに金入て聞世も　仙　芝
住吉の矢見の姿も花の夢　沾　洲
柳のはらみ鵙はさひしき　寒　玉
右百韻四月十八日深川
泉竜院にして七七日之
追善各満坐

百ヶ日

蓮に赦は百日の鯉をこたらす　冠　里
編集の昔を夏中に思ひ出て
移りゆく人や花つみ終りの日　沾　洲
日々にもろ手あはせて百合の花　秋　色
石に箔百日願ひて蓮かな　甫　盛
今日施僧即事
麦食に人も匂ひも猿すへり　青　流

跋

狂而堂其角氏は宝井行年四十七才にして世をはやうしぬなきからを二本榎上行寺に送りて夜台をなす知友門人石碑を建む事をのそむ然りといへとも宗法有とて本意のごとくゆるさすこれによりて深川長慶寺に芭蕉翁の塚ありそれに隣りて一ケの土饅頭をきつく晋子病床に無眼の達磨の像一紙を書残せり廓然不動の因縁にやと心さしをはかりてすなはち和尚開眼の筆を点してこの佳城の下におさめたりおの〳〵すこき夕暮目前にさら也又この三巻は晋子多年席をかさねあるひは耳底にとゝまる新話をつゝり秋菓の五味を嚙て類柑子と名つくしかれとも全篇おはらさる中に病おもくなりてつゐに空斉(斎)のかたみとなりぬ嵐雪枳風沾洲青流とひよりてかれこれの反古とりあつめ外へは散さしとやう〳〵一箱におさむされとつとふへき一子もなく門弟またまち〳〵也秋色といふもの女なからも久しく笈を負ふ心さしありまた忌日祥月の志をはこひいとになくものしたりまことに晋子日にねり月に錬の功ありて巻々の艶麗錦を織なし英を咀き花をかむ句々の清新氷にいさきよく真に当世の一珍蔵なりむけに紙魚のすみかにはてむもほいなしとて前後くりあはせつゝり校へ一集となりぬ千山朝叟その外連中もよほし末巻に追悼の句をつらねて吉田氏か乞にまかせてこれを梓にちりはめ

てこの誹道を文車にのするものなりこれを人につたへこれを世につたへ是を悠久に達して断続の清音にかなふ事しかり

篁影堂沾洲
菊后亭秋色
阿桑門青流

丁亥冬季上浣

（注）底本は、この句の前に、下段十四行目より次ページ上段十六行目までの一丁が乱丁逆綴になっている。

五元集

五元集　元

（題簽）

長慶集元亨釈書なときこえしは集編なりたるそのとしの号をやかて名となむせられたりこれは延宝にはしまりて宝永に終るその間五元をあらためたるか故なりかししかるに晋子の滅後にいたつてたれ人の家にありともしられすして有しも正徳より今延享までにこれも又五元を経たりさあれとその名の久しくきこえて此集の世にかくれたる事やこゝに国ゆすりてたう（一オ）とみ奉るおほん神につかふ大徳の在けり古代の物このみて多くあつめもたれし中に此書もとし比ありけるかたくひなき宝とめてものしぬりこめのうちにふかくひめ心の注連もゆひかけつゝ御垣をまもる宮奴の杉の嵐にねふるをもいかにうしろめたくやおもはれけんされはをのつから案内しりたる此道のすきものともは縁を求めて見ん事をこふめるに大徳うけさるさまにてむれつゝ人の（一ウ）くるのみそとつふやきなからとりいてゝも席をかへて見ることをたにいとはるれは半紙もうつし得るやうなし人みな月のうちのかつらのことききをうらみあへり予ももとよりこれを得て先師の妙を明らめしらんとつねにおもひてとしをかさねきまことやこの比つたへて持たる人をきくに予かよくしりたるものなりけれははしめよりねかひしことをかたりて乞もとむる（二オ）にゆるさすされと彼家にゆきゝする事度をかさねかつなけきかつうらみて衣通姫の庭に七日まてたちさらさりし者のことききこゝろさしにやめてたりけんからうしてあたへたりよろこひまろひもてかへり見るにみのゝ紙を中よりおりかりそめに草稿のやうになしたる本の遺墨八十八を一冊とせるものにて晋子の手沢今なをうこくかことしうれしくも（二ウ）したはしくもあはれにもめつらしくもまほろしのかんさしを得てかへりしこゝちもかくやとおもふもあまり成へし今ははしめよりのほゐたかへしと櫃におさめてかくすことなく亀成といふか筆をかつて氷の下なる魚を画くかことく一点をたかへすうつして梓行し世の晋子をしたへる人とこゝろさしをお

なしうし侍りぬ（三オ）

百万坊旨原（三ウ）

五元集

延宝　天和
貞(享)亨　元禄
宝永

宝晋斎は米元章か硯の裏に
鐫入たる号也三弄子其硯
を予にあたへて宝井晋子と
いへは此号宜しくかなへりとて
筆事ことに述給へるをやかて
佐玄竜か額を需て雪月の（一オ）
軒葉にかけたり
延宝のはしめ桃青門に入し
より宝永の万々歳をよふと
いへることふきしかなり

其角（一ウ）

五元集

四十の賀し給へる家にて
御秘蔵に墨を摺せて梅見哉
遊大音寺
んめかゝや乞食の家も覗かるゝ
加州小松観音寺奉納
梅の花旦那を待て庭にあり
芭蕉翁の沙弥かけものほし
かりて絵讃を乞けるに
せめてもの貧乏柿にんめの花（二オ）
暁
進上に闇をかねてやむめの花
不曲亭
あせを越目あても梅の匂哉
こつとりと風のやむ夜は藪の梅
なつかしき枝のさけ目や梅の花
宰府奉納
守梅の遊ひわさ也野老売

和心水推敲之句

たゝく時よき月みたり梅の門（二ウ）

梅津氏　の祖父大坂
表の軍功によりて
御感状　御太刀を頂戴
せらる正月十七日の朝とかや
佐竹上杉蜂須賀等の家臣
十七人と也家の風相つたえて
今も正月十七日鏡開の興行
あり其雫家督執権として
此春の賀会有

幡持を文台脇やむめの花（三オ）

元日真珠喰あてし人の
句を祝へといふに

夜光る梅のつほみや貝の玉

仙石壹岐守との正月五日に
身まかり給ひぬ玉芙公に
御悔申上侍るとて

外様迄手向の梅を拝みけり

元禄十四年二月廿五日
聖廟八百齢御年忌於
亀戸御社詩歌連誹令
興行一座

梅松やあかむる数も八百所

氷肌玉骨とかや（三ウ）

昔見し花にも香にも梅の皮

久松粛山亭にて

梅寒く愛宕の星の匂かな

百八のかねて迷や闇のんめ

芭蕉菴をとひて

鶯や十日過ても同しんめ

うくひすに薬教ん声のあや

腕押のわれならなくに梅の花

箒木のゐくいは是にやみの梅

鶯の身を逆にはつねかな（頭注、止丘隅）（四オ）

うくひすよいて物みせん杉鋏

茶臼にとまりたる絵に

鶯や氷らぬ声をあさ日山

茶杓にとまりたる絵に
うくひすの曲たる枝を削けん
鶯に罷出たよひきかへる
うくひすや遠路なから礼返し
　市隅
竹と見て鶯来たり竹虎落
雀子やあかり障子の笹の影（頭注、とひあかりしや うしといふらん）（四ウ）
　長嘯の記に浅草の観音
とて国ゆすりてもてなす
仏をはす口にまかせて
いかなれや野辺に刈かふあ
さくさのくはんをむまのはみ
のこしつる其時をおもひて
土手の馬くはんを無下に菜つみ哉
　正月己巳布施の弁才天へ
　詣侍る奉納
玉椿昼とみえてや布施籠（五オ）
　梅津硯水会に
窓をやれと梅ほころひぬ大家中

　正月廿一日冠里公に侍座
菜刻みの上手を握る蕨かな
　接木を画て
来ませるの中継とや見えつらん
　十一日
お汁粉を還城楽のたもと哉
景清か所帯みせぬや二薺
　漸覚春相泥といふ切句
削かけ膏薬ねりの鼻にあれ（五ウ）
畠から頭巾よふ也わかなつみ
　二人しつかのかけ物に
なつみ哉扇二つをとふこてふ
百人の雪掻しはし薺ほり
　万葉しうにも朱雀の柳と
　侍り所からのけしきを
たひらこは西の禿に習ひけり
とはしりも顔に匂へる薺哉
七種や明ぬに聟の枕もと
な〻艸や跡にうかる〻朝烏

砂植の水菜も来たり初わかかな（六オ）
　渓辺双白鷺
沐ふ鷺芹梳る流かな
うすら氷やわつかに咲る芹の花（頭注、河州八尾娵そしり）
一升はからき海より蜆哉
石一つ清き渚やむき蜆
白魚や海苔は下辺の買合せ
行水や何にとゝまるのりの味
白魚や漁翁か歯にはあひなから
白うをの罶にあかるひはり哉
陽炎や小磯の砂も吹たてす（六ウ）
　したしき友に
こなたにも女房もたせん水祝
　衆鼠入懐の夢をひらきて
引つれて松をくはゆる鼠かな
宝引に蝸牛の角をたゝく也
帯せぬそ神代ならまし踏歌宴
　難波人福の神を祈りて七人か
句を奉る中に大黒殿をい

さめ申せとて樽ひとつ送られたり
年神に樽の口ぬく小槌かな（七オ）
　三月正当三十日
山吹も柳の糸のはらみ哉
梟にあはぬ目鏡や朧月（頭注、画成）
種かしや太神宮へ一つかみ
舞鶴や天気定めて種下し
　格枝絵馬合に
ことし斯螽ふえたり稲荷山
　禁固ヲ破リて暇ヲ玉ハル也
破や見憎い銀を父のため
やふ入やそれはいなはの是は星（頭注、待としきかは）（七ウ）
　故赤穂城主浅野少府監長矩之旧
臣大石内蔵之助等四十六人同志異体
報亡君之讎今兹二月四日
官裁下令一時伏刄斉屍
万世のさえつり黄舌をひるかへし
　肺肝をつらぬく
うくひすに此芥子酢はなみた哉

富森春帆大高子葉神崎竹平
　これらか名は焦尾琴にも残り
　聞えける也（八オ）
　点印半面美人の字を彫て琴形
の中ニ備へタルをはしめて冠里公の
　万句の御巻ニ押弘め侍るとて
春の月琴に物書はしめ哉
　悼後立志　初音は女也
昔かな初音三井寺夢の春
　　題水
ちくま河春行水や鮫の髄
　　画賛
拾得の鳳巾にからむや玉箒
爰にけふ御馬水かへ水間寺（八ウ）
　　奉納
金柑や冬青にさしても稲荷山
藪入や一つはあたるうらや算
やふ入や牛合点して大原迄
　元禄丙子のとしむ月末つかたに

　浅茅かはら出山寺にあそひ侍り
　畠中の梅のほつえに六分斗
　なる蛙のからを見つけて鵙の
　草茎なるへしと折とり侍る
草茎を包む葉もなき雪間哉
蝸牛豆かとはかり柳かな（九オ）
　　御忌
人の世やのとかなる日の寺林

　　本多総州公にて
春の夜や草津の鞭のゆめはかり
　浅艸川泛舟
河上は柳かんめか百千鳥
柳には鼓もうたす歌もなし（九ウ）
欄干や柳の曲をつたふ狙
　　市川才牛追善
　一子九蔵名をつき侍るに

塗顔の父はなからや雉の声

菜苑

黒胡麻てこゝをあへぬか土筆

春雨やひしきものには枯つゝし　(一〇オ)

等躬あいさつ

闇の夜のをりないかとは梅の袖

新三十三間堂

若艸やきのふの箭見も木綿うり

青柳に蝙蝠つたふ夕はへ也　(一〇ウ)

柳上鷺の図に

さかさまに鷺の影見る柳哉

傾城の賢なるは此柳かな

春雨

綱か立てつなか噂の雨夜哉

此雨はあたゝかならん日次哉

二月十五日上京発足

西行の死出路を旅のはしめ哉

渡し舟武士は唯のる彼岸哉　(一一オ)

仏若シ大晦日に入滅し給はゝ

いかに仏ともとんちやくす

へきかゝる衆生のためには

往生もふのものなるへし

仏とはさくらの花に月夜哉

山里の名もなつかしや作独活

初茸の盆と見えたり野老売

ところうり声大原の里ひたり

野鼠のこれをくふらんつく〳〵し

竹の香や柳を尋ね蕗のとう

梅かゝや此一すしをふきのとう　(一一ウ)

二月十七日原駅
富士の朧都の大夫見て詈ん
おほろとは松の黒さに月夜哉
類焼の比辺鄙の居を問て
一樽に玉子を送る人に
わらつとや雪の玉水十とよむ
南都にあそふ　雨
傘や薪の夜のありとをし

無車馬喧
夕日影町中に飛こてふ哉（一二オ）
見獅子伶有感
てふしるや獅子は獣の君也と
蝶とふや猿をよひ込原屋敷
藁屑に花を見すてしこてふ哉
釈菜
聖堂にこまぬく蝶の袂哉
百とせはねるか薬のこてふ哉
柳燕図

乙鳥の塵をうこかす柳哉
茶の水に塵な落しそ里燕
画さん
燕やかろき巣を曳八巾（一二ウ）
階子からとふさに及ふつはめ哉
海面の虹をけしたるつはめ哉
傘に蛸かさうよぬれ燕
飆やひはりあかれと夕日影
うつくしき顔かく雉の距かな
人うとし雉をとかむる犬の声
角田川にて
なれも其子を尋るか雉の声
海苔すゝく水の名にすめ都鳥
小田かへす鍬も柱やのこる雁（一三オ）
爰かしこかはつ鳴江の星の数
ちんは引蝦にそふる泪かな
帆柱のせみよりおろす雲雀哉
苗代や座頭は得たる畝伝ひ
たねおろし俵に渡す小橋哉

景政か片目をひろふ田螺かな
　みの路にかゝり侍るに
孫ともの蚕やしなふ日向哉
春雨や桑の香に酔みの尾張（一三ウ）
　沾徳岩城に逗留して
　餞別の句なきを恨むる
　よし聞え侍りしに
松島や島かすむとも此序
　南村千調仙台へかへるに
行春や猪口を雄島の忘貝
　富士の絵にのそまれ侍り
三帆舟は塩尻になるかすみ哉
　小庭にうつしたる梅の小枝に
　鵙の草茎を見出て人々に
　句をすゝめけるつゐて
梅の名をうたてや鵙のやとりとは（一四オ）
　いせの雲津を過侍る
　夕けとふ比に
馬に出る子を待門や傀儡師

傀儡師阿波の鳴戸を小歌哉
　四睡図
かけろふにねても動くや虎の耳
　三州小酒井村観音奉納
如意輪や鼾もかゝす春日影
　（一四ウ）
　或お寺にねう比丘とて
　腰のぬけたるおはしけり
　住持の深くいとをしみ申
　されしに五つの徳を感す
能睡　煖な所嗅出すねふり哉
能忘　おもへ春七年かふた夜の雨
能捕　鶉かと鼠の味を問てまし
能狂　陽炎としきりに狂ふ心哉
能吠　髭のあるめおとめつらし花心
　自得
蝶を噛て子猫を舐る心かな（一五オ）
足跡をつまこふ猫や雪の中

猫の子のくんつほくれつ胡蝶哉
市間喧
つけ木屋の手なら足なら雨蛙

遠遊酔帰の駕籠の内にて
春の夜の女とは我んすめ哉（頭注、かひなくたゝん）

宰府参詣の舟中
菜の花の小坊主に角なかりけり（一五ウ）
醴に桃李の詩人髭白し
鶏の獅子にはたらく逆毛哉
王子曲水もよほされて
水呑を烏帽子にきせん岩つゝし
曙やことに桃花の鶏の声
花さそふ桃や歌舞妓の脇踊

伝え来て雛の宝や延喜銭
見てのみや盗まぬ雛は松浦舟
おはしたに木兎もあり雛座敷（一六オ）

雛やそも碁盤にたてしまろかたけ
三月四日雪ふりけるに
ひなやその佐野のわたりの雪の袖
段のひな清水坂を一目かな
折菓子や井筒に成て雛のたけ
雛のさま宮腹〳〵にまし〳〵ける
永代島八幡宮奉納
汐干也たつねて参れ次郎貝
親にらむ比目を踏ん汐干哉
紀国の鯛釣つれて汐干かな（一六ウ）
対酌
もとかしや雛に対して小盞
曲水にあの気違は茶碗哉
菓子盆にけし人形や桃の花
曲水や覚まかする宿ならは

綿とりてねひまさりけり雛の㒵
くり言を雛も憐め虎か母
雛くれぬ人を初瀬の桟敷哉

緑豆(ヤヘナリ)の頭も白し桃の眉（一七オ）

順礼はよ所に拝むやとり合

　貝そろへを送られしに

蛤のしかもはさむか玉柳

（一七ウ）

行露公あたみへ御浴養の比

はなんけの句奉るへきよし

仰ありて観遊の御書とも

聞えけるに

脇息にあの花おれと山路哉

　露沾公御庭にて

寐時分に又みん月か初桜

縁からはこなた思ふや花の庭

地颪や花の外には松はかり

花見哉母につれたつ盲児

いさゝくら小町か姉の名はしらす（一八オ）

　黒谷にて

万日の人のちりはや遅桜

　仁和寺

いなつまのやとり木成し桜哉

　上野にて

浮助や扈従見に行桜寺

　妙鏡坊より花送れしに

文は跡に桜さし出す使哉

　花中尋友

饅頭て人をたつねよ山桜（一八ウ）

　一筆令啓上候と招れて

初桜天狗のかいた文みせん

友猿の友きらひすな花衣

　三月廿日含秀亭の

　山ふみに御供して

御近習や花のこなたにかたをなみ

門柳塵をはらふ折ふし
　うくひす啼
御用よふ丁児かへすな花の鳥
　矮屋妻奴の膝をいるゝのみ
　なるに心まゝなる酒を呑て
傀儡の鼓うつなる華見哉（一九オ）
　石河氏宜雨公の山庄に
　美景をあつめて四方に四の
　風情をもてなし給へるに
二筋の道は角豆か山さくら
　護国寺にあそふ時
　馬にてむかへられて
白雲や花に成行顔は嵯峨（頭注、袁中郎面上有西湖）
　立君をあはれむ
されありく主よ下人よ花衣
　京よりくたる人にことつてして
花に遂て親達よはん都哉
寝よとすれは棒つき廻る花の山（一九ウ）
山桜猿を放して梢かな

花折て人の礫にあつからん
花は都物くるゝ友はなかりけり
　侍座
花にこそ表書院てお月代
花に来て都は幕の盛哉
華盛子てあるかるゝ夫婦哉
はな盛ふくへ踏わる人も有
世の花や五年已前の女とは（二〇オ）
　目黒松隣堂にて
浮世木を桦に咲ぬ山さくら
　遊東叡山　三句
小坊主や松にかくれて山桜
八ツ過の山のさくらや一沈み
人は人を恋の姿やはなに鳥
　芳野山ふみして
明星や桜さためぬ山かつら
　折に殺生偸盗あり
あた也と花に五戒の桜哉（二〇ウ）
　行露公年々御庭の花を給り

けることしおそかりければ
花を得ん使者の夜道に月を哉
妓子万三郎を供して
その花にあるきなからや小盃
酒のさかなにさくら花を
たしなむ人に
下臥に漬味みせよ塩桜
惜花不掃地
我奴落花に朝寐ゆるしけり
雨後
さくらちる弥生五日はわすれまし（二一オ）
上野清水堂にて
鐘かけてしかも盛のさくら哉
ちる花や踏皮をへたつる足の心
日輪寺の僧と連歌のかた
はらに対興して
花に酒僧とも侘ん塩肴
一食千金とかや
津国の何五両せんさくら鯛

辛未の春上野にあそへる日
門主薨御のよしをふれて世上
一時に愁眉ひそめしかは
其弥生その二日そや山さくら（二一ウ）
花に鐘そこのき給へ喧嘩買
上野御
わたり徒士見立る比の花見哉
尋花
植木屋の亭主留守也花いまた
湖春と清水に遊ひて
車にて花見を見はや東山
花笠をきせて似合ん人は誰
酒を妻妻を妾の花見かな
此雨に花見ぬ人や家の豆（頭注、王維山水寸馬豆人）（二二オ）
永代寺池辺
池を呑犬に入あひ花の影
甫盛はしめて上京に
花そ濃伊勢を仕まへは裏移
大悲心院の花を見侍りて

灌頂の闇より出てゝ桜哉
茶もらひに此晩鐘を山桜
折とても花の間のせかれかな
沓足袋や鐙にのこる初さくら
明ほのゝ山鳥（ママ）　桜かな（二二ウ）
海棠の花のうつゝや朧月
小鳥居は葉守の神かつゝし山
月雪に山吹花の素顔よし
亦是より木屋一見のつゝし哉
藤咲て鰹くふ日をかそへけり
旦夕のはしゐはしむるつゝし哉
水影や靆わたる藤の棚
心なき御影さんはに岩つゝし
よそに見ぬ石の五徳や藤の露
白藤を酢みそにつたふ雫哉（二三オ）
　浅艸川逍遙
鯉の義は山吹の瀬やしらぬ分
錦にも藤の虱は憎からし

三月十二日含秀亭の花
ことし百五十余種うへ添
給へる下莚に侍りて
植足に三切の供や山さくら
同しく入相
此〳〵と花の名残や[illegible]扇
秋航庭せゝりせらるゝに
たそかれや藤植らるゝ扇取（二三ウ）
竜樹菩薩の禅陀伽王に対して
貪欲をしめし給ふにたとへは
有瘡人近猛煙始雖悦後増
苦の文のこゝろを
雁瘡のいゆる時得し御法哉
摩訶止観に
一目之羅不能得鳥得鳥之羅
唯是一目此文のこゝろを
鳥雲にゐさし独の行衛哉
意馬心猿の解
立馬の曰は猿の華心（二四ノ五オ）

雑司谷にて
山里は人をあられの花見哉（頭注、槇のは白くあられふりせき入し水のおとつれもせぬ）
わか三嘯公侍従になりて
宝永二年三月廿七日に
京使にたち給ふを祝して
藤浪や廿七人草履とり

芭蕉の自画十三懐周之讃
師の坊の十年しはし柳陰（二四ノ五ウ）
若鳥やあやなき音にも時鳥
有明の面起すやほとゝきす
淀舟や犬もこかるゝ郭公
夜這星鳴つるかたや子規
官城
歴々や下馬の折ふし時鳥
河東
川むかひたか屋敷へか子規
鵜啼や此あかつきを郭公

暁の氷雨をさそふや郭公（二六オ）
百間長屋にて
時鳥人のつら見よ下水打
子規一二の橋の夜明かな
阮咸か三味線しはし時鳥
傾廓
時鳥あかつき傘を買せけり
亦打山
夜こそきけ穢多か太鼓鵑
きぬ〳〵の用意か月に時鳥
寮坊主のまねは淋しほとゝきす（頭注、盧山雨夜）（二六ウ）
宰府奉納
ほとゝきす鳥居〳〵と越にけり
林中不売薪
せになくや山時鳥町はつれ
さる江といふ村にて
くらふ山材場の日陰や時鳥
竿寺五加かおくをほとゝきす
曲終人不見

暁の反吐はとなりか郭公
時鳥われや鼠にひかれけん（二七オ）
子もふます枕もふます時鳥
　母におくれ侍りてたのみ
　なきゆめのみ見る暁
夢にくる母をかへすか郭公
　枳風かつまを供して
　あたみへ行とて
馬の間妹よひかへせほとゝきす
　桑名にて
蛤のやかれて啼やほとゝきす
それよりして夜明烏や郭公
点滴を硯に奇也ほとゝきす（二七ウ）
人間の四月にふけれ郭公（頭注、白文）
時鳥茄子も三ツの小籠哉
　ぅ月十七日ある人の愛子に
　ねたり申されて
郭公幟そめよとすゝめけり
月消て腰ぬけ風呂や郭公

六阿弥陀かけて鳴らん子規
　浅艸寺樹下
虫つかぬ銀杏によらん郭公
葉に成て画れぬ梅や郭公
ほとゝきす只有明の狐落（二八オ）
時鳥人を馳走に寝ぬ夜哉
目の上に目をかく人や子規
　夢昼
砂は目にね覚を洗へ郭公
　姉か崎の野夫忠功孝心を
　きこしめされて禄を給はり
　たる事世にきこえ侍るを
起てきけ此時鳥市兵衛記
　仏さへこの世間はくるしきに
　しらてやけふは生れ出けん
麦飯や母にたかせて仏生会（二八ウ）
　風光別我苦吟身
大酒に起てものうき袷哉
越後屋にきぬさく音や衣更

一ツとろに袷に成や黒木うり
　卯月八日母におくれて
身にとりて衣かへうきう月哉
　慈母墓
花水にうつしかへたる茂哉
　上行寺
灌仏や捨子則寺の児（二九オ）
　若葉句合に
年寒しわかはの雲の朝ほらけ
殿つくり並てゆゝし桐の花
　夕のはなふさ
うかれめや異見に凋む夕杜丹（牡）
いにしへのならのみやこの牡丹持
　河州観心寺
楠の鎧ぬかれしほたん哉
　筑前紅を
しらぬ火の鏡にうつる牡丹哉（二九ウ）
　雨意　艶士にめてゝ
八専をうつゝに笑ふほたん哉

池田の海棠子肖柏の行状を
　あつめて集あめるに
さゝはうし角に火ともすふかみ草
　下洛卯月の中の一日
隠岐殿のかへり見はやせ鏡山
　朝叟百里全阿甫盛等
　上京の時三十三句の吟席也

　宝永開元奉幣使
　御代参の人の家にて
としたけて伊せ迄誰か衣かへ（三〇オ）
　屛風に藤房卿住すつるの所
迷ひ子の三位よふ也時鳥
　長崎屋源左衛門家に紅毛来
　貢の品〱奇なりとして
桐の花新渡の鸚鵡不言
　愛娘子
鶏啼て玉子吸蚊はなかりけり

序令初めて上京に餞
涼み迄都のそらや連と金（頭注、揚州鶴）（三〇ウ）
護国寺にあそふ
水漬に泪こほすや牡（杜）若
かきつはた畳へ水はこほれても
紫の蛛もありけりかきつはた
簾まけ雨に提来る杜若
奉納
から衣御影やかけて杜若
田家
早乙女に足あらはるゝ嬉しさよ
汁鍋に笠のしつくや早苗取（三一オ）
木賀入湯のころ
しはしとや早苗より見る寺の門
袖裏や茄よりけに白くゝり
舟歌の均しを吹や夕若葉
卯花や蠣から山の道のくま
うの花やいつれの御所のか茂詣

寄幻吁長老
老僧の筍をかむなみた哉
笋よ竹よりおくに犬あらん
竹の屁を折節聞や五月闇（三一ウ）
笋や丈山なとの鎗の鞘（頭注、腰下無寸鉄）
素堂居
艸の戸は皆喰ものそ夏の艸
楓子居
夏艸や家はかくれて御用茅
夏草や橋台見えて河通り
目通の岡の榎や簗さかひ
吐ぬ鵜のほむらにもゆる篝哉
鵜につれて一里は来り岡の松
争はぬ兎の耳やかたつふり（頭注、画興）（三二オ）
戸塚越侍るに
鰹荷の跡は巳日の道者哉
帆をおろす舟は鰹か礒かくれ
夕塩や客の間にあふ中ふくら
しらすか通る時

世中をしらすかしこし小鯵うり
飯鮓の軆なつかしき都哉
　和重餞に
伊せにても松魚なるへし酒迎
こよろきの名は昔にてうづは哉（三二ウ）
　呈露江公餞
箒木や人馬へたつる五月雨
さみたれや是にも外を通る人
顔ぬくふ田子のもすそや五月雨
さみたれや富士の煙の其後は
五月雨や傘につる小人形
さみたれや酒匂てくさる初茄子
　厳宥院殿の大法事を
　東叡山に拝み奉ル
五月雨の雲も休むか法の声（三三オ）
　市駅吟
馬舟とわかる鰹やけいは組
花あやめのほりもかほる嵐哉
　公門に入時

あやめわく明り障子のみとり哉
銭湯を沼になしたる菖かな
　けふもけふあやめもあやめ
　かはらぬに宿こそありし
　やとゝおほえね　住なれし
　所へたてゝよめりと伊せ大輔
　家のしうに見え侍る
菖こそ蛙のつらにあやめ哉（三三ウ）
　此友や年をかくさす白鬚
　二毛の身をわすれて松との
　太郎との也けりとのゝしれは
　今の人形の風俗ことさらに
　小兵衛なといふ人形はなし
我むかし坊主大夫や花菖
　五月三日わたましせる家にて
屋根葺と並てふける菖哉
　あひしれる女の塔の沢に入て
　ふみこしたるに
山笹の粽やせめて湯なくさみ

艸の戸やいつ迄草のかひ粽（三四オ）
本つゝし夕へをしめて菖哉
五月十三日
雨雲や竹も酔日の人あつめ
藻の花や金魚にかゝるいよ簾
酒満
葛のはの酒典童子も二面
青嵐といふ題を
海松の香に杉の嵐や初瀬山
蝙蝠の屎も子になれあやめ草
交代の葉守の神や初柏
疱瘡のあとは遙に幟哉（三四ウ）
緑槐高処
はつせみや笛に袋を十文字
かたつふり酒の肴に這せけり
鎌倉やむかしの角の蝸牛
たのめてや竹に生るゝかたつふり
文七にふまるな庭のかたつふり
河原町にて

妾か家ほたるに小歌告やらん
宇治にて
川くまや水に二重のほたる垣（三五オ）
うつせみの絵に
夏虫の碁にこかれたる命哉
谷中
風ふかぬ森のしつくやかんこ鳥
僧正か谷
侘しらに貝ふく僧よかんこ鳥
下やみや鳩根性のふくれ声
露江公溜池の高閣に
はしめて涼を挽とき
当座とおせ（マヽ）ありけれは
夏山に我は御簾とる女哉（三五ウ）
蓮生は歌はよまぬを虫払ひ（頭注、宇都宮入道）
樟脳に代をゆつりはの鎧かな
よめりせし時の枕か土用ほし
捨人や木艸にかけて土用ほし
浴衣着て瓜買に行袖も哉

狙公　溜池にて

瓜むいて猿にくはするあつさ哉
水飯にかはかぬ瓜のしつく哉
干瓜やうつむけてほす蜑小舟
瓜の皮水もくもてに流れけり（三六オ）

亀毛に銭

瓜の皮笠は重〻とかさねけり

破扇の図

維光か後架へ持し扇哉
烏飛紺のあふきのあつさ哉
紅にうちはのふさの匂哉
せみ啼や木のほりしたる団うり
隣から此木にくむやせみの声
竹のせみさゝらにしほる時も有
水うてやせみも雀もぬるゝ程（三六ウ）
白雨や内儀たま〳〵物詣に

市中白雨といふ題

鳶の香も夕たつかたに腥し
白雨やもりをとむれは鼠の子

ゆふたちに鶯あつく鳴音哉（頭注、うくひすとのみ）
夕立にひとり外みる女かな

牛島三遶の神前にて

雨乞するものにかはりて
夕立や田を見めくりの神ならは

翌日雨ふる

舟中吟

さゝかにの筑波鳴出て里急き（三七オ）
西行と武蔵坊には清水哉
芋のはに命をつゝむし水哉
にんにくの跡か清水の心かな

土用のいりといふ日の吟也

箒木に茄子たつぬる夕哉

烏山へおもむく人に

青柳やつかむ程ある蚊の声に
夕かほや白き鶏垣根より
鳴焼は夕へをしらぬ世界哉
麻村や家をへたつる水車（三七ウ）

或人の従者参宮しけるに

はなむけすとて
夏の夜を吉次か冠者に恨哉
夏の夜は寐ぬに疝気の起けり
生死去来
烏行蚊はいつくより暮の声
捕虎　東坡
七ッ毛の蚊にくるしむや足疾鬼
蚊柱にゆめのうき橋かゝる也
蚊をやくくや褒姒か閨の私語
かやり火や蚊屋つる方に老独（三八オ）
更閑
石灯籠蚊屋に消行鵜舟哉
いきけさにずてんどうと
うちはなされたるかさめて後
切れたる夢は誠か蚤の跡
旅店
富士の雪蝿は酒屋に残りけり
ある人大なるふくへを二に引
割て盞とし外は地さひのまゝ

内は朱に塗てわに口にむら衢
をかゝせて句をのそむ
清水影李白か面にかふりけり
形目鼻なきめんのやう也（三八ウ）
浅草河蔵々吟涼
此人数舟なれはこそすゝみ哉
川涼み顔に泥ぬる詠かな
涼みつむ安房や上総に舟はなし
すゝしさや帆に船頭のちらし髪
舟暑し覗かれのそく闇の顔
千人か手を欄干や橋すゝみ
涼しさや先武蔵野の流星
韓退之捨酒吟あり
酒ほかす舟をうらやむ涼み哉（三九オ）
こまかた
此碑ては江を哀まぬ蛍哉
牛御前
是や皆雨を聞人下すゝみ

橋上休老といふ題に
牛泥む老の歯かみや橋すゝみ
舷を玉子てたゝくすゝみ哉
海を見て涼む角あり鬼瓦
　餞久松粛山
筆をさす御笠やかろき下涼（三九ウ）
　人の子をめてゝ
涼しいか寐てつむり剃ゆめ心
　画讃
大虚涼し布袋の指のゆく所
　日枝にむかひ給ふ御神を
十八の明神つねにすゝみ哉
　河原にて
暁を牛さえすゝみ車かな
此松にかへす風あり庭すゝみ
勘当の月夜に成し涼み哉（頭注、遊子残月）（四〇オ）
　暑字　行露公にて
むら雨の木賊に通る暑さ哉
　呈餞　露江公

供かたの鞘の暑さや岡の松
人に又暑い顔あり端涼み
　自棄
たか為そ朝起昼寐夕すゝみ
　五月十日雷雨永代島の
　茶店にやとりして
明石より神鳴晴て鮓の蓋（四〇ウ）
　住吉にて西鶴か矢数誹諧
　せし時に後見たのみけれは
驥の歩み二万句の蠅あふきけり
　七十余の老医みまかりて弟子
　ともこそりてなくまゝ予に追
　善の句を乞けるその老医の
　いまそかりける時さらに見し
　れる人にもあらす哀にも
　おもひよらすして古来稀
　なる年にこそなといへととかく
　ゆるささりけれは
六尺も力おとしや五月雨

村田忠菴か事也（四一オ）
年々の春秋武江の寺社に廻
り給ふなる霊仏霊神君を
守りのあとしめて興廃の御
威現あらたなる中にも当
時の開帳はさかの御てらと
札をうたれて官駕鄙馬のさ
かひに暑をなやます霍
乱虫気のさはりもなく蟻の
ことくにまふてつたふ行程の
遠近を辻番にたつねて
まはらは廻れ振舞水の下向道
祐天和尚に申す
夕顔にあはれをかけよ売名号（四一ウ）
昼顔に米搗涼む哀也
故翁の句を絵にかゝせて讃
のそむありその絵は夕皃
の花を書たり句とたかひ
侍るゆへ自句を書侍る

夕顔や一臼のこす花の宿
逐欧陽公賦
蝿の子の兄に舜なき憎さ哉
画讃
蟷螂の小野とはいはし車百合
子の肩とみつわくむ也夏早（頭注、市中労）（四二オ）
魚市涼宵
楊貴妃の夜は活たる鰹かな
七月七日霊夢を感して
東湖の弁才天に詣侍るに
出ぬ茶屋に欺かれても蓮哉
荷切や下手にし切は茎を角
歌仙貫之の古画に
冠にも指をそふめり歌の汗
青流亡妻をいたみて
園女とはこれや此世を夏の海
上下と裸の間を夕すゝみ（四二ウ）
ある御方よりあさかほ書
たる扇にさんせよとあり

舜や扇のほねを垣根哉
　と書て奉けるにかさねて
　また軍絵かいたる扇に
　さん望ませ給ふ再は申かねて
涼風や与一をまねく女なし
　鬼のやうなる法師みちのくへ
　くたるとて道祖神にとかめられ
　異例して何かしのもとに
　介抱せられ漸生のひて心よ
　はき文とも送られしかへしに
弁慶も食養性や瓜畠
瓜守や桂の生洲たえてより（四三オ）
　越前の人の土産をめてゝ
　光広卿のうたをおもひ合侍り
鰹哉先まなはしを袖て拭
　元角田川牛田といふ所にて
いそのかみ清水也けり手前橋
　湖舟餞に酒たうへて
貫之の鮎のすしくふわかれ哉
　はなんけの一句を扇に望れて
　生の松はらのうたをよす
木曾路とや涼しき味をしられたり
　市原にて
虫はむと朽木の小町干れたり（四三ウ）
手にとるも林檎は軸て面白し
百日のあゝら恋しや洗ひ鯉
皿鉢に駒のけあけや心てん
乳のめは清水かもとの祭哉
　七日
鉾にのる人のきほひも都哉
　山王の氏子として
我等迄天下祭や土くるま
番附をうるも祭のきほひ哉
松原に田舎祭や昼休み（四四オ）
夏痩に能因しかも小食也
乞食哉天地を着たる夏衣
　高閣挽涼
香薷散犬かねふつて雲の峰

蝙蝠に宇治のさらしや一疊
　蟹をもてなす人に
うき舟の涼しき中へかにの甲
ねてかとへ蓮にさそふ朝朗
　大雨大風
吹降の合羽にそよく御祓哉（四四ウ）

五元集　亨

（題簽）

待宵や明日は二見へ道者われ
　雲井にかけれの絵に
傘持は月に後るゝすかた也
木母寺に歌の会ありけふの月
名月やこゝ住吉のつくた島
　名所月
小くらから古郷の月や明石潟（頭注、縮献上）
　雨
駒とめて釜買独けふの月（頭注、上州佐野）
川筋の関屋はいくつけふの月（四五オ）
新月やいつをむかしの男山
　水相観の絵に
我書てよめぬ物有水の月

名月や居酒のまんと頬かふり

　得蟹無酒

蟹を画て座敷這する月み哉

名月や畳のうへに松の影

　雨

納屋に何雨吹晴てけふの月

名月や竹を定むるむら雀

夢かとよ時宗起て月の色（四五ウ）

　あつたにて

更々と禰宜の鼾や杉の月

　紀川　いくせもあり

たつか弓箭に行水やみかの月

　所思

いさよひも心つくしや十四日

名月や金くらひ子の雨の友

闇の夜は吉原はかり月夜哉

月出て座頭傾く小舟かな

人音や月見と明す伏見艸（四六オ）

　維摩のさん

山のはは大衆也けり床の月

　張良図

胸中の兵出よ千々の月

　布袋の月を掬ル絵に

有てなき水の月とや爪はしき

　寺

寺の月ふたう膾は葉にもらん

名月やかゝやくまゝに袖几帳

烏帽子屋はゑほしきて見よけふの月（頭注、木かくれてのみ）（四六ウ）

　閑倚橋

猿這に我とらんとや橋の月

　含秀亭

富士に入日を空蟬やけふの月

　風雨

雷に揖はなひきそ月見舟

　小野川けんきやうに餞

入月や琵琶を袋におさめけん

　三日糧をつゝむといふに

名月や十歩に銭を握りけり（四七オ）

巴江

声かれて猿の歯白し峰の月

舟中にほていを書て袋に
そへたる杖の楫に似たるを

月見るも杖につなげる小舟哉

琵巴(琶)行をよむ
良夜に比巴(琵琶)を興して爰も潯
陽の客と思ひなす酒をそへ
灯を遠めて深更いやましに
村雨の心をはらし私語の耳
をそはたつめる感ありかの十三
より学得てし曹保は秘曲
もさそな人を泣しむと聞えつる（四七ウ）
すさひもことはりにこそと云に
其座閑なる聞て哉と声をひ
そむるものはなくて長うなれと
枕を投出すかく無風情の人
一芸ありやといへは

十五から酒をのみ出てけふの月

あさつま舟につゝみを入て
月をみる女の水干に
扇かさしたる絵に

おもふ事なけふしは誰月見舟

所懐　京にて

いはぬ事三ツ心に名有けふの月（四八オ）

母と月見けるに

ねられねは雨元政の十三夜

旅泊

うれしさや江尻て三穂の十三夜

薬研ては粉炊おろすか後の月

住の江や夜芝居過て浦の月

白玉に芋を交はや滝の月

後の月上の太子の雨夜哉

しかそすむ茶師は旅ねの十三夜

後の月躍かけたり日傘（四八ウ）

十三夜を

やよや月夜は物なき木挽町

閏十五夜　前の良夜は江戸雨ふりけれは

御番衆は照月を見て駿河舞
　平家落足の屏風に
宿なしのとられて行し月見哉
　柴ふるひ荷へる人に
名月や皺ふる人の心世話
名月や人を抱手を膝頭
こよひ満り棹のふとんにのる烏（頭注、待乳山）（四九オ）
　契不逢恋
閨の灯に光る座頭や袖の月
　一休の狂詠自画を写して
律師沙弥相剃をして月み哉（頭注、甲申）
　松前のきみに申送り侍る
こさふかは大根て消さん秋の月
十六宿は儒者と名乗し姿也
漬蓼の穂に出る月を名残かな
　同十三夜
[illegible]

新宅吟
汐汲をかゝへてみはやけふの月
　宗因先月をうるの句をとりて
芋は〳〵凡僧都の二百貫
　君かいひけんことのはといひ
　すてゝ出たりけんあした
物かはと青豆うりか袖の月
　鐘声客船
名月や御堂の鼓かねて聞
いねふるな松の嵐も江戸の月（頭注、遊子）（五〇オ）
雁鳴や弓弛をみれは昏の月
　玉津島帰望
わかはみつ更井の月を夜道哉
いさよひや竜眼肉のから衣
　上交語上
平家也太平記には月も見す
　吉野の山ふみせしころ
　こよひたれすゝふく風とよまれし
世尊寺に篠分て

頼政の月見所や九月尽
　九月廿七日の月を惜
見し月や大かた晴て九月尽（五〇ウ）
　不卜家句合
文月や陰を感する蚊屋の中
七夕や暮露よひ入て笛を聞
星合やいかに痩地の瓜つくり
　雨後
鵲や石をおもしの橋も有
星合や山里持し霧のひま
　新居
塀梢かけてかよへや銀河
天川けふのさらしや一しほり（五一オ）
　青山辺にて
踊子を馬ていつくへ星は北
　侍座
刺鯖も広間に羽をかはしけり
笹のはに枕つけてやほしむかへ
二星恨む隣のむすめ年十五

かさゝきや丸太の上に天川
星合や女の手にて歌は見ん
ほしあひや暁になる高灯籠
丸腰の冶郎笠とれ星むかへ（五一ウ）
　比叡にのほりて
星あひや双林塔の鈴の音
橋と成烏はいつれ夕からす
　七月朔日餞粛山子
かけて待伊与簾も軽し桐の秋
葛花や角豆も星の玉かつら
小娘の生さきしるしかけ躍（五二オ）
小屋涼し花火の筒のわるゝ音
鵜さはきも逆櫓もやるや花火売
　玉川の水筋
　かれたるとし
水汲の暁起やすまふ触

増上寺晩景

馬老ぬ灯籠使の道しるへ

七夕うたつくしなといふ草紙

行水に数かくよりも鷺に傘

弄化生

あひろの子字ルといなや天川（五二ウ）

棚経よみにまいられし僧の

袖よりおひねりを落しける

かの授記品の有無価宝珠

と説せ給ふ心をおもひて

衣なる銭ともいさや玉まつり

永代島にあそふ

遊山火を芦のははけや玉迎

玉まつり門の乞食の親とはん

きのふみし人や隣の玉まつり

得斗酒

淵明か隣あつめや生身玉（頭注、陌上塵）（五三オ）

棚経や此あかつきのあかの水

見る人も廻り灯籠に廻りけり

送り火や定家の煙十文字

千之と黄蘗にあそふ

盆前をのかれし山の二人哉

稲つまやきのふは東けふは西

妻におくれて後

子にもはなれたる人に

いなつまや思ふもいふも紛るゝも

伊勢の鬼見うしなひたる躍哉

身にしむや宵暁の舟しめり（五三ウ）

舟興

壱両か花火間もなき光哉

扇的花火たてたる扈従哉

妓子万三郎を悼て

折釘にかつらや残る秋のせみ

鬼灯のからを見つゝやせみの空

悼コ斎

其人の鼾さえなし秋の蝉

投られて坊主也けり辻相撲（五四オ）

よき衣の殊（ママ）いやしやすまひ取
卜石やしとゝにぬれて辻相撲

神のため女も売や相撲札
相撲気を髪月代の夕かな
山城かまた鋳ぬ形や鉆西瓜

　遊弘福寺
木犀や六尺四人唐めかす

　中の郷にて
幸清か霧のまかきや昔松（五四ウ）

　雨後　二句
あまかへる芭蕉にのりてそよきけり
殊（ママ）晴て雷朝顔にいさきよし
蕣の日陰またあり中老女
蕣に立かへれとや水の物
蛛のゐや薄をかけて小松原（頭注、いせせにかけ松）

　種竹三竿
竹の声許由かひさこまた青し

つほみとも見えす露あり庭の萩（五五オ）

　長野豊受野をわたりて
角文字やいせの野飼の花薄
岡釣のうしろ姿や秋の暮
芦の穂や蟹をやとひて折もせん

　客至
醤油汲小屋の堺や蓼の花

　暮蕣といふを
朝顔に花なき年の夕哉
花もうし佐野の渡の蓼屋敷
酢を乞あり隣の蓼の花盛（五五ウ）

　三遶奉納
早稲酒や稲荷よひ出す姥かもと
露の間や浅茅原へ客草履
頬摺やおもはぬ人に虫屋迄

　野店無肴核
足あふる亭主にとへは新酒哉
酒買に行か雨夜の雁孤ッ

浅茅原にて
化野や焼もろこしの骨はかり（五六オ）
春日法楽
今幾日秋の夜詰をかすか山
四所の宮人夜ことにとのゐして
戌の刻をかきりとし侍る也
野外夕虫といふ題にて
蜻蛉や狂ひしつまる三日の月

相模川洪落水接天
狼の浮木に乗や秋の水
二挺立の帰棹
饕を焼枕つれなし星の露（五六ウ）
鶏頭や松にならひの清閑寺
こまひきの題にて
甲斐駒や江戸へ〳〵と柿ふたう
駒曳や岩ふみたてゝ元宮根
みの路に入て　素牛にて
砧きかん孫六屋敷志津屋敷

ある長者のもとにて
中の間にねぬ子幾人さよ砧
（五七オ）
和水新宅
さい槌の音を仕まへは碪かな
奥好の殿やうつらんから衣
遠里小野の虫聞にまかりて
霧雨は尾花かものよ朝ほらけ
茸や御幸のあとの眉つくり
あたかのわらへに扇
とらするゑに
関守の心ゆるすや栗かます
大和路の女に物いひて
泊瀬女に柿のしふさを忍ひけり（五七ウ）
嵯峨遊吟
清滝や渋柿さはす我心
茸狩や山のあなたに虚労病
女中の茸かりを

茸狩や鼻の先なる歌かるた
　舟中
ない山の富士に並ふや秋の暮
秋山や駒もゆるかぬ鞍の上
稲葉見に女待そへすみた河（頭注、隅田高橋之記）
秋の空尾上の杉をはなれたり（五八オ）
　餞秋航
諸鶉駒はまかせぬ脇目かな
松虫に狐を見れは友もなし
　柴雫といせをかたりて
故郷も隣長屋かむしの声
すむ月や髭をたてたる蛬
　夜過山
鈴虫や松明先へ荷はせて
山川や梢に毬はありなから
たはこ干す山田の畔の夕日哉（五八ウ）
　二見にて
岩のうへに神風寒しはな薄
　長谷越

山畑の芋ほるあとに伏猪かな
川芎の香になかるゝや谷の水
　遠州二股川を河舟にて
下り侍るに推河脇といふ所
　逆水大切所をこえて
打櫂に鱸はねたり淵の色
　一夜前栽といふ事を
御城へは何に入やらをみなへし（五九オ）
　功悠亭にて
日盛を御傘と申せ萩に汗
　専吟庵
萩薄むすひ分はやササ菩薩
　暁松亭
獅子舞の胸分にすな庭の萩
　楓子亭
ねたり込は誰の内儀そはきに鹿
　井筒を略したる画に
いそのかみ竹輪にむすふ薄かな（五九ウ）
　田家

庭鳥の卵うみ捨し落穂かな
敷台に稲ほす窓は手織哉
　餞青流難波
芦刈のうらを喰せて砧哉
　隣家にもと結こくを
大絃は晒す元結に落る雁
元結のねる間はかなし虫の声
　太郎二郎の貝をとりて
かけ出の貝にもてなす新酒哉（六〇オ）
　霧香月灯を憐
古寺や渋紙ふまん所たに
　駿府御番に旅たち給へる人に
たか上に賤機ころも木渋桶
　同仙石玉芙公御加番に餞別
萩すりや傘すかす昔鞍
　あふひのうへの後
　　花子喜太郎
三栗のうはなり打や角被
　在原寺にて
僧ワキのしつかにむかふ薄かな（六〇ウ）
松のはにその火先たけ薄醬油
　感微和尚に対す
そは打や鶉衣に玉たすき
　品川泛鉤
雁の腹見送る空や舟の上
白雲に声の遠さよ数は雁
　むすめ喰そめに
鵙啼や赤子の頬を吸時に
順検にとはす語や百舌の声
泥亀の鳴に這よる夕哉（頭注、曳尾）（六一オ）
　餞少長上京
うら枯に花の袂や女ほれ
　如是果のこゝろを
二子山二子ひろはん栗のから
　尾州浄教寺にて
燕もお寺のつゝみかへりうて
宵闇や霧のけしきに鳴海かた
　鹿の一声といふ小うたのさんに

更かたを誰か御意得て鹿の声
さほしかや細き声より此流　(六一ウ)
　木辻にて
門立の袂くはゆる男鹿かな
小原女や紅葉てたゝく鹿の尻
　秋葉禅定の時
合羽着て鹿にすかるやあきは道
　下山
かし鳥に杖を投たるふもと哉
　芭蕉翁嵐蘭を悼める詞あり
　嵐蘭一子孤愁をあはれむ
芋の子も芭蕉の秋を力かな　(六二オ)
　めおとむつましくて年比
　子なき事をなけく人に
おもふ葉は思ふ葉にそへ秋菓
　二月堂にまいりけるに七日
　断食の僧堂のかたはらに
　行ふこゑを聞て

日の目見ぬ紙帳もてらす艳哉
　甚五左衛門にあひて
此風情狂言にせよつたの道
　産寧坂くたりて
菊紅葉鳥辺野としもなかりけり　(六二ウ)
　戸越山庄
むら艳荏の実をはたく匂哉
かつちりて翠簾に掃るゝ艳哉
　あさふ山庄
谷へつけ鹿のまたきの艳狩
　三条橋上
片腕は都にのこす紅葉哉
　ある人の従者に
紅葉にはたか教えける酒のかん
山姫の染から流すもみち哉　(六三オ)
　筥根
杉の上に馬そ見えくる村紅葉
　高雄にて
此秋暮文覚我をころせかし

泊瀬にて

艶見る公家の子達かはつせ山

山行

道役に紅葉はく也さよの山

いせにて

紅葉して朝熊の柘といはれけり（六三ウ）

南天やをのかみほとの山のおく

南天の実を包めとや雁の声

南天や秋をかまゆる小倉山

うつの山の絵に

笈の角梢の蔦にしられけり（頭注、旅思四句）

七十の腰もそらすか鳴子曳

いつしかに稲を干瀬や大井川

山の端をやんまかへすや破れ笠

水郷

唐柜を流るゝ沓や水見舞（六四オ）

富士

笠取よ富士の霧笠時雨笠

朝霧や空飛夢を不二下風

背面達磨を画て

武帝には留守とこたえよ秋の風

旅思　二句

みゝつくの独笑ひや秋の昏

みゝつくの頭巾は人にぬはせけり

召ことに馴し子方や花薄（頭注、本多下総守との御侍宴）

うら枯や馬も餅くふうつの山（六四ウ）

後園

いきぬけの庭や鐙摺菊の花

手の内の轂こほれてきくの露

旅行

駕籠に濡て山路の菊を三島哉

しほらしき道具何ある菊の宿

荷兮か従者たんさくほしかるに

土器の手きはみせはやけふの菊

けふの菊小僧てしるやさらさ好

きくの香や瓶よりあまる水に迄（六五オ）

白鶏の碁石になりぬきくの露

雨重し地に這菊を先折ん

こは誰に雨ののこりの袋菊
　素堂　残菊の会に
此菊に十日の酒の亭主あり
　画菊
きく白く蕚は後にかゝれたり
　菜苑
菊を切跡まはらにもなかりけり
水鼻にくさめ也けり菊艳
　病起　千山ヨリ菊ヲ得て（六五ウ）
大母衣のうしろを押や瓶の菊
　三島にて重陽
門酒や馬屋の脇のきくを折
　宮川のほとりへ酒送せられて
重箱に花なき時の野菊哉
　みちとせのもゝの名におふきくの笆
にとよみけるにおもひよりて
いかて我七百の師走菊にへん
　竹苑のやことなきたねを
　うつし奉りて花奇なるを

出世者の一もとゆかしつくり菊
翁さひ菊の交(ツル)むに任せたり
時服蔵菊にはきくの笆哉（六六オ）
　十日菊
観世殿十日の菊をかねてより
　女子をねかひて
　まふけたる人に
かに屎にうつろふ花の妹哉
　十日菊
霞宴の残りもかもな菊膾
　笠きたる西行の図に
菊を着てわらちさなから芳しや
　袖の浦といふ貝つくしに
白菊を貝の実にせん袖の浦
　那波屋九郎左衛門かさかつき也（六六ウ）
　御遷宮の良材とも拝奉りて
大工達の久しき顔や神の秋
　御斎にまふて奉りて
御穂を取て髪あるまねのかさし哉

内宮　法体の遠拝なるに

身の秋や赤子もまいる神路山

外宮

日は晴て古殿は霧のかゝみ哉

いつれも〱わか身はゝかり

あるゆへに申侍る也

太々や小判ならへて菊の花（六七オ）

雲津川にて

花すゝき祭主の輿を送りけり

冠里公御わたまし祝奉て

初雁や台は場はれて百足持

周信か瓢の画に

白露も一升入のめくみ哉

平家の衰を語るに

かへり来て福原淋しうつら立（六七ウ）

元禄辛未のとし大山榎島へ参詣

品川　紀行前書略之

品河もつれにめつらし雁の声

とつか

稲塚の戸塚につゝく田守哉

藤沢

宿とりて東を問やくれの月

いせ原

よこ雲や離〱の蕎麦畠

御向松にて（六八オ）

生栗を握つめたる山路哉

大山

腰押やかゝる岩根の下もみち

石蔵寺対僧

手に提し茶瓶やさめて苔の露

二間茶屋にて

白馬の尾髪吹とるすゝき哉

由井かはま

朝霧に一の鳥居や波のおと

雪の下にやとりて（六八ウ）

砧うつ宿の庭子や茶の給仕

鶴岡左の古樹のもとにて
有し代の供奉の扇やちる銀杏
横几追悼
一鍬を手向にとるや新糀
酒もる詞を切題にして各
一字を探る中に間を
あいせはや夜寒さこその空寐入
自画雁
片足はやつし候也小田の雁
秋のくれ祖父のふくり見てのみそ（六九オ）
白扇倒懸東海天といへる句
つね此いたゝきに対して手に
にきりたる心ちせらるこのあした
雲霧立おほひて山の半腹より
見わたされたるを要よりすそと
いはんも後句なりとて
白雲の西に行衛や普賢富士
未暁吟
鐘つきよ階子に立てみる菊は

洞房の茶屋孚兄生前笛を
好けるかうせたるを悼て
とふらへや笛の為には塗足屐（六九ウ）
悼朝叟
此人に二百十日はあれすして
吉田氏
唐柜も糸をたれたる手向哉

芭蕉翁十三回
辰霜や鳳尾の印のそれよりは
（七〇ノ一オ）

宝永三戌十一月廿二日
妙身童女を葬りて
霜の鶴土にふとんも被されす（七〇ノ一ウ）
神無月ふくら雀そ先寒き
高砂や禰宜の湯治の神無月
玉津島にて
御留(守、脱カ)居に申置也かみな月
高野にて十月三日
卵塔の花表やけにも神無月
鷺からす片日かはりやむら時雨
あれきけと時雨来る夜の鐘の声
時雨ゝや葱台の片柳（七二オ）
芭蕉翁三回
しくるゝや此(コヽ)も舟路を墓参
帆かけ舟あれや堅田の冬けしき
遊金閣寺
八畳の楠の板間をもるしくれ

蓑を着て鷺こそ進め夕しくれ
大和めくりせし比
むら時雨三輪の近道たつねけり
芭蕉翁病床
吹井より鶴をまねかん時雨哉（七二ウ）
釣柿の夕日そ(にカ)かはる北しくれ
飼猿の引窓つたふしくれ哉
時雨くる酔やのこりて村霽
しくれもつ雲の間にあへ酒の間
とたはふれし人にこたえし也
当麻寺おくのゐんにて
小夜時雨人を身にする山居哉
当院に霊宝什物さま〲多し
中にも小松との法然上人へま
いらせられし松かけの硯あり
箱の上に馬蹄とかきて硯の
うみの形容とす
松陰の硯に息をしくれ哉（七三オ）
世尊寺よりにしかうの滝を

見やりて
三尺の身を西河のしくれ哉
本多総州公に侍座しける夜
むら雨とひとしくかうほりの
鳴たるを発句せよと仰られしに
蝙蝠や柱を捻たる一しくれ
守山の子にもりを葺時雨哉
三か月のおくらき程に玄猪哉
東には祇園清水とうたへは
楊弓に名のる女やかみな月
神の旅酒匂は橋と成にけり
家々の留守居よる也大社（七三ウ）
大和めくりしせし（ママ）比
たかとりの城の寒さやよしの山
使者独書院へ通るさむさ哉
井波門主応心院殿
ありそうみとなみ山の二集
ゐらみ給ふに　御所望
凩や沖より寒き山のきれ

何かしの家にて
御流頂戴のことふきに
紅葉の下部もあらんゐのこ哉
玄猪とや祖父のうたふ枝折萩
くろの者代々のゐの子に帰花（七四オ）
つみ綿に兎の耳を引たてよ
大町新宅
水仙や鉇（鉋）ついての小島台
水仙に猶分行や星月夜
凩に氷るけしきや狐の尾
捨人やあたゝかさうに冬野行
父か医師なれは戯に
鈍汁に又本艸の咄かな
河豚あらふ水のにこりや下河原
何よけん藻魚はた白冬肴
表戎十九日から見へぬ也（七四ウ）
大黒のうせたる家にて
酔さめて大黒出ん夕ゐひす
まな板に小判投けり夷講

糸屋十右衛門宅にて
嵯峨山や都は酒の戎かう
人妻は大根はかりを鮎汁
打鎰に鮎もゑひすの笑哉
生煮をふくといふ也ふくと汁
世中に舅をよふやふくと汁
日本の風呂吹といへ比叡山（七五オ）
ふけゐの浦打めくりて
鮎ひとつとらへかねたる網引哉
幻住菴にて
雑水の名ところならは冬籠
蕪汁や霜のふりはも今朝は又
宗隆尼みまかり給ふ年
千那にくして堅田へ行とて
婆に逢にかゝる命やせたの霜
蜑の刈蕪おかしや見るめなき
秘蔵かる鍋のかるさや筑摩汁
鮎汁や祝言のこす能戻リ（七五ウ）
かへり花それにも敷ん莚切

柳寒く弓は昔の憲清也
霊山のみちにて
かまきりの尋常に死ぬ枯野哉
生島新五郎上京に
鉢の木の扇笑ふなかへり花
野の宮のやふかけに
わひしき槌のおとしけるに
鍬鍛冶に隠者尋ん畑の霜
淀にて
初霜に何とおよるそ舟の中（七六オ）
しはらくもやさし枯木の夕附日
園城寺にて
からひたる三井の二王や冬木立
凩や勢田の小橋の塵も渦
芭蕉翁を見送りて
冬枯をきみか首途や花曇
石菖の露もかれ葉や水の霜
加生のつまの心つかひを得て
縫かゝる紙子にいはん嵯峨の冬

むかしせし恋の重荷や紙子夜着（七六ウ）
起出て事しけき身や足袋頭巾
寐心やこたつふとんのさめぬ中
紙子着てくゝり頭巾もみそし哉
　長途狂倡吟
紙子きて渡る瀬も有大井川
目はかりを気まゝ頭巾の浮世哉
山鳥のねかぬる声に月寒し
何となく冬夜隣を聞れけり
此木戸や鎖のさゝれて冬の月
閑さや二冬なれて京の夜（七七オ）
　新宅　二句
竹の場の小庭成へし炭俵
鼠にもやかてなしまん冬籠
　遠水三十五日に
おほふ哉さまさぬ袖を納豆汁
　霜月朔日の例を
諸人や嵐芝居を冬籠
　好柳か市店

人を見ん冬のはしゐも夕涼
顔みせや暁いさむ下邳の橋（七七ウ）
　朝叟老父七十の賀に
白河の波をかゝはや桐火桶
　幡州たち野に一僧のすき
あり六十年の栄花を誹
諧にきはめて終りを取
侍ることに我をしたへる
よし聞え侍るにいたみ
粟飯の焦て匂ふや霜の声
　法雲寺老僧春色と聞へたり
源氏もや季吟の家の夷講（七八オ）
さひしさは独我住ほいろ哉
嘍の手に匂のこるや霜の菊
捨人の為の切とて火打哉
鬢の霜木賊のひと夜枯にけり
蕗のとう其根うへをけ冬構

蚫のうつせ貝を盃にして都鳥
　と名付たるによせて
炭売は炭こそはかれみやこ鳥
　柯求老人の手向
山茶花や独もれたるお盛物（七八ウ）
海へ降あられや雲に浪のおと
みかゝれて木賊に消るあられ哉
　山行
山犬を馬か嗅出す霜夜かな
みそれにも身はかまへたり池の鷺
　寒芦画讃
あな寒しかくれ家いそけ霜の蟹
氷にも盞とちよ鴛の中
　住吉にて
芦の葉を手より流すや冬の海（七九オ）
　周防とのは才ある人にて政
　事行るゝに一生非なしひなき
　をめてゝ板くらとのと申とかや
　この中よりやけたる銭を
　ひろひ出て
火燵から青砥か銭を拾けり
　片手打落したる火鉢を幸の
　ものかなとて
忠度と灰にかゝれし火鉢かな
　名もたゝのりといふへしこれに
　対して
炭とりに鏡のぬけし手樽哉
　三年成就の囲に入
炉開や汝をよふは金の事（七九ウ）
　炭竈　三句
炭やきの独そあらん釜のきは
炭かまや鈴木亀井か軒の松
炭うりや朧の清水鼻を見る
炭竈や煙をぬけは猿の声
かたすみも其木葉より発りけり
うつみ火の南をきけやきり〳〵す
埋火に芋やく人は薫す
炭屑にいやしからさる木のは哉

とてもならかの一車とのゐ炭（八〇オ）
　寒蝿炉をめくる
憎まれてなからふる人冬の蝿
口切や袴のひだに線蘿葡（蔔）
　梅津某秋田へ発駕を
　粕壁の宿まて送侍て
こゝに呑座敷しつらへ網代守
　閑居安慰
へら鷺の炉を残さぬや灰せゝり
　山中　高客
衿巻の松にかゝるや三穂の海
並蔵はひゝきの灘や寒作り
十石は鴛につく也れうあん寺（八〇ウ）
冬川や筏のすはる艸の原
　閑倚橋
うすら氷や鐙長なる橋柱
滝幅や氷の中にゐさり松
鯉一つあしろの夜のきほひ哉
煮凍や簀子の竹のうす緑

　対友
内蔵の古酒をねたるや室の梅
　市隅の侘人に
宮薬屋はてしなければ矢倉売（八一オ）
　揚屋の外辺に鳥うるもの
　鴨の毛を引を見て
鴨の毛や鴛の衾の道ふさけ
心をや筌にゆらるゝうら千鳥
浦衛さこそ明石も大神鳴
網代屋にところてん屋の古簾
塩担子や投てたゆたふ磯衛
よき日和に月のけしきやむら衛
妹か手は鼠の足かさよちとり
　薩埵山にて
汐汲の猪首も波のかもめ哉（八一ウ）
珍しき鷹わたらぬか対馬舟
　京なる人に案内して
ゐほしきた船頭はなしみやこ鳥
滝口やおもひ捨ても池の鴛

人丸講　月次に
沖の帆も十はたみそや浜千鳥
両国橋上　二句
暁の筑波にたつや寒念仏
寒念仏橋をこゆれは跡からも
酒飯の飲酒はいかに寒念仏（八二オ）
去来家にて
千鳥たつ加茂川こえて鉢扣
こと〳〵くね覚はやらし鉢扣
南都にあそへる時
寒声や南大門の水の月
ひたち帯のならはしなと
おもひよせ侍りて
たれとたか縁組すんて里神楽
夜神楽や鼻息白き面の内
（八二ウ）
雪買に雪を沽はや鶴の雪
清水修行にとまりて
むかしたれ雪の舞台の日の気色
知恩院町に宿とりて
初雪にまくすかはらの妾かな
大津　まつもとにて
雪の日や船頭とのゝ顔の色
ひらかたの宿にて
馬かたに貧きはなし雪の宿
寒山のさん
ねる恩に門の雪はく乞食哉（八三オ）
西運寺興行
初雪に人ものほるか伏見舟
我雪とおもへは軽し笠のうへ
はつ雪や赤子に見する朝朗
はつ雪や雀の扶持の小土器
門といふ字を得て
馬に炭さこそはたゝけ雪の門
矮屋
窓銭のうき世を咄すゆき見哉
官城御普請成就して諸家

御褒美給はりける比（八三ウ）
陪臣は朱買臣也ゆきの袖
　芭蕉空庵をとひて
衰老は簾もあけす菴の雪
門の雪榁ありやとはれけり
　山居の僧に
雪を汲て猿か茶を煮けり太山寺
　かも川に一むれとよみたるを
釈迦とよふ頭も雪の黒木かな
　ちゝれかみなる女のあた名
　にやいとけうさめたり
酔吟
雪うちややり手をかへす小忌衣（八四オ）
　望叡山
薄雪や大の字枯る山の草
戸障子のおとは雪也松の声
かはかうや竹田へ帰るゆきの暮
　遊女土佐をむかへたる
　人にうとく成て
黒塚の客あしらひや閨の雪
　立徘徊
はつ雪や内にゐさうな人は誰
めつらしい物か降ます垣ねかな
鴨川の鴨を鉄輪に雪見かな（八四ウ）
　或御方より雪見にむかへさせ
　給ふ馬上吟
初雪に牧やえられて無事なやつ
　楠の銅壺四間に一間とかや
　万客の唇をうるほせは
はつ雪や湯のみ所の大銅壺
　もとすみた川と云わたりにて
半衿の洲崎もありや雪の松
　人も来ぬ夜の独酌
初雪や十に成子の酒のかん
軍兵を団炭てまつや雪礫
松の雪蔦につらゝのさかりけり（八五オ）
　前といふ字て雪の句
叡覧の人になりつゝけふの雪

初雪は盆にもるへきなかめ哉
　出口にて
きぬ〳〵に犬を払ふや袖の雪
　すてゝあるといふ小歌を
　　句の題にして
おもはめや捨てあるかは雪の宿
　市中閑
初雪や門に橋ある夕間くれ　（八五ウ）
　不分当春作病夫
酒ゆへと病を悟るしはす哉
　極月十日西吟大坂へのほるに
いそかしや足袋売に逢うつの山
新堰にて食くふやうに師走哉
餅花や灯たてゝ壁の影
餅と屁と宿はきゝわく事そなき
やりくれて又や狭莚年のくれ　（八六オ）

書出しを何としはすの巻柱
　座右銘
行年や壁に恥たる覚書
乳母ふえてしかも美女なし年忘
鰤荷ふ中間殿にかくれけり
　のり物の中に眠沈て
年忘レ劉伯倫はおふはれて
　震威流火しつまりて
妹か子や薑とけて餅の番
煤掃てねた夜は女房めつらしや　（八六ウ）
　京に春をむかゆる年
　おはらの賤に問事あり
行幸の牛洗ひけり年の暮
　臘兎五ツの子を産り樊中に
　やしなはれて若艸にかけらん
　　事をいはひて
年をとる兎に祝へ煮ぬ豆
すゝはらひ暫しと侘て世捨蔵
童にはしころ頭巾や煤はらひ

忠信か芳野仕廻やすゝはらひ
有かたき親の悋気も師走哉（八七オ）
閑窓に羽箒をめてゝ
煤こもりつもれは人の陳皮哉
鼻を掃孔雀の玉や煤こもり
御煤ノ翁ハ竹取

千山宅とし忘に
割すそや八乙女神楽男より
揚屋に酔房して
恋の年差紙籠をさらへけり（八七ウ）
年の市たれをよふらん羽織との
小傾城行てなふらんとしの昏
山陵の壱分をまはすしはす哉
女子の疱瘡しける家に
きけんとりて
餅の粉や花雪うつる神の笑

行露公万句御興行巻軸
万代の〆をあけけり神楽帳
市隅
弱法師我門ゆるせ餅の札
鳩部屋の夕日しつけし年の昏（八八終オ）
梟よ松なき市の夕あらし
自悔　三十
子をもたは幾つなるへき年の昏
大津駅
千観の馬もせはしやとしの暮
雪窓
損料の史記も師走の蛍かな
年の瀬やひらめのむ鵜の物思
行年や駱評定夜明迄
（八八終ウ）

五元集 をのかね鶏合 利

(題簽)

是より別して勝負をす良将の心は英雄の臣を以て馳走せらるゝ所神妙也四境の祭の事第一成へしとて白綿つけの放ち鳥東は相坂山南は立田西は穴生北は有乳の鎮護をさため先一ッの願書を認らる
治鶏坊の何某筆を取て田饒か詞をかり蘇秦か謀を顯して神明納受の志をのへしかは関の清水にうかひ手水をして頂礼しけりとそ

三十六合

春風やかくるも引も家鶏の麾

二字とす

御節会に留守をたのむの家鴨殿　　辰下

是よりをのか音の新手歌仙の左座ほの〴〵と明わたる空の天鶏に麾をふらせよとの軍配はひ曲をつくされたり

右みよし野ゝたのむの雁は春霞たつを見すてゝ旅雁となりときはなる家鴨家立さらすして牝鶏の朝夕むつましく狎たるに留主居役申付らるゝ事切て附たり其身の立居重く大声をあけて勤番まめやか也道戯にあひる伝兵衛とてむかしの笑ひものなるよし

卅七合

桃花雨すは竹の葉のみたれ足　　其角

二字トス

五六間逃ては返す尾波哉

乙字とす

清明の節大雨しきりして思はす敗軍す稲麻竹葦に入乱ぬれ鳥のしたり尾浅ましかりけり何ものかしたりけん

落書

鶏去テ画二竹葉一ヲといふ句を書捨たり是は五山派の僧雪の聯句に犬走テ生二梅花一といへる対なりけるを時にとつて用ひけるとかや桃花雨にうるはしく羽翼は醜しとわらへる也晴て後男浪のとつて返しなからも一たひ尾(ウシロ)を見

せたれは尾花浪の鶉立とそゆひさゝれ侍る

卅八合

白綿付の黒て仕て取ル巳日哉　　乙字

桃節につくむほとあり杉の塒　　百之

屯

黒土の男白綾のふんとししめつけて望んて出られたるは願角力にやこなたは酒陶氏と見ゆるか立髪杉の葉にはさみなし胴骨つんくりとして四斗樽のことく丸くふとつたり桃花の酔さめと巳の日の精進腹力量いかゝあらん

卅九合

くゝ鳴や胴迄はいる鳥甲　　捕距武とす

勝鬨に毛並をなをす櫛も哉　　素琴

乙字とす

中入して手はしめなるに女房の後見とは心得ぬ業也富士の煙のかひやなからん力かひなく歯かみせらるゝそかし牝鶏晨すれはわさはい有とこそ伝へ侍れ象もよくつなかれ鹿必よるといへる詞をしらはさし櫛も心をつけてつゝしむへし力の出る最中なるそ

四十合

茶筅尾に鍛をたゝくいさみかな　　習魚

左右乙字

落にきと当かへしにも距哉　　其角

茶筅髪によりたる尾さしにや二十二番のしころ毛も手弱き方也あてかへしの雑言事つのらは崩口なるへしとて持とす

四十一合

鼻ふきを味方へ引や番椒　　雪花

屯とす

油断殿空餌ははかる庭菫

二字

厳冬の水に舌鳴らし三伏の番椒に鼻に汗す辛烈の気忽ち頂平へ通してあたまに血の過たる男寒相撲怠たる事なし然は味方へめしかゝへてもくるしかるまし空餌してつきたをす手もありそれは不断の心かけなれはとりあけて本意とせぬ也

八ッ立七ッ起は関の東の兵

四十二合

兵と花もいわぬ歟ト、呼ひ　何虹

二字とす

足田鶴の鶡ロ丸の負て勝

桃李不言の詩兵と褒美の上からは艸木をなひけたる一言誠にかたしけなしト、とよひ出されて棧鋪より此花をたまへり

足田鶴の由来は伊勢の国

足の裏はあまりきたなく見ゆる哉　慈鎮

波はよせても洗はさりけり

成の高さに枕詞を置れたりまたつく鳥のつくしともいへはとて鶡丸のともいひつゝけ侍るとかやきりやうこつから丸のまけにても勝なるへしとの評義からは御家の見世男にかゝへらるへし

四十三合

いそかしき木の芽をほとく距哉　右此

胡葱にむすふ手もあり稽古関

二字とす

是彼引用ゆへくもあらねと

鶏の坊主にしたる若葉哉　闇指

先蹤正しければ双ふ鳥なし垣をへたてゝ闘を合するたくひならめとその人はしられぬ成へし右は時節相応のむすひ艸也負手は味噌をつけたるといふもいみしき巧言也方々の褒貶口にまかせていはゝ酢の過キたると詈られぬへしそれともに酢味噌

四十四合

八の字やさすか寄来て轂醒

左右乙字とす

觜利を母のひかゆる蚯蚓哉　焉子

酔といひさむるといふは好悪の詞にして心にうつり行あらまし也朱冠さたまらす距覚束なきひなともの性得自然にしてねらひあふは父河津殿の俤にや一万箱王母にのこれり其母勇を備えて母衣といふ羽袴をきせたりたとへは樊噌をもあさむけとの事にや

四十五合

血盲の幾夜寝覚ぬ蜜柑籠　掉孤

屯

尾雫も緋桃に染てくるしいか　百猿

二字とす

鶏籠の山明なんとする日をしらす闇々としてうらみ音を啼うつせみなりし蜜柑の皮春の網代の置所なきから籠に入られ是をつゝひて三月と知る口惜かりし血盲也若武者はたれも目にかけ侍る毛をかへ冠をけはひたてゝ紅桃の露もねたむへしや冠重呉天雪爪はかうはし楚地の花ともはやしたりかといいれて後いかならんか

四十六合

撫勝を丸羽の事か難波寺

二字とす

南京の引音を猛に水や空　毎閑

乙字とす

天王寺の撫勝後記にとゝまる所大坂矮鶏の事か其手にあひしよりか今とても丸羽にして鳴尾なし白すこしも煤けす是源氏の嫡々南京の小太郎深入すなといいはれて尋常に引音を張大勢はせ合けちかふ中なれは水天一色にして千鳥鷗の友よふさかり関路の鳥も声々に聞ゆ

四十七合

足病のかたは車や觜疲　亢月

乙字

朱冠癰に潤フ三月待れけり

鳥医師の曰足やみのいた手觜折レ失(矢)尽てせむ方なし是当分の弱なれは手あらふあつかうへからす冠癰希有にして六ケ鋪病也鶯鼻を病鷹気鬱す寒苦鳥飢鳶のたくひは良薬を得へし此鳥にして此病あること漢家のむかし至癰発の膏薬にて手をとりたるためしのみ也しはらく命運を全してかさねて軍すへしとかや

四十八合

波を蹴て巴そ負し悋気喰　笹分

乙字とす

鶏作り二人静を合せけり

戴冠文とす

此牝負へきやうなし七騎か中迄もうたれさりけりとかや悋気喰とは名の悔ならめ巴浪とあること葉こそ盃をうかめて機嫌よき振廻ならめ粟津の松原に放されて後いつち行けん其場にても大手からしたりこなたは三芳

野の奥深き菜畠に放されし美鶏なり衆徒等めしとらむ
とて其影を作らせてさかし出して合けるに努たかはす
さてこそ二人静

四十九合

沼津から足高山や大櫓　立朝

屯とす

島原へはや人やりの鶏行事

二字トス

清見か関取の血脈原吉原をかきりて宿々に口を利ク者共
也みなとしより也
名高き君とも同しくよき鳥をもとめて目出ものしけり
所々のあらそひに人やりに合せ侍る芳野唐土なとか鳥
には翅に薫物し爪紅粉化粧して花美ことに人の心をな
まめかし迷はせけれは後法度に成て鳥ともみな放ちや
りぬかの箒木の巻に
身のうさをなけくにあかて明る夜は
とりかさねてそ音もなかれける
うつせみの歌也此心よくかなへりとそ

五十合

勝口や推スも啄クも觜て門

戴冠文トス

傳大士を鶏驚かぬひた蹴合　欣以

今は寺々の鶏を召ぬ推敲三年の執行にして推ハ力啄クは
品也韓退之是を相手にして以鳥鳴春と世上へ鳴りわた
せられたり輪蔵の三影うこきなきを見馴て重畳のけい
こ場としたりとんつはねつの狂ひわらはゝ笑へ

五十一合

柏手にかつ色見せよかしは贔負　辰下

左右屯とす

尾(ヲクレ)とる影隠しけり放鶏　百之

社頭ノ鶏かしましき寄合此をしつめんとの拍手か松柏の
霜に後れをとるとも各浪人角力なれは笑ふものなし神
山の柏の平手うちたゝき幾(ナン)番も〱

五十二合

唯頼め血臭ひ觜をさしも艸　雪花

五字

頤睾丸赤きは酒のいとみかも　雪花

捕距武

さしも艸さしも名高しかる業を得て舞台とひ滝とひ傘いらすうつくしき手ともを取ぬ目たつ朱冠ともはのこらす出たり頤ふくり今はこらへす此鬼酒を力とす共かれは仏力といひ神力をそへたりとてもかなふへからす

五十三合

爪玉に浮ぬ沈みぬころひ勝　　左右乙字

筋背の破軍をくるや花の運　　志水

爪玉にあけたる浮舟沈んて転ひ勝水際たつて見えたり筋背は背に星あり珍しきやつ也手合のくりやう老功なるへし花とは桃花の陣を申すとかや

五十四合

引色も日比の煤の埘鴾毛　　五字

相暹羅の勢を飆や花曇り　　習魚

あかしの巻に秋の夜の月毛とかよへる詞正広か日頃の袖にといひしに引合せて向上の得かた鶏人暁を唱ふる声明王の眠を驚かすならむ相暹羅の花軍一もみもみ合せたらは心もくもるへし

五十五合

鶏頭の追手は梁の紅葉哉　　笹分屯

土餌から豆腐なりしか君よ敵　　焉子

二対の名目は立なから屋ねにてはおちつかぬ所あり是は鶏頭や同しかさしの紅葉負とあらは其品わかれ侍るへし紅葉鳥鹿にかきるへからす新参の圀者場に食ひてをのかとちくるふを見るに力業角力の外他事なしこれを土餌といふへし豆腐の和らかなる蒟蒻の白きもあやしけ也

五十六合

時下に後悔もあり蹴合時　　百猿

埘込の恨を臑の鉄輪哉　　乙字右二字

むかひなる樗の木にのほりて睡れる見物目をさます事度々也しか食つきて時下りしたりけるを相手にしたり空腹の勝負後悔すへし三足のかた輪鳥世の中の余りもの

になりてほむらをもやし身をうらみぬ中古野出の喜三郎と云もの片腕を切られ骨に皮引かゝりて見くるしかりしを鋸にて肚の程より引切て捨たり桑門となりて片枝と号ス此意地あやからせたし

五十七合

欠爪に木の根撰や若手合　其角

砂水にしはし息をそ古湘江スコウ　捕距武

是に木の根ありと朕野方のいひわけ負腹たてしも道理古湘江昔渡りの唐織をしめつけ邪慢我慢か手につき三番打したり此男足のみしかいか難也

五十八合

雌か毛虫て捌く羽癖哉　志水

屯

点いさかひの別れや唱ふ昼下リ　雪花

潜確類書に鶏は蜈蚣を以酒とす鳩は桑椹を酒とすと云々其妻酔興の羽癖をつくろひ出す事やさしく見えたり左へ廻る手しや茶臼ならはもとかしからん

右は楽屋がもめると見えたり早天からの見物待艸臥たるに角力揃はぬはいかにあかぬ別れとは是

五十九合

風負のつまつき鳥や一腿ミ　其角

屯　右乙

勝軍木に独はねぬや雄の役

甲のしころ毛をつかみ上たる腕首隠波羅鬼也こなたにはゆるきの森の鷺にましりて野に伏山に臥たる白鳥の源氏に着てかつの木をかたとる扨こそ究竟の左忽ニ風まけしつ鷺舞のほそはきしとろもとろにて飄鷺〳〵したる風情苦々し

六十合

胸突の時をも問せ見けし独楽　白桜

戴冠文とす右五字トス

ちやほ王や小結に進ムはね髻

韋駄天の一名くるり〳〵と引廻してもとの下界へふり投にせしかはしたゝか胸を突て絶入たり渦まひ廻る大独楽のうたかたの泡ときえたるこそ花月惣一

右はさしもの弁鶏合せかねてしさつて肝をそけしたりける

六十一合

髭鳥の厩から出て鳥はなし
五字　　　　　　　　　　　　　　　　閑

噫にも地鳥といふな鳥伯楽　　　　　毎

七の僉迄はしをりあけて真黒な毛臑関内出よとの御意をかふむり仰はくたかけの出来口世界国土に又また鳥はなし欠伸噫噫心をつけて行相を見る事伯楽の煉磨也さまゝゝの手入今日の見せ鳥襟裾をかさり立たる所当坐は丈夫なれとも其化あらはれて鵰の餌也

六十二合

投打の屐を相手やせつは閧
乙字とす

今日の関籠を狂ふやかしは崎　　　　　月
五字とす　　　　　　　　　　　　　　　　　冗

伊勢町小田原町鶏犬ともの中あしく木戸を限つて取合なし童僕の心も亦しかりたまゝゝ独遊ひをすれは惣ゝゝのなふり者とす年比日頃の意趣を含て呉越の名主を煩らはしめたり是たゝ繁花長安の江戸気にして飽迄にくらひ肥たるゆへ也

或人のいへるは信濃の鳥大兵也其卵も九年母ほとありといまた見す越後の圀苻を荷ひ出て川中島の手合せんとにや竜虎の成漢楚の争ひ是を末世の咄とすへし

六十三合

聃白をたかひに矢壺ゝゝ哉　　　　　下
乙字　　　　　　　　　　　　　　　　　辰

抱分て爪の洗足せよ雛の酒　　　　　之
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　百

たとへは箭合也をのかとりゝゝ羽に札をつけて放せとてあるほとの鳥一ッも残さす手払しつあまりに喰に乱れたれは抱分たるもよししかるに爪のすそせんとて酒ひたりに成しはつかれ武者なから心せはし油断大敵

六十四合

塒せりのいさむや桃の花振ひ　　　　朝
乙字とす　　　　　　　　　　　　　　　立

碁盤もていさ函谷へ弥三五郎

塒せりの己か身かまへして他の悪党をよせす宵ゝゝこの宵寐は八声の触頭なるへし右は孟嘗君か手のもの

いまた出さりしに其手ふるしとてあたらしき手をつくしたる鶏術三千の容を越たりさてこそ叡覧人形の名をあけ飛弾の掾と受領を給りけり昔のはかりことは声をはかり今のたくみは形を工ミ出たり和漢の通例を以て宝永の史記にものせぬへしそれは鶴ひた是は鶏ひた也

博多は羽形なれは

難波は名二羽とも番へ

六十五合

尾狂におろとあかきし逆毛哉

左右乙字

蹴廻しや浅黄にあらて同士軍　　雪花

尾狂めつらしく聞ゆ

鶏の獅子にはたらく逆毛哉

此句今更の手疵也予か未練にも中々也尾狂ひの獅子にあかきし逆毛哉とむすひたらましかは首尾十分なるへきを十五年以前の若気にして今さら取かへしかたしすへてある事なから鶏口となるとも牛後となる事なかれといへる詞つゝしむへし鳥主も御損浅きのけ廻し表裏なく仕立栄したり心の濃キからはむらもあらん

六十六合

撮距小荷駄奉行に隠れけり　　習魚

乙字とす

くは落せ宿まとひを蠅払

軍旅の事聞つくしいひつくし書つくしたる中にも小荷駄かくれの斥候のもの此陣まてつけつ廻しつ透間かそゆるは矮鶏か

くは落せの事

坂落に御曹司馬は主に得て落さんには損すましかりけるそくは落せ義経を手本にせよとて先三十騎はかり真先かけて落蠅払にせゝり落されたるも理リ也夜軍はかふこそ是を分目の軍とたてゝ祕伝の第一とす

六十七合

力尾や旗にひらめく出穂くみ　　百之

二字とす

逢坂の番てふせく御祓哉

勝鬨引音を合せ味方の朱冠をそろへて逢坂山へかけのほつて悦ひの舞羽をひるかへす起鳥あとを濁すなとて出穂の一党力尾の白旌をさしあけ打ちらしこと〳〵く

蹴ちらし関の明神の御前に謹上再拝し奉る

六十八合

陸奥殿の鎗かころんていさ手合

五字

狂ウカレ鶏心かろしや籾土俵　　　　　　　　　　　　　　　亢　月

二字

白兄弟の先陣後陣をあらそひ給へる長いものには負れよと申詞に和せらるへし是社浅きにあらて同士軍なるそかし亦者は心かろくて御陣屋にてもくるひ相撲をとりやり踊なとしてあはれありくなれは一条目の制札をたてゝ籾俵より内へ入へからすと也しとけなき事とも多けれは評にたらす

六十九合

馬士の朝出にすかる鳴尾哉

戴冠文

火啄やさなきつゝしに臆病毛　　　　　　　　　　　　　　　毎　閑

二字

落足手負しは〳〵鳴て駒の蹄についてちりうせぬるありさま鼬の尾をふみ犬の口をのかれし心地也慈悲心仏法僧のたすけもかなと三井寺にかけ込しかは月落烏啼て霜天に満所この篝火消うすらいたるにのかれ出たる焼野の雉峰にまたおとろくはかりつゝし咲乱て寒食の家を気つかはれ身の上いかにとさけはれたり異国には火にすむ鳥もあるに今此生鳥ともは屍を山吹にそめて枹を恨ミ肉ムラを大根にましへて銀杏に刻まれむも前世の業因こそつたなけれ人のわかれをせめて涙のたねをうへしむくひのほともしられたり

七十合

一番の勝を佐久間か吹流し　　　　　　　　　　　　　　　其　角

五字

出し貝のかくす鶏あり十二揃

諫鼓苔深ク治鶏坊に塵静也といふ事氏の御神の力なれは勝方一番の祭をつとめ奉る是は例年見る事なから万戸関トサシを忘れたり

出し貝十二隠し貝十二にして勝負を決す事十二のかくし勢にあり此事委細に申さは秋の夜の千夜を一夜になせりともこと葉残りて鳥やなかなんと行司其貝を桶におさめ剣は箱弓は袋に水引をとらせて鳥の跡を宝とし

正木のかつら永しといへる年の元(ハシメ)に時の鼓をうちおさめ奉る

　鳥沙汰曰

承安二年五月二日東山の仙洞にて鶏合の事ありけり公卿侍従僧徒上下の北面の輩常に祇候の者とも左右をわかたれ銀の賢木をうへて葉枝に用ひ八尺の銀台を居て藤の花を結ひかけ盧橘樹薔薇牡丹山吹の作り花をかさりたて伶人参集して春閑なる御堂の山の青山のとうたひ出て篳篥を吹和琴をしらへ嗟歎の舞楽をそうして扨両方の鶏を合す

　一番

　左　右衛門督の鳥字ハ無名丸

　右　五條大納言の鳥字ハ千代丸

以上十二番左勝四番右勝六番と記す歌女舞妓興遊に絶す此間盃を勧む乱舞放宴たりといへとも万代の美談に備ふ黄昏事おわつておの〱退出此事中御門の左大臣殿の御たつねによりて奉行人経房朝臣書奉りける也其代の記おもひ合せ侍るまゝあら〱是を述

　　なをよろこひに余りて

花鳥の後段は

　唐子合すへし

　　左右総計

麗人　二　句

五字　十四句

三字武文　十八句

二字　卅六句

雁形乙　五十二羽

屯　十六距

宝晋斎其角

五元集 拾遺 貞

（題簽）

晋子一世の奇句はこと〳〵く五元につくせりといへとも興ある自画に戯言の句をなしあるは一斗百扁（篇）の酔吟又は柳巷の暁旅店の昏みつからも覚すしてもれたるなと人々はこれをもてはやして箱にひめ物にとゝめ吾家々の青氈とよふをこれかれあまねくさかしもとめて編てまた一書となすのみ

五元集拾遺

春之部

日の春をさすかに鶴の歩み哉

年立や家中の礼は星月夜

松かさり伊勢か家かふ人は誰

　神明町に居をしめて

行合の松もかたそきかさり竹

鐘ひとつ売れぬ日はなし江戸の春

鶴さもあれ顔淵生て千々の春

元日や月見ぬ人の橋の音

はま弓や当時紅裏四天王

元日の炭うり十の指黒し

　手ニ握レ蘭ヲ口ニ含レ鶏-舌ヲ

ゆつり葉や口にふくみて筆はしめ

師走の分野（サマ）是かや春の物狂ひ

　高砂住の江の松を古今万葉のためしにひかれしより散うせすして連歌に伝ふしかるに此松は枝葉百間にあまりて諸木にことなる気色尤はいかいなるへし

蓬萊の松にたてはや曽根の松

庭竈牛も雑煮を居りけり

題黄金

目には見す一万枚を御代の春

若水に鰹のおどる涼しさよ

春王正月老

生死のむかし男そと水祝い

明る夜のほのかにうれし娵か君

初夢や額にあつる扇子より

世の中の栄螺も鼻をあけの春

参宮の四判は来たり亥子の間

蓬莱の讃

島そよる三の書院のかゝやくまて

福禄寿の讃

長き日や年のかしらの影法師

宝引の讃

保昌かちから引ク なり胴ふくり

松かさやまはさはこまにまはるへく

花さかは告よ尾上の畚おろし

春の水かろく能書の手をはしらす

若菜

傘持はつくはひなれし若菜哉

菜つみ近し白魚を吉野川に放て見う

さわらひの七種打は寒からん

うかれ雀妻よふ里の朝若菜

大根の画讃

兵のひかへてふたり子の日哉

恵美須紙かけ取帳の三枚目

此句は陸（睦）月十一日内田市左衛門か
家にて帳のおもてにかゝれしとや

梅柳

さす枝のゆきとゝかぬや絵馬の梅

旅立ける人に

古郷へ梅おり入れよかたな箱

白主改名　詞書うせてなし

白黒の間の障子やむめと星

（ママ）
梅にはうとき句帳とり

此句五文字ちきれて見へす惜へし

小袖着せて俤句へむめか妻

宿の梅椵いかはかり青かつし
　芭蕉翁百ケ日懐旧
墨の梅春やむかしのむかし哉
　詞書略
三日月の命あやなし闇の梅
　詞書有今略
焼のこる琴に恨の柳かな
曲れるを曲てまからぬ柳哉
　あるまんす所持の掛物自画讃
風なりに青い雨ふる柳かな
　山更上京
貫さしもわかねて軽き柳哉
　傾城の讃
青柳の額の櫛や三ヶの月
　鶯
鶯に長刀かゝるなけし哉
うくひすの暁寒しきり〳〵す
鶯かねくら笛吹おこせ笹鼬
うくひすや鼠ちり行閨のひま

　あらし座にて
鶯の子は子なりけり三右衛門
霞消て富士をはたかに雪肥たり
杉起て畠を見する雪間哉
すへらすに筏さす見よ雪の水
　こまの恋
近隣恋　京町の猫かよひけり揚屋丁
寄竹恋　埋られたをのか涙やまたら竹
幼恋　はゝきゝの百目なき子に別れ哉
寄寺恋　柏木の榊(柳)もそれかあかり猫
思他恋　飯くへは君か方へと訴訟猫
疑恋　花の夢胡蝶に似たり辰之介
　人にこしやうの粉をふりかけられて
耳ふつてくさめもあへす鳴音哉
　吉原の初午
初午や賽銭よみは芝居から
　初午に寺のほりの例をふたり
　の御子達に祝願いたし候
いの字より習ひそめてやいなり山

山の端に乙鳥をかへす入日かな
川燕纚（サテ）さす邪魔と見ゆる哉
帰る雁米つきも古郷やおもふ
　授記品無有魔事
くもりしかふらて彼岸の夕日影
　不生不滅の心を
海棠の鼾を悟れねはん像
伶人の門なつかしや春の声
世の中は何かさかしき雉子の声
　惜春
梅ちるやこれを箕にせん鳳巾
かつしかや江戸をはなれぬ鳳巾
　支考か遠遊のこゝろさし有けるに
白川の関に見返れいかのほり
　白魚露命
月と泣夜生雪魚（イツマデ）の朧闇
白魚の色かはるもの川けしき
　画讃
浦島かたよりの春か鶴の声

引かへて蕪をはたのに春の駒
駒とめて雪見る僧に蕗のたう
すこ〳〵と摘やつますやつく〳〵し
泥亀の腕とおもへは土わさひ
燕にすさめられてや庭の桃
　東潮留守見廻
出替りや人置世話も連衆から
やふ入やはやいにろくなつらはなし
　鶏合
炭喰の声たにたゝぬねらひ哉
毛衣に腹黒き名を雪（キヨメ）けり
割ッて入るくるみ花冠も箕手哉
老鳥のけふ若やきぬ固本丹
勝足をひたさは関の清水かな
　汐干
貝（バイ）つるや白洲の末の流れ松
　貝にて貝をむき侍るを
あさり貝むかしの剣うらさひぬ
藤潟や塩瀬によするふくさ貝

子安貝二見の浦を産湯かな
鉄槌にわれから蠃螺(ニシ)のからみ哉
へなたりやかつき上けしは水の栗
海松ふさや浪のかけたるほらの貝
すたれ貝雪の高浜見し人か
われからと雀はすゝめからす貝
江島や旦那跡から汐干貝

雛

かつらきの神はいつれそ夜の雛
いもうとのもとにて
世忘れに我酒かはん姪か雛
上座ほと雛のすかたの新なり
紙雛のさう〳〵しさよ立すかた

花

猿の寄る酒屋きはめて桜かな
さくら狩けふは目黒のしるへせよ
口ひるを魚に吸るゝ桜哉
これは〳〵と斗散も桜哉
京中へ地主のさくらや飛胡蝶

勢田の春望

山桜身を泣うたの捨子かな
墨染に鯛彼さくらいつかこちけん
山桜鏡こひしき僧(ママ)あらん
浦人の　花をもらふとて
散時を斗に買む磯さくら
土取の車に添ふややま桜
鑓立かけし花の陰に奴の眠れる画に
隙な手の鑓持さむし山さくら
花ひとつ袂に御乳の手出し哉
大仏膝うつむらむ花の雪
泥坊や花のかけにてふまれたり
徳利狂人いたはしや花ゆへにこそ
庚申の雨といふ題にて
此降を人か延さる花見かな

読荘子

彼是は嵐雪の偽華のうそ
花鳥もうつらとならむ願哉
かんさしやちり行花のおもしにも

花下けてやり手がひとり寺参

　神力品現大神力

法の花ちるや高座をたゝく音

　憶芭蕉翁

月花や洛陽の寺社残りなく

　代樵

彫(リ)レ笛(ヲ)縫(テ)レ蓑(ヲ)花に晴せん浮世哉

屋形舟花見ぬ女中出にけり

　湖春をいたみて

泣てよむ短冊もあり花は夢

名さかりや作恋(ダテ)五郎花さため

　榎島

花風や天女負れて歩渡り

　寒食二句

寒食や竈下に猫の目を怪しむ

今案するに寒食の家には自身番

　画讃

藤の花これまて顚れいて蛸なり

山吹は黄玉青玉露そうき

きりしまに豆腐を切て捨はやな

柴舟の里は茶摘の水けふり

　ある人の子の名を聞て

ことはりや養ひ子なら蜂之介

　竹に蜂の巣かけし絵に

なよ竹のさゝら三八宿とこそ

　何必逃杯走似雲（詩）此侍大酒盛と見へたり

此虻をたはこて逃すけふり哉

ねふる蝶夜る〳〵何をする事そ

俗にいふうぶめなるへしよふこ鳥

　三月尽

鳶に乗て春を送るに白雲や

夏之部

　寄甘己

白禿もなをる斗そころもかへ

法体もしまの下着や更衣

ぬがてやは千手観音衣かへ

　東叡山院

僧正の青きひとへや若楓
今日にかはる浄瑠理殿の青簾
　時鳥
ほとゝきす二声めには出馬哉
あの声て蜥(トカケ)くらふかほとゝきす
音を守る夜寺に鬼なし子規
　山田市之丞
ちつ〳〵と帰すつゝみや郭公
観音て耳をほらせてほとゝきす
我句人しらす我を啼ものは杜宇
鉦かん〳〵鷲破時鳥艸の戸に
あれ〳〵と艪まらはつれてほとゝきす
ほとゝきす家隆のうそやきり〳〵す
　明かたに鳴すてし一声を
郭公中入までのはせをかな
さもこそは木兎わらへほとゝきす
麓寺うこぎか奥をほとゝきす
艸の戸や犬に初音を隠者鳥
　須磨にて

ほとゝきす雲も輪になる浦半哉
　鰹
　たのみなき夢のみ見けるに
うたゝねのゆめにみへたる鰹哉
妻鰹の卵(カイコ)の中のめちか哉
　人のもとにて
人のまことまつあたらしき鰹哉
　木賀
名所は海を見すして鰹哉
　丹羽左京かうのとのゝゆゝしかりける
　参勤を
黒杜(杜)丹ねるやねりその大鳥毛
むら雨や驪山を名にしふかみ草
須磨の山うしろに何をかんこ鳥
蟾(ヒキ)をふんて夜卯の花を憎けり
　浅野家の義士等をいたむ
おもたかの鑓を引也かきつはた
　伏見の何某に
杜若女せつたのかたしあり

傾城の夏書やさしやかりの宿
けしの花朝精進の凋れかな
散り際は風もたのましけしの花
芥子はたけ花ちる跡の須弥いくつ
　上行寺
灌仏や墓にむかへる独言
紙合羽かろしやうき世夏念仏
　岩翁亭題送蟹
みしか夜や隣へはこふ蟹の足
短夜や朝日まつ間の納屋の声
　ある人の別墅にて
内川や鳰のうき巣になく蛙
枇杷の葉やとれは角なき蝸牛
秋しらぬしげりもにくし烏麦
馬士起て馬をたつぬる麦野哉
麦にかなし薄に月を見ん迄の秋
能化堂麦つく僧を気色哉
壁の麦葎に年を笑ふとかや
　豊年
ぬか味噌に年を語らむ瓜茄子
干瓜やおしろいしても黒き皃
　祝産育
たかうなの皮に臍の緒つゝみけり
　大町亭法会　詞書略
法のため筍甕皿もかたみかな
　しなひたる法師の梅干けるを見て
梅いくつ閼伽の折敷に玉あられ
　壬二集　さみたれと五月きぬれは
　　名をかへていかにひまなき雨
　　とおもへは
さみたれの名も心せよ節句前
なよ竹の末葉のこして紙のほり
　かふと取出すを見て
ものゝふの幟甲や庫のうち
粽かはん駅にとめて鈴のほり
幟網沖には幾つ帆かけ舟
幟立長者の夢や黒杜丹（牡）

画讃

粽ゆふはさみや芦の葉分蟹

きる手元ふるひ見へけり花あやめ

根合や御池にひたす花筐

廻文

けさたんとのめや菖の富田酒

千山亭新宅雪舟の絵に

隅に巣を鷺こそねらへ五月雨

さみたれにやかて吉野を出ぬへし

三味線や寐衣(マキ)にくるむ五月雨

燕もかはく色なしさつきあめ

題江戸八景

住へくはすまは深川の夜の雨五月

さみたれや湯の樋外山にけふりけり

五月雨や君か心のかくれ笠

江の島

黴雨の窟座頭一曲聞へ給へ

何を音にすほん鳴らむ五月雨闇

傾廓

八兵衛やなかさなるまい虎か雨

旅人をあはれみて

舞坂や闇の五月のめくら馬

腰越

篠すかき熨斗を敷寐の五月かな

自愧

夜あるきを母寐さりけるくゐな哉

水鶏鳴く夜半に遊行のつとめかな

和古詩

琴を焼て水鶏を煮る夜酒淋し

いらこの杜国例ならてうせける

よしを越人より申聞へける翁にも

むつましくて鷹ひとつ見つけて

うれしと迄たつねあはれける昔を

おもひて

羽ぬけ鳥鳴音はかりそいらこ崎

引舟の讃

夏艸に黷てかるたをそろへけり
夏川に蔵より仕出す簀子かな
　宇治にて
柴舟にこかれてとまる螢かな
艸の戸に我は蓼くふ螢哉
蠹しらみ窓の螢にかたる也
若竹や鞭にわかぬる箱根山
田植まて水茶屋するか角田川
合羽着て友となるへき田うへ哉
早乙女のよこれぬ顔は朝はかり
摺鉢の早苗穂に出る秋こそあらめ
　会盟
交りのさめて亦よし夏料理
手にかはく蓼摺小木の雫哉
　籠前栽
　隣官士迎客の興をまうけ侍
　ると聞ゆいさゝかなる菜薗を
　とゝのへて庭前栽と名付手籠
　に雨の雫をいとはすその題をこゝに
　おにとりし侍る句に
海松和布をや蜑の腰蓑青角豆
　望海観遊
海松の香や汐こす風の礒馴松
　鎌倉の浜出を
海松ふさや貝取出刃を蜑にかる
　止波浦にて
地引すと蜑のまに〳〵暮の汐
　遠浦の猟船押送りして此橋の
　下に入
帆をかふる鯛のさはきや薫る風
　舟興
更るほと四つ手のいなの光かな
朔日に七里は出たり名こや鮓
石の枕に鮓やありける今の茶屋
岩根こす鞋に鱗あり走鰷
　遊女小むらさきをかゝせて讃望れしに
藻のはなや絵に書分てさそふ水
藻の花や海老越す袖にさゝれ石

蕗の薹にと思ふもかなし深草(ミクサ)寺

夏木立哉池上の破風五寸

建長寺無(レハ)詩俗(ヲシテ)了人

爰に詩なし我に俗なし夏木立

谷(ウツホ)木の鬼なおそれそともし笛

午の年午の月午の日午の

時うけに入る

競馬埒に入る身のいさみ哉

日待酔しらけてみな逃ちりたる

跡にひとり灯火をかゝけたる難有さよ

いつの間にお行ひとりそ夏の月

雪に入る月やしろりと富士の山

夏の月蚊を疵にして五百両

市の仮屋のいふせきに

沓つくり藁打つ宵の蚊遣哉

夜読書

蚊を打つや枕にしたる本の重(カサ)

申の日とて蚊屋まいりたり

夜早ねん紙帳に風を入る音

蚊は名のりけり蚤はぬす人のゆかり

酔て忘

宵の蚊も枕をわたる八声かな

宗長の句をとりて

橘の一つ二つは蚊もせゝれ

むかし匂ふ花さへ実さへ陳皮さへ

蚊遣り火に夕顔白し橙は

松賀秋航岩城へ趣に初宿千

住とかや聞へけれは

蚊遣り火に狭箱から団扇哉

仏骨表

しはらくは蝿を打けり韓退之

射(ル)者中(リ)奕(スル)者勝(ハツ)

蝿打よいつれにあたる点こゝろ

信濃へ参らるゝ人暇乞せらるゝ

餞に

梁の蝿を送らむ馬の上

蝿なくは一華折ん夏の菊

土さへさけててる日にも

蠅追ふに妹忘れめや瓜作り
母の日や又泣いたす真桑瓜
あたまから蛸に成けり六皮半
ならはしの塩茶のみけり瓜の後
　瓜の一花　文はこゝに略す
此花に誰あやまつて瓜持参
　浅草川逍遊
富士行や網代に火なき夜の小屋
白雪に黒き若衆やふし詣
はれて候又曇り候ふし日記
順礼のよる木のもとやところてん
氷室山里葱の葉白し日かけ艸
　不レ奪ニ百姓ノ膏腴ヲ一とは文選の詞也
百姓のしほる油や一夜酒
　憫レ農ヲ
焼鎌の背中にあつし田草取
紅粉買や朝見し花を夕日影
昼かほや猫の糸目になる思ひ
蕣に鳴くや六月ほとゝきす

百合の花折られぬ先にうつむきぬ
白露を石菖にもつ価哉
　三蔵といひけるかたひのものつゝれ
たる袋より俳諧の歌仙取出して
点願はしきよしを申てしさりぬ其巻
の前書に爰にいやしき土の車の
林のかけに身をかなしめるありと
書りいかなる者のなれるはてにか有
けむかの巻の奥に申遣しける
あまさかる非人貴し麻蓬
　一晶の宿坊にて
日蓮よ木するゐに蟬の鳴く時は
空蟬に吉原ものゝ訴訟かな
　木戸番をあはれむ
蟬を聞け一日鳴て夜の露
　入湯の人木賀をかたりしに
蟬の声ましらもあつき梢哉
　綟子を懐紙の表紙にして点取
におこせけれは

飯櫃にかけもたらぬか蟬の衣
視レハ二彼ノ蟬ヲ一貧者に衣をぬく事を
　祇園殿のかり屋しつらふを
杉の葉も青水無月の御旅哉
　拝天王之御旅所
里の子の夜宮にいさむ鼓かな
　茂叔讃
傘に蝶蓮の立葉に蛙かな
　詞書略
香一炉蓮に銭を包みけり
得タリ二正観音ノ像ヲ一
手に蓮膠にしまぬ匂ひ哉
　恵遠法師は法花の筆受た
りといへとも盧山の交りをゆる
　ささりけるとかや
玉あらは爰て筆とれ白蓮社
泥坊の影さへ水の蓮かな
蓮の葉の赤鱏アカエもかるゝ暑哉
蠟かけの欄干暑し星は北

　冠里公備中松山初入の時
つと暑や浦の苫屋の軸うつり
小女の帯にくるまるあつさかな
　伝九郎か持し団扇に
朝比奈の楽屋へ入し暑哉
　宗竹のもとへはかたより文
　参りたり送りものやさしかりけれ
　はぬしにかはりて申侍る
生の松いかに忘れむ汗拭ひ
死の海を汗のうき寐や夢中人
　山田悦亭にて
汗濃さよ衣の背縫のゆかみなり
身にからむ一重羽織も浮世かな
何と羽織縮緬は重し紗は軽し
　小町の讃
腰かけて休むなるへき大うちわ
かはほりの物かきちらす羽色哉
水の粉に風の垣なる扇かな
うすものゝ風情日にはる団扇哉

所見

蔵か家か星か川辺の涼かな

翁よりの文に都のすゝみ過て又とち
風になりともまかせてなとゝ聞へ
けるをとゝめて

丈山の渡らぬあとを涼みかな

夕薬師すゝしき風の誓哉

涼舟泥ぬり合し游かな

少年を舟に供して不死の肴をとゝのへたる

此舟に老たるはなし夕すゝみ

布袋の讃

寐たうちを子とも起すな夕涼

祇公日次の題をとりあはせて

河簀垣徳利もひたす流哉

芝物のすゝしきとこなつの巻を見ておもふ

軒合に猫よく寐たり下すゝみ

夕すゝみよくそ男に生れけり

此句をいつれの集にか他人の句に
せり予晋子の書れし自画讃を

見たり

抱籠や妾かゝえてきのふけふ

曲水の旅宿に湖水を思ひ出して

漣やあふみ表をたかむしろ

昼よりいねて

うたゝねやかふりつめたる麻頭巾

夏酔や暁ことの柄杓水

井にかみあらふ賤の女はおもひもかけぬ
つやなり

顔あけよ清水を流す髪の長[タケ]

露沾公能興行

日にやけて酒のみけるか清水鬼

左右に立わかりて清り濁れりと
あらそふ心を知る人そ汲得侍るへ
きなれは松かけに下涼せし我に
判談をせよといはれて紀の水の底
をたゝし侍る

此論は一荷にになへ氷水

世にあり佗て西行の跡なつかしきまゝに

独すむ友よ朧の糯雪清水
夕立や法華かけ込あみた堂
灸すへて夕たつ雲のあゆみ哉

烟雨村

夕立や洗ひ分たる土の色
ゆふたちやきのふの坂をとらは滝

雨中吟

白雨に独活の葉ひろき匂哉

浅茅か原に遊ひて晴間うれ
しく露を見るに

夕立や螽ちいさき艸の原
ゆふたちや楽屋をかふる傀儡師
夕立や家を廻りて啼家鴨
八雲たつ此嶮嶮(ケンマク)を雲の峰
櫛挽の心すかすや雲のみね

望相州

雲見草鎌倉はかり日か照る歟
うたゝ寐や揚屋に似たる土用干
夜着を着てあるいて見たり土用干
法の声むなしき蠹の窟かな

酔登二階

酒の瀑布冷麦の九天より落るならむ
ひや酒やはしりの下の石畳

庵の留守に

すびつさへすこきに夏の炭俵

隣家に樹をすく人有其四時
先後を愛する事をしらす

何かいはん六月桐を植る人

市中の光陰はことさらにいそかし
きを

秋ならすさゝら大鼓や夏神楽

御祓

夏祓御師の宿礼尋ねけり

秋の部

井の柳きのふを桐の一葉哉

水の蜘一葉にちかくおよき寄
　粛山子のもとめ　画は探雪
　なり琴と笙と大鼓と讃望
　まれしに
　右　笙
けしからぬ桐の一葉や笙の声
　艸庵に水つきて住わひける
　僧をとひて
手拭の筐よりもる一葉かな
春日野や颪こく猿の一葉川
　詞書略之
空や秋蚊屋を明れは七多羅樹
　父の煩はしきを心元なくまもり
　居たるにいなみかたき会に呼たて
　られて此句を申出たれは一折
　過るほとに快しといふを告たり
　妙感の余りにこゝにしるし侍る
秋といふかせは身にしむ薬哉
　格枝亭柱かくしに

乾ヤ兌坎震離ス艮坤巽
　空や秋水ゆりはなす山おろし
　と御よみ候へ下の字自然にまい
　り候こそ弥三五郎にて候
　秋夜話ニ隠ス林ニ
雨冷（アマヒヘ）に羽織や夜の蓑ならむ
　市隅
西側に灯籠なかれや三日の月
美女美男灯籠にてらす迷哉
　市中の閑居
あさかほやよし見む人は竹格子
　朝な〳〵に咲かへて盛ひさしきとある御歌
　をかんし奉りて
蕣は仙洞様をいのちかな
あさかほやとれきはに咲猪口の物
朝皃にしほれし人や鬢帽子
　すゝきを画けるかけものゝ讃
あさかほや穂に出るまて這あかる
蕣にきのふの瓜の二葉哉

朝皃にいつ宿出し御使
道心の妻しほれて恨む槿垣
　七夕
星合や人の心を爪はしき
露橋や待とは宇治の星姫も
　素堂か母七十七歳の秋万
　葉の秋の七艸の発句勧進
星の夜よ花火紐とく藤はかま
　三遷のおしへに慣ひて七つになり
　ける姪を寺へのほせたれは一日
　ありて七夕に歌を奉りけるをい
　とおしみて
文月や産るゝ文字も母の恩
樽買かひとつ流すや天の川
妻星よあふに一くせある女か
大切の夜は明にけり天の川
明星や額に落る鞠ほくろ
　秋七種
けふ星の賀にあふ花や女郎花
　女わらへの心はへして籠に
　露かひ侍るを七夕の手向艸
　にせしかは
露まつや味噌こしふせてきり〳〵す
　海辺暁雲
稲妻や朝暾(ヤケ)したる空に又
　弥陀のりさうをかふむらすはと
　こそたのみしにこれらか結縁は
夏のうちに杓子をかふる鼠哉
　七月十日の夜東潮か食櫃に
　杓子のうせけるをとふらひける也
夢となりし骸骨おとる荻の声
　詞書あり略す
萩もかな菩薩にて見し上童
　文は萩の露にありこれを略
はきの露蛤貝にくすりかな
萩な苅そ西瓜にまくら借す男
牛に乗る娵御落すな女郎花
　遍照の讃

僧正よ鞍かかへつて女郎花

　短冊書せらるゝ迷惑さを

葛の葉の赤い色紙をうらみ哉

　髭かちなる男の椎つみたるは
　にけなかるへし

西瓜喰ふ奴の髭の流れけり

西瓜くふ跡は安達か原なれや

　沾徳餞別

点せかむ人の宿かれ花すゝき

かなしとや見猿のためにまんしゆさけ

芭蕉葉に雀も角をかくしけり

取る日よりかけてなかむるたはこ哉

芋をうへて雨を聞風のやとりかな

　鑑ニ素堂カ秋池一

風秋の荷葉二扇をくゝるなり

茶筌もて真の掃除や白芙蓉

　盆会

かへらすにかのなき魂の夕かな

たらちねに借金乞はなかりけり

　右の二句文あり今こゝに略す

　陀羅尼品

銀を罪の秤や墓まいり

　分郊原

みそはきや分限に見ゆる髑髏

　文月をかねて刺鯖を猟領
　し世の人のいはひくさとすと

鯖切のかくてもへけり大赦迄

生霊酒の下からぬ親仁哉

　花はかたみに入葉はあしかに
　荷ひ分てその労をいとふまことに
　切なる争ひを

親も子もきよき心や蓮売

棚経や声のたかきは弟子坊主

一長屋錠をおろしておとり哉

踊召て番の太郎に酒たうへけり

上手ほと名も優美なり角力取

　露

斎院の此戸さしけん露なれや

船はりをまくらの露や閨の外
文月やひとりはほしき娘の子
子子等には猫もかまはす夜寒哉
茶のけしき咄しむころや新豆腐
　芭蕉廬の夜
墨染を鉦鼓に隣るきぬた哉
砧の町妻吼る犬あはれなり
　点取におこせたる懐紙の奥に
二巻に目をさましたる砧かな
　宇治の山水
川霧や茶立ふくさののしか減
霧汐烟行末かけてすまの浦
　寂蓮
和歌の骨(コツ)槙たつ山の夕かな
青海や浅黄になりて秋の暮
秋の心法師は俗の寐覚哉
　南部の其詞尋ね来りて野
　田の玉川には西行上人の堀井
　ありと語りしに
濁る井を名にな語りそ秋の雨
　七月廿一日コ斎三回忌なれは
　智海師をともなひて墓誌
　浅艸誓願寺念仏堂
三人の声にこたへよ秋の声
　虫
まくり手に松むしさかす浅茅哉
猫にくはれしを蛼の妻はすたくらん
酒さひて螽やく野の草もみち
　元禄六酉仲秋深川芭蕉庵
　留主の戸に入て
生綿とる雨雲たちぬ生駒山
一しほの妻も有らむ天津雁
　翁にともなはれて来る人の
　めつらしきに
落着に荷兮の文や天津雁
　題湯豆腐
跡の湯か雁を濁さぬ豆腐哉
　士は先祖の功にほこるといへ共

身を枕席にやすんせす一歩戦
場にのそむ心さし有古郷に
文をおくりけむ人〴〵は命を
道の草葉にかけてなつかしき
詞のみを残し置れたるをお
もひ出られて露柏子か愁
　眠をさませり
陣中の飛脚もなくや雁の声
暮の山遠きを鹿のすかた哉
あほうとは鹿も見るらん鳴子引
苅のけよそれを縄なへ小田の鮭
カシカ此夕愁人は猿の声を釣
さちほこに笹をかまする鱸かな
　いはし性柔弱にしてもろし
　潮をはなれて忽に死す鰯俗
　字なりよはしと訓すおむらとは
　いかに
小いはしや一口茄子藤の門
ほの〳〵と朝飯匂ふ根釣かな

　月
池水も七分にあり宵の月
鯛は花は江戸に生れてけふの月
てつへんに丸盆おゐて月見哉
ましらふにのまさるもありけふの月
月になりぬ波に米守る高瀬歌
　詞書こゝに略
名月や今年も筆にへらす口
　詞書略
信濃にも老か子はありけふの月
　仲麿の画讃
月かけや舌を帆にまく三笠山
　長柄文台の記
もる月もむかしの橋の朽目哉
月を語れ越路の小者木曾の下女
有明や待夜なからの君と伯父
　満百
あり明の月に成けり母の影
娘には丸き柱を月見かな

酒くさき鼓うちけりけふの月
庖丁の片袖くらし月の雲
燃くいに火の付やすき月夜哉
　盃と椀を画て
中椀の黒いも御意に三日の月
月のさそう詩の舟か山市か川武か
　借と咄し明して
小便に起ては月を見さりけり
眺めやる函谷やけふ驢馬迎
月日の栗鼠蒲萄かつらの甘露あり
問来かし椎いる里の松葉より
御所柿や我歯にきゆる今朝の霜
いか栗に袖なき猿のおもひ哉
　深川蔵屋しきにて
栗売の玄関へかゝる閑居かな
　癸酉八月廿九日の昼亡父葬
送の場にて崩心の悲を懐
て四生の起別をしる
一鍬に蟬も木葉も脱かな

鴫たちてさひしきものを鴫居らは
種茄子北斗をねらふ光かな
稲こくや轂を握る藁の中
　松吟尼の庭にさか野ゝ土を
堀うつして薄に松なとそ
のまゝにもてなす中にしめし
初たけ有
行かずして都の土や木の子狩
松の香は花と吹なり桜茸
　東国鳳来寺の山の辺を
過る時
冷泉の珠数につなける茸哉
　茸狩十唱句
其　表　不二班　麕茸
う　ら　蕈凹　交臼杵
其　軸　茸蠟燭　消半
石　突　角仙屠　角蒂
つほみ　笠回　菌独楽
焼松茸　松枝　菌返報

塩松茸　不-香ハ松ノ雪-漬
京には一斤といへり　蕈（キノコ）ノ匁（メ）山-雨重シ
其賞　北-岦（ヤマニ）小-松-茸
献上の中にも　祝ス筥-崎生茸（イケマツタケ）

菊

鶏の下葉つみけり宿の菊
籠鳥のゆるすにうとし園の菊
千々の菊歌人の名字しのはしし
柚の色や起上りたる菊の露

重陽

菊の酒葡萄のからにしたみけり
千家の騒人百菊の余情
菊うりや菊に詩人の質（カタギ）を売
きくもみち水屋はぢけて流るめり
手入かなよしある賤かむかし菊
内藤風虎公十三回忌
菊の香やたぶさよごれぬ篠さし
九月九日扇を拾ひける人に
きくや名も星に輝く礼あふき
菜花餞別
友成は菊の使に播磨迄
子籠の柚の葉にのりし句哉

十三夜

白鷺の蓑ぬくやうに後の月
いつれも故郷をかたるに
後の月松やさなから江戸の庭
はらゝ子を千々にくたくや後の月
樽むしの身を栗に鳴今宵哉
家こほつ木立も寒し後の月

鳥

木兎や百会にはかり巾りもの
仁兵衛の片山かけや笑ひ菟
山からの戸にも窓にもなら柏
春澄にとへ稲負鳥と云へる有
小鳥尽長歌
四十から小夜の中山五十から
中村少長夫婦連にて上

京せし時
山鳥も人をうらやむ旅寐哉
紀路行く山はみかんの吉野かな
山ふさくこなた面や初もみち
新殿六間港
水つかぬ塵のはしめや下紅葉
気のつまる世やさたまりて岩に蔦
木葉(コハ)の食蘿を狄(エビス)のにしき哉
暮秋
雁鹿虫と斗おもふてくれけり暮
九月尽
ねぬ夜松風身のうき秋を師走哉
怨閨誰
傾城の小歌はかなし九月尽

冬之部

夢よりか見はてぬ芝居むら時雨
柴はぬれ牛はさなから時雨哉
神鳴のまことになりし時雨哉
今熊をしくるゝ頃はあれそかし
国阿の絵
我山は足駄いたゝくしくれ哉
はせを翁七回忌
七とせとしらすやひとり小夜時雨
よ所に名たつるから崎の松
しくるゝや有し厠の一つ松
時雨痩松私の物干にと書けり
おもしろき人をよひ出すしくれ哉
島むろて茶を申こそ時雨哉
松原のすき間を見する時雨哉
此句は晋子夢に若宮八幡
宮に詣られての吟なりとそ
凩　文は略
木からしよ世に拾はれぬみなし栗
凩となりぬ蝸牛のうつせ貝
芭蕉翁終焉の記文略
なきからを笠にかくすや枯尾花

冬来ては案山子にとまる烏哉
冬木立いかめしや山のたゝすまひ
　曲翠と幻住庵にともなひて
　翁の隠れ所といへる椎の木を見る
まほろしもすまぬ嵐の木のは哉
玄賓を世に見るさまか干菜売
　画讃
松一木乞食の夜着の枯野哉
　坊主小兵衛道心して人々小兵衛
　坊主と申けれは
坊主小兵衛小兵衛坊主と帰り花
朝鮮の妻や引らむ葉人参
網代守大根盗をとかめけり
　恵比寿講
福天の床机にするや仕切帳
子は衣装親はつねなり夷講
金蔵のおのれとうなる霜の声
滋楽城の火洞にあらは霜の声
酒くさきふとん剝けり霜の声

　貞佐新宅
此宿を御師もたつねて杉の霜
真炭刻る火箸を斧の幽なり
埋火や土器かけていちり焼
火燵のうたゝ寐夢に真桑を枕とす
閑居の糠みそ浮世に配る納豆哉
砧つきて又のね覚や納豆汁
　立厩
冬持の足下をかけんなるとせめ
関守の紙子もむ失(矢)かたつか弓
朝嵐馬の目て行頭巾哉
ふれみそれ柊の花の七日市
　宿僧房
あられなし閼伽の折敷に冬菜哉
取次へ霰をはじく長柄かな
武蔵野や富士の霰のこけ所
越後屋の算盤過て小夜衛
鳴千鳥幾夜明石の夢おとろく
村千鳥その夜は寒し虎か許

人の妻むかへたりしに
鴛鴦の盃とちようすこほり
つく〱と壁の兎や冬籠り
達磨忌や自剃にさくる水かゝみ

夜興

夜興引盗人犬やたつた山
犬引て豆腐狩得たり里夜興
菰一重わふや乞食のぬくめ鳥

顔見世　市川三升を祝す

みつますやおよそ氷らぬ水の筋

夜学感

鴛氷る夜や蜉蝣灯盞に羽を閉て
長屋割付られし人の有明の
月に酒売不許入内とてな
きあかしたり
水窓の綱手もきるゝ氷柱哉
蠣むきや我には見えぬ水かゝみ
町神楽店前のひかけをかつらとし
貞徳翁五十年忌元禄十五
年壬午霜月十五日懐旧の
心を述侍る
帯ときも花橘のむかしかな

霜月廿七烏候于黄門光国
卿之御茶亭題周山之佳景

一　ひゐとろの御茶屋　むかふに清
水音羽をうつしまふけ給ふ高
田の奇山あたこかとおもはる
水の工み酔顔清し氷茶屋

二　清水寺音羽

桜精舎梢や千々の雪さかり
六角堂孔子堂小町か石塔
なんとありむなしく行過ぬ

三　耕作の御茶屋

丸屋といふ茶屋に蔦はへるへ
ついありて大根蕪ねふかなと
引うへ枯たる梢に鍬をかけたり
根深ひく麦の早苗やあやめ艸

四　黒木の御茶屋　此道すから竹

生島をわたる堂舎樹林いた
つらに見残しぬ茶屋の体かや
ふける軒に酒旗をかゝく軒端
に黒木つみ置り

我や賤牛に雪咲黒木茶や

五　藤棚　冬枯たり藤二本にて三丁余
あり

藤葺やあられにやとる不破庇

六　西行堂　道のへの清水柳哀也
彼法師よしの山に閉てとく〱
と落る岩間の苔清水くみほ
すほともなき住居かなと言し
をよせて

炭や岩間こかしの清水とく〱と

七　唐橋　唐門を見て長はしを
渡る海あつて等閑に汐干
を見せたり

長橋や勢田にあひ見んふゞき松

八　八はしの花のかほよきを恥て

坊主影月にも冴よ御川水

九　河原書院はしめて御書院
を拝しての賀

八千代とそ河原御舘の御千とり

十　西湖　はしめひいとろの御茶亭
に入る時猶句を惜むてけり
夢に扁舟に乗して西湖にあ
そふと言し東坡かことを次て

詩をあさる（漁）成らむ雪の樽小船

右十章

茶の幽居炭の黒人を侘名なり

松風や炉に富士をやく西屋形

侘に絶て一炉の散茶気味ふかし

鰒

妻ならぬ鰒ならうらみそ小夜衣

鉄炮のそれとひゝくやふくと汁

手を切ていよ〱にくし鰒の面

詩人ゆるせ松江の河豚といはんに

鯖にこりす鰹にこりす雪の鰒

文略す
茶の湯にはまたとらぬ也瓢汁
鮟鱇をふりさけ見れは厨かな
足袋うりやたひかさなれは学鰹

雪

はつ雪や犬の面出す杉の垣
腸を塩にさけふや雪の猿
饂飩屋へ行念仏也夜の雪

文略す

黒塚のまことこもれり雪女
埋木のふしみ勝手や雪の友

富士の烟のかひやなからんとの
御製をよく〳〵了簡せはふし
無念に思ひ浅間を討ぬへきもの
とかく作を麁相に極め置て
浅間かうらみなるへしといひて

諷にてあさまになりぬふしの雪
雪の日は声斗売くろ木哉
富士うつす麦田は雪の早苗かな

青漆を雪の裾野や丸合羽
なら茶の詩さこそ廬同も雪の日は
はつ雪に此小便は何奴ッそ
抜出して雪うち払ふ柄袋
雪おもしろ軒の掛菜にみそさゝゐ

秘蔵の鶉の落たるをおしめ
る人に

墨染に御弔や雪うつら
朝こみや月雪薄き酒の味
雪に問へはかれも蘇鉄の女なり
秋にあへ師走の菊も麦畑

極寒

伊勢縞を着ぬそまことの鉢扣
さためよの遺精もつらし寒の水

鉢たゝきの歌

鉢たゝき〳〵　暁かたの一声に
初音きかれて　はつかつほ
花はしら魚　もみちのはせ
雪にや鰒を　ねさむらむ

おもしろや此　樽たゝき

寐さめ〳〵て　つねならぬ

世をおとろけは　としのくれ

気のふるふなる　はかりなり

七十古来　稀なりと

やつこ道心　捨ころも

酒にかへてん　樽たゝき

あらなまくさの　樽たゝきやな

凍死ぬ身の暁や樽たゝき

　漫成五倫

　君臣有義

家の子等けふを忘るな年忘

　父子有親

魨汁や憎き娵には猶くれし

　夫婦有別

鉢たゝきめおと出ぬも哀なり

　長幼有序

袴着は娘の子にもはかま哉

　朋友有信

君と我炉に手をかへすしかなかれ

　大小の吟　元禄十丁丑年

大庭(二)をし(四)ろ(六)くは(八)く(九)霜師走哉

荷よばりの小坊主にこそ師走声

　竹町渡しの画讃

節季候や口をとぢたる渡し舟

元日を起すやうなり節季候

節季候は左の耳になるとかな

　辰之助に申遣す

煤払や諸人かまねる鎗おとり

寒苦鳥明日餅つかふとそ鳴けり

いさくまん年の酒屋の上はたまり

　酒債尋常往処有人生七十古来稀

詩あきんと年を貪る酒債(サカテ)哉

流るゝや千手陀羅尼の年の垢

年中の放下見へけりとしの暮

豆をうつ声のうちなる笑ひかな

　乾元の節分

長き夜の遠くて近し得方丸

三升所持鍾馗の自画讃
今こゝに団十郎や鬼は外
流るゝ年のあはれ世につくもかみさへものうき
年越や只業平の御袖ひき
はせを翁はてのとしは堅田の
ゆかり伊賀のしるへおもひの外に
なりぬるをわひてうつの山より
人〱に申遣す
置捨に笈の小文や年の暮
住すてし幻住庵にはいかなる句
をか残されけんそれはそれさて
世の中をうけ給るに
妖なから狐貧しき師走かな
大晦日ねいつたうちか年忘れ
御玄関より破魔弓をかそへ奉りて
誰いふとなしに大殿とし忘れ
行としも戸板めてたし餅の跡
行年に唾吐らむかゝみとき
聖代
鶴おりて日こそ多きに大晦日

雑之部

十及の図　画は略之
往昔異邦の仏鑑禅師十
牛を図して人間迷悟の間を
しめされたり其書を狂言にし
取て牛は声音妓有也又及
とももてあつかふは誹なれは也
爰に十及の図を画讃し侍て
笑を万世に残すもの晋其角
尋牛
やみの夜はよしはら斗月夜哉
呼牛
よふこ鳥あはれ聞てもきかぬかな
隠牛
夏の夜はねぬに疝気の起りけり
貧牛

仁朱判やとるかうへにも年男

　廻牛

小便も筧にあまる五月かな

　番牛

ほとゝきす暁傘をかはせけり

　無牛

きり〳〵す枕も床も艸履哉

　半牛

何となく冬夜となりを聞れけり

　送牛

さめよとの千手陀羅尼や霜の声

　老牛

けふもまたうとんのはいる時雨哉

　於冠里公各題五色梅

　黒梅

黒梅や華の調へのかけちかへ

花[イニ形]かたのまた干ぬ革や梅の露

村雨のときれ〳〵や曾根の松

　凡蟬丸より官をつく座頭の

　都とはいかにといはれて

三味線に引て残りし四の緒の

　一チはめくらの名になりにけり

　しからは城とはいかにといふ時

幸になりあかりたる土めくら

　城といふ字のかきのそきせよ

　捨子ありとて一町世話をやくを見て

子を捨てむなしく帰る親の身の

　金をひらはゝくやしからまし

　盆会

なき魂も三日いやるはあはれなり

　十日いやらはさそなあき風

　ひさしくへたゝりし人のも

　とより見にくきすかたを得わ

　すれすと申けるに

馬糞紙にきたなきつらといふ文を

　あくるわひしきかつらきの神

我死は桃梅柳うすき酒

鳰のむらさめ加茂のあけほの

追加

客ずきや心を花に浮蔵主

餅配り国栖人ごまめ奏してより

　天智天皇

打おさむ入鹿か首に四海波

夢なを寒し隣家に蛤をかしく音

　鎌倉にて

山賤か額の瘤のあつさかな

　画讃

餅花や鼠か目にはよし野山

　妙法蓮華経

たへなりや法の蓮の華経（イカダ）

　雪荷亭の花見にまかりて

身をひねる詠なりけり糸桜

　自画賛

棹鹿やはせをに夢の待合

囲より大工召けりむろの梅

　九条殿御下向

伝奏にものかは見はや花の門

御殿場に馬休めけり大根引

御師殿は先こなたへと大根引

　駿州久能の別当さんさめ

　かして御通りあるを

ゆゝしさや御年男の旅姿

時延享四丁卯年秋八月全編校合

成　　　　百万旨原

姉小路堀川東江入町

京都書林　中川茂兵衛

日本橋通三町目

東都書肆　竹川藤兵衛板

解題

虚　栗

其角最初の撰集。すでに『田舎之句合』や『俳諧次韻』、『武蔵曲』などで作者としての力量を十分に芭蕉門以外にも知られていた其角であるが、この一書によって、俳壇的に大きく飛躍したといえる。芭蕉の「東順伝」によれば、東順が藩医の勤めを辞したのが、この天和年中と思われ、其角においても俳諧宗匠への方向を取る、何らかの決断があったかとも察せられる。

所収の発句数四三〇余、漢句三、連句は歌仙八、二十五句一、三物六。通常の二冊本の俳書が、発句集と連句集から成るのと異なり、作品は四季別に、連句もその発句の季によって発句群の中に配列する。作者数一一四名。芭蕉、其角のほか、杉風、卜尺、嵐雪、嵐蘭、揚水、李下など早い時期の蕉門、才丸、千之、千春、一晶、信徳など、上方または上方系の人々、「荷興十唱」を寄せた素堂、また、藤匂、露章、四友、翠紅など、旗本や大名の家臣（推測も含む）の入集句が多い。樵花や空鬼、暁雲（英一蝶）のように、画師の狩野家の人や門人も見える。

芭蕉の跋は、杜甫、李白の詩味、寒山の禅味、西行のわびと風雅、白楽天の恋の情と、伝統的な詩歌に範をとった味わいをあげ、その表現が、荘子風に虚実の区別がつかぬまでにはげしく変幻自在で、しかも鍛えられた詞遣いによってなされているという趣旨のことを書いている。また、其角の序詩は、杜甫の「貧交行」をもじり、貧中の俳交を強調している。

作風は天和調といわれ、詞書や句に漢詩文の引用やもじりを用いる漢詩文調、定型を崩した破調、荘子的鼓舞飛躍の表現が基調をなし、なお残る談林俳諧的戯笑の中に、伊達の心情やわびの姿勢が誇示されている。談林俳諧から貞享、元禄期正風体への過渡期にあるものと位置づけられる。

書誌

綿屋文庫本（わ五九・六）

書型　半紙本。二巻二冊。袋綴。

表紙　縹色無地。

寸法　縦二一・六糎、横一五・五糎。

題簽　後補、中央。上巻「ミなし栗　上」、下巻「みなしくり　下」と墨書。

内題　「虚栗集」（上巻のみ）。

柱刻　丁付のみ。上巻、「一（〜十ノ十一、十二〜廿九終上）」、下巻、「下ノ一（〜下ノ十三、下十四〜下廿六終）」。

丁数　上巻　二八丁、下巻　二六丁。

行数　本文　九行、跋　六行。

刊記　「延宝三亥歳／林鐘中旬／神田新革屋町　西村半兵衛／京三条通　西村市郎右衛門」。傍に「延宝三歳者乙卯年也」「延宝者寛文十三癸丑九月廿一日改元也亥年ト彫刻不審」と墨書書入。

跋文　芭蕉跋「天和三癸亥仲夏日　芭蕉洞桃青鼓舞書」、其角跋「晋其角撰」。

印記　「紫景文庫」「わたやのほん」。

題簽は、愛知県立大学本、小城鍋島文庫本などに、原題簽で「みなしくり　上」「みなし栗　下」とある。
刊記は、綿屋文庫本（わ五九・六）以外、後刷本には欠く。
其角の序詩は、本来芭蕉跋の後にあるが、後に、上巻冒頭に置かれる。

後刷本の末尾に、載文堂西村市郎右衛門の「芭蕉翁門俳書目録」「蕉門俳書目録」を付したものがあり、前者は、享保後年から寛延ごろ、後者は、天明三年以降、同末年ごろのものと考えられる。末期の後刷本では、かなり板木が痛み、入木により補って出版した様子が知られ、当時の本書に対する人気もうかがわれる。

板下は本文、其角跋は其角筆、芭蕉跋文は芭蕉筆。

蠧集

貞享元年（一六八四）春、上京した其角が、信徳、只丸、虚中、千春と一座した五歌仙に、上記の人々に友静、春澄、千之を加えた八吟世吉一巻を追加した連句集。其角と京都俳壇との交流を示すもので、延宝末年の『七百五十韻』と『次韻』、天和二年の『武蔵曲』における千春との俳交に次ぐもの。千春の序は、五歌仙の発句の大意を冒頭に掲出したこと、志を言うに止め、表現に意を用いなかったこと、白楽天の諷諭体にならったことを記している。作風は、『虚栗』や、信徳らの『五百韻三歌仙』に共通し、なお強く天和調を存するものである。

書誌

柿衛文庫本（は六一・四二一）

書型　半紙本。一冊。袋綴。
表紙　白地縹色沙綾形丸花文様。
寸法　縦二二・一糎、横一六・〇糎。

題簽　後補。左肩。「蠹集　其角完」と墨書。表紙見返しに、「蠹集　其角京五吟／追加よゝし　全」と記し、「印行之標題如此」と注している。
内題　なし。
柱刻　なし。丁付は、序文一丁分にはなく、本文綴代側に、「一（〜十九）」。なお、四丁目一丁分は補写。
丁数　二〇丁。
行数　七行。
刊記　「寺田与平治重徳板行」。
序文　「倉閭蘇鉄林　千春述……貞享甲子中元日」。
印記　「吏登斎蔵書印」「柿衞珍蔵」。

綿屋文庫本（わ六一・一四）は、原題簽（中央）を存し、「蠹集　其角京五吟／追加よゝし　全」とあり、題簽と序文は緑墨が用いられている。
板下は其角筆であるが、追加の世吉の分、十六丁以後は、異筆。寺田重徳か。
補写されている四丁目の分は、翻刻に際しては、綿屋文庫本を参照した。

新山家

貞享二年（一六八五）五月、病後保養のため、枳風を同伴して江戸を出、箱根木賀山の温泉に赴き、先行の文鱗とともに吟行した折の紀行句文集。大原三吟の宗祇らにならって三物を作り、医王堂に奉納したり、宮城野の叙述では、宗祇、

芭蕉の句、「山家の心」を詠んだ『千載集』の古歌などを引用、さらに箱根で死去した隠士未琢のこと、一月に遷化した大巓和尚のこと、芭蕉の和尚追悼吟を記した書簡などを記し、短い文章ながら、旅情掬すべきものがある。
附尾の歌仙一巻は、右の旅から帰って後の興行か。本書の刊行が貞享三年とされるので、その夏とも考えられる。作風は、漢詩文調や破調的なものから脱して、和歌連歌風のやすらかで優艶な、例えば俳言のない句もまじるが、また駒千代や曽我の貧、無心和尚などの仮空の人名の趣向に、なお、『虚栗』のころの風を残している。

書　誌

保坂三郎氏蔵本

書型　半紙本。一冊。袋綴。
表紙　縹色無地。
寸法　縦二二・五糎、横一五・八糎。
題簽　中央。「新山家　其角」。
柱刻　「一（～十四）」。
丁数　一四丁。
行数　八行。
刊記　「書林　京堀川通錦小路上ル町　西村市郎右衛門蔵版」。

右の刊記の所書きは、享保後半期以降のもので、寓目した数本はすべてこれと同じである。刊行当時の版元は、西村市郎右衛門であるかどうかわからない。阿誰軒編『誹諧書籍目録付録』に、「新山家　一　貞享三　江戸其角　八分」と

見え、京都の井筒屋庄兵衛からの板行か。とすれば、『蠧集』に続いて京都からの板行となる。
板下は、「丁亥郎川蚊足筆」。

続虚栗

さきの『虚栗』を次ぐものとして刊行、入集者数一一四名、発句四七〇余、連句は、歌仙四、世吉一 二十四句一、半歌仙一、三物二で、規模、体裁ともに『虚栗』とほぼ同じで、句、配列も、四季の順に配列した発句中に連句を混在させている。これ以後の其角の撰集では、この形式のものは見られない。

入集句は、其角をはじめ、芭蕉、蚊足、文鱗、魚児、去来、嵐雪、観水、枳風、由之、巴風、野馬、露沾、破笠、孤屋、仙化等で、『虚栗』との共通の入集者は二三名で約二割、うち、本集に発句五句以上入集する者一二名で、本集発句五句以上入集者三〇名なので、少数の主要作者を除けば、かなり変動があったといえよう。

素堂の序は、当時流行の、やすらかですなおな作風の中に、景のみあって情のない句があるが、伝統的詩歌に見られるように、景と情を兼備すべきこと、心を描くのは、虚構をもってするものだが、表現には、時の花、終の花があり、時流は時の花に傾きやすい。しかし、人の師たるものは、内に志を立てて、一方に偏しないようにしなければならないことを述べている。

作風は、右の素堂の序文や一晶の『丁卯集』等に指摘するような、貞享期の俳壇の有心正風志向の風潮の中にある。発句の中に、風虎編『夜錦集』からの引用があり、春、夏、秋の各巻頭に、任口、意朔、風虎の句が置かれており（冬は、芭蕉を旅に送る餞別会の、芭蕉発句の世吉）、露沾との親密さの結果であるが、古風尊重の姿勢がうかがわれる。古典や歌語などを利用した句作や結句「かな」の多用などにもそのことが示されている（石川真弘氏「『続虚栗考』――貞享期蕉風

俳諧の姿勢――」・『蕉風論考』・平成2・3)。

芭蕉の草庵生活の句、その旅立ちを送る門人たちの餞別句、其角の母の死去に際しての人々の追悼吟など、集の目玉となる発句群が配置され、また、述懐、無常、旅など六つの分野の句を連ねた六容歌仙があって、評註初懐紙や蛙合などに続く新風模索の試みを見ることができる。

書　　誌

綿屋文庫本（わ六五・五）

書型　半紙本。二巻二冊。袋綴。

表紙　茶色無地。

寸法　縦二三・五糎、横一五・九糎。

題簽　中央。上、下巻ともほとんど剝落。

内題　上巻春「続虚栗集」、夏「続虚栗」、下巻秋「続虚栗」、冬「曽久美那之九梨」。

柱刻　丁付のみ。上巻「序一、序二、上一（～廿五）」、下巻「下一（～廿五）」。

丁数　上巻　二七丁、下巻　二五丁。

行数　序　一二行、本文　九行。

刊記　「貞享丁卯歳霜月仲三日／日本橋万町／万屋清兵衛彫行」。

序文　「江上隠士素堂書」。

印記　「和露文庫」「わたやのほん」。

刊記書肆名が「皇都書林／京堀川通錦小路上ル町／西村市郎右衛門蔵版」とある後刷本があり、それらの本には、題簽、上巻「続ミなし栗　甲」、下巻「続みなしくり　乙」とある。また、『虚栗』『新山家』等と同じく、「芭蕉翁門俳書目録」や「蕉門俳書目録」を付しているものがある。それらには数次にわたり、入木を施した部分が認められる。

板下は、其角筆。

いつを昔

書名は、所収の其角の句「新月やいつを昔の男山」による。所収発句数二二五句。連句は歌仙三のほか、三十句の未完連句一、三物三。発句は、天象、地儀、居所などの題による十題百句、感心、魚部、旅などの題による交題百句、ねう比丘(猫)の発句五、舎利講十如是の発句十二、鉢たたきの発句五など、テーマのある発句群を配している。十題百句は、藤原良経(後京極殿)の『秋篠月清集』、慈円(慈鎮和尚)の『拾玉集』の「十題百首」によったものである。

作者数八三名。其角、芭蕉(翁)、尚白、去来、山川、素堂、路通、粛山、巴風、千那らで、『続虚栗』と共通の作者は三五名である。

乾裕幸氏説によれば、本書は初め、「誹番匠」として編まれたが、『曠野』との重複を避けて句の取捨増補が行われ、また、『誹諧番匠童』の書名の類似を嫌って「いつを昔」とし、また、その書名の基づく「新月や」の句は、「元禄正風体」(新月)の照射するところ、いつを貞門古風の時代(昔)というのか、いま(当流)もむかし(古流)もかわりはないではないか、というほどの意になる(『いつを昔』の成立・『俳文芸の研究』昭和58・3)。

其角の貞享五年(一六八八)七月からの上方への旅、父の故郷近江堅田訪問などにより、また、芭蕉の旅の成果の反映があって、収録作品を特色づけている。

湖春の跋文の中に見える其角の、大工仕事に比喩をとって「同じ詞のあらぬ姿にかはる所」が番匠（作者）の器量のいたす所とする論は、『猿蓑』序の幻術論にも、『句兄弟』の句合の方法にもつながるものであろう。
作風は、貞享期のそれを享けて、そのことさらな和歌連歌風が若干退潮し、元禄初期の、雅俗相応の表現が見られる。

書　誌

保坂三郎氏蔵本

書型　半紙本。一冊。袋綴。
表紙　薄茶色地水藻文様。
寸法　縦二二・四糎、横一六・二糎。
題簽　中央。「いつを昔　誹番匠其角」。
内題　なし。
柱刻　「昔ノ序、昔一（〜三十四）」。
丁数　三五丁。
行数　本文八行。
刊記　「元禄三歳南星和日　寺町二条上ル町井筒屋庄兵衛板」。
序文　「去来校」。
跋文　「誹諧堂湖春書」。
印記　なし。

本書には、覆刻の再刻本があり、刊記の所書きが「京寺町二条上ル町」と「京」の一字が加わっており、最終の丁付が、「昔三十四終」と「終」字が添えられているほか、数ケ所に誤刻がある。
板下は、其角筆。

花摘

貞享四年（一六八七）四月八日に没した母妙務尼の追善のために一夏百句を思いたち、元禄三年（一六九〇）四月八日からはじめて六月十九日満願。その一夏百句と、その間に知り得た諸家の句文を録した句日記に、閑興六歌仙と題した歌仙六巻と三物一、発句若干を付した。百日の間には、旅中の芭蕉の連句や発句、去来の鼠説、『いつを昔』にもれた四〇の発句、其角に点を求めた乞食とのやりとり、百里の「孝養施餓鬼」発句、粛山の能「番組」発句などが折りこまれ、其角を訪れた人々や伝聞の句、岩翁亭や断りきれないで出た連句会の句など、其角日常の宗匠生活をうかがわせるものも多い。

其角を別として、収録する句の多い人々としては、百里、芭蕉、かしく、山川、渓石、粛山、曲水、彫棠、岩翁、亀翁らで、『続虚栗』などと比較して、其角周辺の人々の顔ぶれの変化がうかがわれる。

書誌

保坂三郎氏蔵本

書型　半紙本。二巻二冊。袋綴。

表紙　薄茶色地水藻文様。

寸法　縦二二・〇糎、横一五・七糎。
題簽　中央。上巻「花摘　上局従四月八日」、下巻「華つみ　下局暨七月十九日」。
内題　上巻「花つみ」、下巻「華摘」。
柱刻　上巻「上花一（〜廿五）」、下巻「摘一（〜廿五）、下摘廿六（〜卅八）、下卅九」。
丁数　上巻　二五丁、下巻　三九丁。
行数　八行。
刊記「江府書林　西村唄風版行」。
序文「一燈礼　其角述」。
跋文「山田筍深跋」。
印記　なし。

後刷本には、刊記を「書林西村載文堂」と改めたものがある。「西村載文堂」は、京都の書肆西村市郎右衛門で、『虚栗』や『続虚栗』と同じく、江戸の書肆から京都の書肆へ移ったものと考えられる。西村載文堂本は、下巻最終の三十九丁目表の後半部を改めて、その上半部に、「其角撰／一みなしくり　二冊／一続みなしくり　二ゝ／一その袋　二ゝ／一花つみ　二ゝ」と出版広告を入れ、「宝井其角撰」を「宝井其角」、刊記を前記のように、丁付を「下花摘卅九」としているほか、例えば、下巻五〜八丁目、九丁目裏上部などに見られるように、改刻、あるいは入木を施している部分がある。板木の痛みが大きかったものと思われる。

板下は、其角門人山川筆。山川は、藤堂家の臣寺村彌右衛門（蕉門諸生全伝）。『雑談集』に、面識がなかった時から其角に心を寄せ、筆蹟も「予が一癖（クセ）をうつしければ」、『花摘』は、この人に清書させたと述べている。

たれか家

挙白、才麿、嵐雪、其角による二百韻と、この四人に李下、湖水等を加えた十一吟百韻を収めた連句集。書名は、第一の百韻の発句「馬蹄今秋を誘はゞ誰が家　挙白」によるが、この句は、唐の詩人張籍の「逢賈島」(三体詩)の結句「馬蹄今去入誰家」によっており、挙白、才丸、其角が共通して一座している、天和三年(一六八三)刊の『馬蹄二百句』を享けたものか。刊年は、阿誰軒編『誹諧書籍目録付録』に「元禄三年」とする。連句の制作年次については、貞享三年とするものもある。第三の百韻の連衆からすれば、やはり元禄三年ごろか。しかし、用語や吟調には、貞享期のそれを思わせるものが少なくない。

書誌

柿衞文庫本(は六八・五〇三四)

書型　半紙本。一冊。袋綴。
表紙　浅葱色無地。
寸法　縦二二・八糎、横一五・九糎。
題簽　中央。「たれか家」。上部は若干剝落。
内題　なし。
柱刻　序一丁分柱刻なし。本文「一(～廿一)」。
丁数　二二丁。

行数　八行。
刊記　「京寺町二条上ル丁　井筒屋庄兵衛板」。
序文　署名なし。
印記　「栗本」「栗本道察」「竹軒」他。

題簽は、国文学研究資料館蔵本には「俳諧」と角書がある。延享二年刊、井筒屋宇兵衛の俳書目録に、「板木焼失」とある。板下は、其角筆。

雑談集

随筆と俳諧の撰集。上下二冊のうち、上巻には、三十余項目の長短の随筆的文章、岩翁、亀翁らと大山、江の島参詣をした折の発句、月次、臨時会あるいは文通で見聞した発句を、下巻には、其角一座の連句を中心に、短文や諸家の発句を収める。連句は、百韻二、歌仙六、半歌仙一などである。三十余項目の随筆的文章は、句作論など俳論的なもの、其角自身の体験を記した随筆的なもの、宗鑑など俳人の逸話を録したものなどが、主なものとなっている。俳論的なものの中には、俳諧の新古と情の厚薄に関するもの、句主の論、趣向と句がらの関連、点取に関するものなど、其角の俳諧観をうかがうことができるし、芭蕉の付句「うき世のはては皆小町也」（猿蓑）についての評には、其角の芭蕉理解のあり方が示されている。また、話題になった俳人には、宗鑑、守武など古俳人のほか、正木堂鳥跡や白炭の忠知など、風雅の生活に徹して、不幸な死をとげた人たちがあり、この人々に対する其角の評価が興味をひく。
連句は、「諷は俳諧の源氏なり」として詠んだ「憶芭蕉　月華や洛陽の寺社残りなく（其角、中七下五は謡曲「頼政」な

どによる)」を発句とした百韻、岩翁亭での日待法楽の燭寸俳諧百韻のほか、伊予松山藩家老久松粛山との交渉を示す歌仙数巻、および粛山、彫棠の松山への帰郷紀行発句を収めているのが注目される。

書誌

岡本勝氏蔵本

書型　半紙本。二巻二冊。袋綴。
表紙　原装。砥粉色。下部に薄赤紫色の垣根模様を手描する。
寸法　縦二二・四糎、横一六・二糎。
題簽　中央。上巻「雑談集　巻首」、下巻「雑談集　巻尾」。
内題　「雑談集」。
柱刻　丁数のみ。上巻、「上一(〜卅七)」。下巻、「下一(〜卅五)」。
丁数　上巻、三七丁、下巻、三五丁。
行数　九行。
刊記　なし。
跋文　「粛山跋」。
印記　「蟹室図書」「千山居図書」「牘庫」。

なお、本書は、初刻本以後、第二次かぶせ再刻本までであり、第一次かぶせ再刻本にも、砥粉色表紙に、下部に薄赤紫色の垣根模様が手描きされている。また刊記はない。第二次再刻本は、宝暦五年のもので、板元は辻村五兵衛と須原屋

仁右衛門（享保以後江戸出版書目）であったが、初期には刊記がなく、のちには「江都書坊／通室町三丁目／須原市兵衛梓」が、宝暦〜寛政初年頃のものにあり、また、「浪華書坊／北久太郎町心斎橋筋／塩屋忠兵衛／江都書坊／通室町二丁目／須原屋市兵衛」と、大阪の塩屋忠兵衛が板元に加わった寛政中期以後と考えられるもの、さらに、右の二書肆の刊記を残して、後表紙見返しに「天保十四癸卯歳三月補刻／書林／大坂心斎橋通北久太郎町南／塩屋忠兵衛」とするものがある。

以上の書誌の記述は、岡本勝氏「其角著『雑談集』諸本管見」（『俳諧攷』昭和51・9）、『雑談集』（岡本勝解説、勉誠社文庫19）によらせていただいた。

萩の露

元禄六年（一六九三）八月二十八日に没する父東順の病床を慰めるために詠んだ八月十五夜前後の句文、信濃からかけつけて看病した弟のことを記した句文、嵐雪ら友人たちとの連句、諸家の良夜吟の発句などを収める。収録する発句六一、連句は五十韻一、歌仙三。作者数は、ほとんどが良夜吟の一句のみで、五七名。

書誌

柿衞文庫本（は七一・四一九）

書型　半紙本。一冊。袋綴。

表紙　黄土色無地。

寸法　縦二二・九糎、横一六・五糎。

題簽　中央。縹色。「萩の露　　其角」。

内題　なし。
柱刻　「八一（～廿二）」。
丁数　二二丁。
行数　八行。
刊記　なし。阿誰軒編『誹諧書籍目録付録』に「元禄六年　一匁」と見え、延享二年（一七四五）板の井筒屋宇兵衛の俳書目録に板木焼失とあるので、刊記はないが、井筒屋庄兵衛からの板行と考えられる。
印記　「北田紫水」「柿衞珍蔵」他。

なお、本書は、安永二年（一七七三）八月に、西村源六、西村市郎右衛門から、皐月平砂の後記を付して再刻、刊行された。

枯尾華

芭蕉追善集。元禄七年（一六九四）十月、旅で大阪に入った其角が芭蕉の病臥を知り、かけつけたが、十二日芭蕉は永眠、遺言により、同門の人々と遺骸を近江の義仲寺に運び、葬った。其角発句の追悼百韻「枯尾花」の巻をはじめ、諸家の連句、発句を編集し、「芭蕉翁終焉記」を記して一書をなしたものである。

書名は、其角の発句によるが、「終焉記」の中でも、其角は、「ともかくもならでや雪の枯尾花」の句をあげ、また、易によって、芭蕉の本卦の様を風雨の中の薄の上に見ていて、芭蕉の生涯を象徴する意味で、書名としたものであろう。

上巻は、「芭蕉翁終焉記」、其角、支考、丈草等四二名一座の百韻、去来以下の発句。下巻は、嵐雪の追悼文、嵐雪、

桃隣、湖春、仙化各発句の四歌仙、素堂等江戸の諸家の発句、十一月十二日初月忌の百韻、追加の歌仙一巻を収める。其角の「芭蕉翁終焉記」は、其角独特の行文の中に、亡師を悼む心情が表現されている。

書　誌

柿衛文庫蔵本（は七二・三四五）

書型　大本。二巻二冊。袋綴。ただし、大本は、献上、贈呈等のための特別仕立のものか。現存本は通常、半紙本。

表紙　茶色無地。

寸法　縦二七・二糎、横一七・五糎。

題簽　中央。「枯尾華　上（下）」。

内題　なし。

柱刻　上巻「枯尾　一（～廿）、枯尾上　廿一（～廿七終）」。下巻「枯尾下　一（～廿六）」。

丁数　上巻　二七丁、下巻　二六丁。

行数　「芭蕉翁終焉記」等八行、他は九行。

刊記　「寺町二条上ル丁　井筒屋庄兵衛板」。

印記　「柿衛文庫」。

なお、覆刻による再刻本があり、その刊記は、

①　書林

井筒屋庄兵衛

板行

　　橘屋　治兵衛

②　皇都諧仙堂蔵版

　　書林井筒屋庄兵衛

　　橘屋　治兵衛

　　浦井徳右衛門

③　大阪府下心斎橋通

　　小島　伊兵衛

とあって、①は安永末～寛政初、②は寛政～文化初年ごろ、③は明治の刊行と考えられている。

板下は、其角筆。

以上の記述は、今泉準一「刊本『枯尾華』校合」（明治大学教養論集146・昭和56・2）、同編『枯尾華』（桜楓社、昭和57・3）による。

句兄弟

上中下三巻のうち、上巻は、三九番の発句合。古俳人から同時代の同門、他門、自らの門下の俳人の句を兄とし、同趣向、同素材の自作句を弟として合せ（三十九番のみ、其角句が兄、芭蕉句が弟）、等類でない所以を其角自身が判詞に記したもの。書名もこれによる。兄の句の作者のうち、約半数が貞門、談林系の人、他が蕉門、其角門等である。中巻は、粛山・其角による謡物歌仙、東順葬送の折の其角独吟歌仙等、歌仙七、未完連句二、その間に芭蕉の「東順伝」を置く。

下巻は、元禄七年(一六九四)九月六日、東順の一周忌をすました後であろう、江戸を発ち、東海道から伊勢路、紀伊を経て、摂津の住吉で同行の岩翁、亀翁らに別れて病床の芭蕉の許に赴くまでの亀翁の句日記「随縁紀行」と、諸家の発句を健句、新句、清句、偉句、麗句、豪句に分類して見せた「追考六格」を収める。

句兄弟句合は、序文で其角がいうように、宗匠として人々の句に点を懸ける時、多くの類作があって判断をあやまることが日常的にあるので、等類を避ける発想を具体的に示そうとしたものである。沾徳も跋文の中で、同じ問題について、王維や藤原家隆の作例をあげ、場や詞の類似にもかかわらず、心や風体が異なって、等類でない場合のあることを示し、其角の試みを称揚している。

「随縁紀行」は、発句一五五、うち其角の句三八、其角の紀行句は、『新山家』、『いつを昔』の一部、大山榎島紀行(雑談集)などがあるが、本篇は、旅程も長く、佳句にも富むようである。

「追考六格」の六格は、『氷川詩式』に見える漢詩の分類を開いたものである。一六六句。作者は、彫棠の八句をはじめとして、介我、思演、拙候、秋色など、新しい門人の句を多く採っている。中巻に収録する連句の連衆の新しさとともに、其角門下の層を感じさせる。

書　誌

鈴木勝忠蔵本

書型　半紙本。三冊。袋綴。

表紙　藍色無地。

寸法　縦二二・六糎、横一六・一糎。

題簽　中央。「句兄弟　上(中・下)」。

内題　上巻は序題「句兄弟序」、中巻「句兄弟」、下巻（「随縁紀行」）。
柱刻　上巻「句上　一（～三十七終）」。中巻「句中　一（～二十七終）」、下巻「句下　一（～二十八）」。
丁数　上巻　三七丁、中巻　二七丁、下巻　二八丁。
行数　八行。
刊記　「京寺町二条上ル町／井筒屋庄兵衛板」。
序文　「元禄七甲戌稔寿星初五　晋其角」
跋文　「沾徳記」。
印記　「八郎蔵書」。

なお、本書では、中巻二十二丁目裏七行目、歌仙「雨の脚」の巻の名残の折の表十一句目は、はじめは「十八がすまふにも春ふくむ也」とあったものを「十八がすまふに色をふくむ也」と改めたと見られる。秋季の句に「春」の字を使うのを避けるためかと思われるが、其角自身の手によるものだろうか。管見では、綿屋文庫本（わ七二・二二・二）、岐阜市立図書館本が、古い形を存している。

また、下巻の「随縁紀行」のうち、十丁目と十一丁目が前後入れかわっており、丁付も本来十丁目のものに十一、十一丁目のものに十とあって、はじめから入れかわって、誤られていたものである。それは、九丁目裏一行目に「初瀬　三輪　在原寺」とあるのに続いて、初瀬の句があるが、続くべき三輪、在原寺の句は、十一丁目にあり、同丁後半は奈良春日神社の句が続く。そして、十丁目の、二十八日南都を出て、当麻寺、多武峯に入り、十二丁目の「増賀聖の古跡にて」の句に連ってゆく。従って、十一丁目裏の「二月堂に七日断食の行者あり……」の詞書は、十丁目一行目の「日の目見ぬ紙帳もてらす艶哉　晋子」の句のものとすべきであり、『五元集』には同趣旨の前書がこの句に付されている。

板下は、本文は其角筆、沾徳跋は異筆。

末若葉

元禄九年（一六九六）刊の岩翁編『若葉合』に次いで、門下十名の独吟十歌仙に加点し、そのうちの高点、五字（花影上欄干）、三字（新月色）、二字（廻雪）の句を掲出したものを上巻とし、下巻は、諸家の発句、芭蕉の「悼嵐蘭詞」、芭蕉三回忌の追善歌仙、其角の「文台の記」、去来の「贈晋渉川先生書」を収める。

其角の点印は、元禄初年から「定推敲」「掉舌」を用いたが、本書以後、さきの五字以下の点印に代り、後にまた、「長安一日花」「洞庭月」「越雪」とし、「半面美人」印も用いるようになった。

『若葉合』は、延宝の『桃青門弟独吟廿歌仙』を次いで、単なる独吟歌仙集だが、本書は加点して高点句を示しており、この形は、『江戸筏』などにうけつがれている。

去来の「贈晋渉川先生書」は、去来からの来書に其角が手を加えて掲出したもので、風国が直ちに同年九月刊の『菊の香』に、去来の正文「贈其角先生書」と『末若葉』所載の文章を並べ掲げて、去来の真意を誤ることのないようにした。このことが契機となって、去来と許六の論争が始まり、『俳諧問答』が成った。

書誌

綿屋文庫（わ七五・六）

書型　半紙本。二巻二冊。袋綴。

表紙　上巻は茶色無地。下巻は水色地扇唐草文様。

寸法　上・下とも縦二二・八糎、横一六・二糎。
題簽　上、下巻ともに剝落。下巻に、中央に直書で「宇羅若葉　下」。
内題　下巻に「うら若葉下」。
柱刻　上巻「序一（〜三）、上一（〜十七）、上十九（〜三十）、下巻「下一（〜四十五）」。上巻十八丁目一丁分落丁。
丁数　上巻　三三丁、下巻　四五丁。
行数　序等　一二行、本文　八行。
刊記　なし。
印記　上巻「和露冊」「わたやのほん」。下巻「和露文庫」「竹冷插架」「蓼華園文庫」他。

題簽は、洒竹文庫本に原題簽が存し、中央に、上巻は「末若葉　鳶」、下巻は「うら若葉　魚」とある。
板下は、其角筆。
翻刻に際しては、底本落丁の部分は、洒竹文庫本により補った。

三　上　吟

芭蕉七回忌追善集。其角の「懐旧のことば」、元禄十三年（一七〇〇）十月十二日であろう、未の上刻（午後二時ごろ）から、丑の上刻（午前二時ごろ）の間に興行した七吟七歌仙、「懐旧詞引」の発句八八句。亀毛（梁田蛻巌）跋からなる。
其角の懐旧の詞は、芭蕉がある人の許での会の折、中座して長く雪隠にあり、後に、人間五十年というが、私は二十五年を後架でながらえたよと笑ったという逸話を伝え、亀毛は跋でそれを享けて、厠上吟の境地を俗世にとらわれない塵

外の人と見、其角は生活も作風も芭蕉とは異なるが、厠上の妙を論ずる以上は塵外の人であると評している。七吟歌仙の発句七句は、近江八景に因むものである。また、七人の連衆のうち、東潮、朝叟は嵐雪門。沾洲は沾徳門、他に其角門。この三門の合流は、このころ以後、顕著になる。

書　誌

柿衞文庫本（は七八・一五七二）

書型　半紙本。一冊。袋綴。
表紙　薄縹色地布目桐小紋押型。
寸法　縦二三・六糎、横一五・〇糎。
題簽　中央に剝落の跡があり、「三上吟」と墨書。
内題　「三上吟」。
柱刻　本文「上　　一（〜廿七）」、後序「一（〜四）」。
丁数　三一丁。
行数　八行。
刊記　なし。
序文　「其角」。
跋文　「亀毛居士戯書于柳浪舍」。
印記　「伊丹崗田文庫」。

享保末年ごろの万屋清兵衛版の巻末俳書目録（例えば『若壮』）に、本書が見える。今泉準一「『三上吟』について」（明治大学教養論集156・昭和57・3）参照。

焦尾琴

元禄十一年（一六九八）十二月十日の火災で、貞享元年（一六八四）以来の日記や句稿を焼失した其角が、知友門人の許にあった句文の稿を得て、編集したもの。書名の「焦尾琴」は、後漢の蔡邕が、薪の桐の木の火にはじける音から良材であることを知って作った琴が、一方が焦げたままを残していたことから、焦尾琴と称した故事による。風、雅、頌の三巻に分けているが、風の巻は、黄鳥之篇、梅花之篇、桜花之篇、杜丹之篇。雅の巻は、名月之篇並行のことば、槿花之篇、菊之篇、紅葉之篇。頌の巻は、早船の記と五吟五十韻、古麻恋句合、「詩仙」両吟歌仙を収める。各篇、歌仙や諸家の発句を含む。所収の歌仙一四、五十韻一、発句六三〇余。所収作者一四六名。作者層は、行露、露江ら大名、玉芙、宜雨ら旗本、其雫、粛山ら藩士などの入集は、江戸の宗匠の一門らしく、大町ら町人の入集も加えて、江戸の人々の生活の種々相が反映している。

作風は、詩歌や故事によって作意を巧む傾向を強め、「おほくは唐人の寝言にして、世の人のしるべき句は十句の中に一二句」（東西夜話）と評されるような、謎句といわれる、難解なものが多い。其角、午寂の「詩仙」のように、各句が掲出された漢詩人の一句の俳諧化であったり、歌謡の一節「すてゝある」の語を用いた発句、「古麻恋句合」の猫に寄せた恋句など、遊戯的な場から生まれた作品群に特色がある。

書　誌

保坂三郎氏蔵本

書型　半紙本。三巻三冊。袋綴。
表紙　白地赤茶色凹凸並び文様。
寸法　縦二三・〇糎、横一六・七糎。
題簽　鼠色。中央。「焦尾琴　風（雅、頌）」。
内題　「焦尾琴」（上、中、下巻とも）。
柱刻　なし。丁付は、各丁裏左下、本文最終行の左側約一・五糎程度のところにある。上巻「上一（～丗一）」、中巻「中一（～丗五）」、下巻「下一（～丗六）」。
丁数　上巻　三一丁、中巻　三五、下巻　三六丁。
行数　九行。
刊記　「日本橋万町／万屋清兵衛版」。
序文　「元禄辛巳のとし雁かへる比是に題す晋其角」。
跋文　「午寂散人書于胡雪室」。
印記　「蓼華□」他一顆。各巻本文冒頭に縦楕円形の朱印で「字心知訓」。

右の本と同種の表紙を持つ、刊記のない本が存し（綿屋文庫本わ七九・二一、愛知教育大学本）、初型かと思われる。寛保三年（一七四三）に、浅倉屋久兵衛、辻村五兵衛から再刻、板行された。刊記は、万屋のものをそのまま残した左

に「寛保三亥仲冬／浅倉屋久兵衛／辻村五兵衛再板」とする。また、表紙見返しに、「宝晋斎其角撰／誹諧焦尾琴　全三冊／東都書林　文園堂蔵」としたものもある。文園堂は浅倉屋久兵衛。
板下、本文は其角筆、午寂跋は異筆。

今泉準一「『焦尾琴』に載る作家」（明治大学教養論集128・昭和54・3）参照。

類柑子

其角の遺稿集に、「晋子終焉記」を加えて追善の意を添えたもの。上、中巻には、「あけぼの」から「家々の名所」まで二六の章に分けた句文、百韻や歌仙等の連句一七などを収め、末尾に涼莵が写した荒木田守武の独吟誹諧千句の奥書を付している。其角没後、嵐雪、枳風、青流、沾洲らが反古をとりまとめ、秋色が一書に編んだという。下巻は「をのがねの鶏合」の上冊「待宵」を収め（後半部分は、後に『五元集』の一部として刊行）、「晋子終焉記」を付す。
其角の文章は、①貞室、河野松波、由良正春、有馬涼及、田中勘左衛門など、風雅人の逸話、②「北の窓」など、身辺の事象や江戸の風物を叙したもの、③安藤冠里に関するもの、④なまり、方言など言葉に関するもの、⑤貝のさかづきや長良の橋柱で作った文台などの玩物に関するもの、などがある。
作者は、其角、嵐雪、沾徳らの宗匠のほか、『焦尾琴』でもあげた冠里以下の武家の人々、青流、格枝、紫紅、貞佐など其角門下、嵐雪門では百里、朝叟、甫盛、沾徳門では沾洲、仙鶴、また蕉門で専吟、琴風らが見える。
「晋子終焉記」は、まず其角生前最後の、宝永四年（一七〇七）二月二十三日青流との両吟九句を掲げ、次に嵐雪をはじめ、露沾、沾徳、桃隣、其角の門下たち、才麿等大阪の人々の悼句を収めている。

享保四年（一七一九）万屋清兵衛から一部改刻されて出版されたが、これにはこの年が其角十三回忌に当るので、秋色と沾徳の発句による二歌仙と冠里以下諸家の発句、沾徳の跋を新たに付している。

書　誌

綿屋文庫本（わ八六・一六）

書型　大本。三巻三冊。袋綴。
表紙　茶色無地。
寸法　上、中、下とも縦二七・〇糎、横一七・四糎。
題簽　中央。「類柑子文集　上（中）」、下巻は剥落。他本によれば、「類柑子追悼　下」とある。
内題　「類柑文集上（中、下）」。上巻内題の肩に、芭蕉の葉の形の中に「万国衣冠拝冕旒」（王維の七言律詩「和賈至舎人早朝大明宮之作」中の句）と刻した朱印を押す。
柱刻　上巻「一　一（〜五十七）」、中巻「二　一（〜五十二）」、下巻「三　一（〜卌六）」。なお、上巻三十七丁目は「二　卅七」、中巻二丁目は「二　二」とあり、四十三丁目は「二　四十四」とあって、四十四丁目の次にある。
丁数　上巻　五七丁、中巻　五二丁、下巻　三六丁。
行数　一二行。
刊記　なし。
跋文　「丁亥冬季上浣　篁影堂沾洲／菊后亭秋色／阿桑門青流」。
印記　「和露」「わたやのほん」。

享保四年、企画の十三回忌に、追善歌仙二巻、追悼発句七十四章、沾徳跋を付して、覆刻本が刊行された。保坂三郎氏蔵本によれば、

書型　大本。三巻三冊。袋綴。
表紙　黄土色無地。
寸法　縦二六・二糎、横一七・七糎。
題簽　中央。「類柑子文集　上（中）」、下巻は「類柑子追悼　下」。
内題　「類柑文集上（中、下）」。
柱刻　上巻「一　一（～五十七）」、中巻「二　一（～五十二）」、下巻「三　一（～卅六）、以下丁数のみ、卅七（～四十六）」。
丁数　上巻　五七丁、中巻　五二丁、下巻　四六丁。
行数　本文　一二行。跋　七行。
刊記　「享保四巳亥稔冬上浣／江戸日本橋南一丁目／万屋清兵衛版」。
跋文　「丁亥冬季上浣　篁影堂沾洲／菊后亭秋色／阿桑門青流」。「沾徳跋」。
印記　「暁園文庫」他一顆。

初刻本は、刊記がないが、跋文に「吉田氏が乞にまかせて、これを梓にちりばめて」とある。「吉田氏」は、吉田宇右衛門か。

後刷本のうち、刊記の「万屋清兵衛版」に代えて、「若葉屋小兵衛版」としたものがあり、また、下巻三十七丁目からの、秋色の発句「指折は」による歌仙以下を削除し、刊記を「江戸日本橋三丁目／吉文字屋次郎兵衛版」としたものが

ある。

五元集

其角自撰発句集。「五元」は、延宝から宝永までの五つの元号の間の句を収めるという意である。
所収句は、元・亨の二冊は、其角自撰の一〇六〇余句、貞の一冊は、編者百万坊旨原が其角自撰にもれたものを集めた「五元集拾遺」で、六四〇余句、合せて一七〇〇余句に及ぶ。利の一冊は、「をのがねの鶏合」のうち、三十五番から七十番までを収める（前半は『類柑子』に所収）。
「をのがねの鶏合」は、宝永元年（一七〇四）三月、安藤冠里が、闘鶏をテーマにして、自句七〇、家臣や其角の句七〇を左右に番わせて句合をし、其角に判詞を書かせたもの。

書誌

保坂三郎氏蔵本

書型　大本。四冊。袋綴。
表紙　薄茶色無地。
寸法　縦二七・〇糎、横一八・〇糎。
題簽　右肩。「五元集　元（亨、をのがね鶏合利、貞）」。
内題　第一冊目「五元集」。第四冊目「五元集拾道」。
柱刻　第一冊目序文の分は、「〇　㊀（黒丸白抜）（〜㊂）」。本文は「〇　一（〜廿三、廿四ノ五、廿六〜四十三、

●四十四)」。第二冊目「〇　●四十五(～六十九、七十ノ一、七十二～八十八終)」。第三冊目「烏　一(～廿六)」。第四冊目「拾　一(～五十八終)」。
丁数　第一冊目　四七丁、第二冊目　四三丁、第三冊目　二六丁、第四冊目　五八丁。
行数　十行。
刊記　木記で、

京都書林　姉小路堀川東江入町
　　　　　中川茂兵衛
東都書肆　日本橋通三町目　板
　　　　　竹川藤兵衛

序文「百万坊旨原」、「其角」。
印記「保」「家」他一顆。

右の本以後、書肆は、
①竹川藤兵衛（単独、木記）。
②前川六左衛門（木記）。
③丹波屋伝兵衛（木記）。
④河内屋喜兵衛（奥付）。
と変っており、④は、後表紙見返しに、「寛政八年丙辰五月／浪華書林／心斎橋北久太郎町／河内屋喜兵衛」としたものがあり（この奥付は数種の本に付されている）、時期を示している。

板下は、其角自筆本を亀成が透写したもの（旨原序文）という。

以上の記述は、今泉準一「刊本『五元集』校合中間報告」（明治大学教養論集118・昭和53・3）、『五元集の研究』（桜楓社、昭和56・2）によった。

石川八朗（いしかわ・はちろう）
昭和40年九州大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。現在、九州工業大学教授。
新日本古典文学大系『江戸座点取俳諧集』（岩波書店）、「其角、午寂両吟「詩仙」について」（香椎潟・38、平成5）

今泉準一（いまいずみ・じゅんいち）
國學院大學卒、都立向島商業高校教諭、淑徳大学講師、和洋女子大学助教授を経て、明治大学教授、定年退職。現在、明治大学兼任講師。
『元禄俳人宝井其角』（昭和44）、『五元集の研究』（昭和56）、『芭蕉・其角論』（昭和58）他

鈴木勝忠（すずき・かつただ）
昭和27年東京大学文学部卒、昭和62年岐阜大学名誉教授。現在、中京大学教授。
『雑俳語辞典』同続、『俳諧史要』、『柄井川柳』、『近世俳諧史の基層』、『江戸座点取俳諧集』、『雑俳集成』一期・二期

波平八郎（なみひら・はちろう）
國學院大學大学院文学研究科博士課程後期単位取得。現在、日本学園高校教諭。
「芭蕉発句の成句による解釈」（國學院大學大学院紀要」文学研究科第22輯）

古相正美（ふるそう・まさみ）
國學院大學大学院文学研究科博士課程後期単位取得。現在、國學院大學・明治大学兼任講師。
「和学御用下田師古と壺井義知・荷田春満との交渉」（近世文芸45）

宝井其角全集　編著篇

四冊揃分売不可

（文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」補助出版）

編者　石川八朗
　　　今泉準一
　　　鈴木勝忠
　　　波平八郎
　　　古相正美

発行者　池嶋洋次

発行所　㈱勉誠社
〒160　東京都新宿区西新宿四—四一—七
電話（〇三）五三五一—三一四一(代)

平成六年二月二十五日　初版発行

製版　日本ハイコム㈱
印刷　互恵印刷㈱
製本　㈱エイワ

ISBN4-585-03021-2 C3391